

ハイスクールD×D 赤腕のイツセー

nasigorenn

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

悪魔や天使、堕天使やその他の人外達が犇めく世界。
人間の殆んどはその事に気づかずに生きていた。

そんな世界に彼は生きる。

生まれ持ったその力を使い、立ち塞がるすべてを打ち砕いて。

nasigorenn初のハイスクールD?Dです。

尚、作者はハイスクールD?Dをこのハーメルンとアニメでしか知りません。

変な部分がかなり出てくると思いますが、ご容赦を。

目次

プロローグ	彼の名は	1
旧校舎のディアボロス		
1 話	彼の毎朝	8
2 話	彼の相棒	14
3 話	狙われている彼	20
4 話	彼は邂逅する	26
5 話	彼は拒絶する	36
6 話	彼は出会う	45
7 話	彼は戦う	52
8 話	彼がいぬ間に	58
9 話	彼は助けることを決める	65
10 話	彼は救出の狼煙を上げる。	73
11 話	彼は叩き潰す。	81
12 話	彼は帰る	92
13 話	彼が変わる日々	103
戦闘校舎のフェニックス		
14 話	彼は新しい依頼を受ける。	111
15 話	彼は窮地を知らずに行動する	119
16 話	彼は手加減して捕まえる	125
17 話	彼は相談に乗る。	139
18 話	彼は知る。	146
19 話	彼ははっきりと答えない。	155
20 話	彼は人の意思を尊重する	163

2 1 話 彼は下らない事でも命を賭ける 170

2 2 話 彼は敵のために礼を言う 179

2 3 話 彼は冥界から帰る 193

月光校庭のエクスカリバー

2 4 話 彼は敗北を喫する。 201

2 5 話 彼は情けない 207

2 6 話 彼は再会する。 214

2 7 話 彼は言い負かす。 223

2 8 話 彼は泊める 236

2 9 話 彼は追試を控える 243

3 0 話 彼は喧嘩を売りに行く 253

3 1 話 彼は喧嘩を止められる 263

3 2 話 彼は約束する 280

3 3 話 彼はリベンジに望む 287

停止教室のヴァンパイア

3 4 話 彼は焦れる 294

3 5 話 彼は歓喜する 302

3 6 話 彼は参加を決める 309

3 7 話 彼が焦る間に彼女は： 315

3 8 話 彼の待ち望む時は近い 330

3 9 話 彼は会談に参加する。 337

4 0 話 彼等は暴れ回る 350

4 1 話 彼等は前哨戦を行う 365

4 2 話 彼等の出会いの記憶 373

4 3 話 彼等の最終決戦 前編 383

4 4 話	彼等の最終決戦	中編	392
4 5 話	彼等の最終決戦	後編	402
4 6 話	彼等の決着は……		419
番外編その1	久遠という男		427
	久遠という男について		433
	久遠という男について	その2	
番外編その2	アーシアのデート		441
	アーシアのドキドキデート	その1	
	アーシアのドキドキデート	その2	446
	アーシアのドキドキデート	その3	453
番外編その3	彼と彼		
	彼は異世界の彼と出会う	その1	459
	彼は異世界の彼と出会う	その2	465
	彼は異世界の彼と出会う	その3	474
	彼は異世界の彼と出会う	その4	485
	彼は異世界の彼と出会う	その5	493
	彼は異世界の彼と出会う	その6	501
	彼は異世界の彼と出会う	その7	508
	彼は異世界の彼と出会う	その8	515
	彼は異世界の彼と出会う	その9	522
	彼は異世界の彼と出会う	その10	530
	彼は異世界の彼と出会う	その11	538
	彼は異世界の彼と出会う	その12	544
	彼は異世界の彼と出会う	その13	551
	彼は異世界の彼と出会う	その14	561

彼は異世界の彼と出会う	その15		568
彼は異世界の彼と出会う	その16		578
彼は異世界の彼と出会う	その17		587
彼は異世界の彼と出会う	その18		597
彼は異世界の彼と出会う	その19		608
彼は異世界の彼と出会う	その20		615
彼は異世界の彼と出会う	その21		627

プロローグ 彼の名は

辺りを夜の闇が埋め尽くし、森の木々が風に揺られてざわめく。

空は曇り、静寂の世界であつたであろうそこはこの時に限り不気味な雰囲気醸し出していた。

そこに今、二人の人影が立っていた。

二人ともブレザーを着ていることから男だと伺えるだろう。

その制服はここ最近この町で共学化した高校『駒王学園』の物である。

その内の一人、茶髪をした青年が視線の先にある物を指しながらもう一人に問いかける。

「なあ、久遠。あそこで間違いないのか？」

「ああ、間違いねえよ。調べた情報通りだ」

茶髪の青年の問いに久遠と呼ばれた黒髪の青年は自信満々に答える。

軽い感じだが、その信憑性は高いのだろう。茶髪の青年は特に何か言う様子はない。

その様子を見た久遠はにこやかに笑いながら茶髪の青年に話しかける。

「んじや最終確認といきますか」

「ああ、まったく話を聞かされてないからな」

この二人、ただ森に来ているわけではない。

実はとある用事で来ているのだが、その用事の内容を茶髪の青年は知らされていない。

「今回の仕事はさらわれた娘の救出、依頼人はその娘の父親で報酬は100万だ」

「おい、随分と安い金額だよなあ、本当。それで俺を呼ぶんだから、お前も相当だけだよ」

茶髪の青年は不機嫌そうな顔で久遠を睨みつける。

本来であれば、そんな『安い』仕事など引き受けるわけがないのだ、彼は。

だが、睨まれた久遠はそれでも余裕の笑みを浮かべる。

「まあ、それだけだったら俺だってお前を呼ばねえよ。ただなあ、今回はもう一つ美味しい話が入って来てんだよ」

「美味しい話？」

「ああ、そうさ。悪魔の大公から直々のご依頼でな、何とはぐれ悪魔の討伐依頼が来てるんだよ！」

嬉しさを全開に語る久遠に茶髪の青年が首をかしげる。

「それとこの仕事とどういう関係があるんだよ？」

「お前、バツカだなあ。よく考えてみろよ。親の依頼はさらわれた娘の救出。それと大公の依頼は俺らの目の前にある廃墟に住み家にしてるはぐれ悪魔の討伐。娘がさらわれて連れて行かれた先も……」
「それだけ言えばわかるだろ」

久遠にそう言われ馬鹿にされたことに怒りつつも彼は気づいた。

「ああ、そういうことか。つまりその女をさらった奴つてのがそのはぐれつてことか」

「ビンゴ！ 正解だ。大公からとはぐれについての情報は貰ってるしな。なんでもとんでもない強姦野郎らしい。犯した後に食べるのが大好きな変態なんだとよ」

「そいつはイカれてるなあ。まあ、だから何だつて話だけだよ。でも、これで俺が呼ばれた理由って奴が分かったよ」

茶髪の青年は納得した顔でうなずくと、久遠に向かってにやりと笑う。

「んじゃ急がねえと娘の方が無事じゃすまねえからなあ」

その言葉に久遠も笑う。それは確信の笑み。

これから人外の化け物と戦うが、絶対に彼が勝つと確信している笑みである。

「ああ、その通りだ。だから……行つて来い、『イツセー』！」

「おうっ！」

茶髪の青年……兵藤 一誠は雄叫びをあげるかのように返事を返すと、左手を胸の前に構える。

そして『何か』を展開し終わると共に、その左拳を地面に向けて叩

きつけた。

次の瞬間、地面は打ち砕かれ吹き飛び、盛大なクレーターが一誠が先程までいた場所に刻みつけられた。

だが、そこに一誠の姿はない。

久遠が次に一誠の姿を見た時は、廃墟の外壁を殴り砕き、破壊しながら中へと侵入していくところであつた。

どうしてこんな目に遭っているのだろうか？

彼女はそう考えられずにはいらなかった。

少し裕福な家に生まれ育ち、思春期なりに青春を謳歌していた。

反抗期に入つて親と仲が良くなかつたが、そんなことは誰にでもあることだろう。

ただひたすら親が気に食わなかつた。

そんな理由で家に帰りたくなく、夜遅くまで遊ぶ日々。

そこでたまたま運が良かったのか、格好良い男と会つた。

今まで幾多の男を見てきた彼女だが、その男には妙な魅力を感じそれまでとは違うと思つた。そして男と遊ぶことになり、カラオケボックスで二人つきり。

そこで男に渡された飲み物を飲んだところで彼女の意識はぷつりと切れた。

眼が醒めれば先程までいたカラオケボックスの部屋とまったく違う光景、もう何年も人が入った気配のない鉄骨とコンクリートの廃墟。

その事に混乱する彼女であつたが、それは廃墟の奥から現れた男によつて少し沈静する。

泣きつくように男に飛びつく彼女。

そのまま優しく抱きしめて自分を安心させてくれると、そう思つていた。

だが、現実は違う。

男は力の限り彼女を押し倒すと、馬乗りになつて彼女の服を破り捨て始めたのだ。

そのまま喚くが、男の力に彼女はかなわない。

めてが強姦だなんて、そんなのは絶対に嫌だ。

めてをこんなところでこんな急に人を襲う男に奪われることが何よりも許せなかった。

心の底からそう思ったからこそ、奇跡が起こったのかもしれない。彼女はいつもからは考えられないほどの力を発揮し、男を撥ね退けた。

そのまま胸を隠すようにして急いでその場から彼女は逃げ出した。すぐにでもこの場から、あの男から逃げなくてはと本能が命令を出す。

その命令に従って彼女は動く。

だが、そこで男の姿を確認してしまったのは失敗だった。彼女が見た男は、あり得ない変形をしていた。

まるで袋に閉じ込められていた中身があふれ出るように男の肉体が膨れ上がり巨大な人型へとなっていく。肌は薄暗く穢れた紫色へと変わり、それまでなかった生臭い香りを辺りに漂わせる。

まさに人外の化身となつた男を見て、彼女は悲鳴を上げてしまう。そしてそこからはその化け物に追いかけられるという状況に陥つた彼女。

「喰わせろおおおおおおおおおおおおおお！ 犯さ
せろおおおおおおおおおおおおおおおお！」

「いやあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ!!」

必死に逃げるが化け物は見た目以上の速さで彼女を追いつめていく。

そして彼女はついに部屋の隅に追いつめられた。背中を壁にぶつけ、彼女は自分のすべてが終わったとその時思つ

た。

そしてこの後自分がどうなるのかを考え絶望し、せめて最後ぐらいは親に謝りたいと、そう思った。

それが彼女の最後の願い。

だが、それは叶うことはないだろう。彼女はこのまま目の前の化け物に犯され尽くされ、そして食べられるのだから。

「がああああああああああああああああああああああああああああ！！」

歓喜の咆哮を上げながら彼女に向かって飛びかかる化け物。

その姿に彼女はぎゅつと眼を瞑る。

せめてもの抵抗であった。

その瞬間、硬い壁が破碎される轟音がこの廃墟に轟いた。

その音に彼女は驚き眼を開くと、その視線の先には……………。

部屋の中央に巨大なクレーターが出来あがっており、そこでゆつくりと左手を引き抜きながら立ち上がる青年がいた。

その青年……一誠は辺りを軽く見回すと彼女に気がつき声をかけた。

「なあ、あんた」

「な、何!？」

いきなり現れた一誠に警戒し怯えながら反応する彼女。

そんな彼女に一誠は名前を聞き始めた。

何故こんな時に名前を聞かれるのかまったく意味がわからない。

彼女はそのせいで混乱しつつも、何とか一誠に名前を答えた。

その名前を聞いて一誠は頷く。

とりあえず目標を発見したことを彼なりに喜んだ。

だが、そんなことなど気にせずには化け物は一誠に襲いかかる。

「邪魔だ、人間！俺は女以外喰う気はねえんだよおおおおお!!
おとなしく死ねええええええええええええええええええええええええええええ!!」

振るわれる浅黒い色をした巨腕。

一誠のような男が受ければ間違いなく死んでしまうであろう必殺

の一撃。

その攻撃がもたらすであろう悲劇に彼女が悲鳴を上げる。

だが……………。

「人が話してる最中に邪魔してるんじゃないよ、このクソ悪魔！」

放たれた拳は一誠の前で止まっていた。

何故か？ 簡単だ、一誠が左手でその拳を止めたからである。

「何い!? ぐうううううううううううううううううううううう!!」

その事態に驚愕した化け物であったが、受け止められた拳から発した痛みに呻き苦しむ。それは受け止めた左手で一誠が化け物の拳を握り潰そうとしたために起きている。

「手前が大公とやらが言ってたはぐれだろ。探す手間が省けてちようどいい。おとなしくぶつ倒れろ!!」

一誠は化け物に負けないほどの大きな咆哮を上げながら化け物の腕を床にたたきつける。その瞬間に床は砕け散り、化け物の腕も骨肉ごと潰れる。

その激痛に化け物は叫びを上げそうになるが、それを上げる前に一誠は一気に間合いを詰めて左拳を振りかぶっていた。

そして声が喉から出かかった瞬間、化け物の視点は暗転し真っ暗となった。それから先は何もなく、化け物は何も感じられなくなった……永遠に。

一方、化け物の顔を打ち砕いた一誠は汚れた左腕を振りはらうと、彼女に向かって歩き始めた。

そこで彼女は何かを言うが、彼女自身何を言っているのかわからないまま意識が薄れていく。

ただ、最後に彼女が目にしたのは、真っ赤な左腕であった。

これが彼の日常。

久遠という仲介人に仕事を仲介してもらい、それをこなす。

悪魔、天使、堕天使とその他の人外が犇めく世界で彼はこう呼ばれている。

『赤腕のイツセー』と。

旧校舎のディアボロス

1話 彼の毎朝

天使、墮天使、悪魔やその他の人外が犇めく世界。

その中で人間の殆どが知らないが、中には彼等の力を借りたり崇めたりする者達もいた。

悪魔への対価と引き替えの願いや、神への信仰なんかがそれに当たる。

人間達と彼等との間にあるのは持ちつ持たれつの関係が近いだろう。悪魔は力を貸すかわりに人間の欲望から様々な報酬を得る。天使は信仰の力により世界に奇蹟をもたらす手伝いをする。

どちらも居なくてはならない存在である。

中には墮天使のように一方的に何かを奪い去る者達もいるが、それは割愛しておこう。

そんな中、逆に人間から進んで悪魔の頼みを聞く者達が現れた。

彼等は金を報酬に頼まれた依頼をこなす。それがどれだけ危険であろうと。

『仲介屋』よ呼ばれる者達の紹介を受けてを彼等は仕事を引き受ける。

その一人が、昨日廃墟に住み着いていたはぐれ悪魔を倒した兵藤一誠である。

彼はそうして毎回自分の身分には不相応の大金を手に入れている。

朝、爽やかな空気が窓から部屋に入って来る中、一誠は眠そうな目を擦りながら起床する。

目に映るのは見慣れた木製の天井。

そのまま起き上がり面倒臭そうに辺りを見回す。狭い一室に畳みが敷いてあり、先程まで一誠が寝ていた布団が汚らしく置かれていた。

一誠はゆつくりと動き出し、部屋に直に繋がっている炊事場に向かって冷蔵庫を乱暴に開ける。

だが、彼が開けた冷蔵庫には何も入っていない。
それこそ元々無かったかのかと言うくらい、冷蔵庫の中は空だった。

「チツ……」

彼自身、何かあればいいかなという淡い期待から開けてみたが、いくら希望を抱こうと現実是不変ならないのである。

彼はもともと自分の冷蔵庫に何も入っていないことを知っている。

冷蔵庫を眺め終えた一誠は気を取り直し、顔を洗うことにした。

炊事場の水道から水を出し顔を洗って歯磨きを済ませると、先程までいた寝室に戻り制服に着替える。その間ずっと腹の虫が唸り声を上げていたが、一誠は無視を決め込み面倒臭さそうに鍵を取ると猫背で出口へと向かう。

そして外に出ると、自分が住んでいるアパートのボロい扉を閉めて鍵をかけた。

「はあ……面倒臭えけど、今日も行くか……」

一誠はそんなことを洩らすと共に歩き始めた……学校にいたために。約束を守るために。

「よう、おはようさん」

学園に向かう通学路の最中、一誠は後ろから元気よく声をかけられ振り返る。

そこに居たのは黒髪の青年。

名を久遠 冬弥と言う。一誠と同じ駒王学園の生徒であり、そして……一誠に仕事を持つてくる仲介屋だ。

彼等は人からだけでなく、悪魔も堕天使からも仕事を聞き入れ、それを一誠のような『特殊』な人間に仲介する。それ故に裏のそういつた関係に顔が広いのだが、その分正体もまったく分からない。人間なのか悪魔なのか堕天使なのか、それ以外の何なのか。

一誠自身、久遠が仲介屋である以外何も知らない。

だが、彼にとってそれだけでいい。

重要なのは仕事を仲介して貰えることであり、久遠の正体は何だっ

て良いのだから。

一誠にとつて久遠とは腐れ縁のあるビジネスパートナーである。そんな久遠は妙に朝から上機嫌だった。

勿論、それは昨日の依頼成功の報酬を受け取ったからである。だが、そんな久遠に対して一誠は寧ろ落ち込み気味である。

「どうしたんだ、一誠？ そんな暗い顔してよお」

からかうように聞いて久遠だが、一誠が返事の代わりに鳴らした腹の音を聞いて表情を変える。それは至って真剣な顔だ。

「おい一誠！ も、もしかしてお前さん……………」

「んだよ」

不機嫌そうそう答える一誠の腹がもう一回唸り声を上げた。

その反応に久遠は頭を押さえ頭痛を堪えた。

「ま……………た、やったのか、お前！ おい、昨日の二つの依頼、合わせて四百万円もあつたんだぞ。それを一晩で何処にやったんだ、お前！」

久遠の頭が痛い理由。

それは毎回一誠が難しい依頼を熟して結構な額の金を手に入れているというのに、その翌日には金欠になっていることである。

この後一誠が言う台詞を久遠はもう何回聞いたか分からないくらい聞いた台詞であろうことを久遠は予測出来た。

凄く気まずそうな顔で一誠は答えた。

「そ、その……………白夜園に……………」

「またかよ、お前！ そりやあ個人の金の使い道にケチを付ける気はねえけどさあ、いくら何でも渡しすぎだろ！ お前が生活出来てねえんじや話にならねえだろうが」

一誠の答えに盛大に頭を抱える久遠。

この二人が組んでからずっと続いているこのやり取りは未だに解決する目途がない。

一誠が言った『白夜園』とは、彼が生活していた孤児院だ。

詳しい話は知らないが、一誠は物心付いた時には既に孤児院にいた。

そこでの生活は親は居ないが楽しく、寂しくなかった。

だが、貧乏で経営はいつも危うく、三食食べられた日の記憶は無い。幼心に一誠はこの状況をどうにかして園の皆と、世話になっている園長を助けようと考えた。

その頃、一誠は目覚めた……とある『異能』に。

それを使って何か出来ないかと考えた一誠はがむしやらに色々な事をし、危険な事にも手を出し始めた。

その頃は丁度自分に勝てるものは居ないと天狗になっていた時期であった。実際に普通の人間では一誠に適わなくなっていた。

だが、とあることで瀕死の重傷を負ってしまい入院。それにより白夜園は一誠の治療費を出したために更に経営は悪化。孤児院で生活している子供達は一日一食しか食べられなくなった。

身体を完治させた一誠はその事実に関長に泣いて謝るが、園長はただ一誠が無事で良かったと言い、何も責めない。善人なのである。

だが、それを一誠は許せなかった。
自分の所為で皆に迷惑をかけたのだから、助けられた恩を返さなくてはと使命感に燃えた。

その思いを抱きながら中学に上がった頃に久遠と出会い、仕事を仲介して貰っている。

一誠が毎回大金を手に入れているのに金欠なのは、迷惑をかけた白夜園に殆ど寄付しているからである。

ちなみに高校に上がった際、一人暮らしを無理にでもしたのはより仕事を受けるためである。白夜園で生活していれば食事には困らなかっただろう。

「今更言うなよ、知ってるだろ」

「だけどよく。お前はもつと自分に回しても良いと思うけどなあ」

呆れ返る久遠に一誠も何とも言えない顔をする。

このやり取りもいつものこと。

それが一誠のいつもの登校風景。

そして二人で話しながら歩くこと十数分。

駒王学園に二人は到着した。元が女子校だったということもあつ

てか校舎は綺麗で土地も大きい。プールも着いている豪勢な学園である。

二人はそのまま歩いていると、何やら騒がしい一団を見つけた。そこには女子に囲まれた二人の男子の姿があった。

普通に考えれば女子に囲まれるというのは男にとつて夢かも知れない。だが、その囲っている女子が全員憤怒の表情なら、それは忽ち悪夢でしかない。

そんな悪夢を見て怯えているのは、メガネにカメラを持った男子と禿頭の男子であつた。

一誠は二人のことを知っている。

メガネの方が元浜、禿頭の方が松田。

この駒王学園に置いてある意味有名な二人組。覗きや盗撮、衆人の前で平然と卑猥なことを話しているなど、碌でもないことばかりする二人組だ。

御蔭で周りの生徒から駒王学園の変態二人組（ヘンタイツインズ）と呼ばれている。

二人は涙ながらに何かを言うが、その手に持っているカメラから出た盗撮写真が信憑性を失わせていた。そしてそれを見た女子達に盛大に殴られていた。

「あの二人もかわらないねえ。本当、お気楽な学生つてのは羨ましいもんだ」

久遠の言葉に一誠は無言で同意する。

たまに一誠もあの二人くらいはつちやけられたらどれだけなくなるんだろうかと考えたことがあるからだ。生憎、お気楽では居られないのが一誠をとりまく環境である。

そして変態二人を無視して歩き始めた二人は今度は別に騒いでいる集団を見つけた。

そこに居たのは男女共に視線を集める二人の女生徒。

一人は真っ赤な髪をした絶世の美女、もう一人は艶やかな黒髪をポニーテールにした大和撫子である。

共に美しく、その身体は学生にしては過剰なまでに良い発育具合を

誇示していた。

「今日もウチの学校のお姫様達は絶好調みたいだな」

「そうだな」

この二人の事を一誠達は勿論知っている。

この駒王学園に置いてこれほど有名な人達はいないだろう。

三年のリアス・グレモリーと同じく三年の姫島 朱乃。

この学園でもっとも美しい女生徒であり、周りからはお姉様と呼ばれている。

だが、一誠達が知っているのはそう言った表立った事ではない。

リアス・グレモリーと言えば冥界で有名な『元72柱』グレモリー家の次期党首。つまり悪魔である。

そして姫島 朱乃はリアス・グレモリーの懐刀、レーティングゲームのクイーンの駒。

これもまた悪魔である。

何故一誠達が二人の裏事情まで知っているかと言えば、久遠の取引先が関係しているからだ。

その二人が騒がれている中、一誠達は教室へと向かっていく。

彼等にとって彼の者達が何であれ、邪魔でなければ問題は無いからだ。

もし邪魔をするというのなら、その時一誠は……………

容赦なく殴り砕くだろう。

2話 彼の相棒

いつも通りに登校し、授業を殆ど聞き流しながら過ごす。

これが一誠のいつもの学園生活である。

何故ここまで不真面目なのか？ 何故なら一誠は本意で学校に行きたかった訳ではなかったからである。

そもそも、一誠は高校受験をする気など無かった。

久遠と出会い仕事を仲介してもらって稼いでいた額もあって、普通に働くよりも其方の方が多く稼げることを知っていた。恩返しをするには多くの金がいることを考えれば、より稼げる方を選ぶのは当然の選択だ。

だからこそ、中学卒業後はそのまま久遠に仕事を仲介して貰い、それを熟すその筋の『仕事人』を本格的に行おうとしていた。

それに待ったをかけたのは白夜園の園長である。

園長は当時から一誠が渡してきた金を受け取れないと言って断ってきたが、それを一誠は頼み込むようにして受け取らせていた。

それだけ真剣な一誠に園長は折れた。

危険な目に遭って欲しくはない。だが、それを言って聞く子供ではなかったのだ。

特に瀕死の重傷から復帰してからそれが顕著になっていた。

その稼ぎを一誠の頑張りに報いるため、貯金しつつも園のために使うことにした園長はただ感謝と己の不甲斐なさを噛み締めつつただ一誠に謝るしかなかった。

そんなことが続き、一誠が中学三年になった夏頃。

進路のことで園長に相談された一誠はそのままのことを話すと、今まで静かに聞いてくれていた園長が珍しく怒った。

そして泣きながら高校くらいは通わせてくれとお願いされ、今度は一誠が折れたのであった。結果、一誠はその夏から苦手な勉強を無理矢理頭に詰め込んで近くの高校である駒王学園を受験、最底辺で何とか合格した。

そんな経緯でこの学校に通うことになった一誠だが、当然勉強など

ドライグの存在は異能に目覚めた時から気付いた。

そしてずっと一緒にいたので、一誠にとってドライグは相棒であり親友であり何より家族であった。

その家族に注意され、一誠はバツが悪そうな顔で答える。

「そうなんだけどさ。お前だつて俺が中途半端な真似は出来ないって知ってるだろ」

『それでも、もう少しは自分のためにとって置いてもいいだろう。あの園長なら寧ろ喜んで相棒のために返しそうだしな』

「だからだよ。殆ど全部渡しちまうのは。園長は優しいから俺を思つて遠慮しちまうだろ。俺は迷惑をかけたんだから、遠慮されるのは困るんだ」

恰好良いことを言っているのだが、それを台無しにするかの如く一誠の腹は鳴る。

その反応にドライグから呆れたような気配を一誠は感じ取った。

「なあ、ドライグ」

『何だ、相棒』

「お前の倍化の力で喰いモンを倍のサイズに出来ないかな」

その質問にドライグは少し無言になった。

しかし、その沈黙には頭痛で頭を押さえるようなビジョンが一誠には見えたような気がした。

『相棒……いくら食い物に困っているからといってそれはない。何より、このドライグの力をそんな下らないことに使おうとするな』

「そうか？ 俺にとっては一大事なんだけだよ」

『この赤龍帝、ドライグの倍化の能力をそのような下らないことに使おうとする奴は初めてだ。あまりの悲しさに俺は泣きなくなってきたぞ、相棒。ちなみに言っておくが、俺の倍化は『力』に作用するものだ。物質には作用しない。それは使い手である相棒が一番分かっているだろう』

その言葉に一誠は肩を落としてがっかりする。

いや、彼とて分かつてはいたのだ。だが、この空腹がそんな淡い夢を見させてしまうのである。そして相棒に現実を突き付けられ、一誠

は内心でしよげるしかなかった。

仕方なく別の話を振ることにしたのだが、逆にドライグから話しかけられた。

『ところで相棒』

「なんだよ、ドライグ？」

『今回のコレはいつまで続くんだ？』

ドライグがした問い。

それは一誠がドライグの能力を使ってあることをしているのである。

それは誰が聞いても正気を疑う行為であった。

「ん？ ああ、『自分に掛かる重力を通常の四倍』にしていることか？」
一誠は何気ない口調で答えるが、言っていることは明らかに可笑しい。

彼はドライグの倍化の力を使い、今までこうして自分に様々な力を倍化でかけ、己を鍛えてきた。それも偏に、仕事人として他の人外に負けない様にするためだ。

ただ、彼自身身体を自分の意思で鍛える気が無いため、そうして無理矢理負荷をかけることで鍛えているわけなのだが。

『ああ、そうだ。今までいくつもの使い手に巡り会ってきたが、相棒みたいな力の使い方をする奴は初めてだ。昔から慣らしているとはいえ、四倍の重力で普通に動き回れる相棒はもう普通じゃない気がするけどな』

「そう言うなよ。俺だっけしてたくてしてる訳じゃない。けど、そうでもして鍛えないと、『アイツ』には適わないからな。今度こそ………勝つ！」

一誠は自分の幼い記憶の中に鮮明に残る『白』を思い出し、その目に好戦的な炎を燃やす。だが、それは直後になった腹の音で一気に消火された。

「なあ、ドライグ」

『何だ、相棒』

「……………今日の特売、何があった……」

『四時半にスーパーで卵の特売、お一人様一パック98円だ』

「お前と合わせて二パック買えたらなあ……」

『無茶を言うな』

その前に赤龍帝ドライブにくだらない事をさせるなど言っていた割にこうして食料品の話に乗る辺り、ドライブも一誠に毒されているかもしれない。

一誠はこんな感じに相棒といつも昼休みを過ごしている。

放課後になり、一誠は周りに目もくれずに走り出す。

その速さは尋常ではなく、それだけ急いでいることが窺えるだろう。

時刻は四時二十分である。

そのまま凄い勢いでかけていく一誠に何事かと周りの生徒が騒ぐが、あまりの速さに姿を捕らえることが出来ないためそれが一誠なのか分からなかった。

そのまま速度を維持して校門を潜り抜けようとした所で一誠の前に人が立ちはだかった。

「あ、あのっ!？」

そう声をかけてきたのは長い黒髪をした可愛らしい少女だった。

全体的にほっそりとしているが、出るところは出ていて引つ込むところは引つ込んでいるという女性なら誰もが羨む体型をしている。

十人に美少女かと聞けば十人が美少女だと答えるだろう。

そのようなまさに一誠とは縁のなさそうな少女が一誠を呼び止めてきた。

その声に一応止まる一誠。

少女は止まってくれたことを喜び、頬を真っ赤に上気させながら一誠のこを見つめてきた。その表情は紛れもなく……。

「兵藤 一誠君……ですよね」

「ああ」

何かを確かめるかのように聞く少女に一誠は緊張して答える。

そして少女は真っ赤な顔で力の限り精一杯一誠に叫んだ。

「ずっと前から好きでした、付き合ってください!!」

それは少女の恋の告白。

春に誰もが期待する最高のシチュエーション。

そして、思春期真っ盛りの男子高校生なら誰もが羨む最高のイベント。それもこんな目の覚める様な美少女からの告白となれば尚更幸せだろう。

その告白を受けた一誠は…………。

「ゴメン、急いでるから無理だ。それじゃ」

そう無情に返し、その少女の横を先程以上の速さで駆け抜けていった。

「え……………?」

少女は断られた事に気付くのに、その背中が見えなくなるまで気付かなかった。

一誠にとって今重要なのは恋人ではなく今日のための食糧である。

恋人はなくとも生きられるが、食糧はないと生きられない。

何より、一誠は今の自分のことで精一杯であり、そんな『余裕』はない。

こうして一誠は初めて異性から告白されたが、即座に振った。

普通なら悔やむところだが、その後スーパーから出てきた一誠は卵一パックを持って満面の笑みを浮かべていた。

3話 狙われている彼

リアス・グレモリーは不満に思っていることがあった。

それは、ここ数年自分達の周りでおかしな者達が動いていることである。

駒王学園への入学を機に、彼女は実家からこの街の管理を任された。

この地には彼女の他にもう一人上級悪魔の家系の者がいるが、主に街の管理をリアスが、学園の管理をその者が行うよう役割分担がなされている。

土地の管理においてリアスがすべきことは、この地の管理者であるリアスの許可もなく地に踏み込んだ者の排除と治安維持だ。それも人外の者達に対しての。

時には大公の命により、侵入した凶悪な『はぐれ悪魔』の討伐も行う。

それらが彼女の職務なのだが、そこに実は問題があった。

どうも彼女は大公の信頼を得ていないらしい。

いや、別にそういった訳ではないのだが、リアスに下る討伐命令には少々可笑しなものがあった。

例えば、討伐対象があまりにも弱い場合。

命じられたからにはしなければならぬのだが、相手にならない者ばかりだと言うのは可笑しな話だろう。そこでただ自分が強いと自惚れているのなら氣にならないだろうが、リアスはそんな自惚れはない。

過去に何度か、大公の命がリアスに下る前に危険なはぐれ悪魔が侵入したことがあった。

それを独自の情報網で知り、リアスの独断でそのはぐれ悪魔を討伐しに向かったことがある。だが、結果は予想外であった。

リアスがそのはぐれ悪魔の隠れ家に着いた時、既にかの悪魔は息絶えていたのだ。

彼女が見たのは無残に両腕が引き千切られ、頭が潰された死体の

み。それをやったと思わしき者の影もそこにはいない。

やった犯人を捜そうにも手がかりはあまりなく、強いて言うのなら地面などに出来上がっている大きなクレーターくらいだろう。

それから度々凶悪なはぐれ悪魔が侵入してくるが、リアスが叩く前にすでに皆死んでいた。

その明らかにおかしい事態にリアスは大公にきつく問い詰めると、大公からこんなことを聞かされた。

曰く、荒事専門の者に依頼していると。

そのことに憤慨したリアスであつたが、大公から現魔王であるサーゼクス・ルシファアの身内に何か遭つてはいけないということとで安全重視にしていることを言われては言い返せない。リアスは敬愛している兄に迷惑はかけたく無いのである。

だが、それとリアスが管理者としての責務を果たしているかは別問題であり、彼女は自分の配下達と共にその『荒事専門の者』について探し始めた。

そして見つけ次第、事情を説明して辞めてもらうよう説得するため。

金が目的なら、その大公の依頼より高い金額を払うつもりである。グレモリー家は冥界でもかなりの財産を有している家であり、個人が一生遊んで暮らせる金額くらい平然と出せるのだ。

それで手を打とうと思つて探してみるが、まったく捕まらない。

はぐれ悪魔の潜伏先に向かえば既に悪魔は死んでいて姿は見えず、周りの目撃情報を集めようにも夜なので人がいない。

何も見つからないことに焦るリアスであつたが、そこで妙な噂を街で聞いた。

曰く、

『仲介屋』に仕事を依頼すれば、どんな仕事であろうとしてくれる。

というものである。

そう、『どんな仕事』でもある。

調べれば眉唾ものだが、殺人に強盗、傍は人さらいなど多岐に渡る。そこでリアスはその仲介屋について、自分達のはぐれ悪魔討伐につ

いて関わりがないか調べた。

そこで浮かび上がってきたのが、一人の男である。

年齢不明、身体的特徴不明、名称不明。

まさに謎しかない人物。だが、そんな者にも一つだけ特徴があった。

それは左腕が赤いということ、この者が『赤腕』と呼ばれていることを彼女は知った。

「く、屈辱だわ……………」

暗い地下で、一人の女が怒りに打ち震えていた。

黒いボンテージを着た豊満ま肢体はまさに妖艶で、男ならば誰もが欲情する魅惑の身体である。顔もとても美しく、まさに美女と言っても良い女性だが、残念なことに今はその顔が怒りで歪み美しさを少し損なわせていた。

彼女の名はレイナーレ。

嗜好の墮天使を目指すため、独断でこのグレモリーの管理地に侵入した墮天使である。

彼女の狙いは、とある神器（セイクリッドギア）である。その所有者は近々この街にやってくるので、その者をから奪い取る予定だ。

神器……それは『聖書の神』が作ったシステムで不思議な能力を所持者へ与える特殊な異能。歴代の英雄や伝承に出て来る傑物達も神器を持っていたと言われている。

それは時にこの世の理を覆すこともある存在。その持ち主に通常では有り得ない異能の力を授ける。中にはドラゴンや魔獣といった幻想の生物の魂が封じられている物もある。それら全ての神器には共通点があるのだ。

それは……人間、もしくは人間の血を引く者のみにしか宿らないということ。

『聖書の神』が作ったシステムは人間にしか適応されないのだ。それを後から強制的に抜き取り移植すれば他の種族でも使えるのだ。

ただし、抜き取られた者は大体死ぬ。

それを知った上でレイナーレはその者の神器を奪おうとしている。だが、彼女が今怒っているのはそれとはまったく関係がないことであつた。

ただ、たまたまだつた……一人の少年から神器の気配を感じ取ったのは。

どういった神器かまでは分からないが、神器とは得てして強力な物。

これから行う作戦に邪魔が入るのは何としても阻止したい。

一番警戒すべきはこの地の管理者であるグレモリーだが、不確定要素も潰して置いて損はない。

なら殺せばいい話なのだが、ここで彼女の悪癖が出た。

その少年を己が魅力で籠絡し、そして裏切つて殺そうと考えたのだ。

絶望に沈みながら死んでいく様を見て嘲笑おうとしていた。

堕天使ならではの下衆い考え。

その暗い愉悦を胸の内に抱き、少年を誘惑するべく告白を仕掛けた。

だが、ここで一つ大きな誤算があつた。

レイナーレは自身の美貌に自身を持っている。

端正な顔達に瑞々しく滑らかな肌、豊満で形の良い胸、くびれた腰に引き締まった臀部。

全てが雄を誘惑するのに充分な魅力に溢れている。

それを持つてすれば、人間の男如き籠絡するなど何てことはない。

それほど自信があつたレイナーレだが、何と振られたのだ。

それも一考すらせず、即答で。

それはもう、完膚なきまでに振られた。

今まで自分の美貌に自信を持っていたレイナーレがたかが人間の男に振られたなどと、彼女のプライドが許さないのだ。

「レイナーレ様、落ち着いて下さい」

「そうっすよ、レイナーレ様。そんなマジにならなくても」

「そうです。レイナーレ様の魅力に落ちなかったのはきつとそいつが不能野郎だったからですよ」

怒りに打ち震えているレイナーレを心配して部下であるドーナシーク、カラワーナ、ミッテルトの以下三名の墮天使が声をかけて慰める。

ドーナシークは紺色のコートを羽織った男で、ミッテルトはゴスロリの衣装を着た少女、カラワーナはスーツを着崩して着ている女性である。

部下三人に慰められているレイナーレは、流石に自分のみつともない所を見せたと恥じて体裁を取り繕う。

「そ、そうよね。この私に反応しないなんて、男として不能でも無い限り有り得ないことだわ」

「その通りですよ。なあ、ドーナシーク」

「あ、ああ、その通りです。私はとてもレイナーレ様が魅力的だと思いますよ」

「そいつがロリコンって場合もありますからね。あれ、もしかしてこっちの方がヤバイっ!？」

怒れる上司を必至に宥める部下達。

それは傍から見て会社員の上下関係と差がない。どの種族だろうが組織だろうが、この上下の図は変わらないのかもしれない。

そんな上司の怒りを収めるべく、三人を代表してドーナシークが前に出た。

「そんな男の風上にも置けぬ不能者など、レイナーレ様が手を下すまでもありません。その者は私が処理いたしますので、レイナーレ様は本命たる例の作戦のために御身を休めていて下さい。最悪、グレモリーの一族とやり合う可能性も出てきますので」

「そうね……そうさせてもらうわ。ドーナシーク、頼んだわ」

「はっ!」

ドーナシークは一礼すると、外へ向かって歩き出した。

その背中を見ながらレイナーレは近くにあったソファでに座り込み、怒りを静めるべく残りの部下二人に命を下す。

「カラワーナ、貴方は作戦の再確認とはぐれエクソシストの士気を高めてきなさい」

「はっ！」

その命を受けてカラワーナもドーナシック同様外へと向かう。

そしてレイナーレは最後に残ったミッテルトに向かってごろりと寝そべりながら命を出した。

「ミッテルトは近くのコンビニに行ってジュースと水羊羹買ってき。あ、もちろんジュースは0カロリーのやつだからね」

「なんでウチだけこんな扱いなんつか。まあ、ウチもプリン買いたいからいいすけど」

上司のイマイチ投げやりな命に仕方ないな、といった感じに頷いて外に出て行った。

悪魔と墮天使、敵対する双方だが、奇しくも狙いは同じ『赤腕』であつた。

4話 彼は邂逅する

レイナーレからの告白から数日が経ったが、一誠は告白されたことをすっかりと忘れていた。

偽りとは言え女性の告白を覚えていないというのは男としてどうかと思うが、それをこの男に求めるのはそもそもの間違いとしか言いようが無い。

一誠からすれば特売に急ぐ前に立ちはだかった些細な障害くらいにしか思っていないのだから、本当にレイナーレは報われないだろう。

彼にとって日々の生活こそが必死であり、先程のような思春期特有の青春なんてものを感じている余裕が本当にないのだ。

鈍感だとか、唐変木だとか、そんな話ではない。

一誠は『そういったもの』は全て自分とは縁がないものであり関わる気もない、そういう物であると考えている。

だからレイナーレの告白を、路傍の石程度にしか思っていない。つまり気にも留めていない。

そんなことに考えを裂くことなど、一誠がする訳が無いのであった。

そんな一誠だが、現在は街の郊外にある廃墟の前に立っていた。その隣には久遠の姿もある。

「また討伐依頼が来るとは、ついてるねえ。そう思わないか、イツセー」

「まあ、確かにそうだな。討伐とかは報酬が良いし単純にぶつ殺せば良いだけだから楽で助かる」

二人が夜遅く、こんな寂れた廃墟に来ているのは勿論仕事である。その日の昼頃、屋上にて空腹をドライグとの会話で紛らわせていた一誠に久遠が楽しそうな笑顔で仕事を持ってきたのだ。

数日前に一パック98円の特売卵を手に入れて喜んでいた一誠ではあるが、そんな一パックの卵がそれのみで数日間も長続きするわけもなく、昨夜の晩には全て使い切ってしまった。

そのため、再び食糧無しの状態になった一誠にとって、その話は渡りに船であったのだ。

上機嫌な久遠はそのまま一誠に今回の仕事の内容に付いて話す。

「今回の仕事は前回同様はぐれ悪魔の討伐。報酬は500万とかなり高めだ」

「つてことはそれなりにやれるつてことなんだろう？」

「勿論だ。じやなきやそんな金はこねえよ」

一誠は何も報酬が高ければ何でも受けるというわけではない。

彼が仕事を受ける基準は、報酬とその危険度、それと自分の納得がいくかどうかだ。

納得がいかなければ、例え一億であろうと受けない。

最終的に一番大切なのは、自分の『力』を存分に振るえるかどうか。そのことに尽きる。

「本来ならグレモリーの姫さんとこに行く所だったんだが、意外に難しかったみたいなんだ。大公がビビって俺の所に持ってきたつてわけだ。王様の身内に傷一つでも付けようモンなら、そいつの人生はお先真つ暗だからなあ」

その話に関して一誠は特に思うことはない。

一誠にとって耳にタコが出来るくらい毎回聞いている話だからである。

寧ろこの街に侵入してきたはぐれ悪魔は専ら一誠が全て片しているのだから、毎回似たような理由を延々と聞かされは辟易してしまう。

「はぐれの名はバイザーつていう女悪魔らしい。ただ聞いた話じゃ、暴走してもうその原型は殆ど残ってねえつてさ」

「そうかい。まあ、誰であろうと容赦無くぶちのめすまでだ」

一誠の戦意の籠もった返事に久遠は満足そうに笑う。

これも二人のいつものやり取り。とてもこれから命掛けの仕事をしに行くような感じみは見えない。

「そういうことで、イッセー……任せたぜ！」

「ああつ！」

気合いを入れて一誠は返事を久遠に返すと、そのまま左腕を胸の前
に持って行き自分の異能（力）を発現させる。

「ブウウウッステツドオツギアツツツツ!!」

その叫びと共に一誠の左腕は手甲を纏いその形を変えていく。

その輝きが収まると、そこには赤い鎧に包まれた左腕が現れた。

その左腕そ装着された籠手こそ、一誠の神器、『ブーステツドギア』
である。

この形態はその力の片鱗にしか過ぎないのだが。ブーステツドギ
アを展開した一誠はそのまま地面に向かって拳を振るう。

拳が地面に激突した瞬間、爆発したかのような衝撃と轟音が轟き、
一誠の身体を廃墟へ向かって飛ばしていく。

これは一誠がよく使う移動方であり、地面などを殴りつける反動で
跳んでいる。その方が徒歩よりも速く移動出来るからである。

一誠はそのまま廃墟の壁まで飛んで行く。

だが、そこにあるのは壁であり空中で移動する術を持たない一誠で
は壁に叩き付けられてしまう。

一誠は跳んだまま左腕を上げると、

「あああああああああああああつあああああああああああ
ああああ!!」

咆吼を上げながら左拳を壁に向かって叩き付けた。

それにより大きな音を立てて壁は粉碎され、そのまま廃墟内に一誠
は侵入する。

通常であればこんな入り方をすれば相手に気付かれるものだが、そ
こは気にしない。

一誠は隠密行動で何かをしに来たわけではないのだから。

そのまま中に侵入して辺りを見渡す一誠。

辺りは暗く何も見えない。だが、確かに……その気配は感じた。

それを証明するように、一誠に妖しい声がかけられる。

『良い匂いがするなあ。美味しそうだわあ。苦いのかな？ 甘いのか
な?』

声の先を振り返ると、暗闇の中に裸の女性が立っていた。

美しい黒髪に大きな乳房、くびれた腰は雄を魅了して止まないであろう。ただ一つ可笑しいことがあるとすれば、それは上半身から下が見えないことだろうか。

暗闇の所為で見え辛いだけなのかもしれないが。

思春期の男なら目が釘付けになる光景に、一誠は特に感情を浮かべることなく問いかける。

「なあ、あんた。バイザーって名前で合ってるのか？」

その問いに女性はしばし沈黙した後、返事の代わりに全身を表した。

本来ならば下半身があるであろう場所は、そこから歪で巨大な異形の肉体となっていた。

女性の上半身はその肉体の頭に当たる部分になっていたのだ。

バイザーはその異形の身体を使い、一誠へ襲い掛かる。

『何故その名を知っているっ！ さては貴様、エクソシストだなああああああああああああああああああああああああああああああ！』

悪魔を狩る人間とは基本的に悪魔払い（エクソシスト）しかいない。だからこそ、バイザーは自分を滅ぼしに来たエクソシストだと一誠を判断した。

そうでなければ、バイザーの名を知ることなどないのだから。

最早元の原型から離れ理性が壊れつつあるバイザーにそういった判断がついたことに若干驚く一誠であるが、それだけだ。

叩き潰すことに変わりはないのだから、多少頭が回ろうと関係無い。

巨大な足が振り下ろされ、一誠を踏みつぶす。

その威力はは凄まじく、一誠が立っていた場所から数メートルに渡り廃墟の床が粉碎された。

どう考えても致命傷。人間なら即座に原型の残らない肉塊になっていただろう。だが……。

「何だよ……この程度で500万？ おいおい、冗談だろ」

バイザーの足下から笑い声が聞こえてきた。

それは落胆の声。期待が裏切られて残念でしかたない、そんな声で

ある。

『何っ!?!』

声が聞こえたことでバイザーが驚愕する。

例えば悪魔払いを生業とする人間でも、その防御力は人間のそれとあまり変わらない。

だから、この一撃を喰らえば、いくらエクソシストであろうと死んでいるはずなのだ。

それなのに生きている。それどころか、笑ってすらいいるというのだから驚かざる得ない。

バイザーは焦りながらその笑い声を消そうと床を粉碎した足に力を込める。

だが、足は少しも動かない。

「こんなつまんねえ仕事を回しやがって。久遠に後でラーメンでも奢って貰わなきゃ割に合わねえよ」

それどころかバイザーの足は徐々に上へと押し上げられていく。

その足の下には、左腕で足を防いでいる一誠がいた。

あの踏みつけに対し、一誠は何気ない仕草で左腕を上に出し防御。

その衝撃が一誠を駆け巡るが、大したダメージもなくそのまま床にめり込んでいった。そこから這う出つつバイザーの足を押し上げていったのだ。

その事実には危険だとバイザーの本能が警告を発する。

だが……もう遅い。

「そういうわけだ。手前えはとつと潰れろっ!」

一誠の咆吼と共に、踏んづけていたバイザーの足は根元から千切れ飛んだ。

少し宙を舞った後に、ぐちゃりと音を立てて床に落ちてきた。

その音を聞いて、バイザーはやつと自分の足が千切れたことに気付いた。

「~~~~~!?!」

途端に走った激痛に声にならない悲鳴を上げるバイザー。

その咆吼は廃墟を揺さぶり聞く者全てに恐怖を与える。

一誠は悲鳴を聞きながらニヤリと寧猛に笑うと、更に地面を左手で殴りつける。

再び粉碎される床。そして反動でバイザーに向かって一誠は跳ぶ。「もう一本もらったああああああああああああああああああああああ!!」

破壊の本能を向き出しにした咆吼を上げながら空中で身体を捻り回転する一誠。

その遠心力を加算した拳がバイザーの無事なもう片方の足に吸い込まれるように入る。

拳はそのままバイザーの肉を潰し、骨を砕き、皮を千切り裂く。

一誠が拳を振り切ると、もう一本の足も本体から千切られ、床に倒れた。

足を失ったバイザーは立つことが出来なくなり床を壊しながら倒れ込む。そこをすかさず一誠は近づき、左腕を振りかぶる。

「らああああああああああああああああああああああああ!!」

思いつきり振るった左拳がバイザーの身体を捕らえる。

拳がめり込み、体内の肉を潰していく感触が伝わってくる。

その感触に笑みを深めながら一誠は拳を振り抜き、バイザーの巨体を廃墟の壁へと吹っ飛ばした。

壁に突っ込み破壊するバイザー。その目はつい先程の殺気立った目ではなくなっていた。

生命の危機に晒され、ただひたすら恐怖する。

悔っていた人間にこうも一方的にやられるとは思っていなかった。

屈辱。

だが、それ以上に生命の危機に恐怖した。

この男から逃げたいと。戦う以前の問題だと。

先程まで驕っていたことを吐いていた口から、今度は命乞いの言葉を吐こうとする。

だが、その言葉を吐く前に一誠の攻撃は止まらない。

ブーステッドギアが装着された左腕は勿論、何も装着していない右腕でも殴りかかる。

勿論、ただの有名人ではなく、全員悪魔ということも一誠は知っている。

リアスは一誠を警戒しつつも声をかける。

「さっきのはぐれ悪魔をやったのはあなたよね？」

質問の形を取っているが、それは事実確認の意味を成さない。確定していることを聞いただけである。

その問いに一誠は軽く答える。

「だったら……どうする？」

一誠を注意深く見ていたリアスはそこで気付いた。

暗かろうが、悪魔の視力なら闇夜も昼間同然に見える。

その視力が捕らえたのは二つ。

一つ、着ている服が駒王学園の制服だということ。

顔はうつぶせているので見えないが、確かに駒王学園の生徒であろうということ。

二つ、その血に汚れていた左腕に装着されていた籠手が『赤い』ことに。

つまり……。

「あなた……『赤腕』ね」

やっと探していた人物を見つけられたということ。

その問いに対し一誠はやれやれをいった様子で両手を挙げる。

「誰かが勝手に付けた奴だろ、そいつは。自分から名乗った記憶はねえよ」

「あら、そうなの。この二つ名、凄く有名だからてつきり気に入ってるのかと思ったわ」

挑発するかのように笑うリアスに、一誠は止めてくれと言わんばかりに手を振る。

その様子を見つつ、リアスは本題を話し始める。

「私の名はリアス・グレモリー。グレモリー家の命の元、この地を管理している者よ。さっそくで悪いんだけど、貴方にはこれ以上こういった化け物の相手をするのを止めて貰いたいのよ。それは私達の仕事だから、取られ続けていると私の面目に関わるの。わかる？」

その返答に一誠はくつくつく、と笑いを押し殺しながら答えた。

「断る。何せこいつは稼ぎが良いし、何より思いつきり暴れられる。そいつを取られるのはこっちだってきついからなあ。文句があるんなら俺じゃなくて、俺に仕事を仲介してる奴か、仕事を頼んだ依頼人にでも言ってくれ」

拒絶の意をはつきりと示す一誠。

笑っている理由は、この茶番に付き合っていて笑いを堪える我慢が出来なかったからだ。

「そう、なら……しかたないわね」

一誠の反応にリアスは交渉が決裂したことを悟る。

交渉が失敗すれば、後することは一つしか無い。

「どうするんだ、俺を？」

「聞いてもらえないなら……力尽くで聞かせるしかないじゃない、祐斗ッ！」

「はい、部長！」

リアスの命の元、後ろに控えていた木場 祐斗が常識では計れない程の速度で飛び出す。

それが木場 祐斗が与えられた役割の駒『騎士（ナイト）』の特性……高速移動である。

だが、祐斗が一誠に虚空から出現させた剣で斬り掛かるよりも早く、一誠は動いていた。

「なら、逃げさせて貰うぜっ!!」

左腕を力一杯振り上げ、床に向かって殴りつける。

その瞬間、爆発するかのように爆ぜる床。

打撃の反動を利用して一誠は祐斗よりも早く廃墟の天井へと飛び上がった。

そのまま天井を突き破り、更に外の外壁にもう一撃加えて廃墟から離脱する。

その一連の動作を見ていたリアス達は呆氣にとられたが、急いで気を取り直した。

「祐斗、今から追いかけられる？」

「すみません、部長。たぶん無理です。彼は僕より速いです。きっと今から追いかけても逃げられてしまいます」

申し訳無いと謝る祐斗にリアスは少しばかり肩を落とす。

別に祐斗に落胆したわけではなく、リアスの配下一速い祐斗が追いつけなければ、だれも追いつけないと分かっているからだ。

探していた人物に逃げられたことでへこむリアスは改めて辺りを見渡すが、凄惨な有様になっていた。無事な床は一つも無く、壁は彼方此方倒壊し至る所に血肉が飛び散っていた。

正常な人間なら正気を失う光景が広がっている。

そんな中、リアスは砕け巨大なクレーターが出来上がっている床にある物を見つけた。

それに近づき拾いあげる。

「これは……生徒手帳？」

そのまま中身を開くと、彼女は先程の気落ちした顔から一転し不敵な笑みを浮かべ始めた。

「へえ、そうなの……『兵藤 一誠』かあ」

その名を呟きながら彼女は廃墟から眷属と共に去って行く。

その胸に落ちていた手帳を抱きしめながら。

5話 彼は拒絶する

はぐれ悪魔、バイザーを討伐しリアスの追撃を躲した一誠は久遠と合流した後に仕事の不満とリアスの事を軽く報告した。

そのことに久遠はそこまで深刻になった様子ではなかったが、ばれたことを少々面倒に感じていた。

同じ学園に通っているのだ。正体まではばれてはいないようだが、それがばれるのも時間の問題だろう。何せヒントが多すぎる。

元女子校ということもあって男子生徒の少ない駒王学園。その数少ない中でも、更に一誠のような言動をする者を調べれば数は更に絞れる。

別にばれたところで一誠達に何か問題があるわけではない。だが、少々騒がしくなり厄介になるのは確実だ。

その面倒事に辟易していた久遠であったが、それ以上に厄介に感じていた事は一誠が仕事の不満のあまりラーメンを奢れと集つてきたことだ。

そのあまりのしつこきに久遠は折れ、泣く泣くラーメン屋に連れて行くことになった。

その日、一誠は久方ぶりにまともなラーメンを食べ、その美味さに仕事の不満とばれた事への危惧感を忘れていた。

翌日、いつも通り学校に一誠は登校した。

特に変わりようもなく、久遠と下らないやり取りをしながら通学路を歩き、昨日奢つて貰ったラーメンの愚痴を聞きながら教室へ入つていった。

そして授業は相変わらず聞き流し寝て過ごす。

そのまま昼休みまでずっと変わらずそのまま過ごし、昼になった途端に起きた。

そして上機嫌に鞆から『自分の昼食』を取り出す。

鞆から出てきたのは、コッペパンである。それも多くのスーパーで流通しているコッペパンにあんことバターが塗られている有名な商

品だ。

昨日の収入で懷が温かくなった一誠はたまには贅沢をしたいと思
い買ったのである。

例の如く殆どを寄付してしまったため、朝から久遠に小言を言われ
たがそれも今更のこと。そんな一誠であるが、多少は贅沢をしたいと
きもある。

そのまま至福の時を過ごそうとした一誠であるが、それは突然の来
訪者によって中断される。

「ここに兵藤 一誠君がいるって聞いたんだけど」

「あ?」

甘いさやかな声が自分の名を言ったことに反応し一誠は其方を
向くと、そこには金髪の美しい少年が立っていた。

この学園でも有数の美少年である木場 祐斗だ。

祐斗は周りに集まる女生徒に軽く挨拶をすると、一誠の方まで歩い
て来た。

「兵藤 一誠君……だよね」

「んだよ……」

不機嫌な一誠の反応に苦笑する祐斗。

周りの女生徒は普段からあまり関わらない一誠のことをこの時に
限り批難する。

だが、不機嫌そうな一誠の様子を見て弱腰になり、批難の声も弱々
しい物になっていた。

周りの空気を察して祐斗は苦笑を浮かべたまま話を勧めることに
した。

「実はね、部活の先輩が君に用があるんだ。だから呼んでくるよう言
われたんだけど……駄目かな?」

「俺がその呼びかけに応じる理由があるか?」

ジロリと睨み付ける一誠にあははと困った様子で祐斗は笑う。

確かにこの場合、一誠が行く理由がない。見ず知らずの人間の呼び
かけに応じる必要がないのだ。

「そもそも、用があるなら本人が直に来るもんだろうが」

「そう言われると困っちゃうな。それに連れてこないと僕も怒られてしまうしね」

困り顔の祐斗に一誠は表情を変えないが、内心では苛立っていた。何せ楽しみにしていた昼食を邪魔されているのだから。しかもこのまま行けばこの話し合いは平行線であり、昼休みが終わってしまうのは目に見えているのだ。

それを我慢出来る程、一誠の精神は成熟していない。

後二、三言祐斗が話を長引かせるようなら、即座に『ちよつと荒いお帰り』を願うところだった一誠だが、祐斗が言う前にそれは止められた。

「分かった、分かったからそれ以上そいつを刺激しないでくれ。教室で暴れたらたまったもんじゃねえよ」

一誠と祐斗の間にいつの間にか久遠が入り、一誠に落ち着くよう視線を向けながら祐斗に話しかける。

「あれ、君は？」

「ああ、俺はこいつのダチだよ。こいつをお前の先輩とやらの所に連れて行くから俺も連れて行けよ」

一誠を落ち着けるように肩を叩きながら祐斗に自分も連れて行くよう久遠は言う。

それに対し、祐斗は別の意味で困った顔をする。

「それはちよつと困るなあ。僕が呼んでこいって言われたのは兵藤君だけなんだけど」

「俺はこいつの関係者なんだから別に良いだろ？　そうケチケチすんなよ」

「うーん、困ったなあ」

祐斗が呼ぶのはあくまでも一誠のみであり、『一般人』である久遠を連れて行くわけには行かない。そう祐斗は考え断ろうとすると、久遠は祐斗にしか聞こえないよう囁いた。

「俺が『仲介屋』だと言ったら？」

「っ!？」

その言葉に祐斗は言葉を飲み込んだ。

リアスが探していた『仲介屋』が目の前に現れたのだから、驚愕せずにはいられない。

そして二人を見て祐斗は、久遠も連れて行くことを決めた。

「……………分かったよ。それじゃ行こうか」

「話が分かる奴で有り難てえ。それじゃ行くぞ、一誠」

「……………ああ、面倒くせえ」

そして移動し始める三人。

その奇妙な組み合わせに本来なら注目を集めそうなものだが、何故か皆気にせず素通りする。そのことに祐斗は違和感を感じたが、特に気にせず歩いて行く。

彼等が本拠地である部室……………旧校舎の『オカルト研究部』へと。
ニヤリと笑う久遠と呆れる一誠を連れて。

「ここが僕が入ってる部活の部室だよ」

祐斗に連れられて歩くこと数分。一誠達は旧校舎の一室に案内されていた。

旧校舎らしく木造であり、辺りは老朽化していつ崩れるか分からないくらい古い。

その中にある奥の一室。そこにはありありとオカルト研究部の看板が掲げられていた。

その中に案内されると、中は外と違ってシックなデザインの部室に変わっていた。

暗く日の光が入らないが、蠟燭の明かりでより幻想的な雰囲気漂わせる。

壁には魔方陣や如何にもな道具が飾っており、あからさまに『オカルト』らしさを醸し出していた。

中に置いてあるソファには小柄な少女が座っており、羊羹を無表情ながらに黙々と食べていた。

この駒王学園の有名なマスコットとして有名な塔城 小猫である。

一誠は子猫をじつと見つめる。

その視線を感じた子猫はさつと羊羹を一誠の視線から外すように

動かした。

「……あげませんよ」

「いらねえよ…」

子猫にそう返すと、祐斗に促され久遠共々別のソファに座った。

そして待つこと数分。お茶を携えた姫島 朱乃と共にリアス・グレモリーがやってきた。

「ごめんなさいね、急に呼んで」

朱乃のお茶を受け取りながら話しかけるリアスに一誠は不機嫌そうに睨み見つけ、久遠はニコニコと営業スマイルで応じる。

この場に呼んでいないはずの久遠にリアスは何故連れてきたのかを祐斗に問おうとしたが、その前に先んじて久遠が口を開いた。

「ああ、俺がいるのは簡単な理由だ。俺があんたらが探してた『仲介屋』だからだよ」

「「!」」

その発言に祐斗を覗いた三人は驚いた。

その反応を面白そうに久遠は見て笑うと、リアスは咳払いを一回した後、真面目な表情になる。それは学生の顔ではない。この地の管理を司るグレモリー一族の顔だ。

「まさか仲介屋まで見つかるとは思っていなかったわ」

「別にそんな驚くようなことでもねえよ。案外探せば身近にいるもんだよ、俺みたいなのもんはさ」

不敵に笑う久遠にリアスは少し戦く。

この状況で怯え一つ見せずに笑うというのは普通ではありえない。

その答えを言うように、久遠はリアス達に告げる。

「それで? 『元72柱』グレモリーのお姫様御一行が俺達に何の用かな。デートのお誘いってんなら、喜んで受けるけどよ。そうでないってんなら早く返してくれねえか? 一誠の奴がまだ昼喰ってないんでね。こいつは喰いモンの話になると嫌にしつこいぞ」

からかう様に言う久遠にリアス達は再び驚いていた。

まさか此方の正体がばれているとは思わなかったようだ。

そのことに気取られぬようリアスは咳払いを軽く一回すると余裕

の表情で久遠に話しかける。

「まさか此方の正体を知っているとは思わなかったわ。でも、これ話しやすくもなった。話というのは、コレまでと昨日の件よ」

そう言いながら二人に見えるようにテーブルにリアスはあるものを置く。

それを見た一誠は間の抜けた声を出し、久遠はあちやくと額を手で覆う。

「この馬鹿！ 何で生徒手帳なんて落とすかなあ。普通持つてこないだろ」

「うるせえよ。しかたねえだろ、着替える時間も無く仕事だったんだから」

そして二人とも顔が同時に動き、互い額をぶつけ合わせながら睨み付け合う。

「何だよ！」

「何だって！」

お互いに一步も引かない様子にリアス達は戸惑うが、それでも話を勧める。

「と、ともかく！ この生徒手帳であなたのことを知ったのよ……兵

藤 一誠君」

「……そうみたいだな」

一誠は面倒臭そうにそう答えるそばつが悪そうな顔になる。

それを気に、リアスは捲し立てるように昨日言ったことと同じことを一誠と久遠に聞かせる。

曰く、もうはぐれ狩りは止めて貰いたいと。

それに対し、久遠は軽く首を横に振る。

「こいつにも言われたと思うけど、そいつ出来ねえよ。俺達だって商売だからなあ。文句があるなら大公にでも言ってくれ。それにウチの依頼は大公や『魔王』だって了承してることだからな。文句はご自慢のお兄様にでも聞いてもらうんだな」

そう答える久遠の顔はあいかわらず余裕に満ちていた。

その圧倒的な姿にリアスは苛立ちつつも我慢する。

まさかリアスの実兄である魔王まで依頼をしているとは思わなかったが、それだけ信頼されていないと言うことに内心嘆きそうになった。

だが、だからはい、そうですかと引き下がれる訳が無い。リアスは食って掛かるように久遠に頼み込む。

「それでもよ、それでも手を出さないで。これは悪魔である私達の問題なの。だから人間であるあなたが関わって良い問題じゃないわ。お金が欲しいって言うんだったら、その依頼料以上のお金で手を打つわ。だから……そうだ、いつそ彼を私の眷属に誘えないかしら？ 彼程の腕なら申し分ないわ。それに眷属になったら毎月多額のお金を渡しても良いし。だから……」

そこから先の言葉は出なかった。

何故なら、一誠が耐えられなかったからだ。

「そういう問題じゃねえし、そんな金いらねえよ」

席から立ち上がった一誠は今にもキレそうな一歩手前になっていた。

正直さつさと帰りたい気持ちもあつたが、それ以上に金を出すと言われて我慢がならなかったのだ。

その身に纏う雰囲気にはリアス達は息を飲み、久遠はあちやくと額に手を当てる。

「俺は施しなんてクソつたれたもんを受ける気はねえっ！ 手前えのことは手前えで決める！ 仕事は自分で決めてやってるんだよ。横からちやちや入れてくるんじゃない！ 金じゃねえんだよ、こいつはよお！ 何より、俺は誰の下にも着く気はねえっ!!」

苛立ちの籠もった咆吼にリアス達がビクッと震える。

ただの人間に自分達が恐怖を感じている。その事実には内心では驚きを隠せずにいた。

そしてこの後、更に驚かされることになった。

一誠はそのまま左腕を胸の前に出すと、

「来い、ブーステッドギア」

赤き装甲をその左手に纏わせた。

その籠手の姿、そしてその名を聞いてリアスは驚きのあまり声を洩らしてしまう。

「なつ、ブーステッドギア（赤龍帝の籠手）ですって!? それはもしかしてあの神滅具（ロンギヌス）の……」

神器の中でも特に強力な、それこそ神を殺しかねない程の力を持った物のことを『神滅具（ロンギヌス）』と呼ぶ。

その中でも一誠のブーステッドギアは有名で、赤き龍の帝王ドライグの魂が封じられている代物だ。その特性は十秒に一度、その力を倍化させるというもの。元の力から二倍、四倍、六倍と倍化していく。通常のただの龍の魂が封じられた『龍の籠手』は一回だけ持ち主の力を上げるだけであり、回数制限なしに力を上げ続けられるというのは破額能力なのである。

驚愕に顔を染めるリアス達に久遠は鼻で笑うように教える。

「ご明察。こいつは今世の赤龍帝つてやつだ。だから甘く見てると」

久遠の言葉が終わる前に一誠の左腕から音声が流れた。

機械的でありながらどこか渋い男の声である。

『explosion』

その瞬間部室内を龍のオーラが吹き荒び、辺りの装飾を床に落とし始めた。

そのあまりの力の大きさにリアス達は言葉を失う。まさに目の前に本物の龍がいて、睨み付けられているような感覚に陥る。生殺与奪権を全て握られていると思わされた。

魔力ではない。だが、それは確実な力。その暴風の中心地で一誠は不機嫌そうにリアスを睨み付ける。

その様子に久遠はやれやれと呆れながらリアスに先程の続きを答えた。

「だから甘く見てると……痛い目を見るぜ」

イイ笑顔で答える久遠にリアス達は反応している余裕はない。

気を抜いた瞬間には消滅させられるのではないかという恐怖に駆られているから。

一誠は別にそこまで力を出していない。ただ倍化の能力を使い、

『力を押さえる力』を上げていただけ。その力を軽く解き放つたに過ぎないのだ。

「あんたらが口を出そうと俺は止めねえよ。もし邪魔をするって言うんだったら……」

ここで初めて一誠はここに来て表情を変えた。

野獣のような凄まじい、破壊の衝動を前面に出した笑みを浮かべたのだ。その笑みは壮絶で、見る者全てを恐怖に打ち震えさせる。

「打ち砕く！」

そう言い終えると共にブーステッドギアを元に戻して踵を返し帰り始めた。

「ま、そういうことで。痛い目に遭いたくなけりやあ大人しくしてることだな、お姫様。んじゃな」

先を歩く一誠に久遠は付いていくように歩き、共にオカルト研究部の部室を出た。

それまでの間、リアス達は呼吸をすることも忘れ、ただ恐怖するか出来なかった。

尚、一誠が本校舎に入ると共に授業のチャイムが鳴り、腹から悲しそうな音が鳴ったのは言うまでもないだろう。

6話 彼は出会う

少女は今、目の前の事態にどう判断すれば良いのか判断が付かなかった。

とある事情から祖国、教会を追放された信心深い少女はそれでも信じる神のため、堕天使にそそのかされ、騙されていることも知らずに日本に来た。

神の教えを信じ、人々を救う信徒として。

そこで紹介された駒王町の教会に赴任することになり向かっていたのだが、慣れない異国の地と、慣れない日本語のせいで迷子になっていた。

道に迷っている不安と戦いながら彷徨っている所で彼女は出会った。

地面で倒れている男に。

見た限り自分と同じ歳の男で、制服を着ていることから学生だと言うことが窺える。

周りに人はおらず、助けを呼ぶ手段を持たない少女は急いでその男へと駆け寄る。

怪我をしているのなら少女の『異能』の力で助けられるかもしれないし、そうでなくとも善人な少女が目の前で倒れている人を助けないという選択肢は存在しなかった。

「ア、アノ……ダイジョウブ……デスカ？」

少女が慣れない片言の日本語で話しかけるも、男からの返答はない。

そこで少女は意識がないのか、何処を怪我しているのかを確認すべく男を仰向けにする。

すると男が腹を苦しそうに押さえていることに気付き、腹痛で苦しんでいると判断した。

「オナカ、イタイデスネ。イマ、タスケテアゲマス……」

相手を安心させるよう、心からの優しさを込めてその男の腹に手を添える。

そのやり取りが少し続き、少女の昼食が残り一切れになった所で少年はやっと止まった。

まだ空腹を感じてはいるようだが、取りあえず危機的状況からは脱却したらしい。

少年は腹をさすりながら少女に面と向かって礼を言う。

「いや、本当に助かったぜ。マジでな」

「イエ、ソンナ……」

礼を言われ照れる少女に、その少年は言葉を聞いて目の前の少女が外国の人間であることを知る。

「あれ？ あんたここら辺の人間じゃねえな。どこから？」

「ア、ハイ！ ワタシ、ヨーロッパカラキマシタ」

少年はその言葉に軽く頷くが、実際にそこまで深くは考えていなかった。

ただ外国という認識くらいしか持たなかったのは、少年の頭がそこまで良くないからだ。

だが、それでも話を聞いてくれる少年のことを少女は嬉しく思った。

「へえ、そうなのか？ 旅行か？」

「イエ、エツト……フニンデス。コノマチ、キョウカイ、フニン」

片言の日本語だが、それでも充分に意味の通る言葉。

少年はそれを聞いて少し驚いた。

「あんた、日本語上手いな」

「ハ、ハイ！ ガンバッテ、ベンキョウ、シマシタ」

「すげえなあ。そうか、教会にねえ」

少年は感心すると共に、少女の服装を見て納得した。

黒い慎ましやかな僧衣、それは神の信徒であるシスターの証明である。

すると少女は先ほどとは一転し、困った顔をした。

「デスガ……マイゴデス。コマツテマス」

「マイゴ……ああ、迷子か。てことは、あんた迷ってるのか」

「ハイ……」

道に迷っていることを恥ずかしそうに語る少女に、少年は少し考えた後に口を開いた。

「だったら、案内してやるよ。せっかく来たんだしな」

そして少年は少女を教会まで案内することにした。

教会まで案内する間に、少女はまだ言っていなかったことを少年に言うことにした。

「ア、アノ……ワタシ、アーシア・アルジェント、イイマス」

「ん？ ああ、あんたの名前か。随分と律儀なんだな。名乗られたからにはこっちも返さねえとなあ。俺の名は一誠……まあ、ただの一誠だ」

会ったばかりの人間に名前を明かすというのは、中々に出来ることではない。

それを平然と純粋な笑顔でする辺り、少女……アーシアは本当に優しく純粋な少女なのだろう。

「イツセイ？……イツセー……サン……」

アーシアは少年、一誠の名を刻みつけるように小さく繰り返し呟く。

そして心に刻み込むと、イツセーサンと呼び始めた。

アーシアは一誠の名を呼び親しみを感じながら話しかけていると、あることを思い出した。

「ナンデ、イツセーサン、タオレテタ、デスカ？」

そう、そもそもなんであるように生き倒れていたのか、そのことがアーシアには不思議だった。

アーシアが聞いた限りの話では、日本は裕福な国で飢餓に苦しむようなことはそこまでないと。だというのに実際に来てみたら目の前に行き倒れた一誠を見つけたのだから驚くのも無理は無い。聞いた話と違うのだから。

聞かれた一誠は少し気まずそうにした後に、短く答えた。

「金欠だ。えっと……No money（ノウ マネー）」

英語で今更答えたのは漢字だと難しいかと思ったからであり、決し

て恰好付けたかったからではない。頭の悪い一誠でもこれぐらいは何とか出来る。

一誠の答えを聞いてアーシアは少し悲しそうな顔をする。

「ニホン、ユウフク、コマラナイキキマシタ」

「それは一部の奴だけだろ。何処の国だろうが金がなくて困ってる奴なんてごまんといる。俺は常に金欠だしな」

一誠は苦笑しながらそう答える。

だが、ここで一誠は少し嘘をついた。

正確に言えば、一誠は数日前まで困ることなどない大金を手に入れていた。

はぐれ悪魔、バイザーの討伐料である500万円。

この高校生には破格の金額を手に入れたイツセーは、その殆どを自分が世話になっていた孤児院『白夜園』に寄付している。

それはいつものことだが、立て続けに来た討伐依頼の御蔭で少しは一誠にも回す余裕が出来ていた。だからこそ、普段はしないちよつとした贅沢をしていたわけだが、ここで変な欲が出てきてしまった。

せっかく贅沢が出来るのだから、孤児院の子供にお菓子を買ってあげよう。

そう思ってしまったのだ。孤児院にいる子供は皆一誠より歳下の少年少女達。一誠からすれば血のつながりはないが、弟と妹達なのである。

ここで兄貴らしい行動を見せたいなどと思った一誠は洋菓子店に入ってケーキを買うことにした。だが、洋菓子とは得てして高額な物。

その値段を人数分で計算した結果、明らかに赤字になることは見えていた。

だが、一誠はそれでも購入に踏み切った。

そして買ったケーキを孤児院の皆に振る舞うと、皆嬉々としてそれを喜んだ。

『ありがとう、一誠兄ちゃん！』

その感謝の声が嬉しかった一誠はそれで正解だと思った。

だが、心は充実しても財布は空虚となり、結果、ここ最近口クに食べていないという事態に。そして空腹がピークになり、道端で倒れていたというわけなのだ。

それを言うわけにはいかないことから一誠は苦笑するしかなかった。

アーシアは苦笑する一誠を見て世の非情さに心を痛ませつつ、会話を続けながら歩く。

異国での心細さも不思議と消えていて、初めて同年代の異性と話すことに恥ずかしがりつつも嬉しかった。

そして二人は歩くこと十数分、丘の上に立つ教会を見上げていた。「あそこがこの街で唯一の教会だよ。まあ、今は誰も居なくて廃墟みてえなもんだけどな。また再開でもすんのかねえ」

「ハイ。ワタシ、ソノタメ、キマシタ」

元気よくそう答えるアーシアに一誠はそうなのかと返事を返す。

ここまで来れば後は一本道であり、迷うことはない。

アーシアは一誠に向き合うと、頭をペコリと下げた。

「アリガトウゴザイマス。タスカリマシタ」

心からの感謝に一誠はムズ痒い様な感覚を感じ、頬を掻きながら少しそっぽを向く。

「別に礼を言われるようなことじゃねえよ。寧ろこつちが助けられたんだしな」

そして一誠は思い出したかのようにアーシアに言う。

「そうだ。こいつが礼代わりになるかはわからねえが、あんたが困ったときは声をかけてくれ。助けてやるからさ」

「ハイ！ アリガトウゴザイマス」

一誠はそうアーシアに言っただけを言うと、アーシアは一誠の姿が見えなくなるまで手を振っていた。

こうして少女は少年と出会った。

その帰り道、財布の中は変わらず寂しいが心は満更ではない様子の一誠。

だが、次に現れた者によってその充実感は失われる。

「貴様が『兵藤 一誠』で間違いないか？」

「あん？」

曲がり角を曲がると、スーツ姿の男がいた。

その男を見た途端、一誠の眉がつり上がる。

何故なら、その気配が人間ではなく、その上此方の名を呼んできたからである。

男は一誠の雰囲気により鋭くなったことを察し、ニヤリと笑った。

「あんた、誰だ？」

その言葉が何処の何方かではなく、何用だという意味なのかを、男は勿論理解している。だからこそ、こう答えた。

「私の名はドーナシック。既に察していると思うが……堕天使だ。そして我が上司の命により、障害になり得る貴様を処分する」

「へえ、そいつは随分と物騒な話だ」

「それに我が上司は貴様にかなり侮辱されたようなのでな。そのことを後悔させよとの命だ。まあ、こっちはどうでもいいが」

互いの空間の密度が増していく。

殺気と殺気がぶつかり合い、辺りが軋むような感じがし始める。

「私としてはその上司が恐れる力、試してみたいと思っている」

「へえ、そいつは……嫌いじゃねえなあ」

気が付けば辺りは結界が張られていて人一人居ない。

それを本能で察した一誠は好戦的な笑みを浮かべてドーナシックを見る。

そして……。

「では、行くぞ人間っ!!」

「来いよ、堕天使っ!!」

赤き腕と光の槍が激突した。

7話 彼は戦う

空腹のあまり生き倒れていた所を金髪美少女のシスターに助けられた一誠。

そのシスター……アーシア・アルジェントはこの度、駒王町の教会に赴任することになったのだが、慣れない異国の地ということもあって迷っていた。

そのことを聞いた一誠はせっかくだから教会まで案内することにした。

そして教会の少し前まで案内した後の帰り道。

一誠は一人の男と出会った。

名はドーナシックという『墮天使』だ。

その男は自らをそう名乗り、そして……一誠を殺すと言ってきた。それに応じ一誠は神器を装着し、そして……激突した。

「ぬおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「おおおおおおおおおおおおおおお!!」

裂帛の気迫が籠もった叫びを上げながらドーナシックが手から光りを発すると、その光は形を変えて槍の形状をとる。

その槍を構えながら一誠に向かって突進した。

その速度は通常では有り得ない速度であり、一般人なら反応することも出来ないだろう。

それに対し、一誠はそのまま左腕を振るい迎え撃つ。

槍と左拳が激突すると、まるで爆発したかのような轟音が辺りに響き渡った。

もし結界を張っていないければ警察沙汰では済まない大惨事だと思われるだろう。

そのまま槍を払い、一誠から距離を取るドーナシック。その顔は笑みこそ浮かべてはいるが、冷や汗を掻いていた。

「まさか……ただの人間がこの私の槍を壊すとは……」

ドーナシックの目線の先にある槍、その穂先には罅が入っていた。その事実にはドーナシックは驚愕する。

その認識が如何に愚かなのかということを知らされた。

ドーナシックが驚いている間に、今度は一誠が仕掛ける。

[illegible]

だが、現実には違っていた。

「なっ!?!
ぐおおおおおおおおお!!」

「がはっ、ぐうっ……な、何なんだ、この力は……」

それを察してなのか、一誠は癡猛な笑みをドーナシックに向けた。

「どうしたよ、堕天使？ そんなことで吹っ飛んでるようじゃあ、俺を殺すなんて出来ねえぞ。それとも……口だけか、『鴉（カラス）』？」
「何っ!? 貴様あつ!」

一誠に挑発されて激怒するドーナシック。

人間という『下等』な存在に押されているという状況にかなり焦っているというのに、さらに見下されたのだ。堕天使としては我慢ならないものがある。

「貴様あああああああああ! ただではすません!!」

受けた屈辱を激情に変え、ドーナシックは光の槍を一誠に向かって投げつける。

それも一本ではない。手から光を発すると、即座に槍に変化させ連続で投げ続ける。

その怒濤の攻撃は、人間の身で受ければ跡形もなく消滅するだろう。

過剰とも言える投擲された槍に対し、一誠は不敵な笑みを浮かべたままゆつくりと前へ進む。

「塵一つ残らず消え去れええええええええええええええええええ!!」

ドーナシックの怒りが込められた槍が一誠に降りかかる。

その槍の群れに向かって一誠は……吠えた。

「らああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

獣が如き咆吼を上げ、破壊を秘めた豪腕を槍に向かって振るう。

その赤き腕は槍に激突すると共に、槍を木っ端微塵に粉碎していった。

「その程度かよ、堕天使さんよお! もうちったあ根性見せてみろよ! なあ、おい!」

一誠の叫びにドーナシックの身体が震える。

それは恐怖による震え。

恐れてしまったのだ。ドーナシックは、目の前の神器を持った『ただの人間』に。

「ひっ！ あっ、かはっ……」

恐怖のあまり呼吸すらままならなくなるドーナシーク。

それを嘲るかのように一誠は嗤った。

「案外悪くなかったぜえ、あんた。だが……この程度じゃあ、俺を満足させられなかったなあ。だからもう……こいつでっ！ 終わりだああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

一誠はドーナシークにそう叫ぶと、再び地面を殴りつけ、破碎した粉塵を巻き込みながら身体を回転させる。

高速回転しながら向かってくる一誠にドーナシークは持てる全ての力をかけて、自分の身体の何倍もある巨大な槍を両手で作り出した。

「があああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

絶叫しながら一誠に向かってドーナシークは槍を投げつけた。

そのあまりの大きさと込められた力により、槍の周りの建物や構造物が破壊されていく。

「らああああああああああああああああああああああああああああ!!」

その巨大な槍に向かって一誠は左拳で殴り付けた。

激突する槍と拳。その激突音は結界に包まれたこの空間そのものを揺るがす程に凄まじい。

ぶつかり合っている部分では紫電と火花が散り合っている。

そして勝ったのは……。

「俺の……勝ちだああああああああああああああああああああああっ!!」

一誠の咆吼と共に槍の穂先から石突きまで罅割れ、粉々に碎け散った。

その拳の威力は留まることをせず、そのままドーナシークの胸を直撃し、心臓を貫いて貫通。そのまま威力の余波で肉体が弾け飛んだ。

断末魔は上がらない。

声を上げる前に、ドーナシークは肉片へと変わってしまったのだから。

それを見終わった後、一誠は神器を解除する。

主を失った結界は徐々に解除されていき、人の気配が辺りから感じられるようになって来た。

「……………まあ、悪くはなかったよ、おっさん」

一誠はさつきまでドーナシークがいた所に向かってそう言うと、家に向かって帰り始めた。

8話 彼がいぬ間に

教会の地下にて、レイナーレ達はその反応に気付き驚愕した。

「なっ!? ドーナシークの反応が消えたわ!」

「マジっすか!? おっさんってかなり強いのに!」

「あれほどの使い手が消されるとは!」

彼女達が驚くのも無理は無い。

何せ墮天使を倒したのが神器を持っているとは言え、ただの人間にやられたというのだから。

余程強い神器出なければ有り得ない。

特にドーナシークの力はレイナーレの部下の内が一番強いのだ。

それがこうも易々とやられると誰が思おうか。

同胞をやられたことにカラワーナは怒りを顕わにする。

「墮天使を倒す人間だと? そのような存在、絶対に許せない。レイナーレ様、お願いします。私にドーナシークの仇を討たせていただきたい。人間如きに負けた奴の失態も許せた物ではありませんが、それ以上に同胞がやられたのに黙っていることなど私には出来ません。どうか、報復を」

怒るカラワーナに対し、ミッテルトは寧ろ引け気味であった。

「ウチは寧ろ、もうちょっかい出さない方がいいと思うんですけど。おっさんをやるくらいだし、下手に怒らせたらウチ等の方がピンチになるかも」

ミッテルトの反応にカラワーナは更に怒りで凄まじい形相をする。

その表情にミッテルトは若干怯えてしまった。

「貴様、それでも墮天使か! 下等な人間に同胞がやられたというのだぞ! それが許せたくないというのか、この腑抜けめ!」

「そ、そんなこと言っただけで」

騒ぎ立てるカラワーナとミッテルトに対し、レイナーレは静かに口を開いた。

「カラワーナ………報復は後回しよ!」

「なっ!? レイナーレ様まで!」

墮天使なら下等な人間にやられたなどという不名誉は絶対にあってはならない。

墮天使の名誉もためにも一誠は抹殺しなければいけないのに、それを後回しにするとレイナーレは言い出した。そのことがカラワーナには信じられなかった。

何よりも墮天使としての誇りを大切にしているレイナーレがそれを後回しにするというのだから。

「貴方が憤るのも良く分かるわ。だけど今は大事な作戦の前なのよ。下手に手を出してかき回されても困るし、それにドーナシークを倒す程の力の持ち主なのなら、貴方達が行っても無事では済まないわ。グレモリーと戦うかも知れない時に戦力が低下するのは好ましくない。だから、あの男に報復するのは例の作戦が終わった後よ。いい、報復は絶対にするわ。でも、その前に目的を果たすことの方が重要なの。だから……今は我慢なさい、カラワーナ」

「ぐっ……わ、わかりました」

レイナーレに説得され、カラワーナは仕方なく引き下がる。

感情ではまだ納得が出来ないカラワーナだが、確かに作戦が重要であることも分かっている。故に堪えることにした。

レイナーレはカラワーナが堪えてくれたことに少しホッとしつつ、座っていたソファから立ち上がり少し歩く。

その表情は憂いに満ちていた。

「人間如きに負けるなんて駄目な墮天使だったわね、ドーナシーク。でも、貴方の犠牲は無駄にはしないわ。必ずや、あの神器……『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』を手に入れ、貴方の仇は討つてあげる。だからそれまで見守っていて頂戴」

そう虚空に告げると、カラワーナとミッテルトに向き合うレイナーレ。

「二人とも、時は近いわ。近日中にアジアから抜き取るわよ」

「はいー!」

「はいー!」

レイナーレの顔には、凄惨な笑みが浮かべられていた。

彼女達は動き出す。欲望と悪意を持って、聖なる乙女を汚さんがために。

駒王学園の旧校舎、オカルト研究会の部室にて、リアス達は集まり会議を開いていた。会議の内容はここ最近の町での不穏な動きについてである。

リアスが部長として議題を上げる。

「ここ最近、町で妙に不穏な気配を感じるわ。明らかに余所者の、それも堕天使の気配がね。奴等はきつと何か企んでる。そうでなければグレモリーの管轄地に侵入してくる訳がないもの。奴等の目的が何なのか気になるのよ。下手をすれば戦争の火種になりかねない、だからこそ早めに対処したいの」

リアスの説明を聞いて眷属達は皆頷く。

現在、悪魔、堕天使、天使の三大勢力の戦争は小康状態に落ち着いている。

それは過去の大戦に於いて全陣営とも被害が甚大であり、継続不可能に陥ったからである。

あまりに酷すぎる被害に三勢力は他勢力を削るよりも自陣の安定に重きを置いた。

それが何百年と続き、現在の小康状態に至る。今の世代ではもうそれが当たり前であり、少なくとも徹底抗戦を唱える若手世代はいない。

皆、この平和な状態を望んでいるのだ。その平和をこの堕天使達は下手をすれば壊しかねない。だからこそ、リアスは早く対処することを望んだ。

何より、堕天使が自分の庭を彷徨っていることが我慢ならないのだ。

「皆、何か町で可笑しな物を見なかったかしら。何でもいいわ、些細なことでもいいの」

リアスの問いかけに対し、眷属の三人は全員手を上げた。

リアスはそれを見て笑みを深めると、自分の腹心とも言える親友の

名をまず呼んだ。

「朱乃、まず貴方から」

「はい、部長」

名指しされた姫島 朱乃は微笑みながら話し始めた。

「つい最近ですが、結界が張られた形跡がありました。力の残滓を感じるに、悪魔ではないかと思われます。たぶん部長の仰る墮天使かと」

「そう、確かに魔術に詳しい貴方が言うのならそうね。結界を張るような出来事があったということね」

リアスは朱乃から聞いた話について早速考え始める。

結界は文字通り、阻む物。人目を避けて何かをしていたということだ。

その話を聞いて、木場 祐斗が何か思うことがあったらしく手を上げた。

「祐斗、何かあるの？」

「はい部長。副部長の言っていた件ですが、実はそのことでご報告したいことが」

「いいわ、言いなさい」

「はい。実はその結界が張られていたとき、その場所付近に僕はいました。買い物途中だったのですが、僕が結界が張られていることに気付いたのは力ではなくて、音でしたけど」

「音？」

「ええ、音です。周りは何もない住宅街だったのに、まるで砲弾が炸裂したかのような大きな音が聞こえたんです。それで気になって辺りを調べて見た結果、こんな物が」

祐斗は懐から取り出した物をリアスに見せると、リアスは意味深い顔をした。

それは黒曜石のように黒い鳥の羽である。

「これは……墮天使の羽ね」

「そうです。それが分かったからこそ更に調べたら、僕はそこで見つけたんです……墮天使の死体を」

それを聞いたリアスの顔が驚きに染まった。

「墮天使の死体……ですって!? それは本当なの!」

「はい。たぶん……男の墮天使だと」

リアスに聞かれた祐斗はここで歯切れ悪く答えた。そのことがリアスには気になった。

「たぶんってどういうこと?」

「はい。実は……死体というより、もう肉片といった感じでしたので性別の判断がし辛い状態でしたので。見つけた腕の筋肉の付き方から男と判断しました。死体は見つかる和不味いので僕が処理しました」

それを聞いたリアスは更に思考を巡らせる。

二人の話を聞いた限りだと、墮天使が何者かと戦うために結界を張った。だが返り討ちに遭い死んだ。

つまり、この町に侵入した墮天使は自分達悪魔以外の何かと戦い敗れたということ。

それは墮天使を塵殺するくらい強力な力を持った存在だということ。

リアスが知る限り、そんな力を持った存在は一人しか知らない。

兵藤 一誠。

リアスが知る限り、上級悪魔に匹敵する程の力を持った……人間。

もしかしたら彼が戦ったのかもしれない。

すると彼が何故戦ったのかということになってくるのだが、結界を張ったのが墮天使である以上考えられるのは正当防衛といったところだろうか。それにしても過剰すぎではあるのだが。

そのことも気にはなってくるが、それは墮天使の目的とやらと少しずれて来ている気がする。あの力の一端を感じたリアス達だから分かるが、何かを企てるのに邪魔になりそうな存在だから消そうとしたと考えるのが普通だ。

となれば、そこから考えられるのは墮天使がこの町で何かを行おうとしていて、その障害になりそうな者を排除しようとした。そう答えが出る。

邪魔されたくないからの排除。悪魔にはばれないようコソコソと動き廻っているつもりなのに、一誠には普通に仕掛けてきた。そこから察するに、組織には見つかりたくないということ。

だが、ここからは流石に分からなくなる。材料が足らなすぎるのが原因だ。

だからこそ、少しでも情報を手に入れたいリアスは最後に塔城 小猫の意見を聞くことにした。

「小猫、貴方は何かあるかしら」

小猫はリアスに話しかけられると、あまり表情を動かさずに答えた。

「はい。私が知っていることがこの話を関係あるかはわかりませんが」

「何でもいいわ。些細なことでも良いの」

「では。この間、和菓子を買いにお店に行ったんですけど、お店の人から少し変わった話を聞きました」

「変わった話？」

リアスが神妙な顔を見ると、小猫も少し不思議そうに話す。

「何でも、その日にお店の人が見たそうです……シスターを」

「？ それはまた妙な話ね。この町に教会はないわ。正確には廃教会ならあるけど。本当にシスターだったの？」

「聞いた限りですが、そうかと」

教会が無い町にシスターというのは可笑しい話だ。

それもリアス達が管理している悪魔の管理地にシスターが来ると言うんだから、その異常性は計り知れない。

更に小猫は追加の情報を入れてきた。

「後、これは使い魔のシロから聞いた話ですが、公園で怪我をした子供の怪我を不思議な力で治した女性がいたそうです。服装はシスターの服だったそうで」

「不思議な力……治癒魔術か、もしくは……何かしらの効力を持った神器かしらね」

これらの情報を考えると、面白い事実が浮かび上がってくる。

リアスは子猫の話を統合して何となくだが分かってきたことがいくつかある。

墮天使とシスターが見られ始めたのは最近の話で、更にはシスターは神器持ちか何かしらの異能の力を持つていると思われること。

そのシスターが居ること自体が可笑しい。教会はとつくの昔廃墟とかしている。それに関しては悪魔側で警戒していることもあり、徹底しているはずなのだ。だというのに、教会にシスター。どうも臭って仕方がない。

それらを考えると、目的は分からないが、隠れ家くらいは憶測出来る。

つまり……墮天使の居場所。

リアスはそれに行き着き、不敵な笑みで皆を見回す。

「わかったわ。目的までは分からないけど、少なくとも居場所は判明したわ。墮天使はきつとその教会に居るはずよ。それさえわかればどうとでもなる。みんな、近日中に教会に出向いて捕まえるわよ！」

「はい！」

こうして墮天使、悪魔双方とも行動を決めて動き始めた。

片方は欲望のままに、もう片方はプライドを込めて。

両者が近日中にぶつかるのは……必然だろう。

9話 彼は助けることを決める

ドーナシックが敗れてから数日が経ち、悪魔と堕天使が双方行動を開始しようとする中、一誠は変わりなく過ごしていた。

相変わらずの金欠生活。だが、それを苦しくは感じてても後悔はしていない。

自分が決めた行動の結果の金欠。誰に言われたわけでも無い、自分の選択。

そこには自由があった。彼が愛する自由が。

そんな自由気ままな金欠生活を満喫している一誠の所に、急遽その話は来た。

その日の夜は昨夜と違い、分厚い雲で空が覆われており、月明かり一つ見えない闇夜であった。

ちよつとした用事で出掛けていた一誠が自宅に戻ると、扉の前にニヤリと笑う久遠が立っていた。

久遠の姿を見て、一誠は露骨に嫌そうな顔をする。

彼の経験上、久遠が夜に来て愉快そうに笑う時というのは、専ら碌な事が無い仕事を持ってきた時だ。

彼はそんな風に笑う久遠の所為で過去に何度も酷い目に遭っている。

今回もそんな類いが来たと思い、一誠はそんな表情をしてしまったのである。

そんな一誠を見て、久遠は苦笑を浮かべた。

「おいおい、そんなに嫌そうな顔すんなよ」

「お前がそんな顔をするときに持つてくる仕事つてのが碌でもねえもんばかりだからそんな面になんだろ」

「その分美味しいんだからいいだろ」

そう言われ、その事実に一誠は口を噤む。

確かに碌でもない目に遭うのだが、その分報酬も高額なのである。

それに助けられたことも一度や二度ではないため、こうして一誠は黙って仕事内容を聞くことにする。

「それで、今度は何なんだ？　また何処ぞの悪魔のペットの魔獣探し
か？　それとも使い魔の森で暴れ回ってるスライム退治か？　どつ
ちも二度とゴメンだぜ、俺は。ペットって聞いて行ってみりゃあ、コ
カトリスだったりして危うく石にされかけたり、あの気持ち悪いスラ
イム共を蒸発させるのには苦勞したんだからよお」

過去にあった事例を挙げることで文句を言う一誠。

だが、それでも仕事の話を聞くことに変わりないと分かっている久
遠はそのまま文句をスルーして話し始めた。

「今回はもつと単純でシンプルな奴だから安心しろよ」

「前回も似たような事言ってたよなあ。それで行って見たらオルトロ
スの群れに追いかけて回されたんだけどなあ、俺は」

顔は笑顔で、でも怒りのマークはぼつちり浮かべた顔をする一誠。

そんな一誠の精神状態を察してか、久遠は少し慌てて話を進めるこ
とにした。これ以上おちよくれば絶対に痛い目に遭うのがわかって
いるから。

「今回はそんなもんじゃねえよお。いいか、良く聞けよ」

そこで一端区切ると、久遠はニヤリと不敵な笑みを浮かべ話し始め
た。

「いいか、今回の依頼はな……何とっ！　墮天使の総督様からの依頼
だぜ！」

「総督？……って確かアザゼルとかいう墮天使だったよな？　墮天
使で一番偉いつて奴」

「そう、そいつだ。そんなお偉いさんからのお仕事、報酬は何と100
0万！　ここまで破格なのは久々だぜ、マジでよお」

「おいおい、マジかよ！　そいつは凄いな」

依頼報酬を聞いて驚く一誠。

そこまで高額な依頼は最近では殆ど無かったので、成功させればと
てつもない金が入る。

その金額を聞けば先程まで憂鬱だった気分も一瞬にして転じ、テン
ションも上がってくる。

「そうだろう！　そしてこの仕事の内容だが……とある墮天使を連れ

帰ってくることだ」

「とある堕天使？」

「ああ、何でもこの町に侵入して何かをしでかそうとしてるらしい。この町は悪魔の管轄だ。そんな場所で敵対勢力である堕天使が騒動を起こせば、最悪戦争になっちまう。それが総督さんは嫌なんだとさ。だから事を起こす前にふん捕まえて欲しいってさ」

それを聞いて一誠は特に難しくは考えない。

悪魔と堕天使の争いそのものに興味など無く、立ち塞がるなら誰であろうが何であろうが打ち砕くだけだからだ。それが一誠の基本的な考え方。

一誠の反応を見て久遠は特に問題無いと判断し、話を更に深く話す。

「それでこのグレモリーの姫さんの庭で悪さを働こうとしてるヤンチャな堕天使の名はレイナーレっていう女の堕天使だとき。そいつが部下三人を連れて潜伏中ってわけだ。ちなみに部下は男が一人に女が二人。名前は確か男がドーナシークで女二人がカラワーナとミッテルトって名前らしい。これ、レイナーレ達の写真な」

久遠はそう言いながら一誠に写真を渡した。

その写真を見て、一誠は顔を微かに顰める。

その表情を久遠は見逃さなかった。

「イツセー、何か知ってるって面だな」

「ん、ああ。このレイナーレとか言う女は知らねえが、ドーナシークってのは知ってるよ。この間殺り合った」

それを聞いた久遠は少し驚くと、額を軽く押さえ来た頭痛を堪えた。

今回の依頼、最低でも首謀者は確実に生け捕りにするよう言われている。その部下も出来れば生存が望ましいと頼まれているのだ。

久遠は結構軽い感じの人間だが、それでもこの仕事にはそれなりに真面目だ。依頼されたからには依頼人のリクエストには出来る限り答えたい。それなりにプライドもある。だからこそ、どんな仕事だろうとごり押しでこなせる一誠とタッグを組んでいるわけだ。だか

からこそ分かる。

一誠と戦った奴がどうなるのかを。

「なあ、イツセー……もしかして……」

久遠の苦しい問いに、一誠も気まずそうに顔を逸らしながら答えた。

「その……殺っちまった」

「ああ、もう！ お前って奴は……」

予想していた最悪の答えを聞いて額を押さえる久遠。

一誠は慌てて訳を話した。

「仕方ねえだろ！ 何せ向こうから来たんだからよお！ 向こうは戦う気満々だったんだからこつちだってそれには応えねえといけねえだろうが！」

その言い訳に久遠はキレた。

「ふつぎけんなよ、イツセーッ！ 普通そういうときは逃げるもんなんだよ！ 何勝手に戦ってんのかね、君は！ この脳筋男!!」

「んだとっ!! 毎回毎回碌でもねえ仕事ばかり持つてくるテメエにそんなこと言われたくねえよ！ この碌でなし！」

そして互いに額をぶつけ合い睨み合う。

毎度の如く、お互いに意見がぶつかればこうして主張を譲らない。

睨み合いはすれど、そこから先が平行線なのは今までの経験で分かっている二人は仕方なく離れると話を進めることにする。

「まあ、殺しちゃったもんを今更言っても仕方ない。依頼人は『出来れば』生かして捕まえろって言われただけだし、本命のレイナーレが生きてれば最低限は達成出来んだろ。どっちみち文句は言われるだろうけどなあ」

「どっちにしても戦うのは目に見えてたんだし、遅いか早いかの違いってやつだろ。本命が生きてりや文句はねえんだろ。だったらそれでいいじゃねえか」

そう言い聞かせることでお互い気を取り直す。

前向きと言えば聞こえは良いが、もはや過ぎた事は仕方ないという開き直りである。

久遠はそのことを自覚しつつも話す。

「それでこのお馬鹿御一行が企みて奴が、これまたヤバイもんなんだよ」

「どうせ毎回ヤバイもんばかりだろ。今更出し惜しみしてんじやねえよ」

「そう言うなよ、雰囲気つてのは大切なんだからなあ。まあいいか。それで奴等の目的は……ある神器らしい」

それを聞いた一誠は大体の予測が出来た。

この異形犇めく業界に入って良く耳にするのが神器の話である。なら、それを狙っているということがどういふことかも分かるようになる。

「つまりこういうことか？ そのお馬鹿御一行はこの町で神器を持つてる奴から抜き取る算段を付けてるってことだろ」

それを聞いて久遠が笑う。

「正解。連中、そのためにわざわざ外国から持つてる奴を騙して呼び寄せたらしい。何とまあ真剣なことだ。で、その哀れな子羊の持つてる神器つてのが凄いんだよ」

「どう凄いんだよ」

「ああ、何でもどんな傷でも治すつて言われてる神器らしい。それも天使や堕天使が使う光の力と違って悪魔でも癒やせるつて言う万能回復器つて奴だ。名は『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』つて言うらしい」

それを聞いて一誠は何となく納得した。

確かにそんな便利過ぎる道具があるというのなら、誰でも欲しがるだろう。

引く手数多の状態では狙われても仕方ない。

「それで、そんな哀れな神器所有者の名前が『アーシア・アルジェント』つて名前の綺麗な金髪をした少女だ。こりやまた随分な上物だな」

それを聞いた一誠はとあることに引かかった。

「なあ、久遠。そいつはアーシア・アルジェントつて奴で合ってるのか

？」

それは一誠が知っている心優しい少女なのかどうか。それを確かめるべく、一誠は久遠に話しかけた。

「お前が会ってるのかまでは知らないが、確かにご本人だろうよ。『聖女』、『癒やしの女神』、そして……『魔女』。全て彼女が呼ばれてきたらしい二つ名だ。アーシア・アルジェントの名は教会内でもかなり有名な話だぜ。悪魔をも癒す異端の魔女だってな。今じゃ教会を追放されてはぐれ神父ならぬはぐれシスターしてるよ」

久遠はそう言いながら一誠に持っていた写真を渡す。

その写真を見て一誠の予感確信へと変わった。

そして会った時の記憶を思い出し、そこからこの話への繋がりを見つける。

「成る程な……そういうことか」

「何か知ってるのか？」

思わせぶりな一誠の台詞に久遠が聞き返す。

一誠は何とも言えない顔で答えた。

「つい少し前に空腹でぶっ倒れてた時に助けて貰ったんだよ。今思えば普通じゃありえねえくらい天然入った奴だったよ」

「やっぱり会ってたのか。世の中は狭いって本当に感じるよ、俺は」

「まったくだ。それでその時にその子を教会まで案内したんだよ。何でも赴任するために海外から来たって言うからなあ。あの寂れた教会に」

ここまで言えば大体は分かるだろう。

久遠はその話を聞いて一誠に笑いかける。

「そこまでわかってんなら簡単だろ」

「そうだな。そのお馬鹿御一行はあそこの寂れた教会にいる。それで騙されたアーシアはそのままあそこで神器を抜き取られるってことだろ」

「正解。良く出来たなあ、一誠。花丸やろうか？」

「いらねえよ」

コレまでの話で、相手の目的、居場所が判明した。

なら、後はいつ仕掛けるかという話になる。しかも今回は時間制限付きとすることもあって少しばかり慎重にならなければならない。

一誠は久遠の顔を見ながら聞く。

「んで、いつ仕掛けるんだ？　アーシアが抜き取られた後じゃまずいだろう。出来ればすぐにでも仕掛けてえんだけだよ」

「あれ、随分と真面目じゃないか？　いつもならもつといい加減に聞き流して、実行となったら考えずに突っ込むのによ。もしかしてアーシアとやらの惚れたか？」

「馬鹿言え……助けられたお礼代わりに言ったんだよ。『困った事があつたら声をかけてくれ、そうしたら助けてやる』ってな。声が出せなくても明らかに助けなきやならねえだろ、そんな事態じゃなあ。約束したんだから、そいつは守らねえといけねえ。テメエが決めた約束はな」

若干真剣な眼差しでそう言う一誠に久遠は仕方ないといった顔をした。

「またお前の持論か。『自分で決めた約束は絶対に守る』だっけか。随分と律儀だねえ、イツセーくんはさ」

「うつせえ。取りあえずそう言うわけだ。そのレイナーレとかいう堕天使を伸してアーシアを助ける。それで文句はねえだろ」

「ま、俺としてもレイナーレが捕まえられればそれでいいから文句はねえよ。仕事がこなせば誰も文句は言わない。好きにしな」

「あいよ」

一誠は久遠の許可を得たことでやる気を更に出す。

まあ、許可されなくてもやる気ではいたのだが。

そんな一誠を見て久遠は深い笑みを浮かべながら最後の話をする。

「んじゃ仕掛けるのは明日の夜だ」

「何でだ？」

「ああいう儀式には月の満ち欠けとかが重要になってくるんだよ。明日は満月だからな。何よりも……俺の勘だ」

にたりと笑いながらそう言う久遠の言葉を聞いて、一誠は納得する。

「ここ一番で一番重要なのは知識よりも勘だってことを一誠と久遠は理解している。だからこそ、それを重要視する。」

「ああ、分かった。んじゃ、明日殴り込みだな」

「そういうことだ。白馬の王子様ヨロシクに颯爽と囚われの姫を助けて来い」

「うっせえよ！」

こうしてまた、一誠も動き出す。

この墮天使騒動もそろそろ終末へと向かっていた。

10話 彼は救出の狼煙を上げる。

月明かりが辺りを明るく照らし、草木のざわめきも虫の囁きも聞こえない静かな夜。

本来ならばあってもおかしくないはずの物が聞こえないというのは、得てして不気味としか言いようが無い。

そんな雰囲気の中、一誠と久遠は教会に向かって歩いて行く。

目的は此度の騒動の原因足る堕天使の捕縛。そして個人的には縁が出来た恩人の救出。

堕天使という人外との戦い。通常ではまず有り得ないであろう戦いが繰り広げられることが予想されるだろう。

だが、二人の足取りは軽い。

まるで気軽に散歩に行くような、近所の自販機でコーヒーを買いに行くかのように、その歩みに緊張は感じられなかった。

久遠はそんな足取りで一誠にこれから作戦について話す。

「さて、これからイツセーには例のお馬鹿さんをシバきに行つて貰うわけだが、何か質問はあるかね」

悪ふざけで偉そうな教師のような口調で一誠に話しかける久遠に、一誠は呆れ返つた目で返事を返した。

「どうせ聞きたいこともわかつてんだろ？」

「何だ、面白くねえなあ」

久遠は一誠がノつてこなかったことに若干不満そうにしつつ話し始める。

「例の教会だけど、調べてみたら地下があるんだよ。たぶんそこにお馬鹿はいる。当然お前さんの恩人つてのもなあ。んで、そこに至る最中にはそんな堕天使様を崇め奉るはぐれ神父共がわんさかいるつてわけだ。それと後の二人は外で警戒つて感じだな」

久遠の話を聞いて一誠は軽く頷く。

先ほどの話で敵の居場所と敵の規模については理解出来ただろう。

はぐれ神父だけでも三十人は超えると思われる。この戦力なら悪魔にだって負けはしないと思われる。

だが、それを聞いても一誠の顔に怯えはない。
寧ろつまらなそうな顔をしていた。

「そんなもんか。絶対につまんねえ仕事になりそうだ」
「普通なら絶望しそうなもんだが、お前さんにはそれでも退屈にしかならないってね。これからシバかれるお馬鹿さんが可哀想だよ、俺は」

そのまま二人で笑い合う。その様子はジョークを言い合って笑っている子供にしか見えない。これから強大な力を持つ人外を相手にするとはとても思えない光景であった。

「今までなら外の二人を叩いて、その上で教会に真っ正面から挑むつてのが俺達のやり方だが……今回は時間がないんでなあ。外の二人は相手にしなくていい」

久遠は笑いながらそう言うが、実際そうではすまない。

結界が張られているであろう教会の付近に近づけば、当然察知される。となれば戦わざる得なくなり、無視など出来るはずがない。

「それはつまり……お前が相手をするってことか？」

「まっさか、俺は自分でやるのは好きじゃねえよ。そういうのはお前さんの担当だろ。『お姫様と愉快的仲間達』にそいつ等は任せるよ。彼方さんも教会に向かっていているようだしなあ」

「ああ、そういうことか」

リアス達もこの件に付いて動いているらしい。

あちら側としても自分の敷地内に堕天使が忍び込んでいるのは我慢ならないらしい。

久遠の話を聞いて一誠はリアス達も教会に向かってきているのだと、何となく理解した。

だからこそ、リアス達に堕天使二名を押しつけることにしたのだ。押さえてくれるのなら問題無し。仮に殺されたところで時間稼ぎには充分だし、殺してしまっても一誠達に不利益はない。もう既に一人殺してしまっているのだから、それが後二人増えようとそこまでの問題にするようなことではない。

本丸さえ捕まえられればよいのだから。

もし邪魔するようなら……一誠は容赦せずに叩き潰すだけだ。
そのまま二人は笑いながら歩き続ける……教会に張られた感知
用の結界のすぐ側まで。

すると久遠が何かを感じ取ったらしく、ニヤリと笑みを深めた。
「どうやら予想通り、お姫様が張り切ってるらしい。早速戦い合っ
てようだけ」

それを聞いた一誠も顔の笑みをとり凄惨なものへと変えていく。
この知らせは二人にとって、作戦開始の合図と言っても過言ではな
い。

だからこそ、より楽しげに二人は笑う。

「イツセー、祭りが始まったんだ。なら、派手にかましてやれよ。ド派
手な花火をよ」

「ああ、そうだなー」

一誠は久遠に勢いよく答えると共に、左腕を胸元に構え自身の異能
を展開する。

「いつくぜえ！ ブウー……ステッド・ギアツ!!」

声と共に左腕に現れたのは赤き籠手。

三大勢力から畏れられた二天龍と呼ばれ龍の片割れの魂が封印さ
れている神滅具、『赤龍帝の籠手』である。

一誠は装着された籠手を確かめるように左手の人差し指から順に
握っていく、最後に親指を閉じて拳の握りを確かめる。

そして封印されしドラゴンの魂に向かって話しかけた。

「ドライグ、せっかくだから『3分の1』出すぞ。そいつでまずは花火
を上げてやる」

『相棒、それはいいのだが……それでも〈片腕〉なのか』

ドライグの言葉を聞いて一誠はニヤリと笑う。

「当たり前だ！ 『本気』はあの野郎と戦い合う時に取っておく。だか
ら、この程度なら片手一本だけで充分だ！」

『ここまで凶暴な宿主は初めてだ。だが、その思い切りの良さは心地
良い』

一誠はドライグにそう言われると共に左腕を高々と上に上げる。

Boost

ブーステッド・ギアから流れる人工的な音声により、一誠のその身に宿している力が二倍にされる。

その感覚に一誠は笑みを浮かべずにはいられない。

Explosion

籠手の音声と共に倍化された力が発現する。

その途端、一誠の身体が赤いオーラに包まれた。

ここで気を付けなければならないのは、コレが一誠の力をそのまま倍にしたというわけではないということ。

それまで何倍にもしてきた、あらゆる負荷の力をかけられた状態での倍化である。

つまりは本気ではないということ。

だが、それでも久々のちよつとした力の解放は一誠の気分を高揚させる。

[illegible]

その気分を表すかのように、一誠は握った左拳を地面に向かって叩き付けた。

激突した瞬間に辺りに轟音が響き渡った。

殴られた地面は罅割れ陥没し、まるで隕石が落下してきたかのよう
なクレーターを作り上げていた。

それ程の破壊を顕わにした一誠は、その反動を使って上空へと跳び上がっていた。

いつもよりも遙かに高い空へと。

跳び上がった高度はかなりのものであり、見回せば駒王町全体どころかその隣の町の全貌も見渡せるほどである。

そのまま反動の勢いが収まるまで跳び上がると、一誠は獣のような笑みを浮かべ、力を出せることによる歡喜の咆吼を上げながら地表にある教会に向かって落下し始めた。

「あああああああああああああああああああああッ!!」

その姿はまさに赤き流星。

落下速度に加え、一誠自身が身体から湧き出すドラゴンの赤きオーラを噴出させて推進剤にすることでとてつもない速度を叩き出している。

その速度は肉眼で捕らえることは難しく、またその威力を防ぐことは出来ない。

結界に感知されようが、それでも追いつかない速度で教会に突っ込めば結界など関係無いのだ。だからこそ、この突入方を選んだ。

赤き流星はそのまま落下を続け、堕天使が張っていた結界を紙のよう

に破り、そして教会を……………。

粉碎した。

そう、打ち崩したのでもなく、穴を開けたのでもない。

文字通り、教会という建物その物を破砕したのだ。

その衝撃で辺りの木々はへし折れ、まるで戦車砲が直撃したかのような有様になり、教会という建物は消滅してしまった。

そこにあるのは最早ただの瓦礫の山。

建物という概念はもう失われていた。

その破壊は地表だけに留まらず、久遠の言っていた地下のまで及び、地下室の大半を吹き飛ばした。

「なっ……………！」

レイナーレはその事態に言葉を失った。

突如感じた膨大な何かの力。魔力や光の力とは違う物だが、その密度は測り知れないほどに強大な力を。

それが此方に向かってくると判断した途端、咄嗟に自分と貼り付けにしているアーシアにできる限り強力な結界を張った。

それが張り終わると同時に、教会はその衝撃に激震し吹き飛んだ。

レイナーレはその衝撃に結界を張ったというのに吹き飛ばされ、

アーシアの十字架も根元から折れて吹き飛んだ。

身体中に走る痛みに顔を顰めながら起き上がったレイナーレが目

にしたのは、先程までの儀式の用意が終わった暗い地下室ではない。月明かりが当たりを煌々と照らす、瓦礫まみれの空間だった。

それまでであった怪しい空気など微塵もない、ただの抉れた空間がレイナーレの目の前には広がっていた。

防衛のために用意したはぐれ神父達は崩れてきた瓦礫の押し潰されたのだろう。誰一人として姿は見えなくなり、瓦礫から偶に滴る赤い液体が見え隠れしていた。

その悲惨な光景にレイナーレは言葉を失っていた。

アーシアは絶望に打ち拉がれていた。

信じていた者達に騙され裏切られたことに。

教会を追放された身でも、神への信仰を忘れたことはない。それは墮天使に教会に誘われたときも変わらなかった。

彼女は心優しい子だ。墮天使が何故墮天したのかも、きっと訳があったのだろうと思い、神への信仰を忘れてはいないと疑っていなかった。出なければ、神の力足る光の力を使うことは出来ないから。だが、そうではなかった。

墮天使は悪意を持ってアーシアに近づき、騙し、こうして彼女は十字架に貼り付けにされた。それでも、彼女は信じたかった……レイナーレ達のことを。

しかし、レイナーレはそんな彼女の心を嘲笑う。

騙していたことを教え、如何に彼女が愚かなのかを語り、どうしてこうなっているのかを嬉々としてアーシアに語った。

それを聞いて彼女は絶望と悲しみに包まれた。

騙されていたことにも、自分が愚かだということにも、そして何より、神を信じられなくなってきた自分。

いつも……いつも同じように頑張ってきた。神への信仰を忘れず、常に努力しようと。さすれば必ず報われると。

それが心の支えになっていた。神は皆を愛しておられ、必ず見て下さると。

だから辛いことがあっても、これは神が与えた試練だと受け止めて

きた。彼女の信仰が試されているのだと。

だが……もう限界だった。

幾度となくそう思うことで心を騙しながら頑張ってきたが、それでも神は応えてくれない。

もう………つらいだけだった。

それをレイナーレに指摘され、彼女は涙を流し続けていた。

信じようとする心と、信じても応えてはくれない神への不信感に。そんな彼女の心は、最後に助けて貰った人物のことを思い出していた。

最初にこの町に来て、迷子になっていたアーシアを助けてくれた少年のことを。

そして少年が別れ際に言っていたことを思い出す。

『あんたが困ったときは声をかけてくれ。助けてやるからさ』

その言葉の暖かみを感じながら、最後の言葉になるだろうと思いの少年の名をアーシアは呟いた。

「……イツセーサン……」

その名を呟いたと共に、彼女は唐突に來た衝撃で吹き飛ばされた。

一誠は瓦礫に突き刺さっている左腕を引き抜きながら辺りを見回す。

派手に壊した教会の様子を見て、それなりに派手にやったことを自覚して満足そうに笑う。

そしてたぶん無事であろう堕天使とアーシアを探すと、端の方で十字架に吊されているアーシアを見つけた。

アーシアは一誠と目が合うと、口をパクパクと開き驚愕しているようだ。

その様子に無事な事を察した一誠は、その場に不釣り合いな軽い口調でアーシアに話しかける。

「よ、久しぶりだな。あんた、困ってそうだから助けてやるよ。飯の礼だ」

「ア………ア、ア………」

一誠の言葉を聞いて緊張の糸が切れたアーシアは、言葉を発しようとするも上手く口が動かない。

だが、それでも、目の前に現れた一誠の名を彼女は呼んだ。

「イツセーサン!!」

「あいよ」

アーシアの叫びに一誠は不敵な笑みで応えようと、起き上がりつつあるレイナーレを見つけた。

「あんたがここでやらかそうとしてる堕天使か？」

その言葉を聞いてレイナーレは一誠を睨み付ける。

無様な姿を見られたこともそうだが、変身していたとは言え一度会っているはずなのに覚えていないということが彼女自身許せなかったのだ。

それほど自分の存在は薄いのかと。

「だ、だったらどうだっていうのよ!」

怒りをぶつけるレイナーレに、一誠はアーシアに向けていたのとは違う凄惨な笑みを浮かべた。

「だったらよかった。テメエのこのトップからの依頼でな。馬鹿をやる前に踏ん捕まえて来いつてよお。だから大人しく捕まってくれば面倒がなくていい。まあ、暴れてもいいがよ。そんな時は……」

そこで一端言葉を切ると、一誠の身体から赤きドラゴンのオーラが噴き出した。

その力は地面の瓦礫を易々と吹き飛ばす。

「容赦なく叩き潰させて貰う!」

教会の崩壊跡地にて、一誠の声が大地を震わせた。

11話 彼は叩き潰す。

依頼のため、もつとも効率が良い突入方法……高々度からの突入によつて教会その物を粉碎した一誠。

仮にも目的対象を殺すなど言われているのに、それをまったく考えていないかのようなこの方法に誰もが正気を疑うだろう。

何も脳筋で考え無しにこのようなことをしたわけではない。

寧ろちゃんと考えての行動である。

久遠からの情報の通りだとすれば、正攻法で真つ正面からはぐれ神父の集団と戦わなければならない。別にはぐれ神父の百人、二百人など一誠にとつて相手にもならないが、面倒だし何よりもつまらない。

一誠自身より強い者と戦いたいと望んでいる所があり、明らかに弱いにはぐれ神父とは戦う気にならないのだ。

つまり相手にしてやるだけ時間の無駄なのである。

なので相手になどせず、とつと目標対象であるレイナーレを叩きに行きたい所だが、そうはいかないのが普通。何より、そんなそくさとした行動など一誠の好むところではない。

ならどうするか？

全てを一遍に叩いてしまえばよい。

はぐれ神父は悪魔と戦うため、その身体能力は凄まじい。

だが、それでも所詮は人間。崩落した建物の重みに耐えられる程頑丈ではない。

故に教会その物の瓦礫で押し潰した。

それなら中にいる目標対象であるレイナーレとアーシアも無事では済まないと判断するのが普通だが、そこについても考えてはある。

墮天使というのは人間よりも上位の存在だと言われている。

少なくとも、本人達はそうだと言つて憚らない。

それは誇張でなく、身体的能力や特殊の力の全てが人間よりも断然上なのである。

なら、人間が押し潰されてしぬ程度の攻撃如きで死ぬわけがない。それで死んだのなら、とつくに現代兵器で人間に負けているはずだか

ら。

そしてアジアが無事だというのも、ある程度の予想はしていた。仮にも今回の儀式において最重要人物。奪い取る前に死なれては手に入れることが出来ないのだから、守るのは当然のことだろう。

それらを何となくで分かっているからこそ、一誠はこの突入方を行った。

学園での成績は極端に悪いが、こういう時だけはそれなりに頭が回るのである。

そして現在、一誠の目論見通りに事は進み、レイナーレと一誠は対峙していた。

吹き荒れるはドラゴンのオーラ。

それにより一誠の周りの瓦礫は吹き飛ばされていく。

「で、あんたはどうする？」

一誠が口の端つり上げながら笑い問いかける。

口調は軽いというのに、その身に纏う雰囲気からはとてつもない重圧を感じさせる。

その重圧に吞まれかけ、レイナーレは若干後ろに引きつつも気丈に答えた。

「どうするですって？ 決まってるじゃない！ あんたを倒してその小娘から神器を抜き取るだけよ！」

レイナーレは当初の予定通りにそう答える。

それを聞いて一誠は呆れ返った声を上げた。

「おいおい。聞いてたのかよ？ 俺はテメエ等のトップから依頼を受けたんだぜ。あんたが馬鹿やる前に捕まえろって。上からのご命令に逆らうのか？」

「くっ……そ、そんなこと、貴方の嘘よ！ 証明なんて出来ないでしょ！ 私は信じないわ！」

そう言い放ち、レイナーレは交戦の意思を顕わにして手から光の槍を出現させた。それを見て一誠の笑みは更に深まる。

一誠としてはこんなつまらない仕事をさせられたのだから、やはり暴れたりないのだ。

「OK、いいぜ。来な…………叩き潰してやるよ!」

「やああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

レイナーレは一誠の言葉を皮切りに光の槍を構えて投げつけた。

それはドーナシークよりも細い槍。だが、そこに込められた力はドーナシークの比ではない。

それが途轍もない速度で一誠に向かって投げつけられたのだ。

「イツセーサンッ!!」

その攻撃に見ていたアーシアは悲鳴を上げた。

堕天使の攻撃に普通の人間が耐えられるわけがないのだから。

だが、一誠はただの人間ではない。

アーシアはそのことに急なことで気付かなかったのだ。

普通に考えれば気付くはずのことなのに。普通の人間が教会を単身で崩壊させる力など持つわけがないのに。

それほどアーシアの精神が追い詰められていたということなのだが。

一誠はその槍を防ぐことはしなかった。

光の槍はそのまま突き進み、一誠の身体に触れる直前、赤いオーラによって砂塵の如く霧散する。

「なっ!? 何で人間如きに私の槍がつ!」

レイナーレの顔が驚愕に染まる。

そんなことが出来るのは上級の悪魔か天使、堕天使しかありえない。

それをたかが神器を持っている人間にやられたのだ。驚かない方が無理というものである。

だが、それを認めたら彼女の中にある堕天使としてのプライドが貶された事になってしまう。それをレイナーレは認める訳にはいかなかった。

それを察してなのか、一誠はレイナーレに向かって嗤う。

その顔を見た瞬間、レイナーレは掌に汗を掻き始め、無意識に足を引いていた事に気が付いた。

それが癪に障り、レイナーレは更に力を込めて光の槍を作り出した。

「認めない！ たかが人間如きにこの墮天使が怖じ気付くなど!!」

そのまま槍を何本も一誠に投げつける。

それはまるで雹の如く、一誠に向かって降りかかる。

普通の人間なら肉片一つ残らないであろう怒濤の攻撃。

アーシアは今度こそ駄目だと思った。

その攻撃は一誠を捕らえ、その余波は周りの瓦礫を粉碎していく。

立ち籠めた土煙が教会跡を覆い、視界を悪くなる。

レイナーレはそれでも対象が消えていないと判断し、上空に跳び上がって更に槍の雨を降らせる。

その力は更に連鎖的な破壊を生み出し、一誠が居たであろう場所を爆発させ続ける。

アーシアには一応の結界を張ってあるので無事ではあるだろう。だが、それでもどうなっているのか分からない。

それぐらいの過剰攻撃が繰り広げられていた。

「はあ、はあ、はあ………」

土煙が更に立ち籠める教会跡の上空でレイナーレは息を切らせる。

自身が感じた『恐怖』を誤魔化すために、過剰とも言える攻撃をしてしまったことに内心で苛つきつつ。

だが、これでもう終わりだろう。

この攻撃を受けて無事で済む者などいない。それだけの自負はある攻撃であった。

上級の墮天使や悪魔が相手でも手傷を負わせるには充分な威力である。

だが、その自身にとって全力と言っても良い攻撃は次の瞬間に絶望へと変わった。

立ち籠めた土煙が一瞬にして吹き飛んだのだ。

まるで内側から爆発したかの如く。

そしてその爆心地とでも言うべき所には、赤きオーラを纏った一誠が地面に拳を突き刺していた。

その身体には傷一つ見当たらない。

「中々の攻撃だったが……こんなもんかよ。これだったら、あんたの部下のおっさんの最後の攻撃の方が強かったぜ」

一誠はそうレイナーレに向かって言うと、突き刺さっていた左拳を引き抜く。

何てことはない。ただ、拳圧で辺りに立ち籠めていた土煙を吹き飛ばしただけである。

そのまま一誠はのりくらりと言った感じに動き出す。

それは一件のんびりとした様子だが、その実際というものが全くない。

レイナーレはその様子に心の奥底から恐怖を感じた。

目の前にいる『コレ』はなんなのかと。

神器を使っている。なら、神器持ちだ。

神器を持てるのは最初は人間。その後抜き取れば他の種族でも使える。だが、目の前の男からはそういった他の種族の気配を感じない。気配そのものは人間だ。

なら、目の前で不敵に笑う『コレ』は人間か？

否……レイナーレはそうは考えられなかった。

墮天使の全力の攻撃を受けて無事な人間がいるだろうか？ 否である。

少なくともレイナーレの知る限り、そんな人間は存在しない。神器を持つていようともである。

逆に言えば……墮天使の全開の攻撃を受けて平然としている存在が人間であるはずがない。

つまり、目の前にいるのは……人間の形をした『化け物』だと。

そう考え、そして認めそうになってしまった。

それが更に屈辱感をレイナーレに与える。

人間相手に何を怖じ気付いているのかと。自分は人間なんかより遙かに高位な墮天使のだと、プライドが心を震え立たせようとする。

だが、それに反して身体は直ぐにでも逃げたいと震え上がっている。

た。

心と体で反する矛盾。

それがさらにレイナーレの恐怖心を煽っていく。

「何なのよ！ アンタは一体何なのよ!!」

その矛盾の苛立ちをぶつけるかのように、レイナーレは一誠に向かって槍を投げつける。

それは今までで一番の殺傷能力を持った槍だろうと、彼女自身無意識に思った。

人に当たれば塵一つ残らぬであろう高威力の光の槍。

それは槍とは最早言えない。圧倒的なエネルギーの籠もった柱のようにしか見えないであろう。

槍はそのまま一誠に向かって突き進む。行く先々にある瓦礫はその余波だけで消滅していく。

一誠はその槍を見て……………笑った。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおお!!」

身体を捻ると共に、獣が如き咆吼を上げながら左拳を思いっきり振るう。

そして激突する槍と拳。

両者は拮抗し合い、紫電を散らす。

その余波だけで激突した両者の周りにあった瓦礫は粉碎され灰燼と化していく。

それは誰も介入することを許さない領域。

それは永遠に続くかと思う程長引く。

だが、その状況が一変するのは一瞬であった。

「らあああああああああああああああああああああああ
あああああ!!」

一誠の咆吼と共に、光の槍が激突している先から霧散していく。

そのまま突進する一誠。その拳はレイナーレの渾身の槍を内側から粉碎していく。

そして遂に……………槍は破壊された。

「ひっ!？」

破壊され光の粒子へと変わっていく槍。

その中を突き進む獣のような笑みを浮かべた一誠を見て、レイナーレは恐怖し声をひくつかせる。

一誠は突進の勢いの拳を更に振るい、その拳は恐怖に顔を凍り付かせるレイナーレの腹へと吸い込まれた。

次の瞬間……………。

この場では聞いたことがない音が轟く。

それはまるでトラックが人を撥ね飛ばし、人が弾けたような音。

硬い何かがへし折れ砕ける音と共に、肉の潰れる音が聞く者の脳髓にこびりつく。

それは聞く者全てに嫌悪を抱かせる音であった。

その音の発生源、レイナーレの身体はくの字に曲がっていた。

「ッ!? ぐぼっ…」

女性ならば誰もが望むであろうきゅっとくびれたお腹。そこに一誠の赤き左拳が深々とめり込んでいた。

その激痛にレイナーレは悲鳴が上がりそうになるが、先にこみ上げてきた血が口内や胃を満たして漏れ出し、声を上げることが許さない。

一誠はレイナーレの内臓が破裂した感触を感じながらそのまま拳を振り抜く。

レイナーレはそのままに吹き飛ばされ、少し離れた瓦礫の山に突っ込んだ。

「げほっ、ぐぼっ」

瓦礫に深くめり込んだレイナーレはその場で吐血し咳き込む。

その顔は青ざめており、血の所為で呼吸も間もならない。

そんな状態のレイナーレに一誠は歩いて行く。ゆつくりと、確実に。

「さつきに比べりやあ格段にマシな攻撃だったぜ。だが、こんなじゃ……………まだまだ足りねえなあっ!!」

レイナーレの攻撃はやっと破壊の獣を起こすに足りたらしい。

一誠は力を振るえることに歓喜して咆吼を上げると、左拳を地面に叩き付けて反動でレイナーレに向かって飛びかかる。

「っ!」

レイナーレはその姿に咳き込みながらも恐怖し、防ごうと咄嗟に防御結界を張る。

中級墮天使の防御結界。人間は勿論、中級悪魔でも破るのは難しい。

だが、一誠は気にせずに結界ごと殴り付けた。

「そんなもんで防げると思うなよっ!」

「ぐううううううううううううううう!!」

一誠の拳と結界の間で紫電が走り火花が散る。

だが、その拮抗は即座に失われた。

「こんなもんで引いてられるかああああああああああああああああああああ!!」

「がああああああああああああああああああ!! ぐぼっ!」

一誠のgori押しによつて、レイナーレの身体は結界ごと押し込まれた。

その拳の圧力によつて瓦礫にさらにめり込むレイナーレ。

結界をなんとか維持はしているが、一誠の拳の威力を押さえることは全く出来ていなかった。

突き出した両腕の骨はへし折れ、腕から飛び出してあらぬ方向に曲がっている。

身体は瓦礫に更にめり込み、内臓を圧迫し身体中の骨を軋ませる。

それにより更に咯血するレイナーレ。

美しい美貌は今や真っ赤な血で覆われた物へと変わっていた。

レイナーレの心は、この一撃で完璧に粉碎された。

もう誇りがどうのこうのではない。目の前の化け物には絶対に勝てないと、魂が理解してしまっていた。『聖母の微笑』があれば勝てるなどと踏んだ自分が愚かだったのだと。

いくら傷が治せようが、この化け物相手に戦って治している余裕などあるはずがない。

レイナーレは激痛で遠のきかける意識の中、もう逃亡する以外のことは考えられなくなっていた。

「い、いやああああああああああああああああああああああああ!!」

悲鳴を上げると共に翼を広げて上空に飛び出すレイナーレ。

激痛に悶え苦しみそうになるが、それでも目の前の化け物への恐怖から逃れたくて必死に飛び上がった。

そのままレイナーレは逃げだそうとする。相手は空を飛べないと考えれば、このまま上空から手の届かない距離で攻撃すれば良いと普通は考える。

だが、レイナーレの前にいる者は普通ではない。何があるか分からない以上、その考えでは甘いのだ。その事をレイナーレは本能で察した。

それは確かに正解だろう。だが、それでも…………。

兵藤 一誠は規格外だった。

「おいおい、逃げんじやねえよ。まだ始まったばかりなんだからよお！」

一誠はそうレイナーレに話しかけると共に、左腕を地面に叩き付けた。

その途端、途轍もない轟音が轟き、レイナーレのいる上空に一誠が飛び出してきた。

それはまるで砲弾のように、通常では有り得ない速度を叩き出してレイナーレとの間の距離を零にした。

「逃がさねえよっ!!」

一誠はそのままレイナーレの背後に回り込むと、飛行の要である二対の翼を掴んだ。

そして背中に足をかけると共に思いっきり力をかけて……………その翼を引き千切った。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああつつつつつつつつつつつつつつつつつ!!」

激痛に声にならない叫びを上げながら地面に向かって落下するレ

イナール。

そのまま瓦礫の山へと落下し、瓦礫を吹き飛ばした。

「あ、あが……がぎ………」

地面への落下と翼をもがれた激痛により言葉が出なくなるレイナール。

もう瀕死間近といった様子で、元の美貌は失われて見る影もなくなっていた。

一誠は余裕で着地すると、レイナールに向かって歩き出す。

それはただ歩いているだけなのに、見る者によつては死神の足音にしか聞こえない。

レイナールは血と吐瀉物と涙に汚れた顔で一誠に顔を向ける。

そこにあるのは怯えのみ。すでに彼女の心は砕けてしまっていた。

「た、助けて………も、もう、暴れないわ！ 大人しくする。もしここで助けてくれるんだったら……げほ………あなたに私を好きにさせた方がいいわ！ この美貌を好きなように犯せるのよ、 だから……」

近づいてくる一誠に命乞いをするレイナール。

その姿は最早誇り高き墮天使ではない。ただの恐怖し怯えきった女である。

だが、一誠は歩みを止めない。

寧ろそれ以上に歩みを早めた。

そしてドラゴンのオーラが一斉に噴き出す。それは一誠の怒りを表しているかのようだ。

「ひっ!？」

その噴き上がったオーラの巨大さにレイナールは言葉を飲み込んだ。

一誠はそんな怯えきったレイナールにつまらなさそうな声で話しかけた。

「おいおい………ここでそんなつまんねえこと言うなよ。あんたの部下のおっさんは泣き言一つ零さなかったぜ。それを上司のあんたがこんなんじゃない……駄目だろ。つけろよ………けじめって奴をよおっ!!!」

一誠は左拳を思いっきり振りかぶると、レイナールの顔に向かって

振り落とした。

「ぐきやつ」

その拳はレイナーレが悲鳴を上げる前に顔にめり込み、身体その物を吹き飛ばして回転させ、顔面を地面で何度もバウンドさせる。

殴り飛ばされたレイナーレはその身を外に生えていた大樹に激突させ、大樹をへし折った所で停止した。

意識はなく、目は瞳孔が開いていた。両腕は既に腕として機能しておらず、青黒く腫れ上がり飛び出した骨からの出血が止まらない。

腹は完璧に拳の形に陥没しており、内臓が潰されたことが良く分かる。

翼は根元から引き千切られており、骨と肉が丸見えであった。

そして顔は血と汚物にまみれ、右頬の骨が砕かれて原型がなくなるほど腫れ上がっていた。

既に死に体。人間なら死んでいるであろう大怪我である。

だが、そこは堕天使。まだ辛うじて生きていた。

そんなレイナーレを見て一誠は呟く。

「結局……こいつもつまんなかったな……」

その言葉は風に乗って聞こえなくなり、それを聞く者は誰もいなかった。

こうして、この駒王町で起こった騒動の大本であるレイナーレは倒された。

12話 彼は帰る

レイナーレを文字通り『半殺し』にした一誠は、オーラこそ押さえはしたが依然籠手を展開したままであった。

理由は単純……まだ戦いの気配を感じるからだ。

本能的に感じる生と死の臭い。それが一誠の本能を刺激する。

別にもう戦う相手はいない。もしかしたらさつきまでの戦いの余韻がそう感じさせるのかも知れない。

だが、それでも一誠はそれを感じて最低限の警戒は解かないでいた。

そのままレイナーレに目を向けると、辛うじて呼吸をしていることが分かり取りあえずは依頼内容に応えられたことに安堵する一誠。

つついテンションの上がり下がりが激しかったため、力加減が上手く出来ず殺してしまわないのか心配だったが、どうにかなったらしい。

レイナーレの意識が戻りそうにないのを見て確認すると、一誠はそのままアシアのいる所へと歩き始めた。

十字架に貼り付けられたアシアは一誠とレイナーレの戦闘の余波で吹き飛ばされ、教会跡の瓦礫から少し離れた所まで飛ばされていた。

普通の人間だったら大怪我をしてもおかしくないが、その前に張っていたレイナーレの結界で怪我をせずに済んだようだ。

御蔭で怪我もなく無事なアシアであったが、それでも貫通してきた余波によって気を失ってしまい、こうして今も尚十字架にくくりつけられたままであった。

「おい、大丈夫かよ、あんた」

気を失っているアシアに一誠はいつもと変わらない声をかける。そこには先程まであった荒々しさはまったくくない。平常時の情けない駄目な一誠の声であった。

アシアはそんな一誠の声を聞いて目を覚ました。

「ん……ア、アレ……ワタシ……アッ!? イッサーサン!!」

目覚めると共につい先程の光景を思い出して慌てるアーシア。
そんなアーシアに一誠は再び平常時の声をかける。

「よ、おはようさん。良い夢見れたかよ」

「ア、アノ、ダイジョウブ、デスカ！ サツキ、ヤリ、イッパイー」
「ああ？……ああ、さっきのアレか。あんなモンでやられる程俺は弱くねえよ」

一誠はそう答えながらアーシアに近づき、十字架に縛り付けていた縄を解く。

十字架から解放されたアーシアはそれまで感じていた恐怖と緊張から力なく地面にペタンと座り込んでしまった。

年頃の、何の修羅場も潜ったことのない少女がこんな目に遭えば当然の反応である。

アーシアはそのまま安心して泣き始めてしまう。

自分が無事だったこともそうだが、それ以上に一誠が無事であるということに。

彼女は善良な人間だ。自分よりも他人を心配してしまう。だからこそ、心優しく美しい。

アーシアは二つの安堵に心を満たし、涙を流しながらも喜ぶ。

「ヨカッタデス。イツセーサン、ブジデ……」

その様子を見て一誠は気まずそうに頬を掻く。

「泣くことはねえだろ、たく……」

まさか泣き始めるとは予想していなかったので、何とも気まずくて仕方がない。

年頃の少女に泣き出されてしまい、一誠は内心どうして良いか分からなかった。

孤児院の弟や妹達を泣き止ませるのにも酷く苦勞していた一誠に、年頃の少女を泣き止ます術などあるはずがない。

だからこそ、ただ見ていることしか出来なかった。

アーシアはそんな一誠に恥ずかしながらもどこか暖かい気持ちを感ずる。

まるで父親や兄に見守られているような、そんな気持ちに。

だが、その割にドキドキと高鳴っている鼓動は父や兄に向けられるものではない。

その感情がなんなのか？ それに彼女が気付くのは少ししてからのことである。

アーシアはそんな初めての気持ちを抱きつつ、少しずつ泣き止んでいく。

涙が止まり、何とか見える様になってきた目は一誠の左腕に吸い込まれるように向いた。

普通とは違う、真つ赤な籠手。そしてその籠手から感じる圧倒的存在感。

それが普通の物ではないことは、アーシアが持っているモノと同じ感じから理解出来た。

「ア、アノ、イツセーサン……ソノ、ヒダリテ……」

「ん？ ああ、こいつか。こいつはお前が持つてるモンと同じだよ。神器って奴」

一誠は泣き止んでくれたことに胸を撫で降ろしつつそう答えると、アーシアは笑顔になった。

それは自分と同じ存在に出会えたことによる喜び。

心細かったアーシアにとって、この上ない支えとなった。

「イツセーサン、ワタシ、オナジ……」

「ま、そういうことだ。こいつであの堕天使をぶっ飛ばしたってわけだ。あんなもん、屁でもねえよ」

泣き止んだことで多少気が楽になった一誠はアーシアに向かって多少巫山戯るようにそう言うと、アーシアはそれが可笑しかったのかクスクスと笑い始めた。

これは一誠が持つ唯一の慰め方。孤児院の弟や妹達に使ってきた方法だ。

そのためか、最近生意気盛りになりつつある弟から『一誠兄ちゃんって不器用だなあ』と言われてるのは一誠の少ない悩みのタネである。

籠手を出している以上警戒こそ解いてはいないが、二人の雰囲気は

穏やかなものとなっていた。

そんな二人に第三者は声をかけ辛そうにしていたが、流石にこのままでは事態が進まないと思い行動に移した。

「良い雰囲気の良い所悪いね、お二人さん」

「キャッ!?!」

急に知らない声に話しかけられ驚くアーシア。

そんなアーシアとは違い、分かっていたかのように一誠は声がした方に顔を向けた。

「おい、何が良い雰囲気だよ。随分と遅かったじゃねえか……久遠」

呆れ返った一誠に久遠はいつもと変わらない笑顔を浮かべる。

「そう言うなよ。お前が暴れてる所なんて危なすぎて近づけねえんだからよ。安全が確認出来るまで近づきたくねえ」

そう一誠に言うなり、久遠はアーシアの方に視線を向けた。

アーシアは見知らぬ男に見られ、咄嗟に一誠の背に隠れてしまう。

「あんたがアーシア・アルジェントか。写真で見るより断然可愛いねえ」

まるでナンパをする若者のように話しかける久遠にアーシアは一誠に助けを求めるかのように問う。

「イツセーサン、コノヒトハ……」

「こいつか？ こいつは久遠って言うんだ」

一誠は面倒臭そうに久遠のことを簡潔にそう答えると、久遠はニツコリと笑顔を浮かべてアーシアに自己紹介を始めた。

「どうも初めまして。俺の名は久遠、下の名前はないただの久遠だよ。そんでもってそこの一誠の大親友さ」

「ふざけんな！ 誰が大親友だ、誰が！」

久遠の自己紹介に一誠が即座に突っ込む。

目の前の男に大親友などと言われた瞬間、怖気だったのは言うまでもない。

一誠にとって久遠はそんな相手ではないのだ。

「こいつはただの腐れ縁だ。仕事の窓口、良く連むだけだ」

「まったく、一誠くんだったらっ照れちゃって！」

否定する一誠を茶化す久遠。

それに一誠は我慢が出来なかったのか、左手を軽く握り久遠に見せつけるようにした。

「おい、殴んぞ」

「おつとそいつは勘弁だ。お前に殴られたら大怪我じゃすまねえからな」

流石にやり過ぎたと判断いたようで、久遠は両手を挙げて後ろに下がる。

アーシアには二人のやり取りが本当に楽しそうに見えて、彼女が心から望んでいた友人というのはこんな感じなのだろうと思った。

彼女から見て、二人はまさに親友に見えた。

久遠は一誠相手に軽く巫山戯た後、改めて一誠に顔を向ける。

「それで……依頼対象は何処行つたよ。お前のことだから殺してはいないと思うけどよ」

一誠は久遠に返事を返す代わりに左手の親指を突き立てて久遠の後ろを示す。

久遠は示された方向に振り返ると、瓦礫に突き刺さっているレイナーレの見るも無惨な姿を見つけた。

それを見て額を押さえる久遠。

それは無残な姿を見たからではあるが残酷さから目を背けたいからではない。

「おいおい、もう死にかけじえねえか。何やり過ぎてるんだよ、一誠。下手すりゃ依頼が失敗しただろうが。」

「別に半殺しにしちやいけねえとは言われてねえだろ。寧ろこの程度に抑える方が大変だったんだから文句言うんじゃねえよ」

呆れ返る久遠に一誠は面倒臭そうに答える。

依頼は生け捕りにしてこい、と言うことなので半殺しにしても問題ではない。だが、それで死んでしまつては元も子もない。

久遠は少し悩んだ後に、アーシアに向かって話しかけた。

「悪いんだけどアーシアちゃん。お前さんの神器でこのぼろ切れ、治してくれないか？ このままじゃ死んじまうんだよ。そうなる俺

等は非情に困っちゃうんだ。だから……お願い」

久遠は手を前に出して拝むようにアーシアにお願いする。

その様子から本当に困っていることが窺え、善人であるアーシアはその願いに心良く応じた。

「ハイ、ワカリマシター！」

そしてアーシアは虫の息のレイナーレを見て、あまりの酷さに息を飲みつつも両手をレイナーレに翳し神器を展開する。

両手の中指に出現した指輪から暖かで幻想的な光が発せられると、光に照らされていたレイナーレの傷が再生されていく。

その様子を見た一誠は特に顔を変えることはなかったが、久遠はやるじやんと感心していた。

そして瀕死状態だったレイナーレはアーシアの御蔭で戦う前の状態まで戻る。

その後に意識を取り戻す前に久遠がレイナーレに近付き手を翳すと、レイナーレの身体を光が包み込み拘束した。

何らかの術を使ったのだろうが、そこに感じる力は魔力や光の力とは違う異質の物であった。それを感じ取りはしたが、アーシアは特に聞こうとはしなかった。

「よし、これで動けねえだろ。ありがとよ、アーシアちゃん。御蔭で依頼人に怒られずに済みそうだ」

「イエ、ソシナ……ワタシ、デキルコト、シタダケデスカラ」

久遠は一人満足すると、アーシアに向かって礼を言う。

それを聞いて慌てるアーシア。謙虚さが大いに出ており、見ている者を和ませる光景であった。

アーシアは助けてくれた一誠と久遠への感謝を神へと捧げようと手を前に組み目を閉じた。

だが、一誠は神への感謝言う前にそれを止めさせる。

「やめとけよ、祈りなんてな」

「エッ……ナンデ……」

祈りを止められたことにアーシアは目を丸くするが、一誠は気にせずアーシアに言う。

「感謝してんのは自分だろうが。それを一々カミサマとやらに祈るつてのは違うだろ。その気持ちつてのはテメエが感じてることだ。なら、それはテメエだけが感じていいことなんだよ。何もしてねえカミサマとやらに感謝する必要はねえ」

敬虔な信徒に真つ先に喧嘩を売るような発言にアーシアは少し困ってしまう。

今までしてきたことをするなと言われて戸惑わない者などいない。それもアーシアの様に神を心棒している者なら尚更。

困ってしまうアーシアに一誠は少し呆れたような声でアーシアに言う。

「それにな。感謝の気持ちを相手に感じるのはいいけどよ、その本人の前でまったく違う奴にも感謝されんのは癪だろ。スンナとは言わねえが、一々声に出さねえで心で思ってる程度にしておけよ。口に一々出さなきゃ見捨てる神様なんて、心が狭すぎて神様失格だろ」

「ハ、ハイー」

一誠はそう言うなりニツとアーシアに笑いかけると、アーシアは顔を赤くしつつも領いた。

一誠が言っていることもあながち間違っではないのである。

これで後は久遠がレイナーレを墮天使陣営に引き渡して終わり………なのだが、そうも行かないのが現状である。

その証拠に……。

「その墮天使を何処に連れて行こうと言うのかしら……仲介屋さん」

一誠達がいる瓦礫の山の上空から4つの影が降りてきた。

漆黒の蝙蝠のような翼を持った4人の男女……悪魔達である。

その中でも一際目立つ紅い髪をした女性、この地を治める悪魔の一族であるリアス・グレモリーが一誠達に向かって話しかけてきた。

その声は一見普通に話しかけているようだが、中身は警戒心がありありと見てとれる。

「おやおや、これはグレモリーの姫様。ご機嫌麗しゅう」

「挨拶は結構よ。それよりも私の問いに答えてくれないかしら?」

不敵な笑みを浮かべながら久遠に問いかけるリアスを見て、一誠は

久遠にだけ聞こえるように小声で話しかける。

「おい、久遠、ありや相当怒ってんだろ。テメエが残りの二匹を押しつけたことがばれたんじゃねえのか？」

「それはねえだろ。俺等がやり合う前に既に向こうは仕掛けてたんだからよ。そいつとは別件だ。どうせ何で俺等がその堕天使をシバいたのか気になってんだろ」

「ああ、そういうことか」

いきなり現れたリアスに驚いてアーシアは一誠の背に隠れる。

その行動にすっかり懷かれたな、と視線で冷やかす久遠に一誠が睨み返すと、しびれを切らしたのかリアスが少し大きめの声で久遠に話しかけた。

「ひそひそと何を話しているのかしら。何かよからぬことを企んでいるというのなら、その時は…」

そこで言葉を切ると、左手から紅黒い魔力の塊を出現させる。

それがリアスが受けついだ力……『滅びの魔力』である。ぶつければ対象を文字通り消滅させる力。その壮絶な破壊力を誇るそれにアーシアは本能で恐怖を感じ一誠の服の裾をキュツと引っ張った。

「あなた達を滅ぼすわよ」

殺意を込めたリアスの発言に3人の眷属も呼応する。

朱乃は手から雷を生み出し、祐斗は魔剣を手に構え、小猫がファイティングポーズを取った。いつでも戦えるよう臨戦態勢である

だが、それを見ても二人は動じない。

一誠はまるで脅しをかけるかのようにリアス達を睨み付け、久遠は営業スマイルを向ける。

ただそれだけの事なのに、リアス達は額から冷や汗を流していた。

一誠からは百戦錬磨の玄人の威圧感を、久遠からは何やらわからない不気味な気配を感じて。

それを察しているのか、久遠は一步前に出てリアス達に先程の問いに答える。

「別に良からぬ事なんか考えてないって。俺達がここに居るのはお仕事だよ、お仕事」

「仕事……ですって？」

「ああ、そうさ。今回のお仕事はそこで寝てる堕天使のお嬢さんの回収だよ」

久遠はあっさりと仕事内容をリアスに言う。

普通、こう言った場合は秘匿義務だのなんなのとあつたりするものなのだが、それを特に気にした様子もなく久遠は語る。

それを聞いたリアスは何故一誠達がいるのかを理解し、そして不敵な笑みを更に浮かべた。

「大体わかったわ。それであなた達がいるのも納得出来るわね。でも、それではいそうですかと素通りさせるわけにはいかないわ。大人しくその堕天使を渡してくれない。この地に侵入して勝手に暴れ回った者をそのまま生かしておくなんて、グレモリーの沽券に関わるもの。容赦無く殺さないかね」

殺気を込めた笑みに対し、久遠はやれやれといった様子で答える。「そいつは出来ない相談だね。何せ依頼人が生かして持つてこいつて言うんだよ。そいつを破るわけにはいかない。それこそ、此方の沽券に関わる問題だ」

両者はまったく譲らない平行線。

この先の話し合い次第では再び戦いへと発展するだろう。

その気配を感じてか、一誠は更に口元をニヤリとつり上げる。

その笑みを見たりアス達は背筋をが凍り付くかのような感触に捕らわれる。

つい先程まで2人の堕天使を殲滅したりアス達だったが、その最中に勿論教会の崩壊

する音を聞いている。そして教会を見れば、そこにあるのは爆心地のような跡。

それが一誠一人によって引き起こされたことだと予想するのは容易なことであった。

今回の騒ぎの張本人である堕天使を神器持ちの人間が打ち負かした。

その事実がリアス達の緊張を更に煽る。

下手には動けない。そうリアスは思い、慎重に言葉を選ぶ。だが、リアスが答える前に久遠が笑ったまま口を開いた。

「因みに、今回の依頼人は墮天使の総督、アザゼルだ。総督直々のご依頼なんでなあ、さすがに殺されるわけにはいかねえんだよ。それとも姫様、ここでその墮天使殺して戦争をしたいのかい？」

「っ!？」

久遠の言葉にリアス達は息を飲んだ。まさかただの墮天使討伐にそのトップが関わってくるとは思わなかったからだ。

そう言い終えると共に久遠はニヤリと笑う。

その勝ち誇った笑みを見て内心屈辱を感じながらも黙るリアス。

確かに久遠が言う通り、この場であの墮天使を消滅させれば戦争の火種になりかねないのだ。

それ故に何も言えなくなる。

それを見てこれ以上は何もないと判断した久遠は一誠達に踵を返す。

「んじゃ、そう言うわけだから俺達は帰らして貰うぜ。文句があるんなら墮天使陣営に直談判するこった。んじゃ」

久遠がそう言いながら一誠とアーシアと共にその場から歩き始める。

そのまま立ち去るかと思われたが、その前に一回だけリアス達に振り返った。

「そうそう、何かご依頼があるときは仲介屋をご利用に。低い金利でも確実な仕事、それが売りなんでな」

そう言うなり、今度こそ一誠達はその場から去って行った。

リアス達はただ、その後ろ姿を見続けることしか出来なかった。

こうして、アーシア・アルジェントを巻き込んだ騒動は終わりを迎えた。

この後、レイナーレは久遠によって墮天使陣営に届けられ投獄された。

そして騒動に巻き込まれたアーシアに関して、一誠は何も出来ない
ので全てを久遠に任せることにした。けっして悪いようにはならな
いだろうと。

墮天使側もそれについては謝罪があり、出来る限りの償いはすると
のことだったので。

後日、その選択が一誠を過去最悪に苦しめることになるとは、この
時思っていなかった……………。

13話 彼の変わる日々

墮天使レイナーレの企みを阻止してから約一週間近くの時間が経過した。

あの事件の後世は正常であり、リアス達の邪魔をした一誠達に何かしらの危害が加えられることもない。

まさに平和であり、春の日差しは暖かく世を照らす。

だが……それは世の中のことであり、一誠自身の生活は大きく変わってしまった。

朝、眩しい日差しと小鳥のさえずりが一誠を眠りから醒ます。

それ自体はいつもとまったくかわらない。だが、次に感じ取ったものは彼の今の生活ではまず有り得ないものだった。

それは一誠の部屋に入って来る……良い香り。

食欲をそえられるその香りは寝ぼけていた一誠の五感呼び戻し、一誠の寝ぼけていた意識をはつきりと覚醒させる。

一誠はゆっくりと起き上がると、面倒臭そうな顔をしながら辺りを見回す。

すると台所辺りに一人の人間が立っているのを見つけた。

それは美しい金髪をした可愛い少女である。

少女は一誠が起きたことに気が付いたのか振り返り、一誠に輝かなばかりの笑顔を向けた。

「あ、イツセーさん、起きましたか！」

その少女の名は、アーシア・アルジェント。つい一週間前に一誠に助けられた少女である。

彼女は一週間前、レイナーレに騙され日本に来た。レイナーレの目的は彼女の中にある神器、『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』を奪うことであり、そのためにアーシアはこの日本に呼び出された……その清らかな信心を利用して。

そのまま出会わなければ、彼女は騙された事にも気付かずに神器を抜かれ死んでいたかもしれない。

だが、そうはならなかった。

日本に来て早々道に迷った彼女は出会った……もとい、生き倒れていた一誠を助けたことで、彼女が本来辿るはずであつた悲運は覆えされることになる。

一誠は彼女を一飯の恩義で助けることを約束し、その約束通り彼女をレイナーレの魔の手から助けた。

まあ、正確に言えば彼女を助けたのは次いでであり、本命はレイナーレの捕縛だつたのだが。

助けられた彼女が何故ここに居るのか？

それに関して話を語るには、助けられた後の話をするしかない。

一誠と共に教会跡を後にしたアーシアは、そこである事態と直面する。

それは今後の自分の処遇であつた。

既に教会からは追放された身であり、赴任する予定だつた教会も存在しない。

そして身内も居ない彼女に居場所とも言える場所はどこにも存在しなかった。

異国の地で本当に孤独になつてしまった少女は、これからどうしようかと真剣に悩んだ。

頼れるものは何もない状況。まだ成人もしていない少女には酷な状態である。

それに関し、一誠はぶつきらぼうながらにその日は自分の部屋に泊まるようアーシアに言った。

その申し出にアーシアは迷惑が掛けると断ろうとするが、一誠は強引にアーシアを自分の暮らしている部屋に連れ込んだ。

アーシアは初めて見る異性の部屋にドキドキして落ち着かない様子であつたが、一誠は気にすることなく自分が使つていた布団をアーシアに渡すと、床に寝つ転がって早々に眠ってしまった。

一誠の厚意を無碍に出来ないアーシアは大人しく受け入れ泊まることを決意したのだが、そこは花も恥じらう十代女子。

同じ年頃の男性と一緒に眠るなんてことあるわけがなく、アーシア

は緊張してしまい眠れない。特に布団から香る一誠の残り香や、隣でイビキを掻いて寝ている一誠を意識してしまい胸がドキドキして眠れなかったのだ。

対して一誠は本当に寝ていた。

アーシアは誰が見てもわかる美少女で、男だったら誰もが放っておかないだろう。

だが、『そういった感情』というものを一誠は持ち合わせていないため、隣で絶世の美女が自慰に耽つていようがナニをしていようがまったく気にしない。

男として不能というのではなく、単純にそれ以外に思考が持つて行かれていくからである。一誠はただひたすら、宿敵と戦うことを望み続ける。

その結果、こうして性欲などが極端に前に出なくなつてしまつていたので恋愛感情といったものをあまり知らないである。

その日アーシアは一睡も出来ず、一誠は熟睡して夜を越した。

そして翌日になり、一誠は勝手に来た久遠を連れてアーシアを自分が世話になつていた孤児院『白夜園』に連れて行つた。

今後アーシアがどう生きるのかについては本人が考えることだが、その立ち振る舞いをする前に考える場所が、拠点が必要だから。

その道中にレイナーレを堕天使陣営に無事引き渡した事と、堕天使側からのアーシアへの謝罪と償いについて久遠から一誠とアーシアに伝えられ、アーシアは申し訳無い気持ちで一杯になつてしまう。

助けて貰つた上に、更に今後の援助もして貰つてしまつている身としては心苦しくて仕方ない。

だが、一誠と久遠はそんなことを気にする必要はないとアーシアに言う。

何故なら、アーシアは堕天使の一部が勝手に暴走して巻き込まれただけなのだから何も悪いことなどない。ここで悪いのは誰なのかと問えば、勿論主犯であるレイナーレだが、そもそもその暴走を未然に防げず制御出来なかつた堕天使上層部が悪い。部下の失態は上司の責任である。それが分かっているからこそ、堕天使の大幹部で総統の

懐刀であるシェハムザはこうしてアーシアに対し出来る限りの償いをする。と確約してきたのだ。それも彼が墮天使一真面目だからということもあるが。

結果、アーシアの今の立場は人間ではあるが墮天使陣営側というようになつた。

今後、墮天使はアーシアに一切手は出さないこと。

又、アーシアの今後の生活に於いて援助を惜しまないこと。

他の勢力がアーシアに手を出した場合、墮天使陣営に危害を加えたと判断し相手と敵対すること。

これがシェハムザからアーシアに伝えられたある程度の償いだ。他にも色々あるが、主にこの三点が重要項となっている。

この話は墮天使は勿論、天使や悪魔達にも伝わるように流されており、これを機にアーシア・アルジェントの名はこの世界で注目を浴びることとなることだろう。

『一部』の墮天使から反感が出たようだが、それでも真面目なシェハムザはそれを押し通した。

これにより、アーシアがこちら側の事情で狙われることは少なくなつたと言える。

その確約の元、アーシアには日本で暮らせるようにするための援助が行われるようになるとのこと。それまでの間、白夜園で生活していれば問題は無い。

戸惑うアーシアを連れて一誠は白夜園の門を叩き、園長と会ってアーシアのことを頼み込む。

いきなり頼み込んできた一誠に驚くも園長はその申し出を心良く受け入れた。

普通、経営が上手くいっていなかった孤児院に身元不明の外国人を住まわせろ、などとお願ひされても受け入れることは難しい。

だが、園長は自慢の息子とも言える一誠が頼み込んできたお願いなのだから受けようと判断したのだ。

園長自身、これまでずっと人を見てきた。その目がアーシアは悪い人間ではないと感じたのだ。なら、受け入れるのに問題は無い。

と、堅苦しいことを言つて園長は受け入れつつ、実際には一誠が女の子を連れてきたということが嬉しかったのだと言う。

一誠はそのことを言われ、そんなんじやねえよとぶつきらばうに返すが、親代わりの園長はその反論を聞く気は無かった。

この話により、アーシアは取りあえずの住まいを手に入れた。

孤児院の子供達もアーシアの事を最初は驚いていたが、慣れればすぐに懐いた。心優しい少女は無垢な子供には受け入れやすい。

この日を境にアーシアには数多くの弟と妹ができ、孤独とは縁遠くなつた。

一誠はこれでアーシアとは時々会う程度で終わつたと思ひアーシアを孤児院に任せて帰つたのだが……………ここから彼には予想だにしない事ばかりが起こつた。

アーシアを孤児院に任せてから二日後。

いつも通りに駒王学園に登校した一誠だが、その日の教室は朝から妙に騒がしかった。

何でも外国人の転校生が来るということ盛り上がっているらしい。

この駒王学園は外国からの留学生なども多いのでそこまで騒ぐようなことではないのだが、やはりそういうものは注目されるのが常。

だが一誠は気にせずに自分の席に付いて眠ろうとする。

一誠からすれば今更教室に誰が来ようが関係無いからである。邪魔する者には容赦しないが、そうでないなら特に何もしない。それが一誠の日常でのスタンス。

そこで僅かに気になることがあるとすれば、久遠が妙にニヤニヤと笑つていたことだろう。

そういう笑みを浮かべている久遠は碌な事を考えているのが殆どだが、生憎眠気が勝つた一誠は気にしないことにした。

そしてうつらうつらとしている時に担任が教室に入ってきた。

担任は教室内で生徒が騒いでいる通り転校生が来たことを皆に知らせる。

それに盛り上がりを見せる生徒達。あまりの五月蠅さに一誠は顔

を聳め、耳を塞ごうと手を動かす。

だが、耳を塞ぐ前に騒ぎは収まった。それどころか静まりかえった。

何故か？ それはそれまで騒いでいた生徒達が皆見とれてしまったからだ。

教壇の前に立つ転校生を。綺麗な金色の長髪をした翡翠色の瞳を持つ異国の少女を。

皆が静まるほどにその少女は美しく、可愛らしい。

少女は皆が静まったことで自己紹介を始めた。

「ミナサン、ハジメマシテ。アーシア・アルジェント、イイマス。ヨロシクオネガイシマス」

不慣れながら充分に聞き取れる日本語での挨拶。

それを聞いた生徒達は彼女の容姿もあつて、一気に騒ぎ盛り上がった。

それを歓迎だと理解し、アーシアは皆に微笑む。

転校してきたのがアーシアだと知り、流石の一誠もこれには驚いた。

そして理解する。何故久遠が朝からニヤニヤ笑っていたのかを。

一誠の予想通り、この事態に久遠はしてやったりといった笑顔で一誠のこと見てきた。

驚いていることがばれたことが癪に障り、あとで久遠をシバこうと一誠はこの時決意する。

そんな一誠を尻目に、周りの生徒達はアーシアを囲むように盛り上がりを見せていくが、アーシアはそんな皆に謝りつつその包囲を出た。

そして座っている一誠に向かって歩いてくると、この教室内に来てから一番輝かしい笑顔を一誠に向けた。

「キチャイマシタ、イッセーサン！ コレカラモヨロシクオネガイシマス！」

満面の笑顔でそう言うアーシアに、今まで存在感がなかった一誠は皆から注目されることとなった。謎の金髪美少女の知り合いという

ことで。

こうしてアーシアは一誠と同じ駒王学園の二年生として学園の通うことになった。

その後の話では、園長が通学するよう言ってきたらしい。

アーシアは遠慮したのだが、今の世の中高校も出ていないと何も出来ないというのが当たり前なので進めたとのこと。新しい娘に高校に通わせたいという親心である。

一誠には殆ど何も出来なかったので、親として出来ることが嬉しいようだ。

学費についても問題は無く、一誠が稼いだ金で充分払えるらしい。本来なら一誠が使うはずの金だが、本人が孤児院のことを思っただけで渡している金なのだからこう使っても問題は無いだろう。もうアーシアは白夜園の子なのだから。

それが助けてから三日目の朝。

その後、アーシアは日本語をすっかりと覚え日本人と遜色なく話せるほどになり、クラス内でも皆から慕われるようになった。

それは良い。

だが、一誠には非常によろしくないことが起こった。

それは………助けてから四日目にはアーシアがどういう訳か一誠の部屋に入り、一誠のために朝食を作りに来たのだ。

当然合い鍵など渡した覚えもなければ、作った記憶も無い。

それに関しては久遠が絡んでいるらしく、その日の学園で一誠は久遠のドヤ顔を忘れることはなかった。

そして現在、毎朝のようにアーシアは一誠に朝食を作りに来て一緒に登校するようになっていた。

当初はそれが面倒であり止めさせようとした一誠だが、言おうとした途端に泣きそうになったアーシアを見て言えなかった。

その顔は一誠が孤児院の弟妹達に良くされては仕方なく折れていた表情だったから。

すっかり孤児院の一員になったアーシアはもう皆の姉であり、そういった癖も皆から移ったようだ。

それからというもの、アーシアはまさに通い妻状態に一誠の部屋に通っているというわけである。

一誠は眠気を堪えながらのつそりと起き上がりアーシアの方へと歩くと、既にシヨートテーブルの上には美味そうな朝食が並べられていた。

「イツセーさん、朝ご飯も出来ました！ 今日も元気よく学園に行きましょう！」

眠そうな一誠に向かってアーシアは嬉しそうに微笑む。

そんなアーシアに一誠はただ少しの言葉を返した。

「あいよ……」

それがもう仕方の無い諦めから出た言葉だというこは、一誠しか知らない。

だが、案外悪く無いと思い始めていることに、一誠は気付かなかつた。アーシアが楽しそうに笑う姿を見て、そう思っている自分が意識できていないだけなのだが。その時の一誠の顔は気付き辛いだけで、微かだが笑っていた。

こうして一誠の今までの生活はがらりと変わり、アーシアがいる生活のへと変わっていった。

戦闘校舎のフェニックス

14話 彼は新しい依頼を受ける。

アーシアが一誠の生活に加わって少し経ち、最早それが当たり前になりつつある今日この頃。もう慣れてしまった一誠はアーシアの好きなようにさせてはいるが、毎朝来るアーシアを見て内心はげっそりとやつれていた。

その日の朝もいつも通りアーシアは一誠を起こしに来た。

一誠はいつも通りに起きると、もう当たり前前に香る朝食の香りに包まれる。

程良く焼けたパンの香りに熱々の湯気を放つコーンスープ、それと瑞々しい色とりどりの野菜サラダといった健康に良さそうで実に美味しそうな朝食がテーブルに広げられている。

その見事な朝食に一誠の腹は素直に空腹を訴え、一誠もそれに従うようにテーブルに着こうとする。

ここまではいつも通り。

ただし、次の瞬間からこの『いつも通り』はなくなっていた。

「いやあ、アーシアちゃんの作る朝食は美味しいねえ。こんな美味しい朝食を食べられるイツセーは本当に幸せ者だよ」

一誠の目の前には、何故かテーブルに並べられている朝食を食べている久遠の姿が映った。久遠はアーシアが作った朝食を実に美味そうに食べている。

「いえ、そんなことないですよ」

久遠に褒められたアーシアは照れ笑いを浮かべ喜ぶ。その年相応の可愛い笑顔は年頃の男子を魅了するに十分な魅力を持っているだろう。

だが、一誠はその笑顔よりもまず気になることを久遠を不機嫌に睨み付けながら言った。

「何でデメエがここにいんだよ、久遠！」

一誠が言いたいことはそれに尽きた。

確かに一誠は久遠とよく連む。だが、だからといって勝手に部屋に上がることを許したことなど無い。仕事上の相棒だとしても、プライベートルな部分には踏み込ませないようにしている。だというのに、何故ここに居るのか。それが一誠には突っ込まずには居いられなかった。

対して久遠は待つてましたと言わんばかりにニンマリと笑つて答える。

「ん、そいつは勿論、イツセーと朝の爽やかな登校をしになあ。あ、アーシアちゃん、スープのおかわり貰える？」

「あ、はい、どうぞ！」

久遠におかわりの催促をされ、心良く応じるアーシア。

作った料理を美味しく食べて貰えることが嬉しいらしく、アーシアは嬉しそうにスープのおかわりを装う。だが、それが久遠に渡される前に一誠によつて中断される。

「そんな気持ち悪い理由が信じられるかよ！　しかも勝手に人ん家で何勝手に飯食つてやがる！」

「別にいいじゃねえかよ、そんな硬いこと言うな。アーシアちゃんが誘ってくれたんだよ。な、アーシアちゃん」

話を振られたアーシアは機嫌悪そうにしている一誠に少し戸惑いつつも、何とか答えた。

「は、はい！　久遠さんがイツセーさんに用があるというので、でしたら上がつて貰おうと思ひましたので……あの、駄目……でしたか？」

瞳を潤ませながらそう聞くアーシアに、一誠はバツの悪さを感じながら仕方ないと答えた。その姿からは妙に苛立ちが抜けて力を感じられない。

「別に駄目とは言つてねえよ。もうお前も上がつてるんだし、今更一人増えた所で何も変わらねえ」

「あ、ありがとうございます！」

一誠に許して貰えたことで心底嬉しそうに喜ぶアーシア。その笑顔を見て一誠はもう一回深い溜息を吐いた。

「何だ何だ？　あの天下の『赤腕』も美少女には弱いってことかなあ？

なあ、イツセー君？」

「うるせえぞ、久遠。次からかおうとしたらテメエの顔面を思いつきりぶん殴る」

「おお、こわー！ そんなに直ぐ怒んなよ。せつかく『イイ話』、持ってきてやったんだからよお」

久遠にからかわれ、再び機嫌を悪くする一誠。

既にストレスのゲージは全開を振り切っており、直ぐにでも久遠を殴りかかろうとする。そんな一誠を宥めるためにも、久遠は今回本来の目的を切り出した。

それを聞いて一誠は繰り出す予定だった拳を引くと、改めて久遠の事を見た。

「イイ話？ そいつは新しい仕事か？」

それが聞く気の表れだと判断し久遠もその話について話し始める。

「おお、そうよ。今回の依頼人は悪魔の大公様だ。何でも、ここ最近冥界の森、通称『使い魔の森』に可笑しなもんが入って来たって話であ。そいつの駆除が今回の依頼だよ」

その依頼を聞いた途端、一誠は顔を顰めた。

何故なら、彼には過去にその森で面倒な目にあったことがあるからである。

その時の記憶を思い出し、一誠の顔は不機嫌一色に染まった。

「おい、まさかまたスライム狩りかよ。だったら俺は降りるぜ。あんな面倒臭えのは二度と御免だ」

「まだ誰もスライムとは言ってねえだろ。それにお前からしたら、あんなもん数にもはいらねえだろうが」

「そういう問題じゃねえ。誰が好き好んであんなもん駆除したがるよ。あん時は相当面倒臭かったんだからなあ」

当時を思い出し荒れる一誠に、久遠はまるで暴れ牛を静めるかのように声をかけた。

そうでもしなければ本当に断る勢いだったからだ。

「そいつは前に嫌って程愚痴を聞いたよ。だから今更掘り起こすんじゃないえって。いいか、よく聞けよ。今回の仕事はそんなんじゃない」

ねえ。もつとデケエ代物だ。何でも……キメラらしい」

「はあ？ キメラだあ？」

久遠の話を聞いて驚いたのか少し大きな声を上げる一誠。

そんな一誠に驚いたのか、アーシアは少しビクツと身を震わせた。そしてさつきまで聞いていた二人の話に自分も加わり始めた。

「あの……キメラってなんですか？」

その質問を聞いた一誠は何とも言えない顔をし、久遠は待つてましたとばかりにアーシアに説明を始めた。

「よく聞いてくれた。生徒が質問してくれるのを待つていたよ、先生は」

「は、はあ……」

「いいかい、アーシアちゃん。冥界にも数多くの生物、通称魔獣が生息しているんだ。その生態も様々で、中にはペットや家畜、それに悪魔の使い魔なんて様々に取り扱われてるやつもいる。これはこっち、つまり俺達の世界でも一緒なのは説明でわかるよなあ」

「はい、大体は。牛さんからお乳を貰い、鶏さんから卵をいただきますし。それに犬さんとか猫さんとか可愛らしいですから」

アーシアの説明にうんうんと頷く久遠。

その様子は出来の良い生徒を褒める教師のようだ。

「教会で悪魔は汚わらしいやら何やらと教わってるかもしれないけど、実際の所悪魔も人間もやってることはそこまでかわらないんだよ。そこには当然、研究者なんてのも存在する。その分野も多種多様で、当然魔獣について研究者もいるってわけ。それでその研究者達が考えている夢の一つってのがキメラ……つまり『合成獣』なのさ」

「合成獣？」

慣れない単語を聞いてアーシアは首を傾げるその様子は可愛らしいものだが、この場にそれに対し反応する男は居ない。

久遠は合成獣について、こちら側の世界での技術での例を持ち上げる。

「簡単に言えば品種改良だな。アーシアちゃんはラバとかゼブロイドとかライガーとかって知ってる？ ちなみにライガーってのはライオ

ンと虎の雑種ね」

「え、え〜と……あまりそういうのに詳しくなくて……」

イマイチ理解が追いつかないアーシアに久遠は少し苦笑しながら別の考えで答える。

「そうだな……例えば、鳥の羽を付けた馬、ペガサスは知ってる？」

「はい、それでしたら！　とても神聖な幻獣ですよね」

自分の知っているものが出て喜ぶアーシアに久遠も微笑む。

「そうそれね。それを人工的に作るのが合成獣ってわけ。こつちじや遺伝子の問題とかがあるけど、魔獣だと魔力とか色々あつて融通が利くんだってさ。それでいくつもの生物の特徴やら部品やらを組み合わせたのがさつき言つてたキメラなんだよ」

「ちよつと……怖い感じがしますね……」

生物を異なる物へと変質させる、ある意味に於いては神を冒瀆する行いにアーシアは恐怖を感じる。

確かに今までに無い、様々な生物の特質を持った異形の存在というのは生物の本質的な部分で恐怖を感じるもの。その世界にはない、生態系からも外れた存在はそれだけに異端であり、どう存在しようが害しか出さないのだ。

怖がるアーシアに対し、一誠は励ますかのように声をかけた。

「別に驚くもんでもねえよ。さつき久遠が言つてただろ、品種改良だつてなあ。こつちだつて色んなもん改良してんだ。別にそれとなんもかわんねえよ」

「そ、そういうものなんですか？」

「そんなもんだつての」

一誠の言葉を聞いてアーシアは少し安心したのか恐怖が薄れていくのを感じた。

その様子を見て一誠は大丈夫だと判断し、久遠の方に顔を向ける。ちなみに一誠は頭は悪いが、そういった豆知識は結構知っている。それもこの業界ならではのことで、そういった情報が仕事で役立つこともある。

「それで……そのキメラをどうすればいいんだ、俺は？」

本来ならばそのままぶつ殺すと言う台詞をアーシアの前なので抑えめにする一誠。そんな一誠に合わせてか、久遠も少し緩めに話す。

「お前に頼みたいのはこのキメラの『捕獲』だよ」

「はあ？ 捕獲だって？ 何でそんな面倒臭えことをそれにその前は駆除って言わなかったか？」

「そう言うなって。そいつを語るにはまず事のあらましを言わなきゃなあ」

そう言うてコーンスープを一口啜る久遠。

一誠もそこで気にせずにトーストに嚙りついていた。

「まず、何でキメラなんてもんが使い魔の森に入ってきたのかって所からだ。それにはキメラを研究してる奴がいたんだが、よりにもよってヘマをやらかしたのさ、そいつはな。御蔭で件のキメラが脱走、使い魔の森に逃げ込んだじまつたってわけだ。そのことが大公にはれてそいつは今も大公に雷を落とされ中。それで危険だからってんで大公がウチに依頼してきたってわけ」

それを聞いて一誠は呆れ返った顔をした。

「そいつはただの自業自得じゃねえか。その後始末をしろと来るとはなあ。だが、どうにも臭えな、その話」

「というと？」

「こつちのことなら依頼してきても不思議じゃねえが、冥界なんだろう？ だったら部外者に頼むよりもテメエの所の部下でも使った方が速えだろうによお。そいつをしねえってのはてのは何だか裏があるんじゃないか？」

一誠の意味ありげな笑みと問いに、久遠も黒い笑みで答える。

「正解。実はこのキメラってのがやっかいだな。何でも、かなり戦闘力の高い魔獣を束ねて作った生体兵器なんだとさ。その戦闘力ってのがかなり高いらしくて、上級悪魔でも危ねえらしい。数が減ってる彼方さんは被害を恐れてウチに依頼したってわけさ。それに奴さん達、何でも近々何かあるらしいからそっちに人が持つてかれてな」

「それでか。まったく、腑抜けてやがる」

「そう言うなって。それで駆除を依頼したのが大公。ちなみに報酬は

300万だ」

それを聞いた一誠は顔を顰める。そしてそんな低い金額なら止めると言おうとしたところで久遠に止められた。

「まあ待てつての。確かに大公の報酬だけだと低い。そんな金じゃあお前が動かないのは知ってるつての。そこでもう一件、依頼を受けてきたんだからなあ」

「もう一件？」

「ああ、そうさ。そのキメラを作った張本人からのご依頼で、内容は生け捕りだ。その300万で二つあわせて600万の金って寸法だ」

久遠の話を聞いて一誠は理解する。

つまり久遠は二つの依頼を同時に熟すことで報酬を得ようとしていたのだ。大公には駆除したと報告し、裏では生け捕りにして制作者に引き渡すと。

そして二人で黒く笑い合う。

「お前、相変わらず黒いなあ」

「そうでもしなきゃこの商売、やってられねえよ」

そして一誠は改めて久遠の顔を見た。

その顔にははつきりとした意思が感じられる。

「OK、わかった。その依頼、受けようじゃねえか」

「おう、まいど」

そして二人で馬鹿らしく笑い出す。

そんな二人を見て、アーシアが心配そうに一誠に声をかけた。

「あの、イツセーさん。また『お仕事』ですか？」

「ん。ああ、そんなもんだ」

一誠の返事を聞いてアーシアは少し泣きそうな顔をする。

彼女自身、一誠の仕事については一通り知っている。だからこそより心配になったようだ。

「あまり無理はなさらないで下さいね」

泣きそうな顔をしているアーシアに向かって一誠は仕方ねえなあ
と呟くと、アーシアの頭を乱暴に撫で始めた

くしゃくしゃになる頭に驚いているアーシアに一誠は安心させる

ように言う。

「こんな仕事、余裕だったの。すぐ戻るんだから気にするなって」

その笑みを見たアーシアは顔を赤くしながらもどこか嬉しそうに微笑んだ。

「はい、でしたら……お気をつけて」

「あいよ」

アーシアにそう声をかけると、そのまま朝食に更にかぶりついた。

こうして、一誠は新たな仕事を受けつつ真新しい生活を送ることになった。

15話 彼は窮地を知らずに行動する

少年は現在、焦燥感の追い立てられ生命の危機に直面していた。「一体何なんだよ、こいつっ！」

そう吐き出さずにはいられないくらい、彼は切羽詰まっていた。普段の彼はあまりそのような言葉は吐かない。それだけ今が彼にとって非常事態だということは、彼の真つ青な顔を見れば分かるだろう。彼の周りには彼が着ている制服と似たような制服を着た女生徒が数人いたが、皆何処かしら怪我をしており血を流していた。

彼女達も又、彼同様に怒りと焦りを表情に出しながらそれと対峙する。

その手に持っている武器を恐怖でカタカタと震えさせながら。

その中でもしっかりとっていると窺える二人の女生徒は他の者達と違い、恐怖感を感じさせない気丈な立ち振る舞いで皆を鼓舞しつつ、『それ』に攻撃を仕掛けようとする。

少女少女達に襲い掛かり、脅威を振りまいていた『それ』。

それは……一体の獣であった。

獣と聞こえればどこにでもいる動物を想像するかもしれない。

だが、それは彼等が知るとの生物にも当てはまらない外見をしていた。

現在における生物の生態系からは明らかに突き離れた姿。その大きさは誰がどう見ても異端。

その異端の生物が、何故こんな所にいるのかは誰も知らない。

彼等が分かっているのは、今現在、その異端に襲われているという事だけである。

ただ、死にたくない一心で戦うことを選んだ彼等。

その心は、この場に着た当初の説明を思い出し、そして毒づいた。

((何が比較的安全な森だよっ！ 化け物がいるじゃないか！))
そう声に出さずにはいられなかった。

彼の名は匙 元士郎。駒王学園2年生にして生徒会書記という肩

書きを持つ少年である。

その正体は「元72柱」シトリー家の次期当主、ソーナ・シトリーの下僕だ。

彼は今年、駒王学園の生徒会に入った。それには、入学当初から憧れていた先輩、支取 蒼那に少しでもお近づきになりたいという思いがあつたからである。

それまで彼はその想い人、『支取 蒼那』が悪魔『ソーナ・シトリー』であることを知らなかった。だが、彼が生徒会に入りその身に神器を宿していることに気付いたソーナ彼を悪魔として勧誘。思慕の念を抱いていた相手から誘いに彼は心良く応じ、悪魔の駒（イビルピース）によって転生悪魔となつた。

その際に彼は兵士の駒を4つを消耗し、それにより彼に眠っている神器がより希少であることが判明。彼は後に神器『黒い龍脈（アブソーブション・ライン）』を覚醒させた。

これは『黒邪の龍王・ヴリトラ』の魂の一部が封じられている神器であり、その希少性はかなり高い。

彼はこの神器に覚醒めた事により、ソーナ・シトリー率いる生徒会悪魔メンバー期待のルーキーとして活躍する。

悪魔としての仕事も順調に熟し、主であるソーナにもその働きを認められつつあつた。

それにより、彼はついに『使い魔』を持つことになった。悪魔にとって使い魔は必要不可欠な存在であり、いて当たり前前の存在。使い魔を持つてやつと悪魔として認められると言っても良い。

その事にソーナから認められていると彼は歓喜した。

そして生徒会のメンバーは彼のために冥界にある『使い魔の森』へと繰り出した。

使い魔の森とは、冥界に広がる森の一つで悪魔達が使い魔にする魔獣が数多く生息する森である。中には危険な魔獣もいるが、比較的安全な所だ。

そのガイドには、新人悪魔などに使い魔を斡旋する通称『使い魔マスターのザトウジ』が着いて行く。

彼等からすれば、それはピクニックと然程変わらない遠出のはずであつた。

その予想通り、最初はただ楽しいだけの時間。彼は見たこともない世界、見たこともない動植物に好奇心を掻き立てられて、胸を流行らせていた。

だが、森の深い所に踏み込んだ途端……。

その気持ちは一瞬にして砕け散った。

突如彼等の進路先に巨大な何かが飛び出して来た。

その大きさから森は震え、地面も揺れる。

咄嗟のことに警戒したソーナ達はまず目の前に飛び出して来た物を確認し、そして驚愕に目を？いた。

それは『蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）』であつた。

名前の通り雷撃を放つ蒼い鱗のドラゴンで、かなりの上位クラスであり本来悪魔に決して降らず、心の清い者にしか懐かないとされている気性の荒いドラゴン。

それがソーナ達の前に飛び出して来たのだ。

だが、それはソーナ達を警戒してのことでは無い。何故ならその身は全身傷だらけであり、既に虫の息になった状態で倒れ込んでいたのだから。

蒼き身体は最早血で真っ赤に染まりきり、その目には力強さが感じられない。

既に死に体の蒼雷龍に皆事態の可笑しさに気付く。

何故そのようなドラゴンが死にかけて目の前に現れたのか。

それは勿論、目の前の強大なドラゴンをここまで追い詰める『何か』がこの場にいるからに他ならない。

そう判断したとき、ソーナの耳は此方に向かって飛来する何かの飛来音を捕らえた。

その瞬間に走る怖気。それに従い、彼女は即座に下僕とザトウージに叫ぶ。

この場から逃げろ……と。

その声に皆が従おうとした瞬間、それは来た。

彼等の目の前で、それまで虫の息で生きていた蒼雷龍の身体が弾け飛んだのである。

飛び散った血肉、吹き飛ぶ生首。雨のように降り注ぐのは、蒼雷龍の血であった。

それらを一身に浴びた彼等は、そのあまりの事態に硬直する。

普通なら恐怖で狂乱状態になる所だが、それは彼等の目の前に……先程まで蒼雷龍がいた所にいる存在に目が行ってしまい、それどころではなかった。

それは一見、獅子のような獣であった。

人間界の獅子よりも二倍以上大きく、鋭い爪と牙が窺える。

だが、それ以上に目に着くのはユニコーンのような長く鋭い一本の角と、背に生えているドラゴンの様な翼、そして身体を覆う鋼殻化した鋭い皮膚だ。

見ようによつては機械的に見えなくもないが、その金色に光る瞳には生物の根源から感じさせる恐怖を感じさせた。そのような威圧感を感じさせる物が機械である訳が無い。

その獣は軽く首を振って辺りを……彼等を見回すと、まるで世界を震え上がらせるような咆吼を上げた。

それは生物が出して良いような鳴き声ではなかった。

その轟声に上級悪魔であるソーナですら萎縮してしまう。

そしてその獣は、口から魔力の塊を彼等に向かって吐き出してきたのだ。

咄嗟に回避する彼等だが、地面に激突した途端に爆発した余波を喰らってしまい、各自で負傷してしまう。

そうして現在、彼等はこの未知の魔獣を前にして窮地に立たされているというわけである。

「椿姫、皆を守りなさい！……ここは私が！」

「ですが会長！」

ソーナは自分の女王である真羅 椿姫に指示を出し、その獣を迎撃すべく両手に魔力を込めて水の玉を発生させる。だが、その指示に椿姫は戸惑い対応が遅れてしまっていた。

その隙を突かれ、その獣はソーナに向かって飛び出した。
何者をもかみ砕く顎を開き、ソーナに襲い掛かったのだ。

その速さにソーナも椿姫も対応出来ず、驚きに目を見開く。強靱な
牙がソーナの白い柔肌に向かって下ろされるその様は誰が見ても、も
う間に合わないことがわかる。

だからこそ、彼女を慕う彼は……匙　元士郎は叫ぶ。

「会長おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお!!!」

何も出来ない、ただ無力な自分を呪う事しか出来ない。

彼の目にはこの光景がゆっくりと見えた。

ソーナに向かって開かれた口が、その牙が、確実にソーナに向かっ
て行くのを。

見ていることしか出来ない自分がどうしようもなく許せない。

直ぐ目の前で襲われてる想い人を助けられない自分を殺したいと
さえ思った。恐怖に打ち震え動かない身体が恨めしくてしょうがな
い。

だから……ただ、叫ぶしかなかった。

だが、いくら声を出そうがもう遅い。

二人が気付いた所で、もうソーナは逃げられないのだから。

彼が絶望に取り込まれかけた時、目の前で信じられない奇蹟が起き
た。

いや、奇蹟というにはそれはあまりにも平凡で、それでいて……。

あまりにも凶暴であった。

その獣の牙がソーナの肌にめり込みかけた瞬間、突如としてその獣
は真後ろに吹き飛んだのだ。

まるで何かに激突したかのように。

その光景に皆が驚き、特に襲われていたソーナと椿姫は突然の事態
に思考が追いつかなくなっていた。

獣は6メートルくらい吹き飛んだ後に体勢を立て直し、警戒する唸
り声をソーナがいる方向に上げていた。

ソーナの目の前には、一人の男が立っていた。

彼等が通っている駒王学園の制服を着た、茶髪の少年がそこにいた。

その左腕には赤い籠手が装着されており、そこから赤いオーラが立ち昇る。

その少年は後ろにいるソーナ達など眼中にいないのか、気にせずに一歩前に歩を進めた。その瞬間、身体中から赤いオーラが噴き出し森の木々を震わせる。まるで森がその少年を畏れているかのように。

「やつと見つけた……」

少年の口からはちよつとした安堵と苦労がにじみ出すような、そんな声が漏れた。

そして次の瞬間、少年は顔を上げると凶悪な笑みを浮かべながら叫んだ。

「やつと見つけたぜ、このクソ猫！ 大人しくしろよお！ 何せテメエを生け捕りにしなきゃならねえんだからなあっ!!」

目の前の獣に負けない程の咆吼を上げながら少年は左腕を地面に殴り付けると、その反動を使って砲弾のように獣に向かって突進する。

叩き付けた拳の衝撃が地面を揺らし、その揺れの強さに彼等は体勢を崩してしまう。

だが、そんな事よりも彼等の目はその少年に釘付けであった。

突如として現れた窮地を救ったヒーロー。

だが、ヒーローというにはあまりにも凶悪で……。

彼等の目には、獣以上に凶暴な獣が争い始めたようにしか見えなかった。

16話 彼は手加減して捕まえる

遡ること数時間前。

一誠は久遠と共にとある廃墟に来ていた。

そこは以前はぐれ悪魔が隠れ家に使っていた所だが、一誠が仕事で討伐した後は誰も侵入していない。

何故そんな所に来たのか？

それはこれから行う事を人目に着かないようにするためだ。

「イツセー、準備は出来てるか？」

「元からするような準備もねえよ」

いつもと変わらない笑みを浮かべる久遠に一誠は呆れるように答える。

その返答を聞いた久遠は特に気にする様子もなく、何もない空間に手を翳した。

『転送魔方陣、展開』

久遠の声と共に手から光りが放たれると、それは大きな魔方陣の形へと変わった。

それは久遠が持つ力の一つ。自分と対象を別の世界、別の空間に移させる事が出来る。魔力でもない、まったく別の力だがそれが何の力なのかは一誠も知らない。

一誠は『久遠がそういう力を使える』ということを知っているだけ、それ以上知る気がないのだ。

昔それで何故自分で戦わないのかということを経く聞いたが、帰ってきたのは少し諦めの入った笑みと、『俺は戦闘向きじゃないんだよ』という言葉だった。

その表情からそれ以上は何も聞かないようにしている。

久遠は展開された魔方陣を見て満足そうに頷くと、一誠に顔を向けて行くよう促す。

「んじや行きますか……お仕事にゃい」

「ああ」

久遠に一誠は返事を返すと、二人は魔方陣に向かって歩いて行く。

そして二人は魔方阵を通ると姿形なく消えた。

何も居なくなつた廃墟の中、光る魔方阵は二人が通つた後、ゆつくりと光を失い、そして消失した。

魔方阵を通つた先、そこは深い森が広がっていた。

見知つた光景から一転し、一誠達の目の前には見たこともない動植物、そして人間界では有り得ない色をした空の色であつた。

そう、ここは一誠達がいた世界ではない。

冥界……そう呼ばれている世界だ。

冥界と言つても地獄やそういった類いではなく、悪魔や堕天使達が生きている世界。

一誠達と同じように生活し、同じように暮らしている。

その世界にある森……今回の依頼であるキメラが逃げ込んだ先である『使い魔の森』に一誠達は転移してきたのだ。

「ふう、相変わらず冥界の空気は美味くねえなあ。知ってるか、普通の人間が吸うと毒なんだぜ、この空気」

辺りを見渡しながら軽く身体を動かす久遠は冗談めいた感じに一誠に話しかける。

確かに久遠が言う通り、冥界の空気は人間にとって毒同然であり、普通の人間は長くは居られない。吸い続ければ死ぬだろう。

「んなことは知ってるよ。それに俺等は普通じゃねえ。違うか？」

「違わねえ」

呆れた様子で答える一誠に久遠は笑い返す。

確かに人間には毒だが、特殊な力を持つている人間はその力を使えば空気内の毒素とでも言うべき物を防げるのだ。

久遠は冗談も程々にした所で、改めて一誠に話しかける。その際の表情はいつもより多少悪どい物へと変わっていた。

「さて、ではお仕事の復習をしようか、イツセー」

「別に今更な気がして仕方ねえけどなあ」

毎回の如くこうして仕事前に依頼の確認をさせられる一誠は辟易しながら返事を返す。世の中確認といのは何かに付けて行うべきことである。それがどのようなことでも、するに越したことはない。

「今回の仕事は二重依頼だ。大公からは討伐を、制作者からは生け捕りを依頼されてる。普通に考えりや矛盾してて無理だけど、そこでより儲ける方法として考えたのが嘘の達成だ。イツセーにはそのままその対象であるキメラと戦って貰う。いいか、絶対に殺すなよ。それで生け捕りにしたそいつを制作者に渡して金を頂けばこいつは終わりだ。大公には駆除しましたって嘘でも吐けば金は出すだろうよ」

久遠のしたり顔の説明に一誠は顔を顰める。

改めて聞いても、やはり腑に落ちないことがあるからだ。

「何度聞いても思うけどよお……流石に大公とやらがそんな嘘信じると思うのか？ 連中だつて馬鹿じゃねえだろ。普通に殺した死骸くらい持つてこいとか言ってくるもんだろ、そこは。そこんところどうなつてんだよ」

「ふっふっふ、そこを待つてたぜ。勿論、連中はそこまで馬鹿じゃない。だからさ……用意して貰ったんだよ、死骸をな」

一誠の疑問に久遠はニタリと笑う。

その悪どい笑みに一誠はまた何か企んでいるな、と思った。

「さつき言つた制作者がいたろ。そいつ、今回の件で作つたキメラを処分されたんだと。その際に出た死骸をちよつとくすねてもらつたつてわけさ。それを大公に渡せば証拠問題もOKつてわけ。まあ、識別されないようお前さんに認識出来ないくらいミンチにしてもらうけどな。それぐらい、朝飯前だろ」

その答えに一誠は深い溜息を吐いた。

勿論、この相棒のちやつかりにした所に感心しているということもあるのだが、それ以上に人に投げやりな部分に呆れ返っているのである。

「俺は今すぐにでもテメエをミンチにしたくなつてきた」

「そう言うなよ。これが一番確実性が高い方法で一番儲けられるんだからよ」

儲けと言われれば一誠は断れないし文句も言えない。

高収入が手に入るのなら、文句など言えないのである。

文句がないと分かった上で久遠は笑みを浮かべると一誠に明るく

話しかけた。

「つていうわけで、今からお前はこの森にいるキメラを捕まえてこい。俺は危ないんで退避させてもらうからよ」

そう言うなり、久遠の身体が急に地面に落ちた。

その地面を見れば、いつの間にか転送魔方阵が展開されている。

「あ、クソっ！ テメエ、俺に探すの投げやがったなあ！」

そのまま抗議代わりに久遠に殴りかかる一誠だが、一誠の拳が届く前に久遠の身体は全て魔方阵に吸い込まれていった。

空振りした拳はそのまま木に激突し、木を激しく揺さぶった。

「クソ、あの野郎！ 後で覚えて置けよ」

苛立ちを顕わにしながら一誠は森の中を進み始めた。

何故彼が怒っているのかと言えば、それはキメラを探するのが非常に困難だからだ。

はぐれ悪魔などは確かに理性が崩壊している者が多いが、それでも元知性のあつた者としての行動が出る。だからこそ、その隠れ家などが廃墟が多いのである。

だが、魔獣というのはそうはいかない。

獣である以上知性的な行動は取らず、本能的に動くので居場所が特定し辛いのだ。

それでも自然界にいるものなら生態を調べればある程度の特定は出来る。

しかし、今回の相手は合成獣。生態など混じり過ぎて特定できるようなものではない。故に探す方法は一つしか無い。

自らの足でひたすら探し続ける。

久遠はそれを一誠に押しつけたのだ。自分は面倒だからと。

だからこそ、一誠は怒りながら森の中を歩いて行く。その怒りがにじみ出しているせい、一誠の付近にいた魔獣達は皆挙つて一誠から逃げ出す始末。それだけ彼は苛立っていた。

そして始まったキメラ搜索。

最初こそ苛立っていた一誠だが、姿を全然見せないキメラに段々と辟易し始めていた。

キメラの外観はある程度久遠から聞いていたが、それらしい姿は一向に見えない。

聞いた姿はユニコーンのような角を生やし、鋼殻を身に纏った獅子という話。だが、一誠からすれば猫と差が無い。

一般的な区別では猫は愛玩動物、獅子は猛獣と判断される。だが、一誠からすれば畜生であることにかわらないのである。

だからか、探すことに飽きてきた一誠は何もない空間に向かって悪態を込めた声を上げる。

「クソ猫く、何処だく！ まったく、何でこんな目に遭わなけりやならねえんだか……」

声をかけたところで反応が返つてくると言うことも無く、帰ってくるのは沈黙のみ。

それが尚更一誠の虚しさに拍車をかけ、呆れ返る以上に苛立ちを募らせていく。

その殺気の所為でこの森の生物は皆怯え姿を現さない。

湖に近づけばウンディーネが一誠の濃い殺気を感じて湖の底に息を殺して隠れ、その辺にいたスライムは仲間が以前消滅させられたことを覚えているのか、その恐怖で自ら自己消滅する。

御蔭で一誠の前には虫の鳴き声ひとつない、生命の感じが一切感じられない空間が続いていく。

未だに見えないキメラ。それを文句を言いながら探す一誠。

搜索を始めてから二時間が経過する頃には、一誠の苛立ちがピークへと差し迫り始めていた。

「ああ~~~~面倒臭せえ！」

ガシガシと後頭部を掻く一誠の頭では、もう面倒だからこのままこの森ごとキメラを潰そうかを真剣に考え始めていた。

この森は結構広大だが、一誠の『本気』を使えばそれも余裕で出来る。

それがどれほどの破壊を招くのか、想像を絶すつことは確かだろう。

後5分探して見つからなかった本当にそうしようと決めた一誠は

直ぐにでも出来る様に赤龍帝の籠手を発現させる。

そして再び探そうとしたところで、森が震えるような咆吼が鼓膜を叩いた。

それが何処なのかを確かめるべく、一誠は拳を地面に叩き付けて上空へと跳躍。

そして見つけた………捜し物であるキメラを。

周りには他にも何人かいたが、それまで苛立って精神的に追い詰められていた一誠の目には入らなかった。

見つけた瞬間に笑みを浮かべずにはいられない。

一誠はそのままオーラを噴出させながらキメラに向かって下降する。

その落下の勢いのまま、それまでの苛立ちも込めて思いっきりキメラを殴り付ける一誠。その表情は捜し物が見つかった喜びで満ちている。

「やっと見つけたぜ、このクソ猫！ 大人しくしろよお！ 何せテメエを生け捕りにしなきゃならねえんだからなあっ!!」

まるで百獣の王のように咆吼を上げながら一誠はさらに追撃をかけるべく、地面に左拳を叩き付ける。

その拳の威力に大地は悲鳴を上げるかのように鳴動し、ソーナ達をその場から動けぬよう縫い付けた。

それほどの威力の攻撃の反動を使って、一誠は砲弾の如くキメラに向かって飛びかかった。

先ほどは不意を突かれ攻撃を受けたキメラだが、今度は確実に一誠を捕らえ敵として認識している。故にキメラはその場で向かってくる一誠に咆吼を上げながら魔力の弾を吐き出してきた。

それは先程、その余波だけでソーナ達のグループの大半を戦闘不能に追い込んだ攻撃である。その威力を知っているからこそ、ソーナは見ず知らずの一誠に叫んだ。

「危ないっ!!」

だが、ソーナの叫びも虚しく一誠に魔力弾は激突し、一誠は盛大な爆発に巻き込まれた。

その爆風に飛ばされぬよう身体に力を込めるソーナ。

その光景を目の当たりにして、彼女の顔は悲しみと後悔に染まる。せつかく助けてくれたのに、その少年に何も返せなかった。彼は自らが危険だというのかかわらず、見ず知らずの自分を助けてくれたというのに、自分は彼の窮地にただ叫ぶことしか出来なかった。

そのことを後悔することしか出来ない。

だが、いくらソーナが後悔しようとも、彼が生き返ることなければこの窮地が覆ることもない。

だからこそ、彼女は気をしっかりと持って爆炎の向こうにいるキメラを睨み付けた。

「せつかく助けてもらった命に代えても、あの魔獣は絶対につ」

決意を込めた声で叫ぶ彼女だが、その言葉は途中で途切れてしまう。

何故か？ それは彼女の決意を揺るがすことが起こったからだ。

彼女の目の前で燃えさかる炎の中、ゆらりと蠢く人影を彼女は見つけた。

その人影は若干驚いた様子を見せ、キメラに向かって言葉を発する。

「いやあゝ、まさかこうなるとは思わなかったぜ。御蔭でせつかくの制服が台無しだ。良くもやりやがったな、このクソ猫！」

その声と共に人影から赤いオーラが噴き出し、そのオーラによって燃え盛っていた炎はかき消された。

その中心には、先程爆炎に飲み込まれた一誠の姿があった。

怪我をした様子は見受けられないが、一誠が着ていた制服は所々煤けて小汚くなってしまうている。

「あゝあゝ！ 制服どうしてくれるんだよ。ウチの学校の制服、結構高いんだぞ！」

一誠は自分の服が汚れてしまった事にショックを受けたようで内心へこんでいた。

この非常時に自分の命よりも着ていた服の金額を心配する彼に、ソーナ達は啞然としてしまう。

「あ、あの……大丈夫ですか！」

「あん？」

一誠の様子に驚いていたソーナだが、気を取り直して一誠に声をかける。

その様子は本当に心配していることが窺えるくらい必死な表情をしていた。

その声に対し、一誠は声の方を向いてやっとソーナ達がいることを認識した。

「あれ？ あんた達、誰だ？ その制服ってことは……ウチの学生だろ？」

「その……私達は生徒会で……」

急に予想外のことを聞かれ、ソーナは戸惑ってしまい咄嗟にそう答えてしまった。

本当はそんなことを聞きたいのではない。

目の前にいる彼が誰なのか？ 助けてくれたお礼が言いたい。危ないから後は私達に任せて避難して欲しい。

聞きたい事や言いたいことは山ほどある。でも、その一つでも口から出すことが出来なかった。

彼女はただ、一誠を見ることしか出来なかったのだ。

口籠もるソーナに何なんだと言わんばかりに首を傾げる一誠。

だが、その後に言葉は続かない。

何故ならソーナが何かを言おうとした瞬間、まるで全てを切り裂くかのような咆吼が二人に叩き付けられたからだ。

それは先程一誠に魔力弾を放ったキメラの雄叫び。

倒したと思っていた敵が生存していたことへの憤怒がこの叫びには込められていた。

その叫びを聞いて身を震わせるソーナ。

対して一誠は思い出したと言わんばかりに凶悪な笑みを浮かべた。

「さつきは良くもやりやがったなあ、クソ猫！ 今度はこっちがテメエにくれてやるよ！ 制服の分、きつちりぶん殴ってやる！」

そう叫ぶや、先程と同じように地面に左拳を叩き付ける一誠。

その反動を使って再びキメラに向かって突進するも、これでは先程と同じように魔力弾で迎撃されるだけである。

だが……。

「同じ手は喰わねえよっ！」

一誠は地面に拳を叩き付けた際、反動で飛ぶ身体に捻りを加え横回転させる。

その回転による遠心力を加えつつ突進する一誠に魔力弾は向かうも、その回転から繰り出された拳によって打ち弾かれていく。

弾かれた魔力弾はあらぬ方向へと飛んで行き、ソーナ達が居る辺りから少し離れた所で爆発していく。

その行動にキメラは更に魔力弾を吐き出していくが、一誠の回転しながらの突進は衰えることなく進んでいき、ついにキメラの間近まで迫った。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

気迫の籠もった咆吼と共に左拳を思いっきり振るい一誠はキメラに殴りかかる。

放たれた拳はキメラの顔に激突し、その猛々しい牙をへし折りながらめり込んでいく。

そしてその威力を爆発させるかのように、キメラは殴られた方向に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされたキメラは森の木々を何本もへし折りながら飛ばされ、勢いが弱まり岩に激突したところで止まった。

普通の生物ならとくに死んでいるであろうダメージ。だが、この生物は戦闘用に作られたキメラである。普通の生物とは耐久力が違う。

キメラはダメージにふらつきつつも起き上がると、更に激怒を顕わにして咆吼を上げた。それはこの森全てに響き渡るような、空間を振るわせるような程に凄まじい叫び声。

そして身体を前傾姿勢にするなり、一誠に向かって角を向けながら跳んだ。

それもただ跳んだのではない。先程一誠がやったように、身体を回

転させての突進である。

回転が加わり一誠に向かって突き進むその姿はまさに鉄鋼弾。
その攻撃はソーナ達は知らないが、あの蒼雷龍を屠った攻撃であった。

あの巨体を一撃で四散させた威力は、例え上級悪魔であろうとも無事ですむ訳が無い。

そのことを肌で感じたソーナ達は咄嗟に防御を身構える。

余波であろうともかなりの威力があることを本能で察したから。

だが、一誠は違う。

一誠は向かってくるキメラに向かって負けない程の雄叫びを上げると、更にドラゴンの赤きオーラを身に纏いながら迎え撃つべく左拳を地面に叩き付けて突進する。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

「ぐがあああああああああああああああああああああああああああ!!」

お互いの咆吼が重なり合い、地響きのようにソーナ達の鼓膜を叩き付ける。

耳を塞ぎなくなるほどの轟音だというのに、ソーナ達は誰一人として耳を塞ぐ事無く互いに打ち砕かんとする一誠とキメラに見入っていた。

両者の突進、拳と角が激突すると、その衝撃が広がり大地を揺らした。

「がるうううううううううううううううううううううううううううううう!!」

一誠を貫こうと唸り声を上げながら更に力を込めるキメラ。

それに対し、一誠はニヤリと口元をつり上げ嬉しそうに吠えた。

「悪くねえ突進だ! だが、俺の拳はもつとすげえっ!!」

そして森に鳴り響く何かが砕け散る音。

それは……………キメラの角がへし折れる音であった。

角を砕いた拳はそのままキメラの脳天へとめり込み、カウンターの

如くキメラを殴り飛ばした。

両者の威力を一身に受けたキメラは再び吹き飛ばされ、そして木々を倒しながら地面へと倒れた。

抉られた地面がずっと続いていくことから、それがどれほどの威力だったのが窺える。

そしてキメラはというと起き上がる気配がなく、その顔は白目を？き、口からはだらりと舌を出した状態で気絶していた。

その様子に一誠は満足そうに頷き、それまで緊張状態にあったソーナ達は力が抜けてその場でしゃがみ込んでしまった。

「まったく……手こずらせやがって」

文句を洩らしつつ一誠はキメラに近づいて行くと、その間から魔方阵が展開される。

そして輝く光の中から現れたのは、いつもと変わらない笑みを浮かべる久遠であった。

「よう、イツセー。お疲れさん」

久遠が一誠に向かって軽く手を振ると、一誠はそれに合わせて久遠に左拳で殴りかかった。

「うおっ、危ねえ！ いきなり何しやがる！」

「うるせえ！ 一人でキメラを探させやがって！ 一発殴らせろ！」

「テメエに殴られたら死んじまうよ、この馬鹿！」

「だったら死ねえ、このボケ！」

一誠の主張を聞いて久遠は拳を避けながら口論をし始める。

その光景は子供が口喧嘩をしているようで、見ていたソーナ達は呆気にとられた。

それまでの殺伐とした雰囲気が一気に霧散してしまい、そのやり取りは両者が取っ組み合いになったところで止まった。

「だから悪かったって言ってるんだろ。こつちだって色々やらなきゃならねえことが多いんだからなあ」

「うつせえ！ 悪いと思ってるんならテメエの分け前の二割寄越しやがれ」

「ふざけんな！ 鏢一文でも出さねえよ」

「んじや三割だ」

「何で増えてんだよ！ ああもう、仕方ねえ！ 一割だ。一割以上は渡さねえ」

そんなやり取りをしていた二人だが、久遠は呆氣にとられているソーナに向かつてにこやかに笑いかけた。

「いや、シトリー家のお嬢様には申し訳無いことをしたなあ。せつかくの遠出を台無しにしちまって申し訳無いね」

「あの……貴方は……」

笑いかける久遠にソーナは静かに問いかける。

すると久遠はクスッと笑って答えた。

「俺の名前は久遠。しがない仲介屋だよ。んであっちが『赤腕』なんて呼ばれてるイツセーだ。まあ、何かあつたらここに連絡ヨロシク。美人なら割安で引き受けるよ」

久遠はそう答えながらソーナに営業スマイルで名刺を渡す。

それを受け取ったソーナは名刺に目を通し、それがリアスの言っていた『仲介屋』であること理解した。

するとそれまで茅の外にいた一誠が久遠に話しかける。

「あれ？ お前こいつ等のこと知ってんのか？」

「お前、それでも駒王学園生かよ。この人は俺等の学園の生徒会長様だぞ。トップの人間くらい覚えておけよ」

久遠にそう注意され、一誠は何か思い出そうと頭を捻るが中々出てこない。

付き合いのある人物なら兎も角、滅多に関わらない人物だと彼が名前を覚えているということはないのだ。

そのまま二人はソーナ達を尻目に撤退準備を始める。

一誠はそのまま地面に座り込み小汚くなつた制服をどうするかを考え、久遠は何かしらの術式を使ってキメラを拘束した。

「あの、その魔獣をどうする気なのですか？」

キメラをどうするのか気になったソーナは一誠と久遠に問いかけると、一誠は面倒臭そうに地面に横たわり、代わりに久遠が茶目気を混ぜた笑みを浮かべながら答えた。

「そいつは残念ながら守秘義務でね、言う訳にはいかないんだ。まあ、悪いことにはならないから安心しな。それよりお嬢様の下僕の方を心配しなよ。皆かなり疲れてるみたいだしよ」

「っ!? それもそうですね。すみません、心配をかけて貰って」

「いいってことさ。まあ、あまり俺等のことを追求するのは勘弁して欲しいかな」

そんな二人の会話に一誠は呆れ返った様子でソーナに声をかける。

「別に難しいことじゃねえよ。あんた等は偶々運がなかったっただけだ。だからそれ以上は気にせずにとつと帰れ。それがお互い気になくて済む」

一誠はソーナにそう言うなり起き上がると、久遠の元へと歩き出す。するとキメラの元にいる久遠が足下に魔方陣を展開し辺りを目映く輝かせた。

「んじやお嬢様、俺等は帰るんで。お互い気軽に深入りせずにいきたいものだね。それじゃ」

「そういうこつた。んじやな」

ソーナ達に向かって別れを告げる二人。そんな二人にソーナは急いで声を上げた。

「ま、待って!」

しかしその声が届く事はなく、二人は光の中に消えていってしまった。

そのまま光の残滓を見つめるソーナに、椿姫は心配して声をかける。

「会長、あの者達は……」

「……………わかりません。ただ……………お礼を言えませんでした」

その事が心残りだと語るソーナ。椿姫はただ、そんなソーナを見つめることしか出来なかった。

そんな二人を見て、匙 元士郎は心に誓う。

二度とこんな目に会長を遭わせないためにも、強くならなければ…………と。

こうしてソーナ達、生徒会グループの使い魔の森探索は終わった。
尚、人間界に戻った一誠には更にキメラの死骸を識別不明になるま
で殴り潰す仕事が続いていたのは言う今でもない。

17話 彼は相談に乗る。

使い魔の森でのカメラ捕獲の仕事を終えた一誠。

久遠の策によって報酬もかなり貰い、さらに搜索を手伝わなかった久遠から一割をがめたので一誠の懐は非常に温かいものとなっている……はずであった。

だが現実……。

お昼休みのチャイムが鳴り響き、生徒達は待ちに待った昼食を取ろうと逸り教室内は騒がしくなっていく。

そんな中、アーシアは昼休みになり次第にとある席の生徒の所へと向かう立ち上がった。その手には二つの包みが持たれており、その中身は可愛らしいお弁当が入っている。

勿論、彼女が二つ食べるのではない。

それは彼女の分ともう一つ、彼女が最も信頼している『家族』に食べて貰うために作ってきたものである。

だが、その家族……兵藤 一誠が座っていた席は既にもぬけのからであった。

「イツセーさん、またどこか行っちゃいました」

アーシアは毎日昼食を渡そうとするも、渡す前に一誠が無理にでも断るため受け取って貰えずにいた。そのことで泣きそうになるアーシアだが、一誠はそれを気まずそうな顔で必死に謝罪しつつそれでも受け取れないと断るのである。

朝食は良いのに昼食は何故駄目なのか？

それは彼女にとって不思議でならないこと。朝に起こしに行ったら、朝食と一緒に昼食の弁当も作るのだが、一誠は昼食だけは受け取らないのだ。

それを知っても尚、アーシアが一誠のお弁当を作るのは彼が押しに弱いことを知っているからである。

それは孤児院で彼女が新たに出来た弟妹達から学んだこと。

一誠は家族の強気なお願いには弱いということを彼女は孤児院の

家族から聞いたのである。だからこそ、彼女なりに強気でこうしてお昼に誘おうとしているのだが、結果は見ての通り、空振り続きなのだが。

一誠の席の前で途方に暮れているアーシアに、同じクラスの桐生藍華が励ますように話しかけられた。

「また兵藤に逃げられたの、アーシア。まったく、こんないい娘の好意を無下にするなんて、アイツったら何考えてるんやら」

「そ、そんな、好意だなんて……」

桐生 藍華にからかわれるようにそう言われ、アーシアは真っ赤になった顔を両手で隠しながら恥ずかしがる。

その様子を見た周りのクラスメイトからは微笑ましい視線を向けられていたが、アーシアは気付かない。また、男子からはアーシアを無下に扱ったとして一誠に怒りを抱く者も多く居たが、それをアーシアが知るよしはない。

結局この昼休みもアーシアは一誠と昼食を取れず、仲の良い桐生藍華達と一緒に昼食を取った。

ぐう~~~~~~~~~~~~~

「ああ……腹減ったなあ……」

一誠の腹からそんな悲哀染みた音が鳴り、青空へと吸い込まれて消えていく。

現在一誠が居るのは、彼以外誰も入ってれない屋上であった。

彼は昼になるとこうして毎日空を見上げながらここで昼寝をする。

その行為は一人になりたいという孤独を愛する青年的思考ならば、まだ恰好も付くというものだがそうではない。

単純に教室にいと美味そうな匂いがして彼の空腹をさらに刺激して、よりしんどくなるのが嫌という何とも貧乏臭い理由だったりするのである。

いつも一誠はこうして空腹を堪えているわけだが、何故ついこの間に収入があったはずなのに今もこうして依然と変わらずに貧苦に喘いでいるのか？

それは一誠の下らないプライドが原因だったりする。

アーシアが孤児院に住み始めてから間もなくして毎朝一誠に朝食を作りに来るようになったわけだが、その材料費は勿論アーシアが出している。

と、考えるのが普通。確かにアーシアは園長からお金を貰って一誠の朝食のために使っている。

だが、そのお金も元を正せば一誠が稼いだ金である。勿論、園長も頑張って稼いではいるが、事実として一誠の稼いでくる額の方が段違いに高い。

よって園の運営には殆どが一誠の収入で行われているといつてよい。

つまりアーシアや弟妹達に渡されるお小遣いも元は一誠の金ということ。

そして一誠は寄付した金を受け取る気は無い。それは白夜園の子達が生活するためのものであるからだ。

これも彼が自分に決めた約束。

『テメエの金はテメエで何とかする。園に寄付した金はもうテメエのもんじゃない』

とのこと。

大人らしくプライドを持って格好いいことを言っているのだが、言い替えればただの無駄な意地だったりする。

そんな如何にも子供っぽい理由もあるが、それ以外にも彼なりに考えが合って屋上にいたりもするのだ。

前は空腹を誤魔化すためだった。だが、最近ではそれ以外にもある。

実はクラスで人気のアーシアに懷かれているということもあって、男子達……特に元浜と松田から睨まれ目立つのが面倒ということもあった。

裏の業界では有名な一誠だが、表では普段居眠りしている不真面目な生徒として認識されているので目立ちたくは無いのだ。

目立つということは、それだけ厄介事がやってくるということだから

ら。

そんなわけで、現在も尚、一誠は空腹を誤魔化すためにこうして屋上で寝そべっているのだ。

『相棒、つくづく思うが、相棒は頑固すぎるんじゃないか。別にあのシスター娘に昼食を作って貰えば良いというのに。あの材料費自体は相棒が稼いだ金なのだから』

毎回の如く貧困に喘ぐ一誠にドライグは呆れ返った声で話しかける。

このやり取りも何度したか覚えていないくらいドライグも言い続けていただけに、その呆れっぷりは相当なものだ。

『そういうなよ、ドライグ。腹に響くだろうが……』

『頑固者もここまで行けば神滅具並みの凄さだな』

「うるせえ……………」

いつもならもつと覇気の籠もった掛け合いも、空腹な一誠の声には何も感じられない。

いつもこんな会話をした後に午後の授業が始まるまで寝て過ごしていた一誠。

だが、うつらうつらと心地良い眠気に晒され始めた頃に頭上から声がかけられた。

「あら……あなた……兵藤くん？」

「あん？」

せっかく心地良い眠気に誘われていた所を邪魔され不機嫌になる一誠。

一体誰だと思いながら目だけを声のした方に向けると、そこには深紅の髪を持つ豊満なプロポーションの女性が立っていた。

その女性に一誠は見覚えがある。

「……何でグレモリーがここにいんだよ。ここ、立ち入り禁止だって知らねえのか？」

「知ってるけど、だったらあなたも同じじゃない。言いつ子なしよ」

この寂れた屋上にやってきたのは、この学園で知らない者はいないとされる二大お姉様の片割れ、リアス・グレモリーだった。

と、不機嫌な顔のまま身体を起き上がらせた。

「それで、テメエみてえなお嬢様が俺に何の用だよ。しかも明らかに知ってて屋上に来ただろ」

「あら、ばれちゃったわね。まあ、確かにあなたを探していたのは事実だけだね」

するとリアスは少し悲しげな笑みを浮かべた。

いつもならクラスメイトなり腹心である朱乃と一緒に昼食を取っているリアスだが、何故今日に限って別行動なのか？

それは現在彼女の『家』にまつわる騒動で彼女の精神が疲弊し参ってきているからである。

たまには一人になりたい時もある。それは悪魔だろうが人間だろうが変わらない。

何より、彼女は今の自分の状況をどうすればよいのか手に余らせている。その解決に糸口を掴むためにも、この尋常ならざる力と精神の持ち主である一誠と話をしてみようと思ったのだ。

「あなたは……今まで理不尽に思った事つてあったかしら」

「はあ？ そんなもん、常にあるに決まってるだろ」

リアスの問いに一誠は呆れ返りながら答えた。

いくら一誠が強かろうと、世の中理不尽な事など多くある。

特にこの間行われたスーパーのウィンナー袋詰め放題セールの袋が破けた時ほど一誠はこの世の理不尽を嘆いたことは無い。

そんなしょうもないことに絶望し嘆いていることも知らずにリアスは少し笑いながら言う。

「あんなに強いあなたでもそうなのね」

「そういうもんだろ、世の中つてもんはよ」

「そうよね……」

するとリアスは少し諦めが入ったような笑みを一誠に向けた。

「ねえ……もし、もしあなたでも勝てない敵が現れたとしたら、あなたははどうする？ 勝てないのなら、戦わない方がいいかしら。その方が誰も傷付かないわ」

一誠にとっては良く分からない質問。

だが、リアスの現状からすれば切実な問題。その質問に対し、一誠は心底呆れ返った顔でリアスの目を見て、そして言った。

「馬鹿なこと言うなよ。勝てる勝てないじゃねえ……やるんだよ。それで正面から打ち砕いてやんのさ。どんな奴が相手だろうと関係ねえ。邪魔するんだつたら容赦せずにぶん殴る！ 勝てる勝てないってのは後から付いてくるもんだ。ヤル前から気にしてたんじゃない意味ねえんだよ」

その答えを聞いたリアスは何故かキョトンとし、そして何が可笑しかったのか急に笑い始めた。

その反応に一誠は馬鹿にされた様な気がして更に不機嫌になるが、リアスは笑いながらも謝って一誠の怒りを静める。

そして一頻り笑った後、妙にすつきりした顔で一誠に話しかけた。「話を聞いてくれて助かったわ。何だかすつきりしたもの。ありがとう」

「別に礼を言われるようなことはしてねえよ。報酬は受け取ったしな」

ぶつきらばうにそう答えながら一誠は再び眠ろうと横になり始めた。

その様子を見てリアスは一誠から踵を返す。

そのまま二人はもう話すことは無いと、一誠は寝そべりながらメロンパンの袋を開け、リアスは出口へと歩いて行く。

そして扉を開けた所で、再び一誠の方を向いた。

「パンだけじゃ身体に悪いから、コレもあげるわ！」

そう言つて一誠に向かって何かを投げつけ、そしてリアスは校舎へと入っていった。

飛んで来た何かを一誠は左手で掴み、それが何なのかを目で見た。

「野菜ジュースかよ」

リアスが投げ込んだ野菜ジュースを見て、一誠はそう洩らしながらメロンパンに嚙りついた。

「あめえ………」

そんな一誠の呟きが澄んだ青空へと消えていった。

18話 彼は知る。

「へい、醤油ラーメン並1、特盛り1、味噌1お待ち！」

がらんとした店内に威勢の良い声が響き渡り、彼等の目の前には暖かな湯気と良い香りがするどんぶりが置かれた。

それを見て、綺麗な金髪をした可愛い少女……アーシア・アルジエントが目を見つめた。

「うわあ、凄く美味しそうです！ 私、ラーメンって初めてで」

目の前に出されたラーメンを見てアーシアはハシヤク。

彼女にとってラーメンというのは話こそ聞いてはいたが、こうして目の前で実物を見たのは初めてのことである。異国でそれまで暮らしていた少女にとって、初めて食す食べ物だ。

そんなアーシアの様子を見て少しだけ少年……兵藤 一誠は笑う。

「別にこんなもんで一々大げさに喜ぶんじゃないよ」

ぶつきらぼうにそう言うが、その表情は孤児院の弟妹達が喜んでいる時に見せる表情と同じものである。

仕方ないなあ、と少し呆れつつも喜んで貰えたことを嬉しく思う。

そんな『可愛い』感情をこの男が浮かべるとするのは、裏の業界でのことを知っている者達ならまず信じられないだろう。

そんな一誠の隣には暖かい笑みでアーシアを見る黒髪の少年……久遠が座っていた。

「そうそう、確かにここは味は良いけど店の場所は悪いし店長がおつかねえから居着く客もいねえしさ。それに世の中こんなラーメンより美味しい物は一杯あるんだから、この程度で感動してたら世の中感動しすぎて疲れちゃうよ」

久遠がアーシアに向かって軽口でそう言うと、それに対して厨房から怒鳴り声が一誠達に向かって叩き付けられた。

「うつせえぞ、クソ餓鬼共！ 誰が俺のラーメンが不味いだって〜！ そんなこと言うんだったら食わねえでとつと出てけえ!!」

厨房から顔を覗かせた店長は顔を怒りで赤く染め、赤鬼のような顔で一誠達を怒鳴りつける。

その怒気に充てられ、アーシアはビクツと身を震わせ少し涙目になってしまう。

別に怒られたからではなく、単純に怖いという理由でだ。

そんな可憐な少女を怯えさせる店長に対し、一誠と久遠はいつもと変わらない顔で文句を言うように答える。

「別に不味いなんて一言も言っていないだろ。味は良いって言ったぜ、俺は」

「そうだったの。おっさんがおつかねえのは事実だし、店が分かり辛い場所にあるのも事実だろうが。それで客がこねえもの本当のことなんだから、一々怒鳴るんじゃないよ」

二人が文句を言うとき更に店長が怒るが、一誠と久遠は何も言わずに未だ涙目になっているアーシアを無言で本人に分らないように指す。

アーシアの泣きそうな顔を見て、それまで怒鳴っていた店長だが流石にバツが悪くなり、仕方なくアーシアのラーメンに叉焼を二枚無言で追加した。

「え、あの……その……」

いきなり入れられた叉焼を見て戸惑うアーシア。

そんなアーシアに久遠は笑みを浮かべながら教えてやった。

「こういうときは、『ありがとう、おじ様』って言えばいいんだよ」

アーシアは久遠の言葉を聞いてハツとし、店長に笑顔で言われたとおりにお礼をする。

「ありがとうございます、おじ様！」

「……悪かったな、怒鳴り散らして。どうも若い娘さんの相手は苦手でいけねえ」

店長も自分が悪かったと反省しているようで、その姿を見てアーシアも怖がる様子は無くなった。

そして一誠は店長に向かって図々しくどんぶりを前に出す。

「あれ、俺の分の叉焼はねえのか？」

それを見た久遠は苦笑し、アーシアは驚く。

そして店長は呆れたような声で一誠に怒った。

「テメエみてえなクソ餓鬼の分はねえよ。何図々しいことしてるんだ」

「ちつ……まあ、最初から期待してねえけどな」

一誠は軽く舌打ちするも、気にせずにはラーメンに箸を突っ込み、アジアに食べ方を説明しつつ思いつきり麺を啜った。

「かあゝゝゝ、やっぱり美味えなあ。『おごり』のラーメンは」

何故万年金欠の一誠が外食をしているのか？

それを説明するには数時間前に遡る。

その日、いつも通りに学園の授業を受け終えた一誠と久遠、そしてアジアの三人は一緒に帰ることになった。

それ自体はいつもと変わらないことなのだが、そこで会話をしていた時、アジアはクラスメイトに聞いたラーメンの話をし始めた。何でも昨日テレビでラーメンの特集を見たとかで、それを聞いたアジアはラーメンに興味津々だった。アジアからすれば、ラーメンというのは日本を代表する料理の一つらしく、海外にいたときから知っていたらしい。

それを聞いた一誠達は、それなら食べに行こうとアジアを誘ったのだ。

そこまでは良くある話。

だが、アジアが連れてこられたのは人気の無い裏路地にあるこじんまりとした一件の店であった。

それは一誠と久遠が偶に食べに行くラーメン屋。

値段は安いし味は美味しいという、まさに優良店。

だが、店の分かり辛さと店の主の気性の荒さから居着く客がいないという隠れた名店という困った店でもある。

店を最初に見たアジアはその佇まいに戸惑ったが、それでも一誠と久遠の勧めと言うこともあって信用することにした。

これが少女の、初めてのラーメンを口にする機会となった。

ここまでは良い。では、何故ここから一誠が『おごり』などと言ったのか？

それはこの店に歩いている最中の時である。

食べに行くと決まったわけだが、当然一誠にそんな金などある訳が無い。

なら行かなければいいんじゃないかということになるものだが、帰ったところでろくな食糧がないことは嫌と言うほどわかりきっている。

そこで一誠は久遠に集ることにしたのだ。

勿論そんなことを久遠が許すわけもなく、アーシアにとって最早見慣れた取っ組み合いに発展する二人。

そこで一誠は、まずアーシアの初めてのラーメンなのだから奢ってやるのが祝いだと主張。これには久遠も賛同し、アーシアの分くらいなら出すと了承した。その流れで自分の分も奢れと主張するが、それは当然却下される。

一方的に奢れと迫る一誠に、久遠は奢らんと断固とした態度を取る。

そんな二人をどうすれば良いのかと戸惑うアーシアだが、彼女にこの二人を止めることなど出来ない。

平行線を辿る二人の言い争いはこのまま続くと見ていた者がいたのなら誰もが思っただろう。

だが、ここで一誠は隠し球を放った。

前回の大きな仕事……冥界でのキメラ騒動の際に手伝わなかった件を引っ張り出してきたのだ。

勿論それはあの時、久遠が受け取る報酬の1割を一誠に譲渡することと決着が付いている。そのことを怒りながら言う久遠に、一誠はニヤリと笑ってこう答えたのだ。

「台無しにされた制服のクリーニング代を貰ってねえ」

勿論、ただの言いがかりである。

一誠の制服がボロボロに煤けたのは、彼がキメラの攻撃を甘く見て直撃したのが原因であり、久遠に負い目は何も無い。

だが、それまで話を聞いていたアーシアはどう思うだろうか？

アーシアは仕事の細かい状況までは知らない。彼女は帰ってきた

一誠の姿を見て心配し慌てた。

その原因までは察せ無くても、一誠の物言いから久遠が何かしら関与していることには気付くだろう。

勿論、この心優しい少女が久遠を疑うとは考え辛い。

だが、それでも……そんな純粋な少女にそのような懸念を持たれるのは、自称紳士の久遠にとつて耐えがたい物である。

故に久遠はニヤニヤと笑う一誠に奢るという敗北を飲み込んだのだ。

内心ではいつか覚えていろよ、と心に誓いながら。

これにより、一誠はラーメンを奢ってもらうことに成功。

現在ラーメンを啜っていると言う訳である。

実に美味そうにラーメンを啜る一誠を見て、アーシアもそれに習い、慣れないながらにラーメンをチュルチュルと何とか啜る。

「はわぁ、美味しいですー」

その味に喜びを顕わにするアーシア。

その笑顔が見れば奢った甲斐があつたと久遠は自ら納得し、自分の分を食べ始めた。その手に持った財布の軽さを噛み締めながら。

満足そうに笑う一誠、初めてのラーメンに感動するアーシア、そして二人に奢ったため、財布が軽くなり苦笑する久遠。

三人は美味そうにラーメンを食べていく。

そんな三人に向かって店主は再び顔を出した。

「そう言えば餓鬼共。お前等、グレモリー家の姫さんの結婚の話、知ってるか？」

「はぁ？ なんだい、そりゃあ？」

その質問に対し、久遠は興味深そうに店主の話を聞きに掛かる。

対して一誠は興味なさげに聞き流し、更に胃袋に麺を送っていく。

アーシアは最初は何の話か分からなかったが、グレモリーの名を聞いて学校の有名人である先輩の姿を思い出していた。

ここで明らかに可笑しい事に気付いただろうか？

何故、たかがひっそりと佇む人気の無いラーメン店の店主が『グレモリー家の姫』について知っているのか？

一応言っておくが、この店主は人間である。一誠のように神器を持っているわけでも、久遠のように特殊な力を持っているわけでもない。

それなのに、何故『裏』のことを知っているのか？

それはこの店の立場というものが理由である。

別に何か特殊な商いをしているというわけでは無いのだが、どういう訳かこの店は裏の人間や異形の存在が集まりやすいのだ。つまり、一誠達のような常連である。

それらの会話からそう言った裏の情報が集まるため、それを聞くために来る客も多い。結果、この店は裏業界の者達にとっては情報屋のような扱いとなっているのだ。勿論、ラーメンを頼まなければ情報は貰えないのだが。

食いついた久遠に店主は普通に話し始めた。

「何だ、知らねえのか？ 何でも、近々グレモリー家の姫さんとフェニックス家の三男坊が結婚するって話だ。向こうの上級悪魔の間じゃ結構有名な話なんだとさ」

「へえ、そりや随分な話だ。しかし解せねえなあ。何でこつちにその話がまだ来てねえんだ。一応は情報が大事の仕事なんだけどなあ」久遠のやっている仲介屋にも勿論そういった情報が入って来る。

情報が重要なのは今も昔も変わらない。情報一つに黄金の価値があると云っても良い。情報はより金を生む。

だというのに、冥界で有名な話がこちらでは一切出ないというのは可笑しい話だ。

久遠の疑問に関して、店主はそりやそうだと言う。

「何せ話自体は昔からあったらしいからなあ。今更掘り起こされた所で騒ぐようなもんじゃねえんだろ。俺だつて知ったのは三日前くらいだからなあ」

「へえ、そうなのか。てことは、婚約してたってことだろ。その割におっさんの話を聞くからに、めでたいって感じねえなあ」

「正解だ、坊主。聞いた話だと、どうも姫さんはノリ気じゃねえらしい。寧ろ嫌がつてるんだと」

その話を聞いて久遠は疑問に思った事を口にする。

「そりやまた難儀な話だ。そんな話が出るって所から察するに、フェニックス家が強引に話を進めてる……いや、それだけじゃねえなあ。多分グレモリーの現当主もグルって所か。でなけりや婚約なんてさせるはずがねえからなあ。嫌がってるのはお姫様個人って感じか」

「坊主、テメエ仲介屋なんて止めて探偵にでも転職したらどうだ？」

「褒めてもらって嬉しいが、そいつは御免だ。探偵じゃ金は稼げねえ」
二人は冗談を言い合いながら笑う。

そんな二人のやり取りを聞いていた一誠は、数日前に屋上で会ったリアスのことを思い出していた。

あの時の質問を考えれば、何かあったのかもしれない。

だが、それでも結局力及ばず負けたのだろう。だからこそ、こうしてそんな話が持ち上がる。

あの時のリアスは何かに苦しんでいた。

だが……だからどうした。

それが一誠に関わるわけではないし、どうにもしようがない。何より、する理由も無い。

本人の事は本人で解決するものだ。他者が関わって良いものではない。

そんな基本的なことを知っているからこそ、一誠は気にせずラーメンを食べ続ける。

するとそれまで話を聞いていたアーシアは何やら悲しそうな顔をしていた。

「何だか……可哀想です、リアス先輩」

「ああ、何でだ？」

悲しむアーシアに一誠は食べる手を止めずに聞く。

聞かれたアーシアは少し真面目は顔で答えた。

「嫌がってるのに無理矢理結婚させられるなんてあんまりです。確かに事情があるのかもしれませんが、それでも……やっぱり結婚は自分の好きな人としていたいって思います」

「そんなもんか？」

真面目に話すアーシアに一誠は不思議そうに聞き返す。

この男、脳筋のためか、男女の交際や結婚というものが一切抜けている。

自分には縁が無い物なだけに考えるだけ無駄だと悟っているからだ。

そんなアーシアを見てか、さっきまで店主と話していた久遠がからかう様にアーシアに話しかけた。

「あれ、アーシアちゃんはそういう風に考えるのか。なら、『そういう相手』がいたりするのかい？」

「そ、それは……」

久遠にからかわれ、一誠をちらつと見た後顔を真っ赤にするアーシア。

そんなアーシアを不思議に思うも、一誠は特に気にすることはない。

そのまま真っ赤な顔のアーシアをしばらく見ていた久遠だが、再び店主に話を振った。

「ちなみにおっさん、その話は誰から聞いたんだよ」

「ああ、つい三日前にアレ……そう、確かレーディングゲームだったか。そいつで負けたら結婚するって話になって負けたいらしい。その席でサーゼクスの兄ちゃんが酒煽りながら洩らしまくってたよ」

店長はそう言いながらカウンター席の一番端を差す。

どうやらシスコンで有名な現四大魔王の一人にしてリアスの実兄であるサーゼクス・ルシファアが妹の結婚決定にショックを受けて酒浸りになっていたらしい。

それを聞いた久遠は呆れ返る。

「あの魔王様も大概だよなあ」

「かなり可愛がつてたみてえだからなあ。その後銀髪のメイドに引きずられて行ったけどよ」

情報交換と言うよりは世間話に花を咲かせる二人。

そんな二人を気にせずにラーメンのスープを飲み始める一誠。アーシアは少し暗くなったが、どうしようもないことを考えても仕方

ないと判断し考えるのを止めた。

そんな三人と店主一人の空間に突如として携帯が鳴り始めた。

「ん、何だ？」

その振動を感じた久遠は懷から携帯を取り出し、誰がかけてきたのかを確かめる。

そして出ていた文章を見て、一誠達にニヤリと笑いかけた。

「どうやら今話題のホットな人物からの電話らしい」

その差し出された掌に載せられていた携帯、そのモニターには……。

『サーゼクス・ルシファー』

その名が刻み込まれていた。

19話 彼ははつきりと答えない。

さつきまで世間話をしていたら、その話の根本にいる人物から電話がかかって来た。

その事実にも久遠と一誠は何かツボに入っただけで、アーシアは魔王と聞いて慌てる。

「な、何で魔王が！ ど、どうしたらいいんですか、イツセーさん！」

「別にそんな慌てんなよ。ただ電話が掛かってきたってだけだぜ」

「そうそう、一応はお得意さんだからね。驚くようなことはねえって。寧ろこのタイミングで来たって所が笑えて仕方ねえ！」

アーシアは笑う二人にそう言われはするが、それでも彼女は混乱してしまう。

何せ今まで教会で育てられた少女なのだ。悪魔は敵だと教えられてきた少女の前に、いきなりその王様が連絡を入れて来たのだから驚くなど言う方が無理なのかも知れない。一般人的な感覚で言えば、家で留守番していたら、某国の大統領からいきなり電話が掛かってきたに等しいのだから。

目の前で起こっている事に困惑するアーシアを尻目に、久遠は笑いを堪えながら携帯の電話を繋げた。

「つく……はい、もしもし。仲介屋の久遠です。魔王様にはいつも御鼻根にしておいただき、誠にありがとうございます」

笑いを堪えながら丁寧語で営業トークのように話し始める久遠。

それを見て一誠は猫被ってやがるとアーシアに分かるよう久遠に指を指して笑う。

『いや、此方こそいつも無理難題を押しつけて済まないと思っている。それで申し訳無いんだが、今回もまた仕事を頼みたくてね』

携帯のスピーカーから聞こえたのは、落ち着きのある青年の声であつた。

その声を聞いてアーシアは若干ながらに驚く。

魔王と言えば邪悪な存在の親玉。その声は聞く者全てを恐怖させる恐ろしい声をしている、と言われている。

しかし、実際に聞いてみれば普通の人と大差がない声なのだから、如何にそれまでの教えが一方的な言いがかりなのかが良く分かる。そんなアーシアに笑みを返しつつ、さらに久遠は魔王に向かって話す。

「それはまたどうも。ちなみに聞きますが、それはここ最近噂になっているグレモリー家とフェニックス家の結婚に関係ありますかな」
『おや、もう知っていたのかい。流星は情報第一の仲介屋だ。しかし、良く分かったね。その情報は外部に漏れぬようにしていたはずなのだが?』

電話越しから魔王が感心する声を上げる。

それを聞いて、一誠と久遠は噴き出しそうになるのを必死に堪えた。

何せ、この二人は今から恐れ多くも、悪魔の王をからかおうというのだから。

そのための布石をつい先程久遠が巻き、一誠はそれに気付いたからこそ、二人して笑っているのだ。

久遠は腹を押さえながら、喉がひくつくの堪えつつサーゼクスの疑問に答える。

「いえね、私達も今知ったばかりでして。何でも、この間サーゼクス様がラーメン屋でその件について酔いながら愚痴を漏らしていたと聞きました。その原因が妹君の望まないご結婚だとか」

『ぐうっ……………ま、まさか聞かれていたとは。確かにあの時は悲しみのあまり悲嘆に暮れてはいたし、かなりの酒が入っていたとは言え…………』

「店長が教えてくれました。その後奥さんに引きずられて行ったことまで、全部」

『ぐはっ!? そ、そんな所まで見られていたとは…………』
携帯越しでも精神に多大なダメージを受けたことが分かる声を出すサーゼクス。

その声を聞いて一誠は再び腹を押さええて悶え苦しんでいた。勿論、笑いを堪えるのに必死になっているからである。

それには流石のアーシアも同じで、少しばかりだがクスクスと笑ってしまった。

今まで学んできた魔王像が悉く破壊されていく光景は、確かに可笑しくて笑えるだろう。

もう彼女の中の魔王像は崩壊し、残されたのは普通の人間と変わらない人物像であった。

サーゼクスの様子を聞いて久遠はからかうことに満足したのか、軽く咳払いをして話を戻す。

「まあ、魔王様から連絡が来た時点で大体の話は予想出来ましたが、ね。改めてお話を伺っても？」

『ああ、そうだね。そう言ってくれると此方も有り難い。それで依頼したいことなんだが……正直に言おう』

そこで一端言葉を切るサーゼクスに、皆の意識が集中する。

そして一拍の間の後に、サーゼクスは言った。

『妹の結婚式で新郎を倒し、結婚式を台無しにしてもらいたい。そして結婚を解消したいんだ』

その話を聞いた久遠は何となく予想はしていたと言った感じの顔をし、一誠はサーゼクスのシスコンもここに極まれりだと心底思った。

それに対し、アーシアは少しばかり喜ぶ。

やはり望んでもいない結婚を家族が認めている訳ではないとわかったから。

家族はやはり家族の事を想っているということが、今の生活を送るアーシアには凄く嬉しいことだから。

その話を聞いた久遠は漏れ出しそうになる笑い声を噛み殺し、冷静に勤めようと一回深呼吸した後に再びサーゼクスに話しかける。

「それはまた無理難題な話ですね。当然、ご自分が仰っていることがどういう意味なのかはお分かりで？」

『ああ、分かっている。この結婚は純血悪魔にとってかなり重要な事だ。当然、私の一存でどうになるものではないし、我々悪魔にとって今後のためにも両家の良縁は好ましい』

それは魔王としての立場の意見。

確かに悪魔の今後を考えれば、純血悪魔の結婚は好ましいことである。

だが…………。

『魔王として、今後の悪魔の未来を考える者としてはこの結婚は歓迎すべきことだ。だが、それでも…………家族としては、やはり反対だ。結婚はやはり好き合う者とするべきだ。私がそうしたようにリアスにも、彼女が好きになった人と結婚してもらいたい。いくら両家のためとは言え、そんな好きでも無い男と結婚するなど生け贄のような行為、正直反吐が出る』

家族としてはやはり認められないのだろう。

誰だって好きでも無い者と結婚などしたいとは思わない。それが両家の深まりを強める政略結婚であるのなら、尚のこと。本人の意思をねじ曲げてまで強引に進めるこの結婚に彼個人は反対なのである。それも彼が結婚しているというのにシスコンというのがかなり大きかったりするのだが。

語気が多少荒くなり始めているサーゼクスに、携帯越しに落ち着くよう久遠は声をかける。

「魔王様、落ち着いて下さい。確かに組織の長としての判断は結婚が正しい。ですが個人として、家族としての魔王様の感情も正しいものです。両者を両立させるのはとても難しい」

『分かっている。君の言う通り、両者の意見を摺り合わせるのは難しいことだ。このように対極ならば尚更。妥協点もないのだから、どうしようもない。だが、それでも…………私は反対なんだ』

はつきりと反対の意思を口にするサーゼクス。

久遠はそれを聞いて口に笑みを浮かべる。その口調から、その意思が揺らぐことが無いことが分かったから。

「魔王様の意思が堅い事はわかりました。ですが、当然反感が起こることはお分かりですよ。何か手立ては？」

『ああ、それについては考えてあるよ。そのために君から彼…………今世の赤龍帝である赤腕の協力が必要なんだ』

それを聞いた一誠はそれまで傍観者を決め込んでいたのだが、自分の名が出たことで興味をそそられたらしく、久遠から携帯をひったくった。

「あ、おい、イツセー!？」

「もしもし、アンタが魔王、サーゼクス・ルシファアかい」

電話の向こうにいるのが魔王だと知っていても、一誠は態度を変え
ること無く話しかける。

その様子に久遠はあちやくと額を押さえ、アーシアは流石に焦る。
向こうは電話越しとは言え魔王なのだ。一国の王相手にして良い態
度では無い。

『そうか、君が赤腕か。その名は冥界でもかなり知れ渡っているよ』

「そいつは結構。別に社交辞令がしてえってわけじゃねえんでな。ア
ンタのその案が聞きたい」

『そうだね、では簡潔に説明しよう。君には結婚式当日に式に乱入し
てもらい、そこで新郎であるライザー・フェニックスと戦って貰いた
いんだ』

「つまり俺に結婚相手をボコレと」

『まあね、否定はしないよ』

一誠とサーゼクスの会話を聞いて、それまで黙っていた久遠が口を
挟む。

「ですが魔王様。それだと、どう考えてもイツセーが悪役にしかなら
ないのですが」

『そのままならね。だから彼が式場に入ってきた所で私がこう言え
ばいい。「彼は私が特別に呼んだ強者の人間だ。もし彼に勝てないよう
なら、フェニックスもその程度ということ。そのような者をグレモ
リーと一緒にさせるわけにはいかない」とね』

「成る程。そういうことですか」

久遠はサーゼクスが言っていることがどういう意味なのかを理解
し、ニヤリと笑う。その笑みを見て、一誠は久遠にどういうことを
聞く。

「どうということだよ、久遠。一人で納得しやがって」

「はあ……本当、お前って頭が悪いよなあ。まあいいや。いいか、悪魔の政情ってのは貴族階級で行われている。当然身分の上下があるんだが、得てして全員同じ共通した考えがあるんだよ」

「何だよ、それ？」

「悪魔ってのはなあ……基本人間を下に見下すんだよ。まあ、今話してる魔王様やグレモリーの姫さん、シトリー家の姫さんなんかはそんなことねえんだが、人間は身体能力や寿命、魔力の差なんかが他種族に比べて弱いからな。だから見下されやすい」

それを聞いた一誠は若干苛立ち拳を握り始めた。

別に人間のために怒っているのではない。

ただ、久遠の話を聞いた限り自分が馬鹿にされているように思ったからこそ、怒り始めているのだ。もし、そのような事を吐く悪魔が目の前にいるのなら、一誠は容赦なくその顔面に左拳を叩き付けているだろう。

その怒気にアーシアは少し怖がり、店主は一誠に店のモンを壊すなと釘を刺す。

そんな一誠に苦笑を浮かべながら、久遠は何故サーゼクスがそんな事を言い出したのかを説明する。

「いいか、いくら魔王様でもこの結婚は邪魔出来ねえ。でもな……もしその新郎が人間如きに負けるような軟弱な奴だとしたら、流石にそんな奴と結婚させようとは思わねえだろ。つまり魔王様はお前をけしかけることで、フェニックス家の三男坊に結婚相手失格の烙印を押そうってわけさ」

「大体は分かった。要はその結婚相手をボコって弱えつてことを周りに見せつけられたいってことだろ」

「そういうこと。変に考えなくてもいい単純な話だろ」

一誠は小難しく考えるのが面倒になり、かなり単純に自分の中で話を纏める。

それを聞いて久遠が大体を肯定する。

『まあ、久遠君が言っている通りだ。いくら名家とは言え、流石に人間に負けるような者をリアスの夫とは誰も認めないだろうからね。そ

れで報酬だが……一億でどうだろうか？』

「一億っ!？」

サーゼクスの出して来た報酬金額に久遠とアーシアが驚愕の声を上げる。

久遠は過去最高の、それこそ一攫千金並みの報酬に驚き目を輝かせる。アーシアは普段はのんびりとした少女だが、流石に金銭感覚は普通な常識人であり、如何に一億という金額が凄まじいのかを理解しているからである。

その報酬に久遠は一誠に詰め寄り、即座に叫ぶ。

「おい、イツセー！ 絶対にこの仕事受けるぞ！ 一億なんて額があれば、今後の人生バラ色決定だぞ！ しばらく遊んで暮らせる！ それどころか一生安泰だ！」

テンションが一気に上がる久遠に対し、一誠はその破格を突き付けられても表情を喜びには変えない。

そんな一誠に久遠が食って掛かる。

「どうしたよ、イツセー！ 一億だぞ、一億！ それだけあればお前だってもう毎日の食事や生活に困ることも無くなるってのによお！」

食らい付く久遠に対し、一誠は少し沈黙した後に静かに答えた。

その様子はとても喜びに満ちているような表情ではない。

「いや、この仕事……まだ決められねえ」

「はあっ!? 何考えてるんだよ、お前は！ 一億だぞ、一億！ 悪魔一匹ボコるだけで一億！ 考える必要なんてねえだろうが！」

尚も食い付く久遠に一誠は返事を返さず、そのままサーゼクスに向かって返答を返す。

「この仕事、まだ受けるかどうかは決められねえ。悪いが最悪、他を当たってもらいかもしれねえ」

『そうか……少し残念だが、断られたわけではないからまだ待つことにしよう。リアスの結婚式は今週の土曜の午後一時からだ。それまでに返事を聞かせてくれ。では……』

サーゼクスは一誠にそう伝えると、通話を切った。

切られた携帯を見て、久遠は正気を疑うような目で一誠を睨み付け

る。

「何でやるって言わなかったんだよ！ 一億なんて報酬、それこそ一生手に入るかわからねえ代物なのによお！ お前、馬鹿じゃねえのか！！」

批難する久遠に一誠はただ無言で返す。

普段ならこんな風に言われれば即座に食って掛かる一誠だが、今回は言い返すことをしない。

彼の脳裏に過ぎったのは、屋上で見たリアスの諦めが含まれた笑みであつた。

それが仕事の話を聞いた時から思い出されて消えることがない。

一誠はそれが気に掛かり、歯切れの悪い返事を返したのだ。

そして久遠はそんな一誠が考えていることに気付き、呆れ返って悲嘆に暮れた。

「その様子じゃどうせまた下つらねえこと考えてやがるな！ ああ、もう、何でもこいつはこうも損得勘定だけで動かねえかなあゝ」

そのままショックに悶える久遠を尻目に一誠とアーシアは残っているラーメンつを啜り始めた。

その気まずい空気をアーシアは感じながらも、一誠の何とも言えない顔を見つめていた。

20話 彼は人の意思を尊重する

ラーメン屋での依頼の話、その返事を返せずに時間は過ぎて土曜となった。

それまでの間に久遠からは、幾度となく一誠の説得が行われた。だが、それでも一誠は首を縦に振らない。

一誠にとつて、決して嫌な仕事では無い。

寧ろ報酬だけ見るのなら、寧ろ受けた方が良いとさえ思っている。

一億円……久遠と分けても5000万円。

それはあまりにも魅力的な金額だろう。

だが、それでも一誠は渋る。

断つてはいないのだ。しかし、やるとも言っていない。

一誠にしては随分と珍しい歯切れの悪い状態に、最初こそ怒っていた久遠であったが、結婚式が段々と間近に迫っていくにつれて寧ろ一誠を心配し始めた。

それはアーシアも同じであり、最初こそ望まない結婚をさせられるリアスが可哀想だから助けるべきだと一誠に進言を何度も何度もしていたが、はつきりしない一誠のことが寧ろ心配になってそのことを更に強く言えなくなってしまう。

そのように、彼を知る者ならば誰もが見ても分かる一誠の変化に久遠もアーシアも戸惑ってしまう。

そして結婚式当日である土曜になったところで、久遠は気まずそうに一誠に話しかける。

「イツセー……どうするんだよ、あの依頼。未だに魔王様から連絡が来ねえって辺り、たぶんまだお前のこと、待ってると思うぞ」

久遠の声に対し、一誠から反応はない。

その様子に今度はアーシアが声をかける。

「イツセーさん………」

二人の心配を含んだ声に一誠はそれまで反応を返していなかったが、やっと顔を上げた。

その表情は寧ろ清々しさすら感じさせる程に、澆刺とした顔をして

いる。

「やつと来たか……待ってたぜえ、この時をよお……」

「え……?」

一誠のその言葉に久遠とアーシアは二人でほぼ同時にそのような声を出して惚けてしまう。

何せ、それまで全然反応を返さなかった一誠が急にそんな反応をしてきたのだから。

一誠はそんな二人に向かって少しだけ申し訳なさそうに謝る。

「二人とも、悪かったなあ。実はよ、待ってたんだ、俺は。今日をよ」

「はあ? それってどういうことだよ?」

「イツセーさん、どういうことなんですか?」

一誠の言葉の真意を掴めない二人は、不思議そうに一誠に聞く。

普段は久遠の言葉の真意を掴めないことが多い一誠という構図だが、今回に限っては真逆である。そのことに久遠は尚更一誠に食いかかる。

二人の問いかけを受け、一誠はしたり顔で答えた。

「今日じやなきや、あの先輩の居所はわかんねえだろ。だから待ってたんだよ。今日って日をなあ」

「それって……」

一誠の言葉を聞いて、アーシアは口元を押さえ感激する。

それがどういう意味なのか? 勿論誰でも分かるだろう。

久遠もそれに続いて喜びを顕わにする。

「イツセー、やつと受ける気になったか! まったく、ヒヤヒヤさせやがって!」

喜びながら一誠の背を叩く久遠。

だが、一誠はここで予想外の事を言い出した。

「悪いな、久遠。まだ受けるとは言ってねえ」

「はあ!? どういうことだよ。そこまで来といてそいつはねえだろ! だったら何で行くなんて言い出したんだ、お前! いい加減はつきりさせろよ!」

持ち上げられた後に一気に落とされたことで、久遠の顔がかなり怒

りに歪む。誰だってこうされれば怒りたくもなるだろう。

そんな怒りを顕わにする久遠に一誠はニヤリと笑いかけた。

「そいつはあの先輩に会ってから決める。だから久遠……とつと行くぜ」

一誠は久遠にそう言うなり、外へと向かって歩き始める。

「あ、ちよつと待てよ、イッセーっ!!」

その背を見て慌てて久遠は一誠の背を追いかけて、アジアはそんな二人を見て顔を綻ばせた。

何故なら、彼女はここに来て一誠の真意を理解したから。そして彼女は一誠の見えなくなっていく背を見ながら思う。

（本当に……不器用でぶっきらぼうで……でも、とても優しい人です……）

冥界のとある城にて、そこでは盛大なパーティーが行われていた。

その場に集まっているのは、悪魔の中でも特に階級の高い貴族達。彼等がここに集まっている理由は一つしか無い。

この度行われるグレモリー家とフェニックス家の結婚式、それがこで行われるのだ。正確に言えば結婚決定のお披露目式とでも言うべきだろうか？

それにより、この場には格有数の貴族悪魔達が集まっていた。

「いやあ、純血悪魔同士の結婚とは、めでたいものですなあ」

「そうですね。これでより、我々の種族は繁栄しますね」

口々に皆からそのような祝福の言葉が上がる。

勿論それは表だけのことであり、裏では何を思っているのか、知りたくも無いような程に悪意と嫉妬で満たされている。

そんなうわべだけの言葉を聞いて、仕方なく式に参加していたリアスの下僕一行は顔を顰めていた。

「皆、祝う気なんか全く何というのに、何でこんなことをしなければならぬのかしら？」

「僕達が不甲斐ないばかりに部長は……」

「……………部長……………」

皆悔やんでいた。

前のレーティングゲームにて、皆リアスのために頑張った。だが、結果は見ての通り惨敗。それにより、皆の主はこうして望みもしない結婚をさせられることとなった。

それが何よりも悔しい。主の望みを叶えられずして何が下僕だろうか？

だが、それでも主の結婚式に参加しないわけにはいかなかった。これ以上、主の顔に泥を塗るわけにっこいかなかったから。

その思いはこの場にいる彼女の兄にして現四大魔王の一人。サーゼクス・ルシファーも一緒であった。

魔王としての立場から考えれば望ましいこの結婚式。

だが、家族としては最愛の妹が望まない結婚をさせられるというのは耐えられなかった。

その相反する立場からのジレンマが彼を苦しめる。

彼なりに手は打ったつもりだ。

もし受けて貰えたのなら、彼は自ら茶番を演じることでこの結婚式を潰していただろう。

だが、彼がした依頼の返事は帰ってこなかった。

他に依頼すればよかったのではないかと思うが、彼にとってその久遠が最もなお得意様であり、そして最も信頼の置ける部外者であったから。久遠以外に考えられる人物は居なかった。

だからこそ、彼はこの結婚式に関して、もう諦めを感じつつあった。

コレは仕方ない事なのだと。身内としては納得がいかないが、魔王としては喜ばしいことなのだと、自分を納得させつつあった。

そのように、リアスの結婚を望まない者達も含めたまま、この結婚式は進んでいく。

そして遂に奥の扉から出てきた男女の二人。

真っ白いウエディングドレスを纏ったリアスと、同じく真っ白い衣装を纏ったフェニックス家の三男、ライザー・フェニックス。

二人の美貌を見て、その場から感嘆の声が上がり拍手が巻き起る。

それを手で軽く制してから、ライザーはこの場に來た貴族悪魔達に感謝の言葉を述べていく。

その堂々とした立ち振る舞いは勝者のそれであり、見ていたリアスの下僕達は惨めさを噛み締める。

「この結婚が私達、悪魔のさらなる繁栄を目指して……」

ライザーの口から語られる標榜、それが例え真実でなくても皆聞くのに集中する。

そしてライザーが言い終えた瞬間、突如として……。

城の天井が崩れ落ちてきた。

轟音と共に落ちてくる天井に、その場にいた貴族達は悲鳴を上げながら逃げ出していく。中には防御結界を張りつつ後退する者もいた。

「何事だ、一体!!」

突然起こったことに辺りは騒然とし、ライザーは驚きながらも警戒し、声を張り上げる。

そんな騒ぎの中、リアスの下僕達やサーゼクス、そしてリアスと旧知の仲であるソーナは見た。

落ちてきた天井がもうもうと煙りを上げる中、その中からゆつくりと動き出す一つの影を。

煙が晴れていくと共に見え始めた、真っ赤な左腕を。

そこには一人の青年が立っていた。

茶色い髪をした、何の変哲もない『人間』。

その左腕からは凄まじい赤きオーラを滾らせながら、その少年はその場から動かずに首をゆつくりと巡らせ、そして声を上げた。

「あ、見つけた。よう、先輩。久しぶりだな」

その声をかけられた人物……リアスはまるで信じられないような物を見たような顔で声を出した。

「ひよ、兵藤くん………何で………」

天井を破壊してこの部屋に入ってきた人物……一誠はリアスの様子を見て、少し気まずそうにした後に、ゆつくりと口を開く。ニヤリと口元をつり上げながら。

「なあに、ただの気まぐれだよ。ぶっちゃけて言やあ、ウチの乙女の味

方様が助けろって五月蠅いんで様子を見に來ただけだ。だが、まあ……一応の確認だな」

「な、何を……」

一誠にそう言われ、リアスは何とか返事を返す。

その光景に誰も何も言えなかった。

侵入者にして良い対応では絶対に無い。それは主賓であるライザーが一番分かっている。だからこそ、ライザーは動こうと、妻となる女を守ろうとした。

だが、出来なかった。

まるで何かに押さえつけられているかのように、一誠が発する威圧感が途轍もなかったから。左腕から溢れ出すオーラがただの人間であるはずが無いということを理解させるから。

皆が一誠一人によつて殆ど動けない中、一誠はリアスにゆつくりと問いかける。

「なあ、アンタ……もう諦めてるか？」

「な、何を……」

「アンタはもう、結婚するしかないって諦めてるのか？」

「だって、もう……ゲームで負けてしまったし、するしか……」

それを聞いて一誠はリアスを睨み付ける。

その殺気めいた睨みにリアスは怯んだ。

「そうじゃねえよ。アンタはどうなんだ！ 結婚するしかないって諦めてんのか、それでも嫌だって心底思ってたんのか、どっちだ!!」

その声に、まるで糾弾出されるかのように責められるかのように問われた問題に対し、遂にリアスの皮が剥がれた。

「そんなの……嫌に決まってるじゃない！ 私は確かに貴族だけど、それでも普通に人を好きになって、普通に恋愛して結婚したいの！ グレモリー家のために結婚するのは仕方ない！ でも、せめて、相手は私が愛した人じゃなきゃ絶対に嫌よ！」

リアスがこれまでずっと溜め込んでいた感情。

それを吐き出し。聞いた周りは啞然とする。

そんな中、その答えを受けた一誠はニヤリと、納得した笑みを浮か

べた。

「いいねえ、そうだよ。その答えを待つてたんだよ！ 誰からでもねえ、自分の気持ちちつてやつをよお！ 嫌なら嫌ってそう言やあいんだ！」

一誠は笑みを浮かべながら事の成り行きを見守っていたサーゼクスに向かって振り返る。

「おい、魔王様。妹さんはそうらしい。だから……受けてやるよ、この仕事！ 報酬は返事が遅れた分、半分で十分だからよ！」

その叫びと、仕事を受ける証を立てるかのように、その城から赤い光の柱が立ち上った。

21話 彼は下らない事でも命を賭ける

一誠が結婚式が行われる城に突入する少し前。

久遠と一緒に人気の無い廃墟に向かっていたときの話。

仕事をこの時点では受けると言っていないのに、一誠は何かを確信したかのようにぐんぐんと進んでいく。

その背に久遠は戸惑いつつも追いつき、そして一誠に問い出す。

「おい待てって、イツセー！　どういふことか説明しろよ」

呼び止められ振り返る一誠は、彼にしては珍しく馬鹿にするような目で久遠の事を見ていた。いつもならば、その目は久遠が一誠に向けている視線である。

「おいおい、まだ分かんねえのかよ。ここまで来て分かんねえってのは相当アレだぜ。一回病院で見てもらった方が良いんじゃないか？」

「テメエに言われたくねえよ！　いきなり何か決め込みやがって！

いつもは人の説明を噛み砕かねえと理解出来ねえオツムのくせに、逆に自分が分かってて他が理解出来ねえからってドヤ顔しやがって！

ああ、まあいい！　取りあえずちゃんと分かるように説明しろ！」

これから行う事は途轍もなく危ない事。下手をすれば全悪魔を敵に回すかもしれないという大事になるかもしれないというのに、一誠は気にした様子も無く久遠と道すがらギャアギャアと騒ぐ。

そして騒ぎながらも、一誠は珍しく説明する側に回って久遠に話し始めた。

「俺が直ぐに答えなかったのはなあ……気にくわなかったのさ」

「気にくわなかった？」

「ああ、そうさ。あの魔王が言っていることも大体分かる。テメエの面子を考えれば仕方ねえかも知れねえ。そのために俺達に依頼してきたのも分からなくもねえ。俺と違って立場つてもんがあるから動けねえのも仕方ねえ。あの魔王様は真面目だと話してて思ったよ。それでも家族を救うために少しでも行動を起こそうとした。そいつは褒められる。だったらテメエで何とかしろって言いたくもなるが、世の中上手いかねえってことくらいは俺でも分かる。少なくともあ

の魔王は頑張ってたよ」

そこで一旦言葉を切る一誠。

彼なりに魔王であるサーゼクス・ルシファーを評価しての言葉だ。家族のために何かをする。それは一誠が行っていることにも当然通ずる物があり、彼個人としては好感が持てる。

だが、そこで一誠は口調を厳しい物に変えた。

「だが、その妹である姫さんはどうだ？ 一回負けただけで諦めたのか？ それ以降一切の行動も起こさずに何もしてねえんだろ。してたらあの魔王が俺達にあんな依頼なんてしねえ。諦めて何もしねえ奴を助けるなんて事、俺はいくら金をつぎ込まれようと受ける気はねえ。諦めたら、そこからは何もねえんだからなあ」

それは一誠の持論。

世の中一番しぶとい奴は諦めない奴だ。

それも明るいものだけではない。執念や妄執といった悪感情も含まれる。

これらに通ずる最もシンプルな思いは『諦めない心』だ。

それを持っている奴は、どのような状態や状況になろうとも活路を見いだす。

そして状況を逆転させるべく、それまで以上の力で反抗するのだ。その強さこそ、人が最も持っているであろう本能……生存欲である。

三大欲求の更に上、最上部に位置するこの欲こそ、人の根幹。

それを本能で分かっている一誠は、諦めない者のことが嫌いでは無い。その強さが好きだから。

教会から追放され、更に周りから裏切られても尚、信仰を捨てないアーシアのことを気に入っているのは、その諦めない心が強いからだろう。

逆にすぐ諦める者のことは嫌いなのである。

体裁や状況で諦めることは仕方ない。

実際、一誠は逃したタイムセール品の品物をいくら諦めないようにしようとも、その時はもう手に入らないのだから。

だが、心までは諦めていない。

今回のセールでは絶対に手に入れると闘志を燃やすのだ。

そのように、心の底では諦めていなければ、まだ見る価値はある。本当に価値が無いのは、心まで完璧に諦めた時だ。

「だから俺は確かめたいのさ。あの姫さんがもう『諦めちまった』のか、そいつをよ。そのためにこうして待ってたってわけだ」

「道理でお前にしては不気味なくらい歯切れが悪りいと思ったよ！そんなくだらねえことで返事引つ張りやがって！」

またこいつはあ、と呆れ返る久遠。

二人が連んでから結構経つ。それ故に相方がどのような性格をしているのか、お互いにある程度把握している。だからこそ、久遠は呆れ返っていた。

兵藤 一誠とは、所謂………面倒な性格の男なのである。

シンプルかと思えば妙に複雑な一面を持ち、何よりも自分の信念とでも言えるような物には絶対に考え、そして譲らない頑固者。

だが、それ故に絶対に裏切らない。

それが分かっているからこそ、久遠も一誠と連んでいるのだ。

二人して廃墟に向かいながらこうして話し合い、何故一誠が未だに返事を渋っていたのかを知った久遠。

そんな久遠に更に一誠は無茶な事を言い出した。

「ああ、それと俺はあの魔王に渡された転移魔方陣入りの招待状は使わねえ。あれはお前が使ってくれ。その代わり俺を転送してくれよ。その城の上によ」

「別にそいつはいいけどよお……何でそんな面倒臭い真似するんだ？」

一誠の発言に何かしようと企んでいることを察する久遠。

それについて何をしようとしているのかを聞こうとする久遠に、一誠はニヤリと愉快そうに笑う。

「なあに、せっかくのお祝いの席なんだから。だったら花火を上げてやろうじゃねえか。派手な花火をよ」

そして一誠は宣言通り結婚式が行われる城の上空へと転送され、空中で赤龍帝の籠手を展開し、そこで力をほんの僅かだが解放。

赤き龍のオーラを纏いながら落下すると共に身体を回転させ、遠心力の加わった左拳を城へと叩き付けた。

結果、轟音を響き渡らせながら城の天井を崩壊させ、瓦礫と共に城へと突入した。

そしてリアスを見つけるや否や、周りを威圧するかのように殺気を放ちながら話しかけ、その真意を……本音を吐き出させた。

それを聞いて一誠はニヤリと悪い笑みを浮かべ、上機嫌にサーゼクスに仕事を引き受ける旨を伝えた。

その事に内心では喜びつつも、このような入り方をされて驚いているサーゼクス。

そんな彼を正気にさせるかのように、その部屋の出入り口から大きな声が一誠にかけられる。

「デメエ、何勝手に報酬安くしてんだよ！俺はそんなこと一言も聞かされてねえぞ！」

その声に周りにいた悪魔達は一斉に声の方を向く。

その視線が集まる所にいたのは、一人の『人間』であった。

真つ黒い髪をした、何処にでもいそうな普通の人間。

だが、この悪魔達が集まる場では酷く別の意味で目立ってしまったている。

何が目立つかと言えば、そのあまりにも『普通』なことだろう。どこに居ても違和感がない。例えば悪魔達が集まっているここにいても、違和感が全く感じられないのだ。

それが明らかに異常であることは、この場にいる力の強い者ならばわかるだろう。

それぐらい彼は自然に溶け込んでいた。

彼……正規の手段である招待状を使って中に入ってきた久遠は若干キレながら一誠に吠える。

吠えられた一誠は空いている右腕で久遠を押さえるように動かしながら答えた。

「そう言うなよ。遅れたつてのはこつちが悪いんだからよ。それぐらいいいじゃないか。お前も良く言つてんだろ……仕事は誠意だつてなあ」

「確かにそう言っちゃあいるが、それでもこの額でそれはきつ過ぎんだらうが!!　そもそも、返事が遅れたのはテメエのせいだらう!」

「だから言ってるんだろ、悪いって」

まったく誠意の感じられない謝罪に怒りをどうすることも出来ない久遠はワナワナとしつつ、少しすると疲れたかのように脱力した。彼は知っているのだ、一誠がこうと言い出したら絶対に曲げないことを。

それに関してもう諦めをつけた久遠は、そのままゆつくりと歩き出しながらサーゼクスに話しかけた。

「いやあ、相方が遅れてしまつて申し訳無いです。どうも、毎度御贔
屣にしていたいただきありがとうございます。今回は突然返事を返して
しまつて申し訳無い」

「い、いや、確かに驚いたが……それでも引き受けて貰えて嬉しいよ」

サーゼクスの声を聞き、今まで理解が追いつかず置いてきぼりになつていた悪魔達はやつと気を取り直し、そして騒ぎ始める。

何故人間がいるのだと。

何故人間如きがサーゼクスに気安く話しかけているのかと。

一体城の警備はどうなっているんだと。

様々な事が持ち上がったては騒ぎ憤慨する。

いきなり侵入者が現れ、しかもそれが彼等の長たる魔王と何かしら話しているのだからそれも当然の反応と言える。それも彼等が見下している人間なのだから、尚のこと。

だが、その喧噪は再び止むことになる。

[illegible]

一誠の苛立ちが込められた叫びと共に嘔き出すオーラ。

それにより彼の足下はえぐり取られ、辺りに散らばった瓦礫が吹き飛び城その物が揺れる。

その殺気立った迫力に皆がそれまで騒ぎ立てていた口を紡ぐ。

目の前にいるただの『人間』をに対し、彼等は本能的に恐怖を感じたのだ。

口を開こうものならば殺されると、見下していた存在に対して彼等は確かに退いていた。

一誠は周りを黙らせると、それまで一誠の存在感に飲み込まれそうになっていたライザーに目を向ける。

その目はまさに、肉食獣が獲物を見つけたときの目であった。

強者が叩き潰すと決め、愉悦を込めた笑み。

それを向けられたライザーは背筋が凍り付いたかと思う程に固まる。

だが、それでもプライドにかけて、自らを奮い立たせて一誠を睨み付ける。

「貴様、どういうことだ！ 何故人間如きがこのような祝いの席にいる！」

彼の言葉は周りに居る悪魔達の総意であった。

それに対し答えたのは、一誠ではなくサーゼクスである。

「それについては私から説明しよう」

サーゼクスの言葉に再び周りは騒がしくなる。

何故サーゼクスが説明するのかと。それはつまり、目の前に現れた人間はサーゼクスが何かしら関与しているということを示唆している。

尚も騒がしく動揺を顕わにしている悪魔達に対し、サーゼクスは周りにも聞こえるよう、ゆっくりと、しかし確実に説明を始めた。

「此度の両家の結婚に関し、私は少し不満に思うところがあってね。片や成人して何度もレーティングゲームを経験している猛者。もう一方はまだ成人しておらず、レーティングゲームのやったことがない。その上配下の数は全然に揃っていない。それでは勝利など目に見えて分かるというもの。そのような不利な条件で戦わされて負けてはあまりにも不憫だろう。ハンデもなしに戦わされたのだから。故に私からちよつとした余興を用意した」

そこで一旦言葉を切ると、一誠に向かって軽く手を向ける。

そして一誠に向かってサーゼクスはクスッと笑った。

その笑みに一誠も笑い返す。

「彼……人間の中でも特に強者と言われている、通称『赤腕』と新郎は戦って貰おうか。コレに関して可笑しいと思われるかもしれない。だが、逆に言い替えよう。『人間如きに負けるような者にグレモリーと結婚する価値があるのか?』とね」

それはこの場にいる全ての悪魔への挑発。

たかが人間に及び腰になっている者は悪魔としてどうなのか、と。

それを聞いて頭に血を昇らせる者は数多くいただろう。その中でも一番怒りを滾らせたのは、勿論その渦中の張本人であるライザー・フェニックスだ。

「それはつまり、俺の実力を疑われているということですね。魔王、サーゼクス・ルシファー様」

「別に君が強いということは知っているよ。だが、それでもあのレーティングゲームは一方的だったのね。あれの延長戦とでも思えばいい。何、彼は本当にただの人間だよ。神器を持っているとはいえ、それだけだ。『人間如き』に負けるフェニックスではないだろう」

丁寧な口調だが殺気だった目でサーゼクスを睨むライザーに、サーゼクスは不敵な笑みを浮かべてそう答える。

その挑発にライザーは見事に乗った。

「いいでしょう。魔王様が押すあの人間、見事我が炎で燃え散らせてご覧に入れましょう!」

その返事を聞いて周りの悪魔達も乗り出す。

そしてサーゼクス本人も内心では上手くいったと笑った。

彼はそのまま周りに聞こえるよう大きな声で一誠とライザーが戦うことを発表する。

「それではこれより、赤腕とライザー・フェニックスの両者による決闘を行う! レーティングゲームのシステムを応用することで死にはしないが、それ相応の大怪我は覚悟するように。これで赤腕が勝てば、ライザー・フェニックスはリアス・グレモリーの伴侶としてふさ

わしくないとし、此度の結婚を取り消しにする。ライザー・フェニックスが勝ったのなら、莫大な褒美を与えた上に、このルシファアの席に座る者としての候補に加える。以上、両者とも決死の覚悟で挑みたまえ！」

それを聞いて盛り上がる悪魔達。

ライザーには羨望の眼差しと激励の声が、一誠に侮蔑と嘲りの声が飛び交う。

圧倒的な敵地。

だというのに、一誠は不敵な笑みを崩さない。

そして久遠もまた、余裕に満ちた笑みを浮かべている。まるで周りを気にしていないかのように、悠々としていた。

そのまま一誠とライザーは急遽作られた結界内の空間に転送されることになり、先にライザーが転送されていく。

そして今度は一誠が転送される番になったが、転送される前に一誠を呼び止める者がいた。

「ねえ、どうして？ どうしてこんな危ないことをするの！」

それはそれまで渦中にいたはずなのに、何故か蚊帳の外へと出されてしまっていたリアスだ。

彼女は何故一誠がこんな危ない真似をしているのか理解が出来ない。

いくら報酬が良かろうと、相手はフェニックス。不死鳥の悪魔、不死の存在。

そのような化け物相手に戦うなど、いくら強い神器を持っているからといって正気ではない。勝ち目などないのだ。

それなのに何故？ いくら何でもリアスには信じられなかった。何故戦うと決めたのかと。

「そんなにお金が大事なの！ 別にお金なんて他の方法でいくらでも手に入れられるわ！ でも命は二度とは手に入らないのよ！ それなのにどうして！」

悲痛な叫びを上げるリアス。

そんなリアスに一誠は少し気まずそうな顔をして答えた。

「別にそんなだいそれたもんじゃねえよ。確かにウチのモンにお前さんを助けろって言われてるけどなあ……それだけじゃねえ。俺はアంతタから既にもらってるからよ……報酬を」

「報酬……？」

何の事かわからないという顔をするリアスに、一誠はニヤリと笑った。

「一週間ちよつと前に貰っただろ。そいつだよ」

それを聞いてリアスは思い出す。

一週間前くらいに、学校の屋上で話を聞いて貰ったことを。

「でも、あれはただ話を聞いて貰っただけで……それに私は貴方に確かに渡したわよ……メロンパンを……」

確かに一誠は話を聞く代わりにメロンパンを貰った。

つまりそれでチャラなのである。一誠がこの話を持ち出す理由にはなっていない。

それに対し一誠は足下から転送されつつある中、リアスに向かって笑いながら言った。

「まだだ。まだ……野菜ジュースの分は働いてねえ。だから受けに来たのさ。こいつであの時の話はチャラな」

そして一誠は転送された。

その転送の光を、リアスは信じられないような目で見つめている。

まさかあの時軽いお節介で渡した物がこんな事を引き起こそうとは、誰が思おうか？　そして、そんな物のために命を賭けて戦うと決めるなんて、どうかしてるとしか言いようが無い。

馬鹿げている。信じられない。巫山戯ている。頭が可笑しい。精神が異常だ。

数々の言葉がリアスの頭を過ぎるが、リアスはただ、一誠に向かって感じた感情は一つだけだった。

『格好良い………』

それが彼女が初めて異性に感じた感情だった。

22話 彼は敵のために礼を言う

転送させられた一誠の目の前に広がったのは、冥界の空がよく見える闘技場のような所だった。

周りに観客は居ないが、此方を覗き込んでいる視線が数多く感じられる。

一誠は軽く周りを見渡した後、真正面にいる人物を見て口元をつり上げた。

向こうも一誠を見て、怒りの籠もった視線を向ける。

「貴様……良くも俺の顔に泥を塗ってくれたな！」

ライザーが憤るのも無理は無い。

彼は今まで順調に事を運んできた。

このまま行けば見事に魔王の身内に一人なれたはずなのだ。

それが後一步という所で邪魔されたのだから、怒らずにはいられない。

しかも邪魔したのが見下している人間とくれば、その怒りも一塩に激しく燃え上がるもの。

ライザーは今にも一誠を燃やさんと血走った目で睨み付けていた。

殺気に満ちた視線を受けて上機嫌に一誠はライザーに嗤う。

「別にアンタに怨みはねえんだが、これも仕事って奴だ。大人しくボコられてくれりゃあ手加減はしてやるよ」

「何をおおっ!! 人間如きが舐めた真似をしてくれるう!!」

一誠に煽られ更に怒りを滾らせるライザー。

既に戦闘状態へと入っている彼は怒りを顕わにし、炎の翼を広げて辺りの大気を焼き始める。

その熱気は近くに居る一誠は勿論、二人の様子を見ているリアス達悪魔にも伝わって来た。

その様子を見て、一誠は更に愉快そうに笑みを浮かべる。

それは目の前にある玩具でより遊べると喜ぶ子供のような気持ち。それでいて、直ぐに壊れてはつまらないと悪意に満ちた表情でもあった。

「ドライグ……結構面白そうだと思わねえか。ここ最近のカメラを追っかけ回すより余程面白そうだよ、この感じはよお」

『強者との戦いを求めるのが二天龍の定めとは言え、相棒のそれは正直俺でも退くぞ。普通ならとつくに逃げ出しているところだが……確かに言う通りだ。やはり戦いこそが俺達にはふさわしい!』

大いなる力の化身であるドライグでさえ退く凶暴性を顕わにする一誠。

それこそが、ドライグが一誠を一目置く理由でもある。今までの赤龍帝にはない思考、力の運用、そして狂気すら打ち破る凶暴性。一誠はある種において、最強の赤龍帝と言っても良い。だからこそ、ドライグもこの相棒のことを気に入っている。故に戦いとなれば両者ともノリ気になるのだ。

上機嫌に笑う一誠が更に癪に障ったのか、ライザーは炎の翼を更に滾らせ殺気立っていた。

それが更に嬉しかったのか、一誠は上機嫌にドライグに話しかける。

「せっかくだ。二分の一解放でいくぜえ!」

『それでも半分しか出さないのか。それもあの不死のフェニックス相手に』

一誠の言葉に多少呆れ返った声で返事を返すドライグ。

一誠が常に力に負荷を与えて押さえていることから半分でいいのか、と聞き返す。

相手は不死のフェニックス。死なない相手に余裕を噛ましていいのかと言いたいのだ。

それに対し、一誠は気軽に答えた。

「つまり、いくら殴つても壊れねえサンドバックってことだろ? 景気が良くていいじゃねえか」

『まったく……不死の相手に対してもそのような言葉を吐くか、相棒! もはや流石を通り越して呆れるしかないぞ。だが、それぐらいの方が気概があつて良い!』

そう答えると共にサーゼクスから試合開始の合図が発せられた。

その直後に動いたのは、ライザーである。

「燃え散れ、人間っ!!」

殺気と共に両腕から発された煉獄の炎が一誠へと向かって放たれる。

炎は轟音を立てながら一誠へと向かって行き、大気を焦がしながら牙を？く。

一誠はその速さに反応出来なかったのか、その炎の直撃を受けてしまった。

爆音と共に一誠がいた所が燃え盛り、見ている者達の視界を真っ赤に染め上げる。

その光景に悪魔達は歓喜の声を上げた。

人間如き矮小な存在が悪魔に楯突くからこうなるのだと。

良い気味だと一誠を罵っていく。

それを聞いたりアスはその言葉を口にした悪魔達をキツと睨み付けるが、それでもその言葉が止むことは無い。

どうしようもない憤りに身を焦がしながらリアスは久遠の方に目をやる。

こうもあっさりと殺されてしまったのだから、悲しむなり何なりとしているはずだと。自分と同じように怒っているのだと。

だが、目を向けたリアスが見たものは、リアスの想像を外れたものだった。

久遠は……少し呆れ返りつつも笑っていたのだ。

あいつは仕方ないなあ、と言わんばかりに苦笑を浮かべていたのだ。

ごうごうと燃え盛っている炎を見て、どうしてそんな風に笑えるのかリアスには理解出来ない。あれ程仲が良さそうだったのに、涙一つ流さないなんてどういう精神をしているんだと、リアスは久遠の精神を疑う。

だが、何故久遠がそのような笑みを浮かべているのかを、彼女はその後直ぐに知ることになる。

「どうだ、人間、フェニックスの炎はっ！ まあ、もう死んでいるかも

しれないから聞こえないだろうけどなあ！」

燃え盛る炎を見てライザーが嘲りの声を向ける。

いくら神器を装備してしようと、防御もせずに直撃したのだから無事なわけがない。悪魔でさえ致命傷を受ける程の威力の炎に、人間が受ければ死んでしまうのは当然のこと。

だからこそ、自分に愚かにも挑んできた一誠を嘲り笑うライザー。

だが、その余裕に満ちた表情は直ぐに歪んだ。

何故なら、突如として炎の中から声が聞こえてきたから。

「いいねえいいねえ、この感じ。前に戦った墮天使の100倍は歯ごたえがありそうだ」

その言葉と共に、燃え盛っていた炎は噴き出してきた真っ赤なオーラによってかき消され、その中心にいた一誠はゆっくりと立ち上がる。

その姿を見て、ライザーは驚愕し声を上げた。

「な、何いっ！ 何故生きている！ それに貴様、その姿は一体……」
ライザーが驚いたのは、勿論生きていたからだだが、それ以上に一誠の姿を見て驚いていた。

何故なら……。

一誠の両腕が籠手に包まれていたから。

通常、神器の形は変わらない。

変わるときというのは、そういった変形機巧があるものか禁じ手に至らない限り形状はそうそう変わらない。それもまだ形が変わる程度ならありそうなものだが、それが別の部分にも展開されたりするということはない。

そのはずだと言うのに、一誠は全く同じ籠手がつい先程まで何も付けていなかった右腕にも装着されていたのだ。

だからこそ、その姿に驚いた。

明らかに可笑しな姿に。

一誠は驚いているライザーの顔を見てニヤリと口元をつり上げる。
「別に驚くようなことでもねえだろ。ただ、少しばかり力を発現させただけだ。これでもまだ半分以下なんだからよお。こんなんで驚い

てたらこの先驚き過ぎて何も言えなくなっちゃうよ」

その言葉と共に再び嘖き出す赤きオーラ。

しかし、先程のそれとは違いその規模や出力は桁外れに上がっている。

一誠は辺りに燃え残る炎を右手を軽く振ってかき消すと、ライザーに向かってゆつくりと歩いて行く。

その様子は挑戦者のそれではない。

まるで王者の如き堂々としたような歩み。だが、高貴さの欠片など微塵もない。元々姿勢が悪いせいで猫背なのだが、そのためか、その歩みは獲物に向かってゆつくりと歩んでいく獣のそれだ。

ライザーはその歩みに若干ながら後ろに退いた。

それは無意識のうちに行われた行為。それを自覚したライザーは、自らに怒りを抱いた。

（今、俺は何故後ろに退いた？ あの人間を……恐れたというのか?!? そんな……巫山戯たことが、あつてたまるかああああああああああああああ!!）

内心の怒りをより一誠に叩き付けるべく、ライザーは一誠に向かって更に吠えた。

「あの程度の炎を散らした程度で調子に乗るなよ、人間!! 貴様には更なる炎を見せてやろう!」

ライザーは自身の炎を更に燃え上がらせると、その炎を一点に集中して一誠に放つ。

轟々と燃え上がる炎が再び一誠へと襲い掛かっていく。

先の炎以上に燃え上がるそれを受ければ、いくら神器持ちの人間であらうと燃えて消滅するだろう。

だが、一誠は不敵な笑みを浮かべたまま止まる事をしない。

ゆつくりと距離を詰めていく一誠に、当然の如く炎は激突した。

その直後に起こる爆発。

一気に燃焼した炎は一誠は勿論、その周りにあった全てを巻き込んで燃え上がる。

すべてを焼き尽くす地獄の業火。

だが、それでも彼は……一誠は歩みを止めない。

燃え盛る炎の中を悠々と、まるで涼風を浴びているかのように進んでいく。

「どうしたどうしたあ！ そんな炎じゃ俺は火傷一つ出来ねえぞ！ もっと来いよ、おいっ!!」

獰猛な笑みを浮かべる一誠は焦げ目一つ身体に着けずに尚も進む。まったくダメージを負っていない一誠の様子にライザーはぞわりとした恐怖を感じ、それに抗うかのように更に身体を燃え上がらせる。

「貴様は一体何なんだあああああああああああああ!!」

まさに燃えたぎる炎のような叫びと共に放出される豪炎は、放たれた先にあるもの全て燃やし尽さんとする。

だが、一誠にその猛威が振るわれることはない。

一誠に当たる前に、彼の身体から噴き出す赤きオーラが全てを吹き飛ばしているからだ。それにより、ライザーの炎は全て一誠に当たる手前で吹き飛ばされて散ってしまう。

一誠が炎の中から変わらない姿で、変わらない笑みを浮かべて向かってくることに、ライザーの心は不気味な恐怖に侵食されていく。「があああああああああああああああああああああああ、きっさまあああああああああああああああああああああ!!」

目の前にいるのが人間だとは、もう思わなくなっていた。

人間の形をした『ナニカ』が自分に向かって歩いてくる。

それは彼にとって、もつとも怖いと感じた。

人間ではない。人間ならそれまでの攻撃でとつくに灰なって消滅している。

悪魔なら……自分より下位の悪魔なら、ゲームのシステムでとつくに戦闘不能として転送されているはずである。

それ以外の人外だとしても、ここまで平然としていられる者はいないだろう。

なら……これは何なのか？

いくら炎を浴びても、まるで涼風に当たっているかのように表情一

つ変えない。

身体に焦げ目一つとしてついていないことから、本当にダメージを負っていないのだろう。

そんな頑丈で不気味な存在を彼は知らない。

そんな、人間でも異形でもない者を彼は理解出来ない。

つまり彼の目の前で此方に向かってくるのは……人の皮を被った化け物だ。

通用しないという現実と信じたくないという思いが激突し、ライザーは半狂乱になりつつも豪炎を放っていく。

一誠にぶつかる度に大爆発を引き起こす闘技場。

それでも尚も一切の損傷をすること無く不敵な笑みを浮かべ続ける一誠は、遂にライザーの目の前に立った。

「よう、待たせたなあ」

「つつつつつつつつつつつつつつつつつつ!?」

ニヤリと獲物を見つめるような一誠にライザーは言葉が出なく、喉がひくつく。

身体が萎縮し動きが鈍くなるが、それで攻撃せねばと拳を固めライザーは殴りかかった。

「あああああああああああああつあああああああああ
!!」

「おせえよっ!」

だが、ライザーの拳が一誠に届く前に、一誠が放った右拳がライザーの顔に突き刺さった。

「オラアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

そのまま咆吼を上げながら力一杯ライザーを殴り飛ばす一誠。

ライザーは右拳を顔面にめり込まされた後に、闘技場の壁面へと叩き付けられ壁を粉碎しながらめり込んだ。

上がる土煙が晴れると、そこには鼻がひしゃげ鼻血がが止まらず、歯が砕けて口の中を血まみれにしているライザーの姿があった。

一誠はその様子を観察するように見つめている。

まさか不死と称される悪魔がこの程度で終わりだとは思えないだ

ろうと、獲物が立ち上がるのを待っていた。もしこの程度で倒れたのなら、不死の名折れも良いところだ。

そんな残念なことにはしてくるなよ、と一誠は視線に込めてライザーを見つめていた。

そしてその期待に応えるかのように、ライザーは立ち上がった。

その目は怒りで我を忘れ血走り、血で呼吸が困難になっているというのに荒く呼吸をしていた。

「ぎっざばあああああああああ!! ごそぞ
ごろずごろずごそぞごろずごそぞごろずごそぞ
ごろずごそぞごろずごろずごろずごろずごろず
うろうろうろう!!」

喉が血でやられ荒れたしやがれ声が闘技場に木霊する。

そしてライザーの身体が燃え盛り、全てが炎に包まれる。その炎が静まると共に、先程まで見るも無惨になっていたライザーの顔は元も美しい相貌へと戻っていた。

ライザーは己の顔の様子を感じてニヤリと笑うと、したり顔で一誠に向かつて叫ぶ。

「どうだ、人間！　これがフェニックスの力だ。いくら貴様が馬鹿力だろうと、この不死の前には無意味！　さっきまでは侮っていたが、最早貴様を人間とは思わん！　この化け物めっ！」

ライザーの言葉を聞いて、一誠は更に笑みを深める。

「いいねえ、そうこなくっちゃなあ。この程度で終わりだってんなら、わざわざ来た意味がねえからよお。もつと楽しませてくれよ、焼き鳥くうん！」

「きつさつまああああああああああああああああ!!」

一誠の明らかにへたくそな挑発に激昂するライザー。

彼は怒りのあまり、もう些細な事でも爆発する様になっていた。

今度は一誠が先に動き出す。

地面に向かって左拳を叩き付けると、その反動を利用してライザーに向かって突進する。

その速さに目を見張ったライザーだが、上空へと逃げることで回

避。

空を切った一誠の拳は闘技場の壁へと激突し、闘技場の壁を崩壊させた。

その威力に驚きの声を上げる観客にライザーは舌打ちをしつつ、自身の炎を最大限に燃え上がらせる。

そして拳の一点に圧縮し、一誠に向かって拳を振り下ろした。

「コレで終わりだ、化け物っ!! 灰すら残さずに燃え散り消滅しろおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

咆吼一閃。

ライザーの拳から放たれた炎はそれまで圧縮されていた力を解放し、まさに炎の鳥『フェニックス』の形を取って一誠へと突進していく。

その炎を目にして、一誠は更に目を輝かせながら拳を構えた。

「いっくぜえええええええええええええええええええええええええええええ!!」

獣のような咆吼を上げながら一誠は両拳を地面へと叩き付けると、その反動を使ってライザーが放った火の鳥へと突進しこれを迎え撃つ。

空中に飛び出した一誠は身体を横では無く縦に回転させ、その遠心力で両拳の威力を高めると共に火の鳥へと殴りかかった。

両者の攻撃が激突した途端、闘技場全てを吹き飛ばす程の大爆発を引き起こし、観客達が見ているであろうモニターをノイズで一時的に使用不能にしてしまう。

その砂嵐の向こう側では、あまりに巨大な力を放ったばかりに疲弊するライザーと、最早跡形もなくなった闘技場が広がるのみであった。

その瓦礫を見てライザーは勝利を確信し叫ぶ。

「ざまあみろ、化け物が! このフェニックスに刃向かうからこうなるのだ!」

そのまま己が勝利に笑うライザー。

だが、その笑みは次の瞬間に崩れ去った。

未だ土煙を上げる闘技場跡地の瓦礫が一気に吹き飛んだのだ。

「くははははっ!! いやあ、中々にいい攻撃だったぜ、さつきの鳥はよお!!」

全ての瓦礫を吹き飛ばした跡地には、赤いオーラを噴き出しながら高笑いをする一誠がいた。

その顔は子供の様に無邪気でいて、それでいて実に雄々しい笑みを浮かべている。

その様子を見て、ライザーは何もかもが信じられなくなった、自分の力も。悪魔という種族その物の優位性も。そして何より、目の前の存在に常識が通用するのか、ということが信じられなかった。自分は何と戦っているのか分からなくなる。

人間の皮を被った化け物？

いや、最早化け物ですらないナニカだ。

フェニックスの最大火力の炎を受けて、多少煤けた程度で愉快そうに笑う目の前それはライザーの知る全ての異形から外れていた。

だからこそ……ライザーは未知の恐怖に心がへし折れた。

それまで心を保たせていたプライドも、つい先程の最大火力の攻撃を受けても血の一つも流していない一誠を見て完璧に砕け散ってしまった。

もう何もかもが失われつつあるライザーは、その瞳に怯えの色を映しながらも、それでもと一誠に向かって突進した。

もう自棄であり、無謀だと分かりきっていてもそうぜずには居られなかったのだ。

もしここで逃げれば、自分はリアスの婚約者としての地位を失うだろう。

だが、それ以上に人間から逃げた臆病者だと全悪魔達から罵られ蔑まれるのは耐えられない。それは本当に自分の全てを本当に否定することだから。

「があああああああああああああああ！ 化け物おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

捨て身に近い特攻に対し、一誠は上機嫌にそれに応じる。

途轍もない速さで一誠に迫ったライザーは速度を殺さずに燃え盛る右腕で殴りかかる。

一誠はその拳を避けずに左手で受け止めた。

その瞬間 拳と掌がぶつかり合ったとは思えない程の音と衝撃が闘技場跡地に響き渡る。その衝撃からライザーの拳に如何に凄まじい威力が込められていたかが窺えるだろう。

だが、ライザーはまだ止まらない。

止められた右拳に力を込めつつも、空いている左腕を燃え上がらせながら一誠に殴りかかってきたのだ。

[illegible]

「悪くねえ拳だ！ 殺す気がビシビシと伝わって来やがる！」

超至近距離から放たれた神速の燃え盛る左拳を一誠は空いている
右腕で受け止めた。

再び凄まじい音と衝撃が響き渡り、両者の身体を貫いていく。

そのまま鏢迫り合いのように力比べへと発展していく二人。

ライザーは血走つた目で一誠を殺さんと睨み付け、一誠は愉快そうにニヤリと笑みを深める。

ぱつと見の表情では明らかにライザーが殺気立っているのだが、その実ライザーの瞳には一誠への恐怖がにじみ出ている。

それを見抜いたのか一誠は面白そうに、だが少し寂しそうに笑った。

「どうやら……ここまでみてえだな」

「な、何がっ！」

一誠の言葉にライザーは食って掛かるように反応する。

「テメエの限界が……だよっ!!」

一誠はライザーにそう叫ぶなり、受け止めていたライザーの拳に思いつきり力をかけて…………。

[illegible]

握り潰した。

凶悪とでも言うべき握力を持って、文字通りライザーの拳を握り潰したのだ。

手の中で潰れる肉と碎ける骨の感触。

それを気にすることもせずに一誠は原型が無くなるまで握り潰し、そして下へと振り落とした。

一誠の手から離されたライザーの手は、もう手の形をしていなかった。

その現実と激痛にライザーは声にならない声を上げてのたうち廻る。

だが、それも少しの間だけ。

少し前に見た通り、ライザーの両手を炎が包み込み、元の損傷のない手へと再生させる。

その事実に一誠は笑い、今度は此方から攻める。

その場から型も何も無い、ただの力任せに振り上げた拳でライザーに殴りかかった。

振るわれた右拳がライザーの頬にめり込み、その反動を利用して反対の左拳がライザーの鳩尾へと突き刺さる。

その威力に身体をくの字に曲げるライザー。口元からは胃液が溢れかえっていた。

既に普通なら死に体。だが、相手は不死のフェニックス。

更に一誠は拳を振るっていき、文字通り『サンドバック』となったライザー。

骨が折れ砕け、鼻が潰れ、皮膚が浅黒く腫れ上がる。

だが、フィニックスの力によりそれらの損傷は直ぐに再生する。

しかし、それまで受けてきた痛みは……痛みを受けてすり減っていく精神は再生しない。

ライザーの戦意はもう殆ど砕け散っていく。

逃げ出したい。でも、この化け物から逃げられる訳が無い。故にどうすることも出来ない、彼はもう諦めてしまった。

いくら身体が治ろうが、勝てるビジョンが浮かばない。身体が、心が追いついていかない。

一誠は殴っては壊れ、壊れては再生するライザーにある程度満足すると、左拳でライザーを殴り飛ばした。

そして満足そうに笑い、ライザーに告げる。

「それなりに楽しかったぜ。だから礼代わりに……『技』を使つてやるよ！」

そう叫ぶなり、一誠の身体を覆っていたオーラが更に猛々しく噴き出し、それらが両腕の籠手へと集中していく。

『Boost!!』

そして籠手が真つ赤な光に包まれ、今にも臨界を突破しそうな程に光り輝き始めた。

一誠は赤く光り輝く両拳を構えると、先程ライザーの最大攻撃とぶつかり合つた時と同じように地面に拳を叩き付けて上空に跳び上がる。

そして空中で見えない壁を殴り付けるかのように拳を振るい、縦回転しながらライザーへと突進する。

「おおおおおおおおおおおおお!! 『ドラグウウツブリツドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』」

獣の如き咆吼を上げながら両拳を振るう一誠は、ライザーへと遠心力が乗つた最大威力の拳を振るう。

それが激突する瞬間、

『explosion!!』

両腕に込められ圧縮されていたオーラが解放された。

それらが作用し、途轍もない破壊を生み出す。

両拳はライザーの胸にめり込み、その破壊の力でライザーの肉体を弾けさせた。

腕や足が飛び散り、肉体の各所が四方に飛ぶ。

顔と上半身の半分以外殆どが消失し、ライザーは残つた身体が地面へと落下する。

それでもまだ、その威力は留まる事を知らない。ライザーの肉体が弾け飛んでもまだ突き進む一誠の両拳は地面に突き刺さり、その空間を鳴動させる。

そして地面を砕きながら尚もクレーターを広げていき、ついにはその空間その物を破壊しにかかった。

それを感じ、サーゼクスは慌てて結界の強化を施した。

その結界すらも突き破らんとする威力に顔を顰めつつも堪え、やつと収まる。

ゆつくりと拳を地面から引き抜く一誠。その周りは瓦礫一つ無く、元からあった闘技場も全て崩壊し何も無くなっていた。あるのはただ、巨大すぎるクレーターののみ。

一誠は起き上がるとライザーの方に目を向ける。

生きているのか危うい状態のライザーであったが、あれほど破壊されても尚、その肉体は再生していた。

傷一つ無い肉体に戻るライザー。

だが、その目は光を灯していない。

彼は失神していたのだ。

最早戦意も何もない。全てを出しても適わなかった彼の精神は保たなかった。

結果、失神し意識を失った。

その光景にそれまで見ていた悪魔達は言葉を失っていた。

信じられない物を見たとき、何も言葉を発することが出来なかった。

悪魔が人間に負けたこともそうだが、それ以上に人間が起こした大規模破壊が信じられなかったのだ。魔王が慌てて結界を張っていないければ、こちら側にも技の余波が来て甚大な被害が出ていただろう。

故に言葉を失う。

目の前で起こったことが理解出来ないのであった。

その中で唯一、それを理解していたサーゼクスが笑みを浮かべながら、二人の決着が付いたことを全員に伝わるように声高々に言った。

「勝者、赤腕!!」

その声は一誠達にも伝わり、一誠は右腕にも展開した籠手を解除した。

人間の勝利という快挙。だが、その勝利を祝福する者は殆どいなかった。

23話 彼は冥界から帰る

ライザーを打ち負かした一誠はその空間から転送され、元いた会場へと戻ってきた。

人間が悪魔に勝利したという快挙。

だが、それを褒め称えるという者は殆どいなかった。

「この勝負、『赤腕』の勝利だ。よって新郎、ライザー・フェニックスとグレモリーの結婚は破棄される。皆、異存はないかね」

サーゼクスが大きな声で皆に聞こえるようにそう言い放つが、周りからは返事が返ってこない。

皆不服があるから答えないのではない。

目の前で起こったことが信じられず、呆然としてしまっていたのだ。

周りの悪魔達にあるのは戸惑い、そして猜疑心。

あの上級悪魔『フェニックス』が人間に敗れたというのは、彼等にとつてあまりにも信じられないことだった。

彼等にとつて、悪魔と人間では天と地の差ほど力の差がある。例えば異能の力を持つと、生物としての性能が違うのだから負ける道理はないと。

だが、結果は見ての通り。

ライザーはただの『人間』に破れた。

勿論、彼等の目から見てもライザーが本気を出していたことは分かっている。あの轟炎は並大抵の悪魔では消し炭になってしまうのだから。

それを受けて平然としている一誠を見て、皆彼の存在を異質な物として捕らえていた。

彼等の目の前にいるのは本当に『人間』なのか……と。

人間如きが、と見下していた悪魔達も今では一誠に畏れを抱く。

そんな恐怖を含んだ視線に晒される中、一誠は満足そうにサーゼクスの方へと歩いて行く。

イツセーの姿を見て、サーゼクスも微笑みを浮かべながら話しかけ

てきた。

「噂以上の力で驚いたよ。まさかフェニックスをああも一方的に倒してしまうとはね」

「まあまあだったよ。ここ最近じゃ一等マシなケンカだった」

一誠の言葉を聞いてサーゼクスは少しキョトンとし、そして更に笑い出した。

彼の言葉があまりにも予想外だったために、サーゼクスのツボにはまったらしい。

「まさかあれ程の激戦を『ケンカ』と評するとは……君がどれだけ凄いか気になってくるね」

「別に激戦もクソもねえだろ。ふっかけたりふっかけられたりしてやり合えば、そいつはケンカになるんだよ。程度の差なんてもんはねえ」

一誠の言い分を聞いてサーゼクスは尚も愉快そうに笑う。

彼のこれまでの半生において、ここまで大雑把な者は初めてだった。魔王という肩書きに悪魔からは敬意を、他の存在からは恐怖と敵意を向けられている彼にとって、こうもズケズケと物怖じせずに言うてくる者はそうはいない。

魔王だとわかっていながら気にしない。

それが彼にとって心地良かった。

「これで父上達も文句が言えないだろう。何せ悪魔は契約を遵守する生き物だからね。この公の場で交わした契約、反故には出来ないよ」
「そうかい、そいつは何よりだ。このまま他の奴等に後ろから撃たれたんじや洒落にならねえんでな。そんな時は容赦無くぶん殴らせてもらうけどよ」

先程まで空間を崩壊させるような攻撃を繰り出したとは思えない程に軽い口調で一誠はそう言うと、サーゼクスに向かって背を向ける。

「まあ、今回みたいな仕事があったらまた久遠に連絡してくれよ。アంతからの依頼は結構面白そうだからなあ。大公のケチな仕事よりもイイ感じだ。ってわけで俺は終わったから帰る。報酬はちゃんと

振り込んでおいてくれよ」

背を向け歩き始める一誠にサーゼクスは愉快そうに笑いながら返事をその背に返す。

「ああ、わかったよ。今後の君好みの案件が来たら、その時は君達に依頼することにしよう。それに約束通り、報酬もちゃんと振り込んでおく。さっきも言ったが、悪魔は契約を遵守する生き物だ。当然、私もね。だからこの試合の報酬は絶対に払わせてもらうよ」

サーゼクスは一誠に快くそう言う。

その答えを聞いて一誠は笑みを深めた。

そして少し歩き、今度はリアスの方に歩き始めた。

未だに一誠が勝ったことに驚きを隠せずにいるリアスは、目の前に来た一誠を見て更に驚いてしまう。

「な、何よ……」

戸惑う彼女に一誠は特に気にした様子もなく、いつもと変わらないふてぶてしい態度で話しかける。

「別に何もねえよ。ただ……これで野菜ジュースの分の借りは返したからな」

一誠が言っていることを理解するのに少しだけ時間を要し、そして理解した瞬間に彼女は叫んでいた。

「ねえ、どうしてそんなことでこんな危ない事をしたの！ たかが野菜ジュースなんかに、どうして命を賭けて戦えるの！ あなた、絶対におかしいわよ！」

助かられたというのに、一誠を批難するかのように叫ぶリアス。

その叫びには理解出来ないという恐怖と、少しでもその真意を知りたいという気持ちが溢れていた。

その問いに対し、一誠は面倒臭さそうな顔をしながら答える。

「別に危ないもクソもねえだろ。ただ、アンタには以前助けて貰ったからな。その借りを返したただけだったの」

「そんなわけないでしょ！ だって、たかが安い野菜ジュースよ！

そんなものに命をかけるなんて馬鹿げてるわ！」

信じられないと叫ぶリアスに、一誠は溜息を軽く吐く。その様子を

見ていた久遠はニシシつと笑っていた。

一誠は呆れ返った表情をリアスに向ける。顔こそ呆れているが、その瞳には確かな決意が込められていた。

「いいか、良く聞けよ。値段がどうのじゃねえんだよ。俺がアンタを助けたのは、アンタに助けられた借りがあったからだ。受けた借りは返す……絶対にだ！ そいつがいらないねえって言ったとしても、絶対に返す。それがテメエに課せたテメエの決まりだよ」

自信を持って答えた一誠を見て、リアスはどこか納得してしまっただ。

他の誰でもない、自分が決めた自分のルール。

人はそれを偏に『信念』と言う。

一誠にそれは信念なのかと問えば、絶対に違うと答えるだろう。彼はそんな大したものではないと言うに違いない。

しかし、それでも……一誠の瞳はリアスの目から見て、確かに信念の火を灯していた。

彼女が初めて見る瞳だった。

周りの同世代にはまずない瞳。ライザーのような野心に満ちたようなものでもなく、サーゼクスのような暖かなものでもない。

その瞳を見て、彼女は理解した。

ああ、これが彼女のかと。

『赤腕』とは、このような人物なのだと。

だからこそ、彼女の口からもう言葉が出ることはなかった。

ただ納得し、理解し、そして……憧れた。

彼のような確固たる自分を持てるような人に、自分もなりたいたい。リアスは一誠を見つける。まるで言葉を忘れてしまったかのように一言も発することなく、ただ見入っていた。

その様子を見てリアスが納得したと判断した一誠はリアスから離れていく。

「取りあえず、これでアンタから受けた借りは返したからな」

そう彼女に言いながら背を向けると、今度こそ一誠は城の出入り口へと向かって歩き始めた。

その背中にリアスの眷属達は皆感謝の視線を送る。

自分達では出来なかったことを、叶えられなかった願いを彼が叶えてくれたから。

ただ、視線を送るだけに留めて。

本当なら感謝の言葉を贈りたい。だが、それをすればきつと彼は怒るから。

それはそれまでの彼の気性を目の当たりにしていた彼等には分かる。

もし、仮に言った場合、彼は怒りながらこう答えるだろう。

『別にテメエらに感謝されるような謂われはねえよ！ 俺はただ、仕事を受けてボコっただけだからなあ。勝手に感謝なんかするな、胸くそ悪い！』

それは拒絶の言葉。でも、それでも彼等は感謝を伝えたい。だからこそ、その念を込めて見つめるのだ……その背中を。

そんな視線を向けられていることも気付かず、一誠は振り返るとこの室内に響くくらい大きな声を上げた。

「おい、久遠！ 仕事も終わったし、もう帰るぞ！ お前がいねえんじゃ帰れねえんだしなあ！」

その叫びに周りの悪魔達は身を震わせ、呼ばれた張本人である久遠は面倒臭そうにその呼びかけに応じる。

「分かっているんだから一々でけえ声で呼ぶんじゃねえよ、このアホ！ こっちはこっちで色々と営業してるんだからよ！」

久遠は一誠に怒鳴りつつもそう答えると、少し早歩きで一誠に追いつくように歩き始めた。

そして二人で揃うと共に普通に、自分達が侵入者であることなど気にせずに堂々と部屋の出入り口の扉を開けて出て行った。

侵入者二人の背を見送り、扉が閉まると共にそれまで緊張していた悪魔達は深い息を吐いた。

皆、一誠を前にして誰も動くことが出来なかった。彼等の中ではも

う一誠は人間ではない。人外の化け物として認識されてしまっていた。

故に、その化け物の逆鱗に触れぬよう、皆息を殺して去るのを待っていたのだ。

そんな中、ある二人の人物は一誠の存在よりも先のゲームと今回の結婚について話し合いを始めていた。

「フェニックス卿。今回の結婚、このような形になってしまい大変申し訳無い。無礼承知で悪いのだが、この件は……」

そう口にしたのは、赤い長髪をした男性である。見た目は四十代くらいに見えるが、その口調と声の重みからそれ以上の歳の重みを感じさせる。

彼はリアスの父親にして、サーゼクスの父でもある。今回の結婚騒動の根本とも言える人物であった。

彼は息子がいきなり言い出した事とは言え、魔王の名の下にされた約束に今回の結婚を断念せざるえなかった。その事について、相手側であるフェニックス家の当主に謝罪をする。

それに対し、邪魔されたというのにフェニックス卿は怒らずに首を横に振る。

「皆まで言わないでください、グレモリー卿。純血の悪魔同士、良い縁談だったけど……どうやらお互い欲が強すぎたようだ。私の所も貴方の所も純血種の孫がいるというのにだ。それでも尚欲したのは悪魔故の強欲か。それとも先の戦争で地獄を見たからか」

「……いえ、私もあの子に自分の欲を重ね過ぎたのです。それがあの子のためになると思って進めた事でしたが……」

親が子の事を想って行う事に悪意はない。

だが、それが必ず子供のためになるとは限らないのだ。エゴと言われて仕方ないかも知れない。だが、それも我が子を愛するが故だ。

お互いに子供のためと思っての結婚だったが、子はそうではないということに二人は改めて自分達の愚かさを感じていた。

「いえ、寧ろこれで良かったのかも知れません。息子に足りなかったのは敗北だ。アレは一族の才能を余りにも過信し過ぎた。これは息

子にとって良い勉強になったでしょう。フェニックスは絶対ではない。これを学べただけでも今回の結婚破棄は十分でしたよ、グレモリー卿」

それがグレモリー卿への今回の結婚破棄の答え。

両者とも、お互いに許すことにしたのだった。

そして軽く笑い合うと、改めてゲームの時のことを思い出していた。

「それにしても凄い人間でしたな、あの少年は」

「ええ、まさかフェニックスがああも一方的にやられるとは思いませんでした。アレが今世の赤龍帝とは……末恐ろしいものですな」

二人とも一誠が赤龍帝であることは見抜いていた。

神器の形を見れば分かる物だが、実際に戦争を体験したことがある二人には嫌と言うほどに覚えがあった……あの『赤き龍』のオーラを。

そして、フェニックスを圧倒する強さを誇る神器など、彼の物しか有り得ない。

ここで他の悪魔達なら眷属にしようと躍起になるかも知れないが、その考えを断ち斬るかのように二人の会話にサーゼクスが混ざる。

「あの少年は眷属には出来ませんよ」

そう言うと、サーゼクスは右手を二人の前に差し出した。

その手からは真つ赤な血が滴り流れ、床に血の雫を落としていた。

それを見て、二人は驚愕を顕わにする。

「これはあの少年が放った攻撃が結界を破りそうだったので、急遽私が張った結界で防いだ時に出来た傷です。魔王である私が、その余波を咄嗟とは言え防ぎ切れなかった。そんな凄い少年が駒に収まるとは思えない。きつと彼は『悪魔の駒』をどんなに使っても転生できないだろう……しなくても強すぎるのだから。あれでまだ半分以下の力しか使っていないというのだから、どれほどの力を秘めているのか……想像も付きませんよ」

愉快そうに笑うサーゼクス。

二人の顔が面白かったというのもあるが、何よりも彼が今回の一番

の勝者だからである。妹の望まない結婚を阻止できた事に喜び、そして何より、新たな友を得たことが嬉しかったのだ。

だからこそ、彼は心の底で一誠に思う。

へ君は今度、どのような凄いことを見せてくれるのか……とても楽しみだよ)

こうして、グレモリー家とフェニックス家の結婚騒動は収束を迎えた。

尚、報酬とは別に後日、一誠達にサーゼクスは礼を何か欲しい物はないかと聞いたが、それを一誠は断った。

その代わりに鳴った一誠の腹の音により、そのお礼はサーゼクスの奢りでラーメンを食べに行くという、あまりにも庶民染みたお礼をする事になったサーゼクス。だが、それでも彼は面白かったのか快く受け入れたのだった。

月光校庭のエクスカリバー 24話 彼は敗北を喫する。

一誠は目の前の物を前にして、冷や汗を掻いていた。

これまで幾度となく強悪な人外と戦い勝ってきた彼ではあるが、目の前に対峙している相手に関して、それまでの戦いでは感じたことの無い言いようなない恐怖を感じていた。

握る拳に力が入り、汗が溜まっていく。

額から汗が伝って流れ落ちるが、それを拭う余裕などない。

それほどなまでに、彼は追い詰められていた……目の前の敵に。

裏の世界に於いて、あの不死の悪魔『フェニックス』を余裕で叩き潰し、その悪名も更に知れ渡っている彼ではあるが、そんな凶悪な人物である彼でさえ、この敵を前にしては戦くことしか出来ない。

あまりの緊張に喉が乾き、内心で呻く。

いくら闘志を燃やそうとしても、目の前の敵を前にしては鎮火してしまう。

そんな彼を怯えさせる敵とは……………。

『キーン コーン カーン コーン……』

教室内の壁に設置されているスピーカーから昔懐かしい鐘の鳴る音が鳴り響く。

それと共に、今まで教室内を支配していた緊張が一気に解けた。

活気に溢れ出した教室内には様々な人達がいた。さも当然と言った様子で何食わぬ顔で教科書を引っ張り出す者や、達成感に満足し喜びの笑みを浮かべる者。そして……まさにこの世の絶望を一身に纏ったかのような、負け犬のような者。

その三パターンに分かれた教室内の人達の中、綺麗な金髪をした可愛らしい少女がある席に向かって駆け寄ってきた。

「イツセーさん、どうでしたかー!」

天真爛漫な笑顔を浮かべその席の生徒に話しかけているのは、少し前にこの学園に転入してきたアーシア・アルジェントである。

外国からの生徒ではあるが、今ではすっかり馴染み日本語も本場の人間と遜色なく話すことが出来るようになった。

まさに純真無垢が似合う彼女にこのクラスの生徒は皆微笑ましい視線を向ける。

だが、それに比例するかのように男子からは憎々しい視線を向けられるのは、彼女に話しかけられた兵藤 一誠である。

何の奇縁か彼女は一誠に懐き、一誠もそれを悪く思っていない節がある。それを傍から見れば、金髪美少女に好かれている野郎にしか見えないとクラスのモテない男子達は僻んでいるというわけだ。

特にこの学園では特に女子から嫌われている松田、元浜の二人は血涙を流しそうな勢いで一誠を睨んでいた。

そんな視線を全く気にしていない一誠ではあるが、今回に限っては酷く落胆していた。

彼は自分の机の上で頭を押しつけ、如何にも落ち込んだ様子である。

アジアに話しかけられた一誠は緩慢な動きで首を上げ、アジアの方に顔を向ける。

その表情はナニカが抜け落ちたような、そんな顔になっていた。

「…………駄目っぽい…………」

力なくそう答える一誠。

それを聞いてアジアは申し訳無い気持ちで一杯になり、慌てて謝り始めた。

「すみません、私ったら一誠さんがこんなにも疲れ切っているというのに……」

「別にそんなじゃねえから心配すんなよ。お前は悪く無い」

謝るアジアに一誠はそうではないと答える。

何故こんな事になっているのか？

それを説明するのは、実に単純な言葉で事足りる。

それは学生ならば必ずある行事にして、絶対にぶつかなければならない壁の一つ。

『中間テスト』

である。

学生の本分は勉強なのだから、当然その能力を確かめ競う場もある。

つまり教室にいる三種類のパターンというのは、テストに余裕で打ち勝った者、何とか己の学力でテストを撥ね除けた者、そして見事にテストという怪物に飲み込まれ敗北を喫した負け犬ということである。

無論一誠の表情と反応を見ればどのグループに入っているのかは一目瞭然であった。

一誠はあまりのテストの出来の悪さからテンションは駄々下がり、覇気の欠片も無い感じになってしまっている。

これが本当に数週間前にあの上級悪魔、元72柱フェニックスを物の見事に下した人間と同一人物とは思えない。

そんな一誠をアーシアは何とか励まそうとするも、どうして良いのか分からない。

これまでを教会で過ごしていた彼女にとって、テストは初めてのことで。

故にその出来が悪かった場合の励まし方などを彼女が分かるはずが無い。

ここで気楽な者ならば、次があると励ますなり何なりと気楽に言うだろう。だが、真面目なアーシアはそのような無責任なことは言えないのであった。

そんな打ち拉がれている一誠に対し、困惑するアーシア。

そんな二人に対し、気楽に声をかけてくる者がいた。

「どーよ、二人とも。テストの出来は？」

実に余裕に満ちあふれた様子で二人に話しかけてきたのは、黒い髪をした何処にでもいそうな青年……久遠である。

久遠の登場によりアーシアは喜びながら挨拶をし、一誠は何も返さない。

そんな一誠の様子を見て、久遠はしたり顔で二人に話しかけた。

「イツセー、その様子じゃまた駄目だったんだろ」

「……うつせー」

「久遠さん、そんなことを言っちゃ駄目ですよ」

一誠を虐めるかのように笑う久遠に一誠はぶっきらぼうに答え、
アーシアはそんな久遠を優しく咎める。

落ち込んでいる人に追い打ちをかけるのは可哀想だと。

だが、久遠はそんなアーシアに優しくそんな笑顔で答えた。

「いいんだよ、アーシアちゃん。この馬鹿が毎度赤点ギリギリなのは知ってるから。そもそも、テストがあるって分かってもちゃんと勉強しないこいつが悪いんだからさ。そう、悪いのはこいつがクズだから」

常日頃から振り回されている所為か、自分の土俵で好き放題に罵る久遠。

そんな久遠を苛立ちが籠もりに籠もった視線で睨みつつ、一誠は久遠に話しかけた。

「その様子じゃテメエは余裕って感じだろ、どうせ」

「ご明察。自己採点でも余裕で平均75以上だ。お前とは頭の出来が違うからなあ。これが出来る奴とそうでない奴との違いというものだよ、チミイ」

馬鹿にされまくった一誠は苛立ちに拳を強く握る。

もしここが誰もいないところだったのなら、久遠相手だろうと容赦なく赤龍帝の籠手を出して殴りかかっていただろう。

それぐらい一誠の怒りは溜まり、あと少しのところで噴火するところまで高まっていく。

だが、それは次に聞こえたアーシアの声によって静まった。

「ええ~~~~~、そうだったんですか！ そんなあ、あんまりです」

「やつちまったなあ、アーシアちゃん。まあ、もう済んじまったことだから仕方ねえけどさ」

どうやらアーシアは久遠とテストの答え合わせをしていたようだ
が、アーシアの解答が一つずれていたようだ。

更には漢字の読み間違えも多数発見されたようで、問題を間違えた

所も出てきた。

それを聞いて可哀想なことに肩を落とすアーシア。

詰まるところ、彼女も一誠と同じ側に落ちたということらしい。

一誠に対して上機嫌にからかつていた久遠であるが、アーシアに対しては懸命に励ましの言葉をかけている。

彼は自称ではあるが、紳士なのである。女性を無下には扱わない。

「仕方ないよ。アーシアちゃんはこの間まで学校に行つてなかったんだし、それに日本語だつてまだ完璧にはマスターしてないんだから。それが普通なんだから、そんな気にしなくていいよ。寧ろこれだけ短期間で普通に話せるようになった方が凄いんだからさ」

「ですけど、でも……………」

自身の失敗に気落ちししゅんとなつてしまうアーシア。

そんなアーシアを励まそうと久遠は四苦八苦する。その二人を見ていた一誠は内心でざまあみろと久遠を笑っていた。

そんなことを思っていたからだろうか。久遠は必死になつた挙げ句、アーシアを励ますためにある案を提案した。

「それにアーシアちゃん、考えようによつてはこれは得かも知れないよ」

「え？ それってどういうことですか？」

いきなり得だと言われても分からないアーシアは当然の様に首を傾げる。

その可愛らしい様子に周りで三人のやり取りを見ていた男子達は見惚れてしまう。

「もう今からでは追試は免れない。でも、それはそこにいる馬鹿も同じだ。なら、一緒に追試対策の勉強をすればいい。アイツも一緒だからアーシアちゃんも不安じゃないだろ。それにあの馬鹿は何だかんだと言つて追試で今まで全部躲してきた奴だよ。だからアイツと一緒に勉強すれば、多分追試も躲せるはずだ。何より、アイツと一緒にするのは嬉しいでしょ、アーシアちゃんはさ」

「あ、あう……………」

久遠にそう言われ、アーシアは一回だけ一誠の顔を見た後に顔を

真っ赤にする。

その恥じらう様子は同性である女子でさえ魅了するほど可愛く、近くにいた女子達がアーシアを見て頬を赤く染めていた。

アーシアにとって実に嬉しい提案を当然蹴るなどということはない、アーシアは一誠に振り向き、恥じらいつつも彼にお願いする。

「あ、あの、イツセーさん！ その……私と追試のために勉強を一緒にしてくれませんか！」

その可愛らしく一生懸命なお願いに、一誠が答える言葉は一つだけであった。

「……あいよ……」

その返事を危機、アーシアは華が咲いたかのような笑顔を浮かべ喜ぶ。

そんなアーシアの姿を見ながら一誠は思う。

（はあ……仕方ねえなあ……）

何処までも『身内』には甘いのが、兵藤 一誠という男である。

『家族』にお願いされたのなら、皆の長男としてそれに応えるのは当然だ。

裏では悪魔ですら戦く最凶の人間も、身内にだけはとことん甘いのであった。

こうして二人は追試に向けて、一緒に勉強することになった。

25話 彼は情けない

学生の本分である勉学。

それまで学んだ知識を試すためにある、学生ならば誰もが逃れることの出来ないテスト。その中でも特に個人の将来を左右すると言っても良い二大テストの一つ、中間テストで見事大敗を喫した一誠とアジア。

別にアジアに対しては単なるケアレスミスであり、十分に情状酌量の余地はあるだろう。

元から外国の人間であり、これまで学校に通ったことが無いのだからいきなりのテストで良い点が取れないのも当然かもしれない。ただでさえ日本語で標記されている物なのだから、つい最近日本語を学び始めたアジアには酷というもの。

だが、それでも健気に努力をするアジアは、充分皆を納得させる成績を出していた。今回は偶々答えを書く覧を間違えてしまったため、赤点になってしまっただけなのだ。答えその物は間違っていない。

だが、一誠に関しては間違いなく自業自得である。

この男、テストがあると分かったところで勉強しようなどと思っていない。

頭の悪さを自他共に認める一誠は、どうせ勉強しても無駄だろうと判断し、してこなかったのだ。

それでも赤点を見て気分が憂鬱になるのは、面倒な事への落胆である。

誰しもが思うだろう、そんなに嫌なら真面目に勉強すれば良いのに……と。

だが、それでも絶対に勉強しないのがこの男だ。

別に意地でも何でも無い。ただ……面倒臭がりなだけであった。

そんな如何にも駄目な男と些細なミスで失敗してしまった少女の二人は、この先にあるであろう『追試』という名の救済措置、もしくは悪夢の続きを打ち破るために二人で勉強することにした。

「イツセーさん、何処に行くんですか？」

純真無垢な笑顔を浮かべ、アーシアは隣を歩く一誠に問う。

勉強をすると決めた所で移動を始めたわけだが、一誠はアーシアに行く先を伝えていない。

それは案に伝える必要がない程に距離が近いからなのだが、それでも問われたのなら答えるのが道理。

一誠は何とも言えない顔でアーシアに答えた。

「ああ、何、所謂……真面目な奴が好む所だよ。好きこのんで行きたいような所じゃねえが、あそこほど勉強しやすい所もねえからなあ」
「？」

不思議そうに首を傾げるアーシアを連れて尚も歩を進める一誠。

そんな一誠を信じてアーシアは着いていく。一誠の事ならば、彼女は何でも信じられる。それだけ一誠の事を信頼しているから。

そして一誠はアーシアを連れて向かった先にあったのは、とある一室であった。

教育機関ならば、必ずと行つて良い程にある部屋。学校の知恵と英知を集めた場所。

かつては勿論、現在でさえ勉強嫌いの一誠が世話になっている所。

その名も……。

『図書室』

そう、二人は勉強をするべく図書館に来たのだ。

アーシアはその存在を知ってはいたが、こうして来たのは初めてであり、目を輝かせた。

その様子を見て一誠は軽く笑うと、力を抜いてその扉を開ける。

その先に広がっていたのは、これまでの学園とはまた違った雰囲気漂わせる一室であった。

古い書物特有の香りが部屋を満たし、ノスタルジックな感じがまるで室内の時を停止させているように感じさせる。

そんな異質な空間を見て、アーシアは目を輝かせた。

「わあ……これが図書室なんですねー！」

その存在は知ってはいたが、初めて図書室を見たアーシアは感動する。

その生い立ちの所為か、世間知らずな所があるアーシアは些細な事でも感動する所があり、そんなアーシアの様子を見ては一誠は苦笑を浮かべる。

そして二人で部屋に入るなり、適当に席を探し始めた。

これがまだテスト前だったのなら皆テスト勉強のために訪れて満席になっている所だが、既にテストも終わった後ということもあつて現在はガラガラである。

それでも多少の生徒は残っており、皆読書なり勉強なりに勤しんでいた。

それに習い、一誠とアーシアもあまり物音を立てないようにして部屋の奥へと向かい、そしてあまり人気のない席を見つけ二人で座った。

そして普段は殆ど使わない教科書を引っ張り出す一誠にアーシアは嬉しそうに笑う。

「イツセーさん、頑張りましょうね！」

元気良くそう言ってきたのは、彼女なりに一誠と一緒に何か出来るということの喜びからである。

だが、それを受けた一誠は返事を返す代わりに人差し指を口元に翳した。

「あ、すみません………」

それが世間一般に於いて、静かにしろというジェスチャーであることはアーシアでも理解出来る事であり、その意味を察した彼女は顔を赤くしながら慌てて口を押さえる。

彼女でも知っている常識……。

『図書館では静かに』

である。

勿論漫画などでの受け売りであるが、心優しい彼女ならそれを真の意味として受け止める。図書室は皆が静かにしているのだから、迷惑

をかけてはいけないと。

ちなみに一誠の場合は、単に睨まれるのが面倒だからである。

この男、凄みを効かせた顔をすれば忽ち悪人面だ。そんな男に睨まれたとあっては、その日の内に一誠の事が学園中に知れ渡ってしまう。勿論、悪い方向で。

そうになると、色々と面倒になることが予想出来るために一誠は黙っていた。

暴れるのは暴れるときだけで良い。それ以外は普通に過ごしたいのが一誠である。

そして勉強を始めるわけだが、その勉強は進む速度が各自で違う。元から頭の良いアーシアは直ぐに集中し始め、テストの範囲の問題をスラスラと解いていく。日本語もゆつくりと読めばある程度は分かるので、漢字の読み間違えにさえ気を付ければそれほど問題にはならない。

対して一誠はまったく進んでいない。

アーシアと違い、この男は本当に頭が悪い。

学力が悪いといったことや、IQが低いなんて生優しい物ではない。知恵の輪を渡せば力で無理矢理引き千切るといった答えを出すくらいに脳筋なのだ。

そんな残念なオツムの人間が出来る勉強などたかが知れている。

同じ学年の、それも片や異国の不慣れな少女よりも学力の低い男。それがどれだけ情けないか、勉強する姿を見ているだけでも伝わってくる。

それでも、一誠がこれまで追試を無事にやり遂げてきたのはそれなりのコツを掴んでいるからであり、その点で言えばアーシアよりも効率良く勉強出来ていると言えなくも無い。

再び言うが、だったら追試でなく本番でそれをすれば良いのではと思うだろう。

だが、本番よりも同じ範囲を二度目なら、其方の方が圧倒的に有利に問題を解けるのは明白である。

つまりそう言うこと。

既にやっているからこそ、追試の出るであろう問題の傾向もある程度予測が付けられるからこそ。これまで一誠は何とか学園の残っていたのだ。

だが、それが……。

「あの。イツセーさん……ここが分からないんです……」

「ああ？　どんな問題だ……よ……」

アーシアに勉強を教えられる事とは関係が全くない。

本当に分からないと困った様子で聞いてきたアーシアに対し、一誠は苦笑いを浮かべた。

その問題は一誠がどう見たって分からない問題なのだ。

彼の経験からすれば、そんな難しい問題が追試に出ることはない。だが、そうだとは言いい切れないのも確かなのだ。ここでもし、そんな問題は出ないと答えればアーシアは一誠を疑うこともなく信じるだろう。だが、それで追試にその問題が出てしまったら、流石に一誠は責任を取ることが出来ない。

勿論、アーシアはそのことを許してくれるだろうし、気にしなくて良いよ笑顔で答えるだろう。だが、そうされたのならば、一誠の心は罪悪感で押し潰されるかもしれない。

この男、戦闘時以外は案外ヘタレなのである。

そこで返答に困り、どうすれば良いのか困る一誠。

そんな彼に、その救いの声はかけられた。

「そこはこうすれば解けるわよ」

その声を聞いて声の出所へと振り向く一誠とアーシア。

二人の視線の先には、眼鏡をかけた女子生徒が立っていた。

美しい顔立ちに眼鏡をかけ、スレンダーな身体をした女子生徒。見た限り、一誠達よりも一つ上の三年生のようだ。

その女子を見て、一誠は見覚えがあった事から話しかけた。

「あれ？　確かあんた……あんとき森にいた……」

「覚えていてくれたみたいですね。久しぶりです、兵藤 一誠君」

一誠は名前を呼ばれて少し警戒するが、それはアーシアの喜びの声でかき消される。

「あ、解けました、ありがとうございます！」

「そこは少し癖がある問題ですが、それさえ気を付ければ後は基本と変わりませんよ」

問題の解き方を教えて貰い、喜んでお礼を言うアーシア。

そんなアーシアを見て微笑む女子に、問題を教えられなかった手前、一誠は何も言うことが出来ない。

そしてアーシアの感謝を受けながら、その女子は二人に改めて自分の名を名乗った。

「私は支取 蒼那。この学園の生徒会長をしている者よ」

それを聞いてアーシアは顔を赤くして慌て始める。

いくら世間知らずな彼女でも分かる。生徒会長というのが如何に偉いものなのかが。

「はわあ、生徒会長さんですか！ す、すみません、馴れ馴れしくしてしまつて……」

「そんなことはないわ。一生懸命頑張つて勉強してる生徒の手助けをするのも生徒の長として当然のことです」

「はあ……格好いいです……」

女子のその凛々しい態度に頬を染めて憧れるアーシア。

そんなアーシアとは別に、一誠はその女子の名を聞いてやつと思ひ出した。

彼女……支取 蒼那……本当の名を、ソーナ・シトリーだということとを。

殆ど面識は無いが、久遠が言っていたこの町を管理するもう一人の悪魔で、主にこの学園の管理を行っている。

得意先でも無ければ関わりも無いため、ほぼ忘れていた。

それを見透かされてなのか、ソーナは笑みを浮かべつつ一誠に話しかける。

「貴方には助けられましたから、是非ともお礼を言いたく。まだ生徒会が始まる前だったので少し読書でもしようと思つて来たのですが、貴方に会えるとは思いませんでした。勉強ですか？」

「そんな殊勝なもんじゃねえよ。ただの追試対策だ」

それを聞いて、ソーナは少し興味深そうに一誠を見る。

彼女の周りにいる者達は皆成績が優秀な物ばかりだ。だからか、赤点を取って追試を受けるといふ人間は初めて見た。

それが実に興味深い。

そして二人のノートとやっている勉強を見て、ソーナは何か思いついたのか手を前に軽く合わせる和一誠に提案してきた。

「もしよろしければ……勉強を教えて差し上げましょうか。分からないところがあつたら何でも聞いて下さい。これで少しでも恩を返せば良いのですが……」

その提案に一誠はどうすべきか悩んだ。

無料で教えて貰えるならそれに越したことは無い。だが、彼女にそうして貰える義理も無いのだ。その所はきっちりしている一誠は、この善意に対し判断を迷う。

だが、一誠がその返答を決める前に、アーシアから声が上がった。

「はい、よろしくお願いします、会長さん！」

それを聞いて、一誠は仕方なく会長の提案を呑むことにした。

別にアーシアが喜んでゐるからではない……とは言ひ切れないが、もうこう言い出しては断ることは出来ない。断れば妹が悲しむと分かるから。

それに何より、現状一誠ではアーシアに何も出来ないのです、素直に提案を受け入れることにした。

たまにはこういうのも良いかと思ひながら。

こうして、この日から一誠とアーシアは会長から勉強を教えて貰うこととなった。

26話 彼は再会する。

会長に勉強を教えてもらえることになり、一誠とアーシアは放課後の図書館で一時間だけ勉強を見てもらうことになった。

会長の教え方は的確でわかりやすく、アーシアは勿論、頭の残念な一誠でさえ理解出来るくらい優秀だ。

それにより、アーシアは日本語の読み間違い以外は間違えることはなくなり、一誠も随分とマシな頭へと成長した。

そのことにアーシアは感謝し、一誠も何だかんだと言いつつも感謝していた。

このまま行けば、二人とも余裕で追試は合格出来るだろう。

その見返りというわけではないが、一誠とアーシアの二人は会長の愚痴に付き合うようになっていた。

駒王学園はは巨大な学園だ。それ故に生徒会長の責務は多く、責任は重大である。

それを一身に背負う彼女は自らの矜恃にかけても完璧に熟す。

だが、それでもまだ十代の少女なのだ。

いくら悪魔だろうと、ストレスが溜まるのは人間と変わらない。

彼女は下僕には話せないであろう内容の、あまりにも疲れるような話を一誠達に話すようになっていた。

それは偏に、この時間だけ彼女が生徒会長であることを忘れられるから。

自ら望んでなった役職。悪魔という身分。それは己の存在を縛り付ける。

別に嫌では無い。だが、それでも時には疲れてしまう。そんなことを同族に話せるわけが無いのだ。悪魔というのはプライドが高い故に、話せば無能と見下される。

それについて、多種の存在はもつての他である。悪魔の業界を知っている存在など、同じように裏の存在くらいだ。それらに弱気を見せれば嘗められるのは当然。

そんなこと、彼女は断じて許せない。

だが、一誠になら話しても良いと思った。

この強大な力を持つ人間を前にすれば、自分など周りの同世代の人間と変わらない小娘だ。嘗められるわけでも侮辱されるわけでもない、純然たる結果がそうなのだから、言いようが無い。

それに、一誠の性格は少し触れただけでも分かるくらい単純であり、彼が戦う以外の相手に対し、見下したり貶したりしないということとを彼女は理解している。

だからこそ、彼女も安心して愚痴を漏らすことが出来る。アーシアの優しさもそこに加味されているのは勿論である。今でも信徒であるアーシアでも、彼女は差別しない。それはアーシアの純粋な善意を理解しているから。それがまごう事なき物だと分かっている。

そんなわけで、一誠とアーシアは勉強を教えて貰うかわりに、会長の愚痴に付き合う。

そんな日々が三日ほど過ぎた辺りに、その話は会長から出た。

その日、もう定番となりつつある図書室への勉強に出向く一誠とアーシアの二人。

当然着けば静かに勉強するのみである。

会長はいつも少しすると来て二人の勉強を見るのだが、この日はいつもより少しばかり遅かった。

そして会長の顔もいつもより疲れが見える。

そのため、アーシアが心配して声をかけた。

「あの、会長さん……どうかしたんですか？　何だかお疲れのようですけど……」

「すみません、ありがとうございます。ですが、大丈夫ですよ」

アーシアのいたわりの籠もった声に会長は顔を綻ばせ、感謝の言葉を述べる。

もしここで彼女の下僕である匙　元士郎が彼女の顔を見たら、きっと顔を真っ赤にしていたかもしれない。それぐらい、彼女の笑みは早々見られないのだ。

会長はアーシアに心配をかけたことを申し訳なく思いながら、それ

でも愚痴を口にしようか悩んでいた。

今までのちよつとした愚痴なら口にしていたかもしれない。

だが、今回の内容はそんな些細な物ではない。

最悪、再び三大種族の戦争を引き起こしかねない内容の物だ。簡単に口にして良い問題ではすまない。

それ故に彼女の顔は僅かだが歪む。

それを見ていた一誠はソーナに話しかけた。

「今更そんな面してんなら聞いてくれって言ってるのとかわらねえよ。そんな気になるならとつと吐いちまえ」

一誠の言葉を聞いて口元を少し歪めるソーナ。

少しでも話して胸の内をスッキリさせたいという気持ちと、無関係の一誠達を巻き込むわけにはいかないという気持ちとがせめぎ合う。

それを見越してなのか、一誠は更にソーナへと話すよう促す。

「別に、言うだけは無料だからよ。それで楽になるってんなら、話した方が得だぜ。その分ちゃんと教えるんだったら、それで充分釣りが来る」

それを聞いて、ソーナは少しばかり笑ってしまう。

責任感が強い彼女にはまず考えられない考え方。それが少し可笑しく、それでいて羨ましく思った。

話すだけなら無料。聞くだけなら無料。どうするかは言わないし何もしない。何も取られないのなら、損はないだろうと一誠は言ってきたのだ。

それでも気になるなら、もう少し追試回避のために勉強を見てくれるとも。

お気楽で単純、何よりも闊達。

その気楽さをソーナは笑い、その通りだと思うことにした。損が無いなら話したところで問題も何も無いのだから。

「すみません、兵藤君、アルジェントさん」

「別にいい。さつさと吐いちまえ」

「そうです。こんなにお世話になっているんですから、少しでも会長さんの胸のつかえが取れるならお話くらい何回でもお聞きします」

二人から快く返答を返されたソーナは、一回だけ深い溜息を吐いて胸の内にある疲れの根源を吐き出した。

「実は……今、此方の業界ではある問題が上がっているんです。もしかしたら戦争を引き起こし兼ねない程に危険な事が……」

「なんだよ、それ？」

危険ということを聞いて一誠が愉快そうな笑みを浮かべる。その笑みは黒い物で、見る者を怯えさせる物だ。

凶悪さを垣間見せる一誠に少しばかりソーナは戦きつつも、続きについて話す。

「何でも、教会で保管されていた聖剣『エクスカリバー』が三本、何者かによって強奪されたらしいのです。聖剣は悪魔にとつて致命的なダメージを与える物。それがなんと、この町に持ち込まれたという情報が来ました。悪魔として、そのような危険物が間近にあることは看過出来ません。ですが、流石に教会内で起きたことに対し、下手に我々が関与するわけにも行かない。下手に事をこじらせれば、それは協会側との……つまり天界との戦争に発展しかねませんから」

自分達悪魔が納めている土地に勝手に危険物が持ち込まれた。その事に怒りを感じないソーナではないが、下手に此方から出れば天界と悪魔の休戦状態が崩れてしまう恐れがある。そのため、手を出せない現状に彼女は歯がゆい思いをしているようだ。

だが、それは向こうも同じである。

天界とて、過去の大戦ではかなりの深手を負った。しかも悪魔と違い、種を増やす方法を持たない天界は更に悪魔側との戦争を望みはしないだろう。

双方ともそんな事を望んではない。

「今は双方とも消耗している状態から復帰のために尽力をしている最中です。ですから争うだけ余計な被害を出すだけであり、得など無い。故に双方とも不干渉で行きたいところなのです。ですが、それではみすみす互いに危険に身を晒すのみ。強奪者の脅威から身を守るためには、その者を捕らえ、聖剣を奪い返すしか無い。協会側からも、自分達の不始末を内々に片付けるために、二名ほど聖剣使いをこの町

に派遣したそうです」

そこで一旦言葉を切るソーナ。

事の重大性を感じ、顔を真っ青にするアーシア。彼女は元が着くとは言え教会所属のシスターだ。聖剣が奪われた事に関し、それがどれだけ非常事態なのかを良く分かっている。

対して一誠はあまり深くなど考えていなかった。

彼からすれば、教会のお宝を盗んだ盗人がこの町に来ている。それは悪魔には有害な物だから悪魔としては直ぐにでもどっかに行つて欲しい。協会側は盗まれた事が世間様に知られるのが嫌だから、バレる前に秘密裏に奪い返したい。

そんなところである。彼の目の前に立ち塞がるのならともかく、そうでないなら相手にする気などサラサラない。そんな物を相手にするのなら、まだスーパ―の特売に精を出している方が余程有意義だ。最近ではアジアの御蔭で美味しい食事にありつけている一誠だが、その分エンゲル係数は上がっているのだ。少しでも安い食材を手に入れないければ金欠に更に拍車が掛かり、日干しになってしまうのである。その程度にしか考えていなかった。彼からすれば、自分の所にちよっかいをかけられなければ好き勝手にしろというのが本音であつた。

本来ならそこに何故同じ名前の聖剣が七本もあるのかなど、聞くべき事は多いはずなのだが、この男に限ってはそんなこと気にならない。そんなものは同じ名前ですしただけ違う物が七個ある程度にしか思っていない。良くあるジュースの味違い程度にしか認識していないのだ。

だからこそ、特に聞き返す事をしない。

ソーナは二人の反応を見て、更に悩みの核心について話し始めた。「その派遣された聖剣使いなのですが……私達悪魔への謁見を求めたのです。まずは私の所へ、そして今頃はリアス達の所です。内容は『聖剣奪取に一切悪魔は関与せずに見て見ぬ振りをしろ』という物でした」

疲れた様子でそう言うソーナに、アーシアは居たたまれない表情を

浮かべる。

その時の話し合いがどのような物か、彼女には何となく想像が付いたのだろう。

悪魔と教会の人間が如何に仲が悪いのかを知っていれば、大体は予想が付く。

それに対し、一誠もニヤリと笑みを浮かべる。

一誠も大体仕事をしていれば、どのようなものは分かってくるからだ。その上で彼は笑い、そして聞く。

「それで、その後はどうしたんだよ？ その様子だと、それだけじゃねえ感じだろ」

「ええ、そうです。私は一応許可を出しはしましたが、あくまでも決めるのはリアスですから。なのでリアスと話し合うよう勧めました」

そう答えるソーナは、苦渋の選択をしたような顔になっていた。

彼女自身、自分だけで決めることは出来なかったから。自分の言い分一つで戦争になるかもしれないと思うと、容易なこととは言えなかった。

ソーナの表情から察したアーシアはどうすれば良いのか悩む。慰めの場合によるということを彼女は知っているから。

それに対し、一誠は普通に口を開いた。

「別にいいんじゃないか、それで。あんたの判断は間違いじゃないよ。確かこの町を治めてんのはグレモリーの姫さんの方だろ？ だったら町の問題も姫さんが決めれば良い。その話は結局あの姫さんの所に回るんだからよお。妥当な判断って奴だと思っぜ、俺は」

「で、ですが、リアス一人に重責を負わせる訳には……私も悪魔、この学園を治める物としてのプライドもありますし……」

一誠が言っていることは、案にリアスの全部丸投げしろと言っているようなものだ。

町の事を決めるのにはどうしたってリアスと話し合う必要があるのだから、決定権はリアスにあると。

だが、それでは流石にソーナの気が済まない。

幼い頃からの友人として、この事態をリアス一人に押しつけるのは

酷いのではないかと思うから。

良心の呵責に悩むソーナに、一誠は叩き斬るように真っ直ぐに言い切った。

「そうぐちぐち悩むんじゃないやねえよ。あんたはその話を聞いてどう思ってたんだよ。率直になあ」

「そ、それは……此方から手は出せないのですから、何とかして貰えるならそれに越したことは無いと……此方に被害が出るのなら別ですが……」

「そう思ってたんならそれでいいんだよ。あんたがそう思つて、そして決めたんだ。決めたんなら、後はテメエを信じて突っ走れ。それがあの姫さんに任せるのに、一番大事な事なんだからよ。テメエでも信じられねえことで他人が納得するわけねえんだ。だから信じろよ、あんた自身の選択をよ」

それを聞いたソーナは少し泣きそうな、苦しそうな、そんな顔で少しだけ悶えると、一誠とアジアに笑顔を向けた。

「そうですね、兵藤君の言う通りです。自分の判断を信じられないのに人に任せるなんて可笑しい話でした。確かに、自分の信じたことに責任を持ってなくて何がプライドですか。そんなもの、自分を信じられない者が持つて良いわけがないに……すみませんでした、愚痴を聞いて貰つて、その上相談まで。でも、これでスッキリしました。ありがとうございます、二人とも」

爽やかな笑みを浮かべるソーナにアジアは喜び、一誠は鼻を鳴らす。

彼からしたら、ぐちぐち悩んでるんじゃないと言う程度の話。だが、それでも悩んでいた者にとって、その意見は確かにその者を救ったのだ。

こうして少しは気分が晴れたソーナは、感謝の代わりにいつも以上に二人に勉強を教えることにした。

それにより喜ぶアジア、そしてきついことにげっそりとする一誠であつた。

ソーナからいつも以上に勉強を見て貰い、クタクタになった二人。そんな二人を校門で待ち構えている者がいた。

「よお、二人とも。勉強お疲れさん」

「あ、久遠さん！」

現れた久遠に笑みを向けるアーシア。一誠は付かれもあつてか軽く睨み付ける程度だ。

それを挨拶と受け取った久遠はそのまま一誠達と合流。

そのまま三人は世間話に華を咲かせる。

久遠が冗談を言い、アーシアが笑い、一誠が突っ込む。

もうアーシアが一緒になってから毎度のように行われていく下校風景。

その中の会話の一つに、その日の夕飯についての話が上がった。

「あ、イツセーさん！ 今日の御夕飯はカレーですよ」

「何々、今日はイツセー、夕飯はアーシアちゃん手作りのカレーかよ。羨ましいなあ、この、この」

「うるせえよ、久遠！ からむんじゃねえ」

「あの、でしたら久遠さんも一緒にどうですか？ みんなで食べた方がご飯も美味しいですし」

「え、マジイイの！」

「おい、アーシア、マジかよ……はあ……」

週に二日くらいはアーシアは一誠の夕飯を作るように今ではなっていた。

そのためか、一誠はますますアーシアに強く言うことが出来なくなっている。どこの家庭も台所を預かる者が一番の強者なのである。

世間ではそれを尻に敷かれると言う。勿論、両者にそのような意識はない。

そんな会話をしている最中、三人は奇妙なものを見つけた。

それは真っ白いローブに身を包んだ二人組。

二人の間には鍋の様な物が置かれており、そこには僅かどころか雀の涙以下の小銭が入っている。

そんな二人は周りに聞こえるよう、なけなしの声を絞り出しているような声を出していた。

「迷える子羊にお恵みを~~~~~!」

「天の父に代わって、哀れな私達にお慈悲を~~~~~!」
それを見た途端、爆笑する一誠と久遠。

今まで見たことの無い、明らかにアホらしい二人に我慢が出来なかったのだ。

そんな二人に対し、アーシアは苦笑を浮かべる。元シスターからすれば、二人組ことを笑うことなど出来ない。

すると二人組は笑う一誠達に気が付いたようで、此方の方を向いてきた。

そして一誠を見て、片方が声を洩らした。

「え……もしかして、イツセーくん?」

その言葉と共に頭から外れるフード。

フードが隠していた部分が顕わになり、そこにいたのは茶色い髪をツインテールにした可愛い少女だった。

その少女の顔は驚きで固まっている。

一誠の名を知っているということは、彼と何かしら付き合いがあったのかもしれない。

だが、一誠が発した言葉は……。

「あれ? あんた……誰だ?」

少女の感動を打ち砕くような、そんな恍けた声だった。

27話 彼は言い負かす。

いきなり見知らない人間から名前を呼ばれ、怪訝そうな顔をする一誠。

そんな一誠にその少女は食い付くように話しかけてきた。

「え、忘れたの!? あんなに一緒に遊んだのに?」

「遊んだ? あんましそんな覚えはねえからなあ……」

迫るように話しかける少女に、一誠は本気で首を傾げる。

本当に覚えが無かった。この男は、基本的に人のことを覚ええない。頭が残念なこともそうなのだが、重要なのかそうでないのかの区別がはつきりしているのだ。それ故に、重要ではない人間のことを覚えているのは稀である。

少女は話しかけても思い出せない一誠にやきもきし、そんな彼女を見かねてか、同じ白いローブを羽織ったもう一人の女性が少女に話しかける。

蒼い髪に一部だけ深い緑色のメッシュが掛かっている、少女とは違い格好いいといった相貌の女性であった。

「イリナ、知り合いなのか? 彼はお前のことを覚えていない様だが?」

「ゼノヴィア、そんなことないわ! だって小さいとき、彼のいた孤児院に良く遊びに行ってたもの! 覚えてない、イツセーくん? 私、紫藤 イリナよ」

少女……イリナの名乗りを聞いて、一誠は自分の記憶を掘り返していく。

そして少しした後、確かにその名前に覚えがあることを思い出した。

幼い頃、まだ神器に目覚める前に少しの間だけ、一緒に遊んだことのある子供だと。

だが、その記憶にある人物と現在目の前にいる人物では、その姿が違っていた。

成長したからなどと言う様な物ではなく、根本的な部分で。

「イリナ？ あ、ガキの頃に一緒に連んでたイリナか？ だけど、アイツは……男のはずだと思っただが……」

その一誠の答えに対し、イリナは頬を膨らませてむくれて見せた。「ああ、そんな風に私のこと思ってたの！ ひつどろろいッ!! そりゃ、確かにあの時の私はヤンチャだったし、男の子っぽい恰好してたけど、だからって本当に男だと思ってたなんて……!」

「いや、その……悪い……」

戦闘中はその力を使い猛威を振るう一誠だが、平常時ではただの駄目な男。イリナに失礼な事をしたと自覚し、実にバツの悪い顔になった。

そんな一誠の顔を見て、苦笑するアーシア。そして久遠は爆笑していた。

一誠はバツの悪さから歯切れが悪いが、それでも久々にあった友人に改めて挨拶を返す。

「まあ、そのなんだ……久しぶりだな、イリナ」

「うん、イツセーくんもね。随分と格好良くなってたから、ビックリしちゃったわ」

明るく返すイリナを見て、アーシアは若干ながら頬を膨らませていた。

一目見てわかるイリナの瞳に宿る感情に、同じ女であるアーシアは警戒を抱いたのだ。

それに気付かないかのように、一誠はイリナに話を振っていく。

今は互いにどうしてるのかや、今までどこにいたのか。それ以外にも一誠に恋人はいないのかや、イリナの両親は元気にしているかなど、良くある世間話をする二人。

イリナからすれば幼馴染みに会った懐かしさから喜びを感じているところだが、一誠からすれば昔の自分が如何に能天気だったのかを思い出させられ、恥ずかしくなってくるばかりである。

ある程度一誠との会話に華を咲かせていたイリナであったが、置いてきぼりにされてジト目で睨んでいる相方を思い出し、慌てて一誠達の前に連れて来た。

「紹介するわ！　この子はゼノヴィア。私と宗派は違うけど、同じキリスト教の信徒なの。ほら、ゼノヴィア！」

イリナに自己紹介するように促され、多少ぶっきらぼうにゼノヴィアは一誠達に自己紹介を始めた。

「ゼノヴィア・クアルタだ。こいつはプロテスタントで私はカトリックだが、ある共通の任務のために一緒にいる」

あまりに味気ない自己紹介。だが、ゼノヴィアはそれで充分だと判断し、少し身を引いた。

そんなゼノヴィアにイリナは突っ込むが、ゼノヴィアは取り合わない。

どうやら天真爛漫なイリナと真面目なゼノヴィアは仲がそこまで良くないようだ。

それを見ていた一誠達は何となくそう感じた。

そして久遠がそんな二人を見て、あることを聞こうとする。

何故、あのような物乞い同然な事をしていたのかと。

実に失礼な話だが、やはり気になってしまうのも仕方ない。

だからこそ、久遠が口を開こうとするが、その前にゼノヴィアが口を開いた。

「さっきから見覚えがあると思っていたが……もしや……アーシア・アルジェントか？」

「っ!？」

ゼノヴィアに見つめられながら自分の名を呼ばれたアーシアは、驚きのあまり目を見開く。

だが、どこことなく分かつてはいた。

真っ白いローブに先程の言葉、そしてキリスト教。

それら全てが表すのは、彼女達が教会の人間だと言うこと。そして自分は教会から追放された咎人なのだから、彼女達がそんな自分にとのような感情を向けてくることも。

そして予想通り、彼女の咎を責めるかのように、ゼノヴィアは口を開こうとした。

だが、その直前……。

ぐうううう

うううううううううううううううううううううううう……。

そんな音がゼノヴィアとイリナの腹から聞こえてきた。

「っ!?」

その途端、顔を真っ赤にするイリナ。そしてゼノヴィアはあまりのシリアスな場面から一転した状況に、実に気まずい顔をした。

その音を聞いた途端、声にこそ出さなかったが、一誠と久遠は腹を抱えて悶える。

あまりのシリアスな場面を台無しにした彼女達の腹の音は、二人の笑いのツボを大いに刺激したのだ。

あまりの二人の悶えっぷりを見たアーシアは、それまで泣いてしまいかもしれないという感情が吹き飛んでしまい、二人に向かって苦笑を浮かべる。

一誠に笑われたことで更に真っ赤になって、アーシアじゃなくイリナが泣きそうになる。それがあまりにも可哀想に見えたからか、アーシアはそんな二人に助け船を出した。

「あ、そうです！　せつかくですから、一緒に御夕飯を食べませんか！」

その声を聞いて、二人はある意味救われた。

シリアスな場面を悉く壊したイリナとゼノヴィアは、アーシアの機転により急遽一誠の部屋に上がることになった。

初めて見る一人暮らしの男の部屋に上がり、ドキドキとするイリナ。

ゼノヴィアは何とも言えない微妙な顔をして上がり、未だに腹を押さえている久遠も一緒に部屋に入る。

そしてアーシアが一人、カレーを作り始めている中、一誠はまず思ったことを口にする。

「狭え……」

元々一人暮らし用の安いボロアパートの一室。

ただでさえ狭いというのに、いつもの面子に更に二人多い五人だ。狭いのも無理は無いだろう。

そんな中、イリナは部屋の中を興味深そうに見回しながら、一誠に話しかける。

「ここがイツセー君の部屋なんだね。いつの間に一人暮らしを始めたの？」

「高校に上がるときから始めたんだよ。あまりあそこに迷惑はかけられねえからなあ」

イリナも勿論知っている。あそこと言うのが、彼がそれまで生活していた白夜園だということを。幼い頃、両親の仕事の関係で孤児院に行くことが多かった彼女は、そこで一誠と出会ったのだから。

それを聞いて、一誠は随分と律儀だと感じるイリナ。その成長を見て、彼女は微笑む。

だが、それと同時に聞かなければならないことができ、それ故に微笑みから一転して責めるような顔になる。

「ところでイツセー君……あそこで料理を作ってる彼女だけど……随分と仲が良さそうよね。どういう関係なのかしら？」

女特有の鋭い感覚がイリナに伝えるのだ。一誠とこの女には何か関係があると。

そんな相方の様子を見て呆れ返るゼノヴィア。真面目な彼女はこの手の話について行けないのである。

聞かれた一誠は妙に感じる威圧感に押されながらも、何とか答えた。

「いや、どうって言われてもなあ……家族……みたいなもんとしか……」

実に歯切れが悪い答えを返す一誠。

彼自身、アーシアが自分にとってどんな関係なのかと問われても、何と答えて良いのか分からないのだ。

一番近いのが家族というわけだ。

確かに孤児院に住んで幼い妹や弟達の面倒を見ているのだから、もう立派な孤児院の一員と言える。それは同時に、一誠の家族と堂々と

言い切っても良いことになるわけなのだが、どこことなくそう言うてはいけないような、そんな気を一誠は感じていた。

そしてそれはイリナも感じたらしく、軽く揺さぶりを入れる。

「そのわりには随分とこの部屋に通い慣れているようだけど……さつきから迷うこと無く調味料とか取り出してるし。所謂、通い妻って奴？」

そう言われ、そんなんじゃねえよ、と答える一誠。

そのぶつきらぼうながら嫌がってはいない様子にイリナは少しばかり羨ましさを感じる。そして同時に満更では無いということも。

何というか、面白くない。

そんな感情がイリナの中に溜まっていく。

だが、それを表に出すわけにはいかない。自分達には崇高な任務があるのだから。

そう思いながら、イリナは自分を制御する。

と、こんな少しばかり青春臭いやり取りを見ていた久遠は、実に愉快そうに一誠をニヤニヤと笑っていた。

その笑いを見た一誠が拳を握ったのは、当然なのかも知れない。

そして少し時間が経ち、アーシアが夕飯を持ってきた。

それは一誠と下校していた時に話していたカレーである。

ほかほかと暖かな湯気を立て、そして食欲を誘う香りにイリナとゼノヴィアの目が輝く。

「では、いただきます」

皆の配膳を終え、アーシアが手を合わせて言った瞬間、イリナとゼノヴィアは凄く速さで動いた。

手に持ったスプーンが瞬く間に動き、皿に装られたカレーライスを掬うとあつという間に口の中に入れる。

そしてほぼ同時に言葉を発した。

「美味い！」

「美味い！」

その言葉を聞いて、アーシアは嬉しそうに微笑む。

作った料理を美味いと褒められて悪い気はしない物である。

イリナとゼノヴィアはそれを機に、まるで掃除機のように見る見る間にカレーライスを皿から無くしてくと、同時に皿を付き出しておかわりを要求する。

アーシアはそれに快く応じると、二人が食べる量に合わせて大盛りにして渡す。そして二人はその大盛りを前に、再びスプーンでカレーライスをかき込み始めた。

アーシアはそんな二人を満足そうに見つつ、一誠の方を向いた。「カレーライス、どうですか？ 美味しいでしょうか？」

その問いに対し、一誠は冷や汗を掻きつつアーシアに答える。

「ああ、美味えよ」

それだけの言葉だが、アーシアは凄く喜んだ。

その様子は見ている者の心を和ませるが、一誠の心はもの凄く焦っていた。

何故か？ それは……このカレーライスの食費が原因だ。

一誠とアーシアの分だけでもギリギリ。久遠の分で限界だというのは、さらに凄い勢いで食べていく二人が追加され、一誠はその赤字に頭痛がしてきた。

戦闘では大胆不敵な一誠だが、通常時では凄く狭くせこいのである。

そんな、一部の人間は出費に苦しみ、また一部の人間は空腹が満たされることに感謝を捧げ、また一部はそんな苦しんでいる姿を見て笑う。

実に可笑しく愉快的食事も尽きたことで終わり、イリナとゼノヴィアは満足そうな笑顔を浮かべていた。

アーシアは全部食べて貰えたことを喜び、一誠は明日からの極貧生活に拍車がかかることに戦々恐々とする。

食事の際に、何でイリナとゼノヴィアがこの町に来たのか、そして何であんな物乞い紛いのことをしていたのかを軽く聞く久遠。

すると二人は、最初に物乞いをしていた理由を話した。

単純にイリナが詐欺に遭っただけの話。それで活動資金を全部ガメられてしまい、立ち往生の末にあの行為に走ったのだと。

そのことにイリナは未だに文句を言う。彼女は天真爛漫だが、確かに真摯な信徒なのである。神を信じているのはアーシアと同じであり、それ故に騙されやすいのだ。

そして今度はエクスカリバーの奪回の任務をするべくこの町に来たことを告げた。

正確に言えば、一誠とアーシアが聞いたソーナの話を久遠が二人から下校中に聞き、そこから憶測を立ててカマをかけたのだ。そして見事に引っかけ、二人は一誠達に答えることになった。

今回の首謀者が墮天使の大幹部『コカビエル』であること。盗まれたエクスカリバーの能力や、それを使って実験を行おうとしている元大司教『バルパー・ガリレイ』について。

一般人に話して良い内容では無いと思っていたイリナ達だったが、流石にこうも言い当てられては一誠達を一般人とは見なせない。

何者か問われた久遠は、二人に向かってニツコリと笑みを向けてこう答えた。

『ただの物知りの人間だよ』

当然納得が出来るわけ無いが、気配から人間であることは分かるので嘘を言っているわけでは無い。だが、それ以上に久遠の瞳の奥にある『ナニカ』を見てしまいそうで、イリナ達は追求するのをやめた。

これにより、一誠達を裏側の人間であることを理解したイリナとゼノヴィア。

イリナは裏のことに一誠が関わっていると知って、複雑そうな顔をした。

それから少しして、人心地着いた所でゼノヴィアが改めてアーシアに話しかける。

「夕食は本当に美味かった、感謝する。それで再び問うのもどうかと思うが……君はアーシア・アルジェントで間違いないか？」

「……………はい……」

ゼノヴィアの言葉を受けて、アーシアは静かに、だがはつきりとした口調で答えた。

それを聞いて、イリナも反応する。

「あれ？ 確かその名前って、教会を追放された元聖女さんよね。彼女がそうなの、ゼノヴィア？」

「ああ、間違いない。写真でだが、その顔は見たことがある。まさか追放された『魔女』がこんな極東にいるとは思わなかった」

その言葉を聞いて、アーシアの瞳に涙が浮かび始める。

分かっているとは言え、それでも実際に人から言われるのはきついものがある。

流石に妹分がこんな顔になることを許せるほど、一誠は出来ていない。

そのまま苛立ちの籠もった声でゼノヴィアに食い付こうとするが、その前に先に久遠がゼノヴィアに声をかけた。

「なあ、ちよつといいかい？」

「何だ？」

「さっきアーシアちゃんの事を『魔女』って言ってたけど、それってどういうことだい？」

その質問を笑顔でする久遠。

勿論、一誠も久遠も何故そう呼ばれているかは知っている。それを知った上で、協会側がどう思っているのかを聞こうという腹なのだ。

久遠の問いに、ゼノヴィアは蔑みを込めた声で話し始めた。

「アーシア・アルジェントは我等が信じる神を裏切ったんだ。主の敵である悪魔を神の恩恵である奇跡の癒しを使って治療した。それは神への冒瀆だ。故に、それまで聖女として崇められていた彼女は教会を追放。それまでの畏敬の念は侮蔑へと変わり、魔女として罵られるようになった。神に仇成す者として、その女は教会中から憎悪の念を向けられる存在へと堕ちたのさ」

その話を聞いて泣きそうになるアーシア。

分かっているのはいたのだ。教会の人間が自分を見れば、どう反応するかなど。

それでも彼女は信じたかった。神を、そして人の善意を。

しかし、ゼノヴィアはアーシアを許さない。神は絶対の存在であり、裏切ることとは万死に値する。

「その上、今では墮天使の庇護の元にいると聞く。正直に言つて……恥ずかしいとは思わないのか？」

尚も続けるゼノヴィア。

アーシアは責められることが苦しくて、涙が頬を伝っていく。

それを見て、ニヤリと笑う……一誠と久遠。

その顔は実に悪どく、実に恐ろしい笑みを浮かべている。

もしここにライザー・フェニックスがいたのなら、即座に失禁するくらいその顔は凄まじかった。

「……………つくつくつく……………あつはつはつはつは!! 駄目だ、聞いてられねえ! あまりにも可笑しすぎて、腹が振切れそうだ!」
「おい、イツセー、笑つちや駄目だろ! 彼女達は真面目なんだからさ……………」

真面目に話すゼノヴィアが可笑しいと言わんばかりに笑う一誠達。そんな一誠達を見てポカンとするアーシア。イリナは戸惑いを隠せず、そして笑われたゼノヴィアは怒りに顔を染める。

「なつ、いきなり笑うとは……失礼だ! 一体私の何が可笑しい!」

「いや、だつてよお……………あんたの言つてることがあまりにも可笑しいからよお」

「」

「何だど!」

更に怒りに身を昂ぶらせ、一誠を睨み付けるゼノヴィア。

ゼノヴィアの燃え上がるような視線を向けられた一誠は、ニヤリと笑みを返す。

そしてゼノヴィアの信じる神を馬鹿にするかのように話し始めた。
「いやいや、いるかもわかんねえ、役にもたたねえ神様つてもんを信じてるつてのは、凄えもんだぜ、本当」

「なつ!? 主を侮辱するとか! いくらイリナの友人とは言え、流石に許せんぞ!」

「許されなくても結構だ。元からそんなつもりもねえからなあ。いいか、良く聞けよ。あんたらの信じる神様つてのは、テメエで言っておきながら二つも約束を破つてる。そんな奴を信じられるわけねえだ

ろ」

そう言われ、ゼノヴィアは怒りで染まった思考で考え始める。

一体目の前の男は何を言っているのかと。所詮は異教徒の人間、主のお導きを信じられぬ愚か者だ。我等が主が一体何を偽ったというのだと。

その答えを、一誠はまるで獅子の如くゼノヴィアを見つめながら口にした。

その視線を向けられた瞬間、その殺気を受けてゼノヴィアの身体が硬直する。

「よく言ってたんだろ？ 『神を信じる者は救われる』とか『汝隣人を愛せよ』とかなあ。そう仰々しく言ってるわりには随分な嘘を吐くじゃねえか。アーシアの話は俺等も一応知ってる。だけどよお……その何処に裏切りなんてあつた？ 寧ろ、こいつこそもつともその約束を守ってる奴だよ。神を信じてるのにこいつは救われてない。逆に裏切られて虐げられて馬鹿にされて……。これの何処が救われるって言うんだ？ それによお……その悪魔とやらを助けたのだって、その教えからすれば『隣人を愛せよ』に入るもんだろ。傷付いた奴を助ける。そいつあ、人の善意つてもんだ。それを否定するってんなら、あんたらの信じる神様つてのは、相当なペテン野郎つてことだ」

「なつ!? そ、そんなことはない！ それは彼女の信仰心が足りなかっただけで、それに悪魔は主の敵、その敵を隣人など……」

一誠に言われ、ゼノヴィアは戸惑いながらも反論する。

そう、彼女の中ではそうなのだ。それが正しいことだと、そう教えられてきたから。だが、それを一誠は更にねじ伏せる。

「その言い分は随分と愉快なまでに可笑しいじゃねえか。逆に聞くが、お前は信じてれば絶対にその神様が救ってくれると思ってるのか？ 金が無くて喰う物に困ってる奴に同じ台詞が言えるか？ さっきまでテメエらがそうだったように。答えだけ先に言ってやるよ。答えはNOだ。いくら信じてても何もしてくれねえ神様は救いなんてしねえ。あそこでテメエらが物乞い同然の事をしてたって、神様とやらはテメエ等に喰いモンの一つも寄越しはしねえよ」

「なつ、そんなことは……それは、ここが異教徒の町だから……」

「そういうもんじゃねえよ。いいか、もしあそこでアーシアがテメエ等に飯を奢るなんて言わなきゃ、俺は飯なんて奢らなかった。それを奢るようにしたのは、テメエらが魔女だなんて宣ってるアーシアだ。いいか、その無駄に固まった頭に良く刻んでおけよ。人を救えるのは神じゃねえ。人を救えるのは、そいつを助けたっていう『善意』だ。アーシアにも最初に言ったが、感謝を神に捧げるのはそいつに失礼なんだよ。感謝つてのは、助けた奴にするもんだ。それにその隣人つてのに悪魔は駄目とでも入ってたか？ 答えは分かるよなあ……書いてねえ」

それを聞いてゼノヴィアは理解が追いつかない。

今まで殆ど教会で育ってきたゼノヴィアには、その一誠の考えが理解出来ないのだ。神は絶対と教えられてきた故に、真逆の言葉が信じられなかった。

そんなゼノヴィアに対し、イリナは理解が出来ていた。

ゼノヴィアと違い外で生活してきたイリナは神を信じているが、同時に人の善意も知っている。故に反論出来ない。

「それによお……神様つてのは随分と不平等だよなあ。信じていれば救われる。だったら、信じてねえ奴は救われねえのか？ 自分を信じてる奴にだけ手を貸して、そうでない奴には手を貸さない。なんだ、随分と神様つてのは人間臭えじゃねえか。平等を謳っておきながら、信じてねえ奴は差別する。矛盾はしてねえが、随分とみみっちいもんだ。そんなちんけでせこい奴の何処が偉大なんだよ」

その言葉を聞いて、ゼノヴィアは言葉を失ってしまう。

いや、一誠の言っていることは彼女にとって否定する以外ない言葉だ。だが、否定した所で、一誠に更になら叩き潰されると彼女には分かってしまった。

そしてその行き着く先は……彼女の存在理由を根本から消失しかねない。

だからこそ、口を開くことが出来なくなってしまった。開けばきつと叩き潰されるから。

それを見越してなのか、未だに泣きそうになってるアーシアの頭を一誠は乱暴にくしゃくしゃと撫でる。

その感触に驚いてるアーシアを見ながら、一誠はゼノヴィアに話しかけた。

「別に信じるなどは言わねえよ。そういうモンってのは、人の心の支えって奴になるからな。だけどよ……そいつを押しつけるのはちと違ええだろ。そういうもんはテメエの胸の内で信じるもんであって、人に押しつけるもんじゃねえ。そんな押しつけられたもんが、信じられるわけがねえんだからよ」

その言葉を受けて消沈するゼノヴィア。

何となくだが、理解が出来始めてきていた。だが、それでも、それを認めてしまえば今までの自分を否定することになる。それは彼女の信じる神を冒瀆する行為に他ならないから。

その矛盾が彼女を駆け巡り、思考制御が出来なくなる。

そんな彼女をイリナは抱き寄せ、安心させるように声をかけていた。

そしてイリナに向かつて一誠は少しばかり気まずそうに苦笑する。

「悪かったな、虐めるような真似してよ。だけどよ……家族が責められてるのを黙って見てられるほど、俺は人間出来てねえんだよ」

「ううん、こっちこそごめんね。ゼノヴィア、あまり世間の事知らないみたいだから。それにイツセー君の言ってること、凄くわかるからさ」

その言葉を聞いて、一誠は苦笑したままアーシアの頭をぽんぽんと叩く。

「まあ、そういうことだ。別にお前が気にするようなことなんて何もないよ。だから……泣くな」

「……………はいッ!」

一誠に励まされ、嬉しそうに笑うアーシア。

それまで泣きそうになっていただけに、その笑顔はとびきり輝いていた。

28話 彼は泊める

「で、どうしてこうなるんだよ……………」

「す、すいません……………」

疲れた溜息を吐き、頭を抱える一誠にアーシアは涙目で謝る。

何故彼がそんな顔をしているのか？ それは一誠がゼノヴィアを言い負かした後の話になる。

ゼノヴィアは思考が停止してしまい呆然とした状態になり、それを何とか復活させようとするイリナ。

アーシアはそんな二人にどのような顔をすれば良いのか分からず戸惑い、一誠は悪い訳では無いのだが、まるでゼノヴィアを虐めたかのような感じがして気まずさのあまりバツの悪い顔をする。そしてそんな一誠を見て久遠は笑っていた。

ゼノヴィアが復活するのに要した時間は一時間以上。そして復活した後は、一誠に少し怯えを見せていた。

あそこまで言い負かされて、彼女の中で一誠は自分が信じる主の敵と言っても良い存在になり、同時に言い返せなかった自分の不甲斐なさに怒りを感じる。

主の御心を信じていれば、あそこでもちやんと言い返せたはずだと。それは逆に言えば、自分の信仰心が足りないということになる。

そんなことはないと言い張りたい所だが言い返せなかったのは事実。それを突き付けられたゼノヴィアは突き付けた一誠に怨みに近い怒りを抱くが、それで何か言おうものなら、また言い負かされそうな気がして怖かった。だから怯えた。

一誠も怖いが、それ以上に言い負かされて自分の信仰心が足りないことを指摘されるのが怖かったのだ。

そんな訳で警戒の色を濃くするゼノヴィア。

そんなゼノヴィアを宥めつつイリナはそろそろ一誠の部屋から出ようとする。

それを伝えようとするのだがそれを口にする前に、まるでイリナが考えていることが読まれているかのように、意外な所から声が掛かった。

「そいつはやめておいた方が良い。今晚はこいつの部屋にでも泊まったらいいよ」

部屋の主の意見も聞かずにそう二人に言ったのは、それまで一誠とのやり取りをニヤニヤと見て笑っていた久遠であった。

当然そんな意見に反発しないわけがない一誠。

ただでさえ狭い部屋に人を泊められるような余裕などない。

だが、それに対し久遠はニヤリと笑いながら一誠を説得する。

その顔は明らかに邪念に満ちていた。

「いきなり何言い出してやがる、久遠！　んなこと勝手に決めんじやねえよ！」

「そう言うなよ、イツセー。よく考えて見ろよ……彼女達は俺達に会うまで物乞いをしてたんだ。だったら、金なんて持ってねえんだから当然宿泊するところもねえだろ。こんな可愛い女の子に野宿なんてさせて見ろよ？　いくら何でも変質者が寄ってくるのが目に見える。もしくは、そのあまりにも世間離れした恰好の所為で警察の厄介になるのがオチだ。変質者は倒せても、公安には手を出す訳にはいかねえだろ。いくら裏で教会やら悪魔やら堕天使やらの力が強かうが、表の公的機関に表立っては干渉出来ねえ。しかもイリナちゃんは兎も角、ゼノヴィアちゃんの持つてるモンはまずい。どう見たって物騒な代物だ。外国人とはいえ、銃刀法違反が当たりな代物だ。最悪、警察に没収されるって所だけど、教会がそんな不祥事を起こしたことを知ったらどうなることやら。そんなわけで、今の二人を外に出すのは色々とまずいってことだ。それにゼノヴィアちゃんをこんなに虐めたのはお前だろ。虐めた責任持つて止めてやれよ」

「ぐう……」

一誠にとって非常に不服な事だらけだが、久遠が言っていることは確かな事実。

否定のしようがないだけに、一誠は反論が出来ない。

特に最後の虐めたせいでこんなになったのだから責任を取れ、というのは結構響いたりしている。

一誠自身、そこまで酷くなるとは思わなかったからだ。

敬虔な信徒はその教えに忠実であり、その教えに存在理由が依存している。

だが、この男は神など端から信じていない。いや、いようがいまいが手を出してこないのなら関係無いと考えている。

だからこそ、宗教の観念が全くと言って良い程に浅い。寧ろこの場合は一誠の主教の見方の方が世間的であり、彼が神頼みをしたのは受験の時に少しでも何かをマシにしたかった時だけある。今のご時世、大体の日本人は必要なときにだけ信仰心も無いのに神に祈るぐらいが普通なのだ。

だからこそ、その役にも立たない神を否定しただけで、ここまでゼノヴィアがヘコむとは思わなかったのだ。故に久遠に言われるまでも無く、結構気にしてたりする。

「でも、いいの？ 確かに泊まる場所はないけど」

イリナが一誠にどうしてよいのか問うが、一誠は答えられない。

本音で言えば泊めたくない。ただでさえ狭い部屋を余計狭くはしたくない。

だが、ゼノヴィアの方を見ると悪くないのに罪悪感が湧いてくる。その気まずさもあって、NOとは言えない。

それにイリナは顔見知りではある。それを無下にするのは、それはそれで人でなしな対応だ。そこまで冷酷にはなれないのである。

そのためどちらとも言えない一誠。

だが、その思考を傾けるかのように、何とアジアが二人の宿泊に賛成の声を上げてきた。

「そうですね。確かにもう遅い時間ですし、そうしましょうよ、イツセーさん！」

さっきまで責められていたというのに、彼女は二人の事を慮って一誠に二人の宿泊を勧める。それは純粋な善意。泊まる場所がないという彼女達を心配しての意見であった。困っている人がいるのな

ら悪人でも放っておけない。それがアーシア・アルジェントという少女である。

その優しさにイリナは心から感謝をし、ゼノヴィアは複雑な表情を浮かべる。感謝の心と裏切り者への怒りが混ざり奇妙な感情がゼノヴィアを満たす。

それをどう表して良いのか戸惑っているようだ。

更にアーシアは一誠に懇願するように見つめる。その潤んだ瞳に見つめられた一誠は、あまりの分の悪さに首を縦に振る以外なかった。

この男、身内にはかなり甘いのである。

そんなわけで二人が一誠の部屋に泊まることになったわけだが、これでまだ終わりではなかった。

その後、アーシアが白夜園に連絡を入れたところ、園長から……。

『今日はもう遅いし、一誠君の部屋に泊めて貰いなさい。皆からは私から言っておきますから。それに皆もアーシアさんのこと、応援していますからね。勿論私も』

と言われてしまい、顔を真っ赤にするアーシア。

その件についてアーシアは一誠に伝えようと、一誠は凄く疲れた顔をして仕方ないとアーシアも泊まることを認めた。

今まで世話をかけっぱなしだったこともあって、一誠は園長に頭が上がないのだ。

そういう訳で急遽、アーシア、イリナ、ゼノヴィアの三人が一日だけ一誠の部屋に泊まることになった。

もう決まってしまう、今更駄目とも言えない一誠はこうして頭を痛そうにしているというわけである。

アーシアは申し訳なさそうにするが、一誠はもう決まった事として諦めた。

「まあ、しゃねえか」

その言葉と一誠の表情を見てアーシアの顔も晴れ、改めて一誠に感謝を述べるアーシア。

そんなアーシアに苦笑を浮かべる一誠は、取りあえずイリナ達に話

しかける。

「まあ、そんな訳で今日は泊まってけ。狭いからって文句言うんじやねえぞ」

「はいー!」

「あ、ありがとう、イツセーくん!」

「……………感謝はする……………」

三人の感謝を聞いて、気恥ずかしくなる一誠は取りあえずそっぽを向いて鼻を鳴らす。それが恥ずかしさを紛らわす行為だということ。は誰の目から見ても分かることであり、アーシアとイリナは二人してそんな一誠を笑っていた。

三人揃えば何とやら。

アーシアとイリナ、そしてゼノヴィアの三人は一誠の布団の上でお喋りに興じていた。

アーシアとゼノヴィアの間をイリナが取り持つようにして色々な話をしていく三人。最初に話したことは今のアーシアの立場であり、それを聞いたゼノヴィアとイリナは顔を真っ青にした。下手をすれば堕天使と教会で戦争になっていたかもしれないと、ゼノヴィアは内心恐怖し先程までの自分を呪いたくなっていた。

人間、いくら毛嫌いしているからといってむやみやたらに突っかかるものではないと。

だが、アーシアはそんなゼノヴィアを励ます。彼女も世間知らずだが、最近色々勉強して多少はマシになっているのだ。なので、ゼノヴィアがした行為も彼女は許す。立場上仕方ない事もあると言うことを分かっているから。

そのことに感謝したゼノヴィアは多少はマシな柔らかさを出しながらアーシアとの会話を行っていく。

その話題は最近の教会であったことや、アーシアの今の生活について。またはイリナからは昔の一誠のことをアーシアが聞き、アーシアからは今の一誠の話をイリナが聞くといったことなど多岐に渡る。

特に一誠の話になると楽しそうにはしゃぐアーシアとイリナ。

そんな二人の様子を見て、ゼノヴィアは『女の子』というものを学ぶべく、二人の話に聞き入っていくのであった。

そして夜はさらに深まるが、三人の間に沈黙が訪れるのはまだ先になりそうだった。

そんな三人とは対照的に一誠と久遠は外に出ていた。

単純に異性というのが気まずいというのなら、まだ一誠にも思春期の兆しがあるというものだが、そんな青臭い物ではない。

単純に狭いのでいたくない、そんな理由である。

それと同時にもう一つ、一誠は久遠と話をすべく外に出た。

当たり前なのだが、久遠を泊める気など無いので部屋から追い出したということもある。

そんな二人はゆっくりと道路を歩きながら話し始めた。

「なあ、久遠」

「なんだよ、イツセー」

普通に気楽に、いつも通りに話しかける二人。

だが、その声音は何処か暗い闇を内包していた。

これから話す内容は、あまりアジアに聞かせて良い内容ではない。

それを意識させる雰囲気は互いに出していた。

だが、口調はそれでも変わらない、いつも通りの口調で一誠は久遠に話しかける。

「正直、今回のあの二人の話、どう思う？」

「そうだなあ……まあ、マジな話だろうよ。でなけりや聖剣なんて持ち出さない」

事態の真偽に対し久遠は直ぐに答えた。

聖剣は教会でも至宝の物。それをこうして持ち出したと言ったとき
た時点で、その問題がどれだけ大きいのかを知らせる。

一誠は真偽の沙汰を確かめると共に、ゼノヴィアが言っていた『犯人』について久遠に聞くことにした。裏の情報に精通している久遠に

聞けば、何かしら分かると知っているから。

「それで？ 今回の奴等について、何か情報は？」

「う〜〜〜ん、俺も詳しくは知らないんだけどよ。確かバルパー・ガリレイは聖剣使いを人工的に作ろうとして失敗。その痕跡を消す為に実験体を皆毒殺したってんで教会を追放された研究者の大司教だ。今じゃ教会の汚点として有名だな。それとその首謀者のコカビエルなんだけだよ……確か聖書にも出てた有名な堕天使で、性格は好戦的。風の噂だと総督様とは仲がよろしくなく、シエハムザの旦那がよく愚痴を零してる原因の一つってくらいだよ」

その情報を聞いて、一誠は何かを考える。

そんな一誠を見て、久遠は笑いながらこう聞いた。

「どうだい、何か起こりそうか？」

その質問に対し、一誠はニヤリと笑みを浮かべ実に愉快そうな声で返答する。

「ああ……こいつは何か……臭え気がするなあ……絶対に起きんだろ。だからよお……ちつとは楽しめそうだ」

好戦的な野獣の笑みを見て、久遠は苦笑を浮かべるのであった。

こうして一誠はこの後一人で帰り、部屋の床に一人横になって寝た。

翌日、イリナとゼノヴィアは任務に復帰すると言うことで一誠達に感謝と挨拶をすると一誠達と別れた。

そして一誠とアジアは、取りあえず学校にいくために部屋へと戻っていった。

29話 彼は追試を控える

イリナとゼノヴィアを止めてから数日が経ったが、特に何かあるというわけも無く、日々は進んでいく。

一誠とアーシアは変わらずソーナから勉強を教えて貰う日々が続き、アーシアは確実、一誠も下手なことさえ間違えなければほぼ赤点は回避出来るレベルにまで到達した。

その事に感謝するアーシア。一誠も何だかんだと言いつつ感謝をしていた。

そして追試を明日に控え、二人はソーナに礼を言う。

「ありがとうございます、会長さん！ 御蔭で明日は頑張れます！」

「まあ、何だ……助かったよ、会長。御蔭で明日は何とかなりそうだ」

二人から礼を言われ、ソーナは少し嬉しそうに微笑む。

「別にお礼なんていいですよ。私は愚痴を聞いてくれるお礼として、少しばかりお節介をしたにすぎません。頑張ったのは貴方達なのですから」

謙虚にそう返すソーナだが、それでも感謝されるのは嬉しいようであつた。

そんなソーナにアーシアは更に感謝し、一誠は軽く礼代わりに別の事を言う。

「世話になったんだ。だったら、今度はあんたが何か困ったときにでも声をかけてくれ。俺で出来る事なら手を貸すよ」

「あ、でしたら私も手伝います！ 会長さん、何でも言っして下さいね」

一誠の提案にアーシアも同調する。

その提案を受けて、ソーナはそんな大したことでもないのにと苦笑するが、それを受け取らないのも失礼だと判断して受け取ることにした。

「わかりました。何か困ったことや人手が足りなさそうなことがあったら、その時はお願ひしますね」

「はい！」

そして礼を言い終えた二人は明日の追試に備えるべく、一緒に下校

する。

その様子をソーナは満足そうに見ていた。

学園を出た二人は、一緒に道を歩いて行く。

行き先は同じ一誠のアパートの部屋。ほぼ毎日と言って良い程に夕飯を作りに来ているアーシアに何も言えない一誠は、最早暗黙の了解のように納得せざる得なかった。

駄目だと言えばアーシアが泣き出しそうになるので、一誠はそういったことが苦手なこともあり言えない。

すっかり孤児院の一員になっているアーシアはもう一誠の家族も同然。家族に泣き顔をされては、一誠は泣き止まずのが苦手である以上、言うことを聞く以外ない。

この現象を世間では尻に敷かれているというが、それを一誠は理解出来ないだろう。

世間でこの言葉は強気の女房に頭が上がらないことを指すが、一誠の場合、アーシアは別に強気ではないし、一誠に無理難題を押しつけているわけではないのだから。

そんなわけで、今日も夕飯の材料を買うべく一誠とアーシアは二人で帰る。

その道中話すことは、今日学校であったことやソーナに教えて貰ったこと、そして明日の追試についてである。

基本アーシアが話題を振り、一誠はそれに返事を返す。

会話と言うには相互の言葉の量が違うが、それでもアーシアは嬉しそうに話していた。話を聞いてくれる人がいて、そして返事を返してくれるということが嬉しいのだ。それが一誠だというのなら、尚のこと。

「会長さんも悪魔なんですよ。でも、とっても親切で優しくて……私、憧れちゃいます」

ソーナに勉強を教えて貰った日々を思い返し、アーシアは瞳を輝かせながら一誠に話しかける。

アーシアの目にはソーナが所謂『出来る女』に映ったようで、アーシアはソーナに憧れたようだ。

その様子に一誠は苦笑を浮かべつつも答えた。

「別に悪魔だからって何かあるってわけでもねえよ。確かに魔力やら何やら使うが、普通に飯食って普通に生活してる。そこまで俺等とか変わらねえよ」

その言葉にアーシアは喜びを顕わにして頷く。

異形の存在は恐ろしい物だが、身近に感じられて嬉しかったのだらう。

悪魔だろうと素晴らしい人物は素晴らしい。人格者は人格者だと。彼女は未だに神を信じながらも、素晴らしい悪魔に尊敬の念を抱いた。

それが神への冒涇だと分かってても、彼女はその尊敬を止めはしない。素晴らしい人格を尊敬することに貴賤など無いのだから。

まあ、そこまで小難しい話ではない。

年頃の少女は、自分より優れた女性に憧れを抱く。ただそれだけの事である。

そんな嬉しそうなアーシアと一緒に帰る一誠。そのことに悪い気はしない。

もうすっかりとアーシアがいるのが当たり前になりつつある日常を、彼なりに楽しんでいるのだ。

そんな二人は傍から見れば兄妹かカップルか、そのように周りからは映るだろう。まあ、アーシアは生粋の外国人なので兄妹には全然見えないのだが。

世間の男からみれば羨ましい限りの一誠ではあるが、勿論この男に限ってそんな事など感じているわけもない。

二人はそのまま会話をしながら歩き続ける。

たまには道を変えて行くのも悪くないと、二人は林の脇道へと入って行った。

気分転換程度の、そのような理由で。

アーシアは林を見てハシヤギ、一誠は仕方ないといった様子で苦笑

を浮かべる。

そんな二人であつたが、少し歩いた後に目に入つた物を見て動きを止めた。

「なっ……イリナさんッ!？」

二人の目に入つたのは、ボロボロの姿のなつたイリナだった。

黒い身体のラインが出る独特な戦闘衣は殆ど用を成さずに切り裂かれ、肌が多く露出しその殆どが真っ赤に染まっている。

見るからに瀕死状態で、アーシアは泣きそうになりつつも大急ぎでイリナの元へと駆けつける。

そしてまだ意気があることに安心し、両腕をイリナに添えて自分の神器を発動させた。

アーシアの両手から溢れるように優しい光がイリナの身体を包み込み、そして傷を修復していく。

「誰がこんなことを……酷い……」

悲痛な声で悲しむアーシア。

一誠は念のため周りを警戒するが、辺りからそれらしい気配を感じないことからそれを解く。

傷を治し終えたアーシアは一誠に向かって真剣な表情を向けた。

「イツセーさん!」

「わかつてる」

そう答えると、一誠はイリナを持ち上げる。

このままここに放置しておける訳も無いので、取りあえず一誠の部屋へと運ぶことになった。

のだが……。

アーシアは持ち上げられたイリナを見て、顔を真っ赤にして一誠に叫ぶ。

「イツセーさん、そのままじゃ駄目です! イリナさんの見えちゃいます!」

「あ? それってどういう……」

意味が分からずに一誠はイリナを改めて見ようとする。

だが、一誠の目はイリナを見る前に視界が真っ暗になった。

「い、イツセーさんでも駄目です〜!!」

アーシアの懸命な叫びに一誠は内心で首を捻る。

だが、アーシアのこの行為は仕方ないことであつた。

何故なら、イリナの着ていた戦闘服はもう服の用を成さない。そのためほとんどの肌が露出してゐる。つまり……乳房も露出してゐたのだ。

歳のわりにしっかりと発育したわなに成長した乳房。それは男なら殆どの物が生唾を飲み込むくらい素晴らしい。

だが、見られる側にとっては大事どころではすまない程に恥ずかしいことだ。同じ女性であるアーシアには、その恥ずかしさが痛い程に分かる。

だからこそ、彼女に恥を掻かせまいと一誠を止めたのだ。それと同時に一誠が彼女の胸を見ないように急いで一誠の目を塞いだ。

一誠にイリナの胸を見て貰いたくないという気持ちが殆どであつたが。

と、そんなわけで一誠はアーシアから目を瞑ることを強く命じられ、そして制服の上着を剥がされた。

一誠の上着を使い、アーシアはイリナの身体を出来る限り隠すと、そこでやつと一誠に目を開けるよう言い、一誠は首を傾げながらも目を開ける。

そしてイリナの状態を見つつ、今度こそ自分の部屋へとイリナを運び始めた。

まあ、アーシアの考えは世間的には正しいのだが、この男に限ってはそうではなかった。倒れているイリナを見た時から乳房は見えていた。

だが、この男はそのことに一切欲情したりしない。

アーシアが懸命に隠そうとしたが、ある意味無駄だったのかもしれない。

「う、うんは………」

イリナは目の前の灯りに気付き、声を漏らす。

さつきまで自分がどうなっていたのか。それを思い出そうとするが、頭が覚醒しきらないのか上手く思い出すことが出来ない。

そんなイリナに気付き可愛い声が上がった。

「あ、イリナさん、気が付きました！」

その声を聞いて、イリナは近くにいる人物が誰なのかを何となく理解した。

「もしかして……アーシアちゃん……」

「っ……はい、そうです！」

アーシアは意識がはつきりし始めたイリナに抱きつき、心配したことを身体で伝える。その重みと力を受けて、少しばかり顔を顰めるイリナ。

「ちよ、アーシアちゃん、ぐるじい……」

「あ、すみません！」

自分がやっていたことで苦しんでいたイリナに気付き、アーシアは慌ててイリナから離れた。

その様子が可笑しかったのか、イリナは少し笑ってしまう。

その笑みを見て、アーシアもイリナがちゃんと治ったことを理解し、そして安心した。

イリナの回復が見られたことで、早速一誠はイリナに事情を聞くことにした。

「それで……どうしてあんな所で倒れてたんだ、お前？」

「そ、それは……」

聞かれた途端に口を紡ぐイリナ。

言いたくないというよりも、言えないといった感じだろうか。

一誠達を巻き込みたくない、そんな感情が察せられる。

だが、心配そうに見つめるアーシアの瞳を見て、イリナは静かに語り始めた。

「その……ね。前にイツセーくん達に言ったじゃない、聖剣を盗んだ犯人『バルパー・ガレイ』のこと。そいつがさ、はぐれ悪魔払いにその盗んだ聖剣を使わせて私に襲い掛かってきたのよ。負けないと思ってたんだけど……相手は盗んだ聖剣三本を一つにまとめ上げて

てさ……負けちゃった。それで私が持ってた聖剣『擬態の聖剣』も奪われちゃった」

自分が負けただけでなく、教会から貸し出されていた貴重な聖剣を奪われたことにショックを受けているイリナ。苦笑をするが、その目はまったく笑ってなどいない。絶望の闇をその目は宿していた。

「それだけでも厄介なのに……あんな強力なのが出たら、勝てるわけないじゃない……」

悔しさから涙を流し始めるイリナ。

そんなイリナをアーシアは優しく抱きしめる。

アーシアに抱かれたイリナは、それまで堪えていた感情が溢れ出し、アーシアの胸にしがみついて泣き始めた。

その痛ましい様子にアーシアは、ただひたすら優しく抱きしめるところと鹿出来ない。

それだけでも、イリナの心は多少でも楽になっていく。

一誠はそんな様子のイリナを見て、大体の事情を察する。

奪われた聖剣を取り戻そうとしてイリナ達は向かい、そして敗れた。

その時、主犯であるコカビエルも一緒にいたことを。

これが勉強の時に出来ればまず赤点など取らないのかも知れないが、それが出来るほどのこの男は器用では無い。

それを察した上で、一誠はイリナの様子を見て話しかける。

「おい、イリナ。一緒にいたゼノヴィアとか言う奴はどうした？ 一緒じゃなかったのか」

一誠の問いを受けて、イリナは少し苦しいような、そんな顔で返す。「ゼノヴィアには逃げてもらったの。あの場で私達が勝てる要素はなかった。だから少しでもその可能性を上げるために、彼女には応援を頼むように言って、無理矢理逃がしたのよ。この事態は私達の手には負える問題じゃない。それにゼノヴィアは最後まで反対してたけど、悪魔の人達に助けて貰うよう強く言っておいたのよ。彼女達だって自分の土地で堕天使が勝手に動き廻ってるのを我慢出来るわけないから。それに、ゼノヴィアの聖剣『破壊の聖剣』ならあのコカビエルに

だって傷を負わせられるかもしれない。私の擬態の聖剣じゃ、まず無理なもの。だからゼノヴィアを逃がすために、私は囹になったの」それを聞いてアーシアは更にイリナを慰めるように抱きしめる。信徒である彼女は、その選択がどれほど苦しい物か分かるから。その気遣いにイリナは感謝しつつ、一誠を見つめる。

それはこの話を聞いて、一誠がどう思うのかを知りたいというものだった。

別に、助けてとは求めない。

確かに一誠は裏の事を知っている人間だと知っている。だが、それまでだ。

彼はただの人間だ。何も出来るとは思えない。自分でさえそうなのだから、聖剣も何も無い一誠に助けを求めるのは筋違いというものだ。

だからこそ、イリナはそんなことを思わなかった。

対して一誠が思った事は、

自業自得だった。

仕事だから仕方ないというのはわかる。

自分の能力を鑑みてゼノヴィアに託した判断も問題はない。

だが、それでこうなったのは自分の責任だ。

寧ろそいつ等に営められた結果といっても良い。本来なら死んでいるはずなのに殺されていない。それは案に、殺す価値も無いと嘲けられたに他ならない。

だからこそ、こうなったのは自業自得だと、一誠は思った。

敵討ちをする理由は無い。

確かにイリナは幼馴染みと言っても良いが、それまで。

彼女には何の借りもない。

だから、一誠はこの件に関して何もしないことにした。暴れるのは好きだが、利も何もないのに暴れる気は無い。ただ、それだけ。

そんな一誠を見てか、イリナは深い溜息を一回だけ吐くと力を抜いて更に話す。

「その時に聞かされたの、コカビエルの目的を。あの堕天使はこの悪魔の町で盛大に暴れることで悪魔の陣営を揺さぶり、再び戦争を引き起こそうとしてるって。それで手始めに、あの赤い髪的女悪魔と共に、あの学園を消し飛ばすって……だからイツセーくん……急いでこの町から離れて！　ここは戦場になるかもしれない。だから……」

真剣な表情で一誠を見つめるイリナ。

それは一誠やアーシアの事を本当に心配してのこと。

その真剣な言葉を聞いて、一誠の表情が変わった。

「何だって……」

それは怒りにも似た表情。

さつきイリナが言っていた言葉の中に、一誠が聞き逃せない事が二つ入っていた。

一つはこの町が戦場になるということ。そしてもう一つ……やられたならば、絶対に許せないことがあった。

故に一誠の気が変わり始めた。

イリナのは自業自得。助ける気はないが、自分の周りに影響を出すようなことされて黙っていられるほど、一誠は大人ではないのだ。

そう思うと一誠は笑いがこみ上げてきて仕方ない。

暗く黒く、それでいて苛烈なまでの闘気が身体中を駆け巡る。

「やってくれるじゃねえか……ええ、堕天使さんよお」

「イツセーさん……」

「イツセーくん……」

一誠の様子が変わったことにアーシアとイリナは気付き声をかける。

一誠の様子に二人とも戸惑っているようだ。

それに拍車をかけるかのように、突然扉が開いた。

「よお、イツセー。随分と滾ってるようじゃないか」

開いた扉の先にいたのは久遠であった。

その姿を見て、アーシアとイリナは驚いてしまう。

そんな二人に微笑みながら、部屋に入ってきた久遠は一誠にニヤリと笑いかけた。

如何にも悪そうな笑み。

その笑みを浮かべる時の久遠を一誠は知っている。

故に此方も相応の悪い笑みを返した。

久遠はそんな一誠に笑いかけながら、彼が期待しているであろう言葉告げた。

「イツセー、仕事だぜ、仕事」

「あいよ」

久遠の言葉に返事を返すと、一誠はゆつくりと立ち上がり、玄関の方へと歩いて行く。そして扉から出る前に、アーシア達の方へと振り返った。

「お前等はゆつくり留守番してろ。これから俺はちよつと野暮用があるんでな。まあ、明日までには帰る。だって明日は……追試だからな」

その言葉を聞いて、アーシアは心配しつつも嬉しそうに頷いた。

そして一誠の背を見送る。確かに心配はしている。一誠がこの後危ない事をするとは分かっている。だけど、彼女は信じている。一誠は絶対に約束は守ると信じているからこそ、その背を見守るようにして見送った。

そして一誠には失礼だが、彼女は祈る。

どうか、一誠が無事であるように……と。

そして、コカビエルはこの後思い知らされるだろう。

自分が何に手を出したのかと言うことを……。

30話 彼は喧嘩を売りに行く

もうすっかりと日が暮れた闇夜が辺りを支配している中、一誠と久遠は歩いていった。

ゆつくりと歩む二人の顔は、実に黒い笑みで満たされている。まるでこれから起こるであろうことを楽しみにしているかのよう

に。
子供の様に純粹で、悪魔以上に黒々しい感情。その感情を二人はゆつくりと自分の中で味わうかのように楽しんでいた。

そんな二人が歩いて行く先は……駒王学園。

既に一誠の目的と久遠の持ってきた依頼は口になくとも共通していた。

お互いにそれが分かっているのは、この二人がそれだけ一緒に仕事をしてきたという証と言っても良い。

だが、それでも久遠は仕事として一誠に伝えなければ成らない。

その内容を……。

「イツセー、今回の仕事の依頼人は魔王『サーゼクス』様。内容は、駒王学園で戦っている姫さん達が死なないように援護、及び魔王様達の援軍が来るまでの時間稼ぎだ。報酬は5000万、前回と同じ分け前で考えればかなりどころじやすまねくらい良い額だ」

実に嬉しそうに話す久遠に、一誠も笑う。

これからやる『簡単な事』だけで、そこまでの高額が手に入るというのだから、喜ばない訳が無い。彼の魔王の過保護な所は少々アレだが、それを差し引いても良い仕事と言える。

それに輪をかけたかのように、久遠は一誠に笑いかけた。

その笑みはイタズラをする子供のようであり、悪い大人の悪意が混じり合っている笑みだ。

「と、これが表立って魔王様が出した依頼。個人的には、『倒しても良い』ってよ。良かったじゃねえか、前に比べれば格段に単純で」

「ああ、まったく。生け捕りだの半殺しだの、面倒が無くて済むってのはかなりいい」

これからするであろう事が如何に困難なのか、誰もが聞けば嫌でも理解出来る。

いや、まず出来ないと言いつても誰かが断言するだろう。

たかが人間が、異形の中でも伝説に近い程に上の存在と戦い合つて生き残ることなど出来ない。

だが、一誠はそんな当たり前の事など笑い飛ばす。知ったことではないし、知ろうとも思わない。

ただ、単純に彼は思う。

中途半端ではないという事は、単純で実にわかりやすいと。

一誠にとつて、一番シンプルなものほど分かりやすく、そういつたことを一誠は好む。

聖書に載るような程に凄い堕天使相手に戦い、そしてぶちのめす。

これ程単純で明快な答えはそうは出ないだろう。だが、この男にとってはそれが当たり前のものだ。

故により一誠の笑みは深まり凄みを増す。

これから喧嘩を売りに行く気でいた。他の勢力から何かしら文句が来るかも知れないが、そんなこと知ったことではない。

それを気にせずに暴れられるというのは、中々に有り難い。それで金が貰えるというのだから、尚更だ。

彼自身、そこまで言われてる者と戦えるということに胸を躍らせていた。

だが、その感情は格闘家や競技選手のような清々しいものではない。

骨肉がぶつかり砕け、血肉が弾け合うという殺し合いを楽しみにしている。

戦うことが好きで、相手が死ぬまで戦い合うのが一番スカつとす

る。

澆刺でありながらおどろおどろしい、そんな黒い感情。

その感情に胸を躍らせながら、一誠は久遠と共に歩く。

久遠の方も仕事の話を持って来た直後から気付いていた。

一誠の部屋に運び込まれて寝かされていたイリナを見て大体のこ

とを察したからこそ、あの時久遠は笑った。

彼女がボロボロになる原因など、一つしかないのだから。

そして今にも溢れそうな一誠の闘気を感じれば、自ずと答えは出て来る。

それがイリナの敵討ちならまだ人情があるものだが、そうでないということも久遠は知っている。

この男はそんな事では動かないと。

ならば、この男が此処まで滾っている理由など実に単純だ。

気に喰わない事をされたか、これからされるかも知れないということ。そのどちらかだろう。

だからこそ、やろうとしている奴を叩き潰しに行こうとしてる。

単純にして明快、この男の行動理由はシンプルなのだ。

だからこそ、一緒にやっていて『楽しい』と感じる。

腹黒い久遠ではあるが、彼も又、スカツとするのは好きな方だったりするといわけだ。見ていて楽しいし、周りが驚きに間抜け面を晒している所を見るのも面白い。

そんな二人だからこそ、どんな危険な仕事であろうとも楽しんで仕事を受ける。

傍から見れば普通に高校生が歩いているようにしか見えないだろう。

だが、近づいてみればきつと誰もが気付くはずだ。

その年齢の人間がして良いわけがない程に、荒んだ黒い表情をしていることに。

片方はこれから殺し合うであろう相手への闘志を燃やし、もう片方はこれから起こるであろう騒動に驚く周りの反応を楽しみにして。

そして二人は歩いて行く。

敵がいるであろう駒王学園へと……。

駒王学園は現在、まさに最前線と化していた。

学園内の敷地では、堕天使の大幹部『コカビエル』が上空を陣取り、

地上では協力者『バルパー・ガリレイ』がイリナから奪い取った擬態の聖剣を三本を一つに纏めた聖剣に統合させ、よりオリジナルへと近づけた聖剣『エクスカリバー』を完成させた。それを使い、リアス達を窮地へと追い込む最凶のはぐれ悪魔払い『フリード』。

リアス達はそれ以外にも、地獄の門番の異名を取る魔獣ケロベロスと相手に苦戦を強いられていく。

それでも厄介だというのに、早くコカビエルを倒さねば設置された特殊な魔方阵が起動し、町全体を崩壊させるという。

時間制限の付いた窮地に、彼女達は焦らされていく。

そんなリアス達のためにも少しでも被害を出さないよう、ソーナ達は学園の外で結界を張っていた。

彼女達生徒会が全員張った強固な結界。

だが、それもコカビエルの前では紙も同然の物に過ぎない。

どんなに彼女達が優秀な悪魔であっても、古の対戦を生き残った強者の前ではただの若者に過ぎないのだから。

それでも彼女達は額に汗を垂らしながら必死に結界を維持する。

中から伝わってくる衝撃から、如何に熾烈な戦いが繰り広げられているかが想像出来る

きつとりアス達は決死の覚悟で頑張っているのだろう。だからこそ、少しでも彼女達のためにも頑張らねばと、ソーナ達も頑張っている。

少しすれば魔王達からの援軍が来ると信じて、ひたすらに絶え続ける。

そんなソーナ達の前に、彼等はやってきた。

「よお、会長」

その声はここ最近、ソーナが良く聞いていた声。

愚痴を聞いて貰っていたり、勉強を教えたりと、実に人らしい時間を過ごさせてくれた男の声であった。

その声と姿を見て、ソーナは驚きに目を見開く。

「なっ……何で兵藤君がここに……」

その声に他の生徒会の者達も気付いた……その男達の姿に。

それに気付いてか、久遠は愛想の良い笑みを浮かべて挨拶し、一誠はそのまま会長に話しかける。

「なあ、会長。この先にデカイカラスがいるって聞いたんだけどよ。本当か？」

その言葉が何を表し、そして一誠の表情を見てソーナは即座に察する。

そして一誠を止めに入った。

「やめなさい、兵藤君！　いくら貴方があのフェニックスを倒したと言っても、この先にいるのはそれ以上に強い、それこそ魔王様と同格の強さを持った化け物です！　勝てる訳がありません！　命を粗末に扱うような真似をしてはいけませんよ!!」

ソーナは一誠の事を思っそう言った。

彼が強い事は知っている。正直、自分よりも強いのかも知れない。だが、それでも……あんな化け物相手にどうなるとは思えない。彼は強くて、それでも人間なのだから。

あんな化け物相手に、いくら頑張っても人間では限界がある。悪魔でもあるのに、人間では更に限界は近い。

だからこそ、ソーナは一誠を止める。彼に死んで欲しくないから。何よりも、彼はこの件に無関係なんぼだから、巻き込んで良いわけが無いのだ。

そう思いソーナは一誠を止める。

だが、一誠は引く気など一切見せず、歩を進める。

そして一誠を補佐するかのように、久遠は会長へと笑顔で話しかけた。

「やあ、会長さん。相変わらず美人だねえ。会長さんが言いたいことも分かるけど、それでも此処を通してくれないか。一応魔王様からのご依頼だね。援軍が来るまでの時間稼ぎをしろってさ」

明るく楽しいにそう語る久遠を見て、ソーナは驚いてしまう。

いくら強い人間だからといっても、そんな事を魔王が依頼するなんて思わなかったのだ。

だが、それでも彼女は此処を通すわけには行かないと表情を強ばら

せる。

「お話はわかりました。確かに魔王様なら貴方達に依頼するのも理解は出来ます。ですが、それでも……通せん！」

「おいおい、また随分と強情だなあ。まさか、人間如きが出しやばるな、とても言う気かい？」

久遠のからかいが混じった言葉にソーナはそうじゃない、と首を強く振る。

「いいえ、違います。確かに彼が強いと言うことは認めます。ですが、それ以前に彼はこの駒王学園の生徒。生徒会長として、生徒を危ない目に遭わせるわけにはいきません」

確かにその言い分は正しい。

だが、この場ではその言葉も場違いとしか言いようがないだろう。それでも、ソーナは一誠に行つて貰いたくなかった。彼を死なせたくないかったのだ。

この一週間近くの間、一緒に過ごした時間はソーナにとって、年相応の普通の少女として過ごした楽しい時間だった。それを感じさせてくれた一誠とアーシアに彼女は感謝している。だからこそ、一誠には死んで欲しくなかった。

これは彼女なりの感謝の形だった。

それを聞いて、久遠はやれやれと苦笑する。

そして今度は一誠がソーナに話しかけた。

その表情は気まずいような、苦笑しているような、そんな顔をしていた。

「会長が心配してくれるのは嬉しい。けどよ……こつちも請け負った仕事だ。受けたからにはやるつてのが当然のことだ。だから退いてくれねえか」

そのままソーナに話しかける一誠は此処で一旦言葉を切ると、妙に気恥ずかしいのかそっぽを向いて続きを口にした。

「それによ……明日は追試なんだよ。せっかく会長に教えて貰ったんだから、成果つてもんを見せてえじゃねえか。それが会長に教えてもらった恩の返し方つてもんだろ」

そこから一誠は笑いながらソーナに言った。

「前にも言っただろ。『何か困ったときにでも声をかけてくれ。俺で出来る事なら手を貸すよ』ってよ。今がその時ってもんだろ。今あんたは困ってるって面してるんだからよ。あんたはこの事態に困ってる。俺は学校が壊されると追試が受けられねえ。お互いに問題を解決するには、どうすればいいのかわかるよな」

「そ、それは……………」

一誠の物言いにソーナの心が揺れる。

一誠が言っていることはもっともな事だ。問題を解決するには、その問題の根源を叩くしかない。

そんな事、今の戦力ではまず出来ないだろう。

だが、彼になら……………」

もしかしたら、と期待しそうになってしまおう自分がいた。それだけ一誠の自信に満ちあふれた様子は彼女を説得させる。

その揺れ動く心に、一誠は知らないうちに最後のトドメを刺した。片手を前に出して申し訳なさそうに謝るかのように、一誠はお願いしてきたのだ。

「なあ…………頼むよ、会長」

「っ!？」

その妙に不器用なお願いに、彼女の心は傾いてしまった。

一見情けないような感じなのに、何故か納得出来てしまう。

ソーナはもう引き留めるの無理だと察すると、結界の一部にだけ人が通れる程度の穴を開けた。

「すみません…………お願いします…………この学園を…………私達を助けて下さい」

その言葉を聞いて周りの者達は驚愕する。

まさか会長が譲るとは思わなかったのだ。

そしてそれを聞いた一誠はニヤリと笑みを浮かべ、会長に向かって返事を返した。

「あいよ」

そして穴の中に入っていく一誠と久遠。

二人の背を見送る会長はただ思う。
どうか、生きて帰ってきてくれと…………。

戦況はより傾き、リアス達はもう限界間近だった。

一時は木場 祐斗が苦悩の末に禁手へと至り、『双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）』を創造。それにより、四本を統合したエクスカリバーを破壊し使い手であるフリードを撃破した。

だが、それで戦況が変わる訳ではない。依然として元凶のコカビエルは健在なのだから。

ゼノヴィアが聖剣『デュランダル』を抜刀しその猛威を振るうも、一人で相手をするには数が多かった。

何とか四匹の内リアス達と共に戦い三匹まで倒すも、残り一体は一番強力な個体だったために、倒すのにかなりの力を使ってしまったのだ。

そして木場 祐斗が作り出した聖魔剣を見て、バルパー・ガリレイがとある考察をし、そして察してしまった。

この世に神はいない。

それは教会の信徒全てが知ってはならない禁忌。
信仰心というものを根本から無意味にする答え。

だが、それが真実だと木場 祐斗の作り出した聖魔剣が伝えるのだ。

何故なら、聖と魔は本来混じり合わないのだから。

その答えを知ったバルパーは直後にコカビエルによって殺された。
理由なんて物は特に無い。ただ、もう必要無いから殺した。

そしてバルパーが語ろうとしていた続きをコカビエルは語り始めた。

過去の戦で古の魔王達も聖書の神も死んだのだと。

それを聞いたゼノヴィアはショックのあまり戦意を失ってしまう。
彼女は敬虔な信徒故に、その事実はあまりにも過酷だった。

それは悪魔達であるリアス達でさえ驚愕してしまう。今までの構図がひっくり返る程の事実だったから。

その声は既に一誠達にも聞こえてはいた。

だからどうした、この男は気にも留めずに尚も歩を進める。

そんなことは関係無いと、この男は進み続ける。

そしてリアス達の前に姿を現した。

「どうも、仲介屋で〜す」

久遠の軽い声が周りの空間に響くが、この重苦しい空気の前には翳んでしまう。

だが、それでも皆の耳にはすっかりと聞こえてきた。

「なつ、何で貴方達が……」

リアスから驚きの声があがり、周りの配下達も同じように驚く。

それはゼノヴィアも同じであり、信じられないようなものを見る目で一誠を見てきた。

そしてコカビエルは特に驚くような様子は見せず、訝しげに一誠達に目を向けた。

「何でこんな所に人間がいる？」

その答えを示すかのように、一誠はコカビエルの顔を睨み付け、そしてニヤリと笑った。

それと共に噴き出すドラゴンのオーラ。

その波動は周りにあった物を全て薙ぎ払い、灰燼に帰す。

その荒れ狂うオーラの中で、一誠は相棒と話をしていた。

「ドライグ、せっかくの大物だ。思いつきり行くぜえッ!!」

『ああ、そうだな。まさか古の戦争を生き抜いた堕天使と戦うとはなあ！ 久々に俺も滾ってきたぞ、相棒！ 力は八割と言った所か！』

「ああ、そいつで十分だ。『あの野郎』以外に『奥の手』を使う気はねえんでなあ！」

その会話の終わりと共に、出現させた赤龍帝の籠手から音声が流れた。

『Welsh Dragon Balance breaker
!!』

更に赤きオーラは吹き荒れ、リアス達でさえ吹き飛ばされそうにな

る。

そのオーラに向かって、それまで死に体だったケロベロスの一体が突如として襲いかかって来た。

リアス達は最後の一体を仕留めきれなかったのだ。

「なっ、危なッ!?!」

いきなり事に声を上げてしまうリアス。

だが、それは杞憂に終わった。

「邪魔だ、犬っコロ!!」

その叫びと共に、吹き荒れるオーラの嵐に突っ込んだケロベロスは骨が砕け肉が弾ける音と共に吹き飛ばされた。

建物ほどある巨体が遙か上空へと飛び上がる。

その絵空事のようにしか見えないような光景にリアス達は驚きのあまり言葉を失ってしまう。

そして飛んで行ったケロベロスの巨体は見事、コカビエルへと飛んで行く。

「ふんッ!」

飛んで来たケロベロスをまるで蚊を叩き落とすかのように光の槍を投げつけ消滅させるコカビエル。

その視線の先……ケロベロスが飛んで来た方へと目を向けると、そこには……………。

全身赤い鎧姿の者がいた。

吹き荒れるオーラの中、まるで悠然と佇む大樹のように立ち、その鎧の者はコカビエルへと目を向ける。

その姿を見て、コカビエルは咄嗟に察した。

目の前の者が先程の人間だということを。そして、この男が使っているのが、過去の戦で苦しめられた『赤龍帝』の力が込められた神器を使っていることを。

そして一誠はコカビエルに話しかけた。

「何でここにいてるって? 気まってるだろ……………喧嘩をしにきたんだよ、アンタとなあ!」

その言葉を聞いたコカビエルは嬉しそうな笑みを浮かべた。

31話 彼は喧嘩を止められる

赤龍帝の鎧を身に纏う一誠とコカビエルは対峙する。

地上でコカビエルを見上げる一誠。一誠の姿を見下すコカビエル。

二人の間に流れるのは、戦うことへの高揚感。

その両者の昂ぶりはオーラの波動となって周りの物を破壊し始める。

コカビエルは一誠を見下しながらニヤリと笑うと、念の為といった感じに一誠に問いかけた。

「二応聞こうか、人間。何故、俺と戦おうとする。戦うことは好きだが、人間に怨まれる理由などあまりない。一々虫けらなど相手にした覚えなどないからなあ」

嘲るように愉快に笑いながら問うコカビエル。

その言葉を聞いたリアス達は怒りを込めた目でコカビエルを睥む。

確かに多くの悪魔はコカビエルと同じように人間を見下すが、彼女達は人間を見下したりはしない。寧ろ、より人とは親しくしている間柄である。

故に、コカビエルの物言いは彼女達の怒りを更に燃え滾らせた。

親しき友人を馬鹿にされて怒らない者はいない。

だが、それとは別に一誠の方にも注目が集まる。

何故、この場に一誠が来たのか？それが彼女達は気になった。

彼がこの場に来る理由がない。この窮地に駆けつけるヒーロー

……そんな人物ではない。なら、何でこの場に……。

リアス達に沸き上がった疑問に対し、一誠はコカビエルに先程の問いの答えを返した。

「別に怨んでなんてねえよ。イリナをボコった件は気にしてねえ、ありや単なる自業自得だ。でもなあ……この町を吹っ飛ばされるのは我慢ならねえし、何よりもこの学園を消し飛ばされるのは困るんだよ。だからだ」

鎧越しで見えないが、ニヤリと笑う一誠。

その答えを聞いて、コカビエルはつまらなそうな顔で呆れながら一

誠に話しかけた。

「何だ、郷土愛という奴か……下らん」

呆れ返っているコカビエルに、今度は一誠が呆れたような声を上げた。

「そんなんじゃないよ。学校を今吹き飛ばされたら、俺は明日の追試を受けられなくなる。そいつだけは勘弁願いてえんだよ。それに町を吹っ飛ばされたら俺の家まで吹っ飛んじまう。そうなったら俺は明日から宿無しだ」

実に呆れる理由にコカビエルの顔が固まる。

それはコカビエルだけでは無い。リアス達もまた同じだった。

聖書にも載る堕天使に戦いを仕掛ける理由が、まさか『自分が困る』からなどと、誰が思おうか？ まだこの町の平和を守るため、などと陳腐臭い台詞の方がこの場に於いてマシだったかも知れない。

そして一誠はバツが悪そうに軽く鎧で覆われた頭部を指で掻き、あっけらかんと最終的な答えをコカビエルに言う。

「まあ、何だ。要はよお……テメエが俺の生活の邪魔をしてきた。そいつが俺には凄く気に喰わねえのさ。単純に……」

そこで一端言葉を切ると、一誠はコカビエルに向けて威勢良く叫ぶ。

「むかつくからぶっ飛ばす！ 俺はテメエに喧嘩を売った。そしてテメエは俺の喧嘩を買った。だったら後は単純だ。俺はテメエをボコる！ 徹底的にだ!!」

その途端噴き出すドラゴンのオーラは。一誠の周りにあつた瓦礫を吹き飛ばした。

そのオーラの威圧感を感じて、コカビエルは堪えきれないかのように笑い始める。

まるで可笑しいものを見た時の人間のように。

「くつくつくつく……あっはっはっはっはっは!! そうか、そうか！ それがお前が私に戦いを挑む理由か！ 成る程、確かにシンプルでいい答えだ。俺の求める物の根本に近いとさえ言っても良い。そうだ、そうでなくては面白くない！ いいだろう、貴様の

喧嘩、俺が改めて買ってやろう。だからこそ……俺を満足させて見ろ、人間！」

「上等だあ！」

その言葉を皮切りに、両者とも同時に動き始めた。

コカビエルは右手を上空に掲げると、そこから今までに無い程の巨大な光の槍を作り出した。

「なっ!? あんなに巨大な槍を……」

リアスはコカビエルの作り出した槍を見て驚愕する。

それは一誠が来る前に出していた槍に比べると、格段に込められている力の量が違うことが一目で分かる。

その圧倒的な力を前に絶句するリアス達。

だが、それは一誠によって更に悪化する。

「来て見ろよおおオオ!!」

赤いドラゴンのオーラを噴き出しながら一誠が動く。

毎度お馴染みの左拳を地面に叩き着ける動作。

だが、彼が上空へと跳び上がる前に出来上がったクレーターは、今までの比では無い程に巨大で深い。

まるで隕石が墜落したかのような轟音が結界内に轟くと、凄い勢いで一誠はコカビエルに向かって跳んで行く。

その一誠を迎撃しようとして、コカビエルは笑い声を上げながら巨大な光の槍を放った。

「まずはこいつだ、人間ッ!!」

放たれた槍と一誠の拳が激突する。

その途端、結界内で衝撃が膨れ上がり行き場を失った力が爆発する。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その衝撃が襲い掛かり、リアス達は結界を張って悲鳴を上げながらも堪える。

ただの技同士のぶつかり合い。その余波だというのに、大気は震え上がり、周りの構造物を吹き飛ばし、リアス達の結界は破れかける。

それ程の猛威が振るわれたというのに、その爆心地である両者は互いに無傷であった。

「俺に喧嘩を売るだけはあるな、人間」

「デメエも悪くねえじゃねえか。堕天使の幹部は伊達じゃねえってか」

互いにそう言いながら笑い合う。

生憎一誠の顔は兜で覆われて見えないが、それでも声を聞いたただけで分かる。

荒んだ笑みを浮かべていると。

お互いに初撃を交わし合い、互いの力量に喜びを顕わにする。

「いいぞ、人間！　そうでなくてはなあ！　ああ、さっきまでのリアス・グレモリーとの戦いと比べて、断然面白いぞ！」

より戦意を高めたコカビエルは一誠にそう言うのと、地上へと降りる。

そして光の双剣を作り出し、それを軽く構えた。

そして一誠も左手を突き出して拳を握り、独特の構えを取る。

お互いまるで次の相手の手を楽しむかのように再び動く。

「ふんっ!!」

コカビエルは両手に持った光の双剣をクロスさせて思いっきり振ると、そこから巨大な光の斬撃が一誠に向かって射出された。

地面を抉りながら近づいてくる斬撃に対し、一誠は駆け出して身体を独楽のように回転させ始めた。

「らあっ!!」

気合いの籠もった声と共に突き出した拳。

その先は勿論光の斬撃。

一誠の拳を受けた斬撃は、その威力故か瞬時に消し飛んだ。

「こんなちやっちいの出してんじゃねえよ！　なあ、おい！」

勿体ぶるなど吠える一誠は、更にそこから突き進む。

背中 of 排出口のような部分から高出力のオーラを噴出させ、コカビエルとの間の距離を一気に詰める。

その姿はまさにミサイルのようであった。

その勢いを殺す事無く一誠は拳をコカビエルに繰り出す。

「オラアツ!!」

「ぬうつ!!」

突き出された拳を光の双剣を合わせてコカビエルは防ぐが、その拳の重さから苦悶の声上がる。

ぶつかり合った拳と剣は衝撃を放つと共に火花が散った。

そのまま互いの攻撃を弾くと、そこからは互いに接近戦に移行し始める。

「この距離は俺の距離だぜ!」

「嘗めるな、人間!」

一誠が右拳をコカビエルに向かって繰り出すと、コカビエルはそれを身を逸らして躲す。そして反撃に左の剣で一誠に斬り掛かると、その剣を一誠は左手の籠手で防いだ。

高密度の光の剣が籠手を削るが、ドラゴンのオーラと堅い籠手によつてその刃は一誠に届かない。

悪魔なら致命傷の光の力だが、一誠は人間、そして赤龍帝はドラゴン。相性の問題はない。なら、この場に置いては純粋な力の強さだけが優劣を決める。

そこから始まったのは、一撃必殺の威力を込めたインファイト。

コカビエルが二刀流で斬り掛かり、一誠が左右の拳で強引に殴りかかる。

その光景は見ている者がある意味で注目させる。

片や剛胆さと精緻さを兼ね揃えた剣技を振るう堕天使。その剣舞は美しいながらも実に鋭い殺意に満ちている。

もう片や。暴風のように吹き荒れる拳を振るう人間。その縦横無尽に振るわれる拳は衝撃だけで辺りの物を粉碎させ、荒々しい獣のような殺気に満ちあふれていた。

まさに嵐の様な攻防が何度も続いてく。

巻き上がった衝撃は地面を粉碎させ、粉碎した物は全て砂塵へと帰す。

一進一退ではない、まさに互角の押し合う攻防に戦局は膠着し始め

だが、それは一撃でも当たろう物ならば即座に傾く危険極まりないのであった。

「があああああああああああああああああああああ
あ!!」

赤龍帝の鎧の彼方此方が欠け罅が入り始め、コカビエルの身体の各所から血が弾け飛ぶ。

その攻防が何度も続き、遂に互いの攻撃が直撃した。

「ぐおっ……」

その衝撃で双方とも数メートル後へと後退する。

コカビエルは喉奥からこみ上げてくる血を吐き捨てながら一誠に負けない程に凄惨な笑みをしていた。

人間、貴様は実に愉快だ！」

純に『喧嘩』してるだけなんだからよお!!」

一誠はそう吠えたと再びコカビエルへと仕掛ける。

右腕で大地を殴り付けると、その反動を利用して宙へと飛び上がった。そして落下すると共に身体を回転させ、遠心力を上乘せした豪腕をコカビエルへと叩き着ける。

「ぐおっ!?! ちいっ!」

最初と同じ様に一誠の拳を受け止めようとしたコカビエルだが、双剣で防御をした途端に身体の内部分から激痛が走り、力が入り切らずに一誠の拳を掠ってしまう。

結果、掠った頬の皮が裂け、そこから血が噴き出した。

その損傷を指で撫でつつコカビエルは距離を取ると、実に愉快そうに一誠へと言う。

「貴様、正気か? そのような損傷で渾身の攻撃を仕掛ければ腹がどうなるか分かっていただろうに」

コカビエルの言葉の言う通り、一誠がコカビエルに拳を叩き着けた瞬間、そのあまりの威力の高さから一誠の損傷した腹部は更に血を噴き出していた。

損傷していた所により負荷が掛かって傷口が広がったのだ。

だが、それを知っても尚、一誠は全く動じない。

元より、痛くても気にしない。

「別に痛てえけどそれだけだ。テメエをぶっ飛ばすのにそんなもん、一々感じてられるかよ!」

腹部から流れ落ちる血。地面を赤く染めるそれは、明らかに一誠の損傷が致命的なことを知らせる。

だが、当の本人はまったく気にした様子を見せない。

傷口を庇うことも無く、そのまま独特の構えを取る。

その様子を見て、コカビエルは我慢が出来なくなっただかのように笑い出した。

「成る程成る程……貴様はもう人間とは言えないな! 生命の危機を物ともしない精神力、己の状態を振り返り見ない闘争心、それはもう人間の領分を超えている! 貴様……何者だ?」

その問いに対し、一誠は当たり前のように答えた。

「何者もクソもねえ。俺は俺だ、兵藤 一誠だ!! それ以上でもそれ以下でもねえ」

その答えを聞いてコカビエルは満足そうに頷き、より濃密な殺気の籠もった笑みを浮かべた。

彼は一誠のことを、もう人間とは呼ばない。

彼の中で一誠の事はもう人間とは認識されなくなっていた。こんな強い人間が人間であって良いはずがない。自身の好敵手をコカビエルは蔑ろには扱わないのだ。つまり同格かそれ以上だと一誠を認識した。

見下せる相手ではない。自分の戦争に堂々として行ける存在に彼はより愉悦を感じる。

「ああ、わかったぞ! 赤龍帝『兵藤 一誠』! その名、しかと刻み込んだ! だからこそ……行くぞ、兵藤 一誠ツ!!」

「ああ、来いよ、コカビエル!!」

そして再び始まる攻撃の応酬。

距離が離ればコカビエルの光の槍が一誠に殺到し、それを一誠は身体を独楽のように回転させながら全て打ち砕いていく。

距離を詰めれば一誠の爆発的な威力の拳がコカビエルへと振るわれ、コカビエルはそれを受け止め流す。

その余波だけで周りの物が再び壊れ始め、互いの血が飛び散って辺りを赤く染め上げていく。

その様子はまさに死合い。

互いの命を削り合う、まさに殺し合いであった。

「コカビエエルウウウウウウウウウウウウウウウウウツ!!」

「ひょうどおおつつつつつついっせえええええええええええええええ!!」

互いの名を叫ぶながら苛烈に攻撃を繰り返す二人。

その激突は衝撃波を撒き散らし、結界をに負荷をかけ続ける。

両者とも互角。

だが、いつまでもそのままと言うわけではなかった。

互いの攻撃が再び両者に直撃し、後へと後退する。

コカビエルは顔面に入った拳の痕が真っ赤に腫れ上がり、元の眉目
秀麗な顔が台無しとなっていた。

対して一誠は右肩を貫かれ、力なく右腕が垂れ下がっている。

お互いの負傷はかなりの物である。

だが、それでも一誠は気にしていなかった。

寧ろ…………。

「つくつくつく……………あっはっはっはっはっは!!」

高らかに笑い始めた。

いきなり笑い始めた一誠にリアス達は気が触れたのではないかと
疑ってしまう。

だが、コカビエルはそうは思わなかった。

この男はこの戦いを…………殺し合いを実に良く楽しんでいる。

なら、この笑いはそのようなくだららないものではない。

故にコカビエルもまた笑う。晴れ上がった顔が浮かべる笑みはよ
り歪み、不気味さを感じさせる。

そんなコカビエル相手に一誠は一頻り笑った後、コカビエルの方に
顔を向けた。

その様子はとても負傷しているようには見えない。だが、傷口から
溢れ出る血が現実に一誠の現状を伝える。

「いやあ…………流石は堕天使の中でもトップクラスなだけはあるよ、あ
んた。強えよ…………ここ最近じゃとびきり強え奴だ。だからよ、このま
まじゃあんたに悪いと思ったんで…………もつと見せてやるよ、俺の力
をよお!」

嬉々とした様子で一誠はコカビエルに叫ぶと、コカビエルも実に嬉
しそうに笑った。これ以上の力と戦えるというのは、彼の闘争本能を
より燃え上がらせたのだ。

「いいだろう、兵藤 一誠! 見せてみる、貴様の本当の力を!!」

コカビエルの歓喜の叫びに、一誠は応じるかのようにオーラを噴出
させる。

まるで心臓のように脈動するオーラの波動は、これから始まるであ
ろうことに誰もを緊張させた。

一誠は吹き荒れるオーラの中で左手を胸の前に持つて行くと左腕の籠手の宝玉が輝きだした。

『Boostッ!』

倍化のかけ声が掛かり、一誠の力が膨れあがる。

吹き荒れる勢いの増したオーラにリアス達は目を?いた。

まるでその様子は天変地異のようで、世界が一誠に怯えているかのように震え上がる。

そして一誠は左手を右手に触れさせると、軽く力を込めた。

『explosionッ!』

それは倍化した能力の発動音。

その音声が流れると共に右腕や腹部から流れ出ていた血が止まった。

その事から何かしらを使つて傷口を塞いだことが窺える。

これだけなら拍子抜けだろう。確かに傷口を塞げるというのは有利ではあるが、この程度で力などと言うのは仰々しすぎる。

故に、当然その先がある。

傷口を塞いだ一誠の左腕の宝玉は更に光を増し始めた。まるでより大きな能力を解放するかのように。

『explosionッ!』

再び能力の発動音が流れた。

それを聞いたリアス達は首を傾げてしまう。

可笑しいのだ。本来なら、必ずその前に倍化の音声が流れるはずなのだから。

だが、その疑問は一誠の身体から放たれたあらゆる存在感で吹き飛んでしまう。

まさに存在そのものの密度がより濃くなったかのような印象を一誠は感じさせた。

それを感じてコカビエルは口元をつり上げる。

一誠が何をしたのかは分からない。

だが、全身から発せられる威圧感を感じ取り、これまでとは全然違うことを本能的に悟った。

だからこそ、愉悦混じりに一誠に問う。

「貴様……何をした？」

「別に大したことはしてねえよ。『それまでかけていた肉体に掛かる負荷の力の倍化』を解除しただけだ。つまり……これが本来の俺の力って訳だよ。悪いが、今まで押さえてたんだよ。ああ、勿論ワザとじゃねえよ。テメエとの喧嘩が楽しいもんだからちよつと忘れてたっただけだ。だからよ……ここからはマジでいくぜ」

その問いに一誠は笑いながら答えるが、発せられる殺気からとても笑っているようには感じられない。

本来の能力を解放した一誠は、それまでとは比べものにならない程の力を感じさせた。その前もとても強かったが、今はもう一段階上がったような印象を抱かせる

見ただけでわかるその力に、リアス達は驚愕した。

下手をすれば魔王クラス……いや、現魔王であるサーゼクスと並ぶかもしれない程の力だからだ。

人間が保有して良い力をとくに超えている。凄い神器を持つているとか、そういうものではない。

魔力とは違う純粋なドラゴンの力が、人間では絶えきれない量の力が、一誠の身体には満ちあふれていたのだから。

そんな一誠にコカビエルは壮絶な笑みを浮かべる。

これ以上の戦いが……戦争があるというのだから、実に楽しみで仕方ない。そんな子供のような無邪気にな喜びと殺し合いが更に深まる愉悦が入り交じった感情がコカビエルを満たす。

「いいぞ、いいぞ兵藤 一誠!! まさに昔の戦争、いや、それ以上の戦いが出来るとはなあ! 貴様のその溢れ出る力、過去の二天龍を彷彿とさせるぞ!」

コカビエルの声に一誠は返事を返さない。

その代わりに、その左腕の籠手は更に音声を発した。

『Boostッ!』

その声と共に、一誠の『全て』が倍化する。

身体が輝くと共に発せられたオーラは結界を突き破り、巻き込んだ

物を全て破壊していく。

膨れ上がった力の余波だけでそんな現象が起こり、一誠が立っていた所は巨大なクレーターが出来上がる。

これは別に驚くようなことではない。

これこそが、赤龍帝の籠手の本来の使い方なのだから。

自身の倍化を終えた一誠はゆっくりとコカビエルの方に顔を向ける。

「んじゃ……………いつくぜえええええええええええ！」

「来いッ！」

その声と共に、一誠は動いた。

最初と同じように左拳を地面へと叩き着ける。その動作から反動を利用しての突進であることは、それまでの戦闘で分かりきっていた。

だが、一誠の姿をコカビエルは見る事が出来なかった。

爆弾が爆発するかのような轟音が轟くと共に、地面には月面を彷彿とさせるようなクレーターが刻み込まれる。

だが、その時点で既に一誠の姿はない。

コカビエルが辛うじて目に捕らえたのは、噴出された名残の光だけ。

ではどこにいるのか？ そんな疑問は考えるまでもなかった。

腹部がまるで爆散するんじゃないかという程の衝撃がコカビエルを襲い、身体がくの字に折れ曲がって吹っ飛んでいる事にコカビエルは飛んでいる最中に気付いた。

そのまま校内に植えられている木々を何本もへし折った後に、地面に叩き着けられてコカビエルは止まる。

あまりの威力と気付けない内に直撃を受けた事にコカビエルはある意味ショックを受けた。

「ま、まさかこの俺が捕らえられないとは……………面白い！」

吐血しながらもコカビエルは笑うと、十枚の黒き堕天使を翼を広げ飛び起き、そのまま飛行速度を最高にまで上げて一誠に突撃する。

「これでも喰らえッ！」

そう叫ぶなり、コカビエルは翼をまるで手のように振り回して一誠に襲い掛かった。

黒き十翼の翼の一本一本が一誠へと殴りかかるかのように襲い掛かる。

その攻撃は速すぎてリアス達には軌跡すら見えなかった。

だが、一誠は違う。

「数があればいいってもんじゃねえ!!」

一誠は向かってくる翼を両手で一本ずつ掴むと、そのまま……………。

引き千切った。

「がっあああああああああああああああああああああああああ
ああ!!」

引き千切られた翼の根元から血が噴き出し、コカビエルの絶叫がこの場に鳴り響く。

その絶叫を聞いてリアス達は身体が震えてしまう。

それは光景もそのままに、実に痛々しい叫びであった。

コカビエルは絶叫を上げて尚、突き進む。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

絶叫混じりに声を上げながら強引に一誠に近づくと、両手が翼で塞がっている一誠の顔を思いつきり殴った。

骨がぶつかるような音と共に一誠の首が殴られた方向へと曲がる。その音にリアスは目を瞑ってしまった。人が出して良い音ではない。

当然だ。この拳はコカビエルが全力で殴ったものなのだから。普通の人間ならそれだけで全てが弾け飛ぶだろう。

だが、一誠はそうではない。

「中々良い拳だ。あんた、素手の方が強いんじゃないか？ だけどよ……こっちだって負けてはいねえ!」

一誠は首をぐりつと動かし、持っていた翼を手から放すとそのままコカビエルを殴り返す。

近距離で顔面を捕らえた拳、その威力にコカビエルは苦悶めいた声

を漏らす。

まるで首がもがれるかと思う程の威力に身体が持ってかれ、後へと下がってしまう。

だが、その顔は負傷がより酷くなったというのに闘志を劣ろわせてはいない。

「ぐうううううううううう!! まさかこの俺の翼を引き千切るとはなあ! 強い……強いぞ、兵藤 一誠! だが、俺とて負ける気はないツ!!」

コカビエルはそう叫ぶなり、右手を天に向かって突き上げる。

その途端に右手に発生する巨大な光の槍。

それは最初に一誠に投げかけた槍よりもさらに大きい。

だが、その槍は神々しい輝きを放った後に、今度は収縮し始めた。見る見る内にコカビエルの身体に合うサイズまで縮小した光の槍。それを見てコカビエルはニヤリと笑みを浮かべる。

「これならば……どうだあああああああああああああああ!!」

咆吼を上げながらコカビエルはその槍を一誠に向かって投げつけた。

「っ!? くそっ」

それを迎え撃とうとする一誠だが、本能が警告を発し、それに従い即座に回避へと行動を変えた。

一誠の身体を僅かに掠りながら飛んで行った光の槍。

僅かに掠っただけだというのに、掠った部分の鎧が砕けていた。

もし一誠が通常の籠手のみの状態であったのなら、それだけで腕が吹き飛んでいただろう。その威力に一誠は戦慄を覚え、口元がつり上がる。

そして避けられた槍は校舎の残骸に突き刺さり、大爆発を引き起こした。

結界内を衝撃と轟音が支配し、リアス達は絶えきれずに吹き飛ばされる。

それ程の威力を見て、一誠はコカビエルへと話しかけた。

「あんた、その槍……………力を濃縮したのか？」

「ああ、そうだ。これが俺の奥の手だ！ 貴様にも引けは取らないだろう。だからこそ……」

「あ
あ」

コカビエルがしたことは、巨大に作り出した光の槍の力を濃縮し、更に威力を増すことであつた。

そしてその威力を見て、一誠もコカビエルも同時に距離を取つて構える。

互いに分かっているのだ。この次に放つのが最後の攻撃だと。

それはコカビエルの槍を放った右手を見れば分かる。その腕から血が噴き出しているのだから。

それが分かっているからこそ、一誠とコカビエルは構える。

コカビエルは先程と同じ……いや、それ以上に巨大な、それこそこの学校を一撃で滅ぼせる程に大きな槍を作り出すと、それを濃縮し収縮させていく。その際、コカビエルの右腕は血を更に噴き出し、骨が飛び出て皮膚が真っ青に変わっていた。

対して一誠は両拳を腰に構えると、足を大きく開く。

そしてドラゴンのオーラがより高次元に高まりを見せ、吹き荒れる赤き嵐の中、両腕と胸の宝玉が閃緑色に輝き始めた。

段々と輝きを増していく宝玉。

一誠の身体から迸る力がその拳へと集まっていく。

そしてそれが臨界を超えるかのように更に輝く。もう、それだけでも途轍もない威力を秘めていることが想像出来るだろう。

だが、それでも一誠は満足しない。

「もつとだ……もつと……もつと、輝けええええええええええええええええええええええ!!」

その叫びと共に、全てを覆い突くさんとばかりに輝きを増す宝玉。

そしてその光は収まると共に、一誠の身体を包み込む。

そして同時に……二人は動いた。

「oooooooooooooooooooo!!」

コカビエルは絶叫を上げながら一誠に向かって槍を投げつけた。
その瞬間、コカビエルの右腕が千切れ飛ぶ。

そして一誠もまた、コカビエルへと吠えた。

「おおおおおおおおおおおおお!! 『ドラグウウウツブリツ
ドツツツツツバアアアアアストオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオツ!!』」

背中から噴き出されるオーラによってミサイルのように飛び出した一誠は、そのまま両拳をコカビエルへと突き出した。

拳と槍がぶつかり合うと、今までで一番の破壊が巻き起こった。

ソーナ達が張っていた結界が即座に崩壊し、爆発が夜を光で覆い尽くした。

あまりの轟音で音という物が一切聞こえなくなり、リアス達は何が何だか分からなくなってしまった。ただ、この破壊の嵐の中で、自分達が生き残るのに皆必死だったのだ。

そして爆炎が収まると共に、その炎の中から飛び出して来たものの一つ。

「おおおおおおおおおおお!!」
「おおおおおおお!!」

それは……あの槍を打ち破った一誠だった。

そのまま閃光の弾丸と化した一誠はコカビエルへと突進する。

自身の最高の技を破られ、コカビエルは向かってくる一誠を見て笑う。

その表情は全ての力を出し尽くした達成感に満ちていた。

「やれ……」

そう言葉を洩らすコカビエル。

そして一誠の拳が激突する手前、それは起こった。

一誠とコカビエルの間に突如、上空から白い閃光が落下してきたのだ。

そしてそれは片手を一誠に向かって出すと、一誠の拳へと叩き着けた。

『Divide!』

機械的な音声が流れると共に、堅い物同士が激突し合う激突音がこの場に響き渡った。

自身の攻撃を受け止められても尚、拳を押し出そうとする一誠。それを押さえようと押し返す白。

一誠はその白を見て驚きつつも、ニヤリと笑った。そしてコカビエルはその白を見て叫んだ。

「貴様、バニシングドラゴンッ!? 何故貴様が此処に!」

そう、一誠の拳を止めたのは、バニシングドラゴン。

白龍皇の光翼という二天龍のもう一体、アルビオンの魂が封印されている神器を持つ……。

兵藤 一誠の唯一の宿敵だ。

32話 彼は約束する

突如として現れた二天龍のもう一角、バニシングドラゴンの姿を見てリアス達は息を呑んだ。

神々しいまでの純白の鎧、そして蒼き燐光を輝かせる翼。

とても一誠と同じ神滅具とは思えないくらい、その姿は美しい。

その美しさに目を奪われつつも、リアス達はこれから起こるであろうことを想像し恐怖した。

彼等の世界では凄く有名な言い伝えがある。

『二天龍が相まみえる時、それは大災厄を引き起こす』

赤龍帝と白龍皇、この二つは生前から争っていた。

何故争い合っていたのかは誰も知らない。だが、その熾烈な争いは確かに凄まじいものであった。何せ当時の三大勢力を壊滅間近まで追い詰めたのだから。

そして神器にされてもその争いは続いていく。

ドラゴンの強大な力を持つ者は得てして強者と惹き合う。

それ故なのか、赤龍帝と白龍皇は互いに惹き合い、そして神器保有者達は運命に決定付けられたかのように争うのだ。

だが、常に同じ時代に現れると言うわけではない。

どちらかしか顕現しない時代もあった。だが、両者が同じ時代に顕現したときは必ずと言って良い程に戦い合ってきたのだ。

その戦いは途轍もなく激しく、必ずと言って良い程に莫大な被害を出して来た。

だからこそ、天災のような被害を出すことから古来からそう言われるようになったというわけだ。

その最厄がこうして出会ってしまった。

その邂逅に立ち会ってしまった。

だからこそ、リアス達は恐怖に顔を凍り付かせてしまう。

これからのような事が起こるのか……考えたくも無かった。

あの『兵藤 一誠』の攻撃を片手で止めるような存在だ。

そんな強者が一誠と戦い合えば、コカビエルが仕掛けた崩壊の魔方

陣など無くてもこの町が壊滅することは目に見えるのだから。

そんなリ阿斯達を置いて、赤と白は対峙する。

両者の間にあるのは、押さえる掌と押し通そうとする拳。

その両者によってゴリゴリと骨が削れるかのような音がこの場に
いる者達に響いていく。

そして押し通そうとする赤……兵藤 一誠は目の前にいる白に
顔を向けていた。

鎧で見えないが、その表情は壮絶な笑みに彩られていた。

「よお、久しぶりだなあ………」

拳にかける力を抜かずに一誠は白に話しかける。

それは久しぶりに知人にあつた時のような声。

だが、それにしても尋常ではないほどの殺気に満ちあふれていた。

コカビエル並みの実力者で無ければ間違いなく恐怖し戦意を喪失
しそうな程の濃密な殺気。

それに痺てられ、リ阿斯達は呼吸が止まりそうになった。

まさに心臓を鷲掴みにされているかのように彼女達には感じられ
ただろう。それ程までに、今の一誠は『恐い』のだ。

その殺気を直にぶつけられても、白はたじろぐ事はない。

そして今度は白から一誠に向かって声をかけてきた。

「ああ、そうだな。十年くらいか……」

その声は纏っている鎧と同様に美しく、聞く者を惚れ惚れとさせ
る。

だが、そんな美しい声でも確かに彼女達は感じた。

その美しさの裏に隠されている、夥しい程の闘志と殺気を。

そのような苛烈な殺気を放ちつつ、一誠は白に向かって気軽に話し
かける。

「そこを退けよ。オレはこの堕天使と喧嘩してたんだからよお、横
から手出てくるんじゃないやねえ……ええ、ヴァーリッ!!」

話し方は軽い感じなのに、まるで煮え滾った溶岩のような怒気が籠
もった声で一誠は白……ヴァーリに言う。

その全てを焼き尽くさんといわんばかりの憤怒に対し、ヴァーリは

冷静な声で返す。

「そう言うわけにはいかない。この男は『神の子を見張る者』の大幹部だ。アザゼルに叛旗を翻し暴走したその罪は、組織によって裁く。貴様に殺させるわけにはいかない。アザゼルからその男を連れてくるよう言われているのでな」

一誠の炎のような憤怒に対し、まるで吹雪を連想させる程に冷徹な声でヴァーリは答える。

両者のやり取りは聞いてるだけでも恐怖を感じさせ身体が震える。一触即発の雰囲気二人の周りの時が止まったかのような感じた。

その緊張状態がまるで風船が膨らんでいくかのようにその場の殺気を膨らませていく。

「何だよ、テメエ、あの総督の知り合いかよ」

「奴には色々世話になっている身だ。だからこそ、頼まれた事を引き受けている」

その言葉を聞いて一誠は苛立ちに、更に殺気を放つ。

アザゼルがヴァーリのことを隠していたことがわかったからだ。大方出会えば二人で喧嘩し合い、途轍もない被害を出すとも思っていたのだろう。戦争反対派のアザゼルにとってそれは都合がよろしくない。

昔からの言い伝えというのものもあるが、もしかしたらアザゼルはヴァーリから聞いているのかもしれない。

一誠とヴァーリの因縁を。

一誠はそんなことを少しだけ考え、そして直ぐに止めた。

だからどうした。イイ感じに喧嘩をしていたというのに、目の前の奴は横からちよっかいをかけてきた。そんな無粋な事をする奴を許せる程、一誠は大人ではない。

それを伝えるかのように更に拳に力を込めていく。

「それはつまり……ここで俺と『あの時』の続きをしようってことか」その言葉を聞いた途端、ヴァーリの手から負けじと更に力を込められた。

そして身に纏う殺気が静かなものから一誠のような燃えたぎるも

のへと変貌した。

「それは此方も望むところだ！………と言いたいところだが、そう言うわけにはいかん。アザゼルに迷惑をかけるのは本意ではない。だから……今はしない」

互いの殺気、そして対極するドラゴンのオーラがぶつかり合い、空間が悲鳴を上げる。意識などしているわけがない。ただ、溢れ出た物が結果として周りの物を破壊し始めていた。

まさに少しでも何か刺激されれば爆発するような、そんな状態にリ阿斯達は目を見開いて息を呑んだ。

しかし、それは永くは続かなかった。

急に二人はその殺気とオーラを収め始めたからだ。

急に静まる二人にリ阿斯達は驚いてしまう。彼女達はこれから起こるであろう激戦に巻き込まれないよう、全ての力を防御へと回そうとしていた。

だが、それが起こらなかったのだから驚きもするだろう。

互いに拳と手を下げた二人を見れば、尚更に。

二天龍相まみえる時、必ず戦いが起こる。

それが覆されたのを、彼女達は初めて見た。

そして等の本人達は戦意はそのままに、互いに拳を収めた。

「ちっ………ノリ気でもねえ奴と喧嘩出来るかよ。それにアザゼルにはそれなりにこっちも仕事を回して貰ってる。そいつの頼みを潰すのは、仕事上よくねえ………はあ、仕方ねえか」

「別に戦いたくないわけではない。本当ならば、今すぐにも『あの時』の続きがしたいが、こちらも仕事がある。それに………そのような状態の貴様と戦っても面白くない。やるのなら………全力の貴様とだ」

「いいねえ………」

新たに戦い合うと決めた二人から完全に殺気が無くなっていく。

それにより、周りの空間は嵐が過ぎ去ったような静けさを取り戻していた。

『残念だな、白いの』

突如として一誠の左腕の籠手から声が発せられ、その声に驚くりアス。

一誠の声とは全く違う声。それは彼女達にとって初めて聞く異常な物だった。

まさか神器が意思を持ち話すなど、彼女達は知らなかったからだ。

一誠の籠手……中に封印されているドライグの声に対し、ヴァーリの身に纏う鎧から返事が返ってきた。

『まったくだ、赤いの。互いに最凶の使い手に巡り会え、そして待ちに待ったというのに』

『何、どうせこいつ等のことだ。こうして再び会い、あの戦意を見せたのだから。再び戦い会う時は近いだろうよ』

『それもそうだな。なら……次に会う時を楽しみにしているぞ、ドライグ』

『ああ、こつちもだ、アルビオン。今度こそ……』

『俺が勝つ』

ドライグとアルビオンが互いに闘志を燃え上がらせる。

それを聞いて使い手たる一誠とヴァーリは笑みを深めた。

互いの相棒が殺る気を漲らせているのだから、此方も喜ばしいものである。

だからこそ、一誠とヴァーリは互いに背を向けた。

ここから後に言葉はない。互いに再び出会い、そして戦うことを約束した。

なら、近いうちに必ず来るだろう。互いに全力で殺し合う喧嘩をする時が。

一誠はそのまま背を向けて歩きだそうとしたが、その前にコカビエルに向かって少し大きな声をかけた。

「なあ、コカビエル！ あんた、かなり強かったよ。こうして途中で止められたのは残念だけどよ……楽しかったぜッ!!」

それは一誠なりの別れの言葉。

せめてそれだけでも言いたかったと、その思いを込めた言葉であった。

それを聞いたコカビエルは満身創痍の状態だが、満足そうに笑う。彼も本気になったこの戦いに満足したから。

それだけを言い終えると、今度こそ一誠は歩き始める。

ゆつくりと、しかし確かな足取りで歩く一誠。そのまま赤龍帝の鎧を解除し、真つ赤に染まった制服姿を晒すと気にした様子もなく歩いて行く。

そして反対側では、ヴァーリがコカビエルへと歩いて行く。

「貴様は勝手が過ぎた。その罪は組織によって裁かれるべきだ。よつて力尽くでも連れて帰る。それにこの魔方陣を解除しなければならないのでな……少しばかり寝ている」

ヴァーリはコカビエルに向かってそう言うと、その瞬間に姿が消えた。

そして直後にコカビエルの前に出現し、コカビエルの腹を思いっきり殴る。

それは消えたのではない。単純に速すぎて見えなかっただけであつた。

その加速に拳の威力を乗せた打撃を叩き込まれたコカビエルは、砲弾の様に吹っ飛び校舎に激突して校舎を崩壊させた。

崩れていく校舎に目を見開くりアス達。それと同時にこの学園に張っていた崩壊の魔方陣が破壊された。

「少しやり過ぎたな。どうも奴と再び会ったものだから、闘気が押さえられないようだ」

『しつかりしろ、ヴァーリ。これで殺してしまつては元も子もないのだからな』

そんな会話を相棒としつつ、ヴァーリはコカビエルを回収に向かい、その途中で死にかけている白髪の青年も拾う。

そして気絶しているコカビエルを回収すると、凄い速さで上空へと飛び去ってしまった。

こうしてこの場での激戦は終わり、町は救われた。

その光景は見ていたリアス達は、目の前で起こった出来事を信じら

れないかのように目を瞬かせることしか出来なくなっていた。

その後、血まみれの一誠を見てソーナが泣き崩れながら感謝の言葉を一誠に伝え、その言葉に苦笑する一誠がいた。

33話 彼はリベンジに望む

駒王学園での騒動を終えて、一誠と久遠は共に帰る。

その道中、久遠は携帯を片手に引つ切りなしに電話をかけて話をし、此度の依頼の達成や報酬の確認、被害の状況などを話し合っている。

その間、ずっと一誠は不機嫌であった。

学園が無事だったのは素直に喜ばしい。それは泣き崩れながらも感謝を言うソーナを見ればそう思えるものだ。それに学校が無事なら追試が受けられるし、街が無事なら自分の住処も無くならないし、孤児院の皆も無事なのだから、普通に考えれば文句なしに喜ばしい。だが、それでもこの男は不機嫌であった。

ソーナと会った時は急に泣き崩れたソーナを見て驚いた事もあった。表には出さなかったが、今は久遠しか居ないので隠す必要も無い。だからこそ、その苛立ちは凄まじい。

久遠は通話を終わると、苦笑しながら一誠に話しかけた。

「さっきから何不機嫌な面してんだよ？ 依頼は無事に達成、報酬の5000万もガッポリと手には入って懐も温けえ。確かにお前は不完全燃焼って感じだけど、あれだけボコれば勝敗なんて決まってるもんだろ。どっちが勝ってるかなんて誰が見たって分かる。お前だって充分楽しんだんだし、これ以上ねえくらい万々歳だろ」

久遠にそう言われ、一誠は更に顔を顰める。

確かに久遠が言っていることも間違っていない。

依頼は成功したし、報酬の御蔭で懐に多少の余裕くらいは出来るかもしれない。

コカビエルとの喧嘩を止められたのは気に喰わないが、それでも充分暴れられてそれなりに楽しめた。

だが……その止めた奴が問題なのだ。

一誠は若干殺気を漏れ出しながらも久遠を睨みながら問う。

「お前……アイツの事、知ってたのか？」

「アイツって？」

「あの白い奴の事だよ！　白龍皇の光翼の使い手、ヴァーリの野郎の事だつての！」

一誠が不機嫌な理由。

それは今までずっと会って、そして『全力』で殺り合いたかった相手がお得意先の一つの所に居たということ。

つまり直に交渉を行う事もある久遠ならば、知っていても可笑しくは無いのだ。

一誠の事情を知る久遠がもし、知っていて黙っていたのならば、一誠は黙ってはいない。

溢れ出る怒気を感じて久遠は冷や汗を掻きつつ、少し慌てた様子でその返答を返す。

「いや、俺だつて知らなかったよ。確かにアザゼルの旦那やシエハムザの旦那から直に仕事を受けるときもあるけどよお、そういった話は聞いた事ねえよ。そもそも、知ってたんならお前さんにイイ値でその情報を売ってるつての。俺だつてそれなりに驚いてるんだからな、さっきの白いのにはよお！」

「そうか……」

それを聞いて一誠は苛立ちつつも納得する。

久遠はいつも嘘や冗談を言うが、真面目に苛立っている一誠を相手にしているときは一切そう言つた事を言わない。

それを分かっているからこそ、一誠は久遠が言っていることが本当の事だと理解した。

だが、それで納得したからと言って苛立ちが収まるわけではない。未だに苛立ちを滾らせている一誠を見て、久遠は仕方ないなあと思え返っていた。

「そんなに苛立つなよ。確かに俺も驚いたけどよ。お前さんと対を成す神器を持つてる奴が堕天使の陣営にいたっていうんだから。ただだよ、それは同時に疑問が出て来る」

「何がだよ？」

久遠の話に一誠は乗ることにした。今は少しでもこの苛立ちをどうにかしたいと、気を紛らわせたかったからだ。

話に乗って来た一誠を見て、久遠はニヤリと笑いながらその疑問について話し始めた。

「そんな強い奴がいるんだったら、そもそもなんで俺等に依頼をするんだって話になんだろ。自分の所にそんな強い奴がいるんだったら、俺等に依頼するよりもそいつを使った方が断然安上がりだ。こいつは予想だが、多分な……そいつが表立って使えないか、もしくは使いたくないかだ」

それを聞いた一誠は首を傾げる。

彼のような脳筋からすれば、その事情というのは全く理解出来ないのであった。精々は見つかりたくないということくらいしか理解出来ないだろう。

そんな一誠に対し、久遠は呆れつつも話を続ける。

「どちらにしても、その答えは公になりたくはないってところだな。神器って線でそうだとは思えねえ。現にお前は使いまくって有名なわけだしなあ。ってことは、それ以外ってことになるって辺りなんだろうよ。イツセー、お前何か知ってるか？」

そう言われても、一誠は特にヴァーリについて知っているわけではない。

過去に一度だけある場所で会い、そして戦った。

別に戦う依頼があったわけでも、いがみ合うような理由があったわけでもない。

ただ、互いに目が合った途端に分かった。理解してしまった。本能がそうだと告げた。

目の前にいる奴は唯一無二の自分の敵だと。

外敵でも宿敵でもない。

自分とは相容れに『絶対的な敵』。

憎んでいるわけでもないし、怨みがあるわけもない。

ただ、奴は自分が倒すべき存在だと認識したのだ。

その後戦ったのは言うまでも無く、結果は出ずじまいであった。

だからこそ、一誠がヴァーリについて知っている事など、名前くらいのも物だった。

「いや、俺もあまり知らねえよ。知ってるのはあん時に名乗った名前くらいなもんさ。ヴァーリって名をなあ」

「まあ、お前さんに聞いたってそんなもんしか出てこねえのは分かってたさ。ヴァーリねえ……」

一誠が当てにならないことは知っていたが、念の為聞いて久遠は考える。

一誠も同じように考え込み、当時の事……出会った時の事を思い出そうとするが、特に何も思い出せなかった。

そのまま二人で歩いて少しすると、久遠は顔を上げて手を軽く打つ。

「よし、取りあえず……これ以上考えるのは止めるか。どっちにしても情報がねえんじやどうしようもねえ。今度アザゼルの旦那にでも会った時に問い質せばいいさ」

久遠の提案に一誠も頷き返す。

「それもそうだな。考えたって出ねえもんは出ねえ。なら、そんなこと考えたって無駄にしかならねえしよ。それに……奴は言ってたんだ。近いウチに必ず会うつてよ。なら、そんな時に思いつきりやれば、それでいい」

結局はそこに行き着く。

ヴァーリが何者だろうが何処で何をしてようが関係無い。

再び会ったとき、その時に『あの時』の続きを行えば、それで一誠は良いと結論付けた。

それを聞いた久遠は少し呆れ返ったが、同時に一誠らしいと思った。相手がなんであろうと、自身がやりたいことは決まっているのだから。

その人に左右されないぶれない意思は見ていて危ういが清々しい。それが面白いと。

だからこそ、こいつと組むのは止められないと久遠は思うのだ。

二人ともそこに行き着いた所でこの話題は終わりとする。

後は普通に帰るだけだが、珍しく久遠は一誠にあることを提案した。

「なあ、この後時間あるか？ あるんだったら、ラーメンでも食いに行こうぜ。勿論、俺の奢りでな」

「マジかよ!？」

自ら奢るという久遠の提案に目を輝かせる一誠。

人間、たまにはそういった事をしたくなるときもあるというもの。

その提案に勿論貧乏の中の貧乏である一誠は食らい付く………ところだが、今回に限っては洩った。

「っ………いや、今回は………いい………」

それを聞いた久遠は一誠の顔を、それこそコカビエルという古の堕天使と真っ向から戦うと言った時以上に信じられないような物を見る目で一誠を見た。

「おい、どうしたんだよッ!? まさか白龍皇と会ってどこかの螺子抜けちまったのか!」

仰々しく驚く久遠に一誠はそうじゃないと強く答える。

彼だって本当はその提案に凄く乗りたい。

貧乏人にとって無料の食事なんて、まさに御馳走なのだから。

それを洩る理由、それは………。

それを久遠に教えると、久遠はキョトンとした後に思いつき笑い出した。

「あつはつはつはつは!! おいおい、マジかよ。この業界でもかなり畏れられてる『赤腕』がまさか、そんなことで……ひやつひやひやひや! ああ、腹痛え〜!」

「うつせえ、笑うんじゃねえよ! こっちは結構ガチでまじいんだからよ!」

笑う久遠に怒りながら一誠は叫ぶと、そのまましばらくはそのネタでかわかわれながら帰路に付いた。

勿論、奢りは無しでだ。

「イツセーさん、大丈夫ですか!!」

「ああ、何とかな」

部屋に戻るとアーシアが泣きそうな顔で一誠に駆けつけてきた。

その様子に一誠は苦笑を浮かべつつアーシアの頭に手を乗せて軽くポンポンと叩く。

それをされたアーシアは泣きそうだった顔から一転し、顔を真っ赤にしつつも嬉しそうに笑った。

そんなアーシアを少し羨ましそうな目で見つ、身体を引き摺ってイリナが一誠へと話しかける。

「大丈夫だったの、イツセーくんっ!? あのコカビエル相手に戦ったりなんかして。全身真っ赤だよ」

「え……ッ!? キャアアアアアアアア!! イツセーさん!!」

イリナの言葉を聞いてそれまで嬉しそうに笑っていたアーシアは一誠の姿を見て驚愕する。

まあ、誰だつてボロボロで真っ赤に染まった制服姿をしているのなら、驚かない者なんていない。

そんな二人に一誠は面倒臭そうな感じで少しうんざりしながら答えた。

「ああ、こんなになっちまってたか。こりやあもう着れねえなあ……もったいねえ。まあ、仕方ねえか。取りあえずがもう止まってるし乾いてるから問題ねえよ。だから二人してそんな面すんな」

一誠の様子から見て大丈夫だと判断したイリナは胸を撫で降ろし、アーシアはそれでも心配なのか一誠の身体をぺたぺたと探るように触る。

そんな二人に呆れつつも、取りあえず一誠はイリナに事の顛末を話す。

「お前の相方のゼノヴィアだったか。アイツは取りあえず無事だよ、死んでねえ。それでバルパーとやらの爺さんは死んだ。何か喚いてたけど、気にするような事でもねえ。コカビエルが邪魔だつて消滅させたよ。フリードつてえ野郎は知らねえ。見てねえからな。んで当のコカビエルだけだよ……喧嘩の途中で邪魔された所為でケリが付かなかった。まあ、魔方阵はぶっ壊されたようだし、その聖剣とやらもへし折られたらしいし、問題はねえだろ」

実は大雑把な説明にイリナは追求しなくなったが、一誠の不機嫌な

顔を見て止めた。どちらにしろ、一誠の説明がどうあれ、現在も街が健在している以上、コカビエル達の企みは失敗に終わったということなのだから。

一誠はその説明を終えると、その場で急に着替え始めた。

「キャッ、イツセーさん!」

「イツセーくん、一体何を!」

驚く乙女二人。

二人とも一誠の猫背気味ながら鍛え抜かれた鋭くも引き締まった身体に注目してしまい、顔を真っ赤にして両手で顔を隠す。まったく隠れていないが。

そんな二人に対し、一誠は気にすること無く平然と答えた。

「今日は疲れたからもう寝るんだよ。こんなボロ切れ着てても仕方ねえしな。何よりも明日は大切なもんがあるから早く寝る」

そう言っただけのままラフな服装に着替えると、床にゴロつと寝っ転がって寝息を上げ始めた。

その様子に真っ赤になっていた二人だったが、顔を見合わせて同時に笑った。

そして二人も、もう寝ることにして部屋の電気を消した。

翌日になり、イリナはまだ戻りきらない体力を回復すべく一誠の部屋で留守番をすることに。

そして一誠とアーシアは制服に着替えて意気込んだ様子で登校し始めた。

「イツセーさん、頑張りましたよね!」

「ああ!」

可愛らしく意気込むアーシアに一誠もそれなりにやる気を見せて頷く。

この日、この二人には前から準備していた敵と戦う。

そう、追試と言う名の敵と……。

停止教室のヴァンパイア

34話 彼は焦れる

追試を終えて、無事に赤点を回避した一誠とアーシア。

その事にアーシアはとても喜び、一誠もそれなりにホッとした。

寧ろ教員からはいつもより良い出来に驚かれ、もつと頑張るよう言われたことに一誠は苦笑で返すしかなかった。

そんなこともあり、勉強を教えてくれたソーナに改めて礼を言いに行く二人であったが、礼を言われたソーナはそんなことはないと言顔で二人にそう言う。

だが、それでも感謝の念を絶やさないアーシアに、ソーナは満更でもなさそうであった。

これで二人とも追試を終えて安心したわけだが、一誠の胸中は穏やかでは無かった。

「デメエ、何モンだ！ この俺をはぐれのバルグ様だと知ってのっ」「うるせえっ！ この雑魚スケがあっ!!」

草木も眠る丑三つ時、郊外の端にあるもう動いていない廃工場。

本来ならば静かであるはずの場所ではあるが、最近ではそうではない。

ドスの効いた叫び声が工場内に轟き、地鳴りのような揺れが連続で巻き起こり工場を揺らす。

そこにいるのは、はぐれ悪魔のバルク。

典型的な力に溺れ、主を殺して逃亡した悪魔である。

その巨軀と巖のような筋肉はまさに全身兵器。剛力と堅硬な防御力を持つ『戦車』であった。

彼ははぐれとなって、欲望のままに暴れるために人間界へと来た。そして丁度良さそうな潜伏先としてこの廃工場を見つけ住み着き、気のままに人間を襲うようになった。

時には自ら住処から出て狩りと称して人間を襲い、またある時は彷徨ってきた人間を殺したこともある。

男ならば玩具の様に弄り殺し、原型が無くなるまでに壊す。

女ならばその場で自分の性欲の捌け口として使い、精神が崩壊するまで犯し抜いた後に殺し、時には食べた。

また時には同じようなはぐれの女悪魔を捕まえては犯し、結果として殺してしまったことも少なくない。

まさに絵に描いたような悪魔な彼だが、現在、その表情は恐怖に歪んでいた。

その夜、最初に彼が見たのは一人の人間の男であった。

良くある物珍しさから好奇心で覗きに來たのであろうと彼は判断した。そして同時に殺そうと動き出す。

理由など単純であり、殺したいから殺すのだ。自分の愉悅のために、殺したいから殺し、犯したいからか犯す。

特にそれらしいものなどない。ただ、やりたいからするだけだ。

しかし、彼はその人間に仕掛ける前に気付いた。

その男の顔、そして身に纏う雰囲気を見て本能が察した。

ただの人間ではないと。

その身に纏うのは、百戦錬磨の強者の雰囲気と漏れ出す闘気。そしてその顔は凄惨な笑みで彩られていた。

それは人にあらず。悪魔でも堕天使でもない、阿修羅の笑み。

それを見た途端、バルクはまるで全身が凍り付いたかのように固まった。

身体が動こうとせず、変わりに身体中がガタガタと震え始める。

目がその男から離せなくなり、齒がかみ合わずにガチガチと音を立てていく。

その男に彼は……バルクは恐怖を感じていた。

恐いと本能が伝えてくる。絶対に戦ってはならないと、危険だと警報を鳴らし始める。だが、それに従えるほど、彼は柔軟では無かった。

彼も外れたとは言え悪魔だ。人間如きに畏れを抱いたなど、自身のプライドが許すわけではない。

それで最後。

その瞬間にバルクは何も感じなくなる。

当たり前だ。何故なら……………。

その一撃でバルクの首から上は弾け飛んだのだから。

力なく巨体がコンクリートの床に沈み込み、倒れた際に起きた揺れは大きく廃工場を揺らす。

物言わぬ肉塊となったバルクに目を向けること無く一誠は振り返り、その場を後にする。

その表情は実に苛立ちに満ちており、不満そうであった。

そんな一誠が廃工場から出て来ると、それまで一誠の様子を見ていたであろう久遠が話しかけてきた。

「まったく、随分と荒れてるねえ」

「……………うるせえ……………」

からかう久遠に一誠は不機嫌そうに答える。

そんな一誠を見ながら久遠は苦笑を浮かべた。

「そりやお前さんがずっと会いたがつてた奴と会ったつて話は聞いたさ。けどよ、だからつてそこまで昂ぶるかね、普通」

一誠がここまで不機嫌な理由。

それは自らが認めた唯一無二の敵『白龍皇のヴァーリ』との再開が原因だ。

過去にぶつかり合ったこともあり、赤龍帝と白龍皇という関係だけで無くても因縁を持っている間柄。

その相手と再び相まみえた。

それにより、それまで燻っていた一誠の中の炎が更に燃え盛ったわけだが、その再戦がいつなのかは明確には決まっていない。

だからなのか、一誠はこうして苛立ちと闘気を持て余し、少しでも押さえるために何かしらの仕事をしているのだ。

だが、彼が十分に満足するような相手に早々出会える訳が無い。

先の仕事でコカビエル相手に激戦を繰り広げたが、あれくらいの相手でなければ今の一誠の苛立ちを収められる者などいないだろう。

故に一誠は苛立っているというわけだ。

それは一見すると恋に熱中する女性のような感情に近いものがある。

会いたい、けど会えない。居場所が分からないけど、それでも会いたい。

恋しい気持ちと焦れつたさが入り交じった感情は、確かに女性のそれと共通するものがあるかも知れない。

そう考えれば女々しくも見えるものだが、会ったら次は本気で『喧嘩』がしたいというのは全く違う感情だ。

熱烈に相手のことを思う熱意、そして会ったら会ったで本気で殺し合いをしてどちらが上なのかをはっきりさせたい意地。

女性のように一途で、それでいてそのような欠片もない圧倒的な戦意。

その荒れ狂う感情を一誠は持て余しているというわけだ。
故に紛らわそうと色々と仕事を行う。

先程のようなはぐれ悪魔の討伐は勿論、一般の人間による裏の家業も請け負った。

それらの仕事を全て彼は熟していった。
だが、その結果は凄惨の一言に尽きると言って良い。

はぐれ悪魔ならほぼ三撃以内で仕留め、元の形を留めていない。裏の人間の仕事ならば、相手の拠点ごと一撃で殲滅する。

荒んでいることもあって、いつもより押さえが効かなくなっていた。

と、そんな感じに荒んだ精神を持て余しているのが現状の一誠であり、そんな一誠を呆れながら久遠は笑っていた。

「仕方ねえだろ。あいつと……ヴァーリとまた会ったんだ。だったら、殺り合いてえって思うのは当然だろ」

笑う久遠に一誠は凄みがにじみ出ている笑みで答える。

それは一般人が見たら卒倒するくらいに恐ろしい笑みとなっていた。

そんな一誠に久遠は冷やかしを入れる。

「別にお前が再戦に燃えるのは結構だが、そんな面じゃアーシアちゃ

んとかが心配するぞ」

「ぐっ………はあ、わかつてるつつの……」

そう言われ一誠は顔を顰めると、力を無理矢理抜いた。

確かに久遠の言う通りであり、再戦に向けて闘志を滾らせるのは結構だが、それで家族に心配をかけてはいけない。特にアーシアのような人の感情に敏感な少女ならば尚のこと。

一誠は肩の力を抜いて軽く溜息を吐くが、それでも胸の中の燃え滾る溶岩は冷える気配を見せない。

だが、少しは周りを見直すくらいの余裕は作り出すことは出来た。

故に一誠は苛立ちを押さえ始める。アーシアを怖がらせると面倒になるということは嫌というほど分かっているから。

家族を心配させないためにも、一誠は苛立ちを表に出さないように必死になると、そんな一誠に久遠はニヤリと笑いかけた。

「さて、そんな必死なイツセーにはお兄さんからご褒美をやるうじやないか」

「誰がお兄さんだ、誰が！」

ボケる久遠に一誠は突っ込みを入れるが、そこでへこたれないのが久遠である。

そのまま久遠は気にした様子も無く話を続ける。

「ここ最近はお前さんがやる気満々だったことで、色々と金が集まってる。そんなわけでここは一つ、ラーメンでも奢ってやるよ。勿論、あの店長の店だけだよ」

いつもなら即座に飛びつく好条件。

無料で食事が出来るということは、万年金欠の一誠にとってはまさに最高の一言に尽きる。

だが、それで………今の一誠はそこまで精神が緩まない。

「いや、いらね」

「そう言うなつての。腹一杯喰えば少しは気も解れるつて。お前はどうせオツムが単調なんだからよ。細かく考えずにどっかりと構えてりやあいい。何かあるんだったら向こうから来るだろ」

「……………」

その言い分に不満がありありとでる一誠。

そうではないと言いたい所だが、馬鹿にしつつもそれなりに励ましてくれていることがわかる。

だからこそ、一誠は久遠の顔を見ずにぶっきらぼうに答えた。

「まあ、無料と聞いていかねえもの損しかねえしな。今日はアーシアも来ねえし、仕方ねえな」

「まったく……ウチの大将は素直じゃないねえ」

照れ隠しに仕方ないと言う一誠を見て久遠は笑いつつ、一誠を例の店へと連れて行った。

そして店の暖簾を潜った途端に二人して固まった。

何故か？ それは二人の視線の先に居た人物達が原因である。

一人は白銀の髪をした美青年。そしてもう一人は、前髪が金色に染まっております、着流しをきた中年の男。

その二人は一誠達の視線に気付き、軽く手を上げて挨拶をしてきた。

「よう、赤腕、それに仲介屋の久遠、久しぶりだな。つっても、久遠とは毎回面を付き合わせてるからそれ程久々でもねえけどよ」

その言葉を聞いて久遠は驚きつつも声を出した。

「なっ………何でいるんだよ、総督様が……」

別に驚くようなことではない。墮天使をまとめ上げる組織『神の子を見張る者』の総督にして久遠のお得意先の一つであるアザゼルだったまにはこの店に来ることがあるのは皆知っている。その来店理由の大体が遊びに来たのか部下に小言を言われ過ぎてストレスの発散にきたのかのどちらかなのも。

ただ久遠が驚いたのは、今回一誠が荒んだ原因の一端であるアザゼルがタイミング悪くこの場に居てしまったからだ。

だが、一誠の目はアザゼルには向いていない。

その視線の先にあるのは、白銀の髪をした美青年である。

また、その青年も一誠の方に目を向けており、同時に笑った。

その笑みは寧猛な獣のそれだ。殺気が一気に膨れ上がり、ラーメン屋には有り得ない程の殺伐とした空気が流れ始める。

そして一誠はその青年の名を、その青年は一誠の名を同時に叫んだ。

「デメエ、ヴァアアリイイイイイイイイツ!!」

「貴様、一誠ええええええええええええええええ!!」

互いに認め合った真の敵同士、互いの再会に昂ぶりを押さえきれずに叫ぶ。

そしてどちらも同時に戦闘へと移行しようとし……………。

「うるせええぞ、ガキどもおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおツツツツツ!!!」

厨房から飛んで来た二つの鉄鍋を同時に頭部に受け、激痛のあまりに頭を押さえて悶え苦しんだ。

再びヴァーリと再会した一誠だが、騒ぐ場所は考えるべきだっただろう。

如何に三大勢力が畏れる赤龍帝と白龍皇とは言え、この店の主人の前ではただの客であり、店の迷惑になるような行為を許すほどこの店主は優しくはない。

この場に於いて、店主こそまさに『最強』であった。

35話 彼は歓喜する

再び出会った一誠とヴァーリ。

燻っていた炎は再会と共に燃え上がり、両者とも即座に仕掛けようとする。

だが、ここでは如何に強者である二人であろうとも、騒ぎを起こすことなど許されない。

此処は裏で有名な特殊な店。

この店に訪れようものなら、例え魔王だろうが堕天使の大幹部であろうが身分などというものは存在しなくなる。

皆等しく客である。

そして営業を妨害する輩は例え客であろうとも許されないのだ。如何にそれが極悪の悪魔であろうが冷徹無比の堕天使であろうが、騒いだ瞬間にはこの店の店長からの怒号と長年中華鍋を振るってきた豪腕から繰り出される豪速の中華鍋を投げつけられる。

その威力は人間だとは思えないくらい凄まじく、常連であるサーゼクスは中級悪魔の結果を貫いて直撃したところを見たことがある。

裏の世界で如何に強かろうが、この店ではただの客。

そして騒ぐ者には容赦ない中華鍋の洗礼が襲い掛かるのである。

故に、入って早々殺し合おうとした二人は見事に店主の怒号を浴びせられ、中華鍋を投げつけられたのであった。

そして現在、燃え上がった炎はまるで上から押し潰された彼の如く消火され、一誠とヴァーリは互いに睨み合いつつも鍋が激突したところを押さえていた。

その顔は戦意を燻らせつつも痛みを堪えている。

そんな二人をそれまで観客のように見ていたアザゼルは笑った。

「お前等、ヤル気が漲ってるのは若い証拠だが、時と場所を考えろ。いくら悪名高き赤龍帝と白龍皇だろうとここではただの客だ。あの店主を前に暴れるのはオレだって恐くて無理なんだからよ」

からかうかのように言いながらビールを呷るアザゼル。

そんなアザゼルに賛同するかのように久遠も頷き返し、痛みもあつ

てか取りあえず拳を収める二人。

そんな二人に投げつけた中華鍋を回収しつつ店主が声をかけた。

「おい、この悪ガキ共！　いくらテメエ等が調子をこいていようが、こはラーメン屋だ。騒ぐんなら余所れやれ、余所でな。そんな殺気だつてねえでとつと注文しろ、このボケナス」

そう言われ不満が在り在りと出る一誠とヴァーリだが、もう一度あの中華鍋を喰らうのは御免だと思い注文をすることにした。

そして店主は二人の注文を聞いた後に久遠とアザゼルの注文も聞いて厨房へと戻っていく。

久遠は一誠に奢ると言った手前文句は言わなかったが、それを良いことに一誠は又焼麺の又焼特盛りを注文した。

その所為で久遠も又、妙に渋い顔になる。

そんな空気の中、久遠はぶすつとした一誠の代わりに改めて此度の件を聞きに掛かった。

「それで、どうしてお忙しい総督様がこんな寂れた所に？」

まずは軽く挨拶がてらに話しかける久遠。

そんな久遠にアザゼルは上機嫌に笑いながら答える。

「おいおい、何でも何もここはラーメン屋だろ？　ラーメン喰って酒飲みに来たに決まってるじゃねえか」

もつともな意見にそれはそうだと思っだろう。

ラーメン屋に来て何をするかなど決まっているのだから。

その答えを聞いて久遠は苦笑を浮かべるしかない。そしてどこから聞いていたのか、厨房から怒声が飛んできた。

「おい、久遠！　何処が寂れた店だつてツ!!　テメエ、あまり失礼なこと言うんだつたら又焼一枚抜くぞ！」

「んなあつ!?　おやつさん、そいつは勘弁してくれよう！」

色々な裏の情報が飛び交う場所故なのか、店主の地獄耳も相当なものらしい。

店主の怒声に久遠は情けない顔で頼み込む。その様子を見てアザゼルは笑いながら酒を呷るが、一誠とヴァーリは一切表情が揺るがない。

双方ともひたすらに睨み合い続ける。

そんな二人を気にせずに久遠とアザゼルは軽い世間話を始める。
先程のアレはワザとであり、場の空気を少しでも緩和しようとして久遠が仕掛けたことである。これで多少はより軽く話しかけることが出来る、所謂交渉術の一つだ。

そして今回の一番の件をいつ聞こうか機会を窺っているところであつたが、その様子に一誠はついに痺れを切らした。

笑い合う二人に向かって目を向けると、燻った殺気を吐き出しながら声をかける。

「そんな世間話なんざあどうでもいいだろ。久遠、一々周りくどいんだよ、テメエはよお。おい、アザゼル！俺が聞きてえのは一つだけだ。何でこいつがこんな所に……テメエの所にいるのかを聞きてえんだよ！」

一誠は二人からヴァーリに向かって視線を向けつつ問いかける。

その視線を受けたヴァーリは殺気の籠もった視線を受け止めつつ負けじと睨み返す。

そんな二人の様子を見てアザゼルは軽く溜息を吐き、仕方ないと呆れながら答えた。

「そうピリピリすんなよ、赤腕。何で白龍皇が俺の所にいるかつて？そんなもんは問題じゃねえんだろ。お前さんが気にしてるのは、居るのになんで教えなかったかってことだろうよ。そんなもん、教えたらどうなるかなんて決まってるだろ。だからだよ」

アザゼルとしては、今の世で二人に戦いを起こさせたくはない。

今は三大勢力が衰退し拮抗している状態であり、余計な問題は起こしたくないのである。

そう答えるアザゼルだが、それを両者が認めるわけがない。

ヴァーリもまた、アザゼルが内々に一誠と通じていたことを前回の一件で知ったばかりなのだから。

二人に睨まれアザゼルは苦笑しながら更に酒を呷る。

そして空になったグラスを置くと、二人を静めるためにも説明を軽く入れ始めた。

「ヴァーリはちよつと訳ありでな。世間に知られると色々と面倒になるんで今まで隠してたんだよ。それでウチの仕事の手伝いを内々でして貰ってたわけだ。だからお前さんとは面を合わせなかったんだよ」

その訳を知っているのは、アザゼルと本人のヴァーリ、そして『神の子を見張る者』の一部の大幹部のみ。

それ故に、それは秘匿されてきた。

それを聞かされて一誠は不機嫌になりつつも納得せざる得ない。

彼にだって訳ありな事などいくらでもある。それを暴こうとするほど一誠は追求心は強くない。事情など人それぞれである。

その言葉にヴァーリも不満ながらに納得する。

彼も又、如何にアザゼルが今の世をどう思っているのかを知っているから。

だが、それでも燦っていた炎は消えることは無い。

再び会えはどうなるか……それは互いに分かっているからこそ、二人は更に睨み合う。

赤龍帝と白龍皇、その因果な関係もそうだが、それ以前に一誠とヴァーリ、この二人はそれ抜きにしても敵だと認識し合っている。

だからこそ、戦いは避けられない。

本当は今すぐにでも始めたいというのが本音だが、店主の手前と言うこともあって押さえている二人。

そんな二人を前に、殺気だった雰囲気などまったく気にした様子も無くどんぶりを配る店主。

「おい、ガキ共！ 殺気立ってねえでとつと喰え！ 今度何か五月蠅くしたらそのどんぶりを顔面に叩き付けるからなっ！」

脅迫めいた怒声を浴びせつつも厨房に戻る店主。

その背中を見ながら久遠は一誠やアザゼル達に笑いかける。

「とりあえず……喰うか」

それを聞いて、取りあえず四人はどんぶりに箸を付け始めた。

それから二十分弱の時間が経ち、四人のどんぶりは空になっていた。

人間であろうが堕天使であろうが悪魔であろうが、食事をすれば多少は気が緩むのは一緒であり、それまで二人の間に流れていた物騒な雰囲気も多少は緩み始めていた。

それを見計らってか、少し酔いを見せるアザゼルは上機嫌に一誠達に話しかけてきた。

「実はな……今日ここに来たのは、何もラーメンを食いに来たってわけだけじゃねえんだよ」

それを聞いて久遠は顔を多少真面目な物に変える。

アザゼルのぱつと見浮かれた様子の中に、何かしらの気配を独自の感性で感じたのだ。

それに対し、一誠は良く分からないのかジロリとアザゼルに目を向けるのみ。ヴァーリは知っているだけに目を瞑る。

そしてアザゼルは楽しげに口を開いた。

「お前さん達に一応教えておこうと思ってな。まあ、会えなかったら久遠に連絡でも入れようと思ってたところだ。実は少し前に悪魔側と天界側から会談の申し込みが来てなあ。まあ、会談って言う名の罵倒会みたいなもんだが。ウチの馬鹿が暴走したんで、その監督責任を問われるってわけだ。そこで実際に戦った奴等には皆から呼び出しが掛かるんだよ。赤腕、多分お前さんはサーゼクス辺りに頼まれるんじゃないか」

三大勢力のトップが集まって行われる会談。

それに招集をされるだろうとアザゼルは一誠に言ってきた。

今の世で集まる各勢力のトップ。それが如何に此度の会談が重要なかが窺える。

そんな重大な会談に呼ばれると言うことは、普通に考えれば名誉な事なのだろう。

だが、この男がそんなものなど感じるわけがない。

聞いた直後から面倒だという意思が表情にありありと出始める一誠。

そんな一誠を見て久遠は苦笑を漏らす。

「確かにお得意様だから多少は融通するけど、流石にそんなもんに出ろって言われてもなあ」

久遠の言葉に一誠も肯定の意思を表す。

一誠からしたら、自分の生活にちよつかいをかけてきた奴に喧嘩を売っただけに過ぎず、一々そんな会談に顔を出す義理なんてない。正直面倒だとは思えない。

そんな一誠と久遠を見て、アザゼルは素直な奴等だと笑う。

きつとサーゼクスなら莫大な報酬を出してでも一誠を出席させようとするだろう。直にコカビエルと戦い、そして下したのは一誠なのだから。

一誠からすればそんなことは絶対にならないというだろうが、体面的にはそうなる。

この男は自分が気に入らなければどんなに金を払われても仕事を受けない気質だ。そこに戦いの気配がなければ尚更。故にこの会談には絶対に出ない。

だが、そうされると面倒になるのは悪魔側だけではない。墮天使側にも不都合が出て来る。

だからこそ、アザゼルは一誠にも会談に出席して貰いたい。

アザゼルはそのため、ある餌を一誠にぶら下げることにした。

金ではない、どんなに凄い報酬でも届かない程に凄まじい、一誠が望むものを。

それを考えると薄ら寒い気配が身体を走り、笑みに少しばかり恐れが混じり始める。

「そんな顔すんなよ、出たくねえって面が在り在りと出てるぜ、赤腕。そんなお前さんには素敵な情報を教えてやるよ」

それを聞いた一誠は面倒臭そうな顔のままアザゼルに視線を向ける。

「何だよ、それ？」

不機嫌なのと疲れが入り交じった声を出す一誠にアザゼルは満足そうに笑った。

「この会談、三勢力の収まり所は和平だ。どの勢力もそれで手打ちにしたがつてるからな。それで終わりになるんだが、オレはそこで更に一つ、あることを話し合いに出したいと思う」

自慢そうに話すアザゼルに久遠が面白そうだと反応する。

この二人はどことなく似ている部分があり、面白そうなことには食い付く性分である。

久遠の反応を見て更に笑みを深めるアザゼルは一誠からヴァーリの方へと視線を向け、そして軽く言葉を口にした。

「もう少し待ってろ。それでお前の願いも叶うからよ」

それを聞いたヴァーリは一瞬だけきよんとしたが、直ぐに笑みを深めた。

まるで鋭利な刃のように危険な笑みに、一誠は敏感に感じ取り無意識に構えてしまう。

だからこそ、気になってくる。アザゼルがこれから先に言おうとしたことを。

一誠の顔を見て、アザゼルは更にニヤリと笑う。まるでこれから言うことが楽しみで仕方ないかのよう。

「オレが会談で出す名案、それは……………」

そこで一旦言葉を切り、溜めを作るとアザゼルは楽しさを前面に出しながら発表した。

「お前さんとヴァーリの決闘だよ」

それを聞いた途端、一誠は自分でも気付かない内に笑みを浮かべていた。

その笑みはまるで獣のような寧猛な笑みであった。

それにより、再び店内は殺気が渦巻く物騒な雰囲気が充満していた。

36話 彼は参加を決める

アザゼルから聞かされた言葉。

それは三大勢力公認の元に、一誠とヴァーリが戦えるというものであった。

二天龍が戦いし時、大災厄が訪れる。

そう言われる程にその戦いは激しく、両者が戦った場所は荒れ地と
いうのが憚られるほどに地形が変わる。

それ故に三大勢力は両者を戦わせることを今まで良しとはしてこ
なかった。

戦えば、そこは地獄すら生温い冥府へと変わるから。

だが、それを今回アザゼルは否定するような事を言い出した。

もし何も知らない他の勢力の者が聞けば、正気を失っていると言わ
れても仕方ないことだろう。

勿論そのことを知らない久遠では無い。

だからと言って、アザゼルの気が触れているようにはどうしたって
見えない。

だからこそ、久遠はその真意を知りたいと思った。

一誠とヴァーリはあまり考えることはせず、既に戦えると内心を喜
びで満たし、互いに闘志と殺気を燃え滾らせて睨み合っていたが。

「総督様、そいつはどういうことですか？ 場合によっては和平が決
裂しかねない話だと思っただけ」

久遠はアザゼルに軽く笑いかけながら問うが、その目は真つ直ぐと
アザゼルの目を見ている。アザゼルの真意を探るかのように。

その視線に対し、アザゼルは久遠の考えを読んでか愉快そうに笑っ
た。

「まあ、お前さんならそれがどういう意味なのかわかるか。確かにそ
の通り、下手すりゃ和平は決裂するかもしれねえ。だがなあ……いい
加減ビクビク怯えるのにも飽きるだろ。オレ等はいつまで二天龍
に怯えてなきやならねえんだってなあ」

そう言うアザゼルの表情は昔を懐かしむような色が出ている。

過去の大戦で直にその猛威を見てきた者だからこそ出せる雰囲気
がそこにはあった。

「それになあ、三大勢力が認めた上で戦う場所を決めれば被害は最低
限に抑えられる。一々何処で殺り合うのかわからねえから恐いんだ。
決まった場所と時間でやってくれりゃあそこまで恐くはねえ」

その意見に久遠も賛成であり、それで大体を理解した。

コントロール不可能な二天龍をコントロールするための一手。

敢えて二人を戦わせる事を良しとし、その代わりにその戦いの場を
提供することでコントロールし被害を減らす。

アザゼルはそう言ってきたのだ。

三大勢力が畏れるのは二天龍自体もそうだが、それ以上に両者の戦
いがもたらす被害。ならばこそ、そのリスクコントロールが出来る様
にすれば多少はマシになる。

それをアザゼルは提案する気なのだ。

だが、それでも久遠は視線を向けたままである。

彼はまだアザゼルの真意を掴みきつてはいないから。確かにその
言い分はもつともなことであり、通せば問題は少なくなる。

だが、本当にそれだけだとは思えない。

だからこそ、さらに探る。

しかし、その真意は久遠が気付く前に明かされる。

ただし、それはそれを語っていたアザゼルでは無く、睨み合ってい
た一誠の口から。

「大層な言い分で飾っちゃあいるが、結局テメエはこう言いたいんだろ
……どっちが強えのか見たいってな」

「っ!？」

一誠の口から出た言葉に久遠は驚きを見せる。

それがただの世迷い言なら笑って流していただろう。だが、そう
言った一誠の顔は確信している笑みを浮かべており、それを聞いたア
ザゼルはニヤリと笑みを深める。

その様子から一誠の言っていることが正解であることは確かであ
ろう。

そしてアザゼルは予想外に面白かったのか軽く笑いながら久遠に本音を言った。

「まさか赤腕が先に言い当てるとは思わなかったぜ。確かにその通りだ。色々建前を建てて言っちゃあいるが、結局は赤腕の言う通りだ。オレはよお……見てみたいんだよ、この最強の両者の戦いつて奴を。どっちが上なのかをよお。男だったら気になるだろ、最強つてのをよ」

あつけからんとした様子で語るアザゼルを見て久遠は納得する。

この目の前に居る堕天使の総督は結局の所、ただ面白そうだから、見てみたいから、それだけで畏れられている二天龍を戦わせようとしているのだと。

いくら立場が上であろうと、この男はただ好奇心が強い子供と大差が無いと。

そうでなければ他の勢力ではまず行っていない神器の研究など行えるわけがない。

詰まるところ、アザゼルもまた『漢』であるということである。

だからこそ、一誠は久遠より先にその真意を察した。

この男ほど物事を単純に考える男もいない。故に、その建前の行き着く先をシンプルに察したわけだ。

そんな子供染みた答えを聞いた久遠は少し呆れると共に、同時に噴き出すように笑った。

世界の覇権を争う一大勢力のトップが、危険を顧みずに発した提案の根本がそのような意見だとは……馬鹿らしくて笑えてしまう。

だが、同時に馬鹿らしいが、久遠も同じ気持ちを理解した。

やはり気になるのだ。

一誠とヴァーリ……赤龍帝と白龍皇。三大勢力が怖れた最強の二者、そのどちらが上なのか……。

それは男にしかわからないであろう感情。

闘争心を持つ者ならば誰もが憧れを持ち、同時に恋い焦がれる気持ち。

久遠のような戦わない者でも、その気持ちは理解出来る。

だからこそ、久遠は笑う。

単純で純粹な、世界で唯一の答えに。

そのまま笑いながら久遠はアザゼルに話しかける。その様子は立場も気にせずにそんなことを言い出したアザゼルをからかうかのようである。

「そんなことを会談で言うつもりだったんですか？　いくらなんでもそれで通ったら世の中終わりかもしれませんよ」

「そう言うなよ。でも、やっぱり気になるだろ、こういうのはよお」
からかいの言葉に悪びれもせずに答えるアザゼル。

その様子はまるでこれから始まるであろうイベントを楽しみにしている子供のそれだ。

それは何も語っているアザゼルや聞いている久遠だけではない。
話の根本である一誠とヴァーリもまた、その時を楽しみにしているのだ。

その顔は楽しみにしているとはとても思えないくらい闘志と殺気にまみれ、アザゼルや久遠とはまったく違った表情を浮かべている。
だが、それでもその気持ちは一緒……いや、見たいと言っている二人の比較にならないくらいに強い。

最強だと名乗る気などない。自分より強い奴なんて探せばいくらでもいるだろう。

だから最強というものの自体に興味はない。

だが、この男にだけは絶対に負けたくないと、それだけははっきりとしている。

それだけでいい。最強なんて言葉よりも、ただこの男にだけは負けたくない。どちらが強いのかをはっきりとさせたい。引き分けなどの半端な答えなどでは無い、白黒はつきりとした勝敗を。

それで死んでも構わないが、そもそも負ける気などない。

ただ、この目の前にいる男と戦い決着を付けたいと、両者は考えていた。

だからこそ燃え上がるのだ。

誰に邪魔されることなく、それが出来るというのだから。

燻っていた炎はアザゼルによってくべられた燃料によって更に燃え上がる。

だが、その炎の意思のままにここで暴れるわけにはいかない。だからこそ、アザゼルは席から立ち上がった。

「つうわけでオレ等はそろそろお暇するよ。伝えることも伝えたい、酒も飲んでラーメンも食ったことだしな」

そう言いながらアザゼルは飲み食いした料金をテーブルに置くと出口に向かって歩き出す。

それに続いてヴァーリもまた席から立ち上がった。

だが、そのまま歩き出しはせずに一誠の方に顔を向ける。

その顔は特に感情を浮かべているというわけではないが、その瞳には地獄の業火のような闘志が隠しきれずに映し出されていた。

「これでやつと……あの時の続きが出来る」

静かな言葉だが、確かな闘志が伝わってくる。

その言葉に応えるように、一誠もまた返事を返す。

「ああ、そうだな……絶対負けねえ」

「それはこちらもだ。負ける気など微塵も無い」

ただの返事の応酬。だというのに、二人の間には濃密な殺気が渦巻いていた。

そして二人は同時に笑みを浮かべると共に口を開いた。

「絶対に負けない！ その時まで首を長くして待っておけ」

「絶対に負けねえ！ そんな時がテメエとの決着の時だ！」

それは互いに新たに交わした約束。

絶対に戦うという誓い。

それを言い終わるとヴァーリは満足したようでそれ以上は何も言わずに一誠に背を向け出口へと歩いて行く。

その背を一誠は見送るのみ。

だが、その視線は確かな戦意が込められていた。

そして店内から居なくなる二人。残った一誠と久遠は時間を持て余すかのように話し始める。

その内容は主に先程アザゼルが言っていたこと。

三大勢力による会談とその会談への参加要請。

確かにただ金を出すから出てくれと言われても、一誠は首を縦には振らなかっただろう。

だが、今は違う。

それを肯定するかのように鳴り出す久遠の携帯。

その画面には勿論、ある人物の名が標記されていた。

それを見て笑う久遠。そして一誠は見た瞬間にこの場でして良いわけがない凄まじい笑みを浮かべる。

その笑みに多少呆れながら久遠はその電話に出た。

「もしもし」

『いやあ、夜分遅くにすまないね。実は頼みたい案件があるんだが……』

その声は二人にとって聞き覚えのある声。

それは彼等の得意先。

その人物の名を久遠は笑いながら口にした。

「いや、いつでも問題ありませんよ、『サーゼクス様』」

『そう言ってくれると有り難い。悪魔らしいと言われると少し困るが、基本私達は夜間が活動時間だからね』

軽い冗談を口にするのは悪魔達の王の一人、『サーゼクス・ルシファー』。

一誠と久遠のお得意先である彼が久遠に連絡を取ってきたと言うことは、勿論依頼したい仕事があると言うこと。

それがわかっているからこそ、久遠は営業スマイルを浮かべて話を聞く。

そして出された依頼は彼等が予想していた通りのものであった。

それを聞いた久遠は一誠に指を立てて笑みを浮かべ、一誠はそれを見て予想通りに笑みを深めた。

こうして、一誠の三大勢力会談の参加が決まった。

37話 彼が焦る間に彼女は：

コカビエルが駒王学園で暴れ回り、それを鎮圧した一誠。

だが、その後はすこぶる機嫌が悪いと言うべきか、焦れったそうにしている様子を見てアーシアは心配してしまう。

一誠がああ夜の夜に帰って来た後に話の経緯は大体聞かせてもらったアーシアであるが、この男に限って詳細なことを説明するほど頭が良いわけが無い。

結果、アーシアが分かったことは今回の件が無事に全て終わったことくらいであった。

普通ならばその詳細を聞きたいと誰もが思うだろう。当事者がどうなったのか？ 聖剣を奪った者達はどうなったのか？ 元協会の人間であるアーシアならば尚更に。

だが、アーシアは追求しなかった。

気にならなかったと言えば嘘になるが、それよりも一誠が無事に帰ってきたことが純粹に嬉しかったのだ。

故に彼女はそれ以上のことを求めない。ただ、大切な家族が無事であったことだけで充分だったから。まあ、イリナにだけはより細かく伝えていた事に不満は覚えたようであったが。

しかし、それでもアーシアは一誠を心配し、そして彼を気遣い聞かないことにした。きっと一誠ならばどんなことでも絶対に大丈夫だと思えるから。

それは一誠の事を何よりも信頼しているからである。彼女の中で、一誠は家族であると同時に最も想いを寄せる異性でもある。そのような大切な存在のことを彼女は何よりも愛しているのだから。愛している人の事を信じられなくては女として終わっているというものである。

これに関してはクラスメイトの入れ知恵であり、そう言われる度に彼女は顔を真っ赤にして恥じらう。その様子の愛くるしさから皆の弄られ役になるのはご愛敬というものだ。

そのように、全幅の信頼を寄せる一誠が何か焦っている様子だが、

アーシアは信じて見守るのみ。きつと話せる時がくればきつと話してくれると彼女はどことなく分かっているから。

だからこそ、アーシアはいつもと変わらない。

一誠がくれた年相応の青春を謳歌することにする。それが彼女なりの一誠への感謝だと信じて。

そんな彼女だが、一誠が帰ってきてから直ぐに驚くことになった。何故なら、彼女と一誠がいるクラスに新たな転校生がやってきたのだから……。

イリナが回復し帰投命令により本国に帰った翌日。

一誠は妙にカリカリしつつもアーシアと一緒に学園へと登校する。

その際、稀に機嫌の悪さが出てしまっただけかアーシアを怖がらせては気まずそうに謝る一誠。そんな一誠にアーシアは大丈夫ですよと、天使のような微笑みで返す。

その様子は熟年の夫婦か、もしくは初々しいカップルに見えなくもないだろう。周りからの視線が二人に集まり、その所為でアーシアは顔を真っ赤にして恥じらい、その様子が殊更に道行く男達の視線を集める。

それと同時に一誠の方へと妬みの感情が籠もった視線を向けられるわけだが、一誠の纏う滲み出した殺気に瘴てられ即座に目を逸らす。

そんな様子が面白かったのか、途中で合流した久遠に笑われたのは言うまでもなく、その後に一誠の拳が久遠にめり込んだのはいつものことであった。

そんな朝のやり取りを終えてアーシアと一誠は席に付く。

一誠は早速眠りに就こうと机の上で蹲り、アーシアには級友達が早速話しかけにきた。

「ねえねえ、アーシア知ってる?」

「何がですか?」

いきなりテンションが高めの級友に驚きつつも、彼女は可愛らしく

聞き返す。

すると級友は興が乗ったのか、更に意気揚々にアーシアに話しかける。

「何と……今日、このクラスに転入生がやってくるんだって！」

「へえ、そうなんですか！」

それを聞いてアーシアも少しばかり興奮する。

新しい生徒が来ると聞いて彼女なりにドキドキしたからだ。

前は迎えられる側であり、今回のように迎え入れる側になったのは初めての経験である。故にアーシアは緊張すると同時に期待と不安を胸の内で膨らませる。

どんな人が来るのだろう、仲良く出来たら良いな、などと言った期待。そして恐い人だったらどうしようといった不安である。

かつて聖女として祭り上げられていた少女には有り得ない程に人間染みていて、実に年相応の反応と言えるだろう。

そして周りの級友は更にヒートアップしていく。

「どんな人が来るのか知ってる？」

「いや、聞いてないわ。でも、やっぱり男の子がいいなあ、格好良いの」

「そうよね、ウチには碌な男子がいらないから」

自分達の希望を口々にする級友。

期待に胸を膨らませるその様子は実に年頃の少女らしく、それでいて遠慮がない。

特に後半の部分を言った生徒が目を向けた先には机で眠る一誠、そして少し離れた所で周りの女子達が退いていることも気にせずには談を繰り広げる元浜と松田の通称『変態ツインズ』。

その発言に賛同するかのうように周りの女生徒達も頷くが、アーシアだけはそうではない。

「そ、そんなことありません！ イッセーさんは凄く素敵な人です！」
周りの意見を否定すべく、興奮に顔を赤く染めながら力の限り反論をするアーシア。

そんなアーシアの反応を見て、級友達はイタズラをする子供の様な顔をしてアーシアの言葉を返す。

「そう？　確かに兵藤くんってあの馬鹿二人に比べれば害はないけど、それでも全然目立たないじゃない。それに機嫌悪いのか、たまに物言いがぶつきらぼうになることがあるし」

「確かにイツセーさんは少し不器用な人ですけど、それでもとつても優しくて一生懸命な人なんです！　それに家族には凄く優しく笑いかけてくれますし」

言われた言葉に一生懸命に返すアーシア。

勿論周りの級友達も本当に一誠のことを馬鹿になどしていない。

言っていること自体は本音だが、それだけのことであつて邪険には思っていない。

なのに何故こうもアーシアを煽るようなことを言ったのかと言えば、言われて一生懸命に反応するアーシアが可愛いものだから見て弄くり回したい、そんな感情からである。詰まるところ、彼女達の中で既にアーシアは弄られキャラのポジションが決まっているというわけだ。

そのことをアーシアは勿論理解はしているのだが、それでも一誠のことを引き合いに出されると分かつてはいても我慢出来ないのだ。

そして弄くられる度に真っ赤になって恥じらうアーシアを見て、周りの女生徒は皆和みながらも賑やかに会話に花を咲かせていくのであつた。

そんな女子達と違い、先程指された男子である元浜と松田は妙にテンション高めに会話に熱を入れていく。

その内容は女子達と同じ転入生についてだが、それは女子達以上に欲望にまみれている。

曰く、凄いスタイル抜群の美女が転入してこないかな、といった感じのことから、その美女の転入生に思春期丸出しな欲望をぶつけたいなど。

女子が殆どのクラス内でそのような話をすれば当然退かれることは必須。それは誰が見たって分かることなのに、それでも恋人が欲しいなどと戯れ言を口に出来るこの二人はある意味大物なのかも知れない。

そんな話を一誠は眠気で薄れつつある意識で聞くが、全くと言って興味など湧かなかった。

今の彼はそれどころではなかったから。その心はただ、ある男と戦いたいということ一杯になっているのであった。

そんな一誠を差し置いて時間は進み、担任教師が教室に入ると生徒達に緊張が走る。

その胸中にあるのは勿論、その新しく来るであろう転入生についてだ。

それが担任にも伝わってくるのか、苦笑を浮かべる担任。

そんな担任にアーシアは苦笑してしまいが、自分も同じようなことが気になっている身としては何も言えない。

そして担任は皆の待ち望んでいるであろう言葉を口にした。

「この様子だともう皆知ってるだろうけど、このクラスに転入生が来る」

それを聞くと共に盛り上がりを見せる生徒達。

分かつてはいることだが、直に教師から聞かされれば確実になるからであり、若者達は皆確定したことを喜ぶ。

その賑やかとも騒がしいとも言わべき騒々しさに一誠は更に身体を丸めた。

いくら短気の一誠だろうと、力の使い所というのは分かっている。故にいくらこの五月蠅さに青筋を立てようとも、何とか堪えて飲み込むことにした。

自分達がそんな危険な獣を前にしているとは思えない生徒達はさらにはしやぎ、その様子に担任が静まるよう注意を促す。

そして少し収まりを見せたところで、やっと担任が廊下にいるであろう転入生に声をかけた。

「それじゃ入って来てくれ」

『はい』

担任の声に返事を返すと共に開く扉。

そしてその扉から入って来たのは……女生徒であった。

短い青髪に緑色のメッシュの入った少々独特な髪色の頭をし、制

服越しにでも分かるメリハリのある女性らしい身体。

その表情はクールな印象を与え、可愛いと言うよりも美しいや格好良いという印象を与えていた。

その少女の姿に皆息を飲む。

凜々しい美しさに皆見入ってしまったからだ。

だが、それとは別の感情を浮かび上がらせている者がいた。

それは……アーシアであった。

アーシアが浮かべている感情、それは驚きである。

何故なら、彼女はその少女の事を知っているから。

それは向こうから見ても察せられたのか、その転入生は周りに聞こえるように少し大きく、それでいて良く通る声で自己紹介を始めた。

「ゼノヴィア・クアルタと言う。あまりこういういったことに慣れていないため、上手く紹介出来ないことを許して欲しい。こんな私だが、どうかよろしく頼む」

その表情に違わないクールな物言い。

それを聞いた途端、再びクラス中が湧いた。

女子が、それもスタイル抜群の美少女が来たことでテンションの上限が超えた元浜と松田は勿論、同性でありながら格好良いと女子達も騒ぐ。

それを担任は仕方ないなあと言った様子を見せながら静まるよう言うのだが、そう簡単には静まる気配を見せない。

その喧噪の中、アーシアは驚きを隠せず、一誠の苛立ちは深まるばかり。

それでも耐えた一誠は称賛に値するだろう。その身から沸き上がる苛立ちを滲ませつつもぶつけなかったのだから。

もしぶつけたのなら、この教室は一撃で吹き飛んでいることだろう。

そんな危険な状態に晒されているとは露程も知らない生徒達は何とか落ち着き始める。

それが彼女、ゼノヴィアには歓迎されているように見えたのだろう。ゼノヴィアは嬉しそうに微笑みながら担任に促され、自分の席に

付いた。

アーシアが驚いたのは無理もない。

何故なら、その少女は本来ならば学生などやっている者ではない。

彼女こそ、アーシアが少し前に出会った教会の戦士ゼノヴィア・クアルタなのだから。

突如クラスに転入してきたゼノヴィア。

そのことに驚きを隠せないアーシアであったが、それでも同時に喜ばしくもなった。

彼女とは少しばかり『仲違い』をしてしまっているが、それでもこれからは友人として仲良く出来ると思えるから。

そんな期待を胸に秘めるアーシア。そんなアーシアにゼノヴィアは休み時間に入ると同時に話しかけて来た。

「その……今少し良いだろうか？」

「は、はい！」

ゼノヴィアに話しかけられて声上がるアーシア。

その様子に少し困った様子を見せるゼノヴィアだが、取りあえずはアーシアから許可を得たと判断したゼノヴィアはアーシアに席を立て貰い、教室から一緒に出て行くことに。

そして人気のない場所まで来ると、二人は相対する。

真正面から見られ、少しばかり緊張するアーシア。そんなアーシアに対しゼノヴィアは……。

「あの時はその……すまなかった」

頭を下げて謝ってきた。

そのことに驚き、アーシアは慌ててしまう。

「あの、その、えっと！……あ、謝られるようなことなんてないですよ、私」

覚えもないのに謝られ、どうして良いか困惑するアーシア。

そんなアーシアにゼノヴィアは真剣な表情で顔を上げつつ、何故謝るのかをより正確に話し始めた。

それは一誠の部屋に泊まった時に言った自分の発言の事。アーシ

アを不敬な魔女と罵り蔑んだあの発言である。

あの時はそれが当たり前だと思っていた。

神の信徒として、それが当然だと。

一誠に言い負かされた時は悔しくて仕方なかったが、それはその分自分が信じていたからだ。

「別にそんな謝るようなことじゃないですよ。その、主を信じる人ならそう思うのも無理もない話ですし」

「いや、そんなことはない。主を信じていようが、それで人を傷付けて良い訳がなかったんだ。あの時の私は人として当たり前のことですから、分かっているいなかった。無知で愚かだった。そんなことにすら気付かなかったんだから」

だが、それは違う。

ゼノヴィアは知ってしまったから。

今まで自分が信じていたものが『嘘』だったのだと。

そんな嘘を信じ続け、そのせいでアーシアを傷付けたとゼノヴィアは凄く後悔した。

知ってはならないことを知り、それ故に教会を追放された。

その際にゼノヴィアに向けられた視線。その冷ややかで冷酷な蔑みと侮辱の籠もった視線を受けて、彼女は思い知ったのだ。

如何に自分が酷い事をしてきたのかということ。

だからこそ、ゼノヴィアは謝りたかったのだ。アーシアという、同じように追放された者に。

その遅すぎる謝罪、そしてゼノヴィアの真剣な顔を見て、アーシアも真剣に受け止める。

だが、その表情は穏やかな笑みに包まれていた。

「そこまで仰るのですしたら、その謝罪と懺悔を聞き入れます。それだけ思い悩んで下さったことに寧ろ私の方が申し訳無い気持ちで一杯です。ゼノヴィアさんはただ、協会の人間として精一杯頑張っていたんですから。だから……これでお相手にしましょう。お友達になるのに、そんな負い目なんて持感じていてもいいことなんてありませんから。だから、これからはお友達として仲良くして下さると嬉しいで

す」

「アーシア………」

朗らかにそう言うアーシア。

その言葉にゼノヴィアは救われたように感じた。

自分はあるなに酷い事を言ったというのに、彼女はそれを受け止め、その上で禍根を流して仲良くしようと言ってきた。

その器の広さを改めて感じさせられたゼノヴィアは改めてアーシアに感謝する。

そして如何に自分が愚かだったのかを思い出すが、それに捕らわれぬように気を付けた。

そんなゼノヴィアを見てアーシアは微笑むと、改めてゼノヴィアに手を差し出す。

「ですから……これからもうよろしくお願いします、ゼノヴィアさん！」差し出された手を見て、ゼノヴィアは救われたような気分になる。

そして同時に、これから仲良く付き合っていくであろう友人の求めに応じて彼女も又笑顔でその手を取った。

「ああ、よろしく頼む、アーシア」

「はいー」

互いに握手し合い、笑い合う少女達。

この二人の間には、もう蟠りはなくなっていた。

そして時間が過ぎ、放課後に。

いつもは一誠と一緒に帰っているアーシアだが、この日は仕事が入ったことにより一誠は久遠と共に先に帰った。

だからと言うわけではないが、アーシアはゼノヴィアと一緒に帰ることにする。

本当ならば『部活動』に出ているはずゼノヴィアだが、この街に不慣れということもあって街の案内を買って出たアーシアの厚意を受けけることにした。

その事情を携帯に四苦八苦しながら『部長』に伝えた所、さっそく友人ができたのだから寧ろそうするべきだと言われた。

彼の魔王の妹は身内に慈愛深く、青春を推奨する性格だからだろう。その事をゼノヴィアに説明する様子はきつと姉か母親のような顔をしていたに違いない。

そんな慈愛に満ちた部長からの許可も得たことで、アーシアとゼノヴィアは一緒に下校し始めた。

そして帰りながら街の案内をするアーシア。

その様子は心の底から楽しんでいるようで、そんな笑顔を向けられるゼノヴィアもまた、教えて貰えることに感謝すると共に楽しんでいった。

ゼノヴィアは前では任務もあつて気にも留めなかったが、今は見るもの全てが珍しく輝いて見える。

その興味深そうな様子はアーシアにも伝わり、案内して良かったと彼女もまた喜んでいった。

その案内の殆どは一誠や久遠と一緒に廻った所ばかりなのはご愛敬である。

そして日もすっかりと沈み始め、夕暮れが辺りを照らし始める。

そんな黄昏時の中、アーシアとゼノヴィアは公園のベンチに座り身体を休めていた。

元から体力があるゼノヴィアは兎も角、あまり体力の無いアーシアはハシヤギすぎて疲れたらしい。

人気が無くなった公園で二人、案内した所についての会話で盛り上がりを見せる。

そのことに、楽しいと二人とも感じていた。

それは一誠達と一緒にいるのとはまた違った、同世代の同性の友人との触れ合い故である。やはりそういったところは男と女では違うものだろう。

だが、そんな楽しさの中に、ゼノヴィアはある気がかりがあつた。別に不満などない。

初めての学園生活で暖かく迎えて貰え、そしてアーシアに心から許して貰いこのように親しくさせて貰っている。こんなに暖かく迎えてもらえて不満など出るはずがない。

では何なのか？

それは、彼女の今の状態にある。

ゼノヴィアという少女はもう敬虔な信徒ではない。

いや、今でも主への心は変わってはいないが、その身体はそれとは真逆。その肉体は主の敵である悪魔へと変貌していた。

コカビエルとの戦いの際に聞かされたとある重要なこと。それを聞かされた彼女は己の存在意義が崩壊しかけた。

それまで信じていたことが全て覆り、何もかもが信じられなくなった。

だからこそ、何も出来なくなってしまう。

信じたくなどなかった。ただ堕天使が言った戯れ言だと思いたかった。

だからこそ、彼女は教会にその疑惑を突き付けたが、結果はアーシアが遭ったことと同じような扱い。

迫害され蔑まれながら教会を追放された。

それが彼女に伝える……その戯れ言が真実だということ。

それまで信じてきたもの全てに裏切られたゼノヴィアは、もうどうして良いのか分からなかった。そのまま自殺しても可笑しくない精神状態であったが、そんな状態でも自然と身体は動き、半ば無意識にこの駒王町へと戻ってきた。

当時は何故戻ってきたのか分からなかったが、今のゼノヴィアになら少しはわかる。この町は、彼女が初めて年相応に友人と過ごした所だから。任務とはいえこの地にイリナと来て、失敗しては騒いで……今まで教会で過ごしてきたのとはまったく違う時間を過ごした場所だから。

それが今にしてみれば楽しかったのだろう。その残滓を少しでも感じたいと街中を歩いていた所を『部長』に見つかり、そして声をかけられた。

信徒としては嫌うべき敵である悪魔だが、もう何も信じられない彼女は部長に対して特に何かを感じるということとはなかった。ただ、空虚な気持ちに胸を支配していた。

それを察してか、部長はゼノヴィアを学園の部室へと連れて行く。そしてそこでゼノヴィアの話聞き、彼女に一つの道を示した。それが部長の眷属への転生。そしてこの学園で普通の学生として青春を謳歌しないかという提案。

何も信じられないゼノヴィアにその提案は甘美に聞こえた。

もう信じられないものに縛られる理由はなく、聖剣を持っているが故に今まで味方だった教会には命を狙われることはわかりきっている。そんな状態に後ろ盾を得られるのは実に喜ばしいことだ。悪魔となれば、教会も易々とは手出し出来ない。だがそれ以上に心惹かれたのは、普通の生活、年相応の青春を送れるということであった。それは彼女がこの町に来て初めて知った、暖かな願いだから。

それを聞き、彼女はその提案を承諾。今はこの地を総べる悪魔『リアス・グレモリー』の眷属となったわけだ。

そのことは通常の人間に言うべき事ではない。

だが、アーシアに限ってはそうではない。

彼女はゼノヴィアと同じように他の勢力に身を寄せているということもあるし、彼女自身がすでに半分ほどこちら側に浸かっている。既に気配で察しているのかもしれないが、それでも……ゼノヴィアはアーシアに隠し事をしたくなかった。

だからこそ、この楽しい時間を打ち切り彼女はアーシアに真面目な顔を向けた。

「その……アーシアに聞いて貰いたいことがあるんだ」

その言葉にアーシアは静かに頷く。

どうやらアーシアも何かしら察しているようだ。この心優しい少女は人の心の機微を感じる感受性が強い。故に何かゼノヴィアが言いたそうにしていると分かっていたのだ。

アーシアの顔を見て決意を固めたゼノヴィアは、そのまま告白する。

「私はもう……敬虔な信徒ではないんだ……。その……この身は悪魔へと転生した……」

「……………そうですか」

必死に告げるゼノヴィアにアーシアは静かに返事を返す。

その静かな空気にゼノヴィアに恐怖が走り始める。人間止めて異形になったなどと、嫌われたのではないかと。

だが、それでも言わずにはいられなかった。自分の事情を知っているアーシアには聞いて欲しかったから。

そのままゼノヴィアはアーシアに何故学園に転入してきたのか、何故悪魔になったのかを小さな声で途切れ途切れになりつつも語り始める。

その中には勿論、触れてはならない禁忌も入っていた。

これは言うべきでは無い。だが、それでも……ゼノヴィアは聞きたかった。自分とは違うアーシアの意見を。

既に追放された身なので、今更それを知ったところで何かあるというわけではない。だからこそである

「アーシア、君は知っていたか……主がもういないことを」

自分は新しく出来た友人に酷い事をしているとゼノヴィアは思う。

アーシアも追放されたとはいえ敬虔な信徒だ。そんな信徒に向かって神の不在を言うなど、自分がされたように全てが信じられなくなってしまうかもしれない。

それでも、彼女は知りたかった。アーシアが出す答えを。

それに対しアーシアは多少は驚きを見せるも、特に取り乱した様子もなくゼノヴィアを見つめ返す。

「そうですか……確かにそれは驚きました。でも……聞いてもそこまです驚かない自分がいて不思議な感じがします」

「っ!? き、君は今、この世界が秘匿している禁忌を知ったのだぞ！

敬虔な信徒ならば、誰もが我を失う程に衝撃的な事実を。なのに何故、そんなに取り乱さずに居られるんだ！ 今まで信じてきたものがすべて嘘だったのに！ 何故だ！」

アーシアの答えにゼノヴィアは逆の意味で驚いた。

前回会った時もそうだったが、アーシアは追放されてもまだ敬虔な信徒であった。

だというのに、この取り乱さない様子は信徒として可笑しい。

そんな様子を見せるアーシアはゼノヴィアを見つめながら少し笑う。

「自分でも驚いてはいるんですが、そこまでショックではないんですよ。たぶん、これもイツセーさんの御蔭かも知れません」

「赤龍帝の御蔭……」

そこで思い出すのは、コカビエル相手に全く退かず、寧ろ押し切ろうとするほどの戦闘力を見せつける一誠の姿。それがゼノヴィアの脳裏に過ぎった。

確かにあの戦闘能力は凄まじいが、それがどうしてアーシアに関わるのだろうか。

そんなことを考えているのがバレてしまっているのだろう。アーシアは苦笑を浮かべつつも懐かしそうに話し始める。

「イツセーさんによく言われたんです。いるかも知らない主にすべてを感謝するなど。でも、イツセーさんはこう言うんです。別に信じるなどは言わないし、祈ることを止めるとも言わないと。その言葉を聞きながら生活してきて、私、分かったんです。全てを主に感謝するのは、それをしてくれた人達に失礼で、信じることは自由ですけど、それを人に押しつけるのは傲慢だって。だからでしょうか……主がいらないと聞いても、そこまで驚きが湧いてこないんです。私にとって主とは信じたいものであって、その実体というのは必要ないんじゃないかと。イツセーさんが私にこうも言うてくれたんですよ。信じるのは個人の自由で、それは心の支えになるものだから止める必要はないって。だから、私は思うんです。主はその信じる人の心におわすものだって」

それを聞いてゼノヴィアは何となく納得した。

主は人々の心の中にいる。

確かにその通りだろう。実際に姿形を見たこともない存在を信じるというのは、そう言うことなのかも知れない。その存在の有無は関係無く、信じるからこそあるのだと。

それが人々の心を支える柱となる。

昔なら真っ先に否定していたが、今のゼノヴィアになら理解出来

た。

だからこそ、同時にアーシアに感動と感心を抱く。

「アーシアは強いな。私は何も信じられなくて自暴自棄になったというのに」

「そんなことないですよ。私もきつと、イツセーさんに合わなかったら同じように自暴自棄になっていたのかもしれないから」

褒められて恥ずかしそうにするアーシア。

そんなアーシアを素直に尊敬するとともに、ゼノヴィアの胸はスツキリとしていた。求めていた以上の答えを聞けて、彼女も又救われたのだ。

「すまないな。こんなことを聞かせてしまつて」

「いいえ、いいんですよ。それでゼノヴィアさんの心が軽くなるのなら、私はいくらでも聞きます」

夕暮れの中、笑い合う二人。

ゼノヴィアは笑顔を向けるアーシアを見ながら改めて思った。

信仰心など関係無く、彼女は『聖女』なのだ。

人の心を救えるのは、同じく優しい心をもった存在なのだ。

だからこそ思う。アーシアとならとても仲良くなれる、唯一無二の親友になれると。

そして二人は明日また会うことを約束しながら帰路へと付いた。

こうして二人は友人となり、翌日も仲良く過ごしている。

これが一誠がヴァーリとの再戦に闘志を燃え滾らせている間に起こった、アーシア的一幕である。

尚、一誠が参加を決めた後日、アーシアも会談参加するようアザゼルから連絡が来た。

理由は一誠と交友がある事と神器、そして彼女の今の立場故に来てもらいたいからであると。

それは偏に、その会談で何かあることを臭わせていた。

38話 彼の待ち望む時は近い

時間は進み、駒王学園は全校生徒の公開授業が行われることになった。

簡単に言えば保護者を呼んでの授業参観である。

それが全校生徒規模で行われるため、学園にやってくる保護者の数もかなり多くなり学園内は一種のお祭り騒ぎへと発展していた。

そのため生徒達は嬉し恥ずかしい思いをすることになるわけだが、それにまったく無関係な者達もいる。

それは親がいない者。つまり、一誠やアジア、それに久遠といった者達である。

勿論一誠は保護者がいないわけではない。

この学園に入るときは勿論、ボロいとはいえアパートの一室を借りるのには当然保護者が必要不可欠。その手続きをしてくれたのは、彼が幼少の時から世話になっている孤児院『白夜園』の園長である。

一誠は口には出さないが園長に感謝しているし、園長もそんな一誠のことを理解してくれている。一誠は本当の親と同様に園長のことを思っているのだ。

だが、そうだからといって一誠は園長にこの公開授業の事を伝えてはいない。

別に自分が伝えなくてもアジアから伝わるかもしれない。そうでなくても、園長は常に忙しい身だ。手間をかけさせたくないという気持ちもある。それ以外にも、ほぼ授業をサボっていることがバレるのが面倒だということもあった。

様々な思いがあるが、何よりも珍しく思春期らしい『保護者に見られたくない』というのがあった。

きつと園長もそのことは察してくれているだろう。

だからこそ、一誠は此度の公開授業を気にすることはなかった。

そんな事よりも、一誠は気になって仕方ないことがある。

それは……この行事が終わった後であるであろう、三大勢力の会談。

正確に言えば、その会談で行われるであろう宿敵との喧嘩の日程決

めである。

待ちに待ったこの時がやつと目の前まで来ているのだ。

そのことが喜びを呼び、より一誠を昂ぶらせる。

場所はこの学園で行われると言うことは伝えられているので、特に遠出をするというわけでは無い。

だが、それでも彼は待ち遠しさに心を焦がす。

それは遠足を待ち望む子供の様に無邪気な感情であり、同時に闘争心を丸出しにした殺し合いという喧嘩が出来るという黒い喜びでもあった。

その感情に暗い笑みを浮かべながら一誠は待ち続ける……その時が来るのを。

そのように意識が他に向いていたため、一誠は英語の授業だというのに渡された紙粘土で何かを作れと言われたのに何も作ることが出来なかった。

アーシアがアニメで有名な電気ネズミを一生懸命作っている中、教師に聞かれた一誠は気まずそうに何も手を加えていない紙粘土を指してこう言った。

「こいつは……豆腐だよ」

そういう以外、彼は答えられる答えが無かった。

仕方ないだろう。今の一誠は……。

ただ目の前にある戦いに夢中なのだから。

公開授業も特に問題無く終わりを迎える。

何やら体育館で騒ぎがあったようだが、それを一誠が気にすることは無い。

アーシアや久遠と一緒に廊下を歩いていた所、向かいから歩いて来る紅い髪の男がにこやかな笑みを浮かべて話しかけた。

「やあ、赤腕。直接こうして顔を合わせるのはリアスの結婚騒動の日以来かな」

落ち着いたしつかりとした雰囲気と渋い声、そして誰もが注目する眉目秀麗な姿はその場にいる全ての人達の注目が集まる。

その男に話しかけられた三人はそれぞれ反応を見せた。

「どうも、毎度お世話になってます」

久遠は営業スマイルを浮かべて男に挨拶し、アーシアは見知らない男に話しかけられて慌てる。

そして一誠は普段の生活では浮かべない、闘気の籠もった笑みを返した。

「よお、元気そうだな。相変わらずで何よりだよ……サーゼクス・ルシファー」

その名を聞いてアーシアに驚きが走る。

「え、そんなっ、え、ええっ!？」

驚くのも無理は無いだろう。まさか以前楽しく会話までした魔王が、このような人物だとは思わなかったのだから。

もう以前ほどの恐怖や畏れは抱いていないが、それでも驚く。

魔王と言えば魔の者達を総べる王。それは絶大な力を持ち、王としての威厳に満ちあふれた姿を想像するものだ。

だが、実際に見た魔王はそうではなかった。

王と呼ぶには若く、威厳はあるが厳しそうな感じは受けず、寧ろ優しそうであった。

魔王と言うよりも好青年といった印象……それがアーシアがサーゼクスを見た印象であった。正直、魔王とはとても見えない。王子様の方が似合いそうな気もするくらいである。

そんな驚くアーシアを見て、サーゼクスは優しい笑みしながらアーシアに話しかけた。

「直接こうして会うのは初めてだね。初めまして、アーシア・アルジェント。私はサーゼクス・ルシファーと言う」

「ひゃ、ひゃいッ!？」

話しかけられた尚驚くアーシア。

その頭の中は何故自分の名前を知っているのかなど、色々な疑問が過ぎるが混乱していてそれどころではない。

そんな様子は傍から見れば微笑ましいものに見えるのかも知れない。

だからなのか、サーゼクスはまるで幼い子供を見るような目でアジアを見ていた。

まあ、永遠に近い時を生きる悪魔にとってみれば、人間など誰しも子供にしか見えないのだが。

「君のことは此方の業界では有名だからね。その名は皆に知れ渡っているよ」

「そ、そうなんですか……そ、そう言われると恥ずかしいです……」

皆に知られていると聞いて恥ずかしくなり顔を真っ赤にするアジア。そんな様子に笑うサーゼクス。とても魔王の会話とは思えない程に穏やかな空気が流れる。

そのまま穏やかな時間を過ごすというのも悪くは無いだろう。

だが、それで満足するほど一誠は緩くはない。

「挨拶は済んだか？　だったらそろそろ本題にいきましょう」

燻っていることもあつてか、多少口調が荒い一誠。

そんな一誠に久遠は釘を刺す。

「お前は少し急ぎすぎだったの。こういうときは世間話で互いの緊張を解してから入るもんだよ。お前さんみたいな脳筋じゃあそんなことも考えられねえんだろうけどよ」

「うるせえっ」

大人らしい対応を取る久遠に言われ文句を言いつつも一誠は退く。

その様子が子供らしく感じたのか、それまで混乱していたアジアはへそを曲げる一誠を見て少し落ち着きを取り戻した。

そして改めてサーゼクスに名乗り丁寧にお辞儀をする。

両者とも決して悪く無い接触と言えるだろう。魔王と元聖女のやり取りとしては如何な物だと思われるだろうが。

そしてその輪に久遠も加わり、世間話に興じる。

「魔王様はどうしてここに？　まだ会談の日ではないはずだと思いますが？」

そう問いかける久遠だが、その笑みは既にその理由を知っている。それは久遠にかかわらず、一誠であつても察せられることであつた。確かに目の前にいるのは今の冥界を収める四大魔王の一角、悪魔達

のトップ。

だが、そうであると同時に妹が大好きという困ったシスコンでもあるのだ。

そんなシスコンが妹が通う学園で公開授業が行われるというのだから、黙っているわけが無い。つまり妹のリアス・グレモリーの保護者として公開授業に参加してきたわけだ。

そして予想通り、サーゼクスは実に良い笑顔で答えた。

「今日は公開授業だろう。常日頃、リアスがどのように学園生活を送っているのかを見れるチャンスだからね。保護者として見に来たんだよ。後は会談の下見も兼ねてね」

「やはりそうでしたか。魔王様ならこの機会、逃すはずが無いと思っていましたよ」

「勿論だ。私が大切なリーアさんの活躍を見逃す訳が無い」

言葉を崩し、平然とシスコンだと言って憚らないサーゼクス。

そんなサーゼクスに久遠は苦笑を浮かべ、一誠は呆れ返る。

誰だつてそんな話を聞かせればそうなるだろう。これで結婚出来たというのだから驚きものだ。

だが、同時にちゃんとやるべき事もやっているの、多少は目を瞑っても良いのかも知れない。

サーゼクスは楽しそうにリアスの様子を語り、それを聞いたアーシアは家族思いだとサーゼクスを素直に尊敬していた。どうやら妹のことを熱く語る魔王をより親密に感じたようだ。

まだまだ世間知らずな少女には、シスコンという行きすぎた愛情を理解することは出来ないらしい。

アーシアや久遠との会話でより朗らかになったサーゼクスは一誠の方を向くと、表情を改める。

それはこれから話す内容が真面目な事であることが窺える顔であり、一誠の表情もまた呆れ顔から変わる。

「ふむ。そろそろ本題と行こうか。勿論、リーアさんのことも本題だが。赤腕、君には依頼した通り明後日の16時頃、場所はこの学園の理事長室に来てもらいたい。そこで会談を行うから、君はコカビエル

と戦った時の事を話してくれるだけでいい。悪魔側からは私とセラ
フォル・レヴィアタンの二人が。堕天使はアザゼルとその付き人が
来るそうだよ。そして天界はミカエル殿が来ると言ってきたいる」

「へえ、改めて聞くと随分とした盛大なメンバーですね」

「ミカエル様が……」

参加するメンバーを聞いて久遠は感心する。

間違いなくトップ会談と言う名の通りであろう。現代の世界を回
すトップの者達が参加してくるのだから。

アーシアは大天使の名を聞いて驚いているようだ。

「まあ、だからといって緊張する必要は無い。とくに赤腕はそのよう
なことはしないだろう。君はそういうのにへりくだったりするよう
な者ではないからね」

「まあな」

苦笑しつつそう言うサーゼクスに一誠は当たり前だと答える。

いくら世界を回す異形のトップ達が居ようと、この男がそれに敬
意を払うことは無い。一誠にとって、邪魔しなければ相手にしない。
そんな風にしか思っていないものだから。

そして更にサーゼクスは会談について話そうとするも、その後から
大きな声がかかれ振り返った。

「ああ、ここにいたわ、お兄様！　あまり出歩かないで下さい！　いく
ら領地とはいえ魔王がそうそう手軽く出歩かないでいただきたいわ
！　もし何かあつてからでは遅いんですから」

「おや、どうやらリーアたんに見つかってしまったようだ」

若干怒り気味に歩いて来たリアス・グレモリーを見てサーゼクスは
嬉しそうに笑う。

そしてリアスは愛称をたん付けで呼ばれたこと恥ずかしくなり、顔
を真っ赤にしてサーゼクスを引っ張り始めた。

「こんなところで油を売っていないでもう行きますよ。グレイフィア
を待たせてしまっているのだから」

一誠達に聞かれたこともあつて恥ずかしさから逃げるようにサー
ゼクスを引っ張るリアス。

サーゼクスはそんなリアスもまた可愛いと喜びながら一誠に声をかけた。

「すまないがここまでだ。当日はよろしく頼むよ、イツセーくん」
そう言い残してサーゼクスはリアスに連れ去れた。

その姿を見て呆れ返る一誠と久遠。アーシアは兄妹の良さに微笑ましい笑顔を向けていた。

馬鹿らしい一面。

だが、それでも……。

一誠の待ち望む時は確実に近づいて行く。

39話 彼は会談に参加する。

公開授業と言う名の茶番も無事に過ぎ去り二日が経った。

この日、この時間、この駒王学園の理事長室は異常な空気に包まれていた。

一般の生徒にはまったく感じられないであろうものだが、それを知っている者ならば全身から冷や汗を掻くくらい、その空気は重圧である。

それもそのはずだ。現在、この部屋には悪魔、堕天使、天使の三大勢力のトップが集結しているのだから。

魔界の王たる魔王二人、それに聖書に名を残す程に有名な堕天使と天使。

そのような大物が集結している場所が普通の空気になるわけがない。

その空気の大本である彼等もこの雰囲気を感じ取っているのだろう。その表情にリラックスしたような様子は無い。

仮にも過去は互いに争い合っていた種族達。戦意は無くとも、そう簡単に打ち解けられるものではない。

と言っても、それはあくまでも天界と各陣の勢力の者達のみで、悪魔と堕天使……正確に言えば魔王サーゼクス・ルシファーとアザゼルの二人はそんな様子はあまり無かった。

「そういやこの間のアレ、どうしたんだよサーゼクス。上さんに怒られるって焦ってたろ」

気安く魔王に話しかける堕天使の総督。

その様子にその場にいた悪魔達……リアスやその眷属、それに生徒会であるソーナとその眷属達は表情を顰める。

彼等からすれば不敬だと叫びたい所だろう。だが、この会談の場で始まってはいないとは言え不用意な発言はするべきではないと判断し言わないことにする。

気安く話しかけられたサーゼクスはというと、特に気にした様子もなく苦笑を浮かべながらその問いに答えていた。

「いやあ、結局バレてしまつて怒られてしまつたよ」

周りの者達は知らないが、二人はとある店でそれなりに会話をする仲である。

だからこそ、気軽に話し合う二人を見て周りは驚きを隠せずにいた。

それで多少は緊張が解れるかと言えば、そうでもない。

ここが彼のラーメン屋であるのなら、サーゼクスもアザゼルも自分の立場など気にせずに寛いでいただろう。

だが、二人ともここに來たのは遊びでは無い。

これからの三大勢力についてを決める重大な会談をしにきたのだから。多少はやはり緊張するのであった。

そのような緊張渦巻く室内、周りがピリピリとしている中で一人、目を瞑り静かにしているヴァーリがそこにいた。

この会談にはアザゼルの付き人として参加しているヴァーリだが、その胸中は正直会談などどうでもよかった。

彼が望むのはただ一つ。

彼の宿敵との殺し合いを合法的にして貰うことのみ。

それさえ成せれば、後のことはどうでも良いのだ。もしこの提案が認められなかったのなら、ヴァーリは無理矢理にでも宿敵と戦うつもりでいた。

それに丁度良い『誘い』も来ているので、アザゼル達を裏切るのは多少気が引けなくもないが、悪くないと思っている。

その事を考えながら静かにしていると、やつとこの場の全員が待ち望んでいた人物達がこの部屋にやってきた。

扉が開く理事長室。その扉の奥からやってきたのは、この学園の制服を着た男子二人と女子一人。

女子は美しい金髪をした可愛らしい少女であり、この場に入る前から緊張していたことが窺えるくらい萎縮していた。

対して男子の二人からは緊張した様子はまったくくない。

片方は黒髪をしたどこにでもいそうな明らかに目立たない男子。彼は人に受けそうな笑みを浮かべ、入り次第社交的な挨拶を周りにし

ていく。

そしてもう片方の男子、茶髪をした気だるそうな男子は面倒臭そうな感じにノロノロと部屋に入って来た。

それを見たりアス達は驚きに目を？いた。

彼等人間に魔王達に挨拶をしないのは不敬などと言うつもりはないが、だからといってここまで緊張感がないのは如何なものなのかと。

そんな人間達……アーシア・アルジェント、久遠、それに兵藤 一誠にむかつてサーゼクスとアザゼルが軽く話しかけた。

「やあ、赤腕。来てくれて何よりだよ。それにアーシア・アルジェントと久遠くんもね」

「その割りには遅刻してるけどなあ」

一誠達が来たことに歓迎の意を表すサーゼクス。それに対し、アザゼルは一誠達が10分ほど遅れて来たことをからかう。

そう言われアーシアは顔を真っ青にして可哀想なくらいに謝罪をしながら頭を下げるが、一誠達はそうならない。

久遠は笑顔のまま謝るが、一誠に至っては謝る気などなさそうであつた。

「そう思うんだつたら掃除なんてもんをやらせるんじゃないよ」

そう、一誠達がこの場に来るのに遅れた理由、それは教室の掃除が原因であつた。

学生足る者、放課後には多少なりとも校内清掃の義務が生じるものである。

そして運悪く、一誠達は教室の清掃をするよう当番が来てしまったというわけだ。

普段の一誠ならばまずサボるであろうものだが、今回の会談には一誠と久遠以外にも、もう一人参加する者がいる。

きっとこの学園でも随一の真面目な少女、アーシアが参加するのだ。

真面目な彼女が掃除をサボるなどということは絶対に無い。

だから彼女は一生懸命掃除をしていたのだが、このままではいつま

で経つても終わる気配が無い。だからこそ、しょうがなく一誠達も手伝えることなり、結果として遅れてしまったというわけだ。

それを聞いてサーゼクスは苦笑を浮かべる。

「それは申し訳ない。だが、学生はそう言うことをするのも学園生活の一環だからね」

「そんなもん、さつさと適当にすませりやあいいのによお。大方アーシア・アルジェントが真面目にやって放って置けなかったところか。あの赤腕がお優しいことで」

呆れ返りながらからかうアザゼルを一誠は一瞥する。その瞳にはうるせえよ、という意味が込められていた。苛立ちと照れ隠しの二つが入り交じり、一誠は何とも言えない表情を浮かべていた。

そしてその目は直ぐにヴァーリの方に向けられる。

それを受けてヴァーリもまた、目を開けて一誠と目を合わせた。

殺気こそ放つてはいないが、二人とも待ち望んだものが目の前にあると喜びに笑う。

その笑みを見てサーゼクスは口を開いた。

「では、せっかく揃ったのだから始めよう……会談を」

その声により、この世界を揺るがしかねない会談は始まった。

会談の話し合いは恙無く進んでいく。

話の大本は主に今回暴れ回ったコカビエルの真意。そして実際にコカビエルと戦った者達の報告を皆が聞いていく。

相対して見なければ分からないとも多く、それ故の報告である。

「……以上、私、リアス・グレモリーとその眷属の報告を終えます」
「私ソーナ・シトリーも彼女達の報告に偽りが無いことを証言致します」

リアス達が報告を終えると、その話を聞いていた各々は軽く頷く。だが、実の所それで何か変わったと言うことは無い。酷く言えば、リアス達はコカビエル自体には何も出来なかったただから。

協会の最初の任務であるエクスカリバーの奪還という点では確かに達成はされたが、その程度と言えなくも無いのは実情。

それはこの場に居る皆が分かっていることであり、報告しているリ
アスも内心恥じていた。

「ご苦労だった、下がってくれ。では次に赤腕、君の話を聞きたい。い
いかな？」

サーゼクスにそう話しかけられ、一誠は面倒臭そうに話し出す。

「報告もクソもねえと思うけどよお。あんたから依頼を受けて言っ
てみたら校庭でふんぞり返ってるコカビエルとその飼い犬相手に遊ん
でいる姫さんが居た。そんでもってコカビエルに喧嘩を売って殺し
合って、丁度良い所でそこでスカしてる奴に邪魔されたんだよ」

報告というのは正確に物事を使える事を言うのだが、一誠のそれは
報告というよりもただの文句であった。

やる気の無い声でそう言いつつヴァーリにジト目を向ける。

ヴァーリはその視線を受けて多少呆れた様子を見せていた。

それに気付いた周りの者達がざわめき始める。アザゼルの付き人
として来たこの男は何者なのかと。

それに対し、アザゼルは子供が新しく手に入れた玩具を自慢するか
のようにヴァーリの事を紹介し始めた。

「こいつの名はヴァーリ。ウチン所で世話してる『白龍皇』だ」

「「「「「ッ!」「「「「「」

その発言に驚くりアス達。

あの時彼女達は確かにヴァーリの姿を見たが、あれは神器を纏って
いた姿であり、生身は見たことが無かったのだ。それがまさか自分達
とそんな歳の変わらない青年だとは思わなかったのだろう。

ヴァーリはその紹介するアザゼルを見て苦笑する。

発言権があるわけでは無いが、ここで先に言わなければアザゼルの
立場も多少とは言え悪くなる可能性がある。そう判断し、一誠の報告
に被せる形でヴァーリも話し始める。

「此方は勝手に暴走しているコカビエルを連れ帰り組織で裁くために
出てきたんだ、アザゼルに命じられてな。そして暴れ回っている奴を
見つけたが、そこにいるイツセーとの戦いの末に決着が付きかけてい
た。あの戦いを見るに、敗者は絶対に死ぬ。そうなればこちら側も困

るので介入させて貰ったというわけだ」

ヴァーリの言葉も発言として認め、サーゼクスやミカエル達は報告を聞き終える事とする。

そして此度の騒動の大本たるコカビエルの上司に当たるアザゼルに問う。

「報告を聞く限り、君もそれなりに止めようとしたことも分からなくも無い。だが、それでも説明はして貰いたい」

サーゼクスの声にアザゼルは予想していたといった様子で返事を返す。

「まあ、そうなるだろうな。最初に言っておくが、悪かったとは思ってる。あの馬鹿のコントロールが出来なかったのはオレの落ち度だ。だが、そいつはヴァーリに命じてケジメは付けさせたつもりだ。流石にオレが直々に出るとサーゼクスは兎も角他の奴等から文句を言われるだろうからなあ。あの馬鹿は連れ帰った後にオレ等なりに裁判にかけてコキュートスの最下層に嚴重に封印の刑に処した。かなりかけたから一生掛かっても出られねえとは思うが……赤腕、お前さんとまた喧嘩するために出て来るって息巻いてたよ」

軽い冗談めいた発言にミカエルの眉が若干上がる。

「本当に悪いと思っているのなら、誠意を見せるべきだと私は思うのですが」

「そうカタツ苦しいこというなよ」

真面目にそういうミカエルにアザゼルは苦笑を浮かべつつそう言う。

それが癪に障ったのだろうか。ミカエルは言葉に棘を含ませつつもアザゼルに問う。

「つまり、今回のコカビエル暴走の件は勝手に暴走した部下が行った事、ということでしょうか。貴方の様子を見る限り、事前に知っていたのに放置していたような節が見られますが？」

「あいつが戦争をしたがっていたのは知ってるが、だからといって今の世でやろうとは思わなかったんだよ。それにオレは戦争なんて御免だ。そんなものに時間を割くくらいなら自分の好きなモンに時間

をかけたい」

それが本音だということをこの場に居る殆どの者達は疑うが、実際にアザゼルを知る一誠や久遠、ヴァーリやサーゼクスは納得する。

この男なら確かにそう言うだろうと。

アザゼルの本質は子供と変わらない。夢中になってるもの以外はやらない。

だからこそ、戦争など眼中に無いのだろう。

争うことが好きだと思われていることがそんなに心外なのか、アザゼルは深い溜息を吐くと共に周りを見渡す。

「オレは今の世って奴が好きなんだよ。やりたいことやって、ラーメン屋で知り合い相手に愚痴零しながら酒煽って、それなりに楽しくやってる。だからオレは戦争したくねえんだよ。まあ、もう面倒臭え！ とつとと結ぼうぜ……和平をよ」

これ以上の話し合いが面倒だとぼつさりと言い切るアザゼル。

それを聞いた周りには皆驚き目を見開くが、もともとそのつもりであること知っていた一誠や久遠、ヴァーリは驚かない。

そしてそれを察していたサーゼクスも笑みを浮かべながらそれに応じる。

「もう少し過程を踏みたかったのだがね」

「面倒だろ、一々小難しい建前ばっかり話してるのは。結局どの勢力だって望んでたろ。お互いに睨み当たって仕方ねえし、やり合うだけ種が減って存亡の危機が早まるだけだからよ」

「そう言われては形無しですけどね」

アザゼルの発言にミカエルが呆れつつも賛同の意を表す。

結局どの勢力も考えることは同じであり、いつまでも終わりの見えない、行っても自分達に明日の無い戦争などやりたいわけがないのである。

だからこそ、今回の一件で3つの勢力は皆和平を結ぼうと考えていたのだ。

「そもそも神と先代魔王が始めた戦争に付き合う理由はもうねえんだからよ。聖書の神も先代魔王達も死んだ。だが、神が居なくても世界

は廻るって奴だ。オレ等は生き残った責務として、世界を回していかねえとな。そのためには速く和平を結ぶのが手っ取り早い」

アザゼルの言葉にミカエルとサーゼクスが頷き返す。

各自思うことはあれど、行き着く先はそこになる。

自分達の種のために、世界のために自分達は何をすべきなのかということを。

そして結ばれる三大勢力の和平。

その歴史的瞬間に立ち会えたりアス達は感動のあまりに言葉を失っていた。アーシアも同様であり、無意識に涙を流している。

これにより会談は終わりとなるはずだが、その前に一つ、和平が決まった後に話さなくてはならないことがある。

アザゼルに向かってその事を直ぐに言うよう睨み付ける一誠とヴァーリ。

その視線を受けて仕方ない奴等だと呆れつつもアザゼルは周りに話しかける。

「さて、和平が決まった事でめでたいところ悪いが、出来れば直ぐに話し合わなきゃならない話がある」

「話し合わないといけない事ですか？」

「それは一体……」

不思議そうな顔をするミカエルにもしやと思ひ浮かぶことがあるのか顔を真面目な物に変えるサーゼクス。

二人の表情を見てアザゼルはニヤリと笑うと、その話を発表する。

「実はな……ウチのヴァーリと赤腕が殺り合いたんだよ。まあ、神器の宿命って奴もあるから分からなくもねえだろ。だが、そんなことを勝手にされたら困るのはオレ達三大勢力だ。流石にするなどは言えねえし、無理矢理にでも止めようとすれば、それこそ過去の戦争の再現になりかねん。そこでだ」

そこで一旦言葉を切ると、溜めを作って愉快そうにアザゼルは言った。

「オレ等でこいつ等の戦いをプロデュースするのはどうよ」

それを聞いた途端、周りは理解が出来ないのかポカンと口を開けて

しまう。

だが、理解したミカエルと元々考えていたサーゼクスはがアザゼルの言いたいことを皆に説明する。

「つまり貴方はこう言いたいのですね。両者が戦い合えば途轍もない被害が出る。それを此方で戦場を提供するなどして被害を極論減らす」と

「また、下手に敵に回せば危険極まりない二人の望みを叶えることによつて誰も傷付かないようにするというわけだね。確かに下手に勝手にされるよりも管理した方が有り難い。しないというのは……」

説明しながらサーゼクスは一誠とヴァーリに目を向けるが、すでに二人とも殺る気が漲っていた。それを見て無理だと悟る。

「無理のようだからね。確かに和平が成功した今の我等には重大な問題だ。その解決策としても申し分ない」

サーゼクスとミカエルの算段はもう付き始めている。

周りの者達から反対の声が上がるも、彼等はトップの言うことを聞くしか無い。

だからこそ、この場で新たに決まった赤龍帝と白龍皇の戦い。

それを発表しようとした瞬間、突如としてそれは訪れた。

「「「「「!?」」」」」」

まるで空気が固まったかのような感触が世界を満たしていく。

その感触に縛られたのか、理事長室内にいるリアスの眷属やソーナの眷属達が動きを止めた。

まるで時を止められたかのように。

その事実思い当たる節があったのか、サーゼクスはリアスの方に顔を向けて問う。

「リアス、今ギヤスパーは何処に？」

「今ギヤスパーはいつもと同じ部屋にいるわ、お兄様。あの子はまだ力の制御が不完全だからこの場に連れてくるわけにはいかなかったの」

その話を聞いてサーゼクスは確信する。

それと共に外には広大な結界が張られ、数え切れない程の転送魔方

陣が空を覆い次々に様々な者達を転送させていく。

「なつ、これは一体!？」

驚く者達を落ち着けるようにアザゼルがゆっくりとした様子で口を開く。

「こいつぁ……テロだよ」

「テロリスト……ですって?」

信じられないといった様子のリアスにアザゼルは笑いかける。

「どうも少し前からキナ臭い話を聞いてなぁ。三大勢力の和平を怖れてなのか、はみ出し者や危険分子ども集めてる奴らがいるって話だ。確か……『禍の団』だったか。そんな名前の奴らだよ」

それを聞いたリアス達は相手が如何に危険なのかを知る。

それと同時に自分の眷属がどうなっているのかを察した。

つまりこの空間が停止させられたかのようになっているのは、自分の眷属の神器を何かしらして暴走させた結果だということ。

敵の手に堕ちた眷属のことが心配で仕方なくなるリアスは取り乱しかけ、慌ててサーゼクスに話しかける。

「お兄様、もしかしてギヤスパーは!？」

「落ち着きなさい、リアス。少なくとも殺されてはいないだろう出なければこのように神器を発動させることは出来ない。たぶんだが、洗脳か何かしらされて神器を暴走させられているのだろう」

極めて冷静に勤めるサーゼクス。

その視線は外へと向いており、転送されている人物達を見て相手かどのような者達なのかを判断する。

「あの恰好は……魔女達か。それに悪魔やそれ以外にも……やれやれ。どうにもアザゼルの事は言えなさそうだね」

「お互いに一枚岩じゃねえってこつたなぁ」

からかうアザゼルに苦笑を浮かべるサーゼクス。

マイペースに話す二人に焦った様子で周りがどうするか話しかけていく。

特にこの場合は敵の狙いだということも合ってか、外から火力を集中させての集中砲火を浴びせられていた。

それを防ぐのはミカエルと共に来た天使達、そして久遠であった。
「攻撃は苦手だけど、防御は得意なんだよね、俺」

その術にソーナやリアスは驚く。

人間であるはずの、戦闘をしない久遠がどうしてこのような強固な結界を張れるのか？　それが彼女達を驚かせた。

それに対し聞けば、久遠は口元に人差し指をやってこう答える。

「企業秘密、だよ」

この緊急事態に何を言っているんだと突っ込みたくなるところだがそれどころでは無いのでリアス達は止めておく。結果として強固な結界に守られているこの部屋はそう簡単に傷付けはできないだろう。

だからこそ、少しでも状況を打破すべくリアスはサーゼクスに提案を出す。

それは自身の眷属であり、現在囚われ神器を暴走させられているギヤスパ―・ヴラディを助け出すというもの。そのためにはレーティングゲームにある一つのルール、『キャスリング』と呼ばれる王と他の駒の位置を変える能力を使いたいということであった。

それを聞いたサーゼクスは危険を承知で許可をする。

現状、敵の流れを食い止めるためにはギヤスパ―の時間停止を解く必要があるのだ。

それを早速実行に移すよう行動に移るリアス。ソーナは久遠と一緒に結界をより強固にしていた。

そんな中、アーシアはというと……。

「お前さんはここで留守番だ。ここが一番安全だからよ」

「は、はい……」

アザゼルの直ぐ側に居るよう命じられた。

この場所において、アーシアは役に立たない。回復しか出来ないのだから仕方ないのだが。

そのことがアーシアの心を責める。だが、それを見越したかのようにアザゼルはアーシアに笑いかけた。

「お前さんは怪我人が出たら治療してやれ。それはお前さんだけにし

か出来ないことなんだからな」

「は、はい！」

アザゼルにそう言われ氣を確かに持ち返事を返すアーシア。

そんなアーシアに笑顔を向けつつ、アザゼルは彼女を守るように側に居る。

このままでは防戦一方。きっと外に居る禍の団の者達も自分達の有利を信じて疑わなかっただろう。

だからこそ、氣付けなかった。

自分達が何をしたのかと言うことに。

それを理解しているサーゼクス、アザゼル、ミカエルの三人は『二人』に話しかける。

「お前等、言いたいことは分かるがここで苛ついてるんじゃないよ」

「申し訳無いが外に出て時間を稼いでもらえないでしょうか」

「まあ、君達二人なら時間稼ぎ所か全滅させてしまえばいいかな」

三人の視線の先に居るのは…………。

殺氣立ったあまりにオーラが噴き出している二天龍。

せっかく決まりかけていた話を邪魔されたことにより、彼等は知らないうちこの二人の憤怒を買ったのだ。

そのまま二人はゆっくりと、しかし確かな足取りで窓際まで歩いて行く。

そして同時に視線を外に向けた。

「言われるまでもねえよ。せっかく決まりそうだったのに邪魔しやがったんだ。その落とし前……きっちり付けてもらわねえとなあ!!」

「ああ、そうだ！ やっと待ち望んでいた時を邪魔された。それを許せるほど、オレは温厚では無い!!」

自身が感じた怒りを吐き出すと共に、彼等は同時に神器を発動させる。

『Welsh Dragon Balance breaker
!!』

『vanishing Dragon Balance breaker』

r
!!』

それと共に吹き荒れる赤と白のオーラ。

その余波だけで理事長室内の内装や調度品が吹き飛ばされて破壊されていく。

それが収まると共に現れたのは、赤き鎧を纏う一誠と、白き鎧を纏うヴァーリであった。

その姿は神々しさを感じさせると共に、破壊の気配を嫌でも感じさせる。

その存在感は魔王達以上であり、リアス達は勿論、アーシアも見入ってしまう。

そしてどちらも同時に動いた。

その怒りを体現するかのように、膨れ上がった力が軽い爆発を引き起こす。

大気が炸裂したかのような轟音と共に、二人は結界を内側から破壊して飛び出して行く。

「テメエら、ぶっ飛ばしてやるぜえええええええええええええええええ!!」

「貴様等、オレ達の戦いに邪魔を入れたのだ。その罪、万死に値する!!」

そして赤と白の閃光が空を駆け巡ると共に破壊と殺戮を巻き起こす。

その光景を張り直した結界越しで見つめながらアザゼルは呟く。

「お前等のやりたいことはわからなくともねえが、だからといって時は考えねえとなあ。でないと……2匹の凶暴な龍の逆鱗に触れちゃうんだからよ」

その呟きは誰の耳にも届かない。

だが、聞こえなくても見ていれば分かるだろう。

あの二人の怒りを買うと言うことがどういふことなのかを……。

40話 彼等は暴れ回る

遂に実現した三大勢力の和平。

この歴史的な出来事に立ち会った者達は感動のあまりに言葉を失う。

古くから、それこそ自分達が産まれる以前から繰り広げられてきた争いが一つの形に終結を向かえたのだから。

だが、それでもそのことをまったく喜ばない者達もいる。

それこそが三つの勢力に不満を覚える危険分子達が集まりしテロリスト達、『禍の団』。

彼等は自分達の主張を通すべく、今の世を回す三大勢力に対し戦闘を仕掛けた。

それにより、三大勢力はの各トップ、そしてリアスとソーナ達は窮地に追いやられる。

特にリアスの眷属、ビショップのギヤスパ・ヴラデイが敵に捕らわれ神器を強制的に暴走させられたのはかなり大きい。彼の神器『停止世界の邪眼（フォービトウン・バロール・ビュー）』は視界に収めた全ての時を停止させるというもの。その力が暴走すれば、使用者以外の殆どを停止させる事が出来る。

その力を暴走させることによつて禍の団は自分達に圧倒的に有利な状況へと運んでいく。

自分達以外全てを停止させれば、三大勢力の者達など殆ど何も出来なくなる。対して此方は殆どの抵抗もなく戦力を送ることが出来るのだから。

だが、それでも完璧では無い。

いくら時を止める神器という強力な物とはいえ、それでも格上には通用しない。

魔王や上級堕天使や大天使、それに力が限りなく強い者は停止の力など跳ね返す。だからこそ、現に停止している時間の中でも動き禍の団の攻撃を防いでいる。

彼等を叩き潰さなければ禍の団に完璧な勝利など無い。それにこ

の今の状態こそ、彼等はこの場に居る三大勢力の者達を倒す絶好のチャンスなのだ。

故にその熱の入れ様も尋常では無い。

空を覆い尽くさんばかりの魔方陣。それは全てが転送用の物であり、その魔方陣から次から次へと異形の者達が転送されていく。

その全てが彼等、三大勢力のトップへと戦力を集中させる。

この戦況に戦力の差。いくら強大な者達が集まっているとは言え、それでも個が多勢に勝るなどそうはない。

それが実感として感じられる。彼の強大な者達は結界を張って攻撃を防ぐだけで精一杯。圧倒的有利な状況に禍の団達は皆勝利を予感していた。

勝てるッ!!

誰もがそう思った。

だからだろう……その心に油断が出来上がってしまったのは。

彼等禍の団は知らなかった。

その場に彼が居ることを。

もう片方の方には誘いを入れてある。どちらに付けば良いのかなど、考えれば分かる話。戦いが好きなその者ならば此方に付くはずだと。

だが、その目論見は外れてしまった。

彼等は気にしなければならなかったのだ。もう片方がその場に居ることを。

そして和平が結ばれた後にされた話し合いのことを知らなければいけなかった。

それがあの二人にどのように作用するのかということ。

その結果が、全身から吹き荒れる憤怒を纏いながら、結界を内側から破り飛び出して来た。

異形の者達が犇めく学園の外。

それに向かって赤と白の二騎は突進する。

その身からは赤と白のドラゴンのオーラが溢れ出し、本人達の怒り

を表すかのようになり荒れていた。

「デメエ等、覚悟は出来てんだろぅなあッ!!」

赤は地を粉碎しながら着地すると、周りの者達に向かって怒りを込めて咆吼を上げる。

それは人が発するような物ではなく、獣のような叫び声。

その叫びを聞いた禍の団達は無意識に身体を萎縮させた。

百獣の王の咆吼を聞くと大概の生物が恐怖するのと同じように、周りの者達もその叫び声だけで本能が恐怖したのだ。

対して白は空を駆け上り、禍の団の者達の集団の中へと突っ込むと檄を入れるかのように叫ぶ。

「貴様等がした事は万死に値する！ 言い訳も命乞いも聞かん！ 己がした過ちを悔いながら死ねッ!!」

赤と違い、白の叫びは断罪者の宣告。

それを聞いた周りの者達は如何に白が怒りに燃えているのかが嫌でも理解させられた。

その恐怖は今から死刑にかけられる囚人のそれであり、目の前に見える具体的な死に周りの異形達は恐怖する。

だが、それでも彼等は退くわけにはいかない。

怒り狂った赤と白。それは彼等にとつて予想外ではあったが、だからどうしたと言うべきだろう。既に賽は投げられ、こうして現にこちら側は押しているのだ。

先程言った通り、如何に優れた個でも群には勝てない。

ならば、彼等がするべき事は同じである。

「如何に二天龍であろうとも、この数に勝てる訳が無い！ 皆、殺せええええええええええええええええ!!」

「そうだ！ 我等の方が今は有利だ！ 撃て、撃てえ、撃てええええええええええええええええ!!」

本能が感じ取る恐怖を噛み殺し、彼等は二人に向かって魔法を放つ。

一発でも強力な物を何十、何百と。

炎の弾が、雷が、水と氷の飛礫が、ありとあらゆる属性を持った魔

法が二人に向かって殺到した。

絶体絶命の危機だと誰もが見たら思うだろう。

逃げる場所は無く隙間も無い。防げる事もないだろう。防いだところで防御ごと粉碎される。

それらが予想されるであろう破壊の暴風に対し、赤……一誠は咆吼を上げながら魔法の嵐へと退くどころか立ち向かう。

「こんなもんで止められるなんて思ってたんじゃないッ!!!」

そのまま地面を殴り付け、その反動を利用して身体を回転させながら目の前の脅威へと立ち向かう。

そして激突するや、飛んで来た魔法を回転し片っ端から殴って弾き飛ばしていく。

一誠によつて弾き飛ばされた魔法は四方へと飛ばされ、その場に居た禍の団の者達に被害を巻き起こす。

まるで無差別の爆撃が行われていくかのように、一誠に向けられた魔法は弾かれ猛威を自分達に振るった。

「なっ!!」

「そんなっ!!? ぐああああああああああ!!」

まさか自分達にこうして返ってくるとは思わなかったのだろう。

驚愕とその威力に飲まれ悲鳴と叫びが各所から上がっていく。

それは地上だけでは無い。

上空では白……ヴァーリにも一誠と同様に魔法の嵐が襲い掛かる。

無論、その威力は一誠に向けられたものと大差は無いだろう。

最上級悪魔であろうとも致命傷を受ける程の威力。

だが、それを前にしてもヴァーリは退かない。

「このような攻撃で……嘗めるなっ!!」

此方は一気に加速してその弾雨まで距離を詰めると、手刀を高速で、それこそ目にも止まらない、見えなくなるほどの速度で振るっていく。

そしてヴァーリの背後へと流れた物は総すべて霧散し消滅していく。

ヴァーリは一誠と違い、手刀によつて向かって来た全ての魔法を斬

り捨てていったのだ。

その事実魔法を放った者達は信じられないような物を見るような目でヴァーリを見つめる。

避けるわけでも防ぐわけでも無い。真正面から切り裂いていった。その非常識なものを目の前にして、その場に居た禍の団達はやつと自分達が置かれている状況を理解する。

一体自分達が何を相手にしているのかということ。

そして後悔し始める。だが、この時点で後悔し始めたところで何かが変わる訳でも無く、敢えて言うのなら……もう遅い。

地上で無差別爆撃をカウンターによって行つた一誠は不満を顕わにして叫ぶ。

「こんなつまねえもん寄越しやがって!! もっとマシなもんはねえのかよ、ああ! そんな腑抜けたもんじゃねえもんを見せてやるよ!!」

そう叫ぶなり、一誠は集まっている禍の団の集団の一部に向かって突進する。

その動きは得物を見つけた獅子の様に俊敏でいて、それでいて敵に攻撃しようと突進を仕掛けるサイのようにも見えらるだろう。

まさに野性の獣。だが、その背から噴き出し推進力としているオーラを見るに、近代兵器のミサイルにも見えるかもしれない。

もの凄い速度で近づいてくる一誠に当然反応する禍の団達。

全く効果がないと分かっているも魔法を撃たずにはいられない。

「うわああああああああああ、来るなあああああああああツ!!」

がむしやらの魔法を皆放つが、それが一誠を止めることは無い。

殴り飛ばし、または無視して受けても止まらずに突き進み、一誠は敵の集団へと距離を詰めていく。

「少しは堪えて見せろよつ! ドラグブリットオオオオ、バアアアアアアアアアアアアストオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツツツツツツ!!」

『Boost、Boost、Boost!』

背中から噴出されるオーラをさらに噴き出し、空中に飛び上がると身体を横へと回転させる一誠。

その時、彼の左拳は力を集中させているのか、光緑色に輝きを放ち始める。

そして一誠はその光り輝く拳を獣の笑みを浮かべながら敵の集団へと、その地面へと叩き込んだ。

『explosion!』

その瞬間……。

大地が爆ぜた。

まるで大噴火を起こした火山のように、内側から膨れ上がった力を大地が耐えきれずに炸裂したのだ。

大爆発を起こしたのは一誠が殴った所だけでは無い。それは連鎖的に周りの大地にも影響を及ぼし、まるで大地は地獄の様に變形していった。

その爆発や噴出に巻き込まれ、各所から怒声と悲鳴が上がるがそれを聞いたところでこの男は止まらない。

先程溜め込んだ力を地面へと打ち込んだ一誠は拳を引き抜くと、二やりと笑いながら雄叫びを上げる。

「おいおい、こんなんでイモ退いてるんじゃないよっ！　こんなもん、ほんの挨拶程度じゃねえか。俺を怒らせたんだからよお……もつと意地ってモンを見せて見ろよおおおおおおおおお!!」

そして再び赤い閃光が動き始める。

それは地上を獣のように駆け出し、そして独楽のように回転しては拳を繰り出していく。

地面を殴れば地面が爆ぜ、直に殴れば殴られた者は五体満足ではなくなり絶命していく。

その様子は誰が見ても異常。

地獄の中を怒り狂った獣が殺戮の限りを尽くしているようにしか見えず、見ていた敵は勿論、味方ですら恐怖に打ち震えさせる。

いつの間にか眷属を救出したりアスもサーゼクスに合流するが、その光景を見て顔を青ざめさせていた。

彼女も若いとは言え上級悪魔。命を賭けた戦いはコカビエル戦で経験はした。

だからこそ、殺し合いにそこまでの恐怖は感じなくなった。だが、それでも……ここまで一方的な戦いは……否、虐殺劇は見たことが無かった。

禍の団の者達は必死に、それこそ命掛けの様子で魔法を一誠に放つが、それを気にすること無く一誠は攻め立てる。

弾き殴り飛ばし、その突進は揺らぐこと無く敢行される。

そして拳を振るえば大地を穿ち、爆ぜさせ粉碎し、敵の尊厳すら失わせるほどの威力で塵殺していく。

悪魔よりも悪魔らしいその様子に本物である悪魔達は言葉を失っていたのであった。

赤き龍は、否、赤腕と呼ばれている赤龍帝『兵藤 一誠』は邪魔された怒りを存分に彼等へとぶつけていた。

地表が一誠によって一方的な殺戮が繰り広げられている中、上空ではそれに負けない程の戦闘が行われていた。

「どうした？ その程度で殺す気があるのか？」

ヴァーリがからかう様な声で周りの者達に問いをかける。

その返答は恐怖と焦りに彩られた表情を浮かべた禍の団の者達の魔法によって返される。

彼等が恐怖しているのは攻撃を全て斬り捨てられるからではない。それ以前であった。

周りの者達から一斉に放たれた魔法の集中砲火。だが、それがヴァーリに触れることは無い。

それが迫る間近、ヴァーリの姿が消えるからだ。

勿論、実際に消えているわけではない。

その動きがあまりにも速すぎるために、彼等の目には消えているようにしか見えない。

まさに神速。何者をも追いつかせない速度で軽々と避けていくヴァーリの姿を見ては、周りの者達は絶望せざる得ない。

きつとどんなに数を揃えようと、この男には何一つとして当たらな

いのだろうと、見ている者達は皆思ったくらいだ。

そして今度が攻撃へと転じていく。

「そのような温い攻撃でオレを仕留められるなどと思うな！」

その叫びと共に白き閃光は空を駆け巡る。

閃光はあくまでも残滓に過ぎず、本人は更にその先で目にも映らない速度で飛んで行く。

そして彼が通り過ぎた後には、敵の血で真っ赤に空中が彩られた。すれ違い様の手刀による一撃。

ただの手刀だが、その速度が神速となれば凶悪な刃へと変わる。その手刀によって敵は文字通り『切り裂かれた』のだ。

それが空で数え切れない数で行われていく。

ヴァーリの姿は見きれず、過ぎ去った残滓の白き閃光が通った後に生きている者はいない。皆切り裂かれて血を噴き出しながら落下し絶命していく。

地上も地上なら空も空で過激なまでに殺戮が繰り広げられていた。

その二つを合わせて見れば、まさに地獄絵図と言えよう。

血の雨が絶え間なく降り注ぎ、地表は血で大地が真っ赤に染まり川が流れていく。

その光景に悪魔であるリアスやソーナでさえ、おぞましさのあまり顔を真っ青にして俯く。眷属の中にはあまりの凄惨さに胃の中の物を吐き出してしまう者さえいた。

その中で一人、アーシアは一誠の姿をしっかりと見届ける。

慕っている家族が血にまみれながら殺戮をしている様子を見て、普通なら耐えられないだろう。目を背け、否定したいだろう。

だが、それをせずに、それでもアーシアは見届ける。

それが一誠の生き方だと知っているから。確かに残酷なことが許される道理など無い。それでも……その人の生き様に口を出すことは誰にも出来ないことを知っているから。

その様子に飄々とした様子でアザゼルがアーシアに話しかける。

「随分と落ち着いてるじゃねえか。お前さんのような心優しい奴なら、見ていられないと思ったんだがなあ」

その言葉に対し、アーシアはゆつくりと、しかし真剣な眼差しをアザゼルに向けて答えた。

「はい。確かに目の前で行われていることは悲惨です。でも、それでも……私はイツセーさんのことを信じていますから。何より、私はイツセーさんの生き方を邪魔したくありませんし、否定したくもないです。だからこそ、見届けたいんです」

その様子に軽く口笛を吹くアザゼル。

そのまま『愛って奴かねえ』とからかうが、アーシアはそれに反応せずに一誠の姿を再び見つめ続ける。

普段の彼女ならば顔を真っ赤にして慌てているところだが、今の彼女にはそのような感情は無い。

ただ無事を祈ると共に、想い人の全てを見届けようと必死だったから。

そんな彼女がひたすらに一誠の姿を見続ける中、上空では少しばかり空気が変わった。

それはヴァーリの前に一人の女の悪魔が立ち憚ったからだ。

褐色の肌に露出の多いドレスを身に纏い、眼鏡をかけた知的な美女。

その美女はヴァーリの前に立つと、まるで愚か者を見るかのように蔑む視線を向けながらヴァーリに話しかける。

「まさか貴方が此方に付かないとは予想外でした」

冷静な声だが、その声には確かな怒りが込められている。

それを感じ取ってもヴァーリは揺るがない。ただ話しかけられた事に淡々と返す。

「確かにお前等の誘いは魅力的だった。平和な今より戦いの日々は確かに心躍ることだろう。だが……それはとある前提がなければの話だったというだけだ」

「とある前提？」

怪訝そうな表情で聞かれたヴァーリは、そこで感情がかなり籠もった声で返す。

それは悦びと闘志、そして殺気に満ちあふれていた。

「奴と……オレの唯一の『敵』との戦いだ。待ちに待った……悪魔からすれば一瞬といつて良い程短いのもかもしれないだろうが、それでも待ち遠しかった。それがやつと実現する！ それさえ適えば、後の事などどうでも良い。奴と戦えることが約束された今、その話を邪魔したお前等に寝返る理由などないのさ」

それを聞いた途端、それまで冷静な表情をしていた美女は憤怒に顔を染めた。

それはそれまで隠してきた怒りが堪えきれなくなったかのように、彼女は激情を顕わにヴァーリに叫ぶ。

「そのような理由だなんて……巫山戯るなッ!! それでも貴方は……私、カテレア・レヴィアタンと同じ魔王の血を引く者ですか！
ヴァーリ・『ルシファー』!」

「「「「「「「!?」」」」」」」」

その言葉にそれまでの戦闘を見ていた者達は驚愕する。

禍の団の中で今回襲撃を仕掛けてきたのは魔女、そして旧魔王派の者達である。

その一人である旧レヴィアタンの血を受け継ぐカテレアは旧魔王派を束ね、そして現魔王達から魔王の座と取り返すべく行動を起こしたのだ。

その行動は旧魔王派全員の本心であり、同じように旧魔王の血を引く者ならば誰もが思うだろう。偽りを正せと。

そのためにもヴァーリに誘いをかけたのだから。

その事実を聞き、リアスやソーナ、サーゼクスは驚きを見せる。

まさか白龍皇が旧ルシファーの血縁者だったとは、と。

そのことにアザゼルはあちやう、といった表情を浮かべ、そして皆にわかりやすい様に簡単に説明する。

「あいつは旧ルシファーと人間の間に産まれたハーフでな。その生い立ちから親に見捨てられてたんだよ。それをオレ等が秘密裏に保護してたってわけだ。オレからすれば分からないもんだぜ。神滅具の一つ、白龍皇の光翼を持った上に親譲りの強大な魔力を持った、まさに最強の存在を管理せずに捨てるなんてよ」

それを聞いてリアス達はさらに驚く。

ハーフであるがために神器を宿し、しかもそれが神すら殺せるかも知れない神滅具。そして親譲りの魔力や才覚を受け継いだというのだから、最上級悪魔ですら手に余るかも知れないほどの逸材だと。

それが今世の白龍皇。過去の白龍皇に悪魔の血を引く者などいなかった。

まさに過去、現在、未来において史上最強のハイブリットに、リアス達は驚く以外出来ない。

そんなリアス達を余所に、憤怒を顕わにするカテレアにヴァーリは更に叫ぶ。

「いくら半分しか血を引いていないとはいえ、それでも貴方は悪魔なのですか！ その身に宿すのは、高貴なる『ルシファー』の正当な血なのですよ！ その血を引いた者が偽物が我が物顔で騙っているところを見て何も感じないのですか！」

テロという行為はいただけじゃないが、その正当性を口にするカテレア。

その言葉は聞いているであろう魔王の一人、セラフォルー・レヴィアタンに突き刺さる。

だが、その言葉を受けてもヴァーリの態度は変わらない。

「別に引きたくて引いたわけではない。それに寧ろ捨てられたことを怨みさえしていると言おうか。誇るところか唾棄したいものだよ、この血はな。だが、それでも……力を受け継いだことだけにだけは感謝してもいい。だからといってそんな下らない地位に興味など無いがな」

「っ!? 貴様ッ!!」

自分に流れる血を貶され更に怒るカテレア。

そして彼女はヴァーリに怒りで染まった目を向けて叫ぶ。

「もう貴様を同じ魔王の血を引く者とは思わない、この恥じ知らずめッ!! ならばその命、もう必要無い。ここで死になさい!」

そして叫び終わると、懐からある物を取り出した。

それは掌に収まる程に小さな小瓶。その中には黒い小さなナニカがいた。

「これは我等の力の象徴である『無限の龍神』オフィス、その力の片鱗です。これをその身に取り込めば、その者の力は何倍にも跳ね上がります。これさえあれば、如何に最強の白龍皇であろうとも敵ではありません」

その言葉によって判明する禍の団のトップ。

無限の体現者である神すら勝てないとされる最強のドラゴン。

それは確かに途轍もない驚異であり、聞く者を戦かせるには十分な効果がある。

だが、ヴァーリはそれでも乱しはしない。

寧ろ呆れ返ってさえた。

「人からもらった力をさも自分の物のように語るとは……魔王の血族の名が聞いて呆れる。そんな他力本願でオレを倒せるなどと本気で思っているのだからな」

「っ!? 減らず口をつ!」

ヴァーリに馬鹿にされて怒りが頂点に達したカテレアは強引に瓶の蓋を開けると中に居るナニカを飲み込んだ。

そしてその途端にカテレアの魔力が格段に増す。

その沸き上がる力の快楽に悦びを感じながらもカテレアはヴァーリを睨み付ける。

「この力を前に、先程言った愚かな発言を後悔するといい!!」

そしてカテレアはヴァーリへと襲い掛かる。

確かに膨れ上がった魔力は魔王の名にふさわしい程に高まっている。その力は途轍もない破壊を秘めているだろう。

しかし、それでも……ヴァーリは嗤った。

魔力を身に纏いながら迫るカテレアだが、その前にヴァーリの拳が彼女の顔面を捕らえた。

「ぐあ……………」

あまりの速さに殴られたことに気付くのが遅れたカテレアは吹き飛ばされつつも気を持ち直して体勢を整える。

だが、それでも刻まれたダメージは無視出来るようなものでなく、身体が揺らいでしまう。

「その程度でオレを後悔させようとは、片腹痛いな」

皮肉の籠もったヴァーリの言葉に、遂に彼女の繋ぎ止めていた理性が吹き飛んだ。

その口からは声にならない叫びを上げ、腕をヴァーリに向かって振るう。

振るわれた腕はまるで関節など無いかのように伸び、ヴァーリを絡め取ろうと幾重にも分かれながら襲い掛かる。

ヴァーリはその攻撃に対し、何もしない。

そのまま腕はヴァーリに絡みつき、そしてその身に少しずつ同化していく。

ヴァーリを捕まえたことにより、狂気に満ちた笑みを浮かべカテレアは叫ぶ。

「このまま全て吹き飛ばしてくれるつつつつつつつつつつ!!」

ヴァーリの捕獲、それにこの発言により何が狙いなのかは明白であろう。

自爆である。

先の攻防で既に真正面から戦って勝てるとは彼女は思わなかった。だからこそ、少しでも現勢力の戦力を削るべく自爆しようと判断したのだ。

それを察したところでヴァーリは焦らない。

その身に宿す白き鎧、その胸に輝く蒼い宝玉が光り輝いた。

『Divide』

その音声と共に、膨れ上がっていたカテレアの魔力が半減する。

「なっ!？」

その事に急激に冷めた頭を持ってして驚くカテレア。

そんなカテレアにヴァーリは当たり前のように言う。

「何を驚いている？ 白龍皇の光翼の能力は半減だ。既にお前には触れているし、お前自身もこうしてオレにしがみついているんだから、簡単に出来る。頭に血が上がりすぎてそんなことも分からなかったのか」

そう言うと共に更に音声が鳴り響く。

『Divide、Divide、Divide、Divide』

その効果により、自爆のために膨れ上がっていた魔力は半減に半減を重ね、最早下級悪魔よりも低くなってしまった。

その事実には驚愕し固まるカテレアを余所に、ヴァーリは更に言う。「そして貴様はオレを捕まえたと思っっているようだが、それが間違いだ。オレはわざと捕まっただけだ。何をしようとするのか見所だったからな。それが自爆など……芸がない」

そう言い終えると共に、ヴァーリの姿は消える。

同化しつつあった腕は一瞬にして千切り飛ばされ、切断面から血が噴き出す。

だが、その痛みを感じる前にカテレアは驚きで言葉を失ってしまふ。

先程から何度も言っているように、ヴァーリは消えるわけではない。

目に捕らえられないほどに速いだけだ。

つまり……。

「オレを愚かだとお前は口にするが、他人の力を得て我が物顔で魔王の名を口にする上に自爆を選ぶお前の方が、余程……愚かだ」

それはカテレアの背後から聞こえてきた。

彼女にはそれまでの動きが一切見えなかった。いつの間に背後に回られたのかなど、彼女には察知することすら出来なかったのだ。

そしてこれが彼女の聞いた最後の言葉。

彼女がそれを耳にしたと同時に、彼女の胸から腕が突き出してきた。

それは血で真っ赤に染まった鎧に包まれた腕。

その手には脈動する心臓が握られていて、噴き出す血と暖かみのある血が流れ出る感触が彼女にその事実を伝えてくる。

カテレアは背後から一瞬にして心臓をえぐり出されたのだ。

「ガッ………」

声は出ず、ただ目の前に差し出された自分の心臓を見つめるのみ。彼女は薄れゆく意識の中、最後に見たのは……。

握り潰されて弾ける心臓だった。

ヴァーリが握り潰すと共に腕を引き抜くと、カテレアの身体は落下し地面へと落ちた。

その際、力を失った肉の塊が落ちる音が鳴ったが、それを気にする物はこの場にはない。

そして障害の一つを排除し終えたヴァーリの目は、再び周りに居る者達へと向く。

その視線を受け、先程の行為を見ていた者達は恐怖する。

だが、いくら怖がろうとこの男は止まらない。

それは下で暴れ回っている男も同じであり、二人は既に決め込んでいる。

この戦場に於いて、勝利条件は敵の『殲滅』であると。

だからこそ、白は再び牙を？く。

下で猛威を振るっている赤に負けず劣らずの猛威を振るうために。

こうして数時間後、この三大勢力の和平の襲撃事件は収束した。

結果から言えば、此方は結界を張っていたとは言え学園内の被害は甚大。

対して禍の団の襲撃者達は文字通り『全滅』。誰一人、生き残りはせず、五体満足の死体は一つもなかった。

それを行った二人は多少スッキリとした顔で互いに睨み合う。

これで後は……互いに戦うだけだと。

41話 彼等は前哨戦を行う

禍の団による三大勢力の和平会談襲撃も失敗に終わり、世界は安定を取り戻しつつある。

とは言え、それでもその被害は甚大であった。

襲撃者側である禍の団は一派閥とは言え大きな勢力であった旧魔王派の半分近くが死んだ事により、組織を離反する者が増え始めてきた。

これがまだ三大勢力の混合軍との激突による結果ならば、皆納得し戦意を燃えたぎらせていただろう。

だが、事実はまったく違う。

それ程の殲滅を行ったのは軍団ではない。たった『二人』の存在だけで行われたのだ。

それも片や旧魔王ルシファアの血を引く今世の白龍皇。そしてもう片方は人間だというのに規格外の強さを発揮する今世の赤龍帝。

本来ならば激突し合い殺し合う運命にあるはずの両者が、何と手を組んで襲撃者を撃退した。

その事実が彼等に巨大な恐怖を植え付けた。

あの軍団をたつた二人で、それも一方的に殺し続けるなど、最早恐怖以外の何物でもない。

故に禍の団の旧魔王派はしばらく行動不能となった。

それだけに留まらず、他の派閥にもその話は広まり、動きを鈍くさせていく。

結果として禍の団は全体的に表での行動を控えざる得なくなったのだ。

対して三大勢力の方とは言えば、人的被害は皆無であった。

多少負傷者を出しはしたが命に関わるようなものはなく、あの大軍に襲撃された事を考えれば奇跡としか言いようがない。

だが、それは人的被害だけであり、それ以外においてはあまりにも酷い有様であった。

戦場となった駒王学園はほぼ壊滅しており、復旧には一週間近くの

時間が必要となることに。何せ学園の敷地内で無事な部分など殆ど無く、建物は見る影も無い程に崩壊していて原型が残っている物は一つない。敷地内も荒れ果てており、植えられていた樹木は全て吹き飛んで荒れ果てた大地が広がるだけだ。

一部の大地ではあまりの高熱に晒されたのか、熔解して冷え固まっている地面もある。

この状態を見れば、誰もがそこに学園があったなどと思わないだろう。

目の前に広がるのは戦争でもあったかのような、灰燼に帰した街跡のようであった。

ここまで行くと、いくら結界を張っていたとはいえ誤魔化しきれない。

彼等の力に結界が耐えきれなかったからだ。

故に急遽、駒王学園は一週間の休校ということになった。

表向きの理由としては、学園の一部でガス漏れなどがあったため、一度全てのライフラインの総点検を行うためということになっている。

これにより、この学園に関わる全ての人間は不信感を抱くこと無く学園から足を遠ざける。

学園の復旧には三大勢力の者達が皆で協力して事に当たることによって何とか復興は可能。だが、彼等もまた、恐怖を感じていた。

これ程の大規模な破壊。それがたった二人によって起こされたのだ。それもやろうとしてやったのでは無く、巻き込まれただけだというのに。

その破壊は見る者全てにう恐怖を刻み、残虐な殺しは魂までも殺しに掛かる。

まさに破壊の化身。彼等の暴れた跡を見て、助けられたはずなのに三大勢力の者達は二人を畏怖の対象として見る。いくら自分達が彼等によって救われたと分かっているにしても、それ以上に恐ろしかったのだ。

そんな規格外な力を平然と振るう彼等のことが。

そのように双方から畏れられた二人だが、その怒りは禍の団の集団を壊滅させたことで少しは多少は収まりを見せていた。

彼等の中では既に暴れ終わった後の事に興味など無く、先にあることに意識が向かっている。

それこそ、まるでムシヤクシヤして暴れ回った子供の様にすつきりとした様子で笑顔を浮かべて愉しみにしていることが窺えた。

ただし、その笑みは凶悪な殺気を孕んでおり、見る者の全てを震え上がらせる程に凶悪であったが。

二人の共通の目的であること。

『全力で殺し合いたい（喧嘩したい）』

それがやつと叶うのだ。

それまでに互いの高めていた力の全てを躊躇無くぶつけることが出来る。

それが如何にこの世に影響を与えるのかなどを気にすること無く、周りへの被害を気にすることも無く徹底的に戦える。

邪魔されることも無く、終わるまでずっとやれることが一誠とヴァーリは楽しみで仕方ないのであった。

だが、それでも……楽しみにしているからこそ、直ぐには戦えない。

あのような事があったばかりであり、和平を結んだ三大勢力が最初に行った事は二人の後始末であった。

そのため、まだ二人が戦う場所については話しあっていない。

そんな二人が今、どこに居るのかと言えば……………。

「店長、叉焼大盛りで頼む」

「俺は塩でね」

「オレ、生と餃子頼むわあ。勿論ラーメンもな」

「私は味噌ラーメンを頼もうか。後生ビールもお願いするよ」

「ならオレは醤油ラーメンを頼む。醤油ラーメンは全てのラーメンの基本だ」

「人間界に来るのはそうそうありませんから、こういったお店に来るのは初めてですね」

最早恒例になりつつあるかのように、彼のラーメン屋に来ていた。勿論一誠とヴァーリだけでなく、久遠やアザゼル、サーゼクスも一緒であった。珍しく天界の大使であるミカエルも来ている。

三大勢力のトップと二天龍、その明らかに過剰なまでに有名な面々に彼等を知っている者が見れば恐れ戦き腰を抜かしただろう。

それと同時に和平を結んだとは言え、悪魔と墮天使と天使が一緒のカウンターに座っているというのは中々に変わった光景でもあった。

一誠は食事にありつけると喜びを顕わにし、それに付き合う形で久遠も注文を入れる。ヴァーリは妙なこだわりがあるのか何やら細かな説明をしつつ注文し、アザゼルとサーゼクスは酒を飲むべくラーメンと一緒に生ビールを頼む。そして初めて暖簾を潜ったミカエルは何やら緊張した様子で物珍しそうに辺りを見回していた。

何故このような面々がこの場に居るのか？ それは何てことはない、ただくつろぎに來ただけである。

確かに今の三大勢力は忙しい。

だが、常にトップが指示を出さなければならない程に無能でもない。

彼等は仕事を部下に任せると、こうしてこの店に來たのだ。ちなみにヴァーリはアザゼルの付き人として、一誠と久遠はサーゼクスが奢ると言ってきたので付いてきた。

何でこのような面々が集まったのか。それは偏に、この後話すであろう内容が関わってくる。

「へい、お待ち！」

ここの主の威勢の良い声と共に出されるラーメンと酒。

それが全員に行き渡ったところで改めてサーゼクスが皆に話しかける。

「今日この店に集まって貰ったことに感謝を。まあ、簡単な打ち上げといったところだね。三大勢力の和平締結、そして禍の団の撃退。その成功に私達は君達に感謝している。こうして新たに平和になったことを、心から喜んでいるよ」

それを聞いた所でアザゼルが茶々を入れ、ミカエルが注意する。

そのようなやり取りが行われたところで一誠達も動き、ラーメンを食べ始めた。

本来なら、このような壮大な人物達が行う宴会ならば、城一つ貸し切りにした上で途轍もない豪華な食事やらダンスやらといった大事になるだろう。

だが、それをサーゼクス達は望まない。

寧ろ気軽にこ来られ、気負うことも無く過ごせるこの店の方が彼等なりに望ましかったのだ。

その後は壮大な面子にしては呆れるほどに馬鹿騒ぎをし始めた。

主にアザゼルが酔っては絡み、サーゼクスは悪のりし、ミカエルはそんなアザゼルに黒い笑みと共に辛辣な突っ込みを入れる。

一誠はそんなアザゼルとサーゼクスを鬱陶しいと軽く撥ね除けてはラーメンを啜る。

対してヴァーリは冷静にラーメンの分析をして一人言を呟いていた。

残る久遠はミカエル相手に下に出つつも商談を持ちかけ、ミカエルはアザゼルへの突っ込みもそこそこにそれに応じて話し合いを行う。

まさに混沌とでも言うべきだろうか。別に行っていること自体はそこまで可笑しくない普通の光景。だが、している者達が者達だけに明らかに可笑しさを感じさせる。

きっとリアスやソーナ、それにイリナがこの光景を見たら卒倒していたかもしれない。それぐらいこの光景は可笑しかった。

そんな可笑しい騒ぎの中、一誠は我慢仕切れなかったのように二人に話しかける。

「それで……いつになるんだよ、俺とヴァーリの喧嘩はよお」

その言葉に冷静に分析していたヴァーリも反応する。

「それはオレも気になる。アザゼル、今の状況は分からなくは無いがその話はどうなっているんだ？」

二人の言葉を聞いてそれまでにやけて巫山戯ていたアザゼルは止まる。

この場に於いて、それまで互いに睨み合っていた一誠とヴァーリが

特に互いに牽制し合わなかったのは、その話が決まっただけでいいから。

だからこそ、いい加減決めて貰いたかった。

二人からすれば、焦らされているようにしか感じられないのだから。

大人しくしているのも限度があり、そろそろはつきりさせないと二人とも我慢出来そうに無い。

そんな意思が表情から出ていたのか、アザゼルは少しばかり面倒臭そうな顔になり、サーゼクスは苦笑を浮かべた。

「その件について、後三日だけ待って欲しい。それぐらいすれば学園の理事長室が使えるようになる。そこで改めて君達の決闘の場について話し合おうと思っているんだ」

「お前等、もうちよつと我慢つてもんを覚えろよ。ちゃんと決めたからにはやるんだからよ。こっちにだって都合つてもんがあるんだ」
「普段からサボっている貴方にそんなことを言う資格は無いと思いますけどね」

サーゼクスが理由を話し、アザゼルが諫め、そのアザゼルに突っ込みを入れるミカエル。

そんなやり取りを聞かされて二人は引き下がるしか無かった。

取りあえずは考えては貰っているし、三日後にはその日時や場所もはつきりすると確約を取り付けた。

だからこそ、取りあえずは引く。

だが、それでもやはりモヤモヤはするという物。

我慢して焦らされた分の炎は燻り火花を散らし始める。

それを察してか、アザゼルは面白そうな物を見る目で一誠とヴァーリに声をかけてきた。

「そんなに焦れたいってんなら、ここいらで一つ、前哨戦といこうじゃねえか。つっても、ド突き合いなんてしようもんなら店長に怒られちゃうんでなあ。こいつでまずは競っちゃどうだ。店長、この店に置いてある度数の高い酒、ありったけ頼むわ。払いはオレが出してやるよ」

その声と共に二人の前に出されたのはさつきまでアザゼルが飲んでいた生ビールの瓶。

それを見たサーゼクスが悪ノリして来た。

「確かにそうだね。ここで少しはガス抜きをした方がいい。店長、私も半分出すから彼等にかなり良い酒を頼むよ」

二人して若者に酒を勧めるというのはあまりにもよろしくないだろう。

当然止めようとする者も現れる。

「二人とも、いくら何でもそれは……」

ミカエルが二人の行動を止めようとするが、それはアザゼルによって強制的に止められた。

「そう堅いこと言うなよ、ミカエル。男つてのはこういうときは意地を張り合うもんなんだよ。それでド突きもせずには張れるもんつてんだったら、こいつしかねえよ。そらあ、お前ももつと飲め飲め！」

「なっ!? ぐっぼおっ……」

そのまま酒瓶を口に突っ込まれるミカエルは半ば無意識に中の酒を飲まされる。

結果、瓶がカラになると同時にミカエルは気絶した。

大天使が酒に溺れて気絶など、最早墮天しかねないだろうが、それは神が決めること。神がいない現在、ミカエルを裁ける者など誰も居ないのだから問題は無い。

そして五月蠅い者もいなくなったところでアザゼルは店長に出して貰った酒をグラスに注ぎ、二人の前に出した。

それを見て二人とも何がしたいのか察し、互いに闘志を燃やし合いながら睨み合った。

「いいぜえ、前哨戦。やってやろうじゃねえか」

「いいだろう。どちらが上なのか、まずはこいつで見せつけてやる」

ノリ気に二人は言い放ち、同時にグラスに手をかける。

その様子に満足そうに笑うアザゼルとサーゼクス。

久遠はそんな二人にどっちが勝つのかを賭けを持ちかけ胴元を務める。

再び騒ぎ始めた者達に向かつて、店長は少しだけ声をかけた。

「お前等、あまり騒がしくするんじゃないぞ。うっさかったら酔っ払ってようと容赦無くこいつをぶち込んでやる」

そう言つて見せつけたのは、焼きを入れている最中の鉄鍋。

若干赤く光っており、高熱を発していることが窺える。

喰らえば如何に一誠やヴァーリといえども無傷では済まないだろう。

だが、それを見ても一誠とヴァーリは怯えない。もう互いにやる気が漲っていた。

だからこそ、返事の代わりに店長の声と共に同時にグラスを持ち上げ、そして煽った。

そこから始まったのは世にも珍しい赤龍帝と白龍皇の飲み比べ。

それを嬉々とした様子で愉しむ魔王と堕天使総督、そして人間。大天使は未だに沈んでいた。

本当にこれが世界を騒がせている者達とは思えないくらい、騒いでいた。

そしてこの数時間後、両者とも気絶で飲み比べは引き分けを迎え終わりとなり、打ち上げは終了した。

この日から二日間に渡り一誠とヴァーリは二日酔いの悩まされたのは言うまでも無いだろう。ちなみにミカエルも同じである。

そして打ち上げから三日後の駒王学園理事長室にて、彼等が求めるべき物は決まった。

『冥界に広がる大樹林、その中で一ツ箇所だけ浮いている何も無い荒れ地。その場所を戦場とし、時間は明後日の十時に行う』

それを聞いて一誠はニヤリと笑みを深めた。

その場所には決まったのは運命だろうか。その場所は……………。

彼が初めてヴァーリと在った場所であった。

42話 彼等の出会いの記憶

数々の動植物が大地を覆い、紫色の雲一つ無い空が広がる世界。

ここは冥界。悪魔と堕天使が住まう世界。その世界にある一つの樹海に今、二人の人物が立っていた。

樹海と言っても二人が居るところは草木一つ生えていない荒れ地。まるで何かがあったかのように荒れ果てた大地が広がっていた。

そんな樹海の一部に広がった荒野。その荒野の中央にて、彼等は対峙していた。

片方は茶髪をした目つきの悪い青年。もう片方は白銀の髪をした美青年。

まるで正反対のような二人だが、その実中身はほぼ同じ。

目の前に居る宿敵を倒したいと闘志に燃えていた。

これはただの戦いではない。

茶髪の青年……赤龍帝である兵藤 一誠と、白銀の髪をもつ白龍皇、ヴァーリ・ルシファア。

赤龍帝と白龍皇。天界と冥界に於いて過去に多大な、それこそ種族の存亡に関わるくらいの甚大な被害を及ぼした2体のドラゴン。そのドラゴンを封じた神器の使い手。

互いに惹き合い、そして殺し合う運命を背負う両者。それは元を正せば2匹のドラゴンの争いが原因。そしてそれは神器になろうと変わらぬ。

同じ時代に現れた時は必ずと言って互いに激突し合い殺し合ってきた。それは最早運命どころか呪いと言い替えても良い。

だが、今から戦おうというこの二人に限ってはそうではない。

相手が自分と相反する神器を持つ赤龍帝、白龍皇だからではない。

自分が認め魂に刻んだ、自分だけの敵だから戦うのだと。

宿命や運命、呪いなどではない。戦うべき、否、戦って、そして超えたい奴がいるから戦うのだと。結果として殺し合いになるだろうが、そんな事は関係無い。

二人はただ、目の前にいる自分だけの敵と戦って、勝ちたいだけだ

から。

「いやあ、こうして見ると感慨深いもんがあるなあ」

「こうして間近に二天龍の戦いを見れるとは思わなかったよ」

「和平を結んだ私達の会議の最初の議題がこんなことになるとは思いませんでしたけどね」

一誠とヴァーリがいる樹海からかなり離れた所にある城。

その城の中で宙に浮かべた映像を見ながらとある3人は述べる。

それは現四代魔王の一角、サーゼクス・ルシファー。堕天使による組織『神の子を見張る者』の総督、アザゼル。そして大天使ミカエルの三名。各勢力のトップが代表として城に集まっていた。

彼等が和平を結んだ後に最初に話し合った議題は両者の戦いについてであった。二人の願いを叶えつつ、被害を最小限に押さえる。そのために彼等は二人が戦う場所を決め、その日時を話し合うといったプロデュースを行った。

その話し合いの通りに二人は従い、もつとも冥界で被害が出ても問題無い場所で対峙しているのである。

そしてその戦いを見届けるべく、こうして城で二人の様子を見ているというわけだ。

映像は彼等が特別に作った望遠可能なカメラを設置した使い魔によつて撮られている。

その送られてくる映像を見ながら、彼等はこれから始まるであろう戦いに固唾を飲み込む。

何せ彼等が知る限り、最強の二天龍同士による戦いだ。

過去の大戦にも引けを取らないくらいの激戦が予想される。だからこそ、彼等は知りたいのだ。この戦いの行く末を。

そしてその映像を見ているのはトップの者達だけではない。

サーゼクスの親族であるリアス・グレモリーや彼女と同じ立場にある友人のソーナ・シトリー。そして二人の眷属達や各種勢力の者達や一誠の腐れ縁こと久遠と彼の家族であるアーシア・アルジェント。

言わば関係者とも言うべき者達も又、二人が映る映像を見つめる。

「イツセーさん……………」

その映像を見て、アーシアは一人真剣な眼差しで映像に映る一誠を見つめていた。

彼女はただ、一誠の無事を祈り、そして一誠の事を信じるだけだ。その瞳は不安に揺れつつもひたすらに、彼のことを信じていた。

「……まさか此処だとはな。随分と久しぶりな気がするよ」

「そうだな……まさか此処になるとは思わなかったぜ。だがまあ……一番俺等らしいじゃねえか。あの時から始まった喧嘩だ。ケリを付けるのに一番ふさわしい場所ってやつだろ、なあ」

「違うない」

一誠とヴァーリは二人で対峙しながら笑い合う。

その様子はとてもこれから殺し合いを始めるようには見えない。まるで昔を懐かしむ友人のような雰囲気で会話をする。

二人が立っている荒野。ここは二人にとって因縁のある特別な地であった。

荒野といえども、元からそうだったわけではない。ここは元は周りと同じ緑に溢れた樹海だったのだ。

それが何故、こうも周りから隔絶したかのような荒野と化したのか。

それは……二人の出会いが原因だった。

二人はこれから殺し合う……または命掛けの喧嘩をする。

だからなのか、目の前に居る最高にして最大、そして最強の敵との出会いを思い出していた。

兵藤 一誠が神器に目覚めたのは物心付いて少し経った後。確か小学一年生くらいのことだろうか。それまで彼は孤児院で生活する普通の少年だった。

多少勝ち気な所がある小生意気な少年、それが昔の一誠だ。

孤児院の運営が苦しいことはどこことなく知っていた。だからこそ、少しでも早く大人になって孤児院のために何かしようと心に決めて

いた心優しい少年だった。

そんな彼は少し苦しいけれど、毎日を幸せに過ごしていた。だが、その心は何処か物足りない気持ちを感じていた。自分の何か足りないような、心に穴が開いているような……。そんな感情を彼は持て余していた。

その正体はその時分からなかった。まだ、この時点で彼にはそれが理解出来なかったから。

しかし、それを理解するのは早かった。

ある日の夕方、彼は学校帰りにちよつとした冒険という名の道草を食った。

少し離れた所にある廃墟。彼が通う学校ではちよつとした噂になつている訳ありの場所である。

彼は好奇心からその廃墟へと冒険をしにいったのだ。

子供なら誰もが持つ好奇心。未知への興味は尽きず、不気味故に心惹かれる。

だからこそ、一誠はその廃墟へと入った。

そしてそこで出会ってしまったのだ……。悪魔に。

そこはよくある廃墟だが、そういったところにはぐれ悪魔は住み着く。

学校で噂されていたものは、廃墟には怪物がいるというもの。その噂の通り、確かに怪物が居た。

そして怪物に出会ってしまった以上、後はどうなるかなどわかるだろう。

一誠ははぐれ悪魔に襲われた。

読んで字の如く、はぐれ悪魔に殺されそうになったのだ。

当時、何も力を持たない一誠は当然逃げ出した。

当たり前だ。子供が如何に頑張ろうが、あんな化け物に勝てるわけがないのだから。

そして同時に、如何に逃げようが子供の足の速度で逃げ切れるわけが無い。

一誠はそのまま追い詰められた。

そしてはぐれ悪魔は一誠を喰らおうと大きな口を開ける。

その真つ赤な口を、鋭く全てを切り裂く牙を、口から香るあまりにも生臭い悪臭を感じ、一誠は思った。

もう駄目だと。自分はここで化け物に喰われて死んでしまうと。

自分が如何に矮小であるかを思い知らされ、そして如何に間抜けであるかを理解させられた。道草など食うのでは無かったと。いけないことをしたからこうして自分はしんでしまうのだと後悔した。

だが、それと同時に本来なら有り得ない感情が沸き立ってくる。

目の前に居る化け物が自分を食い殺そうとしている。それに怯えている自分に怒りが湧き起こる。そして害そうとする化け物にも怒りというのには甘過ぎるくらいの激情を抱いた。自分に害を及ぼそうとする化け物を許さない。

『ぶっ飛ばして（ぶっ殺して）やると』

本来なら有り得ない感情。

目の前に居る敵に対し反抗しようとする意思が一誠をより昂ぶらせた。

芽生えたのは深紅の殺意。敵対者を排除しようとする鋼の意思。

それを自覚した瞬間、一誠の中でそれまで抜けていた物が埋まった。

彼がずっと物足りないと感じていた正体。

それは……闘志。

決して綺麗な感情では無い、殺意によって構成された闘志。それが一誠の心から抜けていた物だった。

普通の少年ではまず有り得ない感情。だが、一誠はその感情を自覚することで、初めて本当の自分になった気がした。今までの腑抜けた不完全な不良品ではない、全てが整った完成品へと。

そしてその自覚が、生命の危機に晒され芽生えた殺意が、彼の中に眠っていた力を呼び覚ました。

赤龍帝の籠手の発現。

そして全てが埋まった一誠は襲い掛かろうとするはぐれ悪魔に襲い掛かった。

初めて手にした力と溢れる殺意。闘争への愉悦が入り交じり、押さえが効かなくなっていたのだ。

そして一誠が正気を取り戻した後に見たのは、最早原型を留めない程に破壊された大きな肉塊。廃墟は彼方此方が壊れ、月光が血まみれの一誠を照らしていた。

これが覚醒。一誠がもつとも自分らしい自分を手に入れた瞬間だった。

それから彼は変わっていった。

孤児院の家族の前ではそれは見せなかったが、その力を使って裏で暴れ始めた。

子供如きに負けるはずないと高を括っていた大人を殴り飛ばし、その力を見せつけて裏の仕事に手を染め始めたのだ。

子供と侮られるのは常であつたが、見せしめに壁の一つでも殴り飛ばして消し飛ばせば皆黙った。

力こそ全てと言わんばかりに一誠は暴れる。

それでも、その目的は孤児院のために金を集めようとするものだったが。

そして力を使い熟せば熟すだけ強くなり、彼は自分が強いと力に溺れるようになった。それでも孤児院のことを大切に思い、そのために力を振るうことは変わらなかったが。

そして裏で名が出始めた頃、一誠は再び相對することとなった……はぐれ悪魔と。

違う点を上げれば、初めて会ったのが化け物だったのに対し、此方は人型で小物だということ。

一誠の姿を見て嘗めたはぐれだったが、逆に思い切り殴り飛ばされて自分が不利なこと悟り逃亡。

その際、冥界に逃げるべく転移魔法を発動したのだが、一誠はそんなことに気付くわけも無く更に追撃を加える。結果としてその転移に一誠も巻き込まれたのだ。

一瞬にして見知らぬ土地に飛ばされた一誠は即座に辺りを警戒した。

覚醒して以来、そういった荒事をしてきた一誠には緊急時における対処というものを自然と学んでいったのだ。

彼が飛ばされたのは紫色の空と見たことも無い木々が生い茂る樹海。

一誠が知る限り、そんな場所はない。だからこそ、少しでも自分が置かれている状況を知るために一誠は森の中を歩き始めた。

まさか自分が人間界ではなく冥界にいたのだと、この時は知るよしも無かった。

そして歩き回っていた所、彼は見つけたのだ。

白銀の髪を持った、自分と同じくらいの子供を。

その少年もまた一誠に気付いた。

その顔を、その目を見て二人とも同じような事を感じた。

『気に喰わない!!』

そう、初めて見た相手に対し、彼等が感じたのは不快感に近いそれだった。

とても初対面の相手に抱く感情ではない。本来ならもつと別のことを考えるべきだ。何故こんな所に子供がいるのかや、此処が何処なのか情報を得ようと行動するのが当然のはず。

だが、この二人はそうは考えなかった。

ただ会った。別に怨みや怒りを相手に抱いてなどいない。

だというのに、二人が感じたのは敵意だった。

『気に喰わない、目障りだ、何だこいつは、むかつく、苛立つ』

相反する存在だと、魂を感じ取る。

目の前に居るのが自分の敵だと自然に察した。

可笑しな話だろう。始めて出会い、一言も言葉を交わしていないというのに。

だが、彼等はそれがもつとも正しいと認識した。

可笑しくなど無い。目の前に居るのは……

たった一人、唯一無二の自分の敵だと。

だからこそ、二人は同時に叫んだ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!」

そして二人とも自分の力である神器を展開し、目の前の敵を倒すべく突撃した。

そこから始まったのは、とても子供が出来る様な戦闘ではなかった。

一誠が拳を振るえば木々がへし折れ、白髪の少年が攻撃を繰り出せば大地が消し飛ぶ。

その戦いの様子は上級悪魔に匹敵し、樹海だったそこは見る見る内に荒野へと変わっていく。

一誠と少年は自分の身体から血が噴き出そうとも止まらずに攻撃し続ける。

そんな戦い方をして長く持つわけが無く、二人が動きを止めた時にはもう満身創痍であった。

身体から血が流れ滴り、足下を赤く染める。

呼吸は安定せずに弱々しくなり、身体は痙攣するかのように震えている。

子供の身体にはあまりにも深い致命傷。このまま行けば死ぬ可能性すら出て来るだろう。

だが、その目は光を失っていない。両者とも殺気の籠もった視線で睨み合っていた。

そして二人とも互いに察する。

次が最後の一撃になると、自分の力の残りを何となくだが理解していた。

だからこそ、二人は互いに初めて声をかけた。

「おまえ、なまえは？」

「お前の名前を言え」

それを同時に言ったものだから、可笑しかったのか二人とも笑ってしまう。

身体中から激痛が走り口から血が漏れたが、それでも彼等は笑う。

そしてニヤリと笑いながら名乗り合った。

「おれはイツセー。ただのイツセーだ」

「オレの名はヴァーリ。姓は……いや、そんな物は必要無いか。ただのヴァーリだ」

互いの敵の名を知り、彼等はその名を魂に刻む。

初めての敵に対し、友情のようなものを抱きながら。

そして同時に最後の一撃を放つべく動いた。

獣のような咆吼を上げ、残りの全てをかけて放つ一撃。

その拳がぶつかり合った瞬間、世界は啼いた。

一誠はそこから先のことは覚えていない。

あまりの威力に世界の壁が綻び、その穴に一誠は吸い込まれて冥界から消失した。

そして人間界に戻り、重体の常態で人に発見された。

その後は病院に送られ入院。そして一誠が知っている通りだ。

この二人の初めての激突により、冥界の樹海の一部は荒野と化した。

それは冥界でも少し騒ぎになったが、誰もその原因を知らない。

ヴァーリもまた、この時にアザゼルに拾われて事なきを得た。それによつて現場は何も残らなかった。唯一あったものといえば、識別出来ないくらい細切れになった肉片のみ。後にそれが人間界に逃げ出したはぐれ悪魔だと知られたのは、少し時間が経ってからだった。

この出会いにより、二人は自分と同じかそれ以上の存在を知り、互いに負けぬと独自に鍛え始めた。

こうして兵藤 一誠とヴァーリ・ルシファアのファーストコンタクトは終わった。

「今にして思い出せば実に馬鹿馬鹿しい出会いだった」

「ああ、調子扱いたガキが喧嘩をふっかけて返り討ちにあつたってんだから笑えるもんだったぜ。だけどよ……」

「ああ」

互いに対峙しつつ懐かしそうに語る一誠とヴァーリ。

次の瞬間、同時にその瞳には殺気と闘志を宿し咆えた。

「今度は俺（オレ）が勝つつつつつつつつ！！！！」

そして二人は同時に神器を展開した。

43話 彼等の最終決戦 前編

昔の事を懐かしみつつ二人は今に目を向ける。

目の前に居るのは、待ち焦がれた最大の敵。

戦場となる場所は、過去に出会いぶつかった因縁のある所。この二人の戦いにおいて、これ以上無いほどにお膳立ては揃っている。

だからこそ、今から始まるであろう戦いに二人は歓喜する。

やつとケリが付けられると。どちらが上なのかはつきりすると。あれから自分がどれだけ成長したのかを確かめたいと。そして……やつと戦えると。

故に待ちきれないと二人は同時に動いた。

覇気の籠もった咆吼を上げると共に神器を展開する。

一誠は左腕に赤龍帝の籠手を展開し、ヴァーリは白龍皇の光翼を背から広げた。

その途端に赤と白のドラゴンのオーラが二人の身体から噴き出し、辺りへと吹き荒れる。

本来、この二人の全力はこんな物ではない。二人とも禁じ手に至っているのだから、わざわざこのような初期の力を出す理由はないのだ。

だが、それでも二人は出した。手始めという意味もあったが、それ以上に彼等は知りたかったのだ。あれから自分がどれくらい強くなったのかを。

だからこそ、当時と同じ状態でまずは仕掛ける。

一誠は左拳を構えるつつ、自分の内にいる相棒のドライグに喜びと興奮が入り混じった声で話しかけた。

「ドライグ、全部の負荷を外すぜ！ 野郎を前にそんな邪魔なモンは必要ねえ！ 最初から思いっきり行く！」

『ああ、相棒！ 全力で行くぞー！』

その返事と共に、左腕の籠手から人工的な音声が流れた。

『explosion！』

音声と共に、今まで一誠を押さえ込んでいたありとあらゆる負荷の

力が解除される。それを感じ、一誠はニヤリと凶悪な笑みを浮かべた。

この男が今までの赤龍帝と違うところは、その力の使い方。

戦闘だけでなく、自分に掛かるあらゆる負荷に力を使い、倍化して自らの身体を責め続けているのだ。これまでの赤龍帝はそんなことはしない。彼等はただ、その力を破壊にのみ使ってきたから、一誠のような考えを持つ者はいなかったのだ。

と言っても、一誠はそこまで修行熱心と言う訳では無い。自分で必死に頑張るのが面倒だった一誠は、身体に掛かる重力などを倍化することで鍛えざる得ない状況に自らを置くことで仕方なく鍛えられるようにしたのだ。だが、それは通常に鍛えるのとは桁違いに過酷な物だった。最初は軽い負荷も慣れれば更に倍化していく日々。それによつて一誠の身体は常人では考えられない程の負荷にも耐えられるように鍛え抜かれていった。

その負荷は日常生活に於いても継続しており、常に一誠に重くのしかかる。

その力から今、一誠は完全に解放されたのだ。

別に悪魔の様に魔力が上がったり何かが上がったといったような感じは周りには感じられないだろう。だが、身体が断然軽くなりスツキリとした感覚を一誠は爽快感と共に感じ、力が全身から漲ってくる。

だからこそ、その身から発する獣の様な殺気はより色濃く出た。

「つあゝ、イイ感じだ。ここまでスツキリしてんのは初めてかもしれないねえ」

開放感から気持ちよさそうに声を出す一誠。その身は解放された野性の獣のようであった。

そんな一誠に対し、ヴァーリも似たように声を出す。

「やはりこの状態が一番スツキリとするな」

どうやら一誠が考えていることとヴァーリが考えていることは似たような物らしい。ヴァーリもまた、一誠同様に神器の力を使って自身に枷を付けていたようだ。

いるのは人や悪魔では無い……獣だと。

「なら、もつといくぜえ、ヴァアアアアリイイイツ!!」

「来い、イツセエエエエエエエエエエエエエエエツ!!」

お互いに戦意をより燃え上がらせるかのように叫ぶと、次の攻撃を放つべく行動する。

一誠は先程と同じく拳を地面に叩き着けるが、その反動で前へと飛び出しつつも身体を回転させ始める。

遠心力による拳の破壊力の上昇、それが一誠が自然と学んだ打撃術だ。

それに対し、ヴァーリは白龍皇の光翼をより大きく広げると、その翼から魔方陣が展開される。そしてそこから数え切れない程の魔力弾が一誠に向かって襲い掛かった。ここで勘違いしていけないのは、ヴァーリが悪魔と人間とのハーフだということ。当然ヴァーリは魔術が使えるのだ。そこが一誠との違いと言えよう。

自分に向かって辺りを埋め付くさんと殺到する魔力弾の嵐。その嵐に向かって一誠は退くことなく突き進む。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オツツツツ!!」

咆吼を上げながらその嵐に飛び込むと、自分に向かってくる魔力弾を片っ端から回転を利用して叩き落とし、尚進む。

そして嵐を突き抜けると共に、ヴァーリに拳を振るった。

「オラァツ!!」

「！」

一誠の拳を寸でのところでヴァーリは避ける。

だが、拳を完璧には避けきれなかったのだろう。頬から軽く血が滴り落ちてきた。その血を触りながら拳が掠ったことを察し、ヴァーリは更に笑う。

その笑みに対し、一誠は少しばかり不満そうな声を上げる。

「そんなちけなモンで止まるわけねえだろ。もつと行こうぜ、なあッ!!」

「まったく、化け物め。今のアレで中級の悪魔なら致命傷を受ける程

の攻撃だというのに、その嵐に入ってほぼ無傷とは……いや、だからこそ面白いッ！」

決して手を抜いたわけではない。

だが、普通ならとつくに消滅していても可笑しくない攻撃を受けてもダメージを全く受けない一誠を見て、ヴァーリの戦意は更に燃える。

「ならば今度はこっちから行くぞ！」

「来いよっ！」

そして今度はヴァーリから仕掛ける。

白龍皇の光翼が大きく広がると共に、ヴァーリの姿が一気に近づく。確かにこの神器の能力は半減だが、その形をしているからに翼としての機能も勿論持ち合わせている。つまり、一誠が出せないような高速での戦闘を可能とする。

ヴァーリは一誠が追いつけない程の速度で一誠に近づき拳を放つ。

「はああッ！」

「ぐう」

そのまま高速で離れては急接近をしかけて攻撃を繰り返すヴァー

一誠の方が拳の威力は上だが、ヴァーリの方が速く手数も多い。

そのため、一誠が攻撃を受けてから反応して反撃を繰り出すも、そこにヴァーリはいない。既に別の方向から攻撃を繰り出してくるのだ。

まさに手も足も出ない状況。いくら一誠より拳の威力が低いと言つても、普通の異形からすれば凄まじい威力であることに変わりはない。そして加速していることで威力は更に上がっているのだ。そんな攻撃を受け続けるのは、いくら一誠でも耐えられる訳が無い。

だからこそ、一誠はヴァーリを退けるべく動く。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アツツツ!!」

獣の様な叫びを上げると、全身から赤いオーラを噴き出させる。

そしてそのまま拳を上には振り上げると、籠手の宝玉が光り輝いた。

『Boost』

力の倍加により、拳がより赤く光り輝く。

そしてその拳を自分の足下に向かって殴り付けた。

「ドラグブリットオオオ、バアアアストオオオオオオオオオオオオオオオオッツツ!!」

『explosion』

その音声は力の発動時における音声。だが、今この時ばかりはそうではない。文字通り殴り付けられた地面は一誠の周りも含めて、

爆発したのだ。

まるで地面で爆弾が炸裂したかのように、押さえつけられていた力が噴き上がるかのように真っ赤な光が地面から噴き出し辺りを崩壊させていく。

その衝撃によつて一誠に攻撃を仕掛けていたヴァーリは吹き飛ばされてしまった。

「なっ!?　ぐうう……」

そのまま近くにあった岩に激突し止まるヴァーリ。その衝撃に顔を苦痛に歪めた。

「まさかあの攻撃をそんな手で弾くとはな」

一誠の方に顔を向けつつそう言うヴァーリ。それは防がれた事への驚きよりも、乱暴とも言える手段で強引に弾き返した一誠への喜びが現れていた。

自分の宿敵がこの程度でやられるわけが無いと信じているからこそ、そんな返し方をされたのが楽しかったのだ。自分の予想を超える相手に、ヴァーリはワクワクしてしまう。

その期待に応えるかのように、額から血を流しつつ一誠はヴァーリに笑いかける。

「中々にいい攻撃だぜ、正直追いつけなかったよ。だがなあ……退く気はねえ」

「そうでなくてはな!」

互いの敵がこの程度でやられるわけが無いとわかっているからこそ、二人は更にぶつかる。

まだこの程度は序の口に過ぎず、出だしにすぎない。

だが、その戦闘は上級悪魔のそれに匹敵する破壊力を見せていた。

二人はお互いの成長を喜びながら互いにそれを見せつけるかのように攻撃し合う。

一誠はヴァーリへ攻撃する際に籠手の能力である倍化を本来の意味で使用し攻撃の威力を高め、ヴァーリは一誠に半減をかけてその力を半分に落とす。

だが、これは結局の所二人には意味が無い。

本来、半減の力は相手の力を半減し自分に回すというもの。だが、一誠の力はそれこそ桁違いであり、下手に取り込もうものなら途端にオーバーヒートを起こしかねない。ヴァーリ自身は耐えられるが、神器の方が耐えられなくなる可能性があるのだ。故にが半減した力は即座に外へと排出している。

倍化し半減する。それは増えたり減ったりを繰り返し、落ち着くのは元々の力。

つまり二人のぶつかり合いとは、神器の能力を使ったものではない。自分の力のみによる純粋なぶつかり合いだ。

意地と意地がぶつかり合い、物理現象として二人の拳が激突し合う。

二人が激突する度に大地は砕け、空間は悲鳴を上げる。

一誠の拳が大地にクレーターを作り上げ、ヴァーリの拳が周りの木々や岩を衝撃でなぎ倒していく。

二人が暴れる様はまさに天災。人や悪魔の身では出来ようも無い程に周りの空間を変えていく。

そして激化する二人は更に力を発揮していく。

「こんなもんじゃねえだろ！ もつとだ、もつと行くぜえええええええええええ!!」

「当たり前だ！ まだこんな物ではない！」

二人はその場で止まると、更に互いの神器を展開し始めた。

一誠は左腕だけでなく、右手、そして両足が赤い鎧に包まれる。そ

して彼の身体から発せられる赤きオーラが更に激しく噴き出した。

これは禁し手には至りはしないが、それでもその力に近づいてい
る、謂わば半禁し手。一誠は両腕と両足に部分的とは言え禁し手に
至った状態で展開したのだ。

それはヴァーリも同じく、背中の羽以外にも両腕が白い鎧で包まれていた。

両者ともより力を發揮したことにより、世界が二人の威圧に飲み込まれる。

その圧倒的な威圧感映像で見ている者達でさえ飲み込まれ言葉を失い始めていた。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオ!!」「シャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アア!!」

まるで世界を切り裂くかのように雄叫びを上げる二人。

そして二人の激突は更に過激になっていく。

赤と白、二つの力の塊が激突する度に衝撃が走り世界が怯えるかのような轟音が轟く。

大地は見る間に姿形を変え、何も無い荒野へと変貌していった。

一誠の拳がヴァーリの頬を捕らえ、ヴァーリの拳が一誠の腹を挟む。

その度に激突音とは別に肉と骨がぶつかり合う音がする。映像でしか彼等の戦う様子を見ていない者達でも、その生々しい音が伝わってくるかのようで耳を塞ぎしやがみ込む者達が出始める。

そんな戦闘をしているというのに、二人の顔は寧ろ笑っていた。

その目は常に闘志に燃え上がり、殺氣の入り交じった笑みが顔を彩る。

二人はまさに、この過激な戦いを心から楽しんでいった。

だからこそ、こんな『お遊び』で満足出来るはずが無い。

お互いにぶつかり合っては離れ対峙する。

その度に血が流れるが、二人とも致命傷らしい致命傷は負っていない

い。まだ体力も充分にあり、その戦意は衰えることを知らず更に燃え上がる。

互いに言葉は無い。その凶悪な笑みだけが楽しんでいることを知らせている。

だからこそ、次は互いに動いた。

爆発するかのように膨れ上がる赤と白のオーラ。

そのオーラの中で、一誠とヴァーリのシルエットが形を変える。

『Welsh Dragon Balance breaker
!!』

『vanishing Dragon Balance breaker
!!』

その音声と共に膨れ上がった赤と白のオーラが破裂し吹き荒れる。そして赤と白の嵐が収まると、そこには赤い鎧を纏った一誠と、白い鎧を纏ったヴァーリが対峙していた。

それはお互い禁じ手に至った姿。世界を変えかねない危険な力をもった超常者。

二天龍の力を存分に振るえる神をも殺せる力。

その力を体現するかのような姿となった一誠とヴァーリは互いに対峙し合う。

「いいねいいねえ。そうこなつくつちやなあ！　ここから先は初めてだからなあ！」

「ああ、そうだ。ここから先はあの時の続きではない。今のオレと貴様の戦いだ!!」

そして赤と白は互いを倒すべく、閃光となってぶつかり合った。

その瞬間、確かに世界は壊れた。

44話 彼等の最終決戦 中編

互いに遂に顕した禁じ手の姿。

神器における禁じ手とは、使いようによつては世界の均衡を崩すほどの力を発揮する。世界に仇なすかも知れないが故の禁じられて手、故に禁じ手。

そして二天龍が封印されし神器の禁じ手とは文字通り……『世界を殺す』

二人が禁じてを発動した事により、冥界が揺れた。

空間が歪むかのような程のオーラが噴きだし、世界が二人に対し恐怖するかにように啼く。

そう感じられるほど、二人から感じられる力は壮大だった。モニターで見ている者達はその力に騒然とする。

力の大きさで言えば現魔王と同じかそれ以上。それだけでも驚きだというのに、それを片方は人間が出しているというだから言葉も失ってしまうほどに衝撃的だった。

そんな力を人間が持てる訳が無い。持てば肉体と精神が絶えきれずに消滅してしまうはずだ。悪魔でさえ耐えられるかわからない程にその力は大きい。

だというのに、目の前のモニターに映っている人間はそのような様子は一切無い。寧ろより活き活きとすらしているようだ。

その様子に驚愕する者達の中、アザゼルが周りに聞こえるように口を開く。

「ヴァーリが言うには、アイツは人間であつて人間じゃねえんだと。アレは人間の限界を超えちまった別のナニカだよ。そうじゃなきゃ説明出来ねえだろ。あんな力を振るうのが普通の人間であつてたまるかよ。謂わば人間版超越者つて奴だな」

それを聞いて周りは思う。人が人を辞めるのではなく超えたとしたら、あんなになるのだろうか。それは言い替えるなら、人間は下等なんかでは無いという証明ではないだろうか。

周りがその事に驚愕している中、アザゼルは笑い、サーゼクスは愉

快そう笑みを浮かべ、ミカエルは人の可能性を見て驚きを表す。

身体から溢れ出る力に満足そうな笑み浮かべる。

至つてやつとこの二人は満足がいくように力を使えるのだ。

りも同じく、戦いがより本格的になった事に喜びを顯わにする。

殺氣とオーラを見れば、如何に歡喜しているのかが窺えるだろう。

オ
ツ
ツ
ツ
ツ
!!
」

アツツツツ!!」

その喜びに身を震わせながら、二人は同時に動いた。

姿はまるで赤き流星のようだ。

ヴァーリもまた、一誠に向かって突撃を仕掛ける。

がやつとの程の速度であつた。

まさにその姿は白き閃光。

そして激突する赤き流星と白き矢。

その激突の瞬間、世界があまりの威力に悲鳴を上げた。

のに、二人の足下はその衝撃だけで爆発し消し飛んだ。

にあつた大岩すら消滅させていく。

ただの一撃でこの有様。

空間は震え上がり、その波動は二人の周りへと広がり更に破壊していく。

それだけでも凄まじいが、まだこんなものではない。これは始まりに過ぎないのだから。

「いいねいいねえ、そうだよ、こうこなくちやなあっ!!」

「ああっ!!」

そして始まる拳の応酬。

一誠の力の籠もった一撃がヴァーリを打ち砕かんと襲い、ヴァーリの高速の拳が一誠に降りかかる。

至近距離における一撃必殺の威力が籠もった拳が繰り出され続ける。

一誠はヴァーリの拳を力ずくで弾き、また回転して弾き飛ばす。ヴァーリは当たれば一撃で致命傷を負うであろう拳を受け流すことで逸らし無力化していく。

二人の間で数多の拳が交わされ防がれる。その足下の大地は両者の攻撃の反動に耐えきれず割れ始め、拳の余波は衝撃破となって空間を揺るがしていた。

幾度となく続く拳の応酬。二人とも大ダメージは負っていないものの、掠るだけで鎧に罅が入り始める。

直撃すれば鎧が粉碎されるのは目に見える。その威力を直に受ければどうなるかがわかるはずだというのに、二人の顔に畏れや恐怖はない。

寧ろ二人とも凶悪な笑みを浮かべ喜んでいた。

一撃一撃が致命傷となる攻撃の応酬、その生と死が常に過ぎ通る中、彼等はそのギリギリの感覚を楽しんでいた。

喧嘩とは、戦いとはこうでなくてはならないと。

そしてどちらもギリ貧になりかけたところで距離を取る。

至近距離での応酬は確かに攻撃が当たりやすい。だが、その分威力はどうしても減らざるをえないのだ。だからこそ、この膠着をどうかすべく二人は距離を取った。その動きは野性の獣のように俊敏であつた。

そして一誠は拳を構えると共にその身に纏うオーラがさらに吹き荒れる。

構えた拳の宝玉、そして胸にある宝玉が閃綠色に輝きを増していき、その輝きは直ぐに一誠を包み込まんとするかのように膨れ上がっていく。

そして一誠は動いた。

閃緑色の輝きはまるで濃縮されていくかのようになり、そのまま彼が構える左拳へと集まっていく。

その拳を一誠は叫ぶと共に突きだした。

「喰らえええええええ、ドラグブリットオオオ、バアアアアアアア
ストオオオオオオオオオオオオツツ!!」

突き出された拳に一瞬だけ閃緑色の光が球となって出現し、次の瞬間には光の柱となってヴァーリに向かってもの凄い速度で放出された。

「ちっ!？」

まさか砲撃をしてくるとは思わなかったヴァーリは驚きつつもそれを寸での所で回避する。

無事に回避したヴァーリだが、その砲撃が通った跡は高温のあまりに溶け出していた。そして避けられた砲撃は遙か彼方にある山へとぶつかった。

そして一瞬にして空を覆うほどの大爆発を引き起こし、爆発が収まると共に山は消滅して消え去っていた。

その威力に皆が息を飲む。何せ彼が放った攻撃は一撃で冥界の一撃を変えてしまったのだから。

こんなものを喰らえばいくら上級悪魔だろうと一撃で消滅してしまふ。そんな一撃を人間が出したというのだから、それをもう人間だと見なしてよいのかわからない。

だが、ヴァーリは驚く様子などない。自分のライバルなら、これぐらいやって当然だと思っている。

だからこそ、もう一撃放とうとしている一誠に向かって目にも止まらない速さで間合いを一気に詰めた。

「いくら威力が高かろうが、タメの時間が長すぎる！ そんな遅い砲撃が決まると思うなよ！」

「ぐうううううううううー！」

一誠が再び砲撃を放とうとした一瞬を狙って接近し、一誠の胸に拳を叩き着けるヴァーリ。

一誠はその攻撃を受けて呻き声を上げつつ後へと後退した。

当たる瞬間に咄嗟に身体を反らしたことで多少ダメージを減らすことが出来たが、それでも受けた部分の鎧には放射状の罅が入っていた。

そして離れたところで一誠は少し呆れた様子でヴァーリに言う。

「砲撃つてのは苦手だ。少しやってみたくてぶっ放したが、やっぱり俺には合いそうにねえ」

「あんな馬鹿げた威力の砲撃を放った奴が何を言う。普通のだったらアレで戦況が変わるくらい凄まじいというのに」

そんな一誠にヴァーリも呆れた声で返す。

互いにそう言いつつも、そのことを楽しんでいた。

だからこそ、二人は更に白熱する。

「いくぞ、イツセー！」

「来い、ヴァーリ！」

再び激突し合う赤と白。

先程の砲撃など物ともせず、ヴァーリは一誠に砲撃を放つ。

一誠ほどの威力は無いが、規模や速度は向こうが上であり絶対に避けられない。

一誠はその砲撃の嵐を独楽のように回転しながら突進して中に飛び込み、迫り来る砲撃を悉く弾き飛ばしていく。

そして砲撃の嵐を突つ切ると、ヴァーリに向かって拳を振るう。

「らあああああああああああああああああああああ!!」

「ちいいいいいい!!」

砲撃の嵐から飛び出して来た一誠の拳を寸でのところで避けるヴァーリだが、その胸には一誠が受けたのと同じような罅が走っていた。

どちらも多少はダメージを負ったわけだが、この程度では怯まな
い。

互いにより戦意を燃えたぎらせ、更にオーラを噴き出す。

噴き出したオーラは二人の周りを蒸発させていき、戦場はまさに焼けた荒野へと変わり果てる。まるで火山の噴火口間近の光景のようだ。

大気が熱で燃え上がり、大地は割れて溶岩のように溶け出す。

そんな中を、赤と白は駆け巡る。地上を、空中を駆け回っては激突を繰り返す、その度に衝撃が辺りへと走り物質を崩壊させていく。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
!!」

「カアアアアアアアツアアアアアアアアアアアアアアアア
!!」

互いの咆吼が空に木霊し世界を震わせる。

やっているのは喧嘩と言う名の殺し合い。

だというのに、
 当人達はとても楽しそうだ。

顔を凶悪な笑みで染め上げ、殺気と闘志が籠もった拳を繰り出す二人。

二人の戦いにこの戦場が行けず、更に荒野が広まっていく。拳一つで巨大なクレーターが出来上がり、砲撃の一発で大地が爆ぜる。

その身体を覆う鎧は所々が砕け始め、中の肌が露出し血が流れ出る。

こんな激戦して無事なわけがない。致命傷とまではいかないが、それでも充分にダメージを負っていく二人。

だが、死ぬような怪我でない限り二人が止まるわけがない。

やられたのならやり返す。拳と拳が交わり、足で相手を蹴り飛ばす。

それが楽しいのか、口を切って血がでて二人は笑って拳を繰り出していた。

倍化した力に半減の力が加わり元に戻る。

故に能力に意味は無く、あるのは純粹な個の能力のみ。
だからこそ、二人はより燃え上がる。

これは赤龍帝と白龍皇の戦いではない。

一誠とヴァーリという個人の戦い。

そこに二人以外の存在が干渉することなど許されない。例え相棒であるドライグやアルビオンとて例外では無いのだ。

そして二人の戦いはしばらく膠着が続いていく。

じり貧というには破壊が過ぎ、既に戦場となった樹海の半分近くが荒野と化していた。

だが、ここにきて少しばかり差が出てきた。

一誠はこれでも人間。集中力は少しばかり散ってしまうのは仕方ないかも知れないことであつた。

だが、この戦いにおいて気を緩めるということは……死に直結する。

その隙をヴァーリが気付かないわけがなかった。

「はあああああああああああああああああああ!!」

気迫の籠もった叫びと共に一気に距離を詰めると、手刀一閃。

一誠はそれに反応が少し遅れてから避けるが、避けきれなかった。

ヴァーリの手刀が通り過ぎた後、一誠の左腕が身体から落ちていった。

そして離れた所から噴出する血。

それに気付くと共に激痛に襲われ、一誠の口から苦痛の叫びが上がった。

「ぐうがああああつつつつつ!!」

ほんの僅かな集中力の乱れ。

その一瞬によって、一誠の左腕は切断されたのだ。

その光景を見ていた者達は啞然とし、アジアは一誠の様子に泣きそうになる。

その叫びはあまりにも痛々しく、聞く者すべてに幻痛を抱かせる。しかし、一誠はこれで終わらなかった。

苦し紛れとは言えヴァーリに砲撃を放ち接近させないよう牽制。

そして地面に降り立つと斬り飛ばされた左腕を回収した。

まさかあれから反撃が来るとは思わなかったヴァーリは砲撃を少し掠り、追撃出来ずに退いた。掠った部分は消し飛んでおり、あと少し身を退くのが遅れたら間違いなく致命傷を負っていただろう。

一誠と同じように地上に降りるヴァーリ。

その目は一誠を捕らえていたが、何やら興味深そうな感情が込められていた。

何故腕を回収したのか、それが気になったからだ、戦場で斬り飛ばされた部分など持っていてても邪魔でしか無い。直す術も無いのに何故回収したのか？ その答えは一誠が痛みを堪えつつも笑いながら見せた。

「面白いモン見せてやるよ」

一誠はヴァーリにそう言うのと、回収した左腕を元に合った部分に無理矢理押しつける。当然そんなことでどうにかなるものではない。

だが、右腕と胸の宝玉が光り輝くと共にその力を発揮した。

『Boost、Boost、Boost、explosion!!』

その輝きが左腕も包み込み、そして光が収まると共に……。

左腕は元通りに繋がっていた。

その事実に見ていた者達は驚愕し、アジアは信じられないような目で一誠を見つめる。彼女の神器を使えば出来そうだが、一誠にはそんな能力は無い。なのに何故治っているのか？ それが彼女には分からなかった。

だが、ヴァーリはそれを見て直ぐに気づき、愉快そうに笑った。

「成る程、そうきたか。貴様……腕の細胞の増殖速度……回復力を倍化させて繋ぎ直したな」

「正解」

ヴァーリの言葉に一誠は痛がる素振りなど見せずに自信満々に答えた。

一誠がやったのはヴァーリが言った通り、回復力を倍化して修復を早めて左腕を繋ぎ直したのだ。

と言っても、ただ倍化させただけではこうはならない。人間はイモ

りのように切れた腕を再生させることなど出来ないのだから。

これは手術と同じ事。まずは切り離された部分があつてやつと成り立つ。

失われた部部の接合部をちゃんと合わせ、その部分を倍化して再生力を高めて急速に修復する。それにより腕をつなぎ合わせたのだ。通常の手術も行うことは一緒であり、糸で正しくつなぎ合わせ、それを本人の再生力でゆっくりとだがつなぎ合わせていく。それを急速に、それでいて乱暴に行つたというわけだ。

常識外れにして異常。普通ならまず考え付かないような手。

それを一誠は行つた。見ていたヴァーリは内心で感心しつつも闘志を燃え上がらせる。

そして同時にそれまで思っていた事を一誠に言つた。

「いつまでそうしてる気だ？」

「ああ、どういう意味だよ？」

再び対峙し合いながら睨み合い、ヴァーリが言つたことに一誠が返す。

それに対しヴァーリは素直に、それでいて楽しそうに笑いながら言う。

「いつまで隠している気だと聞いている。貴様、まだ隠しているだろう」

一誠がまだ全力でないことを見抜いての発言。

それが周りには信じられなかった。まだあれ以上があるのかと。

それに対し、一誠はヴァーリに笑いかける。

「そういうテーマも同じだろ。知ってんだぜ、その先があるのはよ」
自分が隠していた事もそうだが、ヴァーリが出していないことも一誠は知っていた。

つまり互いに勿体ぶっていたのである。もっと全部を楽しみたいがために。

それが分かり、互いに大声で笑ってしまった。

何が可笑しいのかは分からないが、可笑しくて笑ってしまったのだ。

そして笑い終えると共に、両者に流れる空気が変わった。静かな空気が流れるが、それは嵐の前の静けさのようだった。まるで爆発するかのような一瞬の間のものである。

そして二人は更なる高み……禁じ手の更に上へと至る。

一誠は拳を真上に上げ、全身に力を込める。ヴァーリは静かに立つが、その気配はより存在を色濃くしていた。

そして互いに口にする……封印されし究極の力を解放する言葉を。

『我、目覚めるは覇の理を神より奪いし二天龍なり。無限を喰い、夢幻を憂う。我、赤き龍の霸王と成りて、汝を紅蓮の煉獄に沈めよう』

『我、目覚めるは覇の理に全てを奪われし二天龍なり。無限を妬み、夢幻を想う。我、白き龍の覇道を極め、汝を無垢の極限へと誘おう』

それは本来、使い手の寿命を削ること発動する最悪の力。

その代わりに封印されし二天龍の力を生前並みに発揮することが出来る。

だが、一誠とヴァーリは止まらない。

何故ならば、彼等が至ったのはこの『先』なのだから。

『覇龍進化！』

そして世界が崩壊する。

全てが赤と白に染まり、何もかもが吹き飛んでいく。

そのオーラの中で、両者のシルエットが変わる。

一誠はより獣のような姿へと、ヴァーリはより神性を感じさせる姿へと。

そして赤と白のオーラの嵐が収まると、二人の姿が現れた。

それは異形。

今までの全ての二天龍の使い手でもなり得なかった姿。

その姿に見ていた者達は全て言葉を失い、そして畏れを抱く。

赤龍帝の鎧の姿は今までと違う。白龍皇の鎧も同じだ。

その新たな姿を、二人は同時に口にした。

『覇龍進化、赤龍暴帝の重鎧殻』

『覇龍進化、白龍神皇の閃光鎧』

それが、覇龍の先に至った彼等の答えだった。

45話 彼等の最終決戦 後編

忌まわしき力である覇龍。

本来ならば封印されている二天龍の力を生前と同様に振るうことを可能とする極致。その絶大な力は使用者を蝕み、使用した者には全てを破壊する力を与える代わり使用者の寿命を食い尽くす。

多少は使いこなせば減る寿命を減らすことは出来るが、それでも死へと向かう足を止めることは無い。

その力を使ってきた者達を彼等は過去、何度か見た事がある。

だが、それでも今の二人の姿に彼等は驚愕していた。

「な、何だ、あの姿は……………」

「あれがあの覇龍……………なのですか……………」

サーゼクスとミカエルからそのような言葉が漏れる。

何せ、今まで使い手を見てきた彼等でもあの二人の姿は初めて見たからだ。

通常というのはどうかと思うが、本来の覇龍というのはより身体が有機的な物に変化し、巨大化して文字通り龍の形を取る。

だが、二人のサイズは変化前と変わらない。そして龍の形とは違った人型をしていた。

赤龍帝はより鎧が分厚くなり、両腕が2倍近く巨大化。そしてその尾はより力強さを感じさせる強靱さを感じさせ、元々姿勢が悪いこともあつてか猫背がより獣らしさを醸し出す。

そこに居たのは龍というにはあまりにも凶悪であり、寧ろ恐龍とでも言うべきだろう。その身に纏うは全てを破壊尽くす暴君の覇気である。

対して白龍皇はより鋭角的な鎧姿となり、その身に備えられていた翼は元々の二枚から更に増えて四枚に。全身から発せられるのは、龍というにはあまりにも神々しく、神龍と言うべきかも知れない。神と名乗ることをその場の全てに知らしめるカリスマを見せ、戦う姿だというのにその姿は美しい。

まさに真逆。片やこの世の暴力を集めたような赤。もう一方は神

聖さを発揮する美しい白。

その対極にある両者は、それまで彼等が見てきたどの使い手達よりも異常であった。

その答えを求めるべく、サーゼクスとミカエルはアザゼルの方に顔を向ける。

今戦っている二人の内の一人、白龍皇の身内とでも言うべきアザゼルなら何か知っているかもしれないと思ったからだ。

そして二人の考えは的を射ている。モニターを見ていたアザゼルは驚く素振りは見せず、赤龍帝を見て感心した様子を見せていた。

「あなたは何か知っているのか、アザゼル」

「出来れば説明していただきたいのですが」

二人の言葉を受け、アザゼルは少しだけ愉快そうに笑う。

「いや、まさか赤腕も『アレ』に至つてとは思わなかったぜ。本当、あいつはヴァーリの言う通り、人間超えてんだろうぜ。でなけりやありえねえよ」

「その言い方だと、何か知っていそうだね」

「勿体ぶらないで下さい」

妙にテンションの高いアザゼルに焦れつつく感じながらサーゼクスとミカエルが問うと、アザゼルは笑いを堪えながら説明を始めた。『アレ』はヴァーリが言うには、覇龍のその先らしい。通常、覇龍は壮絶な力を発揮する代わりに使用者の寿命を削る。だが、そいつは莫大な力にその使用者が耐えられないからだ。そしてその力故に暴走する可能性もあつて、その原因は神器内に残り続けている歴代所有者の残留思念だ。呪いと言い替えてもいい。コイツのせいで使用者は精神に異常を来し、平然とはしていられなくなる。破壊衝動とこの世の全てを憎悪する念に浸食されてな」

そこまでは彼等が知っている覇龍の情報。

だが、アザゼルが言うには今戦っている二人は『その先』に至っているらしい。

それがどうして面白いのか、アザゼルは笑いながら説明を続けた。「だがな……そもそも寿命を削るのはその力に耐えきれないためだ。

なら、耐えられる程の肉体を、魂を持てば良い。そんな巫山戯た話があるかって思うんだが、それを実際にアイツは成したんだよ。己の肉体と精神を極限まで鍛え上げ、覇龍すら耐えきれる神すら怖れる身体と心を手に入れた。これだけでも可笑しすぎるってのに、更に続きがあるんだから爆笑もんだよ」

そこで耐えられなかったのか、アザゼルは遂に笑い声を上げながら笑い始める。

その声に周りは何事かと思ったが、それでも二人の姿から目が離せずにはいた。

それでもサーゼクス達はアザゼルから目を離さない。

アザゼルは一頻り笑って満足したのか落ち着きつつ、話の続きをする。

「ヴァーリの奴はなあ……何と、神器内にある歴代所有者の残留思念相手に精神世界で戦いを仕掛けて、全員分叩き潰したんだよ。徹底的に完膚なきまでにな。それで自分こそが歴代白龍皇最強を証明して見せたんだ。それにより、残留思念は全員だんまりを決め込んだ。アレはその結果だよ。覇龍すら耐えうる身体と精神、そして呪いとも言わねえ残留思念共を全員屈服させること。その二つにより、覇龍は更にその先に至った。あの姿は二天龍の生前の力を発揮しつつ、それ以上に自分達の力を発揮する姿。神器を超えた奴の証明、自分の全てを発揮出来る究極の姿だよ。それがアイツ等の姿の正体だよ。まさか赤腕も同じように至ってるとは思わなかったがよ」

クツクツクツ、と笑いを押し殺しながら語るアザゼルにサーゼクスとミカエルは言葉を失う。

つまりあの二人の姿は、それまでであった神器の領域を超え、本当に神を殺せるほどの力を出すための、謂わば神が与えた奇跡すら超えた姿。

あの二人が己が信念をかけて鍛え抜き、呪いすらねじ伏せて得た新たな力。

人間が神を超えた瞬間とすら言っても良い。三元世界の全てが彼等が成し得た異形に驚愕するだろう。

それを知り、この場にいる全ての者達は言葉を失う。

それが如何に凄まじいかなど、彼等では想像も出来ない。

その息を飲む雰囲気の中、それでもアーシアだけは戦っている一誠

（どうか、イツセーさんを……）

特にヴァーリは一誠の姿を見て実に愉快そうに声を上げた。

「ゴチャゴチャと五月蠅かったんでなあ。全員ぶっ飛ばしてやった」

「無論だ。全員倒しねじ伏せた」

そして一頻り笑った後、二人はその身に纏う殺氣とオーラをより濃

もうここから先は話す事などない。ここから先は拳でかたるべき

そしてどちらも動かない。そのタイミングを両者とも計っていた。

そんな両者が睨み合う中、二人のそれまでの激戦によつて碎かれた

その瓦解音が鳴つたと同時二人は動いた。

オ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
ツ
!!
」

「シャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アツツツツツツツツツ」

全てを壊さんとばかりに咆吼を上げながら二人は行動に移る。

一誠はそれまでの左腕を地面に叩き付ける突撃ではない。その強靱な尾が鞭のようになり上げ、大地に向かって叩き着けられた。その途端に拳以上の威力が大地をえぐり取り、巨大なクレーターを作り上げる。その威力の反動によりヴァーリに向かって一誠は飛び出した。

それはさながら赤い流星。

相手の全てを殲滅せんとする赤い凶星だ。

対してヴァーリは行動自体は変わらない。だが、倍に増えた翼による飛行速度はこれまでの比ではない。

まさに光の速度にも匹敵するのでは無いかという程の速度で一誠に向かつて突撃を仕掛ける。

そして両者の拳が激突した途端……。

冥界が揺れた。

それは視界だけの話ではない。体感的な意味で揺れたのだ。まるで建物の前を大型トラックが通過するかのよう、その場にいる全ての者達にはそう感じられた。

両者の拳はそれだけに留まらない。

その威力は相殺しきれず、周りの全てを破壊していく。

空は裂け、大地は穿かれ、世界は悲痛な叫びを上げる。

その威力はまさに爆発。全てを飲み込み消滅させていく。

そして両者ともそこから弾かれた。

一誠は両足を踏みしめ大地を削り取りながら後へと下がり、ヴァーリは大空へと翼を大きく広げ吹き飛ばされないよう踏ん張る。

そして両者の間にあった物は全て消滅し、そこには何もかもが無くなっていた。

唯一あつたのは、まるで爆心地のような跡。

破壊された跡だけがそこにぽっかりと空いていた。技も魔力も無い、ただの拳の一撃。それだけなのに、その威力は魔王の攻撃と遜色

のない破壊を見せつけた。

その威力に絶句する者達。これが人間とルシファアの血を引くとは言え半端者が行つた事とは信じられなかった。

これこそが神の想定を超えた者達の力。だが、それはあくまでも一端に過ぎない。

弾かれた両者は次の攻撃に移る前に笑い出し、実に楽しそうな笑い声が戦場に響き渡る。

「あつはつはつは！ いいねいいね、やつぱりこうじゃなくちやなあ。この全力を出せるこの感触……最高の気分だ。テメエもそう思うだろ、ヴァーリ」

「ああ、そうだ。今までここまでの力を振るえる相手などいなかった。コカビエルは勿論、アザゼルであつてもだ。もし貴様と会わなければと思うとぞつとする。だからこそ……こんなに嬉しいことはない！」

自身の真の力を全力で振るえることが嬉しくてたまらなかった。

渴望に渴望を重ね、やつと実現したこの戦い。それまで溜め込んでいた『全力を出したい』という願望を唯一叶えてくれる相手との戦いの歓喜は二人を満たしていく。

だからこそ、より熱く、雄々しくぶつかり合いたい。

一誠は再び尾をしならせると、地面に思いつき打ち付ける。その反動でヴァーリがいる上空に飛び上がり、身体を回転させながらヴァーリへと襲い掛かる。

空へ向かうその姿はまるでミサイルのようだ。

対してヴァーリは光翼を光らせながら一誠を迎え撃つ。

「見せてやろう、この力を！」

そう言った途端、ヴァーリの姿は……消えた。

誰が見てもそのようにしか見えなかった。それ自体はその戦闘を見ていた者は何度も見てきたが……ミカエルやサーゼクスですら姿を見失った。

その事に二人は驚きを隠し得ない。それまではいくら早くても見失いはしなかった。だが、今回のヴァーリの動きを二人は見えなかったのだ。

そして一誠の目の前に現れると共に高速の拳を繰り出した。

今度はその絡繰りに気付いた一誠は喰らうまいと反撃の拳を振り上げ、ヴァーリを迎え撃つ。

その瞬間、激突する轟音が空間に響き渡った。

その発信源である一誠とヴァーリは、互いの顔面に拳をめり込ませていた。

「ぐううううううううう」

「があああああああああ」

呻き声を洩らしつつ互いに拳を振り切ろうと力を込める。

結果、何かが軋み上げる音が鳴る。

そして二人とも同時に弾き飛ばされるように離れた。

その顔の鎧は罅が入り始めている。

一誠はヴァーリの顔を見ながらニヤリと笑うと、その答えを言い当てた。

「テメエ、そいつはまさか……距離を半減してんのか？」

「正解だ」

言い当てられたことが嬉しかったのか、ヴァーリは喜びを顕わにした声で答える。

「正確に言えば『空間』だ。この鎧、白龍神皇の閃光鎧は白龍皇の鎧の能力をより拡大させたものだ。本来ならばかなりの力を使つて行う『Half Dimension』。それをこの鎧は短時間で短く制御することが可能となった。それによりオレは貴様に突進を仕掛ける際、その速度を殺す事無く空間に半減を重ね、ショートカットで一気に接近したというわけだ。だが、まさかこうも簡単に見破られるとはな」

種明かしをしたところで何ら困ることなどないと自身を持って答えるヴァーリ。

そんなヴァーリの説明を聞いた一誠はより闘志を燃やししながら笑う。

「ただでさえ速えのに、その上そうきたか。いやはや、やるじゃねえか」

「それに合わせる貴様も貴様だな」

そして再びヴァーリが動き出した。

超高速移動とショートカット。この二つを合わせたヴァーリを止められる者などそうはいない。魔王クラスでさえ見切れないのだから。

だが、向かってくるヴァーリに向かつて一誠は笑いかける。

それはこれからその得意な鼻っ柱をへし折つてやろうとするイタズラめいた邪惡な笑みだ。

「だったらコイツはどうだよ！」

両拳を構えると共に、その拳が赤く光り輝き始める。

『Boost, Boost, Boost, Boost!』

機械的な音声と共に一誠の両拳が濃密な光を纏い始め、その力は見ただけでもと途轍もない量を秘めていることが誰の目から見ても分かった。

そして一誠は目の前に向かつて来るであろうヴァーリに向かつて左拳からその力を解き放った。

explosion

その拳から放たれたのは、巨大な光の柱。

全てを飲み尽くさんとする破壊の本流がヴァーリに向かって襲い掛かる。

「ちっ！」

それを辛うじて回避するヴァーリ。この姿になつても尚、一誠の砲撃を避けるのに苦労するようだ。だが、一誠の砲撃はまだ終わらない。

「まだまだあつ！」

『explosion, explosion, explosion』

それは逃げることを許さない破壊の津波。

一誠の拳から放たれた莫大な力が込められた砲撃はヴァーリが回避しようとしているであろう場所を蹂躪し、ヴァーリは咄嗟の回避を余儀なくされ一誠に接近することが出来なかった。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

『Divide, Divide, Divide, Divide』

それでも上級悪魔の砲撃を遙かに凌ぐ威力を持ったそれをヴァーリは手刀で切り裂いた。

その光景は実に壮大であり、見ている者の度肝を抜いた。

「砲撃は苦手だとどの口が言う。先程のより輪をかけて強力じゃないか」

あの大規模破壊をやつてのけた砲撃を笑い飛ばしながらそう言う

そんな彼は突き出した拳を引くとカラカラと笑う。

そう叫ぶとともに、尾をしならせて宙を叩き着けた。

そのままミサイルのようにヴァーリに向かって突進する一誠。そ

そんな一誠に対し、ヴァーリもまた負けじと凶悪な笑みを浮かべながら拳を構え超高速での一撃を持ってして迎え撃つ。

ア
ツ
ツ
ツ
ツ
!!
」

染みた反応速度でその神速の速さについて行く。

故に両者の力は拮抗し、互いに削り合っていく。

一誠の拳が思いつきりヴァーリにめり込んだのなら、その瞬間にはヴァーリの手刀が一誠に三撃攻撃を喰らわせる。

ヴァーリの神速の手刀が一誠の身体を大きく切りつけければ、それを耐え抜き一誠の絶大な威力の籠もった拳がヴァーリの身体へとめり込む。

そんな攻防を何回も繰り返していき、互いの鎧は罅割れ砕け、無事なところはひとつとして無くなっていく。

双方とも見るも無惨なまでのボロボロな状態。だが、その戦意は衰えるどころかより高まっていき、一誠は笑い声を高らかに上げながらヴァーリへと攻撃を繰り返す。対するヴァーリも高まっていく戦意と高揚感に笑い声を上げながら一誠へと仕掛ける。

それは何度も行われていく。

空中で、地上で、場所は一切関係なく、二人の攻撃はその余波だけで大地を粉碎し木々を吹き飛ばす。

それはまさに天変地異。

たった二人の戦闘の余波、それだけで地形が変わり樹海は消失していく。

一誠の拳が大地にぶつかれば大地は崩壊し全てを無に帰す。ヴァーリの手刀から飛ばされた衝撃波が嵐の如く木々をなぎ倒し、それが通った後には生命は何一つとして存在することを許されない。

それですら余波に過ぎず、直にその威力を身に受けている二人はまさに神すら超えている存在と言えるよう。

赤き破壊神と白き幻神がぶつかり合う様は圧倒的なまでに壮絶で、目を覆いたくなるほど悲惨で、それでいて魅せつけられるほどに美しい。

破壊のみが結果として表れる戦闘。だが、この戦いを見ている者達は目を奪われ離せずにした。

それに、この二人の戦いは衝撃的だった。それこそ、過去の三大勢力の大戦以上に。

そして戦いは膠着状態から動き出す。

一誠が拳を振るい、時にその強靱な尾で打ち払う。ヴァーリが手刀や拳打を放ち、四枚の翼による殲滅砲撃を放つ。

そういった攻撃の末に、彼等が立つ大地は何もない荒野へと変わっていく。

互いの攻撃でもう鎧は朽ち果てる寸前であり、鎧から溢れ出す血から立っているのもやつとの状態だろう。

だが、それでも戦意と殺意は収まることを知らない。燃え盛った炎は尽きることを知らず、二人の闘志をさらに滾らせていた。

「はあ……はあ……やっぱりやるなあ……ええ、ヴァーリ！」

「そ、そう言う貴様こそ、あの時とは桁違いだ……イツセー！」

互いにそう言い合い笑い合う。

それは青春の風景に見えなくもない。だが、その身から発する闘気と殺気、そして壮絶な笑みを見ればそんな物は吹き飛んでしまう。

この場にあるのは一騎討ち。いや、二人からすればそんな大層な物ではないのだろう。ただの喧嘩だ。

互いに負けたく無いから。

ただの意地の張り合い。

だが、それは十年近く前から続いていた切望。故に、この切望の先を求めるべく、二人は動いた。

既に満身創痍。だからこの先、出せても一撃が限界だろう。

故に、二人は必殺の一撃を持って決めることにした。

両者の距離は二人がこの姿になったときと同じ距離。

その位置から二人は力を溜め始める。

一誠の身体から吹き荒れる赤きオーラがその量を増し、赤き嵐となつて吹き荒れる。その嵐の中、一誠の両腕は鎧が開きより拳が大きくなった。

そして顕わになる手の甲の宝玉。それは胸の宝玉と共に輝きを増していき、やがては赤く光り輝く。その様子はまさに、臨界を超えた力を内包しているようだ。

ヴァーリもまた、負けじと力を溜める。青きオーラは竜巻と化し、

が使い魔ごと消滅してしまった。

その際の最後の映像が光で埋め尽くされた光景だった。

だからこそ、皆そう感じた。それと共に物理的に冥界が大地震が起きたかのように揺れ、彼等は足下が揺らぎ立っていらなくなる。

この城から二人が居る樹海までの距離はそれなりに長く、二人がどんなに激突し合おうとその被害は出ないはずであった。それだけの距離が離れているというのに、その激突の衝撃は地震となってこの冥界を鳴動させたのだ。

それは彼等にとつて、信じられない程衝撃的なことだった。

だからこそ、一早く復活したサーゼクス達は慌てて周りの声をかける。

少しでも早く落ち着かせ混乱をさけるために。だが、それでも彼等の顔から驚愕の念は消えない。

そして落ち着いた所を見計らって転移魔方陣を展開し始めた。

「二人の戦いの行く末を見たいという者はこの転移魔方陣の方に来なさい。ただし、命の保証は出来ません。あの二人がぶつかり合った跡がどうなっているのか……それは私でもわからないのだから」

それを聞いて戦く周り。

魔王であるサーゼクスや天界のトップであるミカエル、堕天使の総督であるアザゼルでさえ分からないと言わしめる状態の場所に踏み込む勇氣があるかどうか。それを聞かれ、大半の者は恐怖に駆られ身を引いた。

だが、そんな中、真つ先に前に出る者がいた。

「わ、私、行きます！ イッセーさんの元に！」

それはこの三大勢力が集まる中で異端とでも言うべき『人間』であるアーシア・アルジェントだった。

彼女の瞳には確かな意思の光が籠もっている。その瞳を見てサーゼクス達は無言で頷いた。

懦弱であるはずの人間が真つ先にそんな危険地帯に出向くと言ったことに周りはさらに驚いた。

そして次に前に進んだのは、人間の男である久遠だ。

「まあ、アイツが思いっきり楽しんでるんでね。最後まで見守ってやるくらいはしますよ。それぐらいなら無料でしてやってもいいと思いますから」

久遠はニツコリと笑いながらサーゼクス達や周りにそう言った。その顔に恐怖は一切感じられない。

それを皮切りにリアスやソーナといった一誠と関わりがあった者達も前に進み出た。

彼等は皆、知りたかったのだ。二人の行く末を。

それ以上前に出る者がいないのを確認したサーゼクスは転移魔方阵を起動させ、ミカエルやアザゼルと共に、二人が戦っている樹海へと移動した。

そしてサーゼクス達が転移先で見たのは、何もない荒野だった。地平線の彼方まで何もかもがない。それこそ、木の一本や大岩の一つとして無い。空虚な荒野がずっと続いていた。

荒野というのも憚られるだろう。それ以外に表す言葉がないとも言える。実質で言えば、爆心地や戦場跡。大地はクレーターで変形しており平らな部分などほぼない。立っているのも困難な状態だった。

サーゼクス達はこの光景を見て確信する。

冥界の地図が確実に変わってしまったと。

この広大であったはずの樹海は存在を滅され、ただの荒野へと成り果て山々は粉碎されて山の体を成さない。

それを立った二人の人物によって引き起こされたことが何よりも恐かった。

だが、同時に暗い歓喜が身体を走り抜ける。

これが、限界を超えた先の風景なのかということのを、戦う者として彼等はその胸に刻みつける。

そして彼等の視線は当事者を見つけた。

一番巨大な、それこそ大きな都市が一つ丸々と入りそうな程に巨大なクレーターの底で、二人はいた。

あの猛威の象徴とも言える鎧は全て剥がれ落ちて生身の状態。身

体は血まみれで無事な部分など見つからない。

人間であるのなら確実に死んでいるであろう重傷。悪魔だろうと墮天使だろうと例外なく動けないほどの損傷。

だというのに、二人はまだ立っていた。

ふらつく身体を意地で支え、死に体の身体だというのにその目はまだ死んでいない。闘志を醸しだしながら互いに睨み合い、ふらふらとした足取りで相手に向かって歩き始める。

その様子は誰が見ても倒れると思うだろう。

だが、二人は倒れない。

それどころか……。

「があああああああ!!」

「あああああああつ!!」

互いに血まみれの拳を持って、相手の顔面に拳を叩き着けていた。

まだ、二人の『喧嘩』は終わっていない。

46話 彼等の決着は……

神を超えし二人の決着を全て見届けろべく、サーゼクス、ミカエル、アザゼル、セラファールのトップ四人。そして一誠の事を心底心配し死んでしまわないよう必死に願いつつ見届けることを決めたアーシア。腐れ縁の相棒の願いを見届けるために来た久遠。最後に一誠と多少の関わりをもったことのあるリアスや、ソーナ、そしてその眷属達が転移してきた。

彼等の目の前に広がったのは、全てを破壊尽くされた荒野というのも烏澁がましい戦場跡。

その中でも一際巨大なクレーターの中央で、満身創痍で生きていることが不思議になるほどにボロボロな二人は未だに倒れずに立っていた。

そのあまりに痛々しい姿に男達は息を飲み、女は恐怖のあまり顔を真っ青にして悲鳴を飲み込んだ。

周りに転移してきた者達に気付かないのか、一切反応を示さない二人。

いや、もう気付ける程の余裕もないのだろう。立っていることすら奇跡に近いのだから。

このまま倒れると誰もが思った。

だが、その予想は覆る。彼等は何と…………。

まだ戦いを止めていなかった。

理性など無い獣のような咆吼を上げながら、立っているのもやつとの足でふらつきながら、それでも互いに突き進んで拳を相手に向かって放ったのだ。

そしてお互いの頬を抉る拳。その際、血肉と骨がぶつかり合う音が確かに彼等の耳には聞こえた。

「お兄様、もう二人を止めて下さい！」

それを見て、顔を逸らしつつリアスが悲鳴混じりにサーゼクスに訴える。

これがレーティングゲームならとつくにリタイアとなり転送され

ているだろう。だが、これは『ゲーム』ではない。実際の『殺し合い』だ。その悲惨な光景に彼女は我慢出来なかった。

もう勝負は付いた。これ以上は戦う必要は無いと。

それはソーナも同じであり、彼女達の眷属もその意思の籠もった視線をサーゼクスに向ける。

だが、サーゼクスは首を横に振りその願いを否定した。

その否定にリアス達は何故だと食って掛かるように反応するが、それをサーゼクスは答えない。

答えられはする。だが、それを彼女達は理解出来ないだろう。

その理由はあまりにもはつきりとしていて、あまりにも稚拙だから。

だが、それは真理だ。この世の闘争という行為の行き着く答え、その本音。

だからなのか、サーゼクスの変わりにアザゼルがリアス達に答えた。その顔はニヤリと愉快そうに笑っている。

「お前等、そんな無粋な真似するんじゃないよ。そんなことしたら、それこそアイツ等につっ殺されちまうぜ」

「な、何よー。だってもうこれ以上戦えるわけないじゃに。止めなくちゃ、本当にあの二人、死んでしまうじゃないの！」

それを聞いてアザゼルはやれやれといった様子で首を横に振る。

その様子にやっぱりと言った様子で引き下がったのは、リアスとソーナの眷属達の中で男である木場 祐斗と匙 元士郎だ。

彼等には何故止められないかの理由が何となくだが分かっていた。

それは男ならば誰もが思うこと。女でも同じ事を思いはするが、その思いの強さは比べものにならない。

その答えを言うかのように、アザゼルはリアス達に答えた。

「まだ勝負はついてねえんだよ。あいつらの喧嘩はまだ決着してねえ。あれはまだやり合うだろうさ。どっちかが動かなくなるまでなあ」

「そんなっ!? 何で！」

「そいつが『男』だからだよ。負けたくないから、絶対に倒したいから。だから奴等はまだやり合うんだよ。そいつを止めようとするんなら、野暮ってもんだろ」

それを聞いてリアスやソーナ、そして眷属の女性陣は同じ眷属内の男達に視線を向ける。

視線を一身に浴びた木場と匙は気まずそうな顔をしつつもゆつくりと頷く。

その様子を見て。リアス達は言葉を失った。

男とは、それほどなまでに愚かなのかと。どうして自分の命よりもそんな意地を優先するのかと。それは彼女達には理解出来ない領域のことであつた。

だからこそ、アザゼルは皆を納得させるように口を開いた。

「意地があるんだよ、男にはなあ。それこそ、命を張ってでも貫き通したい意地がな。そいつを理解しろとは言わねえよ。女子供には理解出来るもんじゃねえしよ。だがよ、覚えておいてくれよ。そいつが『男』ってもんだってことをよ」

その言葉に静かになるリアス達。

その中で唯一、アーシアだけは目を反らずに一誠の姿を見続けた。

(例えどんなにイツセーさんがボロボロになっても、それでも、私はイツセーさんのことを信じて待ち続けます。それが、私があなたに唯一出来ることですから……)

サーゼクス達が転移してきたことに普段なら気付いたはずだが、今の二人は気付けない。

確かに身体はボロボロで、鼓膜も破けたのか音もぼやけてでしか聞こえない。

だが、それ以上に彼等は集中していたために気付かなかった。目の前に居る存在。自分だけの敵に、彼等はそれだけに集中していた。

「があああああああああああああああああああ!!」

「ああああああああああああああああああああ!!」
もう言葉らしい声は出ない。出せるのは獣染みた咆吼のみ。
だが、それでも叫ぶ彼等からはその闘志が衰えていないことが窺える。

そしてどちらもボロボロの拳を振るい相手を殴る。

顔を、胸を、腹を、殴れる所はどこでも兎も角殴る。ふらつく足取りでゆっくりとしか近づけなくても、力の限りを拳に込めて放つ。

一誠もヴァーリももう限界など超えていた。

身体から血が溢れ出し骨は無事な部分などないだろう。一部などへし折れて身体から飛び出していた。

激痛という激痛が身体を襲い、意識を強制的に停止させようと本能がする。

それを意地のみでねじ伏せ、彼等は拳を振るうのだ。

「らあつー!」

「がああつー!」

一誠の拳がヴァーリの顔面に突き刺さると、ヴァーリの拳が一誠の腹へと吸い込まれる。

激突と共に弾け飛ばされ、二人は離れる。

その際に血が大地に飛び散り、二人がいる地面は血でまだら色になつていた。

既に死に体の身体。倒れても可笑しくない……否、倒れていなければ可笑しい身体だというのに、それでも二人は倒れない。その目は血で赤くなりつつも相手を睨み付ける。

そして再びふらつく足取りで互いに歩み寄り、拳を交えていく。

骨と骨がぶつかり合う音が響き合い、撥ねた血がびしゃりと地面に叩き着けられる。

その光景は最早決闘と呼べるものではない。それは醜い喧嘩だった。

顔は腫れ上がり血にまみれ、骨が折れていようと気にせずに拳を振るい続ける。

それはあまりにも悲惨で、見る者全ての目を逸らさせるには十分な

光景だった。

それでも……そう、それでもだ。

それでも彼等は……負けたくなかった。

「ぐるああああああ!!」

一誠が獣染みた咆吼を上げながらヴァーリに向かって殴りかかる。

ヴァーリはその右拳をふらつきながらも躲すと、その伸びた腕に自分の腕を絡ませ、そして力の限りを込めて……。

「ああああああ!!」

へし折った。

「つつつつつ!? がああああああああああああ!!」

その途端に響き渡る一誠の悲痛な叫び。

折られた右腕はあらぬ方向に曲がり、その部分を変色させていた。

その光景を見たアーシアの目から涙が溢れ出る。だが、それでも彼女は見続ける。

これで一誠の右腕はもう使い物にならないだろう。

だが、一誠も又ただでは済まさない。

「るああああああああああああああああああ!!」

「ぐうううううううううう!!」

残った左腕でヴァーリの左腕を掴むと、持てる力の全てを使ってヴァーリの左の二の腕を握り潰した。

ぐしやりと何かが潰れる音と共に、力を失ったヴァーリの左腕が垂れた。

骨は勿論、その肉も潰された結果だ。

痛みของあまりに顔を歪めつつ声を押し殺すヴァーリ。そんなヴァーリに一誠はニヤリと笑う。どうだ、お返ししてやったぞと言わんばかりに。

互いの片腕を潰し合った二人。

だが、その闘志は尚も燃え上がる。己の野性をより呼び起こし、人らしからぬ戦いに身を任せる。

「シャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアツツツツツツ!!」

そして互いの最後の攻撃が炸裂する。

その途端、その衝撃がサーゼクス達が居る所まで伝わり、軽く大地を揺らした。

互いの攻撃は顔面にめり込み、その場で動きを止める。

まるで時間が止まったかのように停止する二人。

だが、次の瞬間に時は動き出した。

展開された神器がほぼ同時に砕け散ったのだ。

それに伴い、二人は地面に倒れる。

互いに前のめりに倒れ、一切動くことなく辺りは嘘のように静まった。

その姿に一誠がどうなったのか分からないが、それでもアーシアは涙を流しながら駆け寄りたい気持ちを堪える。

まだ動くかどうか？ それは少し待ってみれば分かることだった。

結果として、二人は今度こそ意識を失っていた。それでも身体は無意識に起き上がりとして力を込め、戦おうとしていたが。

その様子を見て、久遠は笑う。

「…………残念だったな、イツセー。また『引き分け』だ」

こうして長きに渡るといには短い、約10年ぶりの因縁の戦いは、それでも尚引き分けという形を持って幕引きとなった。

その結果が出次第、アーシアは泣きながら一誠の元に駆けつけ、急いで神器を発動させ治療を行っていた。

ヴァーリもまた、アザゼルに背負われながら冥界の堕天使陣営の方へと帰り治療することになった。

後日、意識が戻った二人は結果を聞いて苛立ちつつも、再戦のために闘志を燃え上がらせていたのは言うまでも無い。

何せ、まだ……。

兵藤 一誠とヴァーリ・ルシファアの決着はついていないのだから

5.

番外編その1 久遠という男 久遠という男について

裏の世界に於いて、『赤腕』こと兵藤 一誠を語るならば、必ずこの男についても語らねばならないだろう。

男の名を正式に知る者はいない。だが、その呼ばれ名は知っている。

『仲介屋の久遠』

異形犇めく世界での裏の仕事斡旋組織。通称『仲介屋』その一員である。

組織の全貌を知るものではなく、組織に属していると言うこと以外は何も分らない。組織という割にはつながりというものがなく、個人で仕事を受けてそれを他の人間に仲介することを生業としているのだ。

その組織に所属する理由というのがあるのかと問われれば、それなりに在ると答えが返ってくるだろう。

組織という看板の使用料金を払う事によって、非公式ながら公な身分を手に入れることが出来る上に、組織の情報収集能力の優秀さから裏のあらゆる事情を知ることが出来るのだ。

持ちつ持たれつというには少し歪な関係だが、仲介屋という組織はそうして成り立っているのだ。

その組織に一応身を置いている久遠だが、その出自については公とされていない。

この業界、下手な詮索をする者は長生きできない。だからこそ、必要でも無い限りは久遠のことを探ろうとする者はいなかった。

彼はこの偉業犇めく世界で裏から立ち回っているが、戦いはしない。主に仕事の仲介やサポートをしている。そんな彼を周りの者達は兵藤 一誠の腰巾着だの何だのと馬鹿にするが、それは大きな間違いだ。

久遠は戦闘は自分の領分ではないとし、結界を張ったり転移魔方陣

で移動したりと多才な術を行使する。そのような優れた『人間』をどうして馬鹿に出来ようか。

ここで重要なのが、『久遠』は何なのかということ。

神器を持たず、魔術を使うかと言えばそうでもない。使う術は多才で種類が多く、言い替えれば分別がない。この業界に於いては考えられない術者と言えよう。

悪魔や魔法使いなら黒魔術。神道系の術ならば陰陽道。それ以外にも北欧のルーン魔術や呪術、中国の大極、妖の類いが使う仙術など。術は様々あれど、その全てに共通していることは一つのみ。

その術を使う者はその術こそが至高だと思い、それ以外を下だと見下すこと。

優劣だけでは考えず、そのみが最強だと疑わない。

故に基本、術者が使う術は一種類、もしくは近い種類の物で二種類だ。

だが、久遠はそれに当てはまらない。何処の悪魔と契約したのか魔術を使い、そうかと思えば陰陽術を行使し、ルーンによる結界を張ったりもする。

存在自体が滅茶苦茶。それが術者としての久遠。

何故そんな存在がいるのか？

それこそが久遠の出自に関わるものだからだ。

常に最強を目指す者がいるのが世の常というもの。それは何事に於いてもそうだ。

格闘技しかり、競技しかり、勉学しかり、経済しかり……。

どの分野に於いても、必ずそういったものは現れる。

そして裏でも当然そういったものはあり、魔術で最強を目指すものや仙術を極めようとする者達もいた。

だが、そんな中から少し変わった思考を持つ者が現れた。

『何も一つに拘る必要は無い。どの術も優れている部分はあるのだ。ならば、それらを全て凝縮し、最強の術士を作り出そうではないか』

それは当時ならまず考えられない思考。

術一つに拘らず、様々な術を覚えていき最強を目指す。

己が術にプライドを持たず、他の術にまで手を出す下法。

周りに知られたならば、途端に駆逐されるであろうこの考えは、それを考えた一族だけで内密に行う事になった。

書物を漁り、有名な術士に教えを請い、必要ならば近親婚は勿論、異形の者をも娶り新たな子に術を学ばせていった。

それが数世代にも渡り行われ、この一族の完成形に近い個体が出来上がる。

それは双子であった。

どちらも黒い髪をした男であり、見た目はとても似ていた。

だが、その中身は全くの別物。

片方は好戦的であり攻撃の術に特化した適正を見せ、もう一方は気分屋であり快楽的な思考を持った防御の適正を持つ者。

適正から名を付けられ、兄の方を『矛骸（むがい）』、弟の方を『楯弥（じゅんや）』と名付けられた。

二人は周りの期待に応えるかのように成長を見せ、兄は立ち塞がる全ての敵を己に刻み込まれた様々な術を使って灰燼に帰した。弟は攻撃こそ点で駄目であったが、その防御は鉄壁であり全ての攻撃を様々な術を持つて防ぎ無力化していく。

矛骸は性格もあつて特に上昇志向が高く、度々問題を起こすも上を目指していたことに周りは大層喜んだ。これぞ最強の術士にふさわしいと。

逆に弟の楯弥は家のことなど気にせずのにんびりと適当に言われたことを熟し、いつも暇そうな様子であった。そのためか、一族の反応はそこまで良いとは言えず、せめて兄のように少しでも攻撃用の術が使えればと嘆かれる始末。

それに弟は特に思うことはなく、毎日が退屈であった。

確かに弟の方は攻撃の術はからつきしであったが、防御の結界は勿論、それ以外にも転送やサポート用の術にも精通していた。それは兄にはない才能であったが、防御やサポートだけでは『最強の術士』にはなれない。

だからこそ、兄は一族の期待を背負い、より凶暴なまでに成長して

いった。弟はその様子に馬鹿らしいとさえ思いながら冷めた目で見ていた。

兄にとっては最強を目指す精進の日々。戦いにあけくれ、より最強の術士を目指すべくより凶悪に、より凶暴に己を研鑽していく。自分こそが最強なのだ。そのために他の術士に戦いをふっかけに行ったり、悪魔や堕天使、妖にも戦いを挑んで全て殺していく。

そんな兄を見ながら弟は呆れ返る。

彼には兄が目指すものに興味など微塵も無かった。最強という言葉に、彼は何の意味も見いだしてはいなかったのだ。いくら強かろうが、だから何だと言うのだろうと。そんな称号、何の役にも立たない。そんなことを目指すくらいなら、彼はこの退屈をどうにかして欲しかった。

毎日同じような訓練ばかりして、周りの讃辞と嘆きを聞き流し、寝るまで術の勉強に励む。

変わり様のない日々は彼を退屈させ、如何に攻撃されようとも絶対の防御を持って弾き返す。自分を害することが出来る者など誰もいなかった。故に刺激が足りない。

唯一の救いは下界に行くことだが、それでも彼にとっては慰め程度にしかない。

彼は生まれ持った絶対的な安全を持っているが故に、自らを焦らすようなことなどない。それ故に心のそこから退屈していたのだ。

例えばそれが本当の殺気を向けられようと、彼の心は揺さぶられなかった。

そんな弟と最強を目指す兄。

一応は当主候補ということもあり、二人は当主の座を賭けて戦い合うことに。

兄はそれこそ弟を殺す気で、弟は面倒なあまりに溜息を吐いてそれに望む。

兄は自分が当主になった暁には、一族の名を世界に知らしめ、強いでは自分が最強であること証明しようとしていた。

所詮弟など取るに足らないと。防御しか能が無いのだから、この家

には不要だと。最強の術士は一人で……否、最強は一人で十分だと。本人すら自覚していない中で、その妄執染みた殺意は一族へと向けられていた。

この先少しすれば、この兄はきつと一族を皆殺しにしていただろう。

だが、そんな見下していた弟相手に兄は驚きのあまり言葉を失う。兄の怒濤の攻撃に弟は欠伸をかきながら面倒臭そうに手を前にかざす。それだけでその攻撃は逸らされ消され弾かれる。

まったくもって疲れた様子もなく暇そうな弟に兄は怒りを燃やし、より激しく攻撃と放っていった。

時には自らが作り出した新たな術式による攻撃も加えながら、炎が、雷が、氷りが、魔力の塊が、仙術の鬼火が、様々な攻撃が弟へと襲い掛かる。

だが、それらは全て無効化されてしまう。

弟はその様子を冷めた目で見ながら呆れ返り、挙げ句は居眠りをしようと言えしていた。

それが兄の逆鱗に触れた。最強を目指す者がこのような覇気の無い者に全て防がれるなど……嘗められるなどあつてはならないことだと。

故に兄は激怒し暴走した。

彼が放った術は彼の怒りを体現すべく、一族ぬまでその牙を向けた。

辺りは火の海に包まれ、一族は彼の術に恐怖し逃げ惑いながらも死んでいく。最初に死んだのは彼等の父だった。

だが、それでも弟は暇そうだった。張った結界の中、船をこぎつつ携帯電話を弄くり回す。

あまりの術の凄まじさに自らの肉体を、精神を、魂を削りながら猛り狂う兄。

その猛攻を防ぐ弟。

その戦いは一族の殆どが死に絶えても続き、三日三晩続いた。そして決着がついた。

兄はその力の全てを出し切り、まるで燃え尽きた灰のように崩れ落ちて散ったのだ。

対して弟は何一つ傷を負っていない。

身内の最後を見ても彼の心は揺れることはない。ただ、自業自得だと思っただけ。ただのごり押しで弟の結界を破けるほど、彼の結界は甘くない。それなりに術式を組んで何処が弱いのかを見極めて一点集中すれば破けないこともなかったというのに、兄は力に取り憑かれてそれをしなかった。慢心して自分の力を過信し過ぎた。

それを愚かと言わずに何と言えと言うのだろう。

弟は一族が自分以外が滅んでしまったことを理解したが、それでも感情は揺れ動かなかった。

このまま居ても仕方ないと思いながら、下界へと降りることにする。

その気持ちは一族という枷がなくなったことで少しは自由を感じたが、それでもこの退屈はなくなるらない。

下界に降りてからは生活すべく裏での仕事を取り合うようになり、自分の能力も合わせて仲介屋に入ることに。

世界を少し知れば、もしかしたら自分のこの退屈をどうにかしてくれるかもしれない。

生まれてからずっと感じていた魂まで浸透しているこの『退屈』を。それから2年ほど経ったある日、たまたま裏の道を通っていた彼の目の前に、それは入って来た。

赤い左腕を持って、その全てを打ち砕く男の姿を。その顔は兄とは違った好戦的な笑みを浮かべ、それでも怒りを宿していない。純粹のこの闘争を楽しんでいる。それを顕すかのように、殴られた地面は粉々に粉碎されていく。

それを見た途端、彼は何かを感じ取り、生まれて初めて『期待』したのだ、その少年に。

この一族の名は『久遠』。そしてこの出会いこそが、彼と最強の赤龍帝の出会いであった。

久遠という男について その2

彼がその男のこと意識し調べた。

男の名は一誠。名字はありはするが名乗るようなことはせず、ここ数年前から裏街道で仕事を始めているらしい。

その強さは若いなりに目を惹くものがあり、ここ最近頭角を現したルーキーとして周囲の期待がかけられていた。

だが、本人はそのようなことは一切気にすることなく、高額で危険度の高い仕事を率先して受けては熟している。その成功率はほぼ100パーセント。ただし、被害を度外視せなければならぬほどに破壊を撒き散らす。

そのため同業者からは憎まれ口を叩かれているようだが、嘗めてかかった者は全員『悲惨』の一言に尽きる目に遭わせられ、故に危険人物としても名が通っていた。

曰く、キレさせたら何をしでかすか分からない奴だと。

周りからの評価を聞けば力に取り憑かれたような人間にしか聞けない。

それだけなら兄と一緒にだが、彼……久遠には少しばかり引つかかっていることがあり、兄のように同じ愚か者だとは思えなかった。

だからこそ、彼はこの一誠という男をより綿密に調べることにした。

得意である様々な術を用いて最上級悪魔でさえ気付かないほどの隠行の術を行使し、その男を尾けることにしたのだ。

そして知った。

裏では力を用いて猛威を振るい、向かう敵全てを粉碎する危険人物だが、表では自分が暮らしている孤児院で年長者として子供達の世話を焼いているということ。

孤児院の経営は危うく、それを彼が手に入れた金でどうにかしているという実情を。

裏では暴君、表では苦労人。

暴力と優しさ。その反面しあう物を抱えながらも両立している。

その二面性があまりにも久遠には可笑しく見え、彼の兄とは全く違う人間だということが良く分かった。

見ていてハラハラさせつつも飽きない。それが一誠を尾けていて分かったこと。

だが、久遠にとつて、この男はそれに収まるような存在ではなかった。

一誠を尾けて何日か経った頃の事。

裏路地を突き進んでいた一誠は途中で足を止めた。

周りには何もなく、何故足を止めたのかは分からない。何か落ちていたんだろうかと思った久遠だが、次に発せられた言葉とゾクリとくるような殺気を浴びせられそうではない事に気付かされた。

「……………テメエ、何時まで尾けてやがる」

「っ!」

一誠は振り返りながら虚空に向かって殺気を放ちながらそう言う。その視線の先には久遠がいた。

勿論、最高の隠行術で姿形は勿論、気配さえ感じさせないはずなのだ。如何に優れた魔術師だろうと魔王と同等の力を持つ悪魔だろうと気付けるものではない。

だというのに、一誠はそれに気付いた。

その怒りの籠もった瞳は完全に久遠を捕らえていた。

まさかバレると思わなかった久遠は驚き、それを新鮮に感じ笑みを浮かべながら姿を現した。

「おいおい、まさかこんなに早くバレるとは思わなかったよ」

まるで空間を歪め、空いた虚空から姿を現す久遠。

周りから見れば目を？いて驚愕し恐怖するような不気味さを醸し出しながら姿を顕した。

そんな久遠に対し、一誠は驚く事もせずに睨み付ける。

「いつから何も、つい数日前から付きまといやがって。手を出してくるんだったら容赦無くぶん殴ろうと思ってたんだが、何もしてこねえ！ だから放っておいたが……何もしねえで付きまといっているだけと来やがった。テメエ、何が狙いだよ!」

「へえ、こりやマジで驚いた。アンタ、本当に人間か？俺の隠行はそれこそ、魔王でも気付かれないと自負してたんだがね」
「テメエからはくせえ臭いがすんだよ。キナくせえペテン野郎の臭いがなあ」

一誠の物言いに素直に驚き感心する久遠。

一誠が久遠に気付いたのは、一誠の磨き上げられた第六感が久遠の存在を感じ取ったかららしい。

人間ではまず有り得ないようなことを平気で無意識に行う一誠。

そんな一誠に久遠は更に笑みを深めた。

目の前の男はただの『力を振るう者（馬鹿）』ではないらしい。

しかも久遠のことをペテン師だと言つてのけた。表立って力を発揮せず、裏側からばれないように力を使う久遠は、見る人から見れば力がまったくないようにみせるペテン師のように感じられるだろう。それを一目で言い当てたのだ。

久遠という男が途轍もない程に力を持った存在だと。

だからこそ、久遠は更に一誠という人間を知るためにわざと発破をかける。

この男をもっと知るために。

「いや、何。最近裏で随分と調子こいてやりまくってる奴がいるって聞いたんでね。どんな奴か見てみようと思つたんだよ」

ニヤリと意地悪そうな笑みを浮かべる久遠。

対して一誠は自分が測られていることを察しつつ、口元を歪めて笑いながら久遠に問いかけた。

「で、あんたから見て俺はどうなんだい？」

「まだ全部見たわけじゃないけど……少しがっかりしたよ。かなり周りの奴等が騒いでるからどんな奴かと思つたが……この程度か」

実際にそんなことは思っていないが、この挑発を受けて一誠が向かってくるということは分かっている。だからこそ、久遠は態とらしく呆れて見せた。明らかに一誠を怒らせるために。

そして当然、この短気な男が挑発に乗らないということはない。

「へえ、そうかい。そりやまた随分と上から見下してくれやがる。」

そんな口叩くんだ。かなり自信があるんだろうなあ、ええっ!!」

もう完全に戦る気な一誠。そんな一誠に久遠は更に笑みを深めると、実に愉快そうに笑いながら答えた。

「なら見せてみろよ。お前さんの力って奴をよ」

「上等ツ!!」

久遠の挑発に一誠は咆えることで答えると、その力の象徴たる赤き籠手を左腕に展開した。

「いづくぜえええええええええええ！　赤龍帝の籠手ツ!!（ブー
ステッド・ギア）」

そして地面にその赤い左拳を叩き着けると、その途端に地面に大きなクレーターが出来上がり、一誠の身体は弾丸の様に久遠に向かって真っ直ぐと弾け飛んだ。

その加速を充分に乗せた拳を一誠は叫びながら久遠に向かって振りかぶった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

目の前に向かつてくる一誠を見て、久遠はニヤリと笑いながら結果と防御陣を張る。それは幾重にも重なり合い、互いに互いが支え合うようにして組み込まれた彼独自の楯。その防御は彼の兄の術を一切通さなかった。

「来いよ！ そいつを待ってた！」

そして一誠の赤い拳と久遠の楯がぶつかった瞬間、周りに向かつて発生した衝撃が走り壁を破壊していく。

[illegible]

拮抗する拳と楯。

一誠はその壁を壊さんと唸り、久遠は笑いながらも拳から伝わってくる感触に内心で冷や汗を掻く。

（おいおい、これは上級悪魔の攻撃でさえ完璧に防げるんだぞ。しかも兄貴でさえ敗れなかったもんだってのに、一撃でそいつを超えて俺の手に力を入れさせるとか……どんだけヤバイんだ、コイツツ!!）

そして一誠は弾かれるように後ろに下がり、久遠も少し身を引い

た。

自慢の拳が防がれたことに不満を隠そうとせず舌打ちをする一誠。久遠は表情に出さないように不敵な笑みを浮かべつつも、掌から感じるヒリヒリとした感触に心を震わせる。

「どうした、お前さんの自慢の拳はその程度かよ」

「そういうテメエは一撃もしかけねえくせに良く言うぜ。むかつく余裕か？」

互いに挑発し合い、集中を乱そうとするが二人は感情を揺さぶられることはない。

「俺は防御が専門でね、攻撃はからつきしなんだ。そんな奴に防がれたなんて、癪かい？」

「いいや、そいつは結構だ。だったらテメエのそのご自慢の楯、ぶっ壊させてもらうぜ！」

「やってみろよ、そのご自慢の拳（笑）でな」
「抜かせよっ！」

そして再び拳を久遠に向かって振るう一誠。

勿論久遠の楯はそれでも破けない。

だが、久遠は内心で高揚感を感じていた。

今まで感じていた退屈が今はまったく感じられない。少しでも力を抜こうものなら、その拳は即座に自慢の楯を打ち砕くだろうことが容易に想像出来た。

今まで絶対に安全であったはずの自分が今、脅威に晒されている。

それが久遠には堪らなく興奮させた。

今までに無い、初めての感情。初めての焦り。初めて恐怖。

それは久遠の心を占め、歓喜すら湧き上がらせていた。

掌は気付かれないようにしているが、既に皮膚は裂け始め血がにじみ出す。

その痛みが尚も久遠の心を刺激し、一誠に期待が籠もっていく。

初めてあった、自分の退屈を吹き飛ばせる奴。それは、自分の最高の楯を破れる奴でなくてはならない。

そして遂にその可能性を持つ者が現れたのだ。

だからこそ、久遠の心は躍った。

「おいおい、もっと来いよ！ 俺の楯をぶっ壊すんだろ。 だったら見せてくれよ、その本気って奴をよお」

段々と上がってくる一誠の拳の威力に期待を高めつつ、もっと打ち込んでこいと煽る久遠。

一誠はその煽りを受けて、何かを決め込んだような顔をした。

「いいぜ……だったらぶち込んでやるよ！ 俺の、とっておきって奴をよお!!」

そして一誠の身体から赤いオーラが吹き荒れた。

「ドライブ、ぶっ放すぞー!」

『おおっ!』

その叫びと共に左腕の宝玉が光り輝き始める。そして鳴り出すは、人工的な音声。

『Boost、Boost、Boost!』

その音声と共に籠手は輝きを増し、一誠は攻撃的な笑みを浮かべて地面を殴り付けた。

「いっくぜええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

飛び上がると、身体から吹き荒れるオーラがまるで推進力のように一誠の身体を加速させていく。

そして一誠は身体を回転させながら叫んだ。

「ドラグウウウウウウウウ、ブリッドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

赤い流星と化した一誠はそのまま久遠へと突撃する。

そのあまりの迫力に久遠は目を見開き、自分が出せる術の中でも最高位の物を幾つも使い、それこそ兄の攻撃を余裕で防いだ物なんかとは比べものにならないくらい強固で絶対的な楯を作り出した。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

無意識に久遠は咆吼を上げていた。

目の前に迫る、今までに無い超絶的な威力の攻撃を前にして彼は興

奮し叫びながら構える。

そして激突した瞬間、轟音が轟き空気が震え上がった。

火花を散らせながら互いにせめぎ合う拳と楯。

久遠が今まで出して来た中で、最強の防御を誇る楯。だが、その最強の楯でさえ……………。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオツ!! やつぶれろおおおおおおおおおおお
!!」

一誠の叫びと共に、
砕け散った。

そして突き進んだ拳は久遠の手を逸れて背後にあつた壁にぶつかり、壁を倒壊させると共に止まつた。

「よお、どうだい？　ご自慢の楯、ぶち破つてやったぜ！」

一誠は久遠に振り返りながらそう言う。

久遠はと言えば、耐えきれなかつた威力の残滓で手を血で真っ赤に染めながら地面に大の字で倒れていた。

だが、その表情は苦しみや悔しさといったものを感じさせない。

「……………くつくつく……………あつはははは!! いやあ、参った参った! まさかこうも見事にぶち破られるとは思わなかったぜ! 流石は『赤腕』ってところかアンタ、最高だよ!」

寧ろ楽しくて嬉しくてたまらなく久遠は笑い出した。

その様子に一誠は怪訝そうな顔をしながら久遠の元に歩いて行く。もう戦う意思はないということを感じ取ったのか、殺気は消えていた。

そして一誠を見て、久遠は腹の底から笑うと共に、一誠に話しかけた。

「なあ、あんた、俺と組まないか！俺はこれでも仲介屋なんだよ。だからあんたが退屈しないようなとびきり面白い仕事を持つてきてやるよ」

それに対し、一誠はつまらなさそうな顔で久遠の真意を問う。

今まで一誠と組もうと言い出す者達は多かったが、その多くは一誠が若いことを利用して騙し、利益だけをかすめ取ろうとする者達ばかり

りだった。だからこそ、一誠は誰とも組まず、一人で仕事を請け負ってきたのだ。

だが、久遠の答えはそのどれとも違う答えだった。

「何で誘うかつて？ そりゃあ決まってるだろ！ あんたと組めば、きつと退屈しそうにねえからだよ」

その答えを受けて、あまりの堂々とした物言いに一誠は笑った。

こうして久遠と一誠は組むことを決め、その後は共に仕事を熟す相棒となっていく。

それから始まった腐れ縁は今も続き、彼等はまた仕事をするのだろう。

これが久遠が一誠と組んだ始まり。

これ以降、久遠は色々な理由で退屈するようなことはなくなった。

番外編その2 アーシアのデート アーシアのドキドキデート その1

その能力故に人々から崇拜され、そしてその優しさ故に人々から畏怖され裏切られた少女、アーシア・アルジェント。

彼女は禁忌を犯したとして背信者として教会から追放され、墮天使に騙されて日本へとやってきた。

そこで本来ならばその奇跡の力たる神器を抜き取られ死ぬところであつたが、それはこの国で出会った一人の男によって止められた。最初に会ったときの印象は、とても目が離せなくなるくらい心配になつてしまふくらい衰弱していて、それでいてとても優しい異国の男の子。

そして騙されてもう終わりだと思つた時に助けに来てくれて、初めて見た時は全く違つてその男の雰囲気は実に刺々しかった。

そこから先は気絶してしまい彼女は見ていないが、男によつて墮天使は行動不能なまでに叩き潰され、彼女が意識を取り戻した時にはもう事は終わつており、そして男によつて助けられた。

何故助けたのかと聞けば、男は頬を掻いて少しだけ気まずそうにしつつ、

『あんときにサンドイッチの御蔭で助かつたからな。その礼代わりに言つただろ……何か困つたことがあつたら助けるつてよ』

それを聞いて彼女は男の顔を見入ってしまった。

胸がドキドキと高鳴り、顔が熱を放ち、瞳が潤み目が離せなくなる。

それは初めて彼女が抱いた感情であつた。

吊り橋効果ではないかと思われるかも知れない。だが、彼女はそれを聞けば絶対に否定するだろう。

助けてくれた、救つてくれた恩人との感情が錯覚なわけがないと。

そう、彼女はこの時、初めて『恋』をした。

それから彼女は助けてくれた男『兵藤 一誠』の手助けの元、彼がそれまで生活していた孤児院へと案内され、そこで暮らすことに。

孤児院の園長は勿論、その子供達から温かく迎えられアーシアはこの一員となった。

そして一誠と同じ学校に通うことになり、現在では通い妻のように一誠の暮らしているアパートに行つては料理を作り、彼と一緒に学園生活を満喫していた。

これはそんな恋と青春を謳歌する彼女のほんの一時にあった話。

言い替えるのなら、彼女にとって初めて一誠とのお出かけとさえ言つても良い日の話である。

それはとある日の朝。

学校が休みと言うこともあつて、恋するアーシアは想い人たる一誠ともつと一緒に居たいと彼の部屋で献身的に尽くしていた。

眠っている一誠の寝顔を見てドキドキとしつつ起こし、一誠のために朝食を作り一緒に食べる。

それが彼女にとっての日課であり、それが出来る事が嬉しくてたまらない。

だからなのか終始幸せそうに笑うアーシア。

そんなアーシアに何とも言えない顔を向けつつ、一誠はアーシアの作つた朝食と一緒に食べる。

「んじゃ……いただきます」

「はい、どうぞ！　いただきます」

アーシアが作つた朝食を平らげると、一誠はその余韻に浸つてかジツとしている。その様子を見てアーシアは一誠が満足してくれたと喜んだ。

そしていつもなら学園に向かうところだが、休みとあつてすることもないので部屋でゆっくりと過ごすことに。

時たまに久遠が来ては仕事を持つてくるが、今回はそのような様子は見られない。

そこで一誠と一緒に何かをしようと考えるアーシアだが、その先は一誠が切り出してきた。

「なあ、アーシア。今日はこの後暇か？」

「え？ は、はい！」

いきなり予定を聞かれて驚くアーシア。

だが、その言葉の真意は分からずとも、一誠がアーシアに何か用があるということはわかった。

一誠から誘われたことが嬉しくて嬉しそうに微笑むアーシア。そんなアーシアに向かって一誠はニヤリと悪どい笑みを浮かべた。

「なら、一緒に行って貰いたいところがあるんだよ。着いてきてくれねえか」

それは傍から見れば普通の誘い。

だが、アーシアからすればデートの誘いのように感じられ、その誘いに彼女は頬を染めながら大きく頷いた。

「はい、是非！」

こうして彼女と一誠のデート？ は始まった。

一誠が何処に連れて行ってくれるのかと胸を期待で膨らませながら楽しみにするアーシア。

別に特別な所でなくても良い。彼女にとって、一誠とどこかに行けることが嬉しいのだ。場所では無く、一誠と一緒に出掛けられること自体が楽しくて嬉しい。

だからこそ、彼女は上機嫌で一誠の隣を歩いていた。

「イツセーさん、どこにいくんですか？」

とはいえやはり気にはなるものであり、アーシアは少し興奮気味で一誠に行き先について問う。

すると一誠は顔をアーシアに向けるも、それは何やら含みある笑みを浮かべていた。

「そうだな、別によくある場所だから特別な場所じゃねえんだが……時間帯や曜日によっちゃあ地獄とも戦場とも取れる場所ってところかねえ」

「え、地獄？ 戦場？」

物騒な単語が出てきた事に少し怖がる様子を見せるアーシア。

まさかそんな恐い所に連れてこられると誰が思おうか？ そしてそこまで物騒な所にどうして連れて行かれるのか、彼女は理解出来な

い。

だが、一誠がそんな物言いをするということは、途轍もない激戦が繰り広げられている場所なのだろうと考え始める。

すると思えば当たるのは、どこかの地下格闘技場での賭け試合などといった如何にも危険で違法そうな場所。

一誠のような強者なら、そういう事を知っていても可笑しくはない。何せ墮天使を人間の身でありながら倒したのだから。

そう考えた途端、アーシアは急いで一誠の腕を引っ張り一誠を止める。

「だ、駄目ですよ、イツセーさん！ そんな危なくてイケナイこと、絶対にしちや駄目です！」

腕を引かれ必死な様子で止めるアーシアに、一誠はそれが面白かったのか愉快そうに笑った。

「おいおい、お前は俺がいつも何してると思ってるんだよ」

「で、でも、危ないことなんですよね！ 地獄とか戦場と仰っていますし、とても危険そうなので」

何で一誠がそんなに笑っているのか分からずアーシアは困った顔をしてしまう。

危険な場所には行かせたくない。いくら一誠がそういった危険なところに慣れているとしても、それでも危ない目には遭って欲しくないというのは恋する少女なら想い人に誰だって思うことだろう。

だが、一誠はカラカラと笑いながらアーシアの手を逆に引いてきた。

「別にお前が心配するような危ない場所じゃねえよ。さっき言っただろ、よくある場所だって？」

「で、でも……」

冗談だとしても一誠が言えば性質が悪い言葉にアーシアは不安で仕方ない。

そんなアーシアの手をぶつきらぼうながら優しく引きながら一誠は歩いて行く。

そしてとある建物の前に来て、一誠は気合いの籠もった顔でアーシ

アに言った。

「ここが目的地だ。これから地獄の戦場に化す……なあ」

その気迫の籠もった声を聞いて意を決したアーシアは目的地たる建物を見るが、そこで彼女は不思議そうに声を上げてしまう。

何せ、そこは彼女が心配していたような特殊な場所ではなく、どこからどう見たって普通にある物だったから。

「スーパーマーケット……ですか？」

そう、そここそが、一誠にとって地獄の戦場と化す激戦地であった。

そしてこの後アーシアはその意味を知ることになり、どうして自分が連れてこられたのかということを知った。

アーシアのドキドキデート その2

一誠と出掛けられることに喜ぶアーシア。

別に一緒なら何処でも良いと思っていたが、まさか近場のスーパーマーケットに連れてこられるとは思わなかった。

何でこんな所に連れてこられたのか不思議そうに思うアーシアは、取りあえず一誠に話しかける。

「あの、お食事の材料のお買い物ですか？」

こんな所に来る理由などそれ以外ないだろうと思いそう問うアーシア。そんなアーシアに一誠はニヤリと笑みを浮かべながら返事を返す。

「まあ、そうだよ。ここで今日は欲しいもんが売ってるんだ。そいつが欲しいんだよ」

「そうなんですか」

一誠の様子から何か欲しい商品が販売するのだと察するアーシア。それが普通の買い物だと疑わない彼女は、そのまま一誠の手を引きつつ店に向かって歩き始めた。

「それでは、行きましょう！ イッセーさんがそう言うということは、きっと人気の品物なんでしょうね。急がないと売り切れちゃいます」
「やる気があるのは結構だ。期待してるぜ、アーシア」

「はい、頑張ります！」

そんなアーシアに一誠は満足そうな顔を見ると、アーシアに連れられて一緒に店内へと向かって行く。

そう、彼女はまだ知らない。中が途轍もない修羅場と化していることに。

そして店内に入った瞬間、普段から温厚な彼女でも分かるくらい店内は異常な雰囲気で満たされていた。

「イ、イッセーさん、あの、何だか様子が……」

この異常な雰囲気にはアーシアは身体を震わせる。

まるで目の前に刃物突き付けられているような、そんな恐怖がわき上がってきた。その正体を彼女は以前から知っている。

それは殺気だ。

読んで字の如く、殺す気のことである。少なくとも、このような場で出ていて良いようなものではない。何故そんな物に満たされているのかが分からず、彼女は一誠の腕にギュッと抱きついてきた。

通常時であれば恥じらい急いで手を離すが、この恐い空気の中では寧ろ一誠にくっついていないと心がへし折られそうだからだ。

そんなアーシアを見て一誠は少し笑うと、頭をポンポンと軽く叩く。

「そんなに怖がんなよ。別に殺られるわけじゃねえつて。ただ、ここにいる奴等が全員『敵』ってのは否定しねえけどなあ」

「て、敵……ですか？」

一誠に頭を優しく触られたことで少しは恐くなくなったのか返事を返すアーシア。それで緊張が少し解れ、今の自分の状態に気付き顔が赤くなっていく。

今のアーシアは一誠に恋人のようにくっついてるのだから。

だが、そんな甘い雰囲気などこの場には無意味。それは空気の揺れる感覚を感じた一誠の凄みのある笑みが証明している。

「そろそろ時間か………いくぜ、アーシア。まずは一頑張りだ」

「へ？　は、はい！」

そのままズンズンと店の奥の方に歩く一誠。アーシアは一誠の手に引かれ、怖がりつつもドキドキしながら共に歩いて行く。

そして一誠が歩みを止めたのは、精肉が販売されている所である。

そこまで共についてきたアーシアは、その場に流れるより濃くなった殺気に身を竦めた。

「あ、あの、イツセーさん、何でこんなに皆さん恐いんですか？」

若干怖さから涙目になっているアーシア。正直に言えば無理もない。今、この場を満たしている殺気は、それこそ一誠が『仕事』をしている時の感じられるそれと同じくらい濃密なのだから。常人では耐えきれないだろう。

そんな殺気にまみれた雰囲気の中、一誠は凄みを増した笑みで前を見据えていた。

その視線の先に映るのは、とある台車を引きながら此方に向かって歩いてくる店員だ。その台車には何やら高級そうな肉のパックが乗せられている。

そして店員がその場所に着くと、大きな声で叫んだ。

「今から特別大サービス！ 肉の日の大特価、国産和牛ステーキ肉、300グラムで300円の販売を始めます！ お一人様一パック、全部で十点のみの早い者勝ちです、是非どうぞ、お買い得でええええええええす!!」

その叫びと共に一誠は動く。アーシアを挽き擦りながら一気に駆け出し叫んだ。

「行くぜ、アーシア！ この戦場で勝ちによおおおおおおおおおおお!!」

「え、え、ええええええええええええええええええええええ!!」
引き摺られるというより足が地に着かないまま引つ張られたアーシアは悲鳴に近い声を上げる。

だが、そんなか弱い彼女の悲鳴は周りの敵……もとい、家庭を支える主婦のおばさま方によってかき消された。

「「「「「おおおおおおおおおおお、その肉は私のもんだあああつあああつあああつあああつあああつあああ!!」」」」」

自分の性別である女を捨てたかのような恥じらいの欠片もない雄叫び。それはまさに肉食獣のように獐猛で、怒れる草食動物のような突進をもって上げられる。

アーシアの目にそれは人間のようには見えなかった。

ただ、人ではない『ナニカ』にしか見えなかった。良くも悪くも、悪魔達が一誠の暴力を見て同じ感想を抱くのと同じ気持になったのだ。こんなお手軽に身近な場所でそんな感情を抱いた彼女は、人の可能性を見ると共に人の欲にまみれた部分を見た気分になった。

そして群がる主婦達。普通に考えれば10名様などあつという間になくなるだろう。だが、誰一人として肉のパックを掴む者はいなかった。

「「「「「ぐあああああああああああつあああああああああああ

!!!
「」

そんな叫びと共に先頭に群がっていた主婦が、一気に吹き飛んだ。
「ええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」

そんな事態にアーシアは更に驚きの声を上げる。

何で日常生活の場であるここで、一誠が戦うかのように人が吹き飛ばのか、彼女は驚きで開いた口が塞がらなくなりそうになった。

勿論一誠に引っ張られているこの状態なので、犯人は一誠ではない。

一誠は吹き飛ばされて壁やら床やらに叩き付けられていく主婦達を見て笑みを深めると、そのブースの前で足を止めた。

「やっぱりいやがったか………ババアツ!!」

「この耳障りな声は……やっぱりアンタか、坊主!!」

一誠の目の前に立っているのは、周りと比較しても明らかに分かる巨体をした一人の女性。年の頃合いは50代に差し掛かろうかという壮年だが、その身から溢れ出す覇気は人のそれでは無い。巨体というのもあつてか、間近で見たアーシアには巨大な山のように見えた。

「あ、あの、イツセーさん、この方は……」

取りあえずそう聞くアーシアに、一誠は目の前の女性から目を離さずにアーシアに答える。

「ああ、このババアはこの界限じゃ有名な迷惑な奴だよ。誰が呼んだか知らねえが、人呼んで『駒王町の小霸王』。俺からすれば、毎回特売の度に邪魔しやがるクソババアにしかすぎねえよ」

一誠はそう言いながら軽く拳を構える。

その行為にアーシアは止めようとした。

当然当たり前だ。何せ一誠の拳は異形の者達でさえ叩き伏せるのだから、一般人に手加減して振るつたとしても無事では済まない。

だが、彼を止められる訳も無く、一誠の拳は見事にその巨体へと突き刺さった。

しかし、その女性は顔色一つ変えずに一誠の方に顔を向けてニヤリと笑う。

「アンタ、女に暴力を振るうなって教わらなかったのかい？　それもあたしの胸を触るだなんて、随分としたセクハラしてくれるじゃないか」

「ええええええええええええええええええええええ!!」

その異常事態にもう何度目になるか分からない驚愕の声をあげるアーシア。

女性の胸を触れた事よりも、一誠の拳を受けて平然としているその女性に驚いたのだ。きつとこの光景を見ていたらリアス達など開いた口が塞がらなくなっていただろう。それぐらい衝撃的だった。

そしてセクハラだと言われた一誠は恥じることなく吐き捨てるように返す。

「おいおい、あんたみてえな化け物に女なんて性別が付けられるわけねえだろ、ババア。そう見られてえんだったら、そこを退いて俺に肉を寄越しな。そうすりゃあ少しは女として認識してやるよ」

「はあつ、こんな所に女の子連れてるガキに言われたくないし認められようとも思わないね。欲しければ……あたしを倒してその手で奪い取りな!」

とてもスーパードやっていようなやり取りではない。

その間にも女性の陣取っている場所に迫る主婦達だが、その女性の豪腕が振るわれると共に皆吹き飛ばされていく。

アーシアはそんな様子にどうして良いか分からず戸惑い、一誠はアーシアに言葉をかけると共に女性に向かって叫びながら飛びかかった。

「上等だババアツ!　アーシア、このババアは俺が相手してるからその間に肉頼んだぜ!　二つ持つて行って『連れがいるので』って言えば大丈夫だからよ!」

一誠の指示を受け、取りあえず動き出すアーシア。
当然その女性の豪腕がアーシアを狙うが、その腕は一誠によって床に叩き付けられ止まる。

そして始まる激戦。その余波だけで周りの主婦は吹き飛び、あつという間に辺りは死屍累々の山が出来上がっていた。

そんな嵐を余所にアーシアは急ぎ足で肉のパックを二つ掴み、店員に言われた通りに話す。

「あの、あそこにいる男の人が、わ、私の……家族なので、彼の分も合わせて2パックですけど、大丈夫ですか」

言いながら顔を赤らめるアーシア。

乙女心としてはそこで一誠のことを恋人と言いたい所だが、恥ずかしくて家族と言ってしまふ。まあ、事実として一誠とは家族なのは事実なので、間違っていない。

アーシアに大丈夫か聞かれた店員は営業スマイルを浮かべながら大丈夫だと答えた。

それはよかったと安心するアーシアだが、逆に落ち着き過ぎている店員に心配になって話しかける。

「あの、大丈夫なんでしょうか……この状態……」

勿論アーシアの言う状態というのは、この目の前に広がる惨状だ。普通に考えてどう見ても警察沙汰にしか見えない。そんな異常事態だというのに、店員は変わらない笑顔で丁寧な答えてくれた。

「たぶん平気でしょう。当店では良くある光景ですので問題はありません。特売日に集まる主婦の方々や、夕方のお弁当の半額を買いに来る学生の方々などはとても当店を利用して下さるので、当店としても喜ばしいですから。それにお客様は気付いていないようですが、向こうの方を見て下さい。ちゃんと店員がガードを引いておりますので、他のお客様のご迷惑にはならないようにしてからです」

店員の言う通りに言われた場所を見ると、確かに他の店員がガードを退いて被害が出ないようにしていた。

それを見たアーシアは、店員に同情の念と共に慰労の言葉を贈った。

「ご苦労さまです。凄く大変ですね」

「ええ、もう慣れましたので……」

もう目が笑ってない店員にアーシアは可哀想だと思いながらも一誠に向かって戦果を叫ぶ。

この状態を少しでも押さえるためには誰かがそれを示す必要が

あつたから。

「イツセーさん、やりました~~~~~！　ちゃんとお肉2パック貰えました~~~~~！」

アーシアの声と共に、それまで戦っていた二人の決着も付いたようだ。

床に店内が揺れるんじゃないかというくらいの衝撃と共に沈む駒王の小霸王。そして立っている一誠は、アーシアに向かって実に嬉しそうな笑みを浮かべた。

「良くやった、アーシア！　これで今夜はステーキだぜ！」

それはもう無邪気な子供のように笑う一誠。

そんな一誠のに胸をときめかせつつ、アーシアは一誠の元に向かうと共にその場を後にした。

その後もウインナーの詰め込みセールや他の特売などを二人は熟して手に入れていくが、最初の激戦以降はそこまで衝撃的ではなくアーシアもすっかり慣れて普通に買い物をするようになっていた。

こうしてスーパールの買い出しは終わったが、アーシアは何だか凄いものを見たところの事を忘れることはないだろうと思った。

そして二人は今度、商店街へと歩いて行った。

その行く先にアーシアは少し心配になったが、今度こそ安全で健全な買い物出来るだろうと願わずにはいられなかった。

願うなら、一誠と恋人のような買い物出来る事を望みながら。

アーシアのドキドキデート その3

スーパーで信じられない非日常を体験したアーシアだが、子供のように無邪気に喜ぶ一誠を見て、まあいいかと思いい気を取り直すことにした。

次に向かうのは商店街。ここはアーシアも頻繁に足を運んでいるところであり、商店街に並ぶ店にも顔見知りが多く居る。

初めは異国の人間と言うことで多少驚かれていたが、何度も通い言葉を交わすうちに親しくなった。それというのも、やはりアーシアの人柄が好かれるものだということもあったのだろう。今ではすっかり顔なじみであり、謂わば商店街のアイドルのように祭り上げられている。

だから特に不思議な感じはしないのだが、先程の乱戦を見せられた後では心配になってしまう。

故にアーシアは一誠に不安そうな顔で問いかけた。

「あの、イツセーさん、今度は大丈夫なんですか？」

「ん？ なにがだよ」

アーシアの顔を見て一誠は少し不思議そうな感じに答えたが、その表情から何かを察したのかアーシアの頭を少し乱暴にくしゃくしゃと撫で始めた。

「イ、イツセーさん!？」

「お前が何考えてんのかは大体わかったけどよ、まあ大丈夫だろ。商店街には俺だつて良く行くけど、あんなババアはいねえしよ。それに特売もしねえからそんな殺気立ちはしねえだろうさ」

一誠にすれば先程の光景から安心させようとしているだけなのだが、アーシアからすれば好きな男に頭を撫でられているということで一気に顔が真っ赤になっていた。

そして撫でられたことが嬉しいのか、少し笑顔になりつつもあうあうと慌てているアーシア。その様子は小動物じみていて、見ている者の心を和ませる。

そんなアーシアを見て一誠はもう大丈夫だと思い、存分に撫で回し

た後に手を離して二人は再び歩き始めた。

そしてやってきた商店街。

この町に住む者ならば誰もが足を運ぶ所であり、スーパーが持てはやされている昨今、その勢いに飲まれることなくバイタリティ溢れる精神で意気揚々に皆営業している。

そして商店街と言うからにはやはり、様々な店が集合しているだけあって活気に満ちあふれて浮いた。

そんな中をアーシアと一誠の二人は歩く。

「やっぱここは賑やかですね」

「まあ、変わらずに騒がしいところだよ、ここはな」

アーシアは周りの店を見ながら楽しそうに笑い、一誠はそんなアーシアに大げさだと言いながらも悪い気はしていないようだ。

「ここで野菜とかをかうんだよ。スーパーよりも安いからなあ」

歩きながら商店街での買い物の予定を一誠は話し、アーシアはそれを聞きながら

微笑む。傍から見たらカップルの会話に聞こえるかも知れないと思ひ、顔を赤らめるも嬉しいアーシア。

そんなアーシアの胸中など知らず、一誠はこの商店街で買う物をアーシアに告げていく。

確かにスーパーで買えなくもない物が多いが、商店街ならもつと安くて済む。

ただでさえお金がない一誠にとって、これ程に良い条件はそうはない。だからこそ、彼はここに来た。

そしてそれ以上にも、ここに来る意味があるのだから。

「確かに商店街のお野菜とか、とても安いですよ。それにお魚も肉もとても新鮮で、お店の人もお優しいですし」

アーシアは目を輝かせながらそう言うと、その言葉に一誠は少しばかり顔を顰めた。

「え？ 店の連中が優しいってマジかよ？」

「？ そうですけど……」

不思議そうに首を傾げるアーシアに、一誠は少しばかり信じられない顔をした。

そんな顔をした一誠をアーシアはどうかしたのかと心配したが、一誠は何でもないと言う。

何せ、アーシアの性格なら一誠が日頃言われているようなことはないと思っただからだ。彼女には無意識で優しくしてしまうような雰囲気があるから、特に何も言われないだろうと。

そして二人が最初の目的地である八百屋に来た途端、一誠が考えていることが当たった。

「おや、これまた碌でなしが来たもんじゃねえか」

「うつせーよ、ジジイ」

八百屋を覗き込んだ途端に店主からそんな声をかけられ、一誠は悪態を付く。

その様子を見たアーシアは八百屋の店主と一誠が知り合いであることを知ったが、よくよく考えれば一誠が幼い頃から暮らしている町で、アーシア自身孤児院の食事を作る際に紹介されたのがこの商店街なのだから、一誠が知っていても可笑しくない。

つまり一誠も又顔見知りだということ。

その事がより身近に感じられアーシアは喜ぶと、互いに文句を言い合っているのを割るかのように店主に話しかけた。

「こんにちわ、おじさん」

「ん？ おお、アーシアちゃんじゃねえか！」

それまで喧々としていた店主だが、アーシアを見た途端に顔を綻ばせた。

「どうしたんだい？ 今日も野菜買いに来てくれたのか？ だったら良いピーマンがあるぜ。アーシアちゃんだったらかなりサービスするよ」

「そんな、悪いですよ」

かなり喜ぶ店主にアーシアは申し訳なさそうな苦笑を浮かべる。

そんなアーシアの様子に予想通りだと思ったからなのか、言葉を発しない一誠。

そんな一誠を放置し、店主とアーシアの会話は続いていく。

「それに今日は、その……いつものみんなのお買い物とは違うんです」
「え？ そいつは一体どういう……」

アーシアはそう言うと、一誠に顔を向けた。

その顔は若干ながら朱が入り、恋する少女の顔をしている。

「今日は、その……イツセーさんの御夕飯の材料を買いに来たんです」

「はあ？ 何でアーシアちゃんがこんな野郎の飯なんか……」

「わ、私は、その……イツセーさんの家族……ですから」

そう答えながら顔を真っ赤にするアーシア。

それを見た店主もやつと一誠との関係を察し、一誠にジト目を向ける。

「こんな可愛くて良く出来た子がお前みてえな碌でなしと家族とは世の故だぜ」

「うつせージジイ。白夜園を俺が紹介しただけだったの」

ふてくされつつもそう答える一誠。

それでも家族という部分を否定しない一誠にアーシアは胸がときめいてしまう。あながち一誠も自分の事を意識してくれているのだと。

そんなアーシアに気付くことなく一誠と店主は再び文句を言い合う。

話の内容から察するに、どうやら一誠は何度もこの店でツケにしてもらったことがあったり、ショボイものしか買わないことからそんな文句を言われているのだとか。

そんな二人をさておいて、店主の奥さんであろう女性が店の奥から出て来るとアーシアを可愛がりお菓子やら何やらとアーシアに渡していた。

そしてアーシアも遠慮しつつも満更出なく、男は喧々と、女性陣は穏やかに会話を楽しんだ。

結局当初の目的よりも時間が掛かり、アーシアの御蔭で手に入った食材が多かったのは有り難いが、存分に罵られた一誠はふてくされていた。

そしてその情報はあつという間に商店街に流れ、アーシアが恋人を連れて来たあの、恋人に買い物をさせているヒモが来たあの、あまりにも酷い話が他の店に行く度に二人にされていく。

どうやら一誠は他の店でも似たようなことをしており、商店街の皆から色々と言われていた。

だが、どうやら疎まれてはいないらしく、皆何だかんだと言って一誠のことは気にかけてくれているらしい。

そのため、文句を言いつつも一誠にちゃんと身体を労る言葉をかけていた。

そしてアーシアと一緒にいることで、ほぼ恋人かとかかわれることと。

「あれ、アーシアちゃん、今日は甲斐性無しの旦那と一緒になの！」

だの、

「甲斐性無しの碌でなしとアーシアちゃんが一緒だなんて心配だねえ」

といった言葉がかけられ、その度にアーシアは顔を真っ赤にして俯いてしまう。

だが、満更ではなく幸せそうに笑ってしまい、そしてそれによってさらにからかわれるということに。

「そ、そんな……で、でも、将来はそうなれたらいいなとは思ってますけど……」

アーシアは恥ずかしがったが、その言葉に充分幸せそうだった。

そんな帰り道、二人は夕陽に照らされながら歩いて行く。

「アーシア、助かったぜ。御蔭でしばらくは食いつなげる」

一誠はアーシアに感謝の言葉をかけながら頭に手を置いて撫でると、アーシアは顔を夕陽に照らされてもわかるくらい真っ赤にしている。微笑んだ。

「わ、私がちゃんと作ってあげますから、しばらくじゃなくても大丈夫です」

「そうかい。なら……それはありがてえな。何せ俺はお前にくつつい

てないと生きられない碌でなしの甲斐性無しだからな」

「もう、イツセーさん！　いくら自分の事でも悪く言わないで下さい！」

「そう言っても事実だからな。今じゃお前いねえと碌な食事にもありつけねえし。だから……これからよろしく頼むぜ、若奥様」

「~~~~~！　もう、イツセーさ~~~~ん!!」

夕陽の中、からかわれたアーシアは一誠にぶんぷんといった感じに怒りながら追いかける。一誠はそんなアーシアに笑いながら追いつかれない程度の速さで逃げていた。

そんな二人の追いかっこ。傍から見たら恋人同士のじゃれあいに見えるのかも知れない。

アーシアは一誠を追いかけながら今日一日を振り返り、確かに怖い思いもしたが、楽しかったと心に刻む。

デートというにはあまりにも酷いが、何というか、一誠らしいお出かけであった。

（でも、私……イツセーさんの『家族』になること、頑張りますからね。皆さんが言っていたことが本当でも、それでも……イツセーさんは私のヒーローなんですから。だから……覚悟して下さい、イツセーさん！）

こうしてアーシアと一誠のデート？　は終わった。

この日、やはり一番喜んだのはアーシアに違いない。

番外編その3 彼と彼

彼は異世界の彼と出会う その1

冥界で今、とある戦いが起こっていた。

それはこれからの未来を決めるために避けては通れない争い。

和平を成功させた三大勢力が次に取りかかったのは、目下の脅威である『禍の団』に対抗するために他の神話体系との協調することであつた。

そのため、まず最初に話を持ち込んだのが、ドイツなどを中心に東ヨーロッパに影響を持つ神々『アースガルズ』。所謂北欧神話の神々である。

その話を受けた向こうの長たる主神『オーディン』はその意見に賛同し、直ぐに協調への話し合いが冥界で行われる事となった。

元から世界の勢力の変動の様子を見て、オーディンはそれが必要だと昔から考えていたらしい。

そのため、その話し合いは何事も問題無く済んだ……はずであつた。

だが、そうはならない。その協調に反対する者が現れたからだ。

その者の名は『ロキ』。オーディンと同じ北欧神話、アースガルズの悪神である。

彼の者は他の神話体系との協調など認めぬと叫び、実はアースガルズの皆が危機としている『神々の黄昏（ラグナロク）』を引き起こそうとしていた。

そのためには主神を殺しても構わぬとオーディン達に牙を？き反逆した。

最初の時はその場に居合わせたアジユカ・ベルゼブブによって強制転移と強固な結界による強制封印で冥界の果てに飛ばされて無力化した。そんなものは時間稼ぎに過ぎない。

よって直ぐに悪神ロキを討伐することになり、そこで動かせる戦力としてリアス・グレモリーとソーナ・シトリー、その眷属達とアース

ガルズからはオーデインの護衛として来ていたロスヴァイセが向かうことになった。

通常、この程度の戦力では勝てない。だからこそ、勝つための手段が送られてくるまでの間、彼女達はロキを縛り付け時間稼ぎをしなければならぬ。

そしてリアス達討伐隊は転送されロキがいる場所へと飛んだ。

その先に待っていたのは、予想通り封印を打ち破って出てきたロキ。そして彼の息子である神殺しの大狼フェンリル、その子であるハティとスコル、そして五大竜王の一角である大蛇ミドガルズオルムが待ち構えていた。

そこから始まった激戦。一誠が匙がロキの相手をし、リアスとソーナ達が他の敵を相手に戦う。

数こそ一誠達が有利だが、その戦力はロキ達の方が上。

苦戦を強いられる一誠達は次第に追い詰められていくが、必死に食らい付いていく。

そして遂にロスヴァイセが連絡を受け、転送された逆転の切り札。全てのものに裁きを下す絶対の鎚『ミョルニル』がその場に現れ、ロスヴァイセからオーデインの言伝で一誠がそれを使うことに。

「イツセー！」

「はい、部長！」

やっと来た逆転の可能性に気合いを込め、一誠は主の意を酌み闘志を燃やしながらミョルニルを掴もうと進む。

だが、その手は届くことはなく、あと少しの所で一誠は飛び出して来たフェンリルに噛み付かれてしまった。

そのまま牙によって身体を穿かれ、真っ赤な血を流しながら空中へと投げ出される一誠。あまりのダメージに赤龍帝の鎧も砕け散って解除され、彼は地面へと叩き着けられた。

「イツセー!?!」

あまりの衝撃なのか砂煙が立ち上がり一誠の姿が映らなくなる。だが、それでもフェンリルに噛み付かれた所を見たりアスやその仲間達は如何に一誠が致命傷を受けたのかが分かり、悲痛な声を上げる。

神をも殺す牙を持つフェンリル。その牙に貫かれたら悪魔である一誠など持たないだろう。確実に致命傷であり、現場にもう治療薬であるフェニックスの涙はもうない。つまり、一誠の生存は絶望的であつた。

「よくもイツセーをつ!!!」

一誠がやられたことに激怒し、リアス達がロキ達に向かってさらに攻撃を仕掛けていく。皆一誠がやられたことで仇討ちだと狂気に染まりながら戦い、リアスは相打ち覚悟で魔力を高めていった。

その戦いは激しいが、ロキはそんなリアス達を無力だと嗤う。もう自分にとって危険であるミヨルニルを振るえる者などいないから。一番の厄介者である一誠はもう死んだのだから、その抵抗は無意味だと、哀れだと蔑ながら。

しかし、そんな戦いを繰り広げている中、先程一誠が叩き着けられた場所の砂煙から何かが出てきた。

「うえっ、げほ、げほ、げほ………ったく、なんだよ、こいつは!? いきなり飛ばされたと思ったら煙いのなんの。おい、久遠、どうにかならねえのかよ」

「さあね。煙いっちゃあ煙いが、だからってこんなの吹き飛ばすのに術使いたくねえし。そこから出ればいいだけの話だろ」

「ちつ……ああ、クソ、あのクソ総督! 帰ったら覚えてろよ」

砂煙から出てきたのは、駒王学園の制服を着た兵藤 一誠であつた。その身体は傷一つなく、まさに健康そのもの。

悪態を付きながら砂煙から出てきた一誠は辺りを見回しながら考え込む。

「ここはどこだよ? 空の色からして冥界だとは思うけどよお」

事態がどのようなになっているのかなどまったく分からない彼。

「がああああああああああああああああああああああああ!!」

そんな彼の姿を見て咄嗟に襲い掛かるフェンリル。

「に、逃げてイツセー!」

「イツセーさん!」

「一誠先輩!」

「一誠君!？」

「イツセー!？」

それまで戦闘に集中していたリアス達は一誠が無事なのかと言うことよりも、再び襲い掛かるフェンリルの牙が一誠を噛み砕こうとしていることに悲鳴を上げた。

よく考えれば分かるはずなのに、どうしてあんな事になって無傷でいられるはずがない一誠が怪我の一つなく立っているのか、そのことに疑問を持たなかったのか？ 彼女達は皆、あまりの苦戦に追い詰められてそこまで考える余裕がなかったのだ。

唸り声を上げながら突進するフェンリル。その姿を見た一誠は、咄嗟に赤龍帝の籠手を発現させるとフェンリルに向かって…………。

「いきなりなんだよ、犬つころ！ こっちはテメエに何もしてねえのに仕掛けてくんじゃねえっ!!」

思いっきり左拳を叩き着けた。

その衝撃でフェンリルの顔が歪み、血を吐きながらフェンリルは吹き飛ばされる。

その光景を見たロキはあまりの衝撃に驚愕した。

「何故貴様が生きている!? フェンリルの牙を受けて無事なはずなどっ!」

それはリアス達も同じであり、開いた口が塞がらなくなる。

そんな驚いている周りの中、驚かせた張本人である一誠は不機嫌そうに顔を顰める。

「まったく、いきなり飛ばされた先で犬に襲われるなんてついてねえ」
そんな一誠に未だに立ち続けている砂煙の中から呆れ返った声がかけられた。

「おい、イツセー。ありや犬じゃなくて狼だろ。見た事ねえサイズだけどよ。そんなこともわからねえのかよ」

「ああ？ 狼？ 犬と違いなんてねえだろ」

「まあ、お前さんからしたらケロベロスだろうと犬にしか見えねえだろうけどよ」

そんな下らないやり取りをしている一誠に、ロキが警戒を込めて声

をかける。

「何故無事なのだ、貴様。我がフェンリルの牙を受けて無傷でいられる訳が無いというのに。それにこの気配……どうして貴様は人間の気配を発している!？」

いきなり悪魔だったはずの一誠から人間の気配しか感じられないことに驚くロキ。

リアス達はそれまで気付かなかったが、確かに言われて見れば今の一誠から悪魔の気配がないことに気付いた。

そして驚き言葉を無くす。人間を悪魔にすることは出来る。それが転生悪魔のシステムなのだから。だが、逆は有り得ない。悪魔を人間にすることなど不可能なのだ。

だというのに、ならば何故、今の一誠からは人間の気配がするのか。その答えは本人に聞く以外はないだろう。

当の本人と言えば、上空から見下してくるロキを不機嫌に睨み付けていた。

「あ？ テメエ何言つてやがる。それよりも見下しやがって、ケンカ売ってるってんなら買つてやるよ」

まさに不良のような態度。そんな態度を取られたロキは当然青筋を立てる。

「どういう手品を使ったのかはわからないが、随分と嘗めた口を叩いてくれる。その生意気な口、二度と叩けぬようにしてやろう。もう一度我が息子の牙で貫かれるがいい。行け、フェンリル、ハティ、スコル！」

ロキの命を受け、それまで戦っていたリアスとソーナの眷属達を弾き飛ばしながら一誠に向かって飛びかかる三匹の狼。

そんな獣に襲われそうになっている一誠は、それまでリアス達が見た事もない凶悪な笑みを浮かべながら叫んだ。

「OK、何でかは知らねえが、テメエが売ってきた。そんでオレが買った。だからテメエをボコる！ 徹底的になあ！ 久遠、リハビリ代わりだ。思いつきり行くからテメエの身はテメエで守りな！」

「あ、おい、イツセー！ つたく、まったく聞いてねえ。あまりに暴れ

て地形を変えんなよ」

砂煙が晴れ始めると共に浮かび上がる人影に向かつて一誠はそう叫ぶと、凶暴な肉食獣の如き笑みを浮かべながら力を込める。

[illegible]

冥界の果てで、赤き凶暴なる暴君のオーラが吹き荒れた。

彼は異世界の彼と出会う その2

事の始まりを話すのなら、それはあの冥界を壮絶とさせた二人の『ケンカ』から二週間が過ぎた後の事から語るべきであろう。

あの激戦で結局引き分けということになり、重傷を負った二人は各自で治療してもらっていた。

一誠はアーシアの御蔭で一週間後には身体は治ったが、流石に体力の消耗が激しかったため、動けるようになるのに三日ほど掛かった。対してヴァーリは墮天使陣営にアーシアほどの治癒能力者がいないため未だ治療中であるが、三週間ほどで動ける動けるようになるらしい。

それでもまだマシな方だ。何せ二人がああ戦いで負った重傷はそれこそ、死んで当たり前、もし生き残っても一生を病院のベッドで満足に身体を動かすことさえ出来ずに生きていくはめになる程の損傷だったのだから。

本来ならば死んでいるのが当たり前の大怪我を負ってこの程度で済んでいるのは、偏に一誠もヴァーリも限界を超えているからだろう。

早く動けるようになった一誠は勝負の結果に悔しみ、より再戦への闘志を燃やす。あの時、それこそ自身の最強を持つてぶつかった。だが、それでも結果は引き分け。

確かにそれは悔しいが、同時にもっと勝ちたいという渴望がわき上がる。自身の限界など関係無い。闘志は燃え上がり、戦意は高まる。戦いに次と言う言葉はないが、生き残ったのなら別だ。互いに再戦を望むのなら、絶対に次があるのだから。

故に身体が動くようになった一誠はこれまで以上に身体に負荷をかける。

普通なら治った身体にこのような酷な真似はしない。しかし、彼は治った身体を動かして見て、そのあまりの衰えが許せなかった。だからこそ、これまで以上に戻すために、それまで以上の負荷をかけて強制的に鍛えることにしたのだ。

当然アーシアはそんな一誠を心配するが、彼の事を分かり信じている彼女は、そんな一誠を止めることはなかった。

家族なら信じて支えるのが当たり前だと、食事や家事などで彼を助けようとアーシアは健気に頑張る。

そんな二人と、療養中であることで普段より弄りやすくなった一誠を弄りに来る久遠の前に、その話はやってきた。

「はあ？ 平行世界への転移実験？」

いつもと変わらない狭い室内に、驚きと呆れが混ざった声が響き渡る。

その声を出したのは、明らかに怪しい者を見る目をした一誠。そしてその視線の先には、アザゼルが胡座をかきながら座っていた。

「そうだ。実に興味深い話だと思わないか？」

科学者らしい若干危険な興奮を含んだ喜びの声でそう言ってきたアザゼルに、今度はその場にいる久遠が軽く手を上げて問いかける。「総督様、いきなり随分とぶっ飛んだ話をしてるようで。つとて言うか、何でいきなりそんな話になったんですか？」

その言葉に来客ということでお茶を淹れてきたアーシアも頷いた。

そんな3人の様子を見ながらアザゼルはニヤリと笑うと、何故こんな突拍子もない話を持ってきたのかを説明し始めた。

「オレが研究者気質つてのは、まあ知られてる話だよな。そこで神器の研究をしてるわけだが、その一環の一つとして、平行世界についての研究もしてるわけだ」

一体何処に関係があるのか丸つきり分からない一誠は眉間に皺を寄せ、アーシアは不思議そうに首を傾げる。久遠だけは何かを気付いたのか、面白そうに笑みを浮かべた。

久遠の顔を見て、興が乗ったらしくアザゼルは更に得意そうに話す。

「まあ、その原理や方法は難しいからお前等に言っても分からないと思うけどよ。取りあえず、平行世界への移動つてのは科学者の夢の一つなんだよ。もう一つに枝分かれした可能性の世界。場合によつて

はその世界から資源やら何やらを手に入れられて資源不足の解消って手にもなる。まあ、オレはそんなことは気にならねえけどな。オレはただ、『面白そうなものに目がない』それだけだよ」

その説明に一誠と久遠の二人は直ぐに納得した。

この総督が愉快的な人物だと言うことは、過去様々な依頼から分かっていく。

今回もそんな『奇妙』な話なのだろうと。

そして同時に嫌な予感が二人には感じられた。こういうときの目の前に居る堕天使の総督は碌なことを言わないと、今までの経験が語ってきているのだ。

そして二人の予想通り、アザゼルは碌でもないことを言い出した。

「それで依頼なんだが、その実験に付き合ってくれねえか？　ぶっちゃけ跳んでくれ」

「絶対に嫌です」

「巫山戯んなー」

アザゼルの言葉に一誠と久遠は同時に拒否の言葉を吐いた。

何せ今までに例がない話であり、いくら報酬が良からうが命の保証がまったくない危険過ぎる依頼を受ける馬鹿はいない。そしてこの総督がそういった依頼をする度に碌な目に遭ってこなかった二人は受けようなどと思わなかったのだ。

「そもそも、何で俺達なんだよ。そんなもん、テメェんところのヴァーリでやりやいいじゃねえか」

一誠は不機嫌になりながらそう食いかかると、アザゼルは少し溜息を吐きながら答える。

「本当だったらその予定だったんだが、お前さんと違ってこっちは未だに治療中なんだよ。アーシア・アルジェントほどの治癒の力を持つ神器もねえから、医療力プセルに未だに詰まったままだ。そんなわけで、アイツと同じ程の力を持つお前さんが選ばれたって訳だ。何せ初めての実験なんであ。ある程度力が強くねえと次元の壁に潰されそうなんだよ。その点、お前さん達ほど安心して任せられる奴はいないだろ。それに向こうに着いたら何があるかわからねえからな。強い

に越したことはない。お前に勝てる奴なんて、そんないなさそうだしな」

そう言われようと嫌なものは嫌だと言いたい一誠。それは久遠も同じであり、苦笑が在り在りと出ている。

そんな不安な二人の様子を見て、アザゼルはケラケラと笑いながら話を進めた。

「ちゃんと命の保証はしてやるし、こっちにも帰ってこられる保証もしてやる。期限は二週間、その日時になったら自動でこっちに戻される仕組みだ。それで報酬だが、2000万でどうだ？」

「やります」

「やるわけねえ……ておい待て久遠！ 何でそうなんだよ」

二人の意見が食い違い、一誠は久遠に噛み付く。

すると久遠は真面目なような、悲しいような顔で一誠に話しかけた。

「お前がここんとこずっと寝てたもんだから、仕事がまったくないんだよ。しかも前回のケンカが広まって、お前を出すんじゃないんだって皆ビビってこっちに仕事をよこさねえんだよ。御蔭でこっちは段々干上がり気味だ。ここは少しでも仕事があるんだったら受けるべきだろうよ」

「だからってこんな馬鹿げた仕事に乗るのかよ。いくら何でもキナ臭過ぎんだろ！」

「プライドで飯は食えない。それに命の保証と帰る手立て、報酬もちゃんとあるんだ。受けて損はねえだろ！」

互いに譲らないと額をぶつけ合う一誠と久遠。

そんな二人の様子にアーシアはあわあわと慌て、アザゼルは笑う。「そんな小難しく考えんなよ。要はお前さんの療養旅行だと思えばいい。ただ行くだけで金が貰えるなんてこれほど楽な仕事もねえだろ」その言葉に一誠は考える。

確かに行くだけで貰えるんだったらそれに越したことはない。だが、そんなつまらなさそうな仕事を受けるというのは正直嫌だ。しかし、久遠が言うことももつともであり、プライドでは飯が食えないの

も確かであり、ここ最近稼いでいないことで自分の生活が貧困に喘いでいるのも事実。（大体の金は孤児院に、そしてアーシアが買ってくる食材の金額も結局孤児院に返している以上、減っているのはまったく貯蓄をしない一誠の金のみ）

どうするかと悩んだところで、アーシアが一誠に微笑みかけてきた。

「イツセーさんはいつも働いてばかりですから、たまには翼を伸ばしてきたらどうですか？ 私なら大丈夫ですし、白夜園のみんなもいますから」

その言葉は一誠への思いやりが込められており、それで一誠は折れた。

「わかった。仕方ねえから受けてやるよ、その仕事。ただし、前金に半分こつちによこしな。そんなわけわかんねえもんに付き合わされるんだ。そうでもしなきゃあわねえよ」

「マジか、イツセー！ これで俺も少しは懐が暖まる」

「助かったぜ、赤腕。んじや四日後に又来るから、そんな時に金渡して跳んでもらうわ」

これが事の始まり。

そしてその言葉通り、アザゼルによって一誠と久遠は旅行と言うには危険が多すぎる未知の領域へと転送された。

『平行世界』という未知へと。

そして現在に居る。

転送されて見れば辺り一面砂煙。急にそんなものに包まれたものだから一誠は咳き込みながらそこから離脱すれば、大きな犬（フェンリル）に襲われたというわけだ。

そんな一誠とは別に、久遠は煙いと思いつつも足下に転がっているものを見つけた。

「あれ？ もしかしてコレって……ああ、やっぱり。何でこんなことになってんのかねえ」

そう言いながら久遠は『それ』をよく見る。

腹や足などが大きく穿かれた痕、そしてそこから血が溢れている所を見るに先程受けた傷らしい。その顔は真っ青になり、死にかけていることが直ぐに見て取れる。

そして何でそんな目に遭っているのに使っていないのか、その手元の近くには何故か小さなケースと、その中に入っていたであろう小瓶が転がっていた。その小瓶の中に入っている物は、悪魔でない久遠でも知っている万能の治療薬である。

それを見た久遠は治療薬を拾い、少し考えた後に『それ』に使った。「これが見知らない奴だったら喜んで猫糞するんだが、生憎同じ顔の奴に死なれるのは後味が悪いからな。自分の幸運に感謝しな」

そして『それ』の傷口が塞がり顔色が元に戻ってきたのを見ると、何やら一誠が襲われて何か喚いている。その襲ってる者を見て犬じゃなくて狼だと突っ込んだ。

そして一誠が戦う気を見せ始めた所でやばいと思いながら距離を開けていく。

その予想通り、一誠からオーラが吹き荒れて辺りの物は勿論、それまで久遠を覆っていた砂煙も吹き飛ばされた。

一誠はリハビリがてらに最初から飛ばしていく。

普段の彼ならここは籠手を出しただけで戦うが、あのケンカから少し経っているため、調子を見るために最初から禁手を行った。

『Welsh Dragon Balance breaker
!!』

そして赤きオーラの嵐を吹き荒れさせながら、赤龍帝の鎧を纏った一誠は獣染みた咆吼を上げる。

その叫びはこの場にいる全員の身体を無条件に震わせ、恐怖を駆り立てる。

リアス達はそんな一誠に困惑するが、そんな事など知らない一誠はフェンリルに向かってその身体を向けた。

「まずはそのでけえ犬ツコロ、テメエからだ!!」

いつもと同じ、馴染み深い行動。拳を地面に叩き着け、巨大なクレーターを作ると共にその反動で前に弾き跳ぶ一誠。そのまま空中で身体を捻りながら回転し遠心力を乗せた左拳を、此方を噛み砕かんと口を開いて襲い掛かるフェンリルに向かって振り抜いた。

その途端、骨肉が碎ける音が辺りに響いた。

まるで何かに怯えるような悲痛な叫び声を上げながら吹き飛ばされるフェンリル。そのまま吹き飛ばされ、何度か大きな岩を砕きながらその身を埋めつつやつと止まった。

その顔は血まみれであり、神殺しの牙は大半が砕け散っている。息は絶え絶えであり、完璧に意識を失っていた。

「なっ、フェンリル!？」

驚きのあまり目を見開くロキ。

何せそれまで苦戦をしていたはずの相手が、たった一撃で自慢の息子を倒したと言うのだから。

そしてそれに戸惑いを見せるのは、フェンリルの子供であるハティとスコル。

一誠はフェンリルを吹っ飛ばした後に体勢を整えると、赤いオーラをその身から噴きだし、それと共に左拳の宝玉が光り輝いていく。

『Boost, Boost, Boost!』

人工的な音声が続いていく中、その宝玉の輝きは目も当てられない程に光り輝く。

そしてその音声が止まるとともに、一誠は赤き輝きに満たされた左拳を未だ戸惑っている二匹に向かって振り抜いた。

『explosion!』

「ドラグブリットツツツツバアアアストオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

その拳から放たれた、ドラゴンのオーラを圧縮した砲撃。

それは全てを飲み込まんと巨大な柱となって二匹に迫り、逃げることなど許さずに飲み込んだ。

そしてその柱は更にその後にある巨岩を幾度となく飲み込んで消滅させ、光が収まるとその射線上にあったものは何一つとして存在し

ていなかった。ただ、柱が通った跡だけが、くつきりと大地に刻まれている。

一誠はそれに目を向けて軽く左拳を開いては握り、調子確かめるようにしている。

そんな彼のあまりの破壊的行動に、それまでの『一誠』を知っているリアス達は彼の豹変ぶりに困惑を隠しきれない。

そして最後に残ったミドガルズオルムもまた、一誠に向かって襲い掛かるが……。

「さつきから動物ばかりだなあ、ああつ！」

少し飽きたような声を出すと共に、背中から赤きオーラを噴き出しながら向かって来たミドガルズオルムに突進する。そしてその拳がミドガルズオルムの顔面にめり込んだ途端、あまりに威力にミドガルズオルムの頭部が弾け飛んだ。

頭部を失ったミドガルズオルムは力なくその巨体を地面に倒れさせると、動くことなくその生を終了させる。

これでロキの戦力である四匹の獣は皆行動不能かもしれない。その事に驚愕し怒りを燃やしたロキは一誠に向かって叫ぶ。

「貴様ああああああ、良くも我が息子達を!!」

そして憤怒のままに、その手に力を集中させて一誠に向かって砲撃を放った。

それはこれまでリアス達に放っていた手加減したものではない。ロキの本気の殺意が込められた一撃である。

一誠はその直撃を受け、彼が居た周りの地面が一気に爆発した。

「イツセーーーーー!!」

リアスの口から出た叫びが爆炎に飲まれつつも辺りに響く。

これで普通ならとつくに消滅しているだろう。助からないと誰もが思っただろう。

だが、ここにいるのは彼女達が知る『一誠』ではない。

爆炎が吹き飛ぶと共に、その場にいた一誠は自分の身体の鎧が彼方此方碎けている所を見て、実に……そう、実に楽しそうに笑った。

「いいねえ、いいねえ、こうでなくちやなあ！ さつきから犬畜生ばかりでつまんなかったんだ。やっぱり飼い主の方がやるじゃねえか。なら、アンタなら試すのに丁度良い。思いつき出すから、少しは耐えてくれよ！」

そして彼は口を開く。

二週間前に唱え、冥界の地図を変えた忌まわしきあの力を。

その気配を感じ取った久遠は一誠に向かって馬鹿だアホだ、甲斐性無しだと文句を叫びながらもリアス達の前に現れた。

「やあ、初めましてというのも少しばかりアレだが、今はそんな所の話じゃないんでね」

「なっ、あなた誰よ!？」

目の前に現れた久遠に驚くりアスだが、久遠は不敵というには少しばかり焦った笑みを浮かべながらリアスに話しかける。

「今俺が誰かっていうのは後回しで。早く逃げないとあの馬鹿に巻き込まれるんでね。結界張るから、急いでこっちのアンタの眷属とか呼んでくれ。あの馬鹿の力じゃ俺でも広範囲は無理だからさ」

焦りながら指示を出す久遠。

そしてそんな久遠の事など気にかけることなく一誠はそれを唱えた。

『我、目覚めるは覇の理を神より奪いし二天龍なり。無限を喰い、夢幻を憂う。我、赤き龍の霸王と成りて、汝を紅蓮の煉獄に沈めよう』

それは彼女達の知らない禁じられた言葉。

そしてこの先にあるのは、この世界でそれを知る者がいるかどうか分からない新たな力。

『覇龍進化！』

その叫びと共に、久遠にとっては少し前に経験したのと同じ、世界の悲鳴が聞こえた。

赤き光が全てを覆い、この世に唯一無二の力の化身を顕現させる。

『覇龍進化、赤龍暴帝の重鎧殻』

その言葉と共に平行世界のこの場にて、赤き龍の暴君が降臨した。

彼は異世界の彼と出会う その3

リアスは目の前で起こっている事態が理解出来なかった。

つい先程まで、共に戦っていた愛しい僕である『イツセー』が後一步でロキを倒せるはずだったのに、最悪のタイミングでフェンリルの凶牙に掛かり死んだ。

別に死んだのを看取ったわけではないが、あの負傷では長くは持たない。そして此方にあるフェニックスの涙がもうない以上、イツセーを回復させる手段はない。彼女の眷属であるアーシアを連れてこれなかったことに、ここまで悔やんだことはないだろう。

故にそれを行ったフェンリル、そしてその主であるロキにリアスは激怒しイツセーの敵討ちを自暴自棄になりつつも行おうとしたのだが、そこから彼女にとって思いがけないことが起きた。

何とイツセーが生きていたのだ。

何故かは分からない。だが、まるで『ダメージ』などないのかの如く普通に砂煙の中から出てきた。

そのことで泣きそうになってしまうリアスや他の眷属達。

だが、普通なら可笑しいと思うはずだろう。何故、あそこまでの重傷を受けてそんな平然としていられるのか。何故、死んでいないのか。服装にしたってそうだ。砂煙から出てきた『イツセー』は血の一つも流していないのだから。

そんな小学生でも気付くことに、この戦場であまりにも衝撃が大きいことを見せられた皆は気付けなかったのだ。

ただ、イツセーが無事である。その事実だけが彼女達の心を占めた。

そんな如何にも『幸せ』なリアス達だったが、この後はそうはいかない。主人公復活を成した後は、怒濤の逆転劇の始まり。

だが、彼女達がこの後見たのは、逆転というにはあまりにも暴虐過ぎた。

それまで幾度となく仲間達が戦い押さえつけるのが精一杯だったフェンリルを一撃で戦闘不能に追い込み、その子供をドラゴンのオー

ラによる砲撃で射線上にある全ての物と共に消滅させ、五大竜王のミドガルズオルムの頭部を一撃で粉砕し絶命させた。

それは今までのイツセーではまず出来ないような事であり、それを目にしたりアス達は驚愕のあまり目を見開く。

一体彼に何があったのだろうか？ 一体彼はどこでこのような強さを身に付けたのか？ その力は主であるリアスですら知らない。

そして極めつけはロキが驚きと憤怒を込めてイツセーに叫んだことだ。

ロキは言った……何故人間の気配がするのだと。

その言葉にやつとリアスはその『イツセー』が可笑しいことに気付いた。

悪魔であるはずのイツセーからは、人間の気配しかしないと言うことに。

そのことについてイツセーに聞きたいが、こんな事態で聞けるわけもない。

そして彼女がその言葉の真意を確認する間もなく、そのイツセーは更に動いた。

それは彼女達の知っているイツセーとはまったく違う。

圧倒的なまでの獣染みた殺気。まるで闘争を心から楽しむような声でロキに叫ぶと、その身から今までからは信じられないような力を出し始めた。

その力は軽く感じ取っただけでも魔王級以上。

それでもまだ全開ではない、出し始めたばかりである。

その先に何があるのか、それはこの場にいる誰も分らない。ただ、一人を除いては。

その一人である人物は当然彼女達は見知らないわけで、突然目の前に現れた彼にリアスは警戒と驚きを顕わにした。

だが、その人物はリアスの言葉を取り合わず、少し焦った様子でリアスに指示を出すと、今まで彼女が見た事のない術式の結界を張った。

そしてその結界越しに彼女は聞いた。

その禁断の力を発言させるための言葉を。そして、その先に至る言葉。

そして見た……それまで纏っていた赤龍帝の鎧ではない、まったく異質な姿を。

そして感じた……世界が啼き悲鳴を上げるのを。

『それ』は今まで彼女達が見た事のない存在。絶対の力にして暴力の化身。

「っ……………かはっ!？」

その身から発せられるのは、当たるだけでも死にける程の殺気。それに結界越しだというのにリアス達は当てられ、小猫が呼吸が出来なくなり顔を真っ青にしながら喘ぐ。

その身が出す圧倒的にして重圧過ぎる存在感は、彼女達の眷属をその場に釘刺し本能からの恐怖により震え上がらせる。それはリアスやソーナ達も同じであり、上級悪魔でも身体の震えが収まらない。

「な、何でっ!？」

「か、身体がっ!？」

その事に困惑する二人。特にリアスは好いている男に自分が恐怖していることが信じられなかった。

そんな彼女達と違い、結界でその衝撃を防いでいる男は如何にもな文句を洩らしながらも呟く。

「頼むから、あまり派手にやり過ぎるなよ。後始末は御免だからよ」

その言葉を言いながらも、その男は無駄だと分かっているように呆れた溜息を吐いた。

世界が悲鳴を上げる。

それはまるで世界という肉体に刻まれた傷の痛みから叫ぶかのように、その存在そのものを畏れ否定したいと震え上がるかのように。その原因たる一誠は、約二週間振りに出した力の調子を見るかのように身体をコキコキと動かす。

「ああ……、やっぱり思いつき出すと気分が良いもんだ。テメエで自制してるから仕方ねえとは言え、やっぱりこういう開放感っての

は良いモンだぜ」

上機嫌にそう口にする一誠だが、その身から発せられる殺気は気楽な口調に反して重厚で重々しい。

その圧倒的な力の波動を受けて、ロキは顔が固まるのを感じた。

「なっ!? 貴様は一体何なんだ! その姿は、その力は一体!」

赤龍帝の鎧は知っていたが、彼の姿はそうではない。

より巨大化した腕と拳、身体は猫背気味になりより獣らしさを感じさせ、その尾は強靱さを感じさせる。

龍というよりも恐竜に近く、その力からは『凶龍』と言うべきだろう。

まさにこれまでにない、凶悪なまでの暴力の塊。

それはその場にいただけで全身に叩き着けられる殺気から感じられるだろう。

それに当てられ、神であるロキでさえも恐怖を感じる。

神である自分がたかが人間か悪魔かわからない存在に恐怖するなど、と理性では思うが本能は真逆に危険信号を常に発していた。

逃げなくては死ぬと。それ以前に逃げられないと。

それを認めたくないが故に、ロキは否定の意を込めて叫び超えを上げると共に一誠に向かって魔法を放った。

「認めん、認めんぞおおおお!! 貴様如きに、この北欧の悪神たる私が恐怖するなど!」

その砲撃は今までの比ではない。それまで時空を破断しようとしていた魔力も込めて、完全に一誠を消し飛ばすべく放った。

それをは避ける間もなく一誠に直撃する。

途端に力が膨れあがり、一気に大爆発を引き起こした。

それは全てを飲み込み、文字通り辺りを灰燼に帰す。本来ならばリアス達も飲み込まれて全員死んでいただろう。それ程の大爆発がリアス達に襲い掛かるも、それはその男……久遠の張った結界によって止められていた。

結界の強度はそれこそ彼女達が張る結界の何倍も硬い。リアス達なら張っていたところで飲み込まれていただろうに、その結界は物の

そんな大爆発の中を見て、リアス達は絶句する。

こんな超破壊の前に無事な者などいるのかと。そんな絶望に染まりつつある顔を見て、久遠が実に面白そうに笑っていることに気付かずに。

そして彼女達は更に信じられない物を目撃する。

爆炎が晴れ、全てが吹き飛んだ爆心地にそれはいた。

その赤き重厚な鎧は一切の損傷なく、二つの眼からは闘志の燃えたぎる色が見て取れる。

直撃を受けた一誠は一切の損傷なく平然とその場に立っていた。

それを見て口キは今度こそ言葉を失う。

自身の全力を受けて、それこそ時空を破壊するほどの力を受けて
まったくダメージを負っていない。それが如何に異常なことなのか
？ 彼の主神、オーディンでさえ無事では済まないはずの大火力をそ
の身に受けて無事。

それがロキの常識を越えていた。

そんな驚愕している中、一誠は始める。

「いやあゝ、悪くねえ攻撃だったぜ。リハビリにやあ最適だった。他の奴だと殺す気でやってこねえか、怖がつてるモンばかりだから、こうして良い具合の奴は受けるのが丁度良い。だからそろそろ……こっちから行くぜ!」

ロキに向かってそう言うと、一誠は強靱な尾を地面に向けて叩き着け、一気にロキに向かって弾け飛ぶ。

叩き着けられた大地は巨大なクレーターを刻み込んで陥没し、その衝撃だけで大地が揺れる。

そしてロキに向かって突っ込んだ一誠は獣のような獰猛な笑みを浮かべながら拳を繰り出した。

「ラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアッ!!」

「クツ!？」

その拳を防ごうとロキは腕を突き出して結界を張るが、拳が激突し

た途端に結界は薄いガラスのように砕け散っていく。

そしてロキの手に到達し、その手を肘まで一気に持って行つた。

「つつつつつ!? ガアアアアアアアアッアアアア!! う、腕があっあああああッああああああああああ!!」

あまりの威力に腕が千切れ飛び、その激痛に叫ぶロキ。

飛び散る血が大地を赤く染め、見ている者達の恐怖を更に駆り立てていく。

一誠はそんな中、少しばかり不満そうな声を上げた。

「やつぱり鈍ってやがる。前だったら野郎の半分くらい持つて行けたのに、この程度じゃやってられねえってのによお」

その言葉を聞いてロキは背筋がゾツとした。

この悪神の腕を一本持つて行きながら、まったく満足していない。それどころかまだ本気ですらく、力の片鱗でいどしか見せていないというのだから。

それがどれだけの恐怖なのか? まるでアリがどんなに頑張ろうと人間には敵わないように、自分が小さく矮小である存在だと思い知らされる。

認めたくない。しかし、結果と自身の本能はそれを認めてしまっている。

目の前にいる『これ』は絶対に戦つてはいけない相手だと。

だが、もう無理だ。逃げることは出来ない。何故なら、もう目の前のそれに自分は捕らえられてしまっているのだから。

全身から噴き出す汗を感じながらロキは少しでも事態を逆転しようと考ええる。

そんなロキの心情などまったく考えず、一誠はオモチャを使って遊ぶ子供のようにな无邪気な、悪意はないが殺意は充分な笑みを浮かべながら更に動く。

「おいおい、こんな軽く触った程度で逃げんなよ。まだまだこっちはやってねえんだから、もう少し付き合えっての」

そして再び一誠は仕掛ける。

獣のような咆吼を上げ、世界を震え上がらせながら尾で大地を粉碎

し、飛び上がってからロキに向かって突進する。

その様子はまさに赤い流星。吹き荒れる赤きオーラが尾を引いて、幻想的にも見える。しかし、その威力は幻想というにはあまりにも酷すぎるものだ。

ロキはそれを受けるのは不味いと急いで回避するが、それでも余波だけ吹っ飛ばされて大地に叩き着けられ、躲された一誠の拳はそのまま大地に突き刺さり冥界を鳴動させた。

その揺れとともに襲い掛かる衝撃波は全ての物を粉碎し、それこそロキが先程放った魔法の比ではすまない大破壊が引き起こされる。

その威力は久遠の結界を持つてしても不十分であり、久遠の腕から血が吹き出た。

その痛みを感じながら久遠は自棄気味に叫ぶ。

「くっそ、あのヤロー、まったく人の話を聞いてねえ！ ああ、痛てえ！ 絶対に許さねえ！ 帰ったら絶対に飯奢って貰う！奢らせてやる！ それもクソ高い奴を絶対にだ、コンチクショー！」

その叫びを聞きながらも、リアス達は目を見開いていることしか出来ない。

目の前で繰り広げられている光景に理解が追いつかずにいた。

とてもじゃないが、彼女達ではこんな事は出来ないのだから。

それをやってのけるあの『イツセー』は一体何なのだと。

そんな置いて行かれている状況など気にしせず、一誠は更に暴れ回る。

拳を振るう度に大地が砕かれ鳴動し、突進する度大気が揺れる。暴れた後には朽ち果てた大地しか残らず、その暴れっぷりと来たらそれこそ先程までフェンリル達が暴れ回っていた比ではない。

その様子に一誠の中にいるドライグも呆れていた。

『相棒、久々に思いつきやるのは結構だが、少しはおとした方がいいんじゃないか？ ここは一応は俺達の世界ではないのだし』

「そう言うなよドライグ！ こっちはここ二週間ですっかり鈍っちゃってるもんを直そうってんだ。少しばかり派手に暴れた方が調子出るんだよ！ それに向こうがケン力を売って来たんだ。だったら

ロキは逃げるためにも大火力の魔法を放つも、一誠はそれを防ぐことすらせずに突進して無傷で殴り、結界を張ろうとも薄紙の如くやすやすと破っては攻撃を繰り返す。

ロキは攻撃らしい攻撃も、防御らしい防御も一切出来ず、ただ『加減した程度』の拳で何度となく打ちこまれたのだ。

故にもう何も出来ないロキには絶望することしか出来ない。

神がこうも一方的にやられるなど誰が思おうか？ それは何よりも神である自分達が一番思わされた。

ロキはもう抵抗する力なく、その身を大地に沈ませる。

そんなロキを見て一誠は呆れたような溜息を吐くと、構え始めた。

「まあ、リハビリだからこの程度だからしゃあねえが、それなりには楽しめたぜ。だから礼代わりに、今出来る限りの一発で終わらせてやるよ」

その言葉と共に身体から噴き出す赤きオーラ。

そして光り輝く両拳と胸の宝玉は、その輝きを増していく。

その姿を見たリアス達は流石にヤバイと思った。身体に溜め込まれているその力は、それこそ魔王ですら及ばないほどに強大だと。そんな力を一気に振るえば、この大地は勿論自分達でさえどうなるのか考えなくても分かる。

故に顔が真っ青になっていくリアス達。そんな彼女達と比べてまだ余裕のある久遠だが、流石に一誠に叫んだ。

「なっ、おいイツセー！ そいつはなしだ！ そんなもんぶっ放したら、流石にオレでも死んじゃうよ、この馬鹿、アホ、ヘタレ、金欠、唐変木、アーシアちゃんに言いつけて飯抜きにするぞ、コラアっ!!」

そして流石にドライグからも止めの言葉が入った。

『相棒、流石にロンギヌスは止めておけ！ あれを放ったらここら一帯は焦土と化すぞ！ そうなれば久遠も無事では済むまい』

そう言われ、一誠は不満そうに声を漏らす。

せっかく気分が乗ってきたところで止めろと言われ、仕方なく引き下がった。

「しゃあねえなあ。だったらドラグブリットでいいだろ」

それでも過剰な威力だが、この際ロンギヌスよりはマシだとドライグも久遠も許す。

そして許された一誠は大地に沈むロキに向かって突っ込んだ。

「ドラグウウウウウウウウウウツ、ブリッドオオオ!!」

その赤き流星がロキに激突すると共に、この戦いの中で一番の強大な衝撃がこの地域一帯を襲った。

揺れる大地は覚えるかのように揺れ、轟音は全てを飲み込む。

それらが全て収まった後に残ったのは、あまりにも巨大過ぎて底が見えなくなるくらい深いクレーター。

その直撃を受けたロキは無事なわけはなく、それこそ欠片も残らずに『消滅』した。

本来ならミョルニルによつて倒され、その際に呪いをかけていくはずであったが、この凶暴なる暴君の前にはその素振りすら許されなかったのだ。

そしてクレーターの中心部から飛び出した一誠は覇龍進化を解き、通常時の赤龍帝の鎧姿へと戻った。

「いやあ、まあなんだ。悪くはねえが、面白くもなかったな。やっぱりあの野郎相手以外つかうもんじゃなかったか？」

だったら使うなよ、と久遠は突っ込みたくて仕方ない。

そんな久遠だが、突っ込む前に背後から大きな声が飛び出してきた。

「あれ、ロキは!?　っていうか、俺、さつき死んだはずじゃ!」

それは本来なら有り得ない出会い。

フェンリルの牙で貫かれ死にかけていた兵藤　一誠は、その前に受け取ったとある物によつて命が助かった。

そして復活した彼の目の前に広がったのは、何もかもが消滅しきつて何もなくなり、巨大過ぎるクレーターが出来上がった大地。

そして、その真上に浮かんでいる『自分と同じ赤龍帝の鎧』であった。

「な、何で俺があそこに居るんだよ!　え、何で!」

その声に気付き、リアス達が声の発信源に顔を向けると、それまで以上の驚きに目を見開き声を上げた。

「「「「「イツセー……………」」」」」!?!?」

これでやつと彼女達は理解した。

この場には『赤龍帝』が二人居ることに。

その様子に久遠は笑いたい気持ちを堪えるのに必死だった。

彼は異世界の彼と出会う その4

リアス達は再び驚愕していた。

それというのも、目の前に彼女達が恋する『兵藤 一誠』が二人居るからだ。

片方は駒王学園の制服姿だが、あちこちがボロボロで血の跡がくつきりと付いている。本人自身はまったく痛みはないのか、目の前で起こっている事実には困惑しているようだ。

そしてもう片方、それはつい先程までリアス達が束になっても敵わなかった北欧の悪神ロキをたった一人で、それも圧倒的というには酷すぎて一方的に蹂躪し殲滅した一誠が立っていた。彼は目の前にいるもう一人の自分を見て何とも言い辛そうな微妙な顔になっていた。

「何で俺がもう一人いるんだよ！ お前、一体何なんだ!？」

ボロボロの方の一誠は目の前の自分に向かって困惑を隠そうとせずつに警戒する。

そんな一誠に対し、此方の一誠はどうするべきかと少し考えているようだ。

まさかいきなり『此方の世界の兵藤 一誠』に会うと思っていなかったのだ。それまでリアスの前で思いつき暴れていた一誠だが、その目はケンカをふっかけてきたロキ以外には向いていなかったの。彼女達には一切気付いていなかった。

だからこそ、こうしてマジマジと同じ姿をした自分を見て、何を言って良いのか分からないようだ。

ここでもう少し頭が回るのならそれなりに言も立つのだが、この男にそういった役割は期待できそうにないということは、あのアーシアでさえ分かりきっていることである。

故に何か言おうにも言葉が浮かばず、それが不審に見えたのかリアス達もやっと思考を追いつかせ警戒を顕わにし始めた。

「あなた、一体何者なの！ 何故イツセーと同じ姿を!」

「それにその神器、それはイツセー君の赤龍帝の籠手と同じ物？ でも、それなら一体どうして……ロンギヌスは一つしか存在しないはず

……」

「イツセー先輩と同じ匂い……でも、貴方からは悪魔の気配がしません……」

「あの姿、あれはイツセーの禁手じゃなかった。あれは一体……」

いくら彼女達でも、自分達の『兵藤 一誠』がどちらなのかはこうして見比べれば分からなくもないらしい。

その証拠としては、未だに困惑している一誠の服が一つ。その破かれ穿かれた服の部分は、皆が見て居る前でフェンリルに噛まれた痕だということ。

そしてもう一つは、あの悪神を暴虐的な力で圧殺したもう片方の一誠の姿。あれは彼女達の見た事のない姿であった。

だからこそ、どちらが彼女達の知っている兵藤 一誠なのかというのは比べてみれば良く分かる。それにロキも言っていたが、確かに向こうの一誠からは人間の気配が感じられるのだから、間違えようもないのであった。

冷静になればどちらが彼女達にとって本物なのか？ それははっきりとわかり、同時に『偽物』に対して警戒心を顕わにするのも当然のことである。

そんな警戒心を向けられた一誠は、どうにも面倒な気持ちになっていった。

この状況を彼なりに説明するのなら、それはたった一行で済む。

面倒事に巻き込まれた。

自分から面倒事を起こすのはやぶさかではないが、巻き込まれたというのはあまり好かない。

それを解決しようにも自分の頭では考えるだけ無駄であり、それらを解決するもつとも単純で簡潔な手段をいうものを彼は二つしか持っていない。

逃げるか……全部ぶん殴るのか。

その二択だけが一誠の選択肢。

厄介な揉め事を解決するのはこの二つしか有り得ない。逃げて関わらないか、厄介な連中を『全部』叩き潰して厄介事そのものを無く

すか。

故に彼はそのどちらかを選ぼうとする。

人数は多いが、言つては悪いが全員コカビエルより強そうには思えない。

そんな連中を相手にしたところで『面白そう』ではない。だからこそ、一誠はもう片方を選択しようとしたのだが、その前に『腐れ縁』の相棒が周りに聞こえるように声をかけた。

「はいはい、そこまでだご兩人。おいイツセー、もうちつとは説明出来るような頭を持とうぜ、このアホ野郎」

両者の間に流れる妙な雰囲気は、見た感じが普通過ぎて逆に違和感を感じさせる青年……久遠の手を叩く音で散っていく。

また突然現れた久遠に警戒を更に強めるリアス達だが、先程助けて貰ったこともあつて攻撃を行うということはしなかった。

そしてアホ呼ばわりされた一誠は凄く不機嫌そうな顔で久遠に喰つて掛かる。

「おい、いきなりアホ野郎呼ばわりはどういうことだよ、クソ野郎」

「そのままの意味だろ。お前、あのままほっとけば全員ぶっ飛ばすか面倒になるのが嫌なんでケツまくる所だったろうが。まずは話し合いをするのが基本だろ。それすらしねえ奴をアホと呼んで何が悪い。アーシアちゃんが知ったら悲しむぞ、『イツセーさんがご迷惑をかけてすみません』ってなあ」

「アーシアを出汁にするんじゃないやねえよ。しかもアイツはいつから俺の親になったんだっての」

「似たようなもんだろ。こんなお前じゃどっちが保護者なのかかわからねえよ」

「んだとー!」

そして久遠と一誠は額をかし合わせる。

それは彼等にとっていつもの行動だが、初めて見るリアス達とイツセー達には急に仲違いを始めたようにしか見えず、余計に困惑してしまう。

止めようにもどのような言葉をかければ良いのかわからず、リアス

達は二人の様子を見ていることしか出来ない。

そして少ししてやつと落ち着き始めたのか、引き下がった一誠の代わりに久遠が前に出た。その表情は営業時に使っている笑顔であり、見ている相手に良い印象を持たせる物だ。だが、この場では逆に不気味にしか見えない。

「まあ、そう警戒しないでくれないか。こっちはまず手を出さなきゃや出さないってのを約束するからさ。それに、助けてやった相手を今更害する理由はないしね」

その言葉に少しむつとするリアスだが、言っていることは確かなので少しか警戒を解く。勿論未だに全ては解かないが。

その様子を見て久遠は軽く頷いた。

「OK OK、理解していただけるのは有り難い。此方もあまり刺激されるとアイツがまた暴れそうなんでね。其方もアイツには暴れて貰いたくないでしょう」

一誠を軽く指差しながら呆れたような物言いでありリアスにそう言う久遠。そんな久遠の言葉にリアスは表情に出さないようにするが、顔から血の気が引いていくのを隠せない。

もう一度あの一誠が暴れたら？ あの一誠の暴力を直に向けられたら？ 彼女達では5分と持たずに全員殺されてしまうだろう。

絶対に敵わない力の差を見せつけられ、彼女達に為す術はない。故にこのお願いという名の『強制』を彼女達は聞き入れざる得ない。

だが、それでも意地を振るい立たせてリアスは久遠に問う。

「それで……あなた達は何者なの？」

リアスの問いを受けて、久遠はニコリと笑いながら自己紹介を始めた。

「何というか、もう一回知ってる人に紹介するのは微妙な気分だな。まあ、向こうは知ってないんだし、紹介しても損にはならねえだろ。ってことで、俺の名前は久遠。んであつちで目つきの悪い野郎が兵藤 一誠だ」

その言葉にリアス達は当然反応する。

「嘘つかないで！ あなたの名前はわかったけど、イツセーはこつち

にいるあの子だけよ。同じ同姓同名だとしても、あそこまでそっくりなわけないじゃない。その彼は何者なのよ！」

その言葉に久遠はわざとらしく手を上げて答えた。

「そう言われてもねえ、こつちも同じ兵藤 一誠なんだがね。寧ろ俺からすれば、そつちの奴こそ『偽物』じゃないのか。俺が知ってる限り、たかだかフエンリル如きにやられる雑魚が兵藤 一誠だとは思えねえよ。俺が知ってる奴は頭はアレだが腕はピカイチだ。それこそ、魔王だって敵わないくらいになあ」

その言葉にリアスはかあつと顔を赤くして怒りを顕わにする。

自分達の頂点である魔王を馬鹿にされたのは勿論、可愛い下僕であるイツセーを偽物呼ばわりされたのだ。いくら敵わないとしても許せたものではない。

それはソーナも同じようなものであり、魔王より強いなどと言うことは許せそうにない。例え本当に実力がそうであつてもだ。

そんな上級悪魔二人にその眷属達の視線を浴びて、久遠は実に愉快そうに笑う。

嘲笑うかのように、からかうかのように。

そしてどこまでしようかと考えた所で、それまで成り行きを任せていた一誠は久遠に呆れ帰った声で話しかけた。

「そこまですておけよ、久遠。弄り概があるからつて遊びすぎだつての。このまま弄られちや連中と話が進まねえだろ、このトンマ」

「そう言うなよ。だってこんな機会、早々ねえんだから少しくらい楽しんだってバチはあたらねえだろ」

少し險やかな雰囲気になりつつあつたが、一誠の言葉で本当に面白そうに笑う久遠。

そんな久遠の笑い声にそれまで高まっていた怒気が急にしぼんでいくのを感じたりアス達は呆気にとられてしまう。

それが尚ツボに入っただのか、爆笑し始める久遠。釣られて一誠も可笑しかったのか笑ってしまい、何やら馬鹿にされたような気がしてこちら側のイツセーが二人に向かって叫んだ。

「おい、いきなり笑い出して何なんだよ、お前等!! 馬鹿にしてるのか

！」

それを聞いた二人は軽く手を前に出して悪い悪いと謝る。

その何気ない仕草に馬鹿にしている訳ではないとイッセーは理解し、納得のいかない顔で二人を睨んだ。

「悪かったからそんな睨むなよ。こつちとしちやちよつと面白くてよ」

「そうそう、申し訳無い。少しばかり思うところあつてつて奴だ。見過ごしてくれると有り難い」

そう言つて二人は謝ると、改めて久遠は『自己紹介』を始めた。

「では改めて……俺の名は久遠。まあ、見ての通り『ただの人間』だ。んで、そつちが兵藤 一誠。ただの人間……にしちやぶつ飛びすぎて化け物としか言いようがねえけどな」

「誰が化け物だ、誰が！ 毎回祿でもねえ仕事ばかり持つてくるお前の何処が『ただの人間』だよ。その気になればアザゼルの野郎の攻撃だつて軽く防ぐだろうが」

その言葉にぎよつとするリアス達だが、この紹介では先程とまったく変わらない。

彼女達にとって『兵藤 一誠』はこの場にいる唯一無二の存在なのだから。

故に当然抗議を出そうするが、その前に久遠の言葉が遮った。

「そして……俺達は『この世界』のモンじゃない。所謂平行世界の旅人つて奴だ」

ニヤリと笑みを深めながらそう告げる久遠に、その言葉を聞いたりアス達は当然正気を疑った。

目の前にいる男は一体何を言っているのやら。普通なら誰もがそう思い馬鹿にしただろう。

だが、リアス達はそれが出来なかった。久遠の言葉には確かな自信が見えたからだ。

そうでなくとも、その言葉には納得させる根拠に近いものがある。あれだけの力の持ち主が一切知られていないというのは可笑しいものであり、人間だというのなら三大勢力のいずれかが必ず目を付け

ているはずなのだから。

しかし、知られていない。誰も目の前にいる人間のことを知らないのだから。

だが、認めたくないとリアスは久遠に問う。

「そんな絵空事を信じろと？ 証拠も何もないのに？」

その言葉に久遠は笑う。

何せリアスが考えていることが見透かせるからだ。

彼女は認めたがってはいないが、それでも認めるに足る充分な証拠を既に知っているのだから。

「証拠なら既に見てるだろ？ 同じ『兵藤 一誠』っていう証拠をよ。

見ただろ……『赤龍帝の籠手』を。あれはこの世に唯一無二の神器だぜ。それがこの場に二つある。いくらアザゼル総督でもロンギヌスの複製は出来ねえよ。なら、答えは単純だろ。一つしか無いはずの物がこの場に二つあるってことは、そのもう一つは『この世界』ではない別のところから来たって考えるのが妥当だろうさ」

そう語る久遠の言葉にリアスは納得せざる得なかった。

彼が言っていることは確かだと。一誠と瓜二つの容姿、悪魔か人間かということの気配の違いはあれど、小猫曰く匂いは同じ。そして全く同じではなかったが、確かに彼女達から見えて向こう側にいる一誠も同じ『赤龍帝の籠手』の使い手。それらの情報から、もっとも信憑性が高いのはそれしか有り得ない。

神器の中でもロンギヌスは複製不可の唯一無二の存在。それが二つある以上、その言葉は信じるに値する。

その事実の皆が気付き、向こうのイツセーは信じられないような目を震える指先と共に一誠に向けた。

「あ、あんたが、平行世界の俺……」

その言葉に一誠は何とも言えない表情で答えた。

「どうやらそうらしい。目の前に同じ面の奴がいるってのは不思議なものだ」

その事実を受け止めると共に、リアス達はどうしてこの場にそんな存在がいるのかが気になり、当然聞くことにした。

「そんな存在が何であの場所に……」

様々な思惑があるのかと危惧しての問いに対し、久遠は実に困ったような声で笑いながら答えた。

「別に何かしようと思つてこんな所に来たわけじゃないよ。アザゼル総督の実験を受ける依頼を受けて転送されたら、たまたま運悪くこんな所に飛ばされて目の前に襲いかかつて来たフェンリルにウチの一誠が食い付いて暴れたつてただだよ」

「あのクソ総督、何が安全だよ。初っ端からこっちは訳のわかんねえ冥界に飛ばされるわ、あの犬つころにケンカ売られるわで散々だ」

「その割に楽しそうに暴れてただろうが」

「そりゃ売られたケンカを買ったんだ。暴れなきや損だろ」

そう言い合いながら笑い合う二人にリアスは頭痛がして仕方なくなつてきた。

この二人の言葉から察するに、どうも彼等の言う平行世界のアザゼルが何かしらの理由で二人を此方に転送した。そして飛ばされた二人が出てきた場所が此処で、たまたま運悪く飛びかかってきたフェンリルを迎え撃つて、それがケンカを売られたと判断した一誠がケンカを買い、そしてロキもろともぶつ飛ばしたと。

そんな行き当たりばったりであんな大規模で超絶的な破壊を見せつけたのだ。

常識外にも程がある。

そんな彼女に更に久遠は爆弾を実に良い笑顔で投げかけた。

「そういうわけで、俺等を魔王様ところに連れて行ってくれないか。詳しく話す必要があるだろ……色々なあ」

その言葉にリアスのそれまでであった疲れが極まり、意識が吹っ飛んだ。

彼は異世界の彼と出会う その5

実に面倒なことになったとリアスは頭が痛くてしょうがない。

何せこの珍妙極まりない事態を自分達の王達に報告しなければならないのだから。

それはソーナも一緒であり、二人して頭を痛めていた。

これがただの報告で済むのなら問題は無いが、自分達がしたことを言えばロキと戦い窮地に追いやられ、結局何も出来ずに殺され掛けただけなのだから何と報告して良いのやら。挙げ句はこの平行世界の迷い人によって元凶足るロキが完膚なきまでに滅ばされたなんて報告をしなければならぬのだから、頭痛が酷くなるのも致し方ない。それでも彼女達は誇りある上級悪魔として、その任を全うするのであった。

「おお、無事だったか！」

彼等の本拠地である城に転移した途端、その姿を見たアザゼルが心配した様子を見せつつそう皆に声をかけた。

それと共に彼等の魔王達や北欧の主神オーディン、それに大天使ミカエルなどがリアス達の元へと歩み寄っていく。

その姿に帰ってこられたことへの安堵とトップ達の目の前に立つ事への緊張感でリアス達は萎縮する。

そして報告に移る前に、それまでの疲れを癒すようにサーゼクスが皆に言おうとしたのだが、その前にあることに気付いた。

いや、気付かねば可笑しいのだ。

「む、リアス……あの者達は一体誰だい？」

サーゼクスの目に映ったのは、二人の人間であった。一人はサーゼクスの視線に気付き軽く会釈をする『普通で何も感じられない』人間。もう一人は人間の気配はするが、並々ならない力を滲ませている。ただ、前に立つ人間のせいなのか、その顔はまったく見えない。

すくなくとも、この作戦が始まる前にいた者たちではないし、サー

ゼクスが知る限りそんな知り合いがリアス達にいない。そして寧ろ、この冥界に『ただの人間』がいることに警戒心を顕わにし始めていた。何も力が感じられないということが、その警戒心に拍車を掛ける。

問われたリアスはと言えば、当然の如く頬を引き攣らせていた。

言い辛そうにしつつも、それでも言わねばと決意を固める。

「そ、その、お兄様、あの二人は……」

しかし、リアスの決意は物の見事に打ち砕かれた。

「どうも、魔王、サーゼクス・ルシファー様。私の名は久遠。まあ、今はしない平行世界の迷い人って奴ですよ。そしてこいつが……」

その何も感じられない人間こと久遠は、サーゼクスに向かって営業スマイルで軽く自己紹介を始め、そしてその後ろにいる人物をサーゼクス達皆が見えるように移動した。

「「「「「?!「「「「」」」」」」

久遠の後ろにいた人物の姿を見て驚愕する周り。

そんな周りの様子が面白かったのか、久遠はニヤリと笑いつつ、続きを話した。

「私達の世界の『赤龍帝』、兵藤 一誠です」

「ああ〜なんだ……まあ、そのよろしくか?」

久遠に紹介された人物……兵藤 一誠は面倒臭そうな、やる気のなさそうな声を周りにかける。

しかし、皆はそれどころではない。

「な、何で目の前に赤龍帝が……」

「リアスの隣にも彼がいるのに……彼が二人……」

「偽物……って感じじゃねえなあ。さっき言ってた言葉にも関係があるようだし」

一誠と久遠の姿を見て、トップ達は困惑しつつも話し合う。

その様子にリアスとソーナはやはりと頭が痛くなるのを感じていた。

そして予想通りと言うべきか、そんな彼女達に各陣営のトップが揃って顔を向けた。

「すまない、リアス。休ませてあげたいが……この状況に対しての報

告を今すぐにしてもらわないといけなさそうだ」

「疲れてるところ悪いが、今すぐにして貰わなくちゃならねえ」

「これは一体どういうことなのかを」

トップの者達の視線を一遍に浴びて、リアスとソーナは本当に疲れた溜息を吐いた。

「何っ!? つまりロキを倒したのは彼等だということのか!!」

「ミヨルニルを使わずに拳で叩き潰したとな!？」

「あの世界の鳴動は彼が引き起こしたということですか?」

「その話、嘘偽りはマジでないんだよなあ。だとしたら、流石にヤバすぎるぞ、おい……」

洗いざらい全ての経緯を報告したリアスとソーナ。

そして彼女達の報告を受けて、やはりと言うべきかサーゼクス達は驚愕した。

誰だって平行世界の人物が現れたなどと言われても信じられないものだ。だが、実際にそのことを報告したリアス達を疑うわけにもいかない。

何より、目の前にまったく同じ存在が二人いるのだから疑うにしても無理がある。

リアスに頼まれイッセー……つまりこちら側のリアスの眷属である兵藤 一誠は久遠の隣に実に面倒臭そうな雰囲気を出しているもう一人の自分の隣に立っていた。

その二人を見れば双子のようにそっくりだ。顔の造形や身体の体型など、実にそのまま同じである。

まあ、強いて違いを挙げるのなら、まず目つき。此方のイッセーと比べ、平行世界の一誠は目つきが悪い。そして身体の筋肉。どちらも鍛えられている身体だが、平行世界の一誠の身体はより絞り込まれていた。

何よりも身に纏う雰囲気が違う。イッセーは彼を知っている皆がいつも感じている悪魔の気配と少しばかりエッチなことが好きな年

相応な青年。対して平行世界のイツセーは、やる気がなさそうだがその実まったく隙がなく、見ている者に獣のような雰囲気を感じさせる人間といった感じだ。

悪魔と人間の違いはあれど、その存在は限りなく近い。

だが、それをそのまま信じられるわけもなく、アザゼルは二人の一誠に声をかけた。

「だったら二人で神器を出してくれ。そうすりやその与太話も信じられる」

その言葉に賛同の意を表すトップ達。

その視線を受けてイツセーは萎縮しつつも左腕を前に出した。

「来い、赤龍帝の籠手！」

その声と共にイツセーに展開される赤い籠手。それを見つつ、久遠は一誠に声をかけた。

「つーわけで出させてよ。面倒臭がるなよ」

「わかってるつての」

実に面倒臭そうにそう言うと、一誠もまた籠手を展開した。

そして皆の前に現れる、まったく同じ形をした『神殺しの神器』。

唯一無二の存在が二つあるという非常事態をこの場で見て、如何に異形の王たる彼等であっても認めざる得なかった。

「目の前にそれを見たら、君達の言うことを認めざる得ないね」

サーゼクスが困惑を隠せないが、それでも認めざる得ないと言った感じにそう言うと、周りも同じような反応を示す。

「ご理解どうも」

その様子を見て久遠は明らかに作り笑顔でそう言った。

彼からしてみれば、こんな風に驚かれているというのは見ていて面白いようだ。

「ああ、面倒くせえ。しかも腹減ってきたし……はあ、財布の中身はかわらねえか……」

対して一誠は実に面倒臭そうであり、空腹を感じつつ自分の財布の中を覗いて深い溜息を吐いていた。その背中にはこの世界のイツセーにはない切実な哀愁を感じさせる。

実にマイペースである。

平行世界とは言え、この場には各勢力のトップが集まっているのだ。そんな普通なら壮大な威厳に身を竦めるものだが、まったく二人にはその気配がない。本当に人間なのか疑わしいとリアス達は思ったが、そもそもロキを一方的に叩き潰した『人間』がただの人間であるはずがないと考え治した。直さなければ思考が停止しそうだからだ。

そんなリアス達など気にしない一誠と久遠。この二人のことを認めることにしたサーゼクス達は、改めて二人に問いかける。

「証拠も揃っている以上、君達が平行世界の存在だと認めよう。それでなんだが……どうしてこの世界に来たんだい？」

まさか侵略しに来たのではないだろうかなど考える輩もいるようだが、その理由を聞いているリアス達は呆れ返るしかない。

そして聞かれた本人達もまた、同じように答えることに多少の飽きを感じつつも答える。

「認めて貰えて嬉しいです。では、何故俺達がこの世界に来たのか？それは……」

勿体ぶった言い方をする久遠。

そんな久遠にいい加減空腹で苛立つて来た一誠が横から割って入った。

「二々勿体ぶって遊んでるんじゃないやねえよ、久遠。簡単に言やあ事故だよ。いや、事故なのかもわからねえけどよ。向こうでアザゼルの野郎が実験に付き合えて言ってきた、その報酬が2000万。こっちはやる気はなかったのに、久遠の野郎が金がねえって受けやがったんだよ。挙げ句はアジアまで抱き込みやがって。そのせいでオレはこうして仕事で実験に付き合わされたってわけだけだよ。飛ばされてみれば煙いは何わ、挙げ句はいきなり犬っコロに襲われるはで踏んだり蹴ったりだ。そいつを吹っ飛ばしたら上空でそいつの飼い主がケンカを売って来たんでリハビリ代わりに買って殺ったんだよ」

実に彼らしい言い分に横から入られた久遠は呆れつつも笑う。

だが、その言葉を理解出来るのはこの場で久遠と事前に聞いたリア

ス達くらいだろう。だからこそ、久遠は一誠の言葉を分かりやすいように翻訳する。

「まあ、コイツの言ってることは主観的過ぎて分かり辛いんで俺からちゃんとした説明を。事の発端は俺達の世界のアザゼル総督が平行世界への転移実験を俺達に持ちかけたことです。俺等はそういった『お偉いさん』の依頼を受けて仕事をする立場なので、向こうじゃそれなりに顔が知られているんですよ。それで依頼の報酬が2000万円。それをちよつとしたことで『リハビリ休養中』だったコイツが渋ってたんですけど、正直コイツと連んでる俺としては収入が二週間もないのは生活苦なんですよ。何で無理言ってその仕事を受けたんです。その結果、あのような場所に転送され、戦闘に巻き込まれたんですよ」

その説明を受けてやつと理解したトップの者達は納得すると共に、アザゼルに向けてジト目を向ける。

「いや、オレじゃねえから！　いくら何でもその目はあんまりだろ」

抗議の声を上げるアザゼル。

皆それは分かっているのだが、それでも向けてしまうのはアザゼルがマッドサイエンティスト染みているからだろう。一誠達が言っていた実験も、この男ならやりかねない。

そんな雰囲気になりつつも、サーゼクスは話を戻すことにした。

「つまり、君達は其方の世界のアザゼルに実験に付き合う依頼をされ、それを引き受けて転送された結果、あの戦闘に巻き込まれたということかい」

「はい、その通りです」

サーゼクスの言葉に素直に頷く久遠。

「つまり、君達は何か目的があつて此方の世界に来たわけではないんだね」

「ええ、総督の転移実験の披見体として飛ばされただけです。あ、勿論此方の世界に干渉する気はありませんよ。既にちよつとばかしやらかしましたけど」

苦笑する久遠に一誠は退屈そうに欠伸をする。

その様子はあまりにも不敬であり、リアス達は気が気では無かった。

「帰る手立てはちゃんと在りますし。一応総督曰く、二週間経てば自動で元の世界に転送されるそうです。なのでご心配には及びません。要は二週間の旅行とでも思っていただければ」

「そうか。だが、流石に君達をそのまま放っておくわけにもいかないな」

その言葉にリアス達は勿論、久遠にも緊張が走る。

彼の言い分もつともだ。幾ら本人に意思がなかりうと、そんな神を一方的に討ち滅ぼす力を有している存在を監視も成しに放って置けるわけがない。

その真意がどうなのかを探るべく、一誠がサーゼクスにふっかけようとすると彼はその前に笑みを浮かべながら一誠と久遠に話しかけた。

「よろしければだが、二週間をリアス達と過ごしてはどうだろうか？

逗留先も決めていないようだし、下手に出歩くより見知っている土地の方が色々と過ごしやすいと思う。自分で言っては何だが、人間界のイツセー君の家は小さいながらも数多くの人が住んでいる。今更客人が二人増えても変わらないはずだ」

その言葉にリアス達は目を？いた。

何せ彼女達にとって愛しのイツセーとの愛の巣（笑）に存在こそ同じだが別人とその友人が転がり込むというのだから。

ここで流石に駄目だとは、幾ら魔王の身内でも言えない。ちゃんとした監視も意味もあるのだから。

「それに、その平行世界の話は私達も興味深い。だが、流石にこんなに堅苦しい場所では楽しめないのです、彼の家ならリラックスして聞けそうだ。あそこは身分や立場も関係無く安らげるからね」

そう言って笑うサーゼクスだが、リアス達は思いつきり否定しなかった。

ただ両親が魔王だと知らないだけで打ち解けた結果であり、魔王の彼を知っている者なら皆畏れ多いと恐々としている。

まあ、サーゼクス曰く、自分の身分を気にせずに遊びに行ける場所なのだから。

その話を聞いた一誠と久遠は、よく寄るラーメン屋を思い出していた。あれも彼方の世界のトップがよく来ていたものだ。

つまり、世界は変わろうと重責を負う者は得てして変わらないということだ。

来られる側としては勘弁願いたいこの申し出を久遠と一誠はどうするのか？ その視線が集まる中、彼等は口を開いた。

「その申し出は有り難い。是非受けさせて貰います」

「早く話終わらせて飯にいきましょう。勿論、久遠の奢りでな」

「おい、いきなり何言ってるんだ。こっちだって金欠なんだから金なんてねえよ」

「はあ、ふざけんな！ こっちの財布を見てみろよ。下に振ったって20円しか出てこねえんだよ！ 奢れ、この野郎」

「何でそんなにねえんだよ、万年金欠野郎！ 絶対に奢らねえぞ！」

そのまま額をぶつけ合わせ言い争いを始める二人。

そんな二人の様子にサーゼクスや他のトップは肝がでかいと笑った。

こうして一誠と久遠は人間界にあるこの世界の兵藤 一誠の家に転がり込むこととなった。現在は夏休みで両親が旅行でいないため、丁度良いらしい。

それは良いのだが、当人達であるリアス達は正直また気が飛びかけていた。

どうやら、この夏休みを機に愛しのイツセーとの距離を詰めることは出来そうにない。

彼は異世界の彼と出会う その6

この世界の兵藤 一誠宅にしばらく逗留することになった一誠と久遠。

そんな二人だが、最初にその家を見て同時に声を上げた。

「うおつ、凄くでけえ!」

「こりや偉い金が掛かってやがんな。まったく、ウチの相棒とは生活水準が違い過ぎる」

その言葉を聞いてリアスはそうなのかと首を傾げたが、そもそこの上級貴族様の家系は現代日本の金銭感覚からかけ離れすぎているため、彼女はそう思わなくても他の一般常識を持っている眷属達は皆同意する。

そして気になったのは、当然こちら側のイツセー。同じ存在である一誠が自分とは違った暮らしをしていることに興味が湧いたのだ。

だからこそ家に入って客間で朱乃に茶を淹れてもらい、リアス達は二人から平行世界の話を聞くことにした。

「さつき言ってたけど、俺とアンタの家が違うってどういうこと何だ?」

イツセーの疑問に対し、答えたのは聞かれた当人ではなく久遠であつた。

「ああ、そいつは単純な事だよ。コイツが住んでるのは此処じゃなくて、向こうの商店街の先にあるオンボロアパートの一室なんだからよ」

その言葉にイツセーは驚いた。

(え、それってみるタンが住んでるアパートじゃあ………)

彼が知っているその場所には、彼の魔法少女に憧れる漢がいる。

イツセーはそれが気になったが、今はそれより別の事を聞きたかつた。

「あれ、父さんと母さんは?」

そう、同じ兵藤 一誠なら両親もいるはずなのだ。

何せ同じ存在で同じ名字なのだから。

だが、それを聞かれた一誠は何やら無関心というか、どうでも良さそうな感じで答えてきた。

「ああ、両親？ そんなもんいねえよ。こっちは気がついた時から孤児院暮らしだ。つい一年前くらいにやっと一人暮らしさせてもらえるようになったんだよ」

そう答える一誠に此方のイツセーは衝撃を受けてしまう。

両親が居るのが当たり前になっていて、同じ存在である一誠が両親がいないというのは驚きであった。

しかも孤児院暮らしとなると、何とも気まずい。

アーシアも似たようなものだが、この日本でそれというのはそれはそれで結構珍しい。

だからなのか、イツセーは途端に謝ってしまう。

「ご、ごめん、無神経なこと聞いて？」

まあ、世間では不躰な質問として通るだろうこの問い。しかし、それをされた一誠は本当に意味が理解出来ないといった様子でイツセーに反応を示す。

「別に無神経でも何でも無いだろ、その通りの事実だしよ。元からいねえ奴の事なんて気にしたこともねえよ」

あつけからんにそう答える一誠。そんな一誠にイツセーは何とも言えない気分になるが、久遠は腹を抱えて笑っていた。

「別に気に病む必要なんてこれっぽっちもねえよ。この馬鹿は見た事もない奴の事なんて気にも掛けねえからね。寧ろそう言ったセンチな言葉なんて一番縁遠いから、いくらでも聞いてくれよ」

如何に馬鹿にした発言に周りは少しばかり引く。

仮にもロキ相手に一人で大立ち回りをしでかした人物だ。そんな危険過ぎる相手にこうも失礼なことを言える物だと彼女達は久遠を見て思う。

それに同意したわけではないが、そこまで文句を言わない一誠。彼からしたら、久遠とのやり取りなど日常茶飯事であり失礼もクソもへつたくれもない。

故にイツセーは気にしつつも、更に一誠に話しかけていく。

「そういえばどうやって神器に目覚めたんだ？ 俺の時は……」

そして二人にとって初めて聞くこの世界のイツセーの成り立ち。墮天使に騙されて殺され、そこからリアスによって転生させられて悪魔となって生き返ったことなどをイツセーは当時のことを思い出して苦虫を噛み潰したような顔で語る。

そんなイツセーに対し、一誠は説明するのも面倒臭さそうな顔で答え始めた。

「神器の目覚めた時……ねえ。もうガキの頃だったからそこまで覚えてねえけど……確か一人で居たところをはぐれ悪魔に襲われたんだっけか？ それで必死にみつともなく逃げまくってたところで覚醒して、その後は思いつきりぶっ飛ばしてやったんだったよなあ、確か。んで、それから神器使って裏の仕事請け負って金稼いでた」

「金？」

「ああ、孤児院はずっと貧乏なんでね。俺が稼ごうとその時決めたんだよ。一回の仕事で最低でも100万。内容ははぐれを殺したり上の連中の尻ぬぐいだったり、ペットのコカトリスを取り押さえることだったり……まあ、色々さ」

そんなことをどうでもよさそうな顔で語る一誠。

彼の頭の中では実に面倒だった仕事の数々が思い出されている。

「俺とは目覚めた経緯もその後もまったく違うなあ」

イツセーはそんな感想を洩らした。自分はあるな事があって今のようになったが、平行世界の自分はそうではなかったのだろう。襲われたという結果は一緒だが、その後は違っていた。自分は無残に殺され、彼は見事に生き残った。

それが生まれ育った環境に寄るものなのか、イツセーは考えさせられる。

そんなイツセーを見て、リアスは一誠に問いかける。

「墮天使レイナーレ。この名前に覚えは？」

この人物こそ、この世界の兵藤 一誠の始まり。

悪魔として転生する切っ掛けになった者であり、同じ神器を持っているのなら、平行世界であろうと狙われても可笑しくない。

だからこそ、リアスは聞きたかった。

この世界のイツセーと、目の前に居る平行世界の一誠のその違いを、その境界線を……。

その名を問われ、一誠はというと……。

「墮天使レイナーレ……ああ、何だ……聞き覚えはあるようなないような……」

実に曖昧に考え込んでいた。

この男、既に終わった事でその上印象に残らない人物のことはほとんど忘れるタイプなのである。

そんな一誠に対し、イツセーは少しばかり大仰に聞き返した。彼にとって、この人物との邂逅はとても重要な事だったから。

「春先に告白されなかったのかよ！ 俺にとって、あれは初めての……」

「イツセー……」

言っていて当時のことを思い出しているのだろう。少しばかり苦しそうにイツセーは言う。その表情を見てリアス達はイツセーのことが心配になった。当時の苦すぎる思い出など思い出しても良い事など何もないのだから。

そんなイツセーに対し、一誠は……。

「告白？……ああ、何か思い出してきた。確か知らねえ学校の制服着た女に話しかけられたっけ。でもあんどとき、俺は玉子の特売セールで急いでたから速攻で断って突っ走ったんだっけ。あんどときスーパーに行ったら、あのクソババアが調子扱いてたもんだからぶっ飛ばして横取りしたんだっけか？ あれは爽快だったなあ」

まったく的外れなことを思い出していた。

それを聞いていたイツセー達もガクツと落ちてしまう。

何せ告白という事実はあったのに、それは彼にとってスーパーの特売セールよりも下に見られていたのだから。確かにあれは兵藤一誠にとって一つの分け目だった。それが世界が違うとは言え、こうも酷くあしらわれているなどと、一体誰が思おうか？

そしてそれまで黙っていた久遠は此処に来て爆笑し始めた。

「あつはっはっはっは！ いやあゝ、悪い悪い。この馬鹿がまったく覚えてねえ上に、しかもあの女に告白されてたのかよ。それをセール優先で振るとか、お前………ぷっ」

「うつせえよ、久遠！ そう言うって事はお前は知ってるんだろうなあ」

爆笑して腹を抱えながら悶える久遠に一誠は噛み付く。

そんな久遠は改めて笑いを堪えながらイツセー達に語り始める。当然、一誠に思い出させるように。

「レイナーレってのは、確かこの町に潜伏してた堕天使だろ。それでアーシアちゃんの神器を狙ってた。違うか？」

「いや、合ってる」

久遠の言葉にイツセーは同意する。それがもつともな根幹なのだから。

「あん時、俺達はアザゼル総督から依頼されてたんだよ。『レイナーレを生け捕りにしろ』ってね。あんた達はならもう分かっているとと思うけど、アレは戦争の火種になりかねないからなあ。だからそれを気にして総督様が俺等に回したってわけ。堕天使を動かしたんじや同じ事だからね。俺等みたいなフリーは使い勝手がいいんだよ」

「あ、あゝ……何となく思い出してきた。あん時は少し焦ったよなあ。その話が来る前に部下のおっさんぶつ殺しちまつて」

「ああ、まったく。お前がまさか先走ってるなんて思わなかったかなあ。もしあの依頼内容が『全員捕縛しろ』だったら今頃俺等の信用は地に落ちてるところだ」

当時のことを思い出して呆れ返る久遠。

そんな物騒な話を聞かされてリアス達は何とも言えない顔になる。そんなリアス達の様子を笑いながら久遠は続けた。

「それであん時にお前が思いつきりぶっ飛ばしたのがレイナーレだよ。あん時、アーシアちゃんが居なかったら死んでたぞ、アレ。もし死なせたらお小言じゃすまねえんだから、もうちつとは力加減を覚えておけよ。ま、お前に言った所で意味ねえけどな」

「ああ、あれか!? あんまりにも退屈だったもんだからすっかり忘れ

てた。『ういやあの女、そんな名前だったっけか』

やっと思ひ出したように納得した一誠。それ程までに彼はレインレーのことを忘れていた。

そんな反応を示す一誠にイツセーは複雑そうな顔になる。

自分にとつての重要な分かれ道が、同じ存在でも世界が違うだけでこうもちがうのかと思つたからだ。

だからこそ、皆納得する。レインレーを倒せば、確かにイツセーが悪魔に転生することなど無かつたのだから。

逆に言えば、イツセーの話を聞いていた一誠は実につまらなさそうだ。

世界が違うが同じ自分のはずなのに、どうして目の前に居る奴はそんなに『弱い』のか？　それが一誠には不思議だつた。恵まれた環境か、もしくはまつたく感じられない殺る気の無さか？

その正体は取りあえず、一誠はその後の話に耳を傾けることにした。

それからはこの世界でイツセー達が体験したことを聞かれていく一誠と久遠。

リアスの結婚騒動然り、コカビエルの事然り。

それらの事に対し、一誠は決まつて答えることは一緒だつた。

『何であれ、殺りあつたぜ』

そう、世界が変わり事象が変わつてあつたはずの因果がなくなつても、どういう訳か一誠はこの世界のイツセー達が経験したと同じ事をしていた。

違ふと言えば、どの話でも一誠は決まつて暴れており、一対一でその猛者達を叩き潰していることだろう。

イツセーはそのことを聞いて少し羨ましく思う。

ライザー戦では片腕を犠牲にしての不完全なバランスブレイクに普通では考えられない奇手を持つて何とか辛勝したし、コカビエル戦では結局倒せなかつた。

だからこそ、イツセーは一誠の事が羨ましく思う。

一体どこでこうも違つているのか？　それが分かれば自分はより

皆を守れるように強くなれるのかと。

そして少しばかり話が物騒なものばかりになってきたので、ここでイツセーは少し空気を和らげることにした。

「あ、そういえば……あんた、おっぱい好きか！ 男だったら大好きだよな、おっぱい。向こうの世界じゃ部長のおっぱいも朱乃さんのおっぱいも拝めなかったんだろ？ だったらこの際思いつき拝んでいったらどうだ！」

実に彼らしい言葉に、急にそんな話題を出されたリアス達は困った顔をしてしまう。

「もう、イツセーはあ……」

仕方ない子ねえと苦笑するリアス。

「まあ、少し話がいつもと違った感じですし、こういう風なのはイツセーくんらしいですわ」

ニコニコと笑う朱乃。

「先輩らしいですけど、最低です」

ジト目で睨む小猫。

「むう、私だつて頑張ります！」

「私の胸は大ききこそ負けているが、それ以外なら負ける気は無い！」
張り合うアーシアとゼノヴィア。

「イツセーくんらしいのかな？」

苦笑しつつ疑問に思う祐斗。

「先輩、やっぱり凄いです！」

そんなイツセーに尊敬の念を向けるギヤスパー。

そんな実に彼らしくどうしようもなく救いようもなく馬鹿らしい話に対し、一誠が取った反応は……。

「はあ、おっぱい？ お前、頭沸いてるんじゃないのか？」

実に兵藤 一誠を知る者達からすれば有り得ない程きつい返しだった。

彼は異世界の彼と出会う その7

その言葉にこの場に一人を除いた全員が驚愕した。

別に何も可笑しな事ではない。彼が言ったことは言い方こそ乱暴ではあったが、扱く真つ当な事である。世間体を考えれば尚更彼の言葉は正しい。

しかし、そうではない。

彼の周りに居た者達が驚いたのは、彼女達が知っている『彼』と同じ姿形をした『同じ存在』であるはずの彼がまったく違う反応を示したからだ。

「「「「「なっ!」」」」」

あまりの驚きに言葉を失うリアス達。

そして何よりも驚いたのは、その話題をふったイツセー本人である。

「なっ!? お、おい、アンタ、マジで言ってるのか! おっばいだぞ、おっばい! 男の夢の詰まったロマンだぜ!」

妙な迫力を出しながらイツセーはもう一人の自分である一誠に食いかかる。

それは彼からしたら信じられないことらしい。自分と同じ顔をした同じ存在であるはずの一誠がそんな反応をするだなんて信じられなかったのだろう。

対してそんな妄執に近い熱意を向けられた一誠は、まるでつまらなさそうな顔でイツセーに白い目を向ける。

「マジもクソのそのままだろ。そんなもんどろろってんだよ? 何の得にもならねえだろうが」

そう答える一誠に、イツセーはまるで信じられないものを見るかのような目を向けた。

彼には信じられなかったのだ。彼がもつとも信じる偉大なる存在が、目の前の者はそれこそ本当にくだらないと言わんばかりの反応をしていることに。

だからこそ、もつと彼は熱く語り始める。

「そんな得なんてもんじゃねえ！ おっぱいってのはなあ……男の熱いパトスなんだよ！ 夢であり、本能が求める極致なんだよ！」

「はあ……それで？」

「なっ!? わかんねえのか！ 見てみろよ、あの部長のおっぱいを！ 朱乃さんのエロチックなおっぱいを！ こう、グツとくるもんがあるだろ？」

「いや、まったく。まあ、でかいってのは分かるが、そんなもんそれぞれって奴だろ」

「何だと！ もしかして大きいおっぱいじゃなくて小さい方が好きなのか？ じゃ、じゃあ、小猫ちゃんのロリおっぱいにアジアのおっぱいはどうだ？ それに部長ほどのサイズじゃないけどそれでも充分大きいゼノヴィアのおっぱいは？」

「そう言われてもな。さっきも言ったが胸なんて人それぞれだろ。一々気にしたりするようなもんかよ」

「はあ？ マジで言ってるのかよ！ それでも男かよ！」

「そりや見りゃわかんのだろ。何でこんなことで男なのか疑われなきゃならねえんだよ。寧ろ突っ込むんなら、さっきからおっぱいって言い過ぎだろ、アンタ。オツムが大丈夫か心配になってくるぜ？」

実に支離滅裂で何を言っているのか良く分からない。熱意そのものは真摯に伝わっているので、所無く理解出来なくはない。

この世界の兵藤 一誠（イツセー）において、女性の胸というのはもの凄く重要なものだというのは伝わりはした。

だが、だから何なんだと言うかのように一誠は睨み付ける。

その苛立ちに近いものに周りは少しだけ身を震わせたが、それよりも目の前で繰り広げられている論争とでもいう物の様子に彼女達は見入ってしまう。

「あのイツセーからあんな言葉が出るなんて……」

「イツセー君はエッチなのが当たり前だと思っておりましたから、こんな風に答える彼の姿は何だか奇妙な感じですね」

一誠の答える様子を見て心底信じられないといった驚きを隠せないリアスと朱乃。彼女達はイツセーを好いている女性達の中でも特

に彼を取り合い、良く色仕掛けをしている。その時、当然の如くイッセーは鼻の下を伸ばしてふらふらと二人の間を行ったり来たりをしているわけだ。そんなエロス全開でスケベ丸出しなイッセーと同じ姿をした人からそんな言葉が出るとは思わず、驚いていると言う訳だ。

「本当にイッセーと同じ存在なのか、彼は？ とても信じられない」

「イッセーさんと同じはずなのにまったく違うんですね……」

「あっちの先輩は何か……すごく先輩っぽくないです」

ゼノヴィアとアーシア、それに小猫は一誠の反応に本当に同じ存在なのか疑ってしまう。彼女達の知るイッセーと言えば、エッチだが情に熱い熱血漢といった感じだ。普段はスケベ丸出しなだけにそっちに行ってしまうが、それでもここぞというときは決めてくれる男。

しかし、一誠はそれとは違ってとてもじゃないが、まったく興味を持ってなさそうだと彼女達には感じられた。

「女性に興味がないのかな」

少し危うい感想を洩らす祐斗。

一応言っておくが、一誠は男色の気はない。

「どっちの先輩も何だか凄いです〜！」

何をしても尊敬しそうなギヤスパー。どちらの一誠も彼には尊敬に値するらしい。

そんな感想を抱く周りに対し、イッセー本人は遂に膝から崩れ落ちた。

「そ、そんな……おっぱいにまったく興味がないなんて……こいつ、本当に男か……」

それまで狂気染みた熱弁を振るっていたイッセーだったが、その対象である一誠はそれこそ馬鹿なことを言っているイッセーに呆れ返った様子だ。それに心を打ち砕かれたイッセー。彼の持論からすれば、男は皆おっぱい好き。それを真つ向から否定するのは、最早男ではない。それが平行世界とは言え、同じ存在である自分から否定されたのだ。そのショックは例え自分と直接的な関係はなくとも計り知れないくらい大きかった。

兵藤 一誠がおっぱい好きではない。

この事実は後におっぱいドラゴンと呼ばれる様になる彼にはあまりに衝撃的であつたのだ。

「逆に俺はそっちに聞きてえくらいだよ。何であんなもんにそこまで熱をいれられるんやら。女の胸なんてどうしようもねえだろうによ。そりや俺だつてそれが女の基準の一つになつてゐるつてのは知つてるけど、その程度の事だろうが。胸で腹が膨れりや気にはするが、それでもねえなら何もねえだろ、普通。そんな自分に何も無いもんに夢中になる理由がわからねえよ」

対して一誠は本当に何言つてゐるんだ、こいつと言つた感じだ。

彼からすれば、どうしてここまで下らないことに熱を上げられるのかの方が不思議で仕方ない。

別に彼だつて知らないわけではない。世の中の男性は女性の胸に欲情する事ぐらいは知つてはいる。だが、この男はそれ以前に生き方が重要なのだ。

女よりも戦いを求める。自分の生き方が重要なのであつて、生活苦であつても其方を優先する。早い話が、この男は恋愛に興味が無い。女に欲情しない。性欲よりも闘争本能が上である。

そんな人として外れているからこそ、あれほどの力を手にしたと言つてもよいのだが、それでもやはり人としては欠陥品なのだ。

そんな男にいくら男の欲望を語つた所で理解などするわけがない。

イツセーは目の前の男が本当に同じ兵藤 一誠なのかと本当に信じられなかった。

そんな二人の様子があまりにもおかしかつたのだろう。

「あつはつはつは、ひい、もう駄目だ！ 腹いてえ！」

久遠が堪えきれずに腹を抱えて爆笑し始めた。

それはもう本当に清々しいまでの笑い声に、それまでショックを受けていたリアス達も何だ何だと久遠の方を向いてしまう。

そして笑われた一誠とイツセーが当然反応しないわけがない。

「デメエ、いきなり笑うつてのはどういふことなんだよ？」

実に不機嫌そうに睨み付ける一誠。久遠に笑われたことが実にム

力ついたらしいが、これも彼等からすればいつものこと。もう慣れてるので実際はそこまで怒ってはいない。

「な、何が可笑しいんだよ！」

いきなり笑われたイツセーは一体何が可笑しいんだと本気で久遠に問いかける。どうやら一誠の説得に失敗したせいで精神が折れかけていたようだ。

そんな二人や周りに対し、久遠は腹を抱えつつ説明することにした。既に一誠は何を言うのか分かっているのか、不機嫌そうだが何も口は挟まないようだ。

「いやあ、まさか世界が違うとここまで違うとは思わなかったものでね。あのイツセーと同じ顔が実にからぬことを熱意込めて言うもんだから、あまりにもそのギャップが可笑しくて笑っちゃったんだよ。いや、すまないとは思ってたんだけど、堪えきれなくてさ」

それでも笑う久遠。そろそろ一誠の拳が握られて来たのを見て仕方ないといった感じに説明し始めた。

「こいつにそういつた『色事』を期待するのは間違いってもんだよ。何せコイツは素でアーシアちゃんやらあの可愛い幼馴染みのイリナちゃんだっけ……その二人を普通に部屋に泊まらせるような奴だからな。それも何もしないで。勿論、ヘタレたとかそんな意味じゃなくて、普通に何も考えずにだ」

その言葉にイツセーは信じられない目を一誠に向けた。

男の一人暮らしのところに美少女を二人も泊めさせ、それに手を出さないというのは男としてどうなのかと。勿論、イツセーは駄目だが、この男の場合は周りが放っておかないのでそれには困らないだろう。結局の所はトラウマもあってヘタレなのだが。

だが、一誠はそうではない。素で気にしない。異性と認識はするが、意識しない。

あの時泊まらせたのは、泊まる場所がないということで仕方なく泊めたに過ぎないのだと彼は胸を張って答えるだろう。

その違いが久遠には溜まらなく可笑しかったらしい。

「コイツは異性に興味なんて持たないよ。コイツが大好きなのは、そ

れこそ命掛けの喧嘩だよ。自分の力を存分に振るえる、全開で殺し合える喧嘩が好物でね、それ以外は特に興味ねえんだよ。ああ、後スーパ―の特売には目がないのもそうだったか」

その久遠の言葉に一誠はその通りだと頷く。

彼は性欲など殆ど無い破壊の権化と言って良い存在だ。故に戦いこそが一誠の本領であり領分。ただし、常に戦いのみを求めているわけではなく、日常もそれなりに楽しんではいる。

そしてスーパ―の特売は彼の生活において重要なことであり、それがライフラインと言っても良い。万年金欠なこの男にとって特売はそれこそ、絶世の美少女からの告白なんかよりもずっと大事なことである。

何せなければとつくに餓死していても可笑しくないのだから。

「この馬鹿は戦いと特売があればそれだけで充分なんだよ。それ以外は余分でいらねえって思ってたのさ。正直性欲なんてもんとは無縁だよ、コイツは。何なら俺はコイツが女に靡かないってことに全財産賭けてもいい。それぐらいコイツは異性に興味が無いんだよ」

久遠は愉快そうに語る。その様子に一誠はもう、目の前の人物が同じ兵藤 一誠だとは思えなかった。

「おっぱいに興味が無くて、しかもそれで戦いが好きって…どこぞのヴァーリじやねえか……」

それなのにあんなに強いなんて、とイツセーは思う。

自分はあれだけの思いをして、やっと今の力を手に入れた。まあ、性欲に直結して禁手に至るなど、通常からはかけ離れた方法で覚醒したりしたわけだが、それでも充分強くなってきた。その自覚はあるが、それでも足りないと思っセーは思う。今も、そしてこれからより強大な敵は目の前に現れるだろう。それらと対峙したとき、リアス達を守るだろうかと不安を感じるのは拭えない。だが、目の前に一誠は違う。

圧倒的な力を持って、相手を飲み込み殲滅する暴威。自分が仲間達とあれほど苦戦しても倒せなかったロキを一方的に打ち滅ぼした力は、それこそイツセーが望んでやまないものだ。

自分と目の前にいる『自分』。

その違いは育った環境は勿論、その生き方。そして何より、性欲と闘争本能の違いではないだろうか。

そう思うと考えさせられるものがある。だが、同時に……エロを自分から取ったら何も残らない気がする。と冷や汗を掻くイツセー。それはもう自分じゃないとすら思った。

だからこそ思う。

（コイツ、もう俺とはまったく違うんじゃないか）

そう思っていると、今度は一誠の左腕から声が聞こえてきた。

それは勿論、イツセーも聞き覚えのある声である。

『ふん、さっきから聞いていれば随分と腑抜けたことを抜かすようだな、この世界の相棒は。こちらこそ同じ存在だとは到底思えないぞ、相棒よ』

「言うなよ、ドライグ。俺だってこうも違うのかって思ってたんだからよ」

それは彼等二人に宿っている神器、赤龍帝の籠手に封印されている二天龍の一角、ドライグであった。その声に反応し、イツセーの左腕からも声が上がった。

『そちらの相棒はまさに、我等の理想とでも言うような使い手のようだな。正直羨ましいぞ。それに比べて俺の相棒は……はあ』

「ちよつ、ドライグさん！ さっきの溜息は何なんだよ！ さっきの、明らかに呆れ返ってただろ！」

同じ空間に存在し得ないはずの同じ存在によるそんな会話が始まり、一同はさらに二人に注目する事となった。

彼は異世界の彼と出会う その8

突如言葉を発し始めたドライグ達に周りは驚き、二人の兵藤 一誠は互いのドライグの声に反応を示す。

そして当のドライグ達は互いに己の使い手のことを話し始めた。

『其方の使い手はどうにも赤龍帝として緊張感に欠けるようだ。ドラゴンの気は確かに異性を惹き付ける。しかし、だからといって色欲丸出しというのは幾ら何でも酷いと思うぞ』

『そう言われてはぐうの音もでない。確かに其方の言う通りだ。相棒は今までに無い赤龍帝で楽しませてはくれるが、如何せん女にうつつを抜かしすぎるのがどうにもな。英雄色を好むというが、相棒はどうにも好みすぎでいけない。何せ禁手に至ったのも、女の乳首を押すなんて言う巫山戯た方法で至ったくらいだ。正直泣きたくなったよ、俺は』

一誠のドライグにそう言われ、イッセーのドライグは嘆くかのようにそう答える。

その話を聞いていた一誠はあまりの馬鹿らしさに笑ってしまった。

「おいおい、マジかよ！　どんだけだよ、その執着心！　驚きを通り越して感心しちまいそうだ」

「まさかそんなことで禁手に至る奴が居るなんて初めて聞いたよ、俺は。こいつは良い土産話になりそうだ」

一誠に続いて久遠も笑う。

それはそうだろう。何せ本来禁手に至るというのは、その使い手がそれ相応の経験を積み、劇的な変化を起こさなければならないのだから。

それは通常、激戦を繰り広げて命の危機に晒される時などに起こったり、もしくは何かの覚悟を決め込んだりと、肉体的だったり精神的だったりといった要因で起こる。それがまさか、女の乳首を押すことで起こるなど、今までの歴史上有り得ない至り方だろう。

確かにそんな話を聞かされたのなら、笑わざる得ない。

そんな風に笑われ、イッセーは顔を赤くしつつも怒る。

「ウッセー、おっぱい嘗めんなよ！　そういうそっちはどうなんだよ！」

イツセーの怒りの籠もった問いに対し、一誠は少し考え込む。

そう言えば、一体自分はいつ頃から禁手に至ったのだろうか。

この男、あまりそういったことは覚えていない。使える事は分かっているが、それがいつ頃出来る様になったのかということとは全く覚えていないのだ。

故に答えが出ない一誠に変わって彼のドライグが答える。

『相棒はそういうことにまつたく感心がないのでな、俺が代わりに答えよう。相棒が禁手に至ったのは、四年以上前だ。確かアレは………』

そしてドライグから語られる一誠の禁手に至った経緯。

それは彼等からすれば何てことない思ひ出話。しかし、イツセーやリアスからしたらあまりにも常識外の話であった。

彼等はが口にしたのは、単純に仕事の話であった。

ただし……それが悪魔達による犯罪組織の殲滅という話。

ドライグが言うには、現体制を快く思っていないのは何も旧魔王派だけではないらしい。平和になれば、それを快く思わない者も必ず出て来るのだとか。

その殲滅を依頼されたわけだが、何も一誠でなくても良いはずである。そこには単純に、悪魔同士の諍いを他の者達に見せないためと、そしてその組織の力が結構強いことから被害を出したくないという事で一誠に依頼が来たのだ。

要は捨て駒である。これで達成出来れば被害はゼロで済み、そうではなくても一誠の強さはそれなりに知られ始めている頃なので、多少は組織の弱体化を図れると。

そしてその仕事の最中、一誠は禁手に至ったのだとドライグは語る。

『まあ、あの時の仕事はそれなりに相棒には刺激的だったのだろう。何せ上級悪魔達が数多くいたからな。確か30人くらいだったか』

今から四年も前となると、一誠は大体13歳前後。そんな頃に上級

悪魔達と戦うなど、正気の沙汰ではない。それも神器を持っているとは言え人間が30人もの上級悪魔を相手に戦うなど。

その話を聞いて当然イツセーやリアス達は顔を青くする。

そんな子供が勝てる訳が無いのだから、当然死にかけたのだろうと。

しかし、その考えは全く当たっていなかった。

当時の事を思いだしていたのか、ドライグは苦笑したような様子で語った。

『あの時の相棒ときたら、実に生き活きた様子でな。それはもう、実に赤龍帝の名に恥じない闘争であった。それでも凄いというのに、全身を血で真っ赤に染めながら獣のように笑ってなあ、「もつとだ！

もつと、もつと俺を満足させてくれよ、なあっ!!」と言って上級悪魔達を拳で撲殺していったのだ。その時、相棒の願い：（よりもつと戦いたい）という思いを持って禁手へと至り、その組織を施設諸共全て消滅させた』

それを聞いて開いた口が塞がらなくなるイツセー達。

確かにもつともそれらしい禁手への至り方だが、だからといって、何で人間であるはずの彼がこの場に居る悪魔のイツセーよりも苛烈なのだろうか。

そんな周りを気にせず、一誠は当時のこと思い出したようだ。

「ああ、そういうえばそんな事があったか。あん時の仕事は悪く無かったなあ。まあ、今にして思えばあの程度で喜んでたテムエが恥ずかしいもんだ。あんなもん、今じゃ退屈だろうによお」

そう言う一誠に久遠も思い出したようで、一誠に話しかける。

「ああ、あの時の仕事か。あん時は大公が信用してなかったもんだから、随分とケチられたっけな。でも、あれでお前さんの名前が更に売れて仕事も来るようになったんだっけ」

「ああ、そいつも思い出した。あのクソ大公、こっちがガキだからって下に見下しやがったんだっけか。そう思うとむかついてきたぜ。戻ったらサーゼクスに頼んで殴らせてもらうか？」

「やめとけやめとけ、今じゃ充分お得意様だ。やったら本当に俺等は

干上がっちゃうよ」

そんな話をしながら笑い合う一誠と久遠。二人の会話に依然としてイツセー達は驚いたまま動けないが、イツセーのドライグはそうではなかった。

『何と赤龍帝らしいことか！ それに比べて此方の相棒は……はあ。もう少し其方の相棒の爪の垢を煎じて飲ませたいくらいだ』

「ぐう……言い返したいのに言い返せない……」

その言葉にイツセーは文句を言いたかったが、確かに其方の世界の一誠が実に『赤龍帝』らしいというのは彼でも分かるだけに、何も言い返せない。おっぱいの偉大さを理解出来ない異常者にイツセーは言葉が通じるとは思えないのだ。

そんな宿主の様子を感じてなのか、更に呆れ返るドライグ。

そんなドライグを気にしてなのか、一誠のドライグが少し笑いの籠もった声で話しかける。

『だが、相棒もそこまでちゃんとした人間ではないぞ。せっかく手に入れた報酬の九割を孤児院に渡してしまつて金欠だ。その上毎回特売の事ばかり気にしているし、今はアーシア・アルジェントの御蔭で食いつないでいるが、その前は常に生き倒れるか辛うじて食えているかといった瀬戸際ばかりだ。そういった点は直すべきだと言つてはいるが、相棒は自分の決めたことは絶対に曲げないのでな。そういった点は多少困っている。それにいくら空腹だからといっても、俺をスーパーの特売の一名様にしようなどと無理なことを考えてはへこんでいるのだからな』

そんな慰めの言葉にイツセーのドライグは感謝するも、それでもやはりへこんでしまう。

その程度なら、寧ろまだマシだ。

何せ此方は毎回懲りない覗きをしては捕まつてリンチに遭い、教室内では卑猥なDVDなどを公然と交換し合う。挙げ句は毎回おっぱいおっぱいと連呼しまくるのだから、それに比べれば向こうの一誠は何と真人間なことかと。

そんな感じで妙に仲が良くなるドライグ達。同じ存在ということ

で、互いに共感するものがあるのだろう。

そして親しくなったことで、今度は互いの相棒の戦闘について話し始める。

『ところで、其方の相棒はどのような技を持っている。あの時、相棒は意識を失っていたが、俺はしっかりと見ている。あれほど強力な技だ。出来れば相棒に少しでも覚えさせたい』

イツセーのドライグがそう言うのと、イツセーは余計なお世話だと言いたいようだが口を噤む。彼自身は詳しく知らないが、あのロキを滅ぼすほどの威力だ。聞いておいて損はないと思ったのだろう。

それに答えようとする一誠のドライグ。

だが、一誠はそんな向こうのドライグに対し此方のドライグにつまらなさそうな顔で話しかけた。

「おいおいドライグ、俺の技なんてそんな大層なもんじゃねえだろ。それにだ、そう言うのならまずは向こうがどんな技もってんのか聞いてからが先だろ、普通」

『確かに相棒の言う通りだな。教えるを請うということは、こちら側の相棒は同じ技を知らないということになる。なら、どのような技を持っているのかはこちらとしても知っておきたい』

一誠の言葉に賛同するドライグ。

それは教えること自体はやぶさかではないが、こちら側のイツセーがどんな技を持っているのかは興味があるのだ。

そんな一誠とドライグに対し、向こうのドライグはは実に気まずそうな雰囲気醸し出し始めた。

『いや、えっと、そのだな……』

そんなドライグにイツセーは自信を持って答える。

「何気まずそうにしているんだよ、ドライグ。俺達には俺達の技があるってことを教えてやろうじゃねえか」

『相棒…だが、アレは……』

尚も言い辛そうにしているドライグを無視してイツセーは一誠に堂々と言い放った。

「俺の技、それはドラゴン波とドレスブレイク、そして力の譲渡だぜ

！」

それを聞いた一誠はわからないといった感じに首を傾げた。

勿論、この男が漫画などの娯楽品について知っているわけがない。その技が漫画のキャラから因んだ技ということも気付かないのだ。

だからこそ、一誠は問う。

「それってどんな技だ？　とくにその『ドラゴン波』ってのと『ドレスブレイク』ってのは？　力の譲渡ってのは予想できるけどよ」

その反応に当然イツセーは驚いた。

ドレスブレイクはまだしも、ドラゴン波と言えば国民的アニメの有名な必殺技だ。それを知らないと言うことが彼には信じられなかった。

だからこそ、イツセーは一誠にそのことを教えようとするが、これ以上恥の上塗りは止めてくれと言わんばかりにドライグが答える。

『ドラゴン波というのは、相棒が好んでいる漫画のキャラクターが使っている技だ。実際は少ない魔力に倍化を何度かかけた砲撃だ。そしてドレスブレイクというのは……うう……』

何やら気の毒になりそうな雰囲気を出すドライグ。それでも何とか言葉を捻り出した。

『ドレスブレイクというのは、相棒が下心で作り出した相手の衣服を全て破壊する技だ。一回相手の身体に触れることで相棒の魔力を衣服に浸食させ、そして次に相棒が合図を送ることで衣服が弾ける。勿論、相手が女でなければ相棒は使わない』

その言葉にイツセーは自信満々に胸を張るが、リアスや朱乃からは仕方ないといった表情を向けられ、ゼノヴィアやアーシアからは少し不服といった感情を向けられる。小猫は白い目でイツセーを見て、祐斗は苦笑、ギヤスパーはそれでも尊敬の視線を送る。

そしてそれを聞いた一誠と久遠は……まあ、予想通りだろう。

久遠は爆笑し、一誠は実にくだらなさそうな目で一誠を見た。

「そんな役にたたねえ技で胸張んなよ。そんなもんじゃ相手を倒せねえだろ、アホ」

「なっ!?　俺の努力の結晶に何てことをいうんだ、このヤロー！」

自分の自慢の技を貶されたことで怒るイツセー。

そんなイツセーのことを実に恥ずかしいと思う彼のドライグ。

そしてそんな一誠に変わって今度は彼のドライグが一誠の技を明かした。

『相棒の技は単純に三つしかない。一つ、俺のオーラを拳に圧縮して威力を高めた拳を相手に叩き着けるドラグブリット。二つ、その圧縮したオーラを砲撃として放つドラグブリットバースト。この砲撃は其方のドラゴン波という物と変わらないだろう。ただし、これは籠手の展開部分の多さによつて威力が変わってくるし、相棒の戦意によつては一撃で山一つ軽く消し飛ぶ。それも一回の倍化でだ。尚、これはただの砲撃というわけではなく、圧縮したオーラを拳で直に相手に叩き込むことで相手の内外ともに破壊する。それに禁手に至れば更に威力は上がり、背中の噴出口からオーラを噴出することによつて途轍もない加速を得る。それにより以下の技はそれこそ一撃必滅の威力となるものだ。最後に……いや、これは止めておこう。どうやらまだ其方は『至つて』いないようだしな』

その言葉を聞いてイツセーはその凄さの実感が湧かずに首を傾げるが、周りはそうではない。

あの超絶的な威力を見れば、誰だつて理解するだろう。

複雑ではなく単純、なれどその威力はそれ故に度を超している。

『成る程、だからこそそのあの威力か。いやはや、まったくもって感心させられるな、其方の相棒には。こっちの相棒がそれ程の力を持っているれば、ああも変なことには使わなかっただろうに……ああ……』

イツセーのドライグは心底そう思いながら向こうの一誠に感嘆の声をかけると共に自分の宿主に嘆いた。

それに気付いた一誠のドライグは軽く慰めの言葉をかけるが、それでもやはり落ち込み具合は治りそうにない。

こうしてドライグ達は互いの相棒のことを知った。

ただ、イツセーのドライグは本当に一誠のドライグのことが羨ましいと感じた。

彼は異世界の彼と出会う その9

前回の話で此方の世界と平行世界の赤龍帝について改めてしまったリアス達。

それは常に驚きの連続であった。

同じ姿形でありながら、その中身は極端に違う。

片や年相応に青春を謳歌し、自分の性欲に従順なりアス達の想い人。スケベな点は少しばかり悪目立ちすれど、仲間思いの熱血漢であり皆のことを守ろうと頑張っている少年。

もう片やその苛烈な環境に適応し、危険と隣り合わせに生きてきた修羅。目覚めた力を自らの物とし、常に死に瀕するような戦いで鍛え続け、目の前に立ち塞がる障害を全て打ち砕いてきた少年。

それはこの世界の『兵藤 一誠』を知るリアス達にとって信じられない程に違っていた。

そしてもう一つ同じ存在である『赤龍帝の籠手』に宿りしドライグもまた、少しばかり違っていた。いや、此方は性格などは一緒だ。しかし、宿主である一誠達の評価は丸つきり違っていた。

此方の世界のイツセーのドライグは今までに無い存在で愉快ではあるが、同時に下心が強すぎるが故にそれが覚醒のトリガーになったりと恥ずかしいとも思っていた。

対して平行世界の一誠のドライグは自分の宿主を誇らしげに語る。もつとも赤龍帝らしい振る舞いをし、その本能に忠実。己が力を持つて全てを打ち砕く様はまさに爽快の一言に尽きるのだとか。

それは同じ神器でありながら、進化によって能力が違うことにも現れていた。

イツセーの赤龍帝の籠手は通常の倍化、そして倍化した魔力や力を他者へと譲渡する能力。または彼の下心が生み出した相手（女性限定）の衣服を破壊するドレスブレイク。

これらは主に、仲間を思い助けたいと思うことから進化した能力や彼の煩惱が生み出した特殊過ぎる技だ。その戦闘は主に仲間と共に戦うことを前提としている。

対して一誠の赤龍帝の籠手は同じく通常の倍化、そしてそこから繰り出されるのは全てを粉碎する凶悪な攻撃。ドラグブリットとドラグブリットバースト。この二つは一誠が今まで生きてきた中で磨き上げた一撃必滅の技。たった一人で全てと戦うべく鍛え抜かれた凶悪な武器だ。

そしてこの場に在る者達には明かさなかったが、最後の技である『ロンギヌスブリット』。それは至った先にある、極限の技。放てばそれは全てを灰燼に帰し、文字通り何もかも残さずに破壊する。それは物質的なものに限らず、『世界や次元』すら破壊出来うるものである。それを言うには、まだイツセーは『未熟』過ぎるのだ。だからこそ伏せた。

それを語らなくてもこの『兵藤 一誠』の凄まじさは伝わるのだから。

さて、そんな風に両者の違いを比べ合った所で、その後がどのようなかと言えば…………。

「さて、では詳しく聞かせて貰もらうぜ。お前さんの『神すら滅ぼす力』って奴をよお」

「リアスから色々とは話は窺っているよ。だからこそ、まだ聞いていない事については是非とも聞かせてもらいたい」

「私としても知りたいですからね」

現在、兵藤邸にてリアス達は額に冷や汗を掻いていた。

それというのも、目の前にいる人物達が原因だ。

リアスと同じ紅髪をした凛々しい青年……四大魔王の一人にしてリアスの兄、サーゼクス・ルシファア。

黄色の前髪と黒色に二色の髪色をした男……『神の子を見張る者（グリゴリ）』の総督を務めるアザゼル。

美しい金色の長髪をし、頭に輝く輪を浮かべる青年……天界の組織「熾天使」を率いる天使長、ミカエル。

そんな三大勢力のトップが人間界の普通というには少しアレだが、それでも普通の一宅に集まっているのだ。

それに緊張しない者は三大勢力内にいないだろう。

当然彼等が来た理由というのも、彼等の前でソファで気だるそうに寛いでる平行世界の『兵藤 一誠』が原因だ。

今までに無い前例、そして神を一方的に討ち滅ぼしたというのは、如何に報告で聞いていようと気になるもの。だからこそ、こうしてトップ達は会いに来たのだ。目の前にいる、破壊の化身に。

「ぶ、部長、まだアザゼル先生は分かりますけど、何でミカエル様まで来てるんですか!？」

緊張で固まっているリアス達の中、イツセーは周りに聞こえないように小声でリアスに問いかける。彼自身は何故こんなことになっているのかイマイチ分かっていないのだ。

それも仕方ない話。何せイツセーはあの力を見ていないのだから。

そんなイツセーにリアスは静かに答える。

「やはり言うべきかしら。お兄様もそうだけど、三大勢力のトップは気になるみたいなの、彼の事が。それに私も気になることがあるしね」

そう答えるリアス。その言葉にイツセーは一誠に若干の嫉妬を燃やすが、リアスが気になってるのはそんなものではない。

ただ、その答えはこれから明かされるだろうと思うからこそ、ジツと待つことにした。

そんなリアス達に比べ、緊張感など微塵もさせずに寛いでいる一誠は3人の来訪者に対して普通に話しかけた。

「まあ、あんたらは普通に来るとは思ってたよ。どうせ俺について色々と話せてんだろ」

「そう言うなよ、イツセー。向こうじゃお得意さんだったから多少知ってたけど、こっちはそんなことはねえんだからよ」

飽きたと言わんばかりにグダつとしてる一誠に対し、久遠は苦笑しながらフォローを入れる。

そんな久遠に一誠はそれじゃお前がやってくれと言わんばかりの目を向け、久遠はしやうがないと言いながら3人に向き合った。

「それで、偉大なる三大勢力のトップの方々はいったい何を聞きたい

のでしょうか？ まあ、ここは別の世界だから守秘義務もねえし、知ってる範囲なら答えましょうか」

営業するときに相手に向ける作り笑顔を浮かべながら久遠はそう言う、早速食い付いたのはアザゼルだった。この中で一番そういつたことに興味を持つのは間違いなくこの男だ。

「んじや早速。話には聞いてたがよ……お前さんのその力：『赤龍帝の籠手』の力にしちや随分と変わってると聞いていたからよ。禁手の時の姿も違ってたからなあ。ありや禁手の亜種か？」

アザゼルが聞いたかった最初のことはそこ。

神器は使用者によってその性能を変えていく。その中でも特に変わっているのは、禁手の亜種だ。それは本来の姿から変わった変化を起こし、使用者の使いやすいように姿を変えたものこと。

神器を研究しているアザゼルからしたら気になって仕方ない話題だ。

それに対し、最初に答えたのは久遠だった。

「まあ、聞くだけ無駄だと思いますけど……何で知ってるんですか？ 更に聞けば、まるで直に見たようですけど」

それに対し、アザゼルはニヤリと笑った。

「まあ、念のためにアイツ等には隠しカメラを付けておいたからなあ。勿論、ウチで開発した特殊な人工神器の一つなんだぜ」

それを聞いた全員は一斉にアザゼルに白い目を向けた。世界が変われどこの変人は変わらないというのは、一誠と久遠共通の認識になった。

そしていつの間に仕掛けたんだとイツセーやリアス達は慌てるが、アザゼル曰く作戦当初で既に外しているということ。本当にそれが信用できるかは分からないが、それでも一誠のあの姿を見たと言うのは本当らしい。

そしてその問いはリアス達も気になっていた。何せ彼女達はその姿を直に見たのだ。

その異形を見て、その力の余波を感じて。

だからこそ気になるのだ。自分達が知るイツセーもあのようにな

るのかどうかというのも含めて。

それに対し、一誠は面倒臭そうしていた。

それというのも、彼が説明下手だからだ。元からそんなキャラでないことは、彼と話したことがある者達なら直ぐにわかるだろう。

「あゝ、アレのことか。アレね………」

彼自身、アレがどういう原理でなっているのかなど説明出来ない。

一誠なりに言わせて貰うのなら、ドライグの精神世界で絡んできた連中を全員ぶっ飛ばしたら出来る様になつていたとしか言いようが無いのだから。

そんなわけで困った様子を見せる一誠に替わり、彼に左腕からドライグが答えた。

『アレは亜種などと言う矮小なものではない。アレは至ったその先だ』

「至ったその先？ おい、まさかそいつは……」

その言葉にアザゼルは何か思い当たったものがあるようだ。

そしてアザゼル以外は丸つきり分らない様子。特に赤龍帝であるイツセーはそれが何なのかまったくもって理解出来ない。彼からすれば、禁手よりも上があるのかと問いたいくらいだ。そんな宿主と違い、彼のドライグは言葉こそ発しないがその考えに至り内心驚いていた。

そしてアザゼルがその答えを口にする。

「そいつはまさか……『覇龍』か」

その答えにやっと理解したサーゼクスとミカエル。

それでもまだ分かっていない様子のリアス達に二人は簡潔に説明を入れた。

「リアス、『覇龍』というのは『赤龍帝の籠手』と『白龍皇の光翼』に備わっている最強の力のことだよ」

「その力というのは、今まで制御していた二天龍の力を解放すること。本来の能力を前端的に使えるという能力です」

それを聞いてイツセーは顔を驚愕に染める。

まさか禁手以上に上があるとは思わなかったのだから。

そして同時にそれを会得したいとも思ったが、それはアザゼルの言葉で止められた。

「だが、それにしたって可笑しいだろ。アレは本来、巨大化して龍の姿になる上に歴代所有者の残留思念で精神を汚染される暴走に近い代物だ。だが、お前さんのあの姿は全く違っていた」

誰だって危険すぎる力を身に付けたいとは思わないだろう。

そんな危険な代物なら、流石にもっと強くなりたいと思うイツセーでも御免だと思う程だ。

そんなアザゼルの言葉に対し、一誠のドライグは少し愉快そうに答えた。

『相棒はな、それすら乗り越えた超越者だ。寧ろその事については俺ですら驚きを通り越して呆れたくらいにな。アレはな……覇龍の更にその先の姿。相棒が自分の力を発揮するために生み出した、相棒だけの超絶的な力だ。他者を一切寄せ付けない、神すらも軽々と滅ぼす覇龍の進化。それがあの正体だ』

「覇龍を進化……だと？」

なまじ覇龍を知っているが故に驚くアザゼル。それは勿論サーゼクスやミカエルも一緒だ。

それが面白かったのか、ドライグは更に語り出す。

『確かに貴様の言う通り、覇龍とは我等の力をそのままに表せる物だ。だが、それは普通では耐えられない。何せこれでも天を冠した龍なのだ。矮小な存在に使いこなせる訳がなからう。しかし、相棒は違う。寧ろ俺が引つ張られてしまうくらいに凶悪で凶暴だ。その精神は強靱過ぎて、歴代所有者の残留思念など全員精神世界で殴り飛ばしたくらいだからな。汚染するどころか全員相棒に負けて何も言えなくなったものだ。だからこそ、至ったのだ……その先に。聖書の神が作りし神器という枠を壊し、奴が想定したものを遙かに超えて相棒は進化した。実質これこそ最強の赤龍帝よ』

自信満々に語るドライグ。

そんなドライグに一誠はあまり面白そうな顔をしない。

「おい、ドライグ。そんな気色悪い話は止してくれ。別に大したもん

じゃねえだろ。お前の精神世界に行ったらいきなり絡んできやがったもんだから、思いつきりぶつ倒しただけじゃねえか。確かに同じ神器を使う奴等との喧嘩ってのは悪くはなかったがよお……『アイツ』に比べればみみっちいもんだ」

『普通なら三大勢力が仰天するようなことだと言うのに、この相棒は……。まあ、だからこそあのように最強になれると言ったところか』そんな一誠にドライグは仕方ない奴だと笑う。

そして一誠の力の正体をドライグは改めて皆に告げた。

『アレは相棒が自身の力を100パーセント……いや、それこそ限界など超えて出すための形態だ。その名を…覇龍進化 赤龍暴帝の重鎧殻と言う』

その言葉に皆が理解した。

つまり、アレは本来の赤龍帝の籠手の禁手どころではない。

その先にある覇龍、それすら超えた先。神が作りし限界を超えた力。

ドライグの力を満遍なく発揮し、それ以上に一誠の力を発揮する姿なのだと。

その事実には驚愕するリアス達やサーゼクス達。

そんな光景を既に見た事がある久遠としては笑いを堪えるのが大変なようだ。

だが、それでも彼等はまだ分かっていない。

アレが………ロキを倒したのは、全くもって『全力』ではないということに。

「つまり、それがロキを倒した力の正体ということか」

「全くもって未恐ろしいものだな」

「神の作った限界を超えとは……人間には驚かされるものですね」

「そんな凄いもんが俺にもあるのか……」

『相棒では無理だと先に言っておくぞ。向こうの相棒は既に人としての上限を超えている』

驚きに声を漏らす皆だが、そんな周りに久遠はにっしつと笑いながら更に爆弾を落とした。

「驚いてるところ申し訳ないんですが……アレはコイツの全力なんかじゃないですよ」

「「「「「「えッ!」「」「」「」」」」」」

皆が驚く顔を見て愉快そうに笑う久遠。一誠は実につまらなさそうだ。

「アレはコイツのほんの少しの力ですよ。少し前に派手にやり合った後、一週間程度寝込んでたもんだから鈍ってるって言うんでリハビリ代わりにやっただけですよ」

『あの程度相棒の全力には程遠い。相棒の全力なら、それこそ世界が崩壊するだろう。それに比べればあの程度、漏れ出したほんの一滴に過ぎない』

「まあ、リハビリがてらにや丁度良かったがよ。その程度だな。どうも『あの野郎』とやり合ったせいかな、不満が残っちまう」

その言葉に今度こそ皆は言葉を失った。

神すら滅ぼす力を振るってにおいて、それが全力ではなく全力の一割以下にしか過ぎないと言うのだから。これには流石のイツセーも彼の中のドライグも驚愕し打ち震えた。

そして次にアザゼルが気になったのは、彼が度々口にするもの。

「なあ、つまりお前さんにとってロキは雑魚同然だったってことか?」

「ああ、まったく。こつちに飛ばされていきなり喧嘩をふつかけて、それでぶっ飛ばしたってだけ。悪くはねえが、その程度って奴だ。『あの野郎』の1000倍以下って感じだったぜ」

『あの野郎』ってのはいったい誰なんだ?　そこまで強いお前さんが対等だと言ってるそいつは」

そう聞かれ、周りの視線が集まる中、一誠は周りが怖気るほどに殺気立った笑みを浮かべながら答えた。

「決まってるんだろ……ヴァーリの野郎だよ。俺が一番ぶっ倒したくてたまらない、俺の喧嘩相手だ。あの野郎に勝つただけにずっと磨いてきたんだからよお、この拳をなあ」

その言葉に周りは更に驚愕した。

彼は異世界の彼と出会う　その10

ヴァーリ・ルシファー。

その名は彼等にとって実に大きな意味を持つ。

今世の白龍皇であり、アザゼルにとっては今まで世話を見てきた息子のような存在。そして何よりも先代ルシファーの血を引く逸材。

その実力は上級悪魔すら軽々と凌駕し、魔王にすら届くかもしれないほどに凄まじい。本人の好戦的な性格もあつてその伸びしろはかなり大きく、まだまだその成長は止まらない。この世界のイツセーが歴代最弱の赤龍帝と言われているのに対し、この男は血筋と共に『歴代最強の白龍皇』と言われている。

そんな人物の名を異世界の人物から聞かされ、周りは当然驚いた。いや、彼が言っている『ヴァーリ』がこの場にい者達の知っているヴァーリ・ルシファーでないことは知っている。何せ世界が違うのだから。

だが、それでもやはり驚かずにはいられないのだ。

「ヴァーリ……それは勿論、ヴァーリ・ルシファーのことだよなあ」
皆が驚き固まってる中、アザゼルが念の為に確認を取る。

その言葉に対し、一誠は勿論頷いた。

「ああ、そうだよ。確かアイツ、そんな名字だったか？　まあ、名字が何であれ、アイツがオレのぶちのめしたいヴァーリであることに変わりねえ」

「やはりそうか……世界が変われどアイツの行動は変わらないってことか……」

一誠の反応からやはりそうかと少し嘆くアザゼル。

彼等の知るヴァーリはコカビエルの暴走に介入した後、三大会談に於いて禍の団へと寝返り、イツセーと戦った。

その理由も単純で、和平を結ばれると戦えることが減るから。安定する三大勢力よりも禍の団の方が戦闘狂である自分には性に合っている。

未だに敵対しているヴァーリに対し、皆思うところがあるのだろ

う。

アザゼルは少し嘆き、サーゼクスは旧ルシファアの血族であることに思うところがあり、ミカエルは白龍皇が赤龍帝と争い合うことを危惧する。両者の戦いは危険過ぎるからだ。

そして何より、この世界に於いてライバルであるイツセーは彼の話を聞いて怒りを燃やす。

「あの野郎、やっぱり裏切ってるのか！ くっそ、俺の時も父さん達を殺すとか脅してきたけど、そっちでも同じかよ！」

彼からすれば、自分の大切な仲間の命を自分と戦いたい故に脅かす危険な存在。その怒りは仲間のリアス達にもよく伝わって来て、その通りだと頷く。彼女達も同じように、ヴァーリという存在には危惧を抱いているのだ。

しかし、その言葉を聞いてそれまで聞いていた久遠は不思議そうな顔をした。

「え、何？ こっちであの人、何かしたのかい？」

「どうにも愉快そうな話じゃねえか」

久遠の言葉に一誠も笑いながらそう言う。

久遠は此方との違いを不思議に思い、一誠は此方の宿敵も愉快そうなことをしているようだと言っているように感じる。

それを聞いてそれまで深刻そうな顔をしていた面々が少し呆気にとられた。

この少し怒気と嘆きが混じり合った空気の中で、そんな気の抜けたことを平然と言うとは思わなかったから。そのせいか、室内は妙な雰囲気になった。

それに耐えきれなかったリアスが一誠に問いかけた。

「ねえ……その口ぶりだとアナタ達の方は違うの？」

その言葉に周りも同じように問いかけてきた。

どうにもお互いにすれ違いが起きているようで、逆に問いかけられている久遠達は何やら面白そうだと笑い始める。

そして聞かれた事に対し、久遠は話を纏めて答えることにした。

「つまりこっちのヴァーリ・ルシファアは三大勢力を裏切って禍の因

で只今絶賛暴れ中ってことかい？」

「ええ、そうよ」

「アイツ、自分が強い奴と戦えるんだったら世界がどうなったって良いつて言うんだぜ……冗談じゃねえよ！　もしそうなっちまったら、魅力的なおっぱいがなくなっちまうじゃねえか!!」

「イツセー先輩、最低です」

場違いに怒りを燃やすイツセーに、それにジト目で突っ込みを入れる小猫。

そんな二人を見てリアスは仕方ない子ねえと暖かな目を向け、他の眷属も似たような感じだ。流石に魔王達トップの者達はそれに流されずに久遠と一誠の方に目を向けたままだが。

そんな視線の中、久遠は答える。

「こつちのヴァーリ・ルシファーは裏切つてないからね。こつちとは少し違ってるってことだと思うけどさ」

「え、マジかよ！」

その言葉にイツセーは驚きの声を上げる。

彼からすれば、ヴァーリという男は戦えるんだったら何だつてするようなタイプだ。現にあの時、力が弱い自分を焚き付けるために両親のことで脅迫をかけてきた。それだけに留まらず、その場にいる仲間達にもその力を振るつても良いと脅してきたのだ。

そんな危険な存在が裏切つていないというのは少し驚く。

「もしかしてそっちには禍の団がないとか？」

「いいや、確かにこつちと同じように襲撃を仕掛けてきたよ、連中は」
もしもの可能性を思い付き程度で問いかけるイツセーだが、それは久遠によって普通に答えられた。

ではどうして裏切っていないのかと誰もが考えさせられる。それに対しての答えは久遠ではなく、一誠から答えられる。

「別に野郎に誘いがなかったわけじゃねえらしい。あれでも一応は旧ルシファーってなあ。だがまあ、野郎のお眼鏡には敵わなかったただだよ。それに何より、禍の団の馬鹿共は『俺等の邪魔』をしがった。そいつは一等許されねえ事だったんでな。だから裏切る以前に

ぶつ潰したんだよ」

『俺達の邪魔』？ それって三大勢力の和平のことか？」

「いや、そんなくだらねえもんじゃねえよ」

一誠の言葉に、では何故だと思いう周り。

そんな疑問を浮かべる周りに久遠は可笑しかったのか笑ってしまふ。

別に周りが可笑しかったからではない。一誠の物言いがあまりにも馬鹿らしいからこそ、笑ってしまったのだ。

「おいおい、そりやお前さんにとつてだろうが。あの会談は世界的な出来事なんだぜ。いいかい、皆様方。こいつはさ、あの白龍皇との喧嘩の日程が決められるって時に邪魔されたのが気に喰わなかったんだよ」

「何、それ……」

三大会談は歴史的な出来事と言っても過言ではないくらい重要な事。だというのに、異世界の一誠はそれを下らないという。そのことに驚きもあつたが、それ以上に会談で話された内容が彼女達には気になった。特に久遠が口にした『喧嘩の日程』というのは、あまりに穏やかな日程ではない。

それが分かつてるからこそ、久遠は笑いながら言う。

「俺等の世界じゃ既にコイツとあの白龍皇は顔見知りなんだよ。俺も詳しくは知らないけど、どうやらガキの頃に冥界で一回やりあったらしい。それ以来、互いに宿敵として意識しあつてんのさ、この二人は。それで再び再会したのがコカビエルの時。その時に殺る気満々だったんだが、暴れたらそれこそ学園が吹っ飛ぶの比じゃないっていうんでそこでは取りあえず互いに拳を収めたんだ。それで再び出会って殺る気満々な二人を危惧して、三大勢力の和平と共に二人の喧嘩の場所や日時について話し合うことになってたんだよ二人が暴れても被害が少ない冥界でいつやるのかつてのを具体的に話し合おうってさ」

「何でそんなことになるのよ……」

聞いててあまりの酷さにげんなりするリアス。

まさか三大勢力が和平と結ぶと共に一番最初に話し合う議題が

たった二人の男の喧嘩の準備というのだから可笑しいものである。

それに、此方のイツセーならまずそんな話にならないだろうということがリアス達には分かっているので、その分驚きは大きい。伊達にロキを鏖殺しただけはあるかもしれない。

そんなことを考えているリアス達に久遠は続きを話す。

「それでやつと話が纏まると思って双方ワクワクしてたときに禍の団が襲来。それでブチ切れた二人は襲撃をかけてきた禍の団をたった二人だけで文字通り『全滅』させたってわけさ。この馬鹿の邪魔をするとおつかない目に遭うってのがしみじみ伝わってくる出来事だったよ。その時に誘われてたってことをカテレア・レヴィアタンの口から聞いたけど、あのおにーさん、かなり怒っててね。『奴と……オレの唯一の『敵』との戦いだ。待ちに待った……悪魔からすれば一瞬とって良い程短いのもかもしれないだろうが、それでも待ち遠しかった。それがやつと実現する！ それさえ叶えば、後の事などどうでも良い。奴と戦えることが約束された今、その話を邪魔したお前等に寝返る理由などないのさ』って啖呵切ってその場でカテレアを瞬殺。そのまま二人で全滅するまで暴れ回った御蔭で学園の敷地中に原型を留めない死体が溢れて、学園は殆ど吹っ飛んだよ。そのせいで一週間は休校になったんだから笑えるけどね」

そんなことを笑いながら話す久遠だが、リアス達からすれば笑えない。

あの途轍もなく大変な目にあった襲撃を、目の前にいる一誠とそれから世界のヴァーリはたった二人で皆殺しにしたというのだから。恐すぎて笑いすら出てこなくなる。しかもその理由が『喧嘩を邪魔された』からというのだから、まるで過去の二天龍の再来としか思えない。その逆鱗に触れた結果がそれというのだから尚更。正直向こうの禍の団達が可哀想でならない。

そんな感情と恐怖に駆られつつも、皆は理解していく。

つまり、平行世界のヴァーリは裏切りはしていないが、此方の世界のヴァーリ以上に危険だということ。

そして一番気になるのは、やはりこの世界でライバルとされるイツ

セーだ。

「なあ、それで結局……戦ったのか？」

「「「「「!?」」」」」」

その問いに周りの全員が固唾を飲んだ。

コレまでの話を聞いていれば、如何に一誠がヴァーリを意識しているのかが分かる。そして此方の世界以上に猛威を振るっていることも。

何より、そんな強大な力を有するヴァーリが、目の前にいるロキを塵殺した一誠と戦ったのかというのは、気になって仕方ない事だと言えよう。

その言葉をかけた途端、一誠が不機嫌そうな顔になる。

まるでふてくされているかのような、そんな顔だ。

「……チツ……」

軽い舌打ちに周りが震える。

そんな一誠に対し、答えたのは彼の中のドライグと久遠だった。

『残念なことに引き分けだ』

「ああ、戦ったよ、こいつ等は。冥界にある深い樹海の一部の荒野でね。その結果が引き分け。だからこいつはぶすつとしてるわけだよ」
「そ、そうか……」

どこことなく安心したイツセー。やはり平行世界でも自分はまだヴァーリと決着がついていないということに、少し焦り気味だった彼は安堵した。

しかし……それは次に久遠が言った言葉で凍り付いた。

「その引き分けの結果が冥界の地図の一部の書き換えだったんだから面倒なことだよ。こいつ等、殺り合ったら地形は変えるわ山は全部吹き飛ばすわ、巨大なクレーターを作るわでとんでもなかったんだよ。挙げ句が冥界のその樹海の消滅。辺り一面を広大な荒野へと変えちゃったんだ」

「……………はあっ!？」

その言葉にやはり驚く皆。

いくら強い悪魔や堕天使が戦っても、そんな地図の書き換えが必要

になるようなことには早々ならない。それこそ、魔王クラスの者達でなければまず有り得ない。

それをまるで笑い話のように話す久遠。そして不機嫌そうにしている一誠。彼のドライグは楽しかったようで声こそ上機嫌だが、それでも悔しそうだ。

『相棒の全力でいったというのに、奴も至っていたというのだからなあ。俺が生きていた頃以上の激戦に心躍ったが、それでも勝てなかったのは悔しくもある』

「まさか向こうさんも覇龍のその先に至ってたつてのは驚きだったな。何だっけ……そうそう、確か『覇龍進化、白龍神皇の閃光鎧』だったか。あの能力も殆ど反則気味だったしな」

「なっ!？」

「「「「ええええええええええええええええええええええええ!?!」」」」

ドライグと久遠の会話に更に驚く周り。

向こうの世界の一誠がそうであるように、また向こうの世界のヴァーリも似たような進化をしていることを知ったからだ。

『あの能力は奴の半減の能力の拡大だ。空間の半減、それを自身の前の空間にかけることで距離を縮め、一瞬にして最高速度で相手の目の前に現れる。自身の高速化と合わされば、まさに閃光の如き……いや、光速すら超えた神速の攻撃だったなアレは』

「それに加えて元々の魔力からの広範囲殲滅砲撃も凄かったな。あれは防ぐのに苦労したよ。そんな物騒なのがぶつかれば、危うく世界が崩壊するかと思っただくらいだ」

『実際に世界が悲鳴を上げていたからな』

じつと聞く周りだが、その能力に戦っていた。

確かにヴァーリが空間を半減出来る事は知っている。だが、あれはかなり危険な技であり、早々に使える物でも無いということをやッサー達はアザゼルから聞かされていた。

それがまさか、そんな絶技になっているとは思わなかった。

この技に関して言えば、確かにイツサーも自分の神器の特質を考えさせられるものがあつた。

そんな中、次に聞かされた事には全員がゾツとした。

それは彼女達が今まで見た事もない光景。異形の戦いは基本、そのような接戦にはならないからだ。

「挙げ句はアレだろ。全身血まみれで鎧も全部ぶっ壊れて碎けて死にかけて、それでもこいつ等止まらないからなあ。いつ死んでもおかしくないって状態なのに、こいつらそのままド突き合い始めたんだよ。互いの腕へし折って、血を地面に撒き散らせながらふらついてき。はつきり言つて馬鹿らしいとも思えるくらいの馬鹿っぷりだったよ。でもまあ……」

『ああ、そうだな』

そして二人は同時に口にした。

『「男の意地を見せて貰った」』

その言葉にケツと毒づく一誠。心なしか耳が紅くなっていたかもしれない。

それは彼等にとって男の意地を見せつけられた最高の出来事。

しかし、それを理解出来ない者には悲惨極まりない殺し合いにしか聞こえない。

だからだろうか……………。

この場にいる全員は言葉を失った。

そして理解した。

コレが、この凶暴性こそが、目の前に居る平行世界の兵藤 一誠なのだと。

そして願わくば、そんなことには自分達の一誠がならないことをリアス達は深く願った。

彼は異世界の彼と出会う その11

平行世界の兵藤 一誠の来訪と共に驚愕に包まれたリアス達であつたが、それでも時間は進む。

現在は……二学期である。

彼こと一誠達が来たのが丁度夏休みの最終の頃。そのためなのか、現在兵藤家は一誠と久遠以外いない。皆学園に登校しているのだ。

「ああ~~~~~……暇だ」

「そうだな」

そんな誰もいない兵藤家でその家の主達にばれないように隠れながら過ごす一誠と久遠はそんな言葉を溜息と共に洩らす。

それは仕方ない事。彼等はこの世界の住人ではないのだから、下手に外に出て干渉する訳にはいかない……との建前。実際はすることがなくて暇なのだ。

『若い男二人が暇だと嘆くな。まあ、確かにすることはないが……』

そんな二人を軽く言うドライグだが、彼もまた一誠達と同意見であつた。

今までだったら学校に行ったり仕事をしたりして過ごしていたので、そんな暇ということはなかった。しかし、ここでは仕事はないし学校に行くことも無い。久遠も同じく、情報を集めても使い道がないので暇のようだ。

そんな男二人が項垂れているわけだが、一誠はここで少し思い立つたらしく身体を起こした。

「なあ、ちよつと出歩いてみねえか？」

その言葉に久遠とドライグは反応する。

「おいおい、あまり出歩くなつて言われただろ？」

『そうだぞ相棒。あまり此方の世界に迷惑を掛けるなど……既に掛けすぎているか……』

そんな二人？ に一誠はニヤリと笑いながら返す。

「別によお……『あまり出歩くな』なんだから、少しは出歩いてみても良いだろ」

「そりや、そうだよなあ……」

『ただのトンチか揚げ足だろう、それは』

少し呆れた様子のドライブ。久遠は寧ろ一誠の話に乗り始めた。

「それに、俺が出歩いた所で精々この世界の俺に何かしら来るだけだろ。俺には問題ねえ」

『うお、思いつきり自己中心的な判断だな。あまり此方の世界の相棒を虐めてやるなよ』

「まあまあ、お二人さん。だったら此方のイツセーに迷惑が掛からないような所に行けば良いだろ」

そして話し合う二人と一体。

その結果、此方の兵藤 一誠が居ても違和感がない場所ということになり、どういう訳か駒王学園に行くことになった。

当然それに文句を言う一誠。

「何でこつちに来てまで学校なんだよ？」

「別に良いだろ。この時間帯なら部活とかしたり下校したりしてるから、それらに混じったって違和感はねえんだしよ」

『それに少しは世界の違いを感じてみる良い機会ではないか。特に此方の相棒と相棒のもっともな共通点と言えば俺と学校なのだからな』
そんな一誠に苦笑しつつ説得する久遠とドライブ。

結局、文句はあれど暇よりはマシだと思い、一誠は立ち上がった。

「まあ、ここでウダウダしてるより百倍マシだ。行こうぜ！」

「そうだな」

『これで少しは大人しくなれば御の字だな』

以上、兵藤家でウダウダしている一誠達の会話。

そして彼等は外へと、兵藤家から出た。

「へえ、ここが此方の世界の駒王学園ねえ」

「まったく同じじゃねえか」

そして只今、学園の敷地内を一誠と久遠の二人は歩いていた。

彼等が元の世界で使っていたように通学路を通り、周りの生徒達や住民から不審がられる様子もなく普通に学園に着いた。彼等の目の

前にあるのは、立派な校舎である。

しかし、彼等にとつても見知った学園であることに文句を洩らす一誠とそんな一誠を見て苦笑する久遠。ドライグは人前に出るわけにはいかないと黙っている。

そんなわけで学園内をぶらつく一誠と久遠。

正直目的などないので、散歩のような状態だ。それでも室内で腐っているよりは幾分マシだとは思える。

「それで、この後はどうする？」

一誠は久遠を見ながらそう問いかける。元から目的などないのだから、行く先もない。

そんな一誠に対し、久遠は少し考えた後にニヤリと笑う。

「だったらオカルト研究部の所にでも顔出すか。それで連中の驚いた顔でも見ようぜ」

「まあ、それも少しは面白そうか。今更ここでお勉強とかつてのはありえねえからなあ」

まさに悪ノリをする不良のような感じに歩く二人。そんな二人にドライグは溜息を内心で吐くが、まあマシだろうと判断する。その程度で済むのならそれに越したことはない。

そんなわけでオカルト研究部があるであろう旧校舎へと向かう二人だが、そんな二人の前方が妙に騒がしかった。

その騒がしい原因は二人の男子生徒。何かに追われているのか、必死な形相で一誠達の方へと駈けてくる。

「あ、おいイツセー、助けてくれよ！」

「頼む、逃げるのに協力してくれ！ 秘蔵のDVD貸すからさ！」

二人はどうやら此方の世界の兵藤 一誠の知り合いらしく、一誠に助けを求めているようだ。

そしてそんな彼等の背後から怒濤の勢いで女子の集団が走ってきた。

「待ちなさい、この変態共！」

「待て~~~~~！ 直ぐにお縄につけ~~~~~!!」

「この、また覗きなんかして！ もう、絶対に許さないんだから！」

「またボコボコにされたいらしいわね！」

彼女達の言っていることからその二人が何かしらした事が窺える。そして一誠の姿を見て更に怒りを増した。

「あ、変態兵藤！ あんたもやっぱりグルなのね！」

「そこで大人しく捕まりなさい！ 一思いにやってやるから！」

どういう訳か濡れ衣を着させられた一誠。そんな彼は自分に助けを求める元凶二人が近づいてくるのを見て、実に不機嫌そうな顔をした。

そして……。

駆け寄ってきた二人の顔面を彼にとって軽く殴り飛ばした。

「ゴハッ!？」

「グペッ!？」

まさか殴られるとは思っていなかったであろう、二人の男子は短い悲鳴を上げて地面に倒れ込んだ。

そして起き上がることはなく、地面で白目を？いて倒れている。

いきなり目の前で起こったことに驚きを隠せない女子達はその足を止め、一誠に注目した。

そんな戸惑いの視線の中、一誠が思った事は何てことはない。

(面倒臭そうだ)

この一言に尽きる。

そして一誠は地面で伸びてる二人の胸ぐらを掴んで引き摺ると、女子達の方へと引き摺り始めた。

「何で追いかけてるのなんて知らねえけど、これでいいだろ」

そう言って女子達の前にその二人を投げ込んだ。

「あ、うん……………」

そんな一誠の行動に拍子抜けしてしまう女子達。

何せこの学園でも有数の有名人(マイナスの意味で)である一誠がこうもドライな感じなのは皆見た事が無かったから。

そんな彼女達に一誠は軽く問いかける。

「んで、こいつ等何しでかしたんだ？」

本当に分からないといった感じの一誠に、近くにいた女子が答え

た。

「その、いつものように着替えている所を覗かれて……兵藤君はその……してないの……」

いつもと違う様子だからなのか、少し自信なさげに問いかける女子。

そんな女子に一誠はやつと二人が追いかけてられている理由を知り、呆れ返った目をした。

「何だ、こいつ等覗きなんてしてやがったのか。まったく……馬鹿らしくて呆れ返っちまう。殴つといて正解だったぜ。お前等、存分にボコつとけよ。そんな下らねえ真似する奴は折檻した方がいいからよ」そう答えると、一誠はこれで終わりだと言わんばかりに背を向けて歩き始める。

そして皆に見えるように後ろに向かって手を軽く振りながらその場を去っていった。

そんな様子を見た女子達はもの凄く困惑した。

あの、あれだけスケベだった一誠に何があつたのかと。

そしてその中には……。

「今の兵藤君……少しワルな感じがして格好良かった……」

頬を赤らめる者も多数いた。

平行世界に干渉しない方が良いと分かっているはずなのに、一誠早速やかしていたが、その事に本人はまったく気付いていなかった。

そんな彼は旧校舎に向かって歩いて行くが、隣にいる久遠をジト目で見ていた。

「デメエ、幻術でも使ってるだろ」

「正解」

一誠にそう問いかけられた久遠はニヤリと笑う。

「どうやらこの世界の俺は見当たらないようだし、下手に見られても困ったことになりかねないからな。だから幻術で一般人には見えないうようにしてたんだよ。まあ、お前みたいな異常者や悪魔とかには見えるけどさ」

「ケツ、面倒押しつけやがって」

そんな久遠に毒づく一誠。

しかし、久遠は尚笑う。

「でもまあ、暇じゃなかったろ」

「あれじゃ暇潰しにもならねえだろうが、アホ」

そう言つて互いに笑い合いながら彼等は旧校舎へと向かった。

尚、その後オカルト研究部が騒ぎになったことは言うまでも無く、この世界の一誠を見て頬を赤らめる女子が増えたとか。

ただし、それは同時に彼の親しい友人達から『裏切り者』のレッテルを貼られることになったとか。

本人には何のことかまったく分からず、その原因足る一誠もまったく気付いていなかった。

彼は異世界の彼と出会う その12

自分達が居た世界とは違う平行世界だが、それでも変化がそこまで大きくなければ馴染むのも早いというもの。だからなのか、リアス達からしても同じ顔をした同じ存在である一誠が同じ室内に居ても違和感がすっかりとなくなっていた。

「いや、それってどうなんだよッ！」

と、イツセー自身は突っ込みを入れるが、それでも当の本人は堂々と部室のソファで寛いでるのだから、その言葉に重みはまったくない。

一誠と久遠もまた、この奇妙な生活にすっかりと慣れていた。基本は兵藤家でばれないように隠れ、久遠の転送術で部室に行っては適当に寛ぐ。

することがないので暇で仕方ないというのが一誠の弁だが、そもそもが簡単な慰安旅行のようなものだからたまには良いだろうと久遠が説得する。

それに仕方ないと領きこの生活を送っているわけだ。

そんな彼等だが、オカルト研究部の部員達と親しくしているというわけではない。

話しかけられれば答えるし、用件があれば此方から話しかける。だが、それ以上に踏み込むことはしない。プライベートには関わらないという程のことではないが、それでも関わろうとする気はあまり感じられない。それは仕方ない事とも言える。何故なら二人は『客人』なのだから。本来この場にはいない人物に関わったところで何かがあるわけではない。あまり親しくしても意味がないのだ。

だからこそ、踏み込まない。

と、行儀良く言ってみるが、その本音は面倒だからだ。

久遠は仕事に役立たないから、一誠は元の性格からして人と親しくするのが苦手だから。だからこそ、関わらない。総じて答えは面倒の一言に尽きるというわけだ。

少し前にリアスから、

「出来ればその強さの秘訣を一つでもイツセーに教えて上げてくれな
いかしら」

とお願いされ、面倒臭いが衣食住を提供して貰っていることもあつて仕方ないと一誠はイツセーに少し教えることに。

その際に教えたのは身体に掛かる負荷の倍化だが、それを行ったイツセーは一誠の四分の1以下の負荷で倒れたためにまったく意味が無かった。

その時の一誠の目は、本当に同じ存在なのかと疑うくらい白い目だ。とてもじゃないが、この程度でくたばっていては話にならないと。

それ以降、一誠がイツセーに教えることはない。力の差があるのも考え様だと、久遠は苦笑していたが。

まあ、そんなわけで微妙な距離感を醸しつつ、この日も過ごしているわけだ。

今日も部室で寛ぐ一誠と久遠。久遠は朱乃から貰った紅茶を飲んで寛ぎ、一誠はソファで欠伸を欠きながら横になっている。

そんな二人の様子をイツセーは見て『なんだかなあ』と思うが、それ以上に気になることがあつて落ち着かない。

それというもの、ここ最近に起きたことが原因だ。

それはアーシア絡みの出来事。彼女が教会を追い出された原因である神器を使用して治療した悪魔が彼女の前に現れたのだ。

その名はディオドラ・アスタロト。リアスと同じ元72柱の貴族『アスタロト家』の時期当主である。また、このアスタロト家はリアスの兄、サーゼクス・ルシファーと同じ魔王『アジユカ・ベルゼブブ』を輩出した名家でもある。

そんな大貴族がアーシアに何の用かと思えば、何と求婚してきたのだ。

そのことに当人であるアーシアは勿論、その場にいたイツセーも驚いた。特にイツセーからすれば妹のように守るべき存在だと思っているアーシアに突然のこの話。兄貴分からすれば、そんな急なことを言い出す奴に大切なアーシアは渡せないと憤った。

このことをリアスに報告すると、彼女は苦笑しながらそれに対応した。ただのお坊ちゃんか恩人に会って気が逸っただけだ。

しかし、それでもイツセーの気持ちは落ち着かない。何がと言われれば困るのだが、どうにも不安が拭えないのだ。

だからなのか、今もこうして気が気では無い。アーシアと迫る体育祭に向かって二人三脚の練習を一緒に励むが、その事が頭を過ぎって集中出来ない。

そんなイツセーの様子を二人は見る。

別に心配でも何でも無い。ただの暇潰しだ。

真剣に考えてるイツセーに比べ、話を聞いた久遠と一誠は少し笑いながらその事について話し合う。

「へえ、まさかアーシアちゃんが治したのがあの元72柱の大貴族とはねえ」

「そんなに大層なものなのか？」

「まあね。あまり仕事とは関係ねえけど、それでも知つという損のない情報だ」

久遠は知っているレベルで話し、一誠は興味なさそうに流す。精々アーシアに関わったことがある程度。その程度の認識であった。

そんな興味なさそうに一誠に久遠はからかいをかける。

「まさかここでアーシアちゃんが追い出された原因が見つかるとは思わなかったわけだけどよ、お前さんはそれを知ってどうする？」

久遠の問いかけに一誠は少し呆れながら答える。

「どうもなにもしねえよ。もう過ぎた話を今更ほじくり返してどうする？ 何もかわらねえんだからよ。だから何だって話だろ」

そう一誠が答えると、久遠はつまらなさそうに返した。

「何だ、つまんねえの。まあ、お前ならそうなるか。今更お礼参りとかはしねえ主義だもんね」

「分かってんなら言うなよ。あつちでアイツに近づいたってオレは特に言う気はねえ。だけどよ……アイツに何かしようってんなら、その時は潰すだけだ」

その時に漏れ出した僅かな殺気を感じ取り、久遠はニンマリと一誠に笑いかけた。まるで得物を見つけた猫のような笑みだ。

「まったく愛されてるねえ、アーシアちゃんは。本当、向こうのディオドラは可哀想で仕方ない。何せこんなおっかないお兄ちゃんが目を光らせているんだからなあ」

「うるせえよ、久遠。からかうんじゃねえ」

そんなやり取りをする二人。傍から見れば高校生同士のからかい合いだ、圧倒的な力を持つ一誠の言葉にリアス達は恐怖を感じ冷汗を掻く。この人物の言葉は冗談でも冗談では済まないからだ。

そんな事を思いつつ誰もがこの問題を楽観視していた。

リアスはディオドラの一時的なものだと判断したし、アーシアは元よりイツセー以外の異性は眼中にない。

一誠と久遠は元から関わる気がないのでスルー。朱乃や祐斗やゼノヴィアやギヤスパーはリアスがそうだと決めたのなら、異論は無いらしい。

ただ一人、イツセーだけが不安を感じていた。

そして三日後、その不安は的中することになった。

それまでのことを簡潔に言えば、ディオドラは思っていた以上に本気だったということ。

贈られてくる手紙にプレゼント、ディナーの招待権などアーシアに数多くの貢ぎ物が送られてきたのだ。

それを見て不気味がり怯えるアーシア。イツセーはそんなアーシアを見てディオドラに怒りを燃やし、リアスも流石にどうかと思うと苦笑し手紙や贈り物を処理していく。

それで済めばよかったのだが、それだけではなかった。

その日、部室に集まったリアス達と一誠と久遠。元から二人は関わる気がないので特に気にした様子はないが、リアス達は少し気を張っていた。

それというのも、彼女達にとって重要であるレーティングゲームの対戦相手が決まったからだ。

何でも、次世代を担う若手悪魔達によるトーナメント戦を夏休み中にやる予定だったのだが、ロキの襲来のせいで遅れてずれこんだらしい。

その対戦相手というのが……。

「相手はディオドラ・アスタロトよ」

とのこと。

そのことに思うところあってやる気を見せるイツセー。嫌がるアーシアに迷惑を掛けているディオドラをぶっ飛ばせると内心で闘志を燃やす。

そんなわけで体育祭での二人三脚の練習をしつつ、レーティングゲームへの意気込むわけだが、その日の放課後にそれは来た。

部室内に突如展開される転移魔法陣。その紋章を見たりアスは誰が来たのかを即座に言い当てる。

「あの紋章……アスタロト……」

彼女の言った通り、その魔法陣から姿を現したのはディオドラ・アスタロト本人である。

軽く挨拶をしたディオドラは一誠と久遠の方に目を向け、少しだけ驚いた様子を見せる。

「彼等が噂に聞いた平行世界の……」

その反応にリアス達は普通に対応する。別に彼等のことは極秘と云うほどでは無いし、ロキ関連での報告の際には必ず名が乗るのだから知られていても可笑しくない。

だから二人のことは気にせず、リアスはディオドラを対面の席に座らせて用件を聞くことにした。

そしてその用件とは……。

「担当直入に言います。ビショップのトレードをお願いしにきました」

それを聞いて身を震わせるアーシア。そんなアーシアをイツセーは励ますように手を繋いで上げる。そしてその申し出を聞いたリアスは、表情こそ笑みを浮かべているが、その漏れ出す怒気は彼女の眷属達を振るわせた。

勿論、その申し出を彼女は断った。

彼女にとって眷属は家族同然。アーシアを実の妹のように可愛がっている。だからこそ、求婚した女性をトレードで手に入れようとするディオドラを彼女は許せなかったのだ。

申し出を拒否されたディオドラは仕方ないと苦笑し、今日はもう帰ること伝える。

しかし、帰る前に彼はアーシアに近づき、彼女の足下に跪く。

「僕達の再会は運命だ……………」

そうアーシアに語りながら彼女の手を取ろうとするディオドラ。このまま行けばその手の甲にキスをされるだろう。

それを見て焦るイツセーは止めに入ろうとした。

だが……………そんな彼よりも先にディオドラの腕を掴んだ者がいた。

「おいおい、同意もねえのに勝手に相手に相手ぞういうことするのをこの国じゃなんていうのか知ってるか……………セクハラって言うんだよ」

「っ!？」

ディオドラの腕を掴んだのは、それまで話に参加せずにソファで横になっていた一誠だった。

いきなり動いた一誠に驚くりアス達。

そして一誠に捕まれたディオドラは嫌悪感を顕わにし、その手を振り解こうとした。

その時に言おうとした台詞が、

『放してくれないか。薄汚いドラゴンの、それも人間如きが僕に触れるのはちよつとね』

だった。しかし、その台詞は出ない。

捕まれた腕は悪魔の力を持つてしても全く動かず、握られた腕からは逆にミシミシと骨が軋み上げる感触と共に激痛が走っていく。

そして一誠はディオドラに向かって猥染みた凶悪な笑みを浮かべた。

「テメエからはキナ臭え匂いがぶんぶんとして来やがる。アーシアが狙いなのは確かだろうが、本当の狙いは何なんだ、ああ?」

「っ!?! は、はなっ……………」

そう言われ、一誠は突き放すようにデリオドラの腕を放したが、その前に完璧にデリオドラの腕の骨を握りしめて折った。

「つつつつつつが ああああアアアアアアアアアア
」!!

激痛のあまり腕を押さえて藻掻き苦しむディオドラに一誠は狂気染みた笑みを向ける。それはまるで猫がネズミを狩つて遊んでゐるときに浮かべる顔だ。ただし、一誠の場合は猫どころかキマイラだ

「別にそこまで口出しする気はなかったんだがなあ。如何せん、アイツと同じ面が困つてるところを見るつてのはどうにもしまりがわりいんだよ。それもテメエみてえな『キナ臭い』野郎なら尚更なあ。これ以上こいつ等にちよつかいかけんのは止めろ」

軽い口調なのにその言葉は全体に響き渡るくらいに重い。

その言葉と一誠の笑みを直に見たディオドラは顔を青ざめさせる
と、急いでその場から離れるべく転移していった。

そして静かになった部室内で一誠は周りを見渡すと、ソファまで歩きました横になった。

「寝る……」

そう言つてごろつとする一誠。周りはそんな彼について行けず唾然とし、久遠はニヤニヤしながら一誠に話しかけた。

「いや。『お兄ちゃん』は世界が変わっても大変だねえ」

「うるせえぞ、久遠。次言ったらそのニヤケ面に一発ぶちかます」

そう答えると、一誠は寝息を立て始めた。

これがディオドラがアーシアを奪おうとしてはいけない失敗を犯した最初の一步だろう。彼はこの後、消滅すると共に思い知らされることになる。

世の中魔王や無限や夢幻よりも手を出してはならないものがある
ということに。

彼は異世界の彼と出会う その13

ディオドラがアーシアに強引に迫った……もとい、そうしようとして一誠に嗅ぎ付けられて腕を折られた日から数日が経過し、リアス達は部室内で戦意を上げながら佇んでいた。

それというのも、本日は冥界において若手悪魔によるレーティングゲームが行われるからだ。勿論試合を行うのはリアス達であり、対戦相手はディオドラである。

アーシアが狙われているとあって、イツセーは特に戦意を顕わにしていた。

あの日の後日、ディオドラから正式にゲームに勝ったらアーシアをいただくと言われたからだ。その事にイツセーは怒りを燃やしているというわけである。大切な妹のような守るべき存在を毒牙に掛けようと強引に迫る輩を許せるわけがない。だからこそ、このゲームは絶対に負けられないと彼は決意を固める。そしてそれはリアス達全員も同じ気持ちだ。

そんなリアス達を見送るのは、アザゼルと一誠、それに久遠の3人だ。

ゲームに参加することなどないので、こうして見送る立場になっているというわけである。

しかし、本当はそうではない。

それを一誠は自前の感で、久遠はアザゼルの表情から察した。

だが、敢えて聞かない。何故なら、きつとそれは目の前に居る連中に聞かれないからこそ、話さないのだと何となく分かるから。

故に黙っているというわけだ。そんな二人の顔を見て、すでにアザゼルはばれていることを察していた。

「それじゃ……行つて来るわ」

リアスのその声にアザゼルは普通に送りの言葉を掛ける。

そのまま転移魔法陣によって彼女達は赤い光と共に冥界へと転移した。

それを見送った後、改めてアザゼルは一誠と久遠に向き合った。

「それで……もう既に感づいているとは思うが……」

頬を掻きながらそう口にするアザゼルに一誠はニヤリと笑みを浮かべながら答えた。

「まだ何なのかまではわからねえが……テメエが何か腹に抱えてるつてのは何となくな」

それに便乗し、久遠も不気味さを感じさせる笑みでアザゼルに言う。

「そしてそれはグレモリーの姫様達の前では言えないこと。つまりバレると厄介なことになりかねない案件つてことですよね。差し詰め……デイオドラ・アスタロトの裏に居る奴等を引っ張り出す『餌』つてどこかと」

二人の答えにアザゼルは軽く溜息を吐いた。

年齢的には此方のイツセー達と何ら変わらないというのに、何故世界が違うだけでこうも察しが違うのか？ 寧ろその察知の良さには内心で舌を巻くくらい驚かされたものである。

この二人の前では隠し事など出来そうにないとアザゼルは思い、仕方ないと話すことにした。

「まったくもってその通りだよ。アイツ等にバレたら怨まれるだろうがなあ。実はデイオドラ・アスタロトの裏には『禍の団』が居るつて情報があつて、それで連中をおびき寄せようつて寸法なのさ。デイオドラの野郎はどうにも調子付いてアーシア・アルジェントにご執心だから丁度良かったのさ。それにしても……何で気付いた？」

そこがアザゼルが気になるところであつた。

この二人は何も言っていないアザゼルの考えを大まかとはいえない言当てたのだ。その根拠や理由を知りたいと思うのは当然のことだろう。

それに対し、一誠はにやつと笑いながら答える。

「あのキナ臭い野郎の腕を掴んだとき、本当なら腕ぐつもりでやったんだが折れただけだった。それなりに力があるつてのは分からなくもねえが、そんな程度の割に野郎は随分と余裕ぶつてやがったからだよ。それまで自分は絶対に負けねえ、そんな嘗めきった感じだ。流石

に腕を折られてびびったらしいけどな。キナ臭い上に妙に余裕があるってのは、それだけそいつが臭い証拠だ」

一誠なりの感性から来る答え。しかし、それは彼の過ごしてきた時間の中で磨かれてきた確かなものであった。

そして今度は久遠が答える。その顔はいつもと同じ笑顔だが、はつきりとした自信が見てとれた。

「詳しくは知りませんが、此方の時間と合わせてもアーシアちゃんが教会を追放されたのは同じ時期。なのに今更接触してくるっていうのはどうにも……遅すぎる。そして会ってからの執心っぷりがどうにも腑に落ちませんよ。あれは女の子を欲してるって言うよりも、もっと別の何かだ。人間だろうが異形だろうが、プロポーズの基本は変わらない。そのセオリーで考えれば、奴さんはどう考えたって嫌われてふられるコースをまっしぐらですよ。つまり行動と目的の一致が可笑しい。また此方で俺なりに調べた所、どうにも不自然なことが多い。デイオドラと戦う予定だったグラシヤラボス家の当主の事故死、それに彼の自信満々な様子。お姫様だつてそれなりに強いことは知られているはず。何せ魔王と同じ滅びの魔力を使うのだから。だといふのに緊張した様子が見られない。自分が負けるなんてことを絶対に考えていないっていうのは、自信過剰も行きすぎです。それを逆に考えるのなら、つまりそれだけ勝てる要素がある。もしくは……勝負など端から気にしていない。目的さえ達成出来れば後はどうでもなると思っている。何よりここ最近まで息を潜めるように静かだったデイオドラが行動を急に起こし始めた。それはつまり、ここ最近に何かを手に入れたか、もしくは巨大な後ろ盾を得た……そんな所でしよう。そして丁度良さそうな組織が『禍の団』……正解でしょう？」

久遠のはつきりとした説明にアザゼルは再び深い溜息を吐いた。

逆に此方の方が驚かされた。

ほんの僅かな接触だけで、そこまでのことを調べ上げたというのだから。世界の違いというよりも、これは経験の違いなのだろう。新鮮な情報を一早く調べ使えるのかを吟味するのが『仲介屋』の仕事の一

つだと久遠は答える。

それにアザゼルは圧巻するしかなかった。

そしてこれからの行動を彼は二人に伝える。

「アイツ等が囷になつてゐる間にオレ達は仕掛けてきた『禍の団』を迎え討つて寸法だ。既に各勢力には応援を頼んである。だから戦力的には問題ないんだが……アイツ等にオレは怨まれるだろうなあ」

勝手に囷に使われていたと知れば、確かに怨まれるだろう。それを言いながら苦笑するアザゼル。だが、それは仕方ない事。囷が囷だと知れば、妙にぎこちなくなるものだ。それが玄人なら兎も角まだ未熟なりアス達なら尚のこと。それでディオドラやその背後に居る『禍の団』に作戦を感じつかれては元も子もない。

そんな考えを察し、妥当だと考える久遠。一誠は面倒臭そうな顔をしていた。

「それにお前さん等はあくまでも異世界の人間だ。此方の世界の厄介事に巻き込むのは良くねえだろ。その力は確かに魅力的だが……」

遠回しに手伝ってくれたら嬉しいと言うアザゼル。

しかし、この男達が情で動く訳が無い。答えは当然NO、なのだが……。

「そうだな……アイツ等の手伝いだつたとしても良いぜ」

「イツセー!」

一誠がOKを出したことに驚く久遠。

そんな久遠に一誠は軽く冗談染みたような感じにこう言ってきた。

「せっかくの旅行だつてのに、最初以外は全部喰っちゃ寝つてのは土産話もつまらねえもんだろ。そろそろ帰り時つて頃合いだし。最後までくらい思い出を作るのも悪くねえだろ」

それを聞いて久遠は信じられないと一誠を見ていた。

「まさかお前からそんな事が出るなんて……本当にお前、イツセーか?」

「おい、テメエ。どういう意見だよ、そいつは。たまにはそう言つたつて悪くねえつて話だつてのに」

まさか無料で働くと行ってきた一誠に驚きを隠せない久遠。彼の

今まで知っている一誠からすればまずあり得なさそう……いや、一っだけ思い当たる節があった。

故に久遠はそれを一誠に問う。

「それで……本音は？」

その問いに一誠はニヤリと悪どい笑みで答えた。

「連中はどうにも何かに巻き込まれやすいみてえだし、ここ最近暇で仕方なかったんだ。少しは遊びたいって思うだろ。それに連中を見る分には退屈はしなさそうだ」

途轍もなく自分勝手な答え。それを聞いて久遠は納得した。

要は暇だったので遊びたいだけ。その点で言えば、確かにリアス達という退屈はしなさそうだ。何せ問題事が向こうからやってくるのだから。

その言葉に久遠は少し呆れつつも、仕方ないかと同意した。

無料働きは御免だが、彼も又退屈だったのだから。一誠が暴れているところを見るのはそれなりに面白いからこそ、同意したのだ。

「そういうわけだ。アイツ等の手伝いだったら行つてやるよ」

その言葉にアザゼルは不安を覚えつつも了承した。

せめて伝えなかった分、この二人がいればイツセー達は安全だと。

この時、彼も又選択を間違えたのかもしれない。この男達のことを甘く見ていたのかも知れない。

退屈で暇を持て余していた化け物が遊び場を見つけなければならないのか？

その答えを彼はこの騒動の最中に知ることになるのであった。

そんなことを知らずにゲームの会場へと転移したりアス達。

しかし、アナウンスも何も聞こえないことから彼女達は異常があることに感付き始めていた。

その予想通り、突如上空に浮かび上がる大量の魔法陣。それらは全て旧魔王派に所属する者達のものであり、それを見た途端にリアス達は『禍の団』に襲撃されたことを察した。

そのまま戦闘になるかと思われたが、その前にアシアの悲鳴が上

がり一同はその方向へと顔を向けると、そこには気を失い宙吊りになるアーシアと彼女の足を掴んで浮遊するディオドラの姿があった。

ディオドラの姿に驚くリアス達にディオドラは嘲笑いながら彼女達を煽りに煽り転移する。自分が『禍の団』に協力していることなどを暴露しながら。

その事に怒りを燃やすリアス達だが、アーシアを追うには目の前で増え続けている敵をどうにかしなければならぬ。その数はかなり多く、空が覆われるかもしれないほどに多い。

アーシアを目の前で攫われたことでショックを隠せないイツセー。リアスや朱乃は敵の多さに自分達の力でどうなるかを考えつつも悲観しそうになっていた。

そんな中、突如として彼女達の目の前に転移魔法陣が展開された。見た事もない複雑な術式。そんな魔法陣から現れたのは、見送った一誠と久遠の二人である。

「なっ!?　なんで貴方達が……」

いきなり現れた二人に驚くリアス。

そんなリアスを気にも留めず、一誠は久遠に笑いかける。

「な?　言った通りだろ」

「本当に騒ぎに巻き込まれてるなあ、こりゃ」

囃とはいえここまで敵に囲まれているとは思わなかったのか、久遠は周りを見て呆れていた。

そんな二人のマイペースな様子にリアス達は当然突っ込むわけだが、そこで久遠は簡単に彼女達に説明する。今回の件に関して、リアス達は囃に使われたなど色々。それを聞いて不満が爆発しそうなりアスだが、今はそれどころではない。

今も尚敵は増え続けており、確実に自分達は窮地に追い込まれているのだから。

危機に追い詰められ精神を焦りで焦がされるリアス達。そんな彼女達と違って一誠と久遠は普通にしていた。

彼等も又周りを見渡し現状を理解はしている。それでも、その余裕は崩れない。

「んで、この後どうするんだ？」

久遠は一誠にいつもと変わらない様子で問いかける。

この問いは殆どの意味が『お前が暴れるのか？』という意味と同意だ。

しかし、今回一誠はいつもと違う答えを返してきた。

「たまにはお前が殺れよ。こいつ等、どう見たって雑魚ばかりだ。やっても面白そうにねえ」

「はあ？ お前何言ってるんだよ。俺、攻撃用の術とか苦手だって言っただろ！ しかもこの数とか面倒だったの」

いつもと違う答えに焦る久遠。

彼は結界などのような防御は得意だが、相手にダメージを与えるような術は不得手だ。それは一誠も知っているはずなのに何故だと食いつく。

すると一誠はニヤニヤと笑いながら答えた。

「うつせえよ。いつも俺ばかりやってんだから、たまにはテメエがしろつての。それにだ……たまには暴れねえと、錆び付くぜ」

その言葉にうんざりとした様子を見せる久遠。

経験上で知っている。こういう時の一誠はまったく人の言うことを聞かない。彼なりの暇だが、たまには相棒の暴れるところも見ておきたいといったところだろうか。戦闘が不得手な久遠にとってそれは酷としか言い様ない。

そう思っただけでなく、周りは待つてはくれないのだ。

仕方なく……本当に仕方なく、久遠は深い、それこそ金欠で貧困に喘いでいる一誠なんかよりも深い溜息を吐いた。

「ああ、もう面倒臭い！ 後でお前の奢りだからな！」

「ちゃんとしたら奢ってやるよ……（一番安いラーメンだけだな……何を奢るとは言ってるねえし）」

ちやっかり一番値段の低いものを奢ると決める一誠。普段ならそれを見抜き突っ込む久遠だが、面倒臭さのあまり今回は見抜けなかった。

そんな久遠はリアス達に少し大きな声で話しかける。

「全員こっちに集まってくれ！ でないと巻き込まうからさ！」

普段はそこまで大きな声を出さない久遠が感情を顕わにした声を出したことで驚くリアス達。皆久遠の指示に従って彼の元に集まり、リアスは久遠に問いかける。

「二体何をするつもりなの？　確かに貴方の結界は強いのは知ってるけど、このままじゃ何も変わらないわ！」

そんなりアスの言葉を無視し久遠は上空に意識を向ける。

そんな久遠に一誠はニヤつと悪どい笑みを浮かべながら言葉を掛けた。

「殺つちまえ」

そして久遠は動き出す。

口から放たれるは今までリアス達が聞いた事の無い呪文。そして手は同時に印を結び続け、久遠の呪力が膨れ上がっていくのをリアス達は肌で感じ取った。

その力だけでも魔王と同じくらい強大。

術が完成したと共に、久遠はその術名を口にした。

『結界反転 圧爆殺』

その途端、彼女達に見える世界が全て固定された。

いや、実際にはそう感じただけだ。世界は動いている。

しかし、それまで包囲していた悪魔達はそうではなかった。

[illegible]

身体が動かない。それまで構えていた武器が一ミリとも動かない。まるで何かに押しつけられているような、そんな感じを彼等を感じた。

しかし、それは一瞬のこと。それ以降彼等は何も考えられなかった。

何せ
.....○

空一面が真つ赤に染まつたから。

夕陽ではない。

では何か？
それは液体だった。

赤い液体が空を覆い、そして鉄臭い匂いが辺り一面を覆い尽くす。ある場所を境にして冥界の空は二色に別れた。境より上はいつもと変わらぬ紫色の空。そして境より下は真っ赤に染まった。

その液体と共に、それまでいた敵の姿は一切ない。

そして降ってきた赤い雨にリアス達の顔は青ざめた。その雨の正体が分かったからこそ、彼女は叫びそうになった。

その正体は………血だ。

ある場所を境に、その場を包囲していた敵は皆、全て血へと成り果てたのだから。

あまりにも残虐な光景に目を？くりアス達。吸血鬼であるはずのギヤスパーでさえ衝撃のあまりに気絶した。

そんな中、朱乃は何とか声を振り絞って久遠に問う。これは一体何をしたのかと。

「こ、これは一体………」

恐怖の入り交じった声。無理も無いだろう。悪魔でも堕天使でも、ましてや彼の友人である赤龍帝でもない本当にただの『人間』が、あの大規模な悪魔の軍勢を一瞬にして無残な姿に変えたのだから。

その問いを受けて、久遠は疲れたと言わんばかりに答える。

「ああ、あれは単なる結界だよ」

「嘘です！ 結界であんなことが！」

久遠の何気ない解答に朱乃は噛み付いた。

結界というのは基本、守るためのものだ。それがどう使えばこんな大量虐殺ができるのか？ その答えを聞いていると朱乃は怒りと恐怖を込めながら久遠に叩き着ける。

少し恐い剣幕の朱乃に久遠は頬を掻きつつ、小学生でも簡単に分かるよう説明を始めた。本当は面倒でしたくないが、朱乃の顔が恐かったからというのは内緒の話だ。

「いいか、結界ってのは詰まる所壁を張る能力だ。そして壁と壁が挟まり合えばどうなるか？ 本に挟まれたゴキブリや押し花と一緒に。ただ、その力を思いっきり込めてやれば隙間なんて無くなるってだけ。その結果がこれってわけ」

久遠がやったことは単純だ。結界を二枚張り、それを使って挟んで潰しただけ。

ただし、それが悪魔でも出来ないくらい広範囲であり、あの軍勢を一瞬で潰しただけである。この時点で既に一誠同様、久遠も人としてどうかと思われる。

目の前で起こった大虐殺に言葉を失うリアス達。地面は血で濡れ川や池が出来上がっている。久遠が自分達用の傘代わりの結界を張らなければ今頃全員血まみれだっただろう。

そんな虐殺を平然と行った久遠に一誠は笑いかける。

「鈍ってないようでよかったじゃねえか」

「ふざけんなよ、馬鹿。これを使うと疲れるから嫌なんだよ。俺は裏方でのんびりとしていたっての。こういうのはお前の仕事だつてのによお」

不満ありげにする久遠に一誠は愉快そうに笑いかける。

その様子にきつと彼女達は思っただろう。どちらが悪魔なのか分からないと。

そんなリアス達だが、事態は変わらない。まだアーシアが攫われたままなのだから。

リアスは気を取り直し、皆に声をかける。

「と、取りあえずこれで周りの敵は居なくなつたわ。急いで神殿まで行ってアーシアを助けましょう！」

そしてリアス達は神殿に向かって駆け出すのだが、血でぬかるんだ地面はあまりにも走りづらくなっていた。

彼は異世界の彼と出会う　その14

窮地を久遠の力によって脱したりアス達。しかし、その顔は未だ青ざめている。

それは当たり前だろう。何せ目の前が全て血で真っ赤に染め上げられたのだから。いくらばぐれ悪魔を退治したことがあるとはいえ、このような一方的な『虐殺』を目の当たりにしたことなどないのだから。まだ若い彼女達にとってそれはあまりにも残酷で悲惨で恐ろしいものだった。

だが、その御蔭でこうしてディオドラが待ち構えている神殿へと何の障害もなく向かうことが出来る。それだけが唯一彼女達にとって救いになったものである。悲惨なことには目を瞑りたくなかったが、それでも大切な下僕を助けるために。

そして少し走ると、彼等の目の前に広がるのは浮遊した土地の上に建てられた神殿。階段がいくつか付けられており、最上の部分に一番巨大な神殿があることが窺えた。そこに捕らわれたアーシア、そしてアーシアを攫ったディオドラがいるのだろう。

「あそこにアーシアが………今、助けてやるからな！」

イツセーはそう呟き闘志を燃やす。

大切な存在である彼女を救うために、守ると誓ったのだから。

それは皆同じ思いであり、リアス達も頷き返す。

そして神殿に突入しようとするのだが……………。

「いや、ちつと待てよ」

その意気込みは一誠によって止められた。

「なんだよ、いきなり！　止めるなよ！」

急にそう言われ苛立ちを顕わにするイツセー。リアス達は何故止めたのか少しだけ気になりその足を止めた。

そんなイツセー達に一誠は不思議そうに問いかける。

「なあ、何でそのまま行こうとしてんだよ？」

「はあ？　お前、何言って…」

その問いかけにイツセーは意味が分からないと返す。それはリア

ス達も同じであり、何故このような問いかけをしてきたのか分からなかった。

それに対し、久遠は軽く溜息を吐いて相棒が言いたいことを翻訳するかのようにはリアス達に話しかけた。

「つまりコイツが言いたいのは、何でそのまま神殿に駆け込んでるのかってことだよ。アーシアちゃんがいるのは最上階にある神殿のアレだろ。なら、飛んでいけばいいじゃないかって、コイツは言いたいんでしょ」

それを聞いてイツセーはそれもそうだと思ったが、それに関してリアスが真面目な顔で説明を始めた。

「確かに飛んでいけば良いかもしれないけど、それは不可能だわ。きつとディオドラはあの神殿の各所に自分の眷属達を配置している。それらを無視しようとしても飛び上がれば直ぐにばれて戦闘になるわよ。つまりどうしたって戦いは避けられない。なら、奇襲されないように地上から階段伝いに上がって撃破していく方が確実なのよ」

その理由を聞いて、一誠は更に呆れ返った。

確かにリアスが言っていることは最もだろう。確実に近づくためには敵の勢力を各個撃破していく必要がある。

しかし、それを聞いて一誠は尚のこと正気を疑った。

何故か？ それは……………。

「つまりアンタは敵が余裕ぶっこいて見下してる中、一生懸命頑張って面倒臭く戦ってくつてか？ ……………馬鹿だろ、アンタ」

「なっ!? 馬鹿って何よ!」

馬鹿にされたリアスは顔を赤くして怒りを顕わにする。そして主を馬鹿にされた眷属達は一誠の方に注目した。そこまで言うのなら他に何かあるのかと。

そんな視線を受けて、一誠はニヤリと笑う。それは獰猛な肉食獣染みた笑みであり、見る者の心を恐怖させた。

「俺が言いたいのは、何でわざわざ向こうの掌に乗らなきゃならねえんだってことだよ。向こうはこっちが来るって分かりきってる。そしてそれを笑いながら見てるだろうさ。その下僕とやらを使つて一

生懸命お前等が戦ってる様子をなあ。そんな舐め腐ったことされてむかつかねえのかよ、お前等。相手の思惑通りに流されてそれで仕方ねえってしか思わねえのか？」

そう言われて、ならばどうしろというのだとリアスは怒る。

相手に主導権を握られているのだから、今はこうするしかないのだと。

しかし、一誠はそうは思わない。そして久遠もまた、その出されるであろう案に笑いを堪えていた。

「相手の思惑に乗る理由なんざあ何もねえんだよ。寧ろそいつの驚く面を見てえとは思わねえのか？」

そう、この男ならこう考える。

相手の思惑通りに動くなんて御免だ。寧ろ相手が予想もしないことをしてその顔を驚愕に染めたいと思う。

だからこそ、彼はこう言うのだ。

「要は真上に着くまでの間の奴等が邪魔なんだろう。だったら一々構ってられるかよ」

そう言うと、一誠は左手に赤龍帝の籠手を展開する。この場に揃った同じ神滅具はある意味壮観だった。

「どうするつもりなんだ？」

それまで話を聞いていたイツセーは神器を出した一誠に問いかける。

神器を出したということは何かしらするつもりなのだろう。

しかし、赤龍帝の籠手で出来ることなど限られている。敵に見えないようにする能力など無いのだし。尚、本来のドライグの能力にはそういった能力があるのだが、現時点のイツセーでは使えないし、知りもしない。一誠に関しては知ってはいるが、そんなものなど気にも留めていない。脳筋な一誠は殴ればそれでよいのである。

では何をするのか？ その答えを分かっている久遠はリアス達に話しかける。

「あいつの前にはいるのは危ないから、少し離れて。ああ、特に神殿の真正面は絶対に近づくなよ」

「え、ええ……」

久遠にそう言われ、リアスは大人しく聞いた。何せ少し前に大量虐殺を行った人間がそう言うのだ。相当に危ないのだろうと本能は警告してきたからだ。

そして一誠より皆後ろへと下がった。それを確認次第、久遠は一誠に声をかける。

「準備OKだ。ちゃんと調節しろよ。俺はもう働いたから後はお前がしろよな」

「ああ、わかってるよ」

そう答えると、一誠の身体から真つ赤なドラゴンのオーラが噴きだし始めた。

それはまるで深紅の炎のように舞い上がり、彼の足下の大地を砕き始める。

その力の強さに戦くリアス達。そんな彼女達を尻目に一誠は左拳を握り締めて構える。

「ドライブ、4回くらいで行くぜ！」

『いや、今の相棒なら3回で充分だろう。それと微調整はオレが指示を出すぞ。そうでないと狙ってる部分以外も消し飛ばしかねんな』

「ああ、頼んだぜ、相棒」

そして一誠の籠手が赤く光り始めた。

籠手の宝玉の輝きが増していき、独特の機械音声聞こえ始める。

『Boost、Boost、Boost！』

一回鳴る度にリアス達は信じられない程の力の高まりを一誠から感じた。

それが3回。それだけで既に上級悪魔を凌駕している程の力を一誠から感じる。

一誠は力が溜まったのを感じると笑みを浮かべ、その赤く輝く拳を振り抜いた。

『explosion！ 相棒、4度拳の角度を変えろ』

「おお！ いっくぜえええええええええええ！ ドラグブリッ

トツツツツツバアアアストオオオオオオオオオオオオッ!!」

そして放たれたのは、以前ロキとの戦いで見たのと引けを取らないほどの凶悪な砲撃。

それは赤い巨大な柱となって神殿の方へと飛んでいき、頂上にある巨大な神殿から下にある全ての神殿と階段を飲み込み消滅させた。

砲撃がやんだと共に残ったのは、デイオドラがいるであろう頂上の神殿。そこから下は何一つ残らなかった。

その超越の威力の余波は凄まじく、久遠の後ろにいたリアス達でさえ踏ん張らなければ吹き飛ばされかねない程に凄まじい。

『なッ……………?!?!?』

そして彼女達は目の前で広がった破壊の跡を見て、驚愕のあまり言葉を失いかける。

本来ならこのまま神殿に突入し、デイオドラの眷属達と戦わなければならなかった。それがどれほどの人数なのかは分からないが、充分に強い者達が予想され、苦戦は免れないと考えていた。

しかし、目の前にいるこの男はそれらを一瞬で消し去った。

苦戦のくの字もない。異世界の赤龍帝は此方の赤龍帝と違い、それらを全て軽く笑って成した。それも禁手ではない。通常の状態でだ。それを見れば、それまでその凄さをイマイチ理解しきれないでいたイツセーにもはつきりと分かるだろう。

如何に自分と違うのかが。

驚愕し固まっているリアス達などを気付かずに一誠は満足そうに目の前の光景を見る。

「まあ、こんなもんだろ」

『そう言うが相棒、さっきのは3度だったぞ。もし後少しでもずれていたら、この世界のアーシア・アルジェントをあのガキ諸共消し飛ばしかけてたぞ』

「まあ、そこはコイツが繊細さの欠片もないからだろ。それにしても、やっぱり凄いいねこの威力。俺はさっきみたいなのより防御してるのが性にあうよ。こんな破壊を巻き起こすことなんて出来やしないんでね」

思いつきりリラックスした様子の一誠達。

軽くドライグに注意されたが、特に聞く気がないのか軽く聞き流す。

そして未だに固まっているリアス達にニヤリとした笑みを向けながら声をかけてきた。

「何惚けてやがる。これでお前等の心配するもんはなくなっただろ。速くいくぜ」

その言葉にリアス達は気を取り直し、一誠に取りあえず感謝の言葉を言って翼を広げ始めた。

そして神殿に向かって飛行を始めるわけだが、一誠達は動かない。

「あれ、行かないのか？」

二人の様子を見て不思議がるイツセー。そんなイツセーに久遠は軽く笑う。

「いや、俺達はお前等が向こうに着いたら転移するよ。一誠風に言うんだったら、喧嘩を売られた張本人の前に観客が来るのは無粋だろ。だからそっちが着いたら行くさ」

それを聞いてイツセー達は思い出す。

あまりに目の前に行われた超破壊に忘れそうになっていたが、今回の問題は自分達の問題だ。アーシアを助けるのはイツセー達でなければならぬ。

だからこそ、その言葉に頷く。

「ああ、分かった。今度はオレ等が頑張らないとな！」

「ええ、そうよ。アーシアは私達が助けないと」

そしてリアスも頷き、皆戦意を高めて神殿へと飛び込んでいく。

一誠達はそんな背中を見送り、少ししてから久遠の術で転移していった。

そして障害らしい障害もなく、ディオドラが待つ神殿の間に突入するリアス達。

彼女達の目に映ったのは、特殊な拘束器具によって縛り付けられているアーシア。そしてその下の玉座に腰掛けているディオドラ。

その姿を見た途端、イツセーはアーシアを心配し、ディオドラに怒

りを燃やす。

本来ならそこでアーシアに真実を話し、ショックで悲しむアーシアを嘲笑うのだが、少し様子が違っていた。

確かにアーシアは真実を知って絶望し悲しんでいたが、デイオドラは嘲笑うどころではなかった。

まるで信じられないものを見るかのような目をリアス達に向ける。嫌悪感を顕わにし、想定外のことには戸惑っているような、そんな顔。その表情を見たりリアス達は少し戸惑ったが……………。

「くつくつく……………あつはつはつはつは！ どうだよ、お前等。あれが嘗め腐ってやがった奴が予想外のこと起きてテンパってる面だよ。見て笑えねえか？ 俺はそういう面をしてるのを見るの、嫌いじゃないぜ！」

アーシアの悲しみが満ちたはずだった空間内を、一誠の爆笑が響き渡った。

彼は異世界の彼と出会う　その15

本来ならば緊張が張り詰める雰囲気になるはずの中、響くのは一誠の爆笑。

それを聞いたイツセー達はどうして良いのか分からず困惑し、ディオドラは嘲笑されたことに憎悪を燃やし睨み付けてきた。そして久遠は笑いを堪えるのに必死だった。

「き、貴様あ、異世界の赤龍帝！　汚らわしきドラゴンが！」

想定外のことには驚きつつも一誠に怒りを向けるディオドラ。

そんなディオドラに一誠は腹を抱えながら若干涙目になりつつ答える。心底笑っていることが窺えるだけに、その肝の太さにイツセー達は少し呆れてしまう。

「何だよ、テメエの予想通りにいかねえからってキレんなよ。人生なんて予想通りにいかねえもんだぜ、お坊ちゃん。もっと世の中でシバかれて来た方がいいんじゃないのか」

明らかに馬鹿にした台詞。

それを聞いてディオドラの額に浮かんだ青筋に穴が空いたらしく、中で内出血を起こし始める。

実にシニールとしか言いようがない。仮にも人質を取られているはずなのにそんな気負いはまったく感じられず、イツセー達は内心でヒヤヒヤとした。

今すぐにも一誠を殺したいディオドラだが、前回腕をへし折られたことの恐怖が脳裏を霞め身体が萎縮する。上級悪魔のプライドとして人間如きに腕を折られたのは屈辱以外の何者でもないが、相手はただの人間ではない。異世界の、それこそ最強と言って良い赤龍帝。現にこうして自分の眷属達を神殿ごと全部吹っ飛ばした存在だ。下手に刺激するのは危険極まりない。

そう考え、精神を落ち着けようとするディオドラ。

状況はかなり危険だ。何せ想定概の戦力が向こうにあるのだから、負ける気はないとは言いきれないくらいに危ない。

ならどうするのか？　今更白旗を上げれば済むというものではな

い。すでに自分のことは三大勢力に広まっているのだから、何をどうしようとしても極刑は免れない。

逃げることは出来ないし、この機会を逃せばご執心のアーシアを手に入れることもないだろう。

問題は『禍の団』が押さえると言っていた一誠達が着いてきてしまっているということ。

コレさえどうにかすればリアス達を殺すことは出来る。

故に一誠をどうにかしなければと思考する。表情には出さないようにし、余裕をもった感じでアーシアが真実を知って堕ちることが楽しみだと笑い語る。

「フフフフフ、ハハハハハハ……君達にも見せたかったなあ、真実を知ったアーシアのあの顔……最高にイイ表情だった……アハハハハ。教会の女の堕ちる様は何度見ても堪らないよ」

「テンメエツ!!」

その言葉にリアス達は皆怒りを燃やす。

ここまで言われれば誰だって怒りを抱くだろう。それが大切な存在なら尚のこと。

その怒りを浴びつつ嘲笑うディオドラ。しかし、内心では一誠がどう出るのか分らず冷汗を掻く。

ディオドラから凄く警戒されている一誠だが、彼はディオドラに笑いかけてきた。

「そこまでビビんなよ。別に俺はテメエとやる気はねえよ」

「え……………」

そう言われ呆気にとられてしまうディオドラ。それはリアス達も一緒であり、一誠に向かって強気で問い詰めた。

「何で戦わないのよ!」

それまで一緒に行動して、この場に来るまで何度も助けて貰った。目的が一緒だから助けてくれたのだと、そう思っていた。

だというのに、何故もつとも強いであろう一誠が何故戦わないのかと。これでは語弊がある。勿論皆戦う。しかし、彼も戦わないのかと、そう言いたいのだ。

それに対し、一誠はリアスの顔を実に呆れた顔で見てきた。実に場違いなまでに呆れた様子でだ。

「おいおい、アンタ、勘違いしてねえか？」

「勘違いですって？」

「そうだよ。いいかい、こいつは『アンタ等に売られた喧嘩』だ。だったら買ったアンタ等があのお坊ちゃんの相手しねえでどうする？」

そう言われて理解は出来る。

自分達の事情に彼等は巻き込まれた？ だけでも取れる。しかし、それでもだ。

最大戦力になり得る存在が戦わないというのはやはり勿体なく感じる。

故にリアスは一誠を説得しようと考える。

しかし、イツセーはそうではなかった。

イツセーは一歩前に出ると闘志を燃やしながらい誠に答える。

「ああ、そうだな……その通りだ！ アーシアが攫われたのは俺等の責任だ。だったら俺等でどうにかしなきゃならない。それに……あのむかつく野郎はこの手でぶっ飛ばさないと気が済まない！ アーシアを泣かせやがって……絶対に許さねえ!!」

「そうだよ、そうこなくちやなあ」

イツセーの答えを聞いて満足そうに笑う一誠。

そのやり取りを聞いてどういう意図なのか気になったディオドラだが、引き下がった一誠を見て取りあえず関与しないということがわかり内心安堵する。

そしてイツセーを嘲笑うかのようにアーシアを自分の物にしようとしていた画策を明かす。

それを聞いてリアスは驚き、一誠は過去の話を聞いてトラウマを刺激させられる。

さらにディオドラはイツセーを煽るべく、アーシアをダシに問いかける。

アーシアが処女であるかを聞き、既にされていたら嫌だと言いつつも、それを更に上書きするのは面白そうだと。

その実に下衆い言葉にイツセーの怒りは沸点を超え、彼はキレた。
「ディオドラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
!!!」

叫ぶと共に怒りによって禁手を発動し、一気に全身を赤い鎧で覆う
イツセー。

その怒りはオーラとなつて体表に表れ、彼から赤いオーラが噴き出
す。

「ひっはっはっはっは、それが赤龍帝か。だが、僕もオフィスから
貫った蛇があるんでね、君なんて瞬殺っ」

噴き上がる力を前に笑うディオドラ。

彼自身、無限を司る龍神から力の片鱗を貰っているのです。その力は通
常時よりも断然に跳ね上がっている。上級悪魔がいくら神器持ちで
も転生悪魔に負ける訳が無い。

そう高を括っていた。

しかし、それは覆された。

嘲笑い見下していたイツセーがディオドラが言い終える前に間合
いを詰め、そのままディオドラの腹に拳を打ち込んだからだ。

「グハアッ!」

腹に叩き込まれた拳で呼気が止まりかけるディオドラ。力が抜け
た身体をイツセーは掴むと、反対方向へと投げ飛ばす。

床に叩き付けられたディオドラはその現実怒る。

「巫山戯るな、僕は上級悪魔だ! 現魔王ベルゼブブの血筋だぞ!

それが君のような下級で下品な転生悪魔なんか如きに、気高き血筋で
ある僕が負けるはずがないんだあ!」

そう叫びイツセーの拳を防ごうと結界を張るが、それはガラスのよ
うに碎かれ顔面に拳がめり込んでいく。

そんな二人の様子を見て、一誠は面白そうに笑う。

「血なんか力的大小なんてねえよ、バカ。強い奴は強い、そんだけな
んだよ。無駄なこだわりなんて持つてる奴は見てるもんが小せえか
らそうなる。もっと目をかつぽじってよく見ないとなあ。意地の
張り所が違うのも考えようってこった」

その言葉を聞いて久遠は笑う。お前が言うなといわんばかりだ。そして皆がイツセーとディオドラの戦いに注目していく。

それは戦いとは呼べない代物だった。

自分が圧倒的に優位だと思っていたディオドラだったがそんなことはなく、イツセーの拳で文字通り打ちのめされる。結界を張っても砕かれて殴られるといった攻防が何度も繰り広げられていた。

「何でだ、僕はオーフィスの蛇で絶対なまでに強くなったハズなのに！」

怒りと恐怖と焦りで困惑しながらそう叫ぶディオドラ。

そんな台詞を吐いたディオドラを一誠は笑う。その笑い声にリアス達は何事かと顔を向けた。

「おいおい、いくら何でもそいつはねえだろ。テメエの力ならまだしも、もらいもんに頼るなんていくら何でも情けねえつての。それでも男かよ……ああ、意地も貫けねえクソ野郎か。テメエのもんじゃなくてももらいもんにしがみつくらいだからなあ」

まさに可笑しいと笑う一誠だが、周りは笑えそうにない。

そして戦闘は更に情けない体を見せていく。ディオドラはイツセーのことを認めたくないとは否定しつつも恐怖し、強固な結界を張った。

それに攻撃を拒まれたイツセーにディオドラは自分の方が上だと虚勢気味に言い張る。

しかし、それで引き下がるイツセーではなく、禁手によるブーストを何回も行いその結界を突き破った。

「なんだ、アイツも案外やるじゃねえか」

「お前と比べられたら可哀想だつての。彼、それなりにやると思うぜ、俺は。精神的な部分がちよつとアレだけだな」

『だが、あれでも相棒の通常には劣る。少しはやると見直すかな』

そんなイツセーを見守る2人と一匹。

その感想は少し辛口だが、それなりに評価している。

そしてイツセーの拳がディオドラの左腕を捕らえへし折りながら真上へと吹っ飛ばした。飛ばされたディオドラは天井部へと激突し

てから床へと落ちる。

そのダメージと精神的優位を失い、ディオドラは現在の状況から現実逃避するかのように叫び、自身の最大限の魔力を込めた砲撃を放つ。

対してイッセーも何度も倍化した魔力によって砲撃『ドラゴンショット』を放ち迎え撃つ。

結果、ディオドラの砲撃は打ち破られ、彼の脇を削れて真後ろの壁を粉碎し外にあった巨岩を粉碎した。

その光景と脱力感から床にへたり込むディオドラ。イッセーはディオドラの前まで進むと、彼の襟元を掴み自分の顔の前まで引っぱり上げる。

そして顔の部分の鎧を解除し、怒りを滾らせた目で脅す。

「二度とアーシアに近づくな！ 次に姿を現したら、その時は本当に消し飛ばしてやる！」

「ヒ、ヒッ！」

そして手を放すと、ディオドラは戦意を喪失して床に座り込んだ。その様子を見ていた一誠達は少し呆れていた。

「随分とお優しいって奴だな。ああいう奴は絶対にそういう約束守らねえって」

「まあ、そこがモテる秘訣って奴だろ。お前は寧ろ少しでもそれを見習ったらどうだ」

『敵に情けを掛けるのは感心できんことだ。その点、相棒なら二度目などくれてはやらん』

感想もぼちぼちに、イッセー達がアーシアを助けにいく所へと一緒に行く一誠達。

しかし、囚われのお姫様を助けて終わり、と言うわけにはいかないようだ。

「くそ、外れねえ！」

イッセーが思いつきり力を込めて引き剥がそうとしても、アーシアを拘束する器具は外れない。そのことにリアス達は赤龍帝の力を持ってしても駄目なのかと危機感を煽られる。

その様子を見て、弱々しい感じながらも笑うディオドラ。

「それはある神滅具保有者に張ってもらった特殊な結界でねえ、事が済んだら外してもらおう約束だった。でも、仮に僕が倒されるようなことになった場合は、結界が彼女を飲み込むようににしてもらったのさあ！」

「なんですって！」

驚くりアスにディオドラは更に嗤う。

「君達にくれてやるくらいだったら消した方がマシさ、そうだろう」

その言葉に怒るリアス達。それが見物なのか、ディオドラは力なく嗤う。

解除法が分からない上に力づくでは外せない。しかも放置すればアーシアが死んでしまう。

そんな事態に彼女達はどうしようもなく焦る。特にそれはイツセーが顕著であり、更に力を込めるがビクともしない。

そんな周りを見て、一誠は動く。

「ああ、面倒臭え。そんなに自慢げに言うんだったら試してやろうか」
そう言うのと左腕を軽く握り出す。

それは力の行使。あの超絶の威力を叩き着けるという意味合いだ。

しかし、それをすればアーシアは……………。

故に先に久遠が止めた。

「お前みたいな馬鹿力でやったら、アーシアちゃんの身体も千切れ飛んじまうよ。仕方がないから俺がしてやる」

そう言って前に出る久遠。

一体何をするんだとリアス達は久遠に注目し、ディオドラは人間如きにも出来ないだろうと嘲笑う。

そんな周りを気にすることなく、久遠は周りに何かを浮かべ始めた。

それは何かが表示された画面のように見える。それが何個も浮かび、久遠はそれらに目を通しながら手を翳し術を発動させていく。

「ああ、こうなっただろうか……………んでここがこうね……………なんだ、随分とお粗末な作りだな。コイツを作ったその神滅具持ちつてのは随分と神

器に丸投げしてるな。作りが杜撰すぎだつと………はい、OK」

そう言い終えると、アーシアを拘束していた器具が解除されアーシアは床に降りた。

『なっ!?!』

アーシアを無事に救出でくたことに喜びを感じるリアス達だが、目の前で起こったことに驚愕し過ぎて思考が追いつかない。

神滅具で作られた結界をただの………というには語弊があるが、それでも人間が難なく解除したのだ。驚かない方が無理がある。

「そんな、馬鹿な…神滅具の結界が………」

それはディオドラも同じであり、信じられないといった顔をしていた。

その表情を見て一誠は笑いを堪える。

「一体どうやってあの結界を解いたの……イツセーの力でも無理だったのに」

皆を代表して聞くりアスに、久遠はディオドラにも聞こえるように声を少し大きくして答える。

「あんなもん、その馬鹿の暴走止めるよりも簡単なことだよ。結界ってのは、詰まる所数式だ。ただイメージしただけじゃそこまで硬いものは作れない。如何にして、どのような構造で、どのような特性を持たせるのかなど、色々と考え構築するのが結界だ。機能美の追求と言っても良い。でも、あの結界は駄目だね。まったくもって作り手の考えがない。ただ、強力な神滅具で作りましたって感じた。杜撰でお粗末で単純過ぎる。そんなもん、駄菓子やで買った知恵の輪を解くよりも簡単だよ」

それを聞いて更に驚くりアス達。正直逃避し始めていた。

目の前の男は異世界の赤龍帝の影に隠れがちだが、それでも異常と言うべき能力者だと。人間が神器無しでここまでやるとは皆思わなかったから。

しかし、それで固まってるリアス達をアーシアの声が現実に戻した。

ディオドラがショックのあまり放心してる中、イツセー達はアーシ

アの無事を皆で喜ぶ。

実に感動的な場面であり、口を出すのは無粋だろうと一誠達は下がった。

そしてアーシアは少し離れて祈り始める。

それは彼女の感謝と願い。

それに何かが答えたのか、アーシアの周りが光り始める。

美しく幻想的な光景にリアス達は見入っていた。

しかし、その中で一誠が動いた。

「ちつ、面倒臭え！」

そのままアーシアに飛び込み彼女に抱きつく、光は一層強くなり、彼女は消えた……一誠も一緒に。

目の前で消えたアーシアに戸惑うイツセー達。

そんな彼等を嘲笑うかのように魔法陣が現れ、中から出てきたのは禍々しい魔力を感じさせる男だった。

男の名は『シャルバ・ベルゼブブ』。

旧魔王の血筋であり、自分こそが真なる魔王ベルゼブブだと主張する。

シャルバの出現に助けを求めたディオドラだが、シャルバは何の感慨もなくディオドラを消滅させた。

そしてアーシアを『殺した』犯人として敵意を殺意を燃やすリアス。イツセーは目の前でアーシアが『殺された』ことが信じられず、逃避し始める。

その光景にリアス達は言葉を失い悲しむ。ゼノヴィアは怒りに我を忘れシャルバに斬り掛かるが、弾き飛ばされた。

そんなリアス達を嗤い、シャルバはアーシアを次元の彼方へと飛ばしたことを告げ、真だとはつきりと口にした。

その言葉にイツセーは今まで保ってきたものが崩れ、憎悪に包まれた。

それと共に噴き出す壮大なオーラ。シャルバは吹き飛ばされて壁に叩き着けられる。

理性を失ったイツセーはその言葉を口にする。

それはリアス達が一度だけ聞いた事がある言葉。

しかし、それを口にした者とはまったく違う姿へと変わっていく。巨大になっていき、人型ではなくなっていく。

それは龍だ。巨大な龍へとイツセーは姿を変えた。

そしてリアス達がいた部屋を吹き飛ばした。

「な、何だ、アレは……………」

その姿にシャルバは驚愕し、それはリアス達も同じであった。

イツセーがまったく違う姿に変わったことに戸惑いを隠せず、どうして良いのか分からない。

そんな中、イツセーは咆吼を上げる。それはアジアを失ったことへの悲しみからだ。

そんな中、久遠だけは違っていた。

シャルバへと彼は実に可哀想なものを見る目を向けて、軽く両手を合わせる。まるで南無阿弥陀仏を唱えるかのように。

「ああ、俺知らね。まったくもって可哀想だな、アイツ…………近づきたくないねえ、アイツの側にはさ」

可哀想だと言わんばかりに哀れみそう口にする久遠。だが、その顔は実に悪どい笑みを浮かべていた。

そして覇龍と化したイツセーがシャルバへと襲い掛かろうとした瞬間……………。

『世界は砕かれたことへの悲鳴を上げた』

彼は異世界の彼と出会う　その16

別に……音が聞こえた訳ではない。それに声があるわけがない。

しかし、皆にはそれでも聞こえたのだ。感じたのだ。それは確かに鳴動したものであり、叫びだった。

世界という名の生物の悲鳴を…………。

「何、これ…………」

そう洩らしたのは誰だっただろうか？　リアスだったかもしれないし、朱乃だったかもしれない。または祐斗かもしれないしゼノヴィアや小猫、ギヤスパーかもしれない。そして口にこそ出さないが、シャルバもまた同じことを思っただろう。

それは彼等が聞いた事の無いものだった。

いや、そんなものを聞くことなど普通まずないだろう。

それは聞くはずのないもの。聞いた事があるというのなら、それは世界が崩壊するのを見た事がある者か、もしくは…………。

「ああ、やっぱりこうなったか。あまり派手にやってこっちが帰れなくなるようなことはするなよ、イツセー」

それが出来ることを知っている久遠だけである。

その悲鳴のような世界の鳴動の後、それは現れた。

シャルバと覇龍と化したイツセー、その両者を挟んだ上空の空に『罅』が入った。

揶揄でもなんでもない、そのままの意味。車に搭載されている強化ガラスに拳銃の弾が撃ち込まれたかのように、空は巨大な『罅』が入った。

そしてそれはそれでは収まらず、罅を拡大させていくと共に、空が粉碎した。

空間が砕け散り、そこから除くのは漆黒の空間。何も見えない虚無。

しかし、そこから飛び出して来たのは三つの人影。

一つ、意識を失っているのかぐつたりとした様子でゆっくりと地面

へと落ちていく金髪の少女。それはシャルバによつて殺されたはずのアーシアであつた。何かしらの力が働いているのか、彼女は地面に降りるとそのまま倒れた。

二つ、それはリアス達是一度見ているもの。遠目から見ただけでもはつきりとわかる圧倒的な殺気と威圧感。それは暴力の化身であり、全てのものを悉く打ち砕く拳。

真つ赤な色をした、人形がから少し離れた存在。猫背は獣の俊敏さを感じさせ、強靱な尾は恐竜を連想させる。肥大化した拳は超絶的な破壊を生み出し、破壊の限りを尽くす。

『覇龍進化、赤龍暴帝の重鎧殻』

平行世界の赤龍帝の最強にして最凶たる暴威の現れである。

三つ、それは初めて見るものだった。

それまでの光景が嘘だと思えるような程の清廉として気配を感じさせるそれは、純白だった。穢れ無き白。鋭角な部分が所々見受けられ、此方は人型であつた。特筆すべきは、その美しい翼だろう二対四枚からなる翼はじつに神々しく、場違いなまでに美しい。その身に纏うのは神聖なオーラ。全てを怖れさせ平伏させる圧倒的な雰囲気があるに違いない。

その姿を周りの者達は知らない。知っているのは彼だけだ。

それを見た彼は何とも言えない顔で洩らす。

「あれ、何である人が来ちゃうかねえ。こりやマジでヤバイかも……」

彼が知るその名は、

『覇龍進化、白龍神皇の閃光鎧』

平行世界において、最凶の暴威たる男の宿敵にして最強の白龍皇だ。

空が砕ける少し前、一誠はアーシアと共に漆黒の闇が広がる世界へと飛ばされていた。

原因は既にはつきりしている。シャルバが放ったあの攻撃だ。しかし、それを受けてどうしてこうなっているのか分からない一誠は苛

立ちながら叫ぶ。

「一体こいつはどういうことだよ！ 此処は何処だ！」

叫んだ所で答えは返ってこない。腕の中にいるアーシアは気を失ったようでぐったりとしていた。

現状が分からず苛立ちを見せる一誠に相棒であるドライグが答える。

『落ち着け、相棒。ここは次元の狭間だ』

「次元の狭間？」

脳筋故にそういった知識がまったくない一誠は理解出来ないようにポカンとした顔になる。見えているのかは分からないが、そんな一誠に対してドライグは呆れたような感じで説明を始めた。

『次元の狭間というのは、文字通り次元と次元の間にある空間のことだ。この場合、人間が住む世界と冥界との間の空間と言って良い。世界は直に繋がっている訳ではないと言うことだ』

実際はもつと複雑な関係なのだろうが、簡潔に言えばそのようなものだろう。そう言われ、何となくだが理解する一誠。彼の認識では精々壁と壁の間にある隙間程度にしか認識していないだろうが、今はそれだけで良い。

『先程小娘に攻撃を仕掛けてきた男が次元の狭間にオレ達を転送したようだ。あの攻撃も攻撃ではなく強制転移の類なのだろう』

「ちつ、嘗めた真似してくれやがる！」

攻撃ではなく転移、つまりは邪魔故に退かしたということが気に喰わない一誠。相手は殺すという殺意などない。邪魔だったからその場から除外したということが、一誠にとって嘗められたように感じた。

『大方脱出など出来ないかと踏んだのだろう。この空間はそのままいればいずれは消滅を引き起こすらしいからな』

それを聞いて額に青筋を浮かび上がらせる一誠。ここまで馬鹿にされたことはそうはないだろう。当たり前だが、別にシャルバは一誠を狙ったわけではないので、完全なとぼちりだが。

しかし、これで現状は理解出来た。次にどう行動するかを考えなけ

ればならないのだが、いつもはこういうときに何かしらアイデアをくれる久遠がいないので、脳筋主義の一誠では特に考え付くこともない。

ドライグは案があるにはあるが、それは下手をすると次元の狭間その物が壊れかねないので今はまだ言わない。

故に手詰まりの二人。アーシアは未だに気絶中なので正直役に立たない。

さて、どうするかと普段使わない頭を使い段々と苛立ちを募らせていく一誠。ドライグはそんな一誠にそろそろ言うべきかと悩んでいると、それは現れた。

二人の目の前の空間に突如、光り輝く魔法陣が展開されたのだ。

「なっ!?!」

それを見て警戒をする一誠。既に神器は出しているので、直ぐに殴れるようにするだけだが、それでも充分通常なら脅威と言えよう。

しかし、一誠は目の前の魔法陣から現れてきたものを見て、その程度では甘いと認識させられた。

目の前の魔法陣から現れたのは、彼が嫌と言うほど良く知っている

『白』。

それを見て一誠は驚きはしたが、それ以上にニヤリと笑った。

「どうしてテメエがここにいるんだよ。確かアザゼルの話じゃあと一週間くらいは寝込んでるって話だったはずだぜ……ええ、ヴァーリ！」

そう言われ、白は……ヴァーリは極致の姿である覇龍の姿のまま答える。

「オレはアザゼルに貴様等を迎えに行くと言われたただけだ。確かにまだ本調子ではないとはいえ、あのまま寝ていられるわけがない。直ぐにでも貴様とは殺り合いたいかな。リハビリがてらアザゼルに言われて貴様等を回収しにきたわけだが、どうしてこんなややこしい場所にいる」

ヴァーリにそう言われ、一誠は答える気はないと言った感じに無視する。それに当然怒りを感じるヴァーリだが、このままでは話が進ま

ないとドライグが代わりに説明した。

そして何故こうなったのかを聞いて、ヴァーリは鎧越しでも分かるくらい呆れた声を出した。

「不意打ちを食らって此処まで飛ばされたわけか……とんだ道化だな」

「うるせえよ！」

馬鹿にされて怒る一誠。久遠に馬鹿にされるのと違って、ヴァーリ相手では苛立ちも一塩に凄い。

このままいがみ合えば、きっとこの次元の狭間が『大変な事』になることは目に見えている。故に二人が闘争心を燃え上がらせる前にドライグがヴァーリと彼の中にいるアルビオンに話しかける。

『このままここに居てもしょうがない。脱出したいが、何か方法はないか？ オレはあるにはあるが、出来れば相棒にそれをして貰いたくない。最悪、この狭間が全て崩壊しかねないのでな』

「はあ？ あるなら言えよ、ドライグー！」

話さなかったことを責める一誠だが、ドライグの忌諱していることを分かっているヴァーリとアルビオンはその答えを返す。

「俺の転移は俺単体用だ。貴様は勿論、そこで気を失っている女も運べない。いや、今回はアザゼルから特殊な転移装置を預かっているから貴様とあの男くらいなら元の世界へは返せる。しかし、そうではないのだろう」

『ドライグ、貴様が考えていることは分かる。しかし、我等の使い手は共にこのような考えの持ち主だ。便利な方法はない。結果、貴様が言い辛そうにしている方法しかあるまい。勿論、俺だって出来ればやられたくはない。しかし。この場から貴様等が居た平行世界へ戻るためにはそうする以外あるまい』

『そうか……やはりそれ以外無いか………』

二人の意見を聞き、軽く溜息を吐くドライグ。

結局のところ、白龍皇だろうと脳筋なのは変わらないということらしい。

仕方ないと言った感じにドライグは一誠に話しかけた。

「あいよ！」

そしてやるのが決まったのなら、あとは実行するだけだと言わなければかりに力を解放した。

それを聞けばこの後どうなるかなど分かりきっているだろう。

『霸龍進化』

それが収まれば、その場に居るのは赤き暴君だ。

「ヴァーリ、向こうについても茶髪のロン毛野郎に手えだすなよ！」

野郎には俺が喧嘩を売ってやる！」

「ああ、いいぜ！今のままじゃ前殺りあつたのと変わらねえからなあ！」

その際にずっと聞こえる倍化の音。それが幾度とな続き、遂に一誠は動いた。

『ロングヌスウツツブリッドオオオオオオオオオオオ

オオオオオオオオオオオオッ!!!!
」

そして現在の状況が出来上がる。

一誠は大地を砕きながら着地すると、辺りを見回して軽く首を傾げた。

何せ妙にでかいドラゴンがそこに居たから。

あんなものいたっけ？ といった感じにそれを見て居ると、ドライグがその正体を言い当てた。

『あれはこの世界の兵藤 一誠か。あの姿、あれは覇龍だ』

「はあ、何でアイツが覇龍になんてなってるんだよ。しかもアレ……………」

既に正体はつきりしたところでイツセーの現状を察した一誠。それは同じ覇龍を使える者としては一目瞭然らしく、降り立ったヴァーリもまた言った。

「あれがこの世界の兵藤 一誠か。しかし……何と無様な姿なんだ。あの覇龍、不完全で醜くさえある」

『大方暴走しているのだろう。未熟な気配を感じる』

そんな辛口な評価をしたところで聞く者はいない。それよりも世界を砕いてきた一誠達にリアス達は驚きの声を上げた。その内容の殆どはアジアが無事であったことへの喜びだが、ヴァーリが現れた事への驚きと警戒もあった。

それらに対し、ヴァーリは普通に答える。

「俺は平行世界のヴァーリだ。そこに居る最凶の赤龍帝の宿敵さ」

平行世界のヴァーリだということを理解したリアス達であったが、その姿を見て顔を青ざめさせる。何せ此方も見た事無い姿。一誠という存在を見れば、それがどのようなものは直ぐに考え付く。

だからなのか、考えるのを放棄して現在も暴走しているイツセーの方に思考を傾けると共に、どうしてイツセーが暴走して覇龍を使ったのかを一誠達に語った。

一応念の為だが、これ以上彼等に迷惑をかける訳にはいかない。し

かし、事情くらいは知っておいたほうが良いという判断だ。

取りあえず、一誠が暴走したのはアーシアが殺されたと思ったからであり、そのアーシアが無事だったのだからそのことを知らせればイツセーは元に戻るのではないかと考える。

それを伝えようとするが、あの暴走したイツセーには下手には近づけない。その高濃度の魔力は触れただけで此方が蒸発してしまうくらいに危険だからだ。

それでどうかしようと思えるのだが、それは一誠達の言葉で凍り付いた。

「ヴァーリ、テメエはあそこでちんけにいじけてるクソ野郎を押さえろ。ああ、勿論殺すなよ。半殺しにしていじけてる野郎を引っ張り出して目が覚めるまで殴ってやれよ」

「貴様からの指図は受けん！………と言いたいが、あんな姿でも一応は覇龍。なら、鎗落としには丁度良い相手だ」

そして二人は動き出す。

ヴァーリは途轍もない速度で一氣に間合いを詰めると、イツセーの目の前に現れた。

「貴様に怨みはない。しかし、此方とて病み上がりの身だ。故にそのリハビリに付き合つて貰うぞ！」

その声と共にイツセーの身体は吹き飛んだ。周りの皆からは巨体が小さなヴァーリの一撃で軽々しく吹っ飛ばされているようにしか見えないだろう。

ヴァーリがイツセーを吹き飛ばしている時、一誠は覇龍を解くといつもの馴染みの動作で地面から飛び上がる。そして呆氣にとられているシャルバの目の前に飛び出した。

「よう、久しぶりだなあ。さっきは良くもやってくれたなあ、おい！
テメエに営められるのは癪だからよお、喧嘩を売ってやるよ。テメエは激しく俺をむかつかせてくれた。だから喧嘩だ！ 喧嘩をやつてやるよ！」

「なっ!? ガッ！」

その叫びと共に、シャルバの顎に拳が叩き着けられた。

その衝撃で現実に戻されるシャルバ。砕けかけた顎から湧き出る血で咽せながらも何とか体勢を整え一誠から離れた。

「き、貴様、一体どうやって次元の狭間から……それにその姿は何だ？ 何故解いた……」

そんなシャルバを見ながら一誠は彼に笑いかける。肉食獣の如き、殺意に溢れた笑みだ。

「ただテメエをボコっただけじゃ今までと変わらねえ。テメエ如きに禁手なんて使ってたなら『野郎』に勝てねえ。それにテメエは俺を嘗め腐りやがった。だからテメエは……このままボコってやる!!」

そんな両者を見て凍り付くりアス達。

そんな中、久遠はこれから酷い目に遭うであろう二名に手を合わせていた。

そんなものは常識的に考えて分かりきっている。

だからこそ、これから起きるであろう悲劇に目を瞑りかけた。

しかし……彼等はその目を見開くことになる。

ヴァーリは避ける事が出来なかったのか、その巨大で強大な豪腕を叩き着けられてしまった。その激突音は凄まじく、まるで隕石が地表に激突したかのように空間を震わせた。

だが……その腕は振り切れなかった。

普通に考えれば抵抗なく振り切れるはず。ぶつけられた対象が吹き飛ぶのか弾け飛ぶのかのどちらかの結果だけが残るはず。

だというのに、その腕はヴァーリが居たところでピタリと止まっていた。

「……………なんだ、これは？」

自分の腕が止まり、まるで氷のように冷ややかな声がかけられたことに戸惑いを見せるイツセー。

その声はリアス達にも何故か聞こえ、彼女達は皆啞然とする。

一体何が起こったのか？ その事実を前にして、彼女達は理解出来なかった。

何せ……ヴァーリは防御も何も一際せず、その腕を受け止めていたのだから。

そう、彼は何もしていない。そのまま構えることもせず、浮遊していた場所から一切動かずにいた。その身だけで叩き着けられた腕を止めたのだ。

大地を粉碎する破壊の巨腕。それを防御も無しに受け止めて、それでいてダメージを負った様子が一切無い。

そんな『可笑しい』ことを理解出来るわけがないのだ。

そんな周りに対しヴァーリは静かに、しかしはつきりとイツセーに言う。

「貴様は何をしたんだ？」

「グウルツ！」

まるで何がしたかったのか分からないと言った感じにヴァーリは問いかける。

そんな様子に更にイッセーは戸惑う様子を見せ、そして自分の行った結果を認めないというかのように、更にその巨腕をヴァーリへと叩き着けた。

憤怒の咆吼を上げながらイツセーはその巨腕を繰り出す。

そして最後に両手を組み合わせ、ヴァーリへと向かって振り下ろした。

それは彼の暴威の化身に引けを取らない威力だった。

しかし……それ程の威力を受けても尚、白は顕在する。

そしてこれらの流れをもつてやつとヴァーリはそれが何なのか理解した。

ヴァーリはそうかそうかと言った感じに軽く頷き、そして

\vdots

「馬鹿にしているのか」

まるで世界が凍り付くようなゾツとする殺気を噴き出した。

その冷氣は我を忘れて暴走しているイツセーでさえ止めるほどに

凄まじい。

イツセーはまるで怯える獣のように少し後ろに退いてしまう。本

能が目の前に居る男を怖れたのだ。

そんな殺気を放ったヴァーリは、呆れと怒りが籠もったような声で話しかける。

「平行世界とは言え兵藤 一誠なのだから、どれほどの力かと思えば……この程度か。覇龍が不完全とは言え、この程度か………巫山戯るな！」

まるで刃を突き付けられたような殺気を向けられ、本能が怯みをみせるイツセー。

身体のサイズは圧倒的にイツセーの方が上だというのに、その恐ろしさはヴァーリの方が格段に上だ。

ヴァーリは更に怒りを込めて言う。

「あの男は、俺が知る兵藤 一誠という男は、このような腑抜けた拳など振るわない！ 赤き龍の帝王の名にはあまりにもふさわしくない程の暴威こそがあの男だ。世界の違いがここまで違うとはな……正直失望したぞ」

がっかりだと言わんばかりの声を出すヴァーリ。

何せ世界は違えど同じ兵藤 一誠の、不完全とは言え覇龍と戦えるのだ。確かに一誠に比べれば弱いのは分かりきっているとはいえ、多少は楽しみたかった。

だが、そのお眼鏡にイツセーは適わなかったのだ。大地を碎き破壊を撒き散らす赤き暴龍でも、この男を満足させるのは至らない。

そう言われても言葉を理解出来るほどの理性はない。しかし、それでも見下されたことが我慢出来なかったのか、イツセーは怒り咆吼を上げる。

大気を震わせる叫びを上げると共に、辺りへと閃緑色の魔力弾が無差別に撒き散らかれ、辺りを破壊する。

その弾雨の威力も凄まじく、リアス達は巻き込まれないよう急いで結界を全力で張った。

そんな危険な雨の中、ヴァーリは何事もなく浮遊する。

身体に激突する弾はそのまま弾が耐えきれずに霧散していく。

当たった箇所にも目を向けヴァーリは呆れながら、まるで教師が駄目

な生徒にものを教えるかの如く口を開いた。

「まったくなくていいない。いいか……攻撃とは……こういうものだ!!」

そう告げた瞬間、イツセーの目の前からヴァーリが消えた。

それはリアス達も同じであり、彼女達もヴァーリの姿を見失う。

彼が何処に行ったのか？ その答えは大気が炸裂するような轟音と共に現れた。

その轟音と共に、

イツセーの右腕が弾け飛んだ。

まるで何かにむしり取られたかのように、千切れ飛んで少し離れた地面へと血肉が叩き着けられた音と共に落下した。

その右腕は酷く損傷しており、もう右腕の形をしていない。すでに肉塊といっても良い。それぐらい滅茶苦茶になっていた。

千切れた腕の断面から血が噴き出すイツセー。その腕の先には、先程消えたヴァーリが浮かんでいた。

「この程度の攻撃と千切れるとはな……脆過ぎる。あの男ならこの程度、余裕で反撃してきただろう。それで同じ赤龍帝の男か」

深い失望と共に吐き出される言葉は、リアス達が聞いても心を抉り出されるほどに痛いものであった。もしイツセーに理性があつたのなら、二度と立ち上がれないかもしれない。

自身の右腕が亡くなったことで走った激痛に悲鳴を上げながら、イツセーは怒り任せにヴァーリに残った左腕で殴りかかる。

しかし、今度は当たらない。

その前にヴァーリの姿が消えたからだ。

「遅い」

その眩きと共に、イツセーの身体の各所が弾け飛ぶ。

まるで銃弾の雨に晒されているかのように、イツセーの身体は弾けながら壊れていく。

その攻撃の正体は何てことはない。

ただヴァーリが手加減してイツセーへ接近しては一撃を繰り出すだけ。ヒットアンドウェイを繰り返しているだけだが、あまりにも速

過ぎて見切ることが出来ない者ではヴァーリの姿は捉えられず、イツーの身体が弾けているようにしか見えない。

身体がボロボロになっていくイッサー。その痛みは凄まじいよう
で、上がる悲鳴はあまりにも痛ましい。

既にこれだけでも力の差は歴然であり、イツセーが敵うとは思えない。しかし、それでもイツセーの暴走は止まらない。

激痛を堪え、憤怒に染まった咆吼を上げながら更にヴァーリへと
イツセーは襲い掛かる。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオツツツ!!」

『Divide!』

人工的な音声と共に、ヴァーリにとって馴染み深い力が発動された。

それを受けて身体から力が抜けた感じを受けるヴァーリ。それに少し驚いたように、目を少しだけ見開く。

それはリアス達も同じであり、あの状態で白龍皇の力を使えるなんて思わなかったのだ。

この世界のイツセーだけが成した事。それはこの世界のヴァーリから白龍皇の半減の力を奪ったことだ。三大勢力和平の時の激闘の際、砕けたヴァーリの鎧から出た青い宝玉を掴むと、イツセーはそれを無理矢理ドライグの中に取り込んだ。本来相反する者同士の力を一緒にするというのは、かなり危険だ。事実、イツセーはそれでかなりの激痛と苦しみを味わった。しかし、それでも彼はそれを成したのだ。故にイツセーは赤龍帝なのに『半減』を使えるようになった。

倍化と半減を両方とも使えるというのはある意味反則染みている。

しかし……。

「身の程を知れ」

ヴァーリのその言葉と共に、イツセーの翼が弾けて千切れ飛んだ。その激痛に悶えるイツセー。その呻きを聞きながらヴァーリは告げる。

『半減』の力を使える事は驚いたが、その使い方がなっていない。『半

滅』は相手の力を半分にし、その奪った半分を自分のものにするというものだ。自身のキャパシティを考えずに使えば、それは溢れ出し器を破壊するだけ。貴様のような半端な覇龍如きに俺の力を受け止めきれぬわけないだろう」

力を半分にされたというのに、ヴァーリはまったく弱った様子を見せない。悠然とイツセーの前に佇み、見下す。

「他者から奪った力を満足に使えないのに使いその為体……醜いな。それが貴様の今の全力か？」

その問いかけに帰ってくるのは怒り狂った叫び。

そのまま口からイツセーは砲撃をヴァーリに向かって吐き出した。それはイツセーのドラゴンショットよりも格段に上の威力を持つ。

その砲撃を前に、ヴァーリもまた翼を広げて迎え撃つ。

二対四枚からなる翼を神々しく輝かせ、ヴァーリはイツセーに向かって片腕を構えた。

「そのような温い砲撃で倒せるなどと思うな」

そして腕から魔法陣が展開され放たれる砲撃。

それはイツセーが放ったものと同じ位の太さを持つものであり、互いの砲撃がぶつかり合った。

一瞬だけ拮抗し、その後は一気にヴァーリの砲撃によってイツセーの砲撃は飲み込まれていく。

そして砲撃はイツセーの左腕を飲み込み、塵一つ残さずに消滅させた。

両腕を失い叫ぶイツセー。そんなイツセーにヴァーリは怒りと呆れを持って話しかける。

「全てが中途半端なものばかり。貴様……殺る気があるのか？」

その問いかけと共に膨れ上がるのは怒気。想像した以上に不甲斐ない平行世界の宿敵への軟弱さにヴァーリは怒る。

何だこれは？ この弱いのが赤龍帝だと？ 巫山戯るなど、彼は激怒する。

それは兵藤 一誠を認めているからこそ、許せない心の現れ。世界は違えどあの一誠と同じ存在なのだから、もつと強く無ければいけない

いと。若干無茶振りだが、ヴァーリにそれを言った所で聞くわけがない。

その蔑みを聞いてなのか、イツセーは怒りの咆吼を上げながらヴァーリを睨み付ける。

そして彼は武器という武器を失い、残った最後の手段に移る。

胸の装甲が開き、中から大きな宝玉が現れた。その宝玉は閃緑色に輝き、人工的な音声と共にその輝きを増していく。

それは覇龍が持ちし最大火力。放てば全てを消滅させると言われているほどに強力な力。それを放とうというのだ。

この現状、イツセーはそうすることでしかヴァーリを倒す手立てがないのでそれは仕方ない事なのかも知れない。例え暴走していて気付かずにリアス達を巻き込み殺したとしても。

そんなイツセーに対し、ヴァーリは軽蔑の眼差しを向ける。

「先程から様子を見てみれば、ただ中途半端に暴れるばかり。まったくもってなっていない。貴様は何がしたいのだ？ 話は聞いたが、だからといって同情する余地など無い。貴様が大切にしていた女が殺されたと思っただのはまあいい。しかしだ、その後はその事実を目を背けてただ暴走して暴れている。俺には貴様がしていることが、ただの餓鬼の癪癪にしか見えない。そのような信念の執念も無き腑抜けに殺される程、俺は甘くない。貴様も男なら見せてみろ、意地というもの！」

そう言うと共に、此方も力を溜め込む。

神々しく輝く翼と身体。そこから感じられるのは魔王ですら超える力の本流。

そこから放たれるのは、きつと一誠同様に『世界を殺す』一撃だ。互いの力の昂ぶりを感じながらリアス達は顔を青ざめさせた。

それは自分達が巻き込まれかねないのもそうだが、それ以上にイツセーが死んでしまうかもしれないと思うからだ。もう暴走したイツセーを止められないとは思わない。あのヴァーリを前にすれば、寧ろ止められない方が可笑しいと思う。傍から見てもその強さは魔王級、いや、それ以上だろう。不敬かもしれないが、リアスは自身の兄であ

るサーゼクスですら勝てるか分からないと思っただけだ。

それぐらいその力は凄まじい。

そんな力の高まりを前にして、久遠は疲れた様な顔で皆に叱咤を入れる。

「おい、全員急いで俺の後ろに回れ！ 結界を全力で張るから、少しでも離れたら塵一つ残らず消滅するぞ！ くっそ、あの人、本当に手加減すんのかよ！」

その言葉にリアス達は急いで久遠の後ろへと回った。

その避難が終わる瞬間と同時に両者は動く。

倍化を何重にも行ったイツセーは胸の宝玉は溢れんばかりに光を放ち、そしてそれをヴァーリに向けて放った。

『ロングヌス・スマッシュツツツツツ!!』

それは破壊の濁流。全てを巻き込み消滅させる死の流れ。巨大なそれは避ける事など出来ない。神を滅するにふさわしい光の濁流、それは余波だけで大地を消滅させながらヴァーリに向かって飛んで行く。

確かにアレなら如何にヴァーリとて無傷ではすまないだろう。

そうリアス達は思った。

だが、それでも……その認識は甘かった。

彼女達は理解していない。

たかが『不完全の覇龍』と、『覇龍のその先の進化体』の差というものを。

それは彼の龍神達に匹敵する者なのだから。

「その程度で『神滅』を語るな、餓鬼！ 見せてやろう、真の『神を滅する力』を。なあ、アルビオン！」

『ああ、相棒！ 本物の差を見せつけてやる』

そしてそれは放たれた。

それは砲撃ではない。ただの魔力が込められた手刀だ。

ただし、その力は万物を切り裂く。物質を、空間を、霊気や魔力、それらの力、存在そのものを、その世界全てを斬り捨てる超絶的な斬撃だ。

「ハアアアアアアアアアアアアアアアツツツ、『白龍閃滅斬ツツ

!!
』」

その斬撃はそのまま光の濁流へと飛んでいき……………切り裂いた。

そう、拮抗することもなく、触れた瞬間に抵抗なくすつぱりと砲撃を切り裂いたのだ。

斬られた濁流はその後の余波だけにかき消され消滅していく。

そして斬撃はその発射元であるイツセーの胸の宝玉を切り裂いた。

[illegible]

声にならない断末魔を上げ、イツセーの身体は地面へと崩れ落ちた。

その光景にリアス達は涙を流しながらイツセーの元へと駆けだしていく。

そんな彼女達に聞こえるようにヴァーリは告げる。

「落ち着け、殺してはいない。あんな醜く弱い奴相手に全力など使わ
ん。勿論手加減してあるから死んではないが、しばらくは動けない
だろう。今の内に何とかしろ」

そう告げると、一誠の方に顔を向けるヴァーリ。

その表情は鎧に包まれていて分からない。だが、この時……………。

彼の顔は久遠と同じく、真つ青に変わっていた。

そして急いでイッサーやリアス達を守るように防御結界を張る二人。そのタイミングはコンビを組んでも良いくらい良かった。

それを張り終えると同時に、

『世界は断末魔に近い悲鳴を上げた』

彼は異世界の彼と出会う その18

ヴァーリがイツセーを一方的に圧倒する少し前、彼もまた己が望んだ喧嘩を相手にふっかけていた。

怒りと勢いの籠もった声と共に拳を繰り出し、喧嘩を売られた相手であるシャルバはそれを防ごうと防御結界を張る。

しかし、それは意味を成さない。何せ一誠の拳は魔王の純粋な血統たるシャルバの結界を打ち砕くのだから。

「どおしたどおしたッ!! まだまだ始まったばかりだぜ!」

「クソッ! 穢れたドラゴンがッ!」

まったく防御出来ないことにシャルバは焦りを見せる。

これがまだ、禁手に至っている状態なのなら分からなくもない。しかし、相手は神器を出しただけで、その上悪魔でもないただの人間。それにこうも押されているというのは、悪魔として耐えられない屈辱だった。

だからこそ、シャルバは怒り咆える。

「たかが人間如きにツツツツツツ!!」

自身を叱咤すると共に一誠の拳から逃れようと後ろに飛び退く。

相手は粗暴で力任せの戦い方をしている。その事から遠距離攻撃はないだろうと見越しての行動。それは決して間違いではない。事実、あの近距離ではシャルバの力は発揮出来ないのだから。上級悪魔は様々いるが、総じて接近戦が得意と言う者は少ない。王であるが故にどの面に於いても優れてはいるのだが、皆魔力を重視する傾向が強いためか主に遠中距離における魔法攻撃が主体となっている。それは旧魔王派である者達も同じであり、一誠のような近距離戦が得意な相手に対してはそれに付き合うよりも、自分の間合いで戦う方がより安全だ。

「先程は不意を打たれたが、見せてやろう! これが真の魔王の力だ!」

そして魔法陣を展開すると、そこから金色に輝く魔力弾を一誠に向かって放つ。

別にこの程度で死ぬとは思っていない。しかし、相手に近づけさせないようにするには有効だ。牽制して動きを鈍らせ、そこに必殺の一撃を放つ。魔術戦における常識。

当たればダメージは入る。そうでなくても避ければ体勢が崩れ足が鈍る。

故に一誠の足は止まる……そう思った。

だが、それは違う。一誠はそのどちらにも動かなかった。

向かってくる魔力弾。正史であれば弱っていたとはいえデイオドラを一撃で貫いたそれを、一誠は……………。

「んなちやつちいもんで止められるわけねえだろッ！」

自慢の拳を持って叩き潰した。

当たるのでも避けるのでもない。ましては防御などという上等なものでもない。

まるで飛んで来たボールを払うかのように、たまたま邪魔だった羽虫を叩き潰すかのように弾いたのだ。

そこに苦しみや耐え抜いたといったような感情はない。あるのは肉食獣めいた殺気と狂気に彩られた笑みだけだ。

その笑みにシャルバ飲み込まれかけてしまう。真の魔王である自分がたかが人間に恐怖するなど認められたものではない。しかし、意思はそう思っても肉体は、本能が目目の前の相手を畏れる。それを認めたくない一心でシャルバは咆えた。

「チッ、穢れた赤がああああアアアアアアアアアアアアアッ！」
そしてゆつくりと近づいてくる一誠に雨の如き魔力弾の雨を放つ。

先程の様子見とは違う、回避不能防御不能の徹底した連続攻撃。人間にはまず過ぎた攻撃が一誠に向かって殺到する。

それに対し、一誠は何かを構えることはない。

彼は笑みを浮かべたままその雨の前へと突き進む。無論、避けるつもりなど無い。

彼がすることは、たった一つだけなのだから。

「こんなもんで退く程柔じゃねえんだよッ！」

身体に纏う赤きオーラを輝かせながら、一誠は左腕を地面に向かつ

て叩き着ける。

その衝撃が大地を揺らすと共に、一誠の身体を弾丸のように弾き出した。

そして一誠は空中で身体を捻り回転させる。ここまですればもう分かるだろう。

毎度お馴染みのあの攻撃だ。

回転したままその破壊の嵐に突入する一誠。

向かってくる魔力弾は回転による遠心力の載った拳によつて全て打ち落とされていく。

そして嵐を抜けた後にシャルバを待っていたのは、

「もつとだ！ もつと見せろよ、テメエの力つて奴をよお！」

まるで全てを粉碎されるかのような、愉快そうな一誠の凄惨な笑みだった。

その笑みに背筋が凍り付くシャルバ。手加減をした気などない。人間ならまず死ぬであろう攻撃は確かにしたのだ。上級悪魔でも防げるような者はそうはいないはずだ。

それを目の前の男は、神器を使っているとは言え殆ど生身である男は、何もなかったかのように自分に向かって突き進んでくる。

内心でどこか人間如きがと見下していたのは認めよう。それは今でも思っているし、これからそうだ。悪魔とは基本自分達以外の種を見下すものなのだから。だが、目の前にいる男は人間の区分に入れて良いのか分からない。

神器を使っている『人間』なのか、それ以上の何なのか？ それは分からない。

だが、シャルバにはこれではつきりとしたことがある。

（殺さなければ……殺されるツ!!）

嘗めるということはもう辞めた。

真の魔王である自分が偽りの魔王達を駆逐し、悪魔として真の世界を取り戻す。

そのためにはここで、目の前にいる化け物に足止めを喰らうわけにはいかないのだ。

「いいだろう、異界の赤き龍帝よ！ 改めてここに、真の魔王である
シヤルバ・ベルゼブブの名において、貴様を必ず殺してやる！ もう
悔つたりなどはない！」

それは全力で相手をするという意の現れ。獅子が兎を狩るのに全力を出すかのような行為。今まで殺す気ではいたが、それは見下したものであつた。だが、今のその殺意は、強敵を殺そうとする者となつてゐる。

「いいねえ、そうこなくつちやなあッ！」

再び地面を殴り、その反動を利用してシャルバへと突き進む。その際に起きる大地の揺れ。その揺れる大きさから如何に威力が大きいのかを連想させ、シャルバは冷や汗を掻きつつも迎え撃つ。

だからこそ、シャルバは全身に魔力を溢れさせながら咆えた。

自分は悪魔。その肉体能力は人間を遙かに超えている。悔る気はないが、負ける気も無い。

叫びと共に放たれるのは、一撃で大岩を打ち砕く程の威力を持った拳。それが自分に向かってくるのを感じて、一誠は殺気だった笑みを

そして激突する両雄の拳。激突の轟音を轟かせ、拳同士拮抗する。

「へえ、悪くねえじゃねえか」

シャルバは必死に力を込め、一誠はそんな彼を嘲笑うように笑う。そしてどちらも兎も角、拳を弾き合った。

力は互角だと、傍から見ればそう思うだろう。だが、シャルバの表情は硬くなっていた。

弾き合ったのではない。間合いに入るために敢えて弾き合わせられたのだ。

そのまま互いに弾き合えば、また距離が離されると思ったのだろう。だから力を流され、互いの拳が届く距離にされた。

そうなればそこは………………。

「ここは俺の距離だ！　今まで嘗められた分、きっちり返してやるよ！」

「ッ!?　くっ……………」

そう、一誠の拳の距離だ。

内心の焦りを察っせられたのか、一誠はまるで煽るかのような笑みでシャルバへと殴りかかる。

近距離からの左拳、それは鋭い勢いをもつてシャルバの顔面を狙う。それを察したシャルバは右腕で防御するが、防いだ腕はミシリと軋み激痛が走る。防御の結果を張る余裕などない。

（くそ、骨に罅が入ったか！　あと少しでも押し負けていたら腕をへし折られていた）

人間の膂力では考えられない威力に顔を顰めつつ、シャルバは開いている左拳を一誠に向かって放つ。

今一誠の神器が装着されている左腕は此方で押さえている。だから防ぐ術などないと判断した。

しかし、それは早計だったと言えよう。

普通の人間なら受けた途端に肉体の全てが弾け飛ぶであろう打撃。それを一誠は何も装着されていない右手で掴んだのだ。

「甘え！」

「なっ!？」

まさか何もない右手で掴まれるとは思っていなかったのだろう。シャルバから驚きの声が上がる。それは目の前で起こった事もそう

だが、その手応えもその原因であった。

まるで鋼鉄の鉄板で拳を包まれたかのような、そんな感触。人間や他の種族の手でもありえないような感触であり、壊せるような気が全くない。

そして捕まれたが最後、その左手は死んだ。

一瞬にして一気に力を込められたシャルバの拳、それはまるで紙細工のように…………

握り潰された。

ぐしやりと原型がなくなる左拳。指が変な方向に折れ曲がり、皮を突き破り飛び出した骨から血が噴き出す。

その信じられない現実を認識したとき、シャルバは激痛に襲われ声にならない悲鳴を上げた。

しかし、それで一誠は止まらない。

握り潰した左拳を手前に引っ張り、引かれたシャルバの身体……その顔面に向かって一誠は身体を少し逸らし、思いつきその頭部を振り下ろした。

所謂、頭突きである。

「ガッ!」

顔面に頭突きを喰らい、鼻がへし折れた感触を感じるシャルバ。その痛みもさることながら、止まる気配を見せない鼻血で気管が詰まりかける。

それに噎せ返っているシャルバを尻目に、一誠が咆えた。

「そんなもんでイモひいてんじゃねよ! まだ喧嘩は始まったばかりなんだからよ!」

その発言にそれまで苦しそうに喘いでいたシャルバは怒りと共に一誠に問いかける。

「喧嘩? 喧嘩だと? この戦いを貴様は喧嘩と評するのか! この真の魔王、シャルバ・ベルゼブブとの戦いをそんな下賤なことだと言うのか!」

誇り高い者からすれば、喧嘩というのはそう見られるものらしい。彼からすれば、これは無駄な驕りを捨てた立派な戦いなのだ。そのよ

うなものと一緒にされることが我慢出来なかった。

「喧嘩に上品も下品もねえんだよ。テメエに嘗められてムカつ腹が立った。だから俺が喧嘩を売った。んでもってテメエが買ったんだ。だからコイツは喧嘩だよ。んなご大層なもんじゃねえ。ただの喧嘩だ。ただし……命掛けだけどなあ！」

ダメージが濃いのか動きが鈍いシャルバに一気に近づくと、そこから左拳をシャルバの身体に向かって振り下ろした。

部の肋骨を砕く。

そして続く拳の嵐。近距離から繰り出されるのは、上級悪魔の肉体ですら破壊する壮絶な威力が籠もった拳だ。それに巻き込まれれば、如何にシャルバとて無事では済まない。

だが、彼とてプライドがある。真の魔王としてではない。一悪魔として、人間に負ける事など出来ない。そう考えが過ぎった途端、既に彼の頭は魔王復権の事など忘れていた。

「ガッ アアアアアアアアアアアアアアアアア
アツツツツツツ!!」

既に潰れた肩から放たれる拳に何処までの威力があるのかは分からない。しかし、それでも魔力で強化された拳の威力は決して弱くはない。

感じて笑う。

「そうだよ、そうこなくちやなあ」

そして一誠はシャルバに語る。

「さっきの拳は悪く無かったぜ。さっきまでのテメエは真の魔王だの何だのと、ご大層なもんをぶらつかせなきや何も出来ねえクソつたれた攻撃しか出来ねえ野郎だった。喧嘩で相手をぶん殴るのにそんなもんいらねえんだよ。必要なのは一つだけだ。そいつがむかつくから、ぶつ倒したいからぶん殴る、それだけだ。そいつが今のテメエにはあつた。やつとそれらしくなってきたぜ」

愉快そうに語る一誠にシャルバは怒りの籠もった眼差しで睨み付けるのみ。

身体は激痛が走りは意識は朦朧とする。それでも身体を動かすのは、目の前で不愉快に笑う一誠をぶちのめしたいという思考のみだ。自分が真の魔王であるベルゼブブではなく、ただ目の前にいる男を殺したい男として認識する。そして同時に理解した。

（ああ、これが喧嘩というものか）

喧嘩と戦いの違い。

それは主義主張の問題だ。戦争や戦い、決闘の全てには何かしら必ずそのお題目が上げられる。正義であつたり復讐であつたり名誉をかけたりなど様々だ。

しかし、喧嘩にはそれがない。いや、中にはあるのかもしれない。しかし、その根底にあるのはたった一つ。

『目の前にいる敵をぶちのめしたい』

それだけだ。そこに正義は無いし、名誉もない。ただ、むかつくから殺りたい。それだけなのだ。

それを自分がしていることが可笑しくもあつたが、何故か納得出来た。

自分は今、喧嘩をしているのだと。

「いい面だ。さっきまでの薄っぺらいプライドなんかじゃねえ。男としての意地が見えてくる面だ。だからこそ、見せてみるよ………テメエの『意地』をよお！」

遊んでくれた』相手に対し、その礼をする。

「テメエの全力は悪くはなかったぜ。でもまあ、同じ手ばかり聞くと思うなよ。んでだ、全力には全力で応えるってのが俺の中のルールなんでね。テメエにも見せてやるよ……俺の全力って奴をよお！」

そして笑いながら一誠は口にする。

先程まで暴れていた出来損ないの完成形、その更に先の姿へと変わるための言葉を。

『我、目覚めるは覇の理を神より奪いし二天龍なり。無限を喰い、夢幻を憂う。我、赤き龍の霸王と成りて、汝を紅蓮の煉獄に沈めよう』

そして世界が震え上がると共に、赤き極光を放ちながら一誠はその姿を変えた。

『覇龍進化、赤龍暴帝の重鎧殻』

それは世界を殺す暴威。止められる者は対極の白以外今の所存在しない、まさに神すらも超えた存在。

その姿を間近で見て目を見開くシャルバ。

一誠はそんな彼にお礼代わりに、今の自分が放てる最強の一撃を放つ。

『ドライグ、今回は野暮なことは言うなよ！』

『ああ、もう……もう相棒は言っても止まらないだろう。だったら仕方ない……徹底的にやれ』

「あいよー！」

そして始まるは何度も行われる倍化。

どんどん膨れ上がる力は、それこそシャルバの感じ取れる域を超え、既に彼の無限を司る龍神にすら追いつこうとしている。

自身の限界を試すような行為。失敗すれば、それは自分とその周りを全て巻き込む大惨事を引き起こす。

だが、そのことに恐怖など微塵もない。一誠はただ、最高の一撃を放つ事だけを考え、そしてそれをシャルバに喰らわせるべく飛び出した。

強靱な尾を地面に叩き付けると、先程の一誠の一撃を上回る衝撃を出しながら一誠は真上へと弾き飛び、空中で一旦停止。そして閃緑に

彼は異世界の彼と出会う その19

脅威は去ったと言えよう。

イツセーは取りあえず元の姿へと戻ったし、襲撃してきた敵も全て死んだ。

アーシアも無事だったし、結果から言えば大成功であり、万々歳と言えるはず。

だというのに、この場に居る皆の気持ちはまったく喜べない。

何せ……それまで以上の脅威が目の前で猛威を振るっているのだから。

「貴様という奴はアアアアアアアアアアアアアアア！ その力で次元の壁を打ち壊したのを忘れたのか！」

「お前のせいで危うく俺達全員消し飛びかけた！ 何してんの！ 馬鹿なの死ぬの？」

「うるせえよ！ ただここ最近溜まってたもんをぶっ放しただけだろ！」

「そんなフラストレーションに巻き込まれて死にかける身になってみる、このドアホッ！ 八つ当たりすんなよ、このボケッ！」

一誠が放った極限の一撃の余波に巻き込まれたせいで危うく死にかけてリアス達と久遠、それにヴァーリ。正直な所、ヴァーリは死なないし久遠も死ぬほど危険ではなかったが、あの場で二人が庇わなければ間違いなくリアス達は一瞬で消し飛んでいただろう。そのことに関し、リアス達はどう理解の範疇を超えてしまったために反応出来なかった。だから彼女達から苦情は出ない。何せ理解出来ないのだから。分かるのは、たった一人の『人間』によって世界の一部が滅せられたという事実のみ。

他に人が居ないのならば、これ以上の問題は無い。だが、ここにはそのことに対し、実に文句を言える者が二人も居るのだ。

故に二人はキレ、こうして一誠を追いかけているのである。

ヴァーリがキレて叫びを上げつつ、瞬時に間合いを詰めて拳を振るい、久遠が一誠の動きを鈍らせるよう結界を張りつつ舌戦を持ってい

て怒りをぶつける。

この二人から怒られ、一誠は自分は悪くないと主張し二人の攻撃を防ぎつつも反撃する。

その結果、大地が衝撃で砕け大気が震える。

ヴァーリの拳は鋭く大地を穿ち、一誠の拳は悉く粉碎する。そして久遠も珍しく結界を攻撃に回したりして一誠を押し潰そうとしたり捕縛したりと、様々な術を仕掛けていく。

結果……………イツセーとシャルバが暴れ回っていた以上の破壊が撒き起こっていた。

神殿は最初の一誠の一撃で七割方消し飛び、その後はイツセーの不完全な覇龍の暴走で残り二割も崩れ落ち、神殿の体を成さない。

それだけでも酷いのに、一誠が放った極限の拳の余波によつて最後の一割……………いや、それどころか大地その物も消し飛んだため、マイナス十一割とでも言おうか。それぐらいの酷い破壊が行われたのだ。すでに大地は更地ではすまない状態であり、土地としてどう形容して良いのか分からない状態。だというのに、そこから先に更にその張本人とそれに匹敵する者、そして人間では有り得ない猛者によつて大地は無残な姿に変えられているのだ。

もう生命は住めないんじゃないだろうか……………それぐらい目の前の破壊の爪痕は酷かった。

勿論、一誠もヴァーリも久遠も本気ではない。

言葉にすれば単純であり、やり過ぎだと言いたいだけ。

しかし、それだけでは久遠とヴァーリの怒りは収まらない。理由は酷いし幼稚なものだが、それでもこの怒りをぶつけられずには居られない。

その結果、大地がもう大地として機能しなくなったとしても、二人は止まらないだろう。ぶちまけてスッキリしたいのである。

そしてそれを止められる者などいない。

例え魔王や神であろうとも、こんな幼稚な八つ当たりを止められはしない。

止めようとすれば、下手をすれば一瞬で消し飛ばされるかもしれない。

いのだから。

しかし、その破壊も少しして収まりを見せ始めた。

「はあ、はあ、はあ、はあ………」

「俺はまだ病み上がりの身だぞ。何故こんなに疲れなければならぬい」

「デメエ等が勝手に喰って掛かるからだろうが、クソ！ ああ、疲れた、腹減ってきた」

何やら疲れたらしく、三人がクレーターのそこで倒れていた。

久遠は息切れを起こしてぐったりし、ヴァーリは少し冷静に戻ったらしく如何に自分が幼稚な事をしたのかと恥い、一誠はやれやれだと疲れた様子で空腹を訴える。

特に一誠とヴァーリは神器を解いており、普通の姿で地面に横たわっていた。

それだけを見れば青春的一幕に見えるかもしれないが、その前に三人が引き起こした大規模な破壊を思えばそのようなことは冗談でも思えない。

そんな風に疲れ切った三名だが、その視線は三人とも空のある一点を見ていた。

そこは何もない、冥界のくすんだ紫色をした空が広がっている。何もないというのに、三人は確かにそれを見ていた。

そして三人の言葉を代弁するように、ヴァーリがそれに向かって声をかける。

「それで……いつまで隠れて覗き見るつもりだ？」

その声に反応してなのか、リアス達では気付かない程の上空からそれは降りてきた。

真っ白い純白の鎧を纏い、神々しい翼を広げた男がそこには居た。

その姿は彼等にとって見慣れている姿。それこそ、ヴァーリには実に馴染み深い姿だ。

「この世界の俺（白龍皇）か」

そう、その男が纏っているのは白龍皇の光翼、その禁手だ。つまりこの男は『この世界の白龍皇』ということ。

彼はヴァーリの言葉を受けて、感心したように頷く。

「その通りだ。しかし、噂に聞いていたが……まさか平行世界の自分が見られるとは思わなかった」

イツセーと比べてそこまで驚いている様子は見られない。どうやら一誠達の話は事前に調べていたようだ。

そんなこの世界のヴァーリに対し、一誠は目を向けるだけ、久遠も二人のやり取りを見るのみ。ヴァーリは軽く睨み付けると、話を話し始める。

「それで此方の貴様が何用だ？ 強者の気に触れ誘われたか？」

龍に関わる者は得てして戦いを求める。それ故なのか、強者の気に誘われやすい。

この場合強者というのはヴァーリ達のこと。つまり自分達と戦うのかと遠回しに聞いているのだ。

その問いかけに対し、彼は違うと軽く首を振る。

「それも魅力的ではあるが、答えはNOだ。俺はライバルの気配に不穏な物を感じたので、少し様子を見に来たんだよ。それで見てみれば不完全な覇龍と化し暴走。止めるべきかと思っただが……それは杞憂としか言いようが無かったようだがね」

ヴァーリ達を見ながら彼はそう答える。

確かにイツセーの気配が可笑しなことになっていることに気付き、その様子を見に来た。そしてイツセーを……死にかけになっているライバルを救おうかと悩んだところ、平行世界のヴァーリが現れたのだ。

後は皆が知っている通り、超絶的な力で一方的にイツセーをねじ伏せた。その光景を見て、自分は不要だと判断したのだろう。

「それに……悔しいが、今の俺ではそちらの二人にはどうやっても敵わないだろう。その力は俺が知る限り、『D×D』に最も近い。いや、それで全力ではないというのなら、それ以上だ。そのような化け物相手に敵う人物など、この世界にいるかどうか」

悔しいと言う割には嬉しそうに語る彼。

彼自身、最終目標は決めているが、その指針としての方向性が少し

ばかり決めあぐねていた。そこにヴァーリが現れたのだ。自分の目指す先にいる『白龍神皇』を。

それを目の当たりに出来たのだから、その興奮は凄まじい。自分が強くなるにはどうすれば良いのかの具体例が見れたのだ。それが見ればその先にいくためにどうすれば良いのかが少しでも分かる。

自分も『ヴァーリ』のように強くなれるのだと、確信出来る。

だからこそ、悔しいが彼は満たされていた。

「だからこそ、戦わない。だが、いずれ其方よりも強くなってみせる。

『D×D』を超え、『真なる白龍神皇』へとなる為に」

そう語る彼。その信念は言葉からでも充分に伝わり、ヴァーリは軽く笑いつつ答える。

「悪くない信念だ。ならばやってみせる…その信念の元に、それを貫き成してみろ。だがな……俺とて負ける気はない。何せ未だにそこにいる奴との決着が付いていないのでな」

「其方はライバルに恵まれているようだな。確かに、あの破壊を見せつけられた後なら尚のことそう感じさせられる。其方に負けぬよう、俺も研鑽するよ。だが、俺のライバルも捨てたものではない。意外性と爆発力は群を抜いているし、度胸もある。後は純粹に戦いを楽しめるようになればもつと強くなるさ、きつとな」

そう言うのと、彼は上空へと再び飛び上がりあつという間に見えなくなった。

その姿を見送りつつ、ヴァーリは目を瞑る。

「こつちのお前さんはどうだよ？」

一誠のからかう様な問いかけに、ヴァーリは愉快そうに笑う。

「まあ、悪くはないだろう」

そう答え、そのまま地面に身を任せるヴァーリ。少しは土産話が出来たようだ。

その後、アザゼルやサーゼクス達がリアス達を心配し駆けつけたが、目の前に広がった光景に言葉を失っていた。

そんな冥界での大惨事ではすまない大惨事の後、一誠と久遠は

ヴァーリも連れて人間界に戻っている。

本来ヴァーリが来ているのならもう帰るだけのはずなのだが、その前に少し気がかりがあつてまだ帰らずにいた。

それは……この世界の兵藤 一誠ことイツセーが未だに目を覚まさないことだ。

無理矢理覇龍になったためなのか、その影響なのか、イツセーは身体こそ元に戻っても意識が戻らない。

それに関し、リアス達は心底心配し、イツセーに四六時中くつき看病している。

呼吸はあるし脈もある。だというのに、目を覚まさない。

それがまるで一生目覚めないかのように感じられ、彼女達はもの凄く不安なのだろう。

そんな彼女達と違い、大人であるアザゼルは対処するべく一誠に話しかける。

「なあ、コイツは予想だが……あいつの寿命が極端に減ったからじゃないのか？ 覇龍は使用者の寿命を激減させるって話だったよな。お前さん等は別らしいけど」

本来の覇龍ではそうなる。

此方の世界のヴァーリでもそれは同じだからこそ、使用は控えている。ただし、この一誠とヴァーリに限っては別であり、『覇龍以上に元が強い』ので寿命が減ることはない。その事実から基づけば、二人とも最早ただの化け物だ。

その問いに対し、一誠は何やら思いついたことがあるらしく、それに答える。

「まあ、確かにそれもあるけどよお……それだけじゃねえなあ。あの野郎……未だに『うじうじといじけて』やがる」

「いじける？」

その言葉に疑問を感じるアザゼル。意識がない者がいじけるといふのはどういうことなのか。

その答えを一誠はアザゼルが聞き返す前に答えた。

「ドライグ、俺をあいつの精神世界に送れるか？」

『多分可能だろう。何せ同じ人物なのだ、魂の波長も同じはず。故に彼方の相棒の精神世界に相棒を送ることも問題は無い』

「上等だ」

そして一誠はいつの間にか皆の注目が集まる中、獣のような笑みを浮かべ、殺気を放ちながら答える。

「あの野郎の精神世界に入って野郎を叩き起こす！　そんでもって二度といじけることが出来ないようにそのひねくれた精神を叩き直してやるよ」

それを聞いて皆は…………。

一誠が起きる可能性を喜ぶよりも一誠が壊れないか心配になって絶句した。

ただし……………久遠はそれを聞いて爆笑し、ヴァーリも愉快そうに笑った。

彼は異世界の彼と出会う その20

一誠がイツセーの精神世界に行く方法。

それは一誠とイツセーの神器の宝玉の部分と接触させ眠るだけだ。殆どの作業はドライグが行う為、一誠自身がすることは無い。そして彼自身、寝ようと思えば何処だって寝られるし直ぐに寝る事が出来る。何一つロクに自慢出来ない彼が持つ数少ない特技の一つだ。

だからこそ、一誠はベットで眠るイツセーの隣に逆方向で横になり、直ぐに眠り始めた。

「これで本当にイツセーの精神に語りかけられるの？」

傍目にはただ眠っているだけにしか見えないため、リアスは不安そうにそう呟く。それは彼女の眷属達も同じであり、皆不安そうだった。

そんなリアス達と違い、久遠は一誠とイツセーの神器を何故かガムテープで固定し、彼等を覆う結界を張り始める。その顔は何やらニヤニヤとしていてリアス達の不安を更に煽った。

ヴァーリは壁に背を預け目を瞑りながら静かにしており、アザゼルは目の前で行われる事を真剣ながら少し興味深そうな眼差しで見ている。

そして一誠が眠り始めてから直ぐに、イツセーは苦しみ始めた。

彼は悔やみ嘆く。

己の力が足りなかったことに。守ると誓ったはずなのに、守れなかったことに。

悔しくて苦しくて、己そのものの非力を絶望する。

「ああ、アーシア……………ごめん……………ごめんよ……………俺が弱いから、だから君を……………」

そう洩らしながら脳裏に蘇るのは、彼女が逝く前に見せた笑顔。

心の底から幸せそうで、全てのものに感謝を捧げるその姿はそれこそ本物の聖女と言っても良いくらいに美しかった。

そんな彼女を自分は死なせてしまった。守れなかった。不意打ち

とはいえ、それに気付かず彼女を殺されてしまった。

それはイツセーにとって許されないことだ。彼女が一回死に、そして悪魔として生き返った時に確かに誓ったのだ。

二度と彼女を傷付けさせない。彼女の『すべて』を守るのだと。

そう決めたのに……出来なかった。

それにそれは彼女の事だけではない。

リアスの結婚騒動の時もそうだ。

当初の決め事であったレーティングゲームで負けてしまい、リアスに望まぬ結婚をさせかけた。その時のリアスの悲しそうな顔が今でも忘れられない。

思いを寄せつつある彼女を悲しませてしまった。それが今でも心に残る。あの後に殴り込みをかけなければ、そのままリアスはライザーとの不幸な結婚を迎えていたと思えば、それは良かったと言える。

だが、それは本質ではない。

その二つの事柄における本質。

それは……事が起こったときには無力に叩き潰されるということ。それがイツセーの精神を苛む。

いざというときに負け、そして泣きすがって後から手に入ったチャンスでどうにか解決する。そんな後手に回りチャンスがなければ何も出来ないなんて、とてもじゃないがイツセーが目指す守護者になり得ない。

「いつもそうだ……俺はいざというときに何も出来なくて、それで皆を……アシアの時や部長の時もそうだった。その一番大切な時に何も出来なくて、そしていつも後悔するんだ。それが嫌だと分かって頑張ってるのに、なのに、なんで……くそ……クソオオオオオ!!」
彼はそれまでの後悔を思い出し、更に絶望に暮れる。

もう自分には何も出来ない。守るべきものを失ってしまった自分はどうすることも出来ない。ただ、ひたすらに絶望するだけ。

殺した相手を憎み、そうなってしまった世界を怨み、それらに対し大切な者達を守れなかった自分を呪う。

己が無力さを嘆き、全てのものを憎悪する。

そうすること以外何も考えられない。

『そうだ……いつもそうだ……』

『世界は常に我等を拒絶する』

『望む望まずにかかわらず、その憎悪の念は膨れ上がる』

イツセーの耳には届かないが、彼の周りではそのような声が上がる。

姿はない。しかし、それは確かにしつかりとした声だった。それは全てを嘆き悲観する呪い。その正体は歴代の所有者達の思念だ。

と言つてもほぼ正気は失っており、絶望に狂うことでしか存在しない醜い残滓だが。それ故にそれは呪い。現在の使用者であるイツセーは勿論、過去の使い手も皆彼等によつて『汚染』されてきた。

それは赤龍帝の籠手に宿りし確かな呪縛だ。使用者を呪い自らと同じ存在へと墜とす。

イツセーの耳に彼等の言葉は届かない。だが、その魂にはしつかりとその呪いが染みこみ始めていた。

きつとそう遠くない内に彼等と同じ様になるのだろう。

そのことに恐怖はない。既にアーシアを失った恐怖に飲み込まれて正気を失いつつあるのだから。

もう自分には何もない。ひたすらに全てを憎悪し嘆き呪うのみ。

故にイツセーは苦しむ。苦しくてしょうがない。だが、助けなど求めない。助かるわけもない。その方法もなにも、全ては失ってしまったのだから。

嗚咽を上げながら頭を抱えしやがみ込むイツセー。その魂は既に消えかかっていた。

きつと後もう少しすれば、周りにいる思念達と同じ存在へと変わるだろう。

真つ暗な闇の中、後悔と憎悪の念に己を際限なく呪い続ける……そんな存在に。

そんなイツセーに対し、それはいきなり現れた。

「まったく、ずっとイジイジイジいじけやがって！ とつとと起

きろってんだ、このバカ！」

この真つ暗な闇の中、その雰囲気にまったくそぐわない声が辺りに響き渡る。

「え……………」

その声はイツセーにとって聞き覚えのある声。

それは当たり前だ。何せその声は『自分の声』なのだから。

自分と全く同じ声。似ているという程度ではない。全く同じ、遜色ない同位の声。

しかし、その声は自分が出したものではない。

なら何なのか？ その答えは彼に纏わり付いている思念体から明かされる。

『同じ赤龍帝？　なら我等と同じ…………』

『この世を嘆き憎悪し…………』

『共に絶望に身を委ね…………』

それは聞く者の精神を狂わす呪いの祝福。

イツセーはその声に飲まれつつも、それの方に目を向けた。

それは…………怒っていた。

激怒していると言った感じではない。まるで苛立っているような、そんな怒りだ。

そしてそれは苛立ちを顕わにするかのように、周りに纏わり付こうとする思念体に咆えた。

「さつきからゴチャゴチャと五月蠅せえんだよ！　俺が用があるのはそこでいじけてるバカだけだ！　テメエ等みてえな死人が出しやばるな！　とつとと失せろッ！」

そしてそれから振るわれる拳。

その左腕にはイツセーと同じ赤龍帝の籠手が装着されている。

この距離から拳を振るった所でイツセーに届きはしない。

だが、その拳から放たれた拳圧は確かにイツセーに届いた。

まるで突風が吹きかけたかのようにイツセーに拳圧が当たる。それはこの場の闇を切り開くかのように吹き荒んだ。

それに纏わり付こうとした思念体はその拳圧によってかき消され、

その呪いの囁きは途絶えた。

そしてそれはイツセーに向かって進んでくる。ゆつくりとした歩みではあるが、強いて擬音を付けるなら『ずんずんと』だ。

戸惑うことも躊躇することもなく、しつかりとした歩みでイツセーの元に向かうそれ。

それを見て、イツセーは声を漏らした。

「あんたは……………」

それは彼が良く知る人物。

茶色い髪をした、同じ神器を使う平行世界の自分……そう、彼が知る最強の赤龍帝である兵藤 一誠だ。

一誠はしゃがみ込んでいるイツセーを見下しながらニヤリと笑い声をかける。

「よお、久しぶりだな、イジケ野郎」

大胆不敵に笑う一誠を見て、イツセーは苛立ちを感じた。

自分はこんなにも無力に打ち拉がれているというのに、何故同じ存在であるコイツはそんな笑みを浮かべるのか。それがイツセーを苛立たせる。

存在は同じハズなのに、何故こうも彼と自分は違うのかと。

果然と一誠を見るイツセー。一誠はそんな彼に手を伸ばすと、胸ぐらを掴んで強引に持ち上げた。

「ぐがあっ!？」

急に持ち上げられて首が絞まり呼吸が出来なくなるイツセーは苦しそうに声を上げ、持ち上げた一誠を睨み付ける。

その視線を受けて、一誠はふふんと鼻で笑うと一誠の顔を自分の目の前まで引き寄せた。

「デメエ……………何時までそうしてるつもりだ？」

「いつまでって……………」

急に問われイツセーは困惑する。一体彼が何を言っているのか分からなかったからだ。

そんなイツセーに対し、一誠は殺気が籠もった目で睨みながら苛立ちを込めながらイツセーに問う。

「何時までそういう風にいじけてるつもりかって聞いてるんだよ、この野郎」

いじけている。そう言われ、イツセーはそれまで絶望していた自分をその程度の言葉で片づけられた事が我慢出来なかった。

「いじけっ……巫山戯んな！俺の気持ちがあンタに分かるのか！

目の前でアーシアを殺された俺の気持ちだ！そのショックに対していじけてるだって？ そんな生優しいもんじゃねえ!!」

イツセーはそれまで絶望して時の表情と違い、顔を真っ赤にして心の底からの怒りを一誠に叫ぶ。

許せない。目の前でアーシアを殺されて悲しんでいることが『いじけている』と言われたことが許せない。

今、イツセーの心はその事だけで一杯になっていた。

そんな単純なことではないのだ。妹のように大切に思っていたアーシアが、家族が目の前で殺されたのだ。それを見て、いじけるなどと……到底許せたものではない。

憤怒を顔にするイツセーは離せと言わんばかりに一誠に殴りかかる。

此方とて赤龍帝、その腕力は他の悪魔を凌駕する。破れかぶれで力は乗らないが、人間である彼相手なら致命傷になりかねない。しかも怒りで力加減など出来ないのだから、下手をすれば首から上がミンチへと早変わりする。

イツセーは躊躇無く殺人を行おうとした。意識はしていない。ただ、自分の悲劇を鼻で笑う同じ顔をした一誠が許せなかったのだ。

その殺意で満たされた拳は一誠に吸い込まれるように向かい、そして彼の頬にめり込んだ。

しかし、その首が爆ぜることはない。

一誠はその拳を受けても尚、僅かたりとも動かなかった。

自分の頬にめり込んだ拳を見て、そして軽く笑うやイツセーの顔面目がけて思いつき頭を振りかぶり叩き着けた。所謂頭突きである。

「いっぽん！」

顔面に硬い頭部を叩き着けられ鼻が潰れたイツセーは、込み上げる

鼻血で呼気を詰まらせながら仰け反る。しかし、一誠はその胸ぐらを掴んだ右手を離さない。

「八つ当たりするんじゃないやねえよ、このアホ野郎。まんま言われたからって逆ギレすんな」

一誠は鼻血を噴き出しているイツセーを再びたぐり寄せ、彼に聞こえるようにしっかりと言う。

そう言われても、イツセーは納得など出来ない。

「八つ当たりだって？ そんなことない！ そんなこと……」

だが、何故か涙が出てきて溢れ出してしまう。

悔しいのだ。こうまで言われて、そうではないと言いたはずなのに、言葉が出ない。

「だって……俺はアーシアと約束したんだ、絶対に守るって。なのに、俺はまた守れなかった。彼女が転生する前も、そして今回も。いつもそうだ。事が起こったときには遅くて、それでいつも大切なものを失うんだ。もう嫌なんだよ、そんな思いは」

やがて泣き言のように漏れ出していくイツセーの本音。

自分の無力を嘆き、その不幸を呪う。

「それなのに、今回も結局アーシアを失っちゃった。もう俺は生きられないよ。どうしろって言うんだ？ もうアーシアはいないんだ。なのに俺はどうしたら良いんだよ……」

そう言言うと、力なく頭を垂れるイツセー。その身体には先程殴りかかったような力など感じられない。

そんなイツセーに対し、一誠はニヤリと笑う。

「どうもこうもねえだろ。生きてるんだつたら生きろ。ただそれだけの話だろ」

はつきりと一誠はそう告げる。そこにイツセーを労ったり思いやるような感情は感じられない。彼が思ったことをまんま告げただけだ。

そう言われたところでイツセーは納得出来ない。

「無理だろ、そんなこと！ アーシアが死んだんだぜ。目の前で……あんな幸せそうに笑ってたのに……その笑顔を守りたかったのに

……なのに俺は守れなかった！俺が彼女を殺しちゃったんだ！
それなのに平然と生きられるかよ……アーシアを失った悲しみを忘れて生きられるか……」

そう答えるイツセーを見て、一誠は掴んでいた胸ぐらを更に持ち上げる。

そしてイツセーと同じ目線になって彼に話しかけた。

「テメエが悲しんでるのは結構だ。だがなあ、それで迷惑する奴だつてかなり居るんだよ。そいつ等に迷惑かけてるつてのを自覚しろ。さつきから聞いてりやウジウジしやがって。テメエだつてわかつてんだろ？テメエが弱いのが悪いつてよお」

イツセーはその言葉を聞いて、嘔き出した感情を頭わに咆えた。

「そうだよ、分かってるよ！俺が弱かったらアーシアは死んだんだ！でも、どうしろつていうんだよ！禁手に至れるまで頑張った。タンニーンのおっさんに死ぬほど扱いて貰った！でも助けられなかったんだ。これ以上どうしろつて言うんだよ！」

それはイツセーがずっと悔やんでいた事実。

自分は自分が出る限界まで頑張つて来た。その結果、以前と比べれば格段に強くなった。なのに守れなかったのだ。その先をどうすれば良いのかわからない。

だからイツセーは彼に叫んだ。自分よりも遙かに先にいる『最強』に。

そして一誠はゲラゲラと笑い出す。

精神を逆撫でるような、そんな笑い声をあげて。

「おいおい、笑わせるなよ。自分は精一杯頑張りました。でも、アーシアは助けられませんでした。だからどうしていいのかわかりませんつてか？……ガキかよ、テメエは。精一杯？巫山戯んな、そんなもんで精一杯な訳ネエだろ」

一誠はカラカラと笑いながらも殺気を放つ。

その殺気は意気消沈しているイツセーでさえ呼吸出来なくなるくらい凄まじい。

「甘えんだよ、テメエは。精一杯？それはただテメエが決めた限界

じやねえか。本当に鍛える気がある奴なら、そいつは常に『限界を超える』んだよ。身体が千切れようが、精神が崩壊しかけようが、それでも止まらねえんだ。それが本当の精一杯つてもんだ。テメエの身なんか振り返らない、目的のためならそれこそ我が身を挿しだしても成し遂げようとする。それが全力だ」

一誠はそう告げる。まだ甘いのだと。

「死ぬ気でやれなんてもんじゃねえ。死んで殺れ！ それぐらいの気概もなくして何がどうしたらいいだ。甘えるのもいい加減にしろよ？」

そして真っ直ぐに見据えた瞳にイツセーは自分の姿が見えた。

その表情は怯えていた。

「テメエはゴチャゴチャ考えすぎなんだよ。敵とあつたら殺す、味方を守るってんなら死んでも守れ。その決意も決めてねえくせに死んだのは自分の所為でいじけてますって？ 自業自得で嘆く暇なんかあるわけねえだろ」

一誠の言葉にイツセーの心はどんどん罅が入っていく。

それまでの絶望はただの逃避。それを認めたくないのに、その言葉はそれを認めさせようとする。

そして一誠はそんな彼に最後のトドメを叩き込んだ。

「自業自得で立ち止まるな！ 嫌だつてんならとつと死ね！ その所為でテメエの仲間が死のうとテメエに悲しむ資格なんてねえ！ ちゃんと悲しみみたいってんなら、突き進め！ 誰が来ようと関係ねえ。神だろうが魔王だろうが何だろうが、テメエの邪魔をする奴は叩き潰せ！ もう二度とそんな思いしたくねえってんなら、目の前にある壁はどんなに固かろうがぶち破れ！ そんでもって決めろ！ テメエの決めたモンを貫き通せ！ それでテメエが死のうが何だろうが、絶対にそれだけは貫き通せ。それが出来て始めて、テメエは悲しんでいいんだ。だから今はまだ止まるな！ 止まるときは死ぬときだけにしろ」

そう言われ、イツセーの心は完璧に砕けた。

そう、そうなのだ。彼が言っていることは正しいのだと。自分の所為でアーシアが死んだ事実は変わらない。それはわかっているのに、

自分はそのことをずっと悔やみ続けるだけ。それだけでは何もかわらないのだ。

一誠が言ったのは単純な二択。

何も出来ないのならとつと死ぬか、アーシアの死を認めた上でその悲しみを背負いつつも激痛に堪えながら突き進むのみ。

そのどちらかしか選べないのなら、俺は……………。

イツセーがそう思うと、共に、それまで真っ暗だった世界が真っ白に光り出す。

その光景とイツセーの目を見て、一誠は不敵に笑うところ告げた。

「そうだよ、そいつが答えだ。テメエのルールを決めた以上、そいつは絶対に曲げるな。曲げた瞬間そいつは死ぬ。だから絶対に曲げるな。決めたんなら貫き通せ。それが生きるってことだ」

その言葉を聞いてイツセーは何となく納得した。

自分と彼の違い。それは思想でも力の親和性でもない。

確固たる思いがあるかどうか。イツセーは心の中でどこか悩んでいたのかも知れない。それが表に現れた結果が今回の原因なのだと。一誠にはそれがある。その思いが何なのかは分からない。でも、確かにそれが在るからこそ、あのような暴威を自分の物に出来るのだと。

正直、羨ましく思った。

そして光が増していき一誠の姿が見えなくなってくる。

それを見て一誠は何となく察した。

ああ、目覚めると。

そして一誠は消える前にイタズラをする子供の様な笑みを浮かべ最後にこう告げた。

「そうそう、目覚めた後に驚くもんがあるぜ。楽しみにしておくんだな」

そう告げて彼は完全に消えた。

「あれ、……は……………」

目を開けると、そこには見慣れた天井が広がっていた。

自分の部屋の天井。それを見て、イツセーは此処が自分の家であることをぼんやりとながら理解した。

そして霞がかった頭を働かせようと記憶を辿ろうとする。それまで冥界にいたはずなのにどうして自分は自宅にいるのかと。

そして思い出す。アーシアが目の前で…………。

「イツセーさんッ!」

「アーシア……………なのか?」

最後の瞬間が頭を過ぎると共に扉が開き、そこから出てきたアーシアがイツセーを見て表情が固まった。

そしてえ一拍の間を置いて彼女の瞳からは涙が溢れ出す。

「イツセーさん!!」

アーシアは叫ぶと共にイツセーに飛びつき、その胸に顔を埋め起きた一誠に泣きつく。

目の前で泣いているアーシアを見て、イツセーは理解出来ない。何故彼女が生きているのか分からず、戸惑ってしまう。

そしてそんな二人の騒々しさを感じ、リアス達もイツセーの部屋に入ってきて皆してイツセーに抱きついてきた。

皆、その瞳には涙を流している。

そんな雰囲気で満たされている室内の外で、一誠と久遠、それにウァーリはアザゼルに話しかける。

「んじゃ、俺達はもういくわ」

それが帰るという意味だと分かり、アザゼルは一誠達に笑いながら話しかける。

「なんだ、もう行くのか?」

その言葉に一誠は笑う。

「あの雰囲気の水を差すほど野暮じゃねえんでな」

「そう言いつつどうせアーシアちゃんが恋しくなったとか?」

「久遠、後で思いつきりぶん殴ってやろうか?」

そんな風に話し合う二人。それを見てヴァーリは歩くアザゼルに二人が世話になったことで礼を言々と、二人を連れて転送魔法陣を起動した。

そして二人とヴァーリの姿は消え、アザゼルはその姿を見送り眩く。

「本当、凄い奴等ばかりだったなあ」

こうして平行世界の旅行は終わった。

彼は異世界の彼と出会う その21

イツセーの目が覚めた後、リアス達は実に甲斐甲斐しく彼の看病を行った。

目が覚めたとはいえ、まだ身体の調子は本調子ではない。故に身体を動かすことも困難だったので、しばらくイツセーは寝たままであった。

そんな彼は寝たままの状態でその話を聞かされた。

「そうっすか……アイツ、俺が目覚める前に帰っちゃたんですか……」
「ええ、そうなの。あの時は私達もあなたが目覚めたことで一杯一杯だったから気付かなくて。あの後少しして彼等にお礼を言おうとしたらアザゼルが来て、それで帰ったって聞かされたのよ」

イツセーにそう語るリアス。その表情は恩人に礼を言えなかった事への申し訳なさが表れている。

彼等……平行世界の兵藤 一誠とその仲間、そして同じく平行世界の白龍皇。

その者達がいたからこそ、こうしてイツセーは無事だったと言える。それだけでなく、彼等が居なかったらアジアも失っていただろう。その恩義は計り知れないものがあり、リアス達は感謝の念が絶えない。

最初はその圧倒的な力の前に恐怖しか感じなかったが、今にして思えば彼等の人間味は自分達の周りには居ないタイプで、それ故に刺激を与えて貰った。恐かったが楽しかったと思える。

だからこそ口惜しい。せめてちゃんとお礼は言いたかった。

だが、彼等はそれを良しとはしなかったのだろう。元より恩を着せるタイプではないということは短い付き合いでも分かりきっている。

きつとりアスがイツセーやアジアのことでお礼を言えば、あの男はこう答えるだろう。

『別にそんなつもりはねえからんなこと言うなよ。俺はただ、暴れたいから暴れただけさ。テメエのしたいことをして礼を言われる覚えはねえ』

そう言ってお礼を受け取らない。

そういう男なのだ。だからこそ、彼等は言われる前に帰ったのだと思う。

感謝の礼を言わせてもらえないことに不満を感じるが、何となく彼等らしいと、そう思った。

だからこそ、リアスは苦笑する。しようがないと言わんばかりに。それを聞いたイツセーはそうかと納得した様子で笑った。

「あいつ、好き勝手に言っただけで帰ったのか……あゝあ、何かむかつくぜ。こうも言われっぱなしで反論も出来ないんじゃないか」

「好き勝手言われたって、何を？」

リアスはイツセーの言葉を聞いて不思議そうに問いかける。

二人が話している所は何度か見たが、何の事かと不思議に思ったのだ。思い当たる節があまりない。

その問いにイツセーは奇妙な表情をする。

真剣で真面目なような、それでいて何処か呆れて吹っ切れたような、達観したような、そんな表情だ。そんな表情を浮かべながら彼はリアスに苦笑して答えた。

「夢……っていうにはあまりにも生々しいし、痛かったですけど、アイツに夢の中で怒られたんですよ。『イジイジいじけてるんじゃないか！ 決めたんなら何を捨てても突き進め』って」

それを聞いてリアスはあの時のことを思い出す。

イツセーが未だに目覚めない時に、一誠が彼の精神を叩き起こすと言っただけの事。

その内容までは詳しく知らなかっただけに、リアスは興味本位でイツセーに聞く。

「その夢で……彼はどうしていたの？」

そう聞かれた途端、イツセーの顔は赤くなっていた。

それは己の恥ずかしさを認めたが故の羞恥。今にして思えば自分が如何にみっともない真似をしていたのかが良く分かるのだ。

それでも主に問われたからには答えるのが下僕の責務。故にイツセーは気恥ずかしそうに答えた。

「その、あの時の俺はアーシアが死んだって思ってた。それで自暴自棄になって絶望していたんですよ。自分はいつも駄目で、大切な時に何も出来ない無力な奴だって」

「そんなことないわ！ イッセーはいつも私達を助けてくれたじゃない。いくら自分の事でも、そんな風に言うのは許さないわよ。もつと胸を張りなさい」

リアスの少し叱るような声にイッセーは苦笑し軽く首を横に振る。

「部長にそう言ってもらえるのは嬉しいですけど、それでも俺は駄目駄目ですよ。アーシアの時も部長の時もそうでしたからね。それで苦しくて悲しくて憎くて、どうしようもなくて。そんな時にアイツは来たんです。それで俺を一喝して胸ぐらを掴んで持ち上げて怒られました。何時までいじけてるんだって。でも、俺はアーシアを失ったことをその程度の言葉で片付けられるのが許せなくて、それでアイツを殴ったんですよ。それでもアイツは一切揺るがなかった。それどころか頭突きされましたよ。あれ、本当に痛かったなあ。正直頭が叩き潰されたのかと思いましたよ」

そう聞かされリアスは一誠に何をしてるのよ、と内心突っ込んだ。精神世界で頭突きをするというのはどうなのだろうか。どうあっても目を覚ます方法としては些か乱暴にしか思えない。

「それで俺は思いつきり言われちゃったんです。アーシアを助けられなかったのは俺の所為だって」

「っ!？ そんなことないわ！ アレはシャルバがッ…」

「いいえ、そうじゃないんです。あの時、俺がアイツみたいに強かったら、アーシアをあんな目に遭わせる事もなかった。それに部長の時だってライザーの眷属達をもっと早く倒せて部長を助けにいけました。アイツならきつと、そのくらい朝飯前だろうから」

イッセーは目を細めて思い出すようにそう語る。確かにそれは事実であり、イッセーは彼の力に憧れを抱いた。

「だから言われたんです、自業自得だって。それで俺、我慢出来なくてキレちゃって……。『もう一生懸命頑張ったのにこれ以上どうすればいいんだ』て。そうしたら更に怒られましたよ。『本当に精一杯って

のは限界を常に超え続けること』だって。アイツ、俺に死ぬ気でやれ
じやなくて、死んでも殺れって言ったんです。何となくですけど、分
かります。アイツが言いたいことが何なのか」

「イツセー……」

リアスは何か悟ったようなイツセーを見て、少し寂しいような誇ら
しいような、そんな気持ちになった。イツセーが目覚める前と後では
何か成長したような感じがして嬉しく思う反面、自分が彼を成長させ
られなかった事が少し悔しい。

そう思いながら彼女はイツセーに微笑んだ。

微笑まれた彼は何やら気恥ずかしさから顔を赤くし笑い返す。

そんな二人の間に流れるのは暖かな雰囲気だ。傍から見たら男女
の雰囲気かもしれない。実に良い雰囲気と言えよう。

そんな雰囲気を割って入るかのように、部屋の外で声がした。

「イツセーさあ~~~~~ん、もうすぐ御夕飯ができますよ~~~~
~~~~!」

その声にハツとする二人。内心リアスは良い雰囲気を壊された気  
がして少しむくれる。

対してイツセーはその声の主であるアーシアに何かを決め込んだ  
笑みを浮かべてリアスに話しかけた。

「部長、だから俺も……アイツみたいにはいきませんが、それでも頑  
張って貫こうと思います。俺が決めたこの思いを貫くために」

そう話しかけたイツセーについ見惚れてしまいリアス。その  
時のイツセーの顔は確かに立派な男だった。

それを認めるのが気恥ずかしかったのか、彼女はイツセーに向かっ  
て微笑みつつ意地悪なことを言った。

「だったらまず、イツセーのエッチな所を直さないね。彼はその点、  
一切そういうのがなかったし」

「そ、そんな、部長~~~~~」

そんな情けない彼の声を聞きつつ、リアスと思う。

確かに彼は強かった。でも、私のイツセーもまた、こんなに格好良  
いのだから、頑張って欲しいと。

こうして平行世界の客人に触れ、各自は様々な成長を見せていくようになった。

平行世界から帰った一誠、久遠、ヴァーリの三人。

転移したのは人目の付かない廃墟の中。そして彼等は転移し終わると共に動き出す。

「次に会うときは……………」

ヴァーリがそう言い彼等に背を向ける。元より仲が良い訳ではない。久遠とは問題無いが、一誠相手にそういったことをするような気は起きない。故に彼は背を向けて立ち去り始める。

対して一誠はニヤリと獰猛な笑みを浮かべつつ、ヴァーリに返事を返す。

「ああ、次は思いつきり殺ってやるよ」

そう返し彼も背を向ける。

語ることなどない。互いのためだけの敵に対し、贈るものは言葉ではない。己の拳のみだ。

故に彼等は立ち去る。

互いにその力を高め、次の再会の時にはその成果をぶつけ合い、その決着を付けるために。

「そう言いながら、どうせ直ぐに顔つき会わせそうな気がするけどなあ」

「そう言うなよ。俺だって何となくそう思ってたからよお。アイツは兎も角、アザゼルの野郎が何かしら手を回してそうだ」

久遠の茶化しを聞いて少し呆れた感じに彼は返す。

そして共に廃墟を出ると、そのまま一誠は自宅へと帰る。

久遠は久遠で用があると言うことで別れ、彼は一人でマンションへと歩を進めた。

今回の旅行は彼にとって、まあまあ楽しめた。あくまでまあまあであり、それでもヴァーリとの戦いに比べれば歓喜はしない。

それに平行世界の自分が如何に違うのかを見れたし、女にだらしないことも良く分かった。だが、それと同時に女に優しいことも分かつ

た。

まあ、土産話には事欠かないだろう。

そう思いながら彼はマンションの一室にたどり着くと、扉をあけた。

「お帰りなさい、イツセーさんッ!!」

開けた途端に始めるような歓喜とともにかけられた声と笑顔。それを見て、一誠は彼女に自分らしい笑みを浮かべて返した。

「ああ、ただいまだ………アーシア」

こうして彼の赤き暴君は自分の世界へと帰還した。